昭和十年九月十五日印刷
昭和十年九月二十日發行

國譯一切經 釋經論部 七

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者 長尾文雄
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園地七號地十番
大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝 二一一六番
三〇四〇番

製本所 兩角製本所

念問、耆老人を欺誑せず、心に妬嫉無く、非法に忍ぜず、瞋恨有ること無く、威儀安詳にして而も輕躁ならず、所言誠實にして未だ曾て兩舌せず、持戒を行施して常に善心を修し、進止時を知り、方便を失せず、神色和悦して言常に笑を含み、未だ曾て眉を皺め、惡眼もて人を視ず。利を退失せる者には之が爲めに利を作り、已に利有る者には深く報を知つて慚愧心を懷かしむ。大智慧有りて、威德尊嚴にして而も能く忍辱す。大丈夫の相あつて其の性、猛厲、諸の所爲の事疾く能く成律す。先づ正しく思量して然る後に乃ち行ず。王は法眼有つて爲すところ殊勝、善思量の者は乃ち與に事に從ふ。若し任ぜざれば更に賢明を求め、善く福德、財物を集め、清淨に能く自ら防護して禁戒を破らず。多く財寶を饒かにすること毘沙門王の如く、大勢力有ること天帝釋の如く、端嚴にして愛す可きこと猶し、滿月の如く、能く照すこと日の如く、能く忍ぶこと地の如く、心深きこと海の如く、苦樂の傾動する所を爲らざること須彌山王の風の搖がすこと能はざるが如し。諸寶、妙事の所住處、諸善、福德の依止する所、是れ諸の一切世間の親族、諸の苦惱の歸趣する所、歸無きには歸と作り、舍無きには舍と作り、怖畏有る者には能く怖畏を除す。轉輪聖王の如き等の相有り。

能く破戒の者を轉じて、　善法に住せしむ。

其の所行の事は、　初地の中に説くが如し。

「破戒の者を轉ず」とは、能く衆生をして惡を捨て、善を行じ、安樂の事を得せしむ。「善法に住せしむ」とは、能く衆生の惡身に意の業を轉じて善身口意の業を行ぜしむるなり。此の事は初地の中に説くが如し。謂る諸佛を見ば諸の三昧を得、但だ彼は數百、此の地は數千、以て差別と爲す。

十住毘婆沙論　卷十七終

の華香有り。身體柔軟にして伽陵伽の如く、天衣、細滑の事一切具足し、心に諂曲無く、直心慚愧して深く王を愛敬し、時を知り、方を知つて善く方便有つて王の心を攝取す。坐起の言語は、能く王の意を得、王の意に隨つて行じ、常に愛語を出し、人間の德女の衆好具足するが如し。色は提盧多摩天の女の清淨にして分明なるが如く、月の十五日の如く晝文炳現し、帝釋夫人舍脂の如く、天衣・天鬘・天香を著け、多く天の光明・金摩尼珠を以て其の身を莊校し、善く歌舞・伎樂・娛樂・戲笑の事を知り、善く方便有り、意に隨つて能く王をして歡喜を發さしむ。一切の女の中、是の女を最と爲す。是を玉女寶と名づく。又轉輪聖王は四如意の德有り、一には色貌端嚴にして四天下に於いて第一にして比無し。二には病痛無し。三には人民深く愛す。四には壽命長遠にして衆生を教誨するに十善業を以てす。能く諸天宮殿をして充滿せしめ、能く阿修羅の衆を減じ、能く諸の惡趣を薄くして善處を增益し、能く衆生の爲めに多く利事を求めて施作する所有り、兵仗を用ひず、治を以て化し、天子安樂にして外に敵國の畏無く、內に陰謀の畏無し、又其の國內に疫病・飢餓及び諸の災蝗、衰惱の事無く、一切の邊王の皆歸伏する所、多く眷屬有り、能く疾く人を攝し、更に能く國界を侵害すること有ること無し。其の四種の兵の勢力具足し、諸の婆羅門・居士・庶人皆共に愛敬す。甘香、美食自然にも有り、國界日に增し、損減有ること無く、善く能く經書・技藝・算數・呪術に通達して皆悉く受持す。巧に能く論說し、義趣を分別し、群臣具足して悉く威德有り。常に財施を行ずるに能く及ぶ者無し。千子端嚴なること諸の天子の如く威德勇健にして能く强敵を破す。所住の宮殿・堂閣・樓觀は四天王・帝釋の勝殿の如く、王の教誨する所、能く四天下に壞するもの有ること無し。唯だ此の王の威相具足すること有るが故に能く及ぶ者無し。音聲は深遠にして聽き易く、解し易く、散ぜず、亂れざること迦羅頻伽鳥の美軟和雅にして聞く者、耳を悅ばすが如し。眷屬同心にして沮壞す可からず、所住の處地水、虛空に障礙有ること無し、威力猛盛にして能く大事に堪へ、

報なり、善く知つて分別す。金・銀・帝青・大青・金剛摩羅竭・車渠・馬瑙・珊瑚・頗梨・摩尼・眞珠・琉璃等の種種の悉く能く善く出入の多少を知り、宜しきに隨つて能く用ひ、能く王の願を滿たす。是を居士寶と名づく。光明は日月の十六由旬を照すが如く、形は大鼓の如く、能く毒虫・惡氣・疾病・苦痛を滅し、人天の見る者珍愛せざる莫し。好華、瓔珞を以て莊嚴と爲し、高幢の在る處、威光奇特にして能く衆生をして、希有心を發し大歡喜を生ぜしむ。是を珠寶と名づく。其の手の爪甲を紅赤にして而も薄く、其の形修直高隆潤澤にして肥ならず、瘦ならず、肌膚厚く、實に細密薄皮にして苦事に堪へず、身安く堅牢なること多羅樹の如く、身上の處處に吉[二六]字明了なり。吉樹の文畫をもて其の身を莊嚴し、象王・牛王・馬王・畫文・旛蓋文・魚文・園林等の文其の身上に現る。踝は平にして現れず、足は龜の背の如く、足邊倶に赤く、足跟圓く廣く、蹲腨柔軟にして膝圓現れず。髀は金柱の如く、芭蕉樹の如く、象王の鼻の如く軟澤にして光潤あり。腨は圓くして而も直、横文三有り、腹腨現れず、臍は圓くして而も深し。脊背は平直、乳は頻婆果の如く、雙鴛鴦の圓く起つて垂れざるが如く柔軟にして鮮淨なり。又其の臂は纖にして腨は圓く且つ長く、節は隱れて現れず。其の鼻の端は直にして偏に現出せず、大ならず、小ならず、孔は覆はれて現れず。兩頰は深からず、平滿にして高からず、兩邊倶に滿つ。額は平にして而も長く、吉畫文有り、耳は軟にして而も垂れ、無價の環を著け、齒は眞珠の貫の如く、月の初めて生れしが如く、雪の如く、珂の如し。脣は丹霞の如く、頻婆果の如く、上下相當して麁ならず、細ならず、赤眞珠の貫の如し。眼は白黑の睛、二色分明に莊嚴し、長廣の光明清淨なり。其の睫は青緻にして長く而も眉毛を亂さず、厚からず、薄からず、高からず、下(ひく)からず、月の初めて生ぜしが如く、高曲にして而も長く、兩邊相似たり。髮は軟にして而も細く、潤澤にして亂れず、其の身に芬馨あり、常に香氣有つて種種上好の香奩を開くが如し。身の諸の毛孔より常に眞妙なる栴檀、名香を出し、能く人心を悅ばしめ、口中に常に青蓮

【二六】「吉字＝吉祥を現はす符號。字といふも實は相なるべし。佛胸に卐字あるが如し。織田氏の佛教大辭典に、「余、印度に於いて學僧に聞く、此の卐形は梵天家の吉相となす所にして、凡そ尊像を畫くには必ず此卐形を劃し、此郭内に形體を畫くを法とす。是れ炎上する形にて梵天の法は火を以て最大清淨最大吉祥となすより、彼に形りて此相を創せしなり」と云ふ。

如し。

戒[二一]報品[二二]　第三十五[二三]

*菩薩の離垢地の清淨なること具に說き已る。菩薩は此の地に住して常に轉輪聖王と作る。第二地は十地の中に於いて名づけて離垢と爲す。慳貪十惡の根本、永く盡くるが故に名づけて離垢と爲す。菩薩は是の地の中に於いて深く尸羅婆羅蜜を行ず。是の菩薩は若し未だ欲を離れざれば此の地の果報の因緣の故に四天下の轉輪聖王と作り、千輻金輪、種種の珍寶の莊嚴を得。其の輞は眞琉璃を轂と爲し、周圍十五里、百種の夜叉神の共に守護する所、能く虛空を飛行し、四種の兵を導き、輕健迅疾なること金翅鳥王の如く、風の如く、念の如し。所詣の處は諸の衰患を滅し、怨賊を降伏し、一切の小王皆來つて歸伏す。親族人民愛敬せざる莫く、普く能く照明し、聖王・姓族・種種の華鬘・瓔珞・間錯莊校し、五種の伎樂常に之を隨逐す。奇妙の寶蓋を以て其の上を羅覆し、行く時種種の華香・碎末・旃檀有り、常に雨つて供養す。眞黑・沈水・牛頭[二四]旃檀・黃旃檀を燒き、以て其の身に塗り、其の輪の兩邊に天女、白[二五]拂を執持して侍立す。種種の珍寶は以て其の蓋と爲り、其の輪に種種の希有の事有つて而も用ひて莊嚴す。是を金輪寶と名づく。一切の象相を具足し、身大にして而も白きこと眞銀山王の神嶽を出でたるが如く、大象衆中に能く虛空を飛行し、伊羅婆那・安闍那・王摩那等の諸大象王は皆能く摧却す。是を白象寶と名づく。馬の相色を具足すること孔雀の頸の如く、其の體の輕疾なること金翅鳥王の飛行無礙なるが如し。是を馬寶と名づく。貴家の中に身を生じて疾病無く、大勢力有つて形體淨、潔憶念深遠にして、直心柔軟、持戒堅固にして、深く王を敬愛し、能く種種の經書、技術に通達す。是を主兵臣寶と名づく。財主天王の富相の千萬億種の諸の寶を伏藏するが如く常に隨逐して行き、千萬億種の諸の夜叉神、眷屬隨從す。皆是れ先世の行業の

※第二地の果報を解す。

【二二】　この品は第二離垢地の戒德によりて轉輪聖王の報あるを說き、轉輪王を詳說す。

【二三】　此品中の三十二相に就いては、念佛品第二十の註參照。

【二一】　三十五＝正藏には八に作るも、今宋、元、宮本に據る。

【二四】　旃檀＝Candana 香木の名。摩羅耶山の形、牛頭に似たるより、此山の所產を牛頭旃檀といふ。他も例して知るべし。

【二五】　拂＝拂は拂子のこと。麻や獸毛などにて作り蟲類を拂ふ具。

るが如し。多聞は是れ樂說の因なるが如く、尸羅は則ち是れ言行相應の因なり。尸羅は是れ無畏の因なり、辯才無畏の如し。尸羅は是れ名聞の因なること諸經に通じて好名稱有るが如し。尸羅は是れ能く法を救ふこと、易く與に語る者の人の爲めに救はるるが如し。尸羅は能く解脫の法を成明すること所說の行に隨ふが如し。尸羅は是れ諸佛の相なること阿耨多羅三藐三菩提の如し。尸羅は修道の法を助くること、定の慧を助くるが如し。尸羅は人をして所畏の難無からしむること、大なる心膽の畏懼する所無きが如し。尸羅は是れ諸の功德の聚處なること、猶し雪山の寶物は信等の功德を積聚するが如し。諸の希有の事の依止す可き所なること、尸羅は猶し大海に諸の奇異有るが如く、亦美果の樹に依止するが如し。尸羅は人に與ふれば所樂の果に隨ふこと正智慧に隨ふ者の如きは行じて卽ち得るが如し。尸羅は名づけて無水にして而も淨なりと爲す。尸羅は則ち是れ最上の妙香・根莖・枝葉・華果の中より出でず。尸羅・莊嚴・諸の寶飾に過ぎ、常に其の身に住して能く却くる者無し。尸羅は大樂にして五欲より生ぜず、後世にも亦諸の妙樂の報有り。尸羅は是れ一切世間の天人・魔梵・沙門・婆羅門の讚歎する所の者なり。尸羅は身中に快樂自在にして生天、涅槃の善方便を得す。尸羅は卽ち是れ河を信じて正しく濟り、泥陷・瓦石・刺蕀有ること無く、意に隨つて入る可く、善く渡つて無礙なり。尸羅は是れ寶財、諸の衰惱無し。尸羅は是れ淨道、能く壞する者無きこと、猶し平路の行旅に難無きが如し。尸羅は是れ好田、種ゑず、穫ざるに自然に實を得。尸羅は是れ甘露の果、樹草より生ぜずして香美比無し。尸羅は是れ沙華、水陸より生ぜずして常に萎壞せず。尸羅は煩惱の熱を除くこと冷水に洗浴するが如し。尸羅は善く守護すること諸の刀杖に勝る。尸羅を行ずる者は以て人を畏れざるが故に而も恭敬を得。尸羅は是れ自在の處、諍競有ること無し。尸羅は是れ好寶、山より生ぜず、大海より出でざるに、而も寶價は無量なり。尸羅は能く不活の畏、入衆の畏、考掠の畏、墮惡道の畏に過ぎたり。尸羅は常に人に隨逐して今世、後世に影の形に隨ふが

を得しむること亦菩薩の慧勝處を修するが如くすべし。不壞法の者は能く尸羅を淨むること諸の菩薩の清淨無垢なるが如し。諸の惡人等は尸羅を捨離すること彼の諂曲の直心を捨離するが如し。放逸の人は尸羅を行ぜざること慳貪者の惠施を行ぜざるが如し。放逸の人の尸羅を捨離すること戲論の者の寂滅の法を離るるが如し。愚癡の人は尸羅有ること無きこと猶し盲者の五色を見ざるが如し。思惟無き者は尸羅を去ること遠きこと道を離れ、涅槃を去ること遠きが如し。善く身を愛する者は深く尸羅を樂ふこと、阿羅漢の深く法を愛樂するが如し。尸羅は能く無惱の善法をして相續して斷ぜざらしむること、佛の出世したまひて善事を絕たざるが如し。尸羅は能く諸の道果に住せしむること佛の神力の法をして久住せしむるが如し。尸羅は佛の自ら利し、人を利するが如し。尸羅は善く諸の善功德を護ること王の時を知つて能く國界を護るが如し。尸羅は行者の心を安んぜしむること須陀洹果の如く、時に事を發して後に則ち悔無きが如し。尸羅は究竟して必ず涅槃を得ること菩薩の願の究竟して佛を得るが如し。尸羅は亦良田、好澤の之に投ずるに種を以てせば疾く增長を得るが如し。尸羅は是れ正行の因、時を知つて方に等しく是れ諸事の因を成ずるが如し。人の端嚴、福德は智慧の人の尊貴する所の如く、尸羅は是の如く自他に敬せらる所の如し。福德の熟する時は心則ち安隱なるが如く、尸羅は能く心をして安隱を得しめ、諸利の報を受けしむ。尸羅は能く行者をして歡喜せしむること猶し好兒の父の心をして悅ばしむるが如し。尸羅は則ち是れ無畏の法に過失有ること無く、過無ければ心則ち無畏なるが如し。尸羅は人をして今世、後世に怖畏有ること無く諸の罪惡無からしむ。供養稱讚して尸羅を持せば、餘の者も亦喜んで自ら分有ることを知る。尸羅は衆生を親愛すること慈定を修するが如し。尸羅は苦を滅すること悲定を修するが如し。尸羅は喜地與ふること喜定を修するが如し。尸羅は無憎無愛なること捨定を修するが如し。尸羅は人の爲めに信ぜらるること能く人をして信ぜしむるが如し。尸羅は樂行すること世法の中に常に歡喜心あ

尸羅は是れ功徳の寶積なること不放逸の如く、亦正念の能く諸利を生ずるが如く、亦賢友の初中後に善なるが如し。正法を學する者の過越を得ざること海の常に限れるが如し。尸羅は是れ功德の住處なること亦大地の萬物の依止するが如し。尸羅は諸善の功德を潤益すること亦天雨の種子を潤益して能く五根を成せしむるが如く、火の物を熟して能く諸利を生ずるが如く、風の身を成ぜしむるが如し。尸羅は能く一切の道果を受くること亦虚空の萬物を含受するが如く、亦吉瓶の願に隨つて皆得るが如く、亦美饍の諸根を利益するが如し。尸羅は善く能く諸道を通利して能く諸根をして清淨無礙ならしむ。智慧、壽命は尸羅を以て本と爲すこと、猶し身命の氣息を以て本と爲すが如し。尸羅は即ち是れ最上の依處なること民の王に依るが如し。尸羅は即ち是れ諸の功德の主たること軍の大將の如し。尸羅は衆の快樂を得ること意に隨つて婦の能く夫の心に稱(かな)ふが如し。若し涅槃及び天上に生ぜんことを求めば尸羅は即ち是れ學道の資用なること、彼の遠行するに必ず衣糧を持するが如し。尸羅は將に人をして善處に至らしめんとすること、險路を經るに善導師を得るが如し。尸羅は人を度して生死より過ぐること、猶し牢船の大海を渡ることを得る如し。尸羅は能く諸の煩惱の患を滅すること猶し良藥の能く衆病を消するが如し。尸羅は器仗、能く魔賊を御すること善き兵器の能く敵陣に對するが如く、所愛の親の難を經るに捨てざるが如し。尸羅は人を將(ひき)いて諸の衰惱中にも隨護して捨てず。尸羅は能く後世の癡冥を照すこと大燈明の能く黑闇を除くが如し。尸羅は人を度し諸惡道を出でしむること深水を度るに好橋梁を得るが如し。尸羅は能く煩惱の熱の急なるを除くこと清涼の室の能く毒熱を除くが如し。惡趣に墮せんと欲せば尸羅は能く救ふこと、勇士の刄を持し、人をして怖畏より諸凡夫人を救ふが如し。應に深く尸羅を愛すること諸の菩薩の諦勝處を學するが如くすべし。行者は善く尸羅を行ずること諸の菩薩の捨勝處を行ずるが如くすべし。得果の人の善く尸羅を修すること亦菩薩の滅勝處を修するが如くすべし。尸羅を護持して人をして果

く地獄の怖畏を過ぐ。二には能く畜生の怖畏を過ぐ。三には能く餓鬼の怖畏を過ぐ。四には能く貧窮の怖畏を過ぐ。五には能く誹謗・呵罵・惡名の怖畏を過ぐ。六には能く諸の煩惱の覆ふ所の怖畏を過ぐ。七には能く聲聞、辟支佛正位の怖畏を過ぐ。八には能く天人・龍神・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等の怖畏を過ぐ。九には能く刀兵・惡毒・水火・師子・虎狼・他人に害せらる怖畏を過ぐ。十には能く邪見の怖畏を過ぐ。菩薩は是の如く淨く戒を持せば則ち能く諸の佛法に住す。所謂る四十不共法の法器と爲るに堪任す。

讃戒品[一九]　第三十四[二〇]

菩薩は是の如く尸羅を淨持して能く種種の功德、諸利を攝すること無盡意菩薩の說くが如し。復た次に略して尸羅の少分を讃ぜん。「尸羅」とは、是れ出家の人の第一に喜樂する所の處、年少、富貴の如く最も喜樂す可し。能く善法を增長すること慈母の子を養ふが如く、能く衰患を防護すること父の子を護るが如し。尸羅は能く諸の出家の者の一切の大利を成就すること白衣の多財の如し。尸羅は能く一切の苦惱を救ふこと正行の理に順ふが如し。尸羅は善人の敬ふ所なること報恩の法の如し。尸羅は人の愛重する所なること猶し壽命の如し。尸羅は智者の貴ぶ所なること智慧の如く、解脫を求むる者の善く尸羅を護ること、王の密事を大臣の守護するが如し。道利を樂ふ者は尸羅を愛重すること、涅槃を樂ふて佛法を愛重するが如し。智慧の人は善く尸羅を守すこと壽を惜む者の安身の法を護つて死を救ふの時急なるが如し。尸羅の最爲ること、急難に遇つて善知識を得るが如し。尸羅は淸淨にして賢人を莊嚴すること、貴家の女の慚愧にして無穢なるが如し。尸羅は卽ち是れ功德の初門、不諂曲の諸の善利を開くが如し。尸羅は最も是れ梵行の本なること、直心は則ち是れ正見の本なるが如し。諸の大人の法は尸羅を以て本と爲すこと、重位を求むるに直心を以て本と爲すが如し。

※尸羅を讃ず。

【一九】　この品は尸羅を讃歎し、喩を以て持戒の功德を詳說す。

【二〇】　三十四。正藏は七に作る。今宋・元・宮本に據る。

菩薩は能く是の如く、　尸羅を成就せば、
十利及び餘の　種種の利を失せず。
亦復た四難處の　邪道に墮せず、
四失の法を得ず。　四壞の法に値はず。
又不欺誑を得、　諸佛と四法を等しうし、[一七]
能く墮地獄、十事の　諸の怖畏を過ぐ。

「十利を失せず」とは、常に轉輪聖王と爲ることを失せず、常に彼の中に於いて不放逸の心を失せず、常に諸の佛道を求むることを失せず、常に釋提桓因と作ることを失せず、常に彼の中に於いて不放逸の心を失せず、常に諸の菩薩の敎化する所の事を失せず、常に樂說、辯才を失せず、常に諸の善根を種ゆる福德の所願を滿足するを失せず、常に諸佛、菩薩、賢聖の爲めに讚せらるるを失せず、常に疾く能く一切智慧を具足するを失せず。是を十と爲す。種種の利とは種種の功德に於いて退失せず、經中に說くが如し。菩薩は善く持戒を守らば常に諸天の爲めに讚ぜられ、諸の龍は善く護り、諸人供養す。常に諸佛の爲めに念ぜられ、常に世間の大師と爲り、衆生を愍念す。「四難處等の邪道に墮せず」とは、菩薩は能く是の如く尸羅を成就せば四難處に墮せず、一には無佛の處に生ぜず、二には邪見の家に生ぜず、三には長壽天に生ぜず、四には一切の惡道に墮せず。「四の不失の法を得」とは、一には菩提心を失せず、二には念佛を失せず、三には常に多聞を求むるを失せず、四には無量の世事を念ずるを失せず。「四の壞法に値はず」とは一には法壞に値はず、二には刀兵に値はず、三には惡毒に値はず、四には飢餓に値はず。「四不誑法を得」とは、一には十方の諸佛を欺誑せず、二には諸の天神等を欺誑せず。三には衆生を欺誑せず、四には自ら身を欺誑せず。又「十怖畏を過ぐ」[一八]とは、菩薩は是の如く清淨に持戒せば、能く墮地獄等の十怖畏を過ぐ。何等か十なりや。一には能

【一七】四不欺誑をいふ。四不欺誑は本文に詳し。

【一八】十怖畏を過ぐることを解す。本文に詳し。

行者尸羅を淨めんと欲せば應に王等の法の爲めにすべからず。「王等の法」とは、佛、淨德力士の爲めに說きたまはく、善男子よ、菩薩の尸羅は乃至失命の因緣ありとも猶ほ破戒すべからず。國王爲らんことを期するが故に持戒せず。天に生ぜんことを期するが故に持戒せず。釋提桓因爲らんことを期するが故に持戒せず、梵天王の爲めならず、富樂自在力の爲めの故に持戒せず、名聞稱讚の爲めの故にせず、利養の爲めの故に持戒せず。壽命の爲めの故にせず。飮食・衣服・臥具・醫藥・資生の物の爲めの故に持戒せず。「生等の法に依らず」とは、天人に生ぜんが爲めに持戒せず。自依によりて持戒せず、依他によつて持戒せず。今世に依つて持戒せず、後世に依つて持戒せず。色に依らず、受・想・行・識に依らず。眼に依らず、入に依らず、耳・鼻・舌・身・意に依るが故に持戒せず。欲界・色界・無色界に依るが故に持戒せず。地獄・畜生・餓鬼・阿修羅・惡道を脫するを得んが爲めの故に持戒せず。天中の貧を畏るるが爲めの故に持戒せず。人中の貧を畏るるが爲めの故に持戒せず。夜叉の貧を畏るるが爲めの故に持戒せずと。

問うて曰く、若し此の如き等の法の爲めにせずんば何の法の爲めの故に持戒するやと。答へて曰く、

三寶をして久住せしめんと、　欲するが爲めの故に持戒し、
種種の利益を得んと、　欲するが爲めの故に持戒す。

「三寶久住」とは、佛種を斷ぜざらんがための故に持戒し、轉法輪の爲めの故に持戒し、聖衆を攝せんが爲めの故に持戒し、生死病死の憂悲、苦惱を脫せんが爲めの故に持戒し、一切衆生を度せんが爲めの故に持戒し、一切衆生をして安樂を得せしめんが爲めの故に持戒し、衆生をして安樂の處に到らしめんが爲めの故に持戒し、禪定を修せんが爲めの故に持戒し、智慧・解脫・解脫智見の爲めの故に持戒す。是の事は淨德經の中に廣く說くが如し。

※三寶久住のために持戒せよ。

語言少し。是の所行を以て人の意を取つて心に清淨ならざらしめんと欲す。此の如き威儀は善と爲さず、寂滅と爲さず、而も諸法の定んで有るを見、空無所有の法に於いて畏ること坑に墮つるが如く、空を說く者を見ては怨家の想を生ず。是を威儀矯異の沙門と名づく。云何か貪求名利の沙門と爲すや。沙門有つて強いて能く持戒すと雖も是の念を作す。云何か人をして我が持戒を知らしめんや。と強いて多聞を求め、云何か人をして我が多聞を知らしめんやと。強いて阿練若の法を作し、云何か人をして我が是の阿練若を知らしめんやと。強いて少欲・知足・遠離を行じて、云何か人をして我が少欲・知足・遠離の法を行ぜるを知らしめんやと。厭離心の爲めに非ざるが故に、煩惱を滅せんが爲めに非ざるが故に、以て八直聖道を求むるに非ざるが故に、涅槃の爲めに非ざるが故に、一切の衆生を度するために非ざるが故に是を求名利の沙門と名づく。云何か眞實行の沙門なりや。沙門有つて尙身を貪惜せず、何に況んや名利を惜まんや。諸法は空にして所有無しと聞き、心大いに歡喜して說に隨つて而も行ず。尙涅槃を貪惜せずして而も梵行を行ず。何に況んや三界に貪惜せんをや。尙空見に著せず、何に況んや我・人・衆生・壽者・命者・知者・見者の見に著せんをや。諸の煩惱の中に於いて而も解脫を求めず、外に求めず、一切法は本來淸淨にして無垢なりと觀ず。此の人は但だ身に依つて餘に依らず、諸法實相なるを以て尙法身を貪らず、何に況んや色身をや。法の離相を見、言を以て說かず、尙無爲の聖衆を分別せず。何に況んや衆人をや。斷の爲めならず、修習の爲めならざるが故に生死を惡まず、涅槃を樂はずして無縛無解なり。諸佛の法は定相有ること無しと知り、知り已つて生死に往來せず、亦復た滅せず。迦葉よ、是を隨眞實行の沙門と名づく。迦葉よ、汝等は應に勤めて眞實の行を行ずべし。沙門は名字の爲めに害せらるること莫れ。復た次に

王等の法の爲めに、　而も尸羅を持せず。
亦生等に依りて、　而も尸羅を持せず。

の諸法是れなり。破我の因緣は先に說くが如し。是の故に尸羅を淨めんと欲せば、當に此の四法を行ずべし。復た次に

四有つて尸羅を破す。　而も尸羅を持するに似たり。

行者は當に精進して、　自制し、愼んで爲すこと莫かるべし。

*寶頂經迦葉品中に、佛、迦葉に告げたまはく、四種の破戒の比丘は持戒の比丘に似如たり。何等をか四と爲すや。迦葉よ、比丘有つて經戒の中に於いて盡く能く具に行じて而も我有りと說く。迦葉よ、是を破戒にして持戒に似如たりと名づく。復た次に迦葉、律經を誦持し、戒行を守護するも身見の中に於いて不動不離なり。是を破戒にして持戒に似如たりと名づく。復た次に迦葉、比丘有つて具に十二頭陀を行じ而も諸法は定んで有りと見る。破戒にして持戒に似如たりと名づく。復た次に迦葉、比丘有つて衆生を緣じ、慈心を行ずるも諸行は生相無しと聞いて心則ち驚異す。是を破戒にして持戒に似如たりと名づく。迦葉よ、此の四破戒の人は持戒に似如たりと。復た次に

世尊の所說は、　沙門に四品有り。

應に第四の者と爲り、　前の三種を遠離すべし。

「*迦葉品の中に、四種の比丘を說く」とは、應に第四の沙門を學すべし。應に三と爲るべからず。何等をか四と爲すや。佛迦葉に告げたまはく、四種の沙門有り、一には形色相の沙門、二には威儀矯異の沙門、三には貪求名利の沙門、四には眞實行の沙門なり。云何か名づけて形色相の沙門と爲すやと。沙門の形、沙門の色相有り。所謂る僧伽梨を著け、鬚髮を剃除し、黑鉢を執持して而も不淨の身業、不淨の口業、不淨の意業を行じ、寂穢を求めず、善を求めず、慳貪懈怠にして惡法を行じ、破戒にして修道を樂はず。是を形色相の沙門と名づく。云何か威儀矯異の沙門なりや。沙門有つて四種の威儀を具へ、審諦安詳にして衣食を趣得し、聖種の行を行じ、在家出家と與に和合せず、

※尸羅を破する法。

※四種破戒の比丘。

※四種の比丘。

若し法相因つて成ぜば、　此れ即ち無性と爲す。
若し性有ること無くんば、　此即ち相有ること無し。
若し法に性有ること無く、　此れ即ち無相なれば、
云何か無性と言はんや。　即ち名づけて無相と爲す。
若し有と無とを用ひて、　亦は遮し亦は應に聽すべしといはゞ、
心は不著なりと言ふと雖も、　是は則ち無有の過なり。
何の處にか先に法有つて、　而して後に滅せざる。
何の處にか先より然ること有つて、　而して後に滅有りといはん。
此の有相寂滅し、　同じく無相寂滅す。
是の故に寂滅の語あり。　及び寂滅の語とは、
先より來た寂滅に非ず。　亦寂滅せざるにも非ず。
亦寂、不寂にも非ず。　非寂、不寂にも非ず。

「衆生の中の大悲」とは、衆生は無量無邊なるが故に悲心も亦廣大なり。復た次に諸佛の法は無量無邊無盡なること虛空の如し。悲心は是れ諸佛の法の根本、能く大法を得るが故に名づけて大悲と爲す。一切衆生の中の最大なる者を名づけて佛と爲す。佛の所行なるが故に名づけて大悲と爲す。

「無我の法に忍ず」とは、實法を信樂するが故に、諸佛は皆一涅槃道の故に名づけて無我法と爲す。若し此の法中に入らば心則ち忍ざること、小草の火に入らば則ち燒盡するが如し。若し眞金を火に入れば能く堪忍して失無し。是の如く若し凡夫人、善根を修習せずして無我中に入らば、堪忍すること能はずして即ち邪疑を生ず。是の菩薩は無量世より來た善根を修習して智慧猛利なれば諸佛護念したまふ。未だ結使を斷ぜずと雖も無我法中に入りて心能く忍受す。無我法とは陰・界・入・十二因緣等

以て散ぜざるが故に無なり。　二定んで有なれば則ち無なり。
他は法を生ずること能はず、　自も亦生ずること能はず、
自他亦能はざれば、　二を離れても亦生ぜず。
若し自有ること無しといはゞ、　云何か他に從つて生ぜん。
世俗の法を離るれば、　則ち自他有ること無し。
若し他他に從つて生ぜば、　他即ち自體無し。
體無くんば則ち有に非ず、　何物を以てか他を生ぜん。
自體無きを以ての故に、　他の生ずるも亦復た無なり。
四種皆空なるが故に、　法は定んで生滅無し。
「無相を驚かず」とは、諸相を遠離するを信樂するが故に驚かず。説くが如し。
一切若し無相なれば、　一切即ち有相なり。
寂滅は是れ無相なり。　則ち是を有法と爲す。
若し無相の法を觀ぜば、　無相は即ち相爲り。
若し無相を修すと言はゞ、　即ち無相を修するに非ず。
若し諸の計著を捨せば、　之を名づけて無相と爲す。
是の著を捨する相を取らば、　則ち解脱無しと爲す。
凡そ取有るを以ての故に、　取に因つて而も捨有り。
取を離るれば何事をか取せんや。　之を名づけて以て捨と爲す。
取とは所用の取、　及以(おょび)可取の法なり。
共に離れて倶に有ること無し。　是を皆寂滅と名づく。

生住滅の中に入れども、　寂滅にして所有無く、
亦從來する所無し。　亦復た去る所無し。
來去無きを以ての故に、　之を名づけて平等と爲す。
諸佛と衆生と、　并及び一切の法は、
悉く皆所有無く、　一切の有道に過ぎたり。
此の三是れ等に非ず。　亦復た非等に非ず。
非等非等に非ず。　非非等にして等ならず。
是の如く諸法は、　皆等にして差別無しと説く。

*復た四法有つて能く尸羅を浄む。説くが如し。

善く能く空を信解して、　無相の法に驚かず。
衆生の中の大悲は、　能く無我に忍ず。
是の如きの四法は、　亦能く尸羅を浄む。

行者、諸法は自性無く、他性無しと了達するが故に、名づけて信解空と爲す。説くが如し。

一切所有の法は、　終に自性より生ぜず。
若し衆緣より生ぜば、　則ち應に他に從つて有なるべし。
自性より生ぜずんば、　云何か他に從つて生ぜん。
自性已に成ぜざれば、　他性も亦復た無なり。
若し自性を離れて生ぜば、　則ち自性有ること無し。
若し自性を離るれば、　則ち自相有ること無し。
自性と自性相と、　以て合せざるが故に有なり。

※無相の法に驚かず等の四法。

若し先より定んで無なりといはゞ、　云何か中、下を成ぜん。

復た次に空は一相なるを以ての故に諸法は皆平等なり、衆生も亦是の如しと觀ず。說くが如し。

智者は空の中に於いて、　分別の相を說かず。
空は一にして而も異なること無し。　能く是の如く空を見る、
是を則ち見佛と爲す。　佛は空に異らざるが故に、
說いて言ふ。諸佛は一なり、　一切の衆生は一なり、
一切の法は一法にして、　上、中、下の別無しと。
一切の佛世尊は、　自性他性を離る。
一切の諸の衆生も、　亦自他の性を離る。
一切の法も亦爾なり。　自性他性を離る。
是の因緣を以ての故に、　是の故に一相と名づく。
諸佛有るは則ち非なり。　諸佛無きも亦非なり。
諸の衆生有るも非なり。　諸の衆生無きも非なり。
諸法有るも則ち非なり。　諸法無きも亦非なり。
有無を離るゝが故に、　之を名づけて平等と爲す。
一切の佛世尊、　衆生及び諸法は、
一切取す可からざるを、　諸法平等と名づく。
一切の佛、衆生、　及び法は差別無し。
分別す可からざるが故に、　之を名づけて平等と爲[一六]す。
諸佛と衆生と、　幷及び一切の法は、

【一六】華嚴經夜摩天品には、心佛及衆生是三無差別といふ。

が故に所得無し。「猗」とは、是の如き法を得るが故に、心輕く柔軟にして法を受くるに堪任す。此の猗樂を以て心に自ら高せざるなり。「諸法の平等を觀ず」とは、空を以て有爲無爲の法は一切悉く等しく上中下の差別無しと觀ず。説くが如し。

若し當に下に因つて、
下は中、上と作らず、
下自ら下を作さば、
若し當に中に因つて、
中は下、上を作らず、
中自ら中を作さば、
若し當に上に因つて、
上は中、下と作らず。
上自ら上を作さば、
下に因つて作すことを得ず、
若し先より定んで有なりといはゞ、
若し先より定んで無なりといはゞ、
中に因つて作すことを得ず
若し先より定んで有なりといはゞ、
若し先より定んで無なりといはゞ、
上に因つて作すことを得ず、
若し先より定んで有なりといはゞ、

而も中、上有るべしとは、
云何か下に因つて有らん。
中、上も先より定んで有ならん。
而も下、上有るべしといはゞ、
云何か中に因つて有ならん。
下、上も先より定んで有ならん。
而も中、下有るべしといはゞ、
云何か上に因つて有ならん。
中、下も先に定んで有ならん。
亦不得にも因らず。
應に下に因るべからず。
云何か中、上を成ぜん。
亦不得にも因らず。
應に中に因るべからず。
云何か下、上を成ぜん。
亦不得にも因らず、
應に上に因るべからず。

而も此の大陰雲ありて、　雨流れて世界に滿ち、
然して後乃ち消滅すれども、　亦去る處有ること無きこと、
雲の來去無きが如し。　諸法も亦是の如し。
生ずる時從來するところ無く、　滅する時去る所無し。
壁上に人を畫くが如し。　一一の彩に在らず、
亦和合にも在らず、　壁中にも亦復た無し。
畫師の所にも亦無し、　畫筆の中にも亦無なり。
餘の處より來らず、　而も和合に因つて有り、
和合散ずれば則ち無なり。　諸法も亦是の如し。
有なる時、從來することろ無く、　無なる時去る所無し。
燈炎は油に在らず、　亦炷より出でず。
亦餘の處より來らず、　而も油炷に因つて有り。
因緣盡くれば則ち滅し、　滅する時去る處無し。
諸法の來去の相も、　皆亦復た是の如し。

*復た四法有りて能く尸羅を淨む。所謂る

能く自ら身を思量して、　自ら高ふし他を下げず。
此の二は所得無し。　心犄なれば慢有ること無し。
諸法の平等を觀ず、　是の四は尸羅を淨む。

「能く自ら思量す」とは、行者是の念を作す。我が身は不淨・無常・死相にして、何の所にか直ひを爲すかと。是の如く念じ已つて即ち自ら高うして他人を下げず、身及び他に我我所無しと信解する

※自身思量等の四法。

是の如きは眼見の事なり。　如何か知ること能はざらんや。
相と可相を計るに隨つて、　是の如きの戲論有り。
戲論を起す時に隨つて、　則ち煩惱の處に隨ふ。
復た次に行者は不來不去門を以て諸の陰性を觀じて空に入る。說くが如し。
生老病死の法は、　生ずる時從來するところ無し。
生老病死の法は、　滅する時去る所無し。
諸の陰界に入るの性も、　生ずる時從來するところ無く、
滅する時去る所無し。　佛法の義、是の如し。
火は人の功に非ず、　亦木を鑽るにも在らず、
和合の中にも亦無く、　而も和合に因つて有るが如し。
薪盡くれば則ち火滅す。　滅する時去る所無し。
諸緣、合するが故に有り。　緣散ずれば則ち皆無なり。
眼識も亦是の如し。　眼中に在らず、
色中に在らず、　亦中間にも在らず、
和合の中にも在らず、　亦和合を離れず。
亦餘より來らず、　而も和合に因つて有なり。
和合散ずれば則ち無なり。　諸法も亦是の如し。
生ずる時從來するところ無く、　滅する時至る所無し。
彼の龍の心力をもて、　而も陰雲現るゝこと有り。
龍身より出でず、　亦餘の處より來らざるが如し。

空に貪著すること莫れと說く。世俗に隨つて空の名字を說く。是の如き法は能く尸羅を淨むと。

問うて曰く、若し爾らば云何か五陰の諸法なりと言ふかと。答へて曰く、空を以ての故に五陰の諸法は空なり。最後に「空に著すること莫れ」と言ふは空も亦應に捨すべし、是の如くんば邪疑の法有つて尸羅を妨礙すること無しと。

問うて曰く、五陰の諸法は有相、可相を以ての故に決定して有り。色は是れ苦惱の相、苦樂を覺るは是れ受相なりと說くが如く、現に是の如き等の諸相有り。云何か非空非不空なりと言ふかと。

答へて曰く。

惱壞は是れ色相なり、　何等をか是れ色と爲す。
若し惱は是れ色の相なれば、　相を離れて可相無し。
此の相は何の處に在りや。　無相なれば可相無し。
世界は終に有無し。　無相にして可相有らば、
相と及び可相とは、　合に非ず、不合に非ず。
其の來るに所從無く、　去るにも亦所至無し。
若し合、非合有つて、　相、可相を成ぜば、
是の如くんば則ち失と爲す。　相と及び可相の相、
相を以て可相を成ぜば、　相も亦自ら成ぜず。
相自ら成ずること能はずんば、　云何か可相を成ぜんや。
世界は甚だ愍むべし、　相と可相とを分別し、
諸の邪徑に迷惑し、　邪師に欺誑せらる。
相、可相は則ち是れ、　相も無く可相も無し。

※五陰は空なることを解す。

と知るなり。「斷常の見無し」とは、斷常の見は多く過あるを以ての故に。「衆緣の法に入る」とは、諸法は衆緣より生じて定性有ること無きを知り、中道を行ずるなり。是の如きの四法は能く尸羅を淨む。復た四法有つて能く尸羅を淨む。所謂る、

四聖種の行、　　及び十二頭陀を行じ、
亦衆鬧を樂はずして、　何が故の出家なりやを念ず。

四聖[九]種とは、所謂る衣服を趣得すれば而も足り、飲食を趣得すれば而も足り、臥具を趣得すれば而も足り、斷を樂ひ、修行を樂ふなり。十二頭陀とは所謂る阿練若法を受け、乞食の法、糞掃[一〇]衣を受け、一坐、常坐、食後に非時の飲食を受けず、但だ三[一一]衣有り、毛毳衣、隨敷坐、樹下に住し、空地に住し、死の人間に住なり、亦「衆鬧を樂はず」とは、在家、出家の者と與に和合せざるなり。人有つて阿練若の法を行ずと雖も、多知多識の故に多くの人往來す。是の故に衆鬧を樂はずと說くは、若しは餘の處に至り、若しは心與に和合せざるなりと。「何が故に出家なりや」とは、尸羅を行ずる者は是の念を作す、我は何が故に而も出家なりやと。念じ已つて出家の事に隨ひ、成就せんと欲するが故に所說の如く行ず。是を四と爲す。復た四法有り、能く尸羅を淨む。所謂る

五陰に生滅無し。　六性は法性の如し。
六情も亦空と見て、　世俗の語に著せず。
是の如きの四法は、　亦能く尸羅を淨む。

「五[一二]陰は生滅無し」とは、五陰の本末を思惟するが故に、五陰に生滅する者無きことを見る。地等の六性[一三]は法性の如きことを見ば、法性は不可得なるが如く六性も亦不可得なり。知りぬ、六情[一四]は是れ苦樂等なりと雖も、心心數法の因緣のみ。正智を以て推求せば亦是れ空なることを知る。三[一五]種に了達せば皆是れ空なることを知る。行者有つて空に貪著せば則ち還つて道を妨ぐ。是の故に

※四聖種等の四法。

【九】四聖種＝普通に飲食、衣服、臥具、醫藥の順序なるも、ここに擧ぐるは第四項異る。
【一〇】糞掃衣＝前出、入地品第十七。
【一一】三衣＝前出、入地品第十七。

※世俗の語に著せざる等の四法。

【一二】五陰＝前出、阿惟越致相品第八。
【一三】六性＝地、水、火、風、空、識のこと。
【一四】六情＝眼、耳、鼻、舌、身、意の六識のこと。
【一五】三種＝陰と性と情をいふ。

ば久住せしむることば則ち是の處有り。何を以ての故に、恭敬の心を以ての故に佛法滅せず。是の故に跋陀婆羅よ、我、今汝に告げん、是の師の所に於いて應に深恭敬の心、父母の心、善知識の心、大師の心を生ずべし。是れ則ち我が敎ふる所に隨ふなりと。

助尸羅果品[七] 第三十三[八]

是の如く菩薩は多聞を求め、多聞の義を知り已つて說に隨つて行ぜんが爲めの故に能く尸羅をして清淨ならしむべし。尸羅を清淨ならしむる法を應當に修行すべし。

問うて曰く、何等の法か能く尸羅をして清淨ならしむるやと。答へて曰く、

身口意の業を護るも、　亦法を護ることを得ず。
終に我見、　及以餘の見雜ならしめず。
薩婆若に廻向するは、　此れ四淨尸羅なり。

行者、此の四法を修せば尸羅自然に清淨なり。「身口意の業を護る」とは、常に應に正念なるべし。身口意の業は乃至小罪をも錯謬せしめざれ。譬へば龜鼈の常に頭足を護るが如し。此の人深く空を樂ふが故に第一義の中に於いて而も亦三業の法を護ることを得ず。人有つて法空を見ると雖も、空を知ると謂ふ者は在り。是の故に說いて、我見・衆生見・人見・壽者見・智者見を雜へずと。「薩婆若に廻向す」とは、持戒の果報、餘福を求めず。但だ一切の衆生を度し、以て佛道を求めんとす。是を四と爲す。復た四法有つて能く尸羅をして清淨ならしむ。所謂る

我と我所との心無く、　亦斷常の見も無く、
衆緣の法に入らば、　則ち能く尸羅を淨む。

「我と我所との心無し」とは、我我所の心に貪著せず、但だ此の心は虛妄顚倒にして而も我法無し

【七】此品には、尸羅Śīla卽ち戒の護持に關する助道を說き、尸羅を淨むる種種の四法を擧ぐ。
【八】三十三＝正藏には六に作る。今宋・元・宮本に據る。

※尸羅を清淨ならしむるの法。

※薩婆若に廻向せよ。

※無我我所等の四法。

に報へず。是の故に弟子、應に諂曲の心を離れ、身命を貪惜することを捨し、憍慢を破るべし。若し師、輕蔑し及び敬愛を以てすとも心に異ること有ること無く、當に深愛の心、第一恭敬の心を生ずべし。應に父母の心を生ずべし。應に大師の心を生ずべし。應に善知識の想を生ずべし。應に能く爲めに難事の想を生ずべし。應に難報の心を生ずべし。若し師聽さば則ち常に行事する所を受け師勅して餘事を須ひざれば則ち師の意を相望み、事に隨ひて而も行ず。師の愛重する所は隨つて而も愛重す。應に師に因つて世利を求むべからず。師の讃歎を求むること莫れ、名聞を求むること莫れ、但だ智慧、法寶を求めよ。師の謬失は常に應に隱藏すべし。若し師の過釁若し彰露せば當に方便して之を覆ふべし。師に功德有らば稱揚し、流布し、深心に愛樂し、聽受し、持解し、義趣を思惟して所說の如く行ぜよ。自利利他を求むとは、[四]秳弟子と爲ること莫れ、[五]殃弟子と爲ること莫れ、垢弟子と爲ること莫れ、衰弟子と爲ること莫れ、無益の弟子と爲ること莫れ。是の如き等の過無く、但だ善弟子の法中に住し、師に供給すべし。般舟經に說くが如し、佛、颰陀婆羅[六]に告げたまはく、若し菩薩、是の三昧を得んと欲せば應に勤めて精進して諸師の所に於いて尊重心、難遭心を生ずべし。若しは口より聞き、若しは經卷を得る處、是の師の所に於いて應に深心に恭敬して父母の心、善知識の心、大師の心を生ずべし。能く是の如き法を說きは菩提を助くるを以ての故なり。颰陀婆羅、若しは菩薩道を求むる者、若しは聲聞を求むる者、所從の師、是の法を讀誦する處、深恭敬の心、父母の心、善知識の心、大師の心を生ぜずして、能く是の法に通利することを得て、忘失せず、久住して滅せざらしむとは、是の處有ること無し。何を以ての故に、颰陀婆羅よ、恭敬せざる因緣を以ての故に、佛法は則ち滅す。是の故に颰陀婆羅よ、若しは菩薩道を求むる者、若しは聲聞を求むる者は、從つて聞する所是の法を讀誦し、書寫する處に於いて恭敬の心、父母の心、善知識の心、大師の心を生ずる者は讀誦し、書寫する所に於いて未だ得ざる者に於いては得しめ、已に得たる(もの)

【四】秳＝藁に同じ。
【五】殃弟子＝正藏には大弟子とあれども今他本に作る。
【六】颰陀婆羅＝前出、助念佛三昧品第二十五註。

乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・釋提・桓因・四天王天・人非人の供養する所、一切衆生の無上福田なり。尙他の供給を求めず、身自ら執事したまふ。我今未だ所知有らず、始めて學を求めんと欲す。云何か他の供給を受けんや。復た應に是の念を作すべし。

我は應に善く、　一切の諸の衆生に供給すべし。
彼の供給を望まず。　自利利他の故に。

云何か「自利」と爲すや、若し供給を貴ばゝ則ち法施の功德を失す。若し供給を貴ばざれば則ち法施の功德を得。云何か「利他」と爲すや、若し彼の供給を貴びて而も敎へて讀誦せしめば彼は則ち念を生ず。師すら直に世利を以ての故に而も我を敎誨す、法を以てせざるが故にと。是の人は若し是の心を以て師に供給せば則ち大利を得ず。若し法を　敬するが故に師を尊重せば則ち大利を得ん。是を利他と名づく。

他より智慧を求めば、　應に身命を惜まざるべし。

※敬師不惜身

若し行ずる者、他より智慧を求めんと欲せば應に身命を捨つべし。捨つるとは、智慧の爲めの故に勤心精進して師を恭敬し、身命を惜まざるなり。

問うて曰く、何を以ての故に智慧の爲めに師を恭敬して而も身命を惜まざるかと。答へて曰く、

若し一字一心も、　此を以て劫數と爲す。
恭敬して師の所に於いて、　能く此の論を說く者は、
諸の諂曲の心を離る。　深く愛して而も恭敬し、
晝夜休息せざれば、　爾所の劫を盡さん。

師の敎ふる所の論義、字數及び爾の心に念ずる所に隨つて、若し受法せば諂曲無く、身命を惜まず、晝夜恭敬して始終異ること無かれ。能く是の如くなりと雖も、猶師の益する所の論議、智慧の恩

卷の第十七

解頭陀品の餘

五空閑の說の如し。　餘の功德も亦爾り。
自ら讀誦のために他に敎へて、　空閑處を捨することを得せしむ。

阿練若比丘に五種の分別有り。一には惡意を以て利養を求めんと欲す。二には愚癡、鈍根の故に阿練若を行ず。三には狂癡、失意して阿練若を作す。四には頭陀行を行ぜんが爲めの故に阿練若を作す。五には諸佛・菩薩・賢聖の稱讚したまふ所を以ての故に阿練若を作す。此の五阿練若の中に於いて頭陀行を行ぜんが爲めの故に阿練若を作す。諸佛・菩薩・賢聖の稱讚したまふ所を以ての故に阿練若を作す。是の二を善と爲す。餘の[一]三は呵す可し。五種に阿練若法を分別するが如く餘の十一頭陀行も亦應に是の如く分別して知るべし。

問うて曰く、佛、說きたまはく、若し已に阿練若法を受くれば終に應に捨すべからずと。若し因緣有らば捨て去ることを得るや不やと。答へて曰く、

經を讀誦する因緣あらば、　阿練若を捨す可し。

若し比丘他より受けて經法を讀誦せんと欲し、若しは他に敎へて讀誦せしめんと欲せば應に阿練若處より來つて[二]塔寺に入るべし。是の因緣を以て捨離することを得可し。

他に讀誦を敎ふるの時、　應に供給を望むべからず。
卽時に應に念佛すべし、　佛は常に所作有り。

阿練若の空閑處より來つて他に讀誦を敎ふるに、應に敬心供給を求むべからず。應當に念佛すべし。尚自ら所作有り。何に況んや我に於いてをや。佛は是れ[三]多陀阿伽陀三藐三佛陀・諸天・龍神・

※阿練若比丘の五種分別。

【一】 五種中一二三の前三なり。

【二】 塔寺＝塔に二種あり。一は Stūpa 塔婆（又は率塔婆）の略音にて、元と佛舍利を藏せるより起りしものと、二は Chaitya 制底、支提といはれ、塔と同じく土石を積集して造りしもの。制底は舍利を藏せず。この塔と制底に就いては總・別・同・異の異說あるも略す。寺とは、Vihāra 毘訶羅にて遊行處と譯す。僧の住所をいふ。漢字の寺は、元と支那の官司の名の轉用にして、白馬寺に起因す。魏に招提と云ひ、隋に道場と云ひ、唐以後、又寺といふ。邦語のテラに就いては異說がある。

【三】 多陀阿伽陀三藐三佛陀＝多陀阿伽陀は如來、三藐三佛陀は正偏智なり。易行品第九註「如來の十號」參照。

訟の因緣を起さず。十には他の用ふる所を奪はず。*樹下に坐するにも亦十利有り。一には房舍を求むる疲苦有ること無し。二には坐臥具を求むる疲苦有ること無し。三には所愛の疲苦有ること無し。四には受用の疲苦有ること無し。五には處の名字無し。六には鬪諍の事無し。七には[九]四依の法に隨順す。八には少にして而も得ること易く過無し。九には修道に隨順す。十には衆閙の行無し。死人の間に住するにも亦十利有り。一には常に無常想を得。二には常に死想を得。三には常に不淨想を得。四には常に一切世間の不可樂想を得、五には常に一切所愛の人を遠離することを得、六には常に悲心を得。七には戲調を遠離す。八には心常に遠離す。九には勤行精進す。十には能く怖畏を除く。◎空地に坐する者にも亦十利有り。一には樹下を求めず。三には我所有を遠離す。三には諍訟有ること無し。四には若し餘去らば顧惜する所無し。五には戲調少し。六には能く風雨・寒熱・蚊虻・毒虫等を忍ぶ。七には音聲刺蕀の刺す所と爲らず。八には衆生をして瞋恨せしめず。九には自らも亦愁恨有ること無し。十には衆閙の行處無し。

※坐樹下の十利。

△住死人間の十利。

◎住空地の十利。

【九】四依＝行・法・人・說についてそれぞれ四依あるも今は行四依を指す。行四依とは行人所依の四法を云ふ。一に糞掃衣、二に常乞食、三に樹下坐、四に腐爛藥なり。又之を四聖種とも名づく。

故に四方に求索せず。五には若し衣を得れるも亦憂へず。六には得るも亦喜ばず。七には賤物も得易く過患有ること無し。八には是れ行に順つて初めて四依の法を受く。九には麁衣の數中に入在す。十には人の貪著する所と爲らず。*一坐の食にも亦十利有り。一には第二食を求むる疲苦有ること無し。二には所受に於いて輕少なり。三には疲苦を用ふる所有ること無し。四には食前に疲苦無し。五には細行する食法に入在す。六には食消して後食す。七には妨患少し。八には疾病少し。九には身體輕便なり。十には身快樂なり。△常坐にも亦十利有り。一には身樂を貪らず。二には睡眠樂を貪らず、三には臥具の樂を貪らず。四には臥時に脇を席に著くるの苦無し。五には身欲に隨はず。六には坐禪を得易し。七には經を讀誦し易し。八には睡眠少し。九には身輕くして起き易し。十には坐の臥具・衣服を求むる心薄し。◎食後非時の飲食を受けざるにも亦十利有り。一には多食せず。二には食を滿さず、三には美味を貪らず。四には所求の欲少し。五には妨患少し。六には疾病少し。七には滿し易し、八には養ひ易し、九には足るを知る、十には坐禪讀經するに身疲極せず。*但だ三衣にも亦十利有り。一には三衣に於いて外に疲苦を求受すること無し、二には守護の疲苦有ること無し、三には畜ふる所の物少し、四には唯だ身に著る所を足れりと爲す、五には戒行に細なり、六には行來に累無し、七には身體輕便なり。八には阿練若處住に隨順す。九には處處住する所に顧惜する所無し。十には道行に隨順す。△毳衣を受くるにも亦十利有り。一には麁衣數に在り。二には糸索する所少し。三には意に隨つて坐す可し。四には意に隨つて臥すべし。五には浣濯すること則ち易し。六には染むる時にも在易し。七には虫壞有ること少し。八には壞し離し。九には餘衣を受けず。十には求道を廢せず。◎數坐に隨ふにも亦十利有り。一には好精舍を求めて住むに疲苦無し。二には好き坐臥具を求むる疲苦無し。三には上坐を惱まず。四には下坐をして愁惱せしめず。五には少欲なり。六には少事なり。七には得るに趣て而も用ふ。八には少用なれば則ち務少し。九には諍

※一坐食の十利。

△常坐の十利。

◎非時食の十利。

※三衣の十利。

△毳衣の十利。

◎數坐の十利。

四には現に阿練若處を樂はず。復た四法有り、一には增上慢にして未だ得ざるに得たりと謂ひ、二には深經に於いて心に憎恚を懷き、三には空、無相・無願の法を壞し、四には深經を持する者に於いて心に瞋恨を生ず。復た三事有り、一には若し阿練若處に在つて精進せざれば智慧無し。或は女人に値ふて非法に墮在せば若しは[一八]僧殘を得、若しは重罪を得。若し戒に反せば俗に還る。是を三と爲す。復た次に、*

　廣く空閑の法、　及び與に乞食の法を說く。
　餘の十頭陀の德は、　皆亦應に廣く說くべし。

△十二頭陀の法は上來に廣く二事を解するを以つて餘の十頭陀の功德も亦應に是の如く知るべし。何を以つての故に、是の二は則ち開して十頭陀門と爲す。餘は則ち解すべし。十頭陀とは一には糞掃衣を著す。二には一坐。三には常坐。四には食して後非時の飲食を受けず。五には但だ三衣有り。六には毳衣。七には敷坐に隨ふ。八には樹下に住す。九には空地に住す。十には死人の間に住す。「糞掃衣」とは、人の棄捨する所を受けて而も後著す。「受」とは、若しは心に生じ、若しは口に言ふなり。「一坐」とは、先づ食を受けし處に更に復た食せざるなり、「常坐」とは、夜常に臥せざるなり。「食後漿を飲まず」とは、食後非時の飲・石蜜等の食す可きの物を受けざるなり。「但だ三衣有り」とは、唯だ三衣を受けて餘衣を畜へず。「毳衣」とは、毳より成る所の麁毛・毳毛・褐氀・欽婆羅等なり。「敷坐に隨ふ」とは、所得の坐處に隨つて他をして起きしめざるなり。「樹下に住す」とは、樹下に住することを樂つて覆處に入らざるなり。「空地に坐す」とは、露地に止住するなり。「死人の間に住す」とは、厭離心に隨順するが故に、常に死人の間に止宿する法なり。是を十二頭陀と名づく。戒をして清淨ならしむ。◎糞掃衣に十利有り。一には衣を以つての故に在家の者と和合せず。二には衣を以つての故に乞衣相を現ぜず。三には亦方便して得衣相を說かず。四には衣を以つての

※十二頭陀を解す。
【一八】僧殘＝前出、調伏品第七註參照。
△名目。
◎糞掃衣の十利。

れ阿練若處なり。復た次に阿練若處に住して一切の善法を助滿し、善根を增長し、然る後、聚落に入つて衆生の爲めに法を說く。是の如く功德を成就せば乃ち阿練若處に住す可し。復た次に

決定王經の中に、　佛阿難の爲めに說きたまはく、

阿練若比丘は、　應に四四法に住すべし。

「菩薩阿練若に住す」とは、一には在家出家を遠離し、二には深經を讀誦せんと欲し、三には衆生を引導して阿練若處の功德を得せしめ、四には晝夜に念佛を離れず。復た四法有り、一には乃至彈指の頃にも衆生の中に於いて瞋恨心を生ぜず。二には應に一時の頃にも眠睡して心を覆はしむべからず、三には一念の頃に於いても應に衆生想を生ずべからす。四には一念の頃にも菩提心を忘捨すべからず。復た四法有り。一には常に應に閑坐して應に聚衆すべからず。二には常に經行を樂ふ。三には常に諸法に新故の想無きことを觀ず。四には應に深空・無相・無願の法を離るべからず。復た四法有り、一には四禪を行じて世間禪を行ぜず。四無量を行じ、衆生に緣つて悲心を生じて而も衆生相を取らず。二には慈心を行ずと雖も而も衆生に緣らず、喜心を行ずと雖も而も樂を貪らず。捨心を行ずと雖も而も衆生を捨てず、三には自ら身に四聖種の行有るを見て而も自ら高うじて他人を卑下せず。四には自ら多聞を行ずるに所聞の如く行ず。是を四と爲す。復た次に

◎阿練若處と非法。

無智にして精進無く、　而も空閑の處に住せば、

卽ち四法を得。　復た餘の四法を得。

又復た三事を得。　是の如きは佛の所說なり。

阿練若の比丘は、諸の功德の中に於いて應に勤めて修習すべし。何を以つての故に、阿練若の功德の中、此の二事は能く諸の功德を生ずるが故に。若し比丘愚癡懈怠にして阿練若處に在つて住せば則ち四非法を得。一には多く眠睡す、二には多く利養を貪る。三には因緣を以つて矯異相を現ず、

つて住するが故に阿練若住と名づく。正行多聞に住するが故に阿練若住と名づく。空・無相・無願解脫門現前するが故に阿練若住と名づく。十二因緣に順じて隨順して住するが故に阿練若住と名づく。畢竟寂滅して所作已作して住するが故に阿練若住と名づく。阿蘭若處は戒品に隨順し、定品を佐助し、慧品を利益し、解脫品を得易く、解脫知見品を得易く、諸の助菩提法を行じ易く、能く諸の頭陀功德を攝す。阿練若住處は諸諦に通達す。阿練若處は諸陰を見知す。阿練若處は諸法同じく法性と爲る。阿練若處は十二入を出離す。阿練若處は菩提心を忘失せず。阿練若處は空を觀じて畏れず。阿練若處は能く佛法を護る。阿練若處は解脫を求むる者に功德を失せず。阿練若處は能く一切智を得る者に則ち能く阿練若處を增益す、菩薩は是の如く行じて疾く六度を具することを得。何を以つての故に、若し菩薩、阿練若處に住在せば身命を惜まず、是を檀婆羅蜜行と名づく。三種の善業清淨にして細の頭陀行法に入る。是を尸波羅蜜と名づく。不瞋恨の心もて諸の衆生に於いて慈心普遍にして但だ薩婆若乘を忍樂して餘乘に在らず。是を羼提波羅蜜と名づく。自ら誓願を立て阿練若處に於いて正法忍を得ざるも終に此處を捨てず、是を毘梨耶波羅蜜と名づく。禪定を得るが故に生處を觀ぜずして善根を修習す。是を禪波羅蜜と名づく。身阿練若の如く亦是の如し。身菩提の如く亦是の如し。如實にして中に差別無し、是を般若波羅蜜と名づく。

佛は四法有つて、　阿練若處に住することを聽るす。

何等か四なりや。佛長者に告げたまふが如し。一には多聞、二には決定の義を知る、三には樂つて正憶念を修す、四には隨順して所說の如く行ず。是の如くんば人應に阿練若處に住すべし。復た菩薩有り、煩惱深厚なり。是の人若し衆鬧に在れば則ち煩惱を發す。應に阿練若處に在つて住して煩惱を降伏すべし。復た次に菩薩は五神通を得。是の人、天龍・夜叉・乾闥婆を敎化し、成就せんと欲するが故に應に阿練若處に住すべし。復た菩薩有つて是の念を作す。諸佛の讚ずる所の聽處は是

※住阿蘭若を聽する法。

き、誰か畏れん。菩薩は爾の時、則ち正しく身を觀ぜば、我無く、我所無く、衆生無く、壽者、命者無く、養育者無く、男無く、女無く、知者、見者無し。怖畏を名づけて虛妄分別と爲す。我は則ち應に虛妄分別に隨ふべからず。菩薩は是の如く應に草木の如く阿練若處に住すべし。又一切法を知つて皆亦是の如く鬪諍を斷ずるを阿練若處と名づく。我無く、我所無く、屬する所無きを阿練若處と名づく。應に在家出家は衆鬪の處に住するを樂ふべからず。諸佛は阿練若處の比丘、在家出家の者と與に和合するを聽さず。

問うて曰く、佛は一切衆人と與に和合するを聽したまはざるやと。答へて曰く、然らず。

佛は四和合を聽したまふ。　　餘は則ち聽したまはず。

是の故に應に親近すべし。　　餘は則ち遠離すべし。

菩薩は阿練若處に在つて四衆と與に和合するを聽るす。所謂る聽法衆に入り、衆生を敎化し、佛を供養し、一切智を離れず、心和合す。是の故に唯だ此の四事和合を聽す。餘は應に親近すべからず。復た次に菩薩は應に是の念を作すべし。云何が諸佛の聽す所の阿練若住處なりや。我れ當に親近すべし。我れ或は阿練若住處に非ざるに、謂く是れ阿練若處に住すとは、或は錯謬有り。

問うて曰はく、何等か是れ阿練若住處なりや、菩薩は應當に和合すべきやと。答へて曰く、佛は自ら經中に阿練若住處を說く、一切法に住せざるに名づく、諸塵に歸せず、一切法相を取らず、色・聲・香・味・觸を貪らず、一切法平等の故に、依止する所無くして住するを阿練若處に住すと名づく。自心善きが故に住處に相違せざるを阿練若に住すと名づく。一切の擔猗を捨て樂つて住するが故に阿練若住と名づく。一切煩惱を脫し、怖畏無くして住するが故に阿練若住と名づく。諸流を度して住するが故に阿練若住と名づく。聖種に住するが故に阿練若住と名づく。足るを知つて得に趣くが故に阿練若住と名づく。滿じ易く、養ひ易く、少欲にして住するが故に阿練若住と名づく。智慧足

す。此と相違して身業清淨等は則ち怖畏無しと。又、佛、郁伽長者の爲めに說きたまはく、出家の菩薩、阿練若處に在らば、應に是の念を作すべし。我れ何が故に此に在りやと。卽ち時に自ら知る。怖畏を離れんと欲するが故に、此に來至して誰か怖畏するや、衆の憒鬧を畏る、衆の語言を畏る、貪欲・瞋恚・愚癡を畏る、憍慢・恚恨・嫉他・利養を畏る、色・聲・香・味・觸を畏る、五陰魔を畏る、諸の愚癡、障礙處を畏る、非時語を畏る、見ざるを見ると言ふを畏る、聞かざるを聞くと言ふを畏る、覺らざるに覺るを畏る、知らざるに知るを畏る、諸の沙門の垢を畏る、共に相憎惡するを畏る、欲界・色界・無色界・一切の生處を畏る、地獄・畜生・餓鬼及び諸の難處に墮するを畏る。略說せば一切の惡、不善法を畏るるが故に、來つて此に在つて住す。若し人、家に在つて衆鬧に在るを樂ひ、道を修習せず、住して邪念に在れば是の如き怖畏所を離るるを得ること能はず。過去の諸菩薩有つて皆阿練若處に在り、諸の怖畏を離れ、無畏處を得て一切智慧を得。所有る當來の諸菩薩も亦阿練若處に在り、諸の怖畏を離れて一切の智慧を得べし。今現在の諸菩薩も阿練若處に住して諸の怖畏を離れ、無畏處を得て一切智慧を成ずと。是を以つての故に、我は一切諸惡を怖畏して諸の怖畏を度せんがための故に、應に阿練若處に住すべし。復た一切の怖畏は皆著我より生ず。我を貪著するが故に、我を愛受するが故に、我想を生ずるが故に、我を見るが故に、我を貴ぶが故に、我を分別するが故に、我を守護するが故に。若し我れ阿練若處に住して、我に貪著するを捨てずんば、則ち空しく阿練若處に在りと爲すと。復た次に長者よ、見有所得者は則ち阿練若處に住せず、我我所心に住する者は則ち阿練若處に住せず、顚倒に住する者は、則ち阿練若處に住せず、長者よ、乃至涅槃想を生ずる者は尙阿練若處に住せず。何に況んや煩惱想を起す者をや。長者よ、譬へば草木の阿練若處に在るが如し、驚畏有ること無し。菩薩は是の如く阿練若處に在つて應に草木の想、石瓦の想、水中影想、鏡中像想を生じ、語言に於いて響想を生じ、心に於いて幻想を生ずべし。此の中、誰か驚

た是の念を作す、是の諸の鳥獸・腹行虫等は阿練若處に在り、身に善を行ぜず、口に善を行ぜず、意に善を行ぜず、聚落に遠ざかりて住するを以つての故に而も畏るる所無し。我の心智、豈此の鳥獸等に如ざらんやと。是の如く思惟して諸の怖畏を除く。又佛を念ずるを以つての故に阿練若處に在つて能く一切の諸の怖畏の事を破す。經に說くが如し、汝、諸の比丘、阿練若處にあり、若しは樹下に在り、若しは空舍に在つて、或は怖畏を生じ、心沒して毛堅つ者、汝當に我が是の如來・應正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人・師佛・世尊を念ずべし。是の如く念ずる時は、怖畏卽ち滅して大膽を心となし、[一七]怯弱せず、決定して道を求むと。說くが如し。

比丘は空閑に住し、　當に心膽力を以つて、
諸の怖畏を除滅すべし。　佛を念ぜば畏るる者無し。
若し人自ら業を起せば　怖畏を脫することを得ず。
怖れざるも亦脫せず。　怖るれば則ち正利を失す。
是の如く免れざるを知つて、　而も餘利を破する者は、
則ち小人の事を行ず。　比丘の應ぜざる所なり。
若し怖畏する者有らば、　應に生死を畏るべし。
一切の諸の怖畏は　生死を皆因と爲す。
是の故に道を行ずる者は、　生死を脫せんと欲するも、
亦他人を救ふに、　應に怖畏を生ずべからず。

*佛、離怖畏經の中に怖畏法を說きたまふが如し。沙門、婆羅門有つて阿練若處に住せば、應に是の如く念ずべし。身業淨ならざるを以つての故に、口業淨ならざるが故に、念淸淨ならざるが故に、自ら高うして人を卑むるが故に、懈怠心の故に、妄憶念の故に、心不定の故に、愚癡の故に、怖畏

【一七】名は爲か。

※住阿蘭若法。

を破するが故に名づけて正命と爲す、二十四には無上道を得るが故に正精進と名づく。二十五には不虛妄法を觀ずるが故に正念と名づく、二十六には一切智慧を得るが故に正定と名づく、二十七には空にたいて怖れず、二十八には無相に於いて畏れず、二十九には無願に於いて沒せず、三十には故に智を以つて身を受く、三十一には義に依つて語に依らず、三十二には智に依つて識に依らず、三十三には了義經に依つて不了義經に依らず、三十四には法に依つて人に依らず。長者よ、是の如き等を名づけて出家の菩薩比丘と爲す。利益の事は應に生ずべし。「阿練若法に隨順す」とは、所謂る四禪・四無量心・天耳・天眼・他心智・宿命智・神通等なり。「諸の怖畏を滅す」とは、是の人、三因緣を以つて能く怖畏を滅す。一には我我所無き法相を見るが故に能く怖畏を除く、二には方便力を以つての故に、三には心膽力を以つての故に能く怖畏を除す。我我所無きを見るとは初地中の所說の如し。五種を除く。「怖畏方便力」とは、此の論中に正思惟・業・果報を念ずるが故に方便力と名づく。應に是の念を作すべし、諸の大國王は深宮殿に在り、象馬・車步・四兵侍衞するも業の因緣盡くれば、亦種種の諸の衰惱事を受く。又業の因緣を守護すとは險道中を行き、大海水に入り、大戰陣に在りと雖も、亦安隱にして患無し。我が先世の業の因緣なり。若しは聚落に在り、若しは阿練若處に在るも、業の因緣は必ず其の報を受く。是の如く思惟し已つて怖畏を除滅す。復た是の念を作す。若し我れ身を守護せんが爲めの故に城邑・聚落に入り、阿練若處を捨つれば能く勝善身業の善・口業の善有ること無し。「想業を守護す」とは、佛、波斯匿王に告げたまふが如し、若し人、身善業を行じ、口善業を行じ、意善業を行ぜば是を名づけて人善く自ら守護すと爲す。是の人若し我れ善く自ら守護すと言はば、是を實說と爲す。大王、是の人、四兵の衞護無しと雖も、亦名づけて善く好く守護すと爲すべし。何を以つての故に、是の如き守護を內守護と名づく、外守護には非ず。是の故に我れ身業の善行・口業の善業・意業の善行を以つての故に名づけて善く自ら守護すと爲す。復

常に應に精勤して、　種種の諸の善法を生ずべし。
大膽心にして我無くんば、　諸の怖畏を滅除す。

「阿練若精進」とは、若し比丘貪を斷じて身命利養を惜まざる故に、晝夜に常に勤精進すること頭然を救ふが如し。身阿練若に隨ふに依る。「覺」とは、所謂る出覺・不瞋覺・不惱覺等の諸の善覺なり。復た次に「佛は是れ正遍知なりと念ず」とは、衆生中の尊なり。佛法は是れ善說なり。弟子衆は正行に隨順す。復た次に空に隨順し、無相に隨順し、無願に隨順する諸覺を阿練若覺に隨ふと名づく。復た次に四勝處に隨順し、六波羅蜜に隨順する諸覺は是を阿練若覺に隨順すと名づく。復た次に佛の[一六]郁伽長者の爲めに在家出家の菩薩行を說くが如し。

若し出家の菩薩阿練若法を受くれば應に是の如く思惟すべし。我は何が故に阿練若處に住するやと。我は但だ阿練若處に住するが故に、名づけて沙門と爲すには非ず。而も阿練若處は多く衆生有り。惡・不善多く、諸根を護らず、精進せず、善法を修習せずんば麞鹿・猿猴・衆鳥・惡賊・旃陀羅等の如くにして、名づけて比丘と爲さず。我れ今何事を爲すが故に阿練若處に住するや。應に其の事を成辦すべし。長者よ、何等をか事と爲すや。一には謂く、念散亂せず、二には諸陀羅尼を得、三には慈心を行ず、四には悲心を行ず、五には自在に五神通に住す。六には六波羅蜜を具足す。七には一切智心を捨てず、八には方便智を修習す、九には衆生を攝取す、十には衆生を成就す、十一には四攝法を捨てず、十二には常に六思念を念ず、十三には多聞を爲すが故に精進を捨てず、十四には正觀して諸法を擇す、十五には應に正解脫すべし、十六には果を得るを知る、十七には正位に住す、十八には佛法を守護す、十九には業の果報を信ずるが故に正見と名づく、二十には一切の憶想・分別・思惟を離るるが故に正思惟と名づく、二十一には衆生の所信に隨つて樂つて說法を爲すが故に名づけて正語と爲す、二十二には諸業を滅するが故に起業を名づけて正業と爲す、二十三には煩惱の氣

◎阿練若に住する果報。

【一六】郁伽長者＝前出。

十利有るを見るが故に、　　常に空閑を捨てず。
疾を問うて法を聽くに及び、　　敎化して乃ち寺に至る。

阿練若處を受くる比丘は、種種の功德を增長すと雖も、略して說くに十利を見るが故に盡形にして應に捨つべからず。何等をか十と爲すや。一には自在に來去す。二には我無く我所無し。三には意の所住に隨つて障礙有ること無し。四には心轉た樂つて阿練若の住處を習ふ。五には住處、少欲少事なり。六には身命を惜まず、功德を具足するが爲めの故に。七には衆鬧語を遠離するが故に。八には功德を行ずと雖も恩報を求めず。九には禪定に隨順して一心を得易し。十には空處に於いて住して無障礙の想を生じ易し。病等を問訊して寺に來至すとは、

若し因緣の事有つて、　　來つて塔寺に在づて住せば、
一切の事中に於いて、　　空閑の想を捨てず。

比丘は盡形阿練若法を受くと雖も因緣の事の至ること有らば則ち塔寺に入る。佛法に通有り塞有り、外道の如きの阿練若に非さるを常に空閑靜處を樂ふと名づく。一切の法に於いて空想を捨てず、一切の法體は究竟皆空なるを以つての故に。

問うて曰く、何の因緣有るが故に塔寺に來至するやと。答へて曰く、一には病人に供給す。二には病の爲めに醫藥の具を求む。三には病者の爲めに看病人を求む。四には病者の爲めに法を說く、五には餘の比丘の爲めに法を說く。六には法を聽いて敎化す。七には大德の者に供養し、恭敬するが爲めに。八には聖衆に供給するが爲めに。九には深經を讀誦するが爲めに。十には他に敎へて深經を讀ましむ。是の如き等の諸因有つて塔寺に來至す。

精進して諸覺を行じ、　　阿練若法に隨つて、
比丘の已に、　　阿練若處に住する者は、

*比丘は戒品を具足し行持せんと欲せば應に二六種の衣を著すべし。十利を見るを以ての故に。何等か十なりや。一には慚愧を以ての故に、二には寒熱・蚊虻・毒虫を障ふるが故に、三には沙門の儀法を表示するを以ての故に、四には一切の天人は法衣を見て恭敬し、尊貴すること塔寺の如きが故に、五には厭離心を以て染衣を著け、好を貪るが爲に非ざるが故に、六には寂滅に隨順するを以て熾然煩惱の爲に非ざるが故に、七には法衣を著くれば惡有るも見易きが故に、八には法衣を著くれば更に餘物の莊嚴を須ひざるが故に、九には法衣を著くれば隨順して八聖道を修するが故に、十には我れ當に精進して通を行ぜば染汚心を以つてせず、須臾の間に於いても壞色衣を著くべし。是の十利を見るを以ての故に應に二種の衣を著くべし。一には居士衣、二には糞掃衣なり。六種とは、一には劫貝、二には芻摩、三には憍絺耶、四には毳衣、五には赤麻衣、六には白麻衣なり。「十利有るを見て形を盡して乞食す」とは、一には用ふる所命を活し、自らに屬して他に屬せず。二には衆生我れに食を施さば三寶に任せしめて然る後に當に食すべし。三には若し我に食を施す者有らば當に悲心を生ずべし、我れ當に勤行精進して善く布施に任せしめんと、作し已つて乃ち食すべし。四には佛の敎行に隨順するが故に。五には滿ち易く、養ひ易し。六には行つて憍慢の法を破す。七には頂善根を見ること無し。八には我が乞食を見て餘の善法を修する者有らば亦當に我に效ふべし。九には男女小與らずして諸の因緣の事有り。十には次第に乞食するが故に衆生の中に於いて平等心を生じ、卽ち一切種智を種ゑ助く。

　佛は食を請ふことを聽るすは、　以つて自ら己を利せんと欲すと雖も、
　亦他人を利するが故なり。　則ち請ふて食を受けず。

「自利」とは、能く諸波羅蜜を具するなり。「利他」とは衆生を敎化して三寶に任せしむるなり。行者は是の如く自ら利し他を利す。

※二六種の衣法。

故に、尸羅則ち盡く。色界の諸天は四禪・四無量、盡くるが故に、尸羅則ち盡く。無色界の諸天は定に隨つて生ずる處盡くるが故に尸羅則ち盡く。諸の學・無學の人は入涅槃し盡くるが故に尸羅則ち盡く。諸の辟支佛は大悲無きが故に尸羅則ち盡く。大德舍利弗よ、但だ諸の菩薩の尸羅のみは盡くること有ること無し。何を以ての故に、菩薩の尸羅より諸の尸羅の差別を出す。因・無盡なるが故に、果も亦た無盡なり。菩薩の尸羅無盡なるが故に、如來の尸羅も亦た無盡なり。是の故に諸の大人の尸羅を名づけて無盡と爲す。

問うて曰く、汝の麁の尸羅を解する時、六十五種の尸羅を說きたり。聲聞の中に八種の尸羅有り、四種は身より生じ、四種は口より生ずと。是の如きの事は何ぞ相違せざることを得んと。答へて曰く、相違せざるなり。何を以ての故に。

尸羅の體に非ずと雖も、　益するが故に名づけて分と爲す。
八種の身口の業は　即ち是れ尸羅體なり。

六十五種の分は尸羅の體に非ずと雖も、而かも身・口の八種の麁を利益する尸羅なるが故に、尸羅分と名づく。凡そ能く利益する所有らば皆名づけて分となす。象・馬・扇・蓋を名づけて、王分と爲すが如し。是の故に禪定・智慧等は尸羅の體に非ずと雖も、尸羅を利益するを以ての故に、亦た尸羅分と名づく。

[一四]解頭陀品　第三十二[一五]

菩薩は是の如く尸羅法を行ず。

十利を見て、　應に二六種の衣法を著すべし。
又十利を見るを以つて、　形を盡して應に乞食すべし。

【一四】此品は十二頭陀を細釋す。

【一五】三十二＝正藏には五に作る。今三本に據る。

を攝心と名づくるが故に、是れ一心の相、諸法を選擇するが故に、是れ惠相なり。尸羅を到空と名づくるは、無相の際に至りて三界に雜せず、作無く、起無く、生忍無ければなり。尸羅を不從と名づくるは、先際來りて後際に至らず、亦た中際に住せざればなり。尸羅を不住心と名づくるは、意識の念と和合せざればなり。尸羅を不依と名づくるは、欲界の色界に依らず、無色界に依らざればなり。尸羅を離貪塵と名づくるは、瞋垢を除き、無明の闇を滅し、常に非ず、斷に非ず、衆緣の生相に違はざればなり。尸羅を離我心と名づくるは、我所の心を捨てて身見に住せざればなり。尸羅を不貪著と名づくるは、名相が名色と和合せざればなり。尸羅を不爲結使と名づくるは、所使の諸纒の爲めに覆はれず、障礙・疑悔の中に住せざればなり。尸羅は貪不善根所に住せず、瞋不善根を過ぎ、痴不善根を斷ずるに名づく。尸羅を無急・無熱と名づくるは、猗心の快樂なればなり。尸羅を不斷諸佛種と名づくるは、故らに法身を破せず、法性を分別せず、故に法種の無爲の相を斷ぜず、故に僧種を斷ぜざればなり。舍利弗よ、是れを諸菩薩最勝無上の尸羅と名づく。

是の如く、尸群は則ち盡すべからず、唯だ諸佛の尸羅を除きては皆な盡くること有るなり。所謂る

凡夫の尸羅より、　後ち辟支佛に至るまで、
是れ皆な盡相有り、　菩薩は則ち盡くること無し。

凡夫より來(このかた)の所有(あらゆる)尸羅は久しく果報を受くと雖も、終に盡に歸す。諸の阿羅漢・辟支佛の所有る尸羅も皆な亦た盡くること有り。菩薩の尸羅のみは我無く、我所無く、一切の所得を離れて諸の戲論を滅す。是の故に盡くること無し。無盡意菩薩尸羅品の中に說くが如し。

諸の凡夫の尸羅は生處に隨ひて盡くるが故に、尸羅則ち盡く。外道は五通も退轉の時盡くるが故に、尸羅則ち盡く。人は十善業道盡くるを以ての故に尸羅則ち盡く。欲界の諸天は福德の盡くるが

づくべし。何を以ての故に、常に修習し、親近し、樂行するが故なり。汝今應に最勝の修習尸羅を說くべし。答へて曰く、

若し我我所無く、　諸の戲論を遠離すれば、
一切に所無し、　是を上尸羅と名づく、

若し內外の法の實相を知らずんば、卽ち尸羅に因つて、憍慢・貪著を生ず。故に諸の罪門を開く。是の故に若し內法に於て我有ることを見ず、外法の中に於て我所を得ず、內外の法は畢竟空にして、所得無しと知り、亦た畢竟空に於て取相戲論せずんば、是れを最勝の尸羅と名づく。何を以ての故に、是の如き尸羅の中に尙ほ心錯する無し、何に況んや身口をや。是の故に諸佛菩薩、第一に能く尸羅を行ずる者は、一切の法の無所得なるに於て名づけて上尸羅と爲す。迦葉經の中に說くが如し。

佛、迦葉に告げたまはく、尸羅を無我・無非我・無作・無所作と名づく。無作とは行無く、不行無く、名無く、色無く、相無く、無相無く、善に非ず、非善に非ず、寂滅に非ず、非寂滅に非ず、取に非ず、捨に非ず、衆生無く、衆生の因緣無く、身無く、口無く、心無く、世間無く、世間の法無く、世間に依らず、尸羅を以て自ら高からず、尸羅を以て人を下しめず、尸羅を以て增上慢を起さず、尸羅を以を此彼を分別せず。迦葉よ、是れを諸の賢聖の尸羅と名づくと。

三界を離れて漏無く、繫無し。無盡意菩薩尸羅品の中に舍利弗に語りたまふが如し。尸羅を不分別と名づく。是の衆生、是れ我なりと說かず、是れ壽者・命者なりと說かず、是れ人なりと說かず、是れ養育者なりと說かず、是れ色陰・受想行識陰なりと說かず、是れ地種・水・火・風種なりと說かず。尸羅を不分別と名づくるは、是れ眼相、是れ色相を分別せず、是れ耳相・色相・鼻相・香相・舌相・味相・身相・觸相・意法相を分別せず。尸羅を不分別と名づくるは、是れ身、是れ口、是れ心なり、尸

受くるなり。二には染心を以て女人の香を聞き、共に語り戲笑するなり。三には染心を以て目もて共に相視るなり。四には障礙有りと雖も、染心を以て女人の音聲を聞くなり。五には先に女人と共に語笑し、後ち相離ると雖も憶念して捨せざるなり。六つには自ら爾所の時を限りて婬欲を斷ずと雖も然も後に當さに作すなり。七つには天上に生じて、天女の樂及び後身の富樂を受けんことを期し、是の故に婬欲を斷つなり。是を不淨と名づく。此の七事を離るゝを戒淸淨と名づく。

*「戒差別」といふは二種有り、一には有漏、二つには無漏なり。三種あり、欲界繫と色界繫と不繫となり。四種あり、正命所攝の二種の正語・正業・正命に攝せざる所に亦た二種の正語と正業となり。五種あり、凡夫戒と菩薩戒と聲聞戒と辟支佛戒と無上佛戒となり。六種あり、欲界の正命所攝の身口は一なり。正命の攝せざる所、一なり。色界繫の正命の所攝の身口の業は二なり。正命に攝せざる所、四なり。無漏の正命の所攝の身口は五なり。正命の攝せざる所は六なり。七種あり、七善業道なり。八種あり、先に說くが如き身の四種と口の四種となり。九種あり、七の欲界繫と、七善業道の二種となり、先に說くが如し。十種あり。道戒の三種と對治戒の三種と、但戒の三種とは是れ九種なり、無漏戒、有漏戒を十と爲す。是の如き等の種々の分別差別あり。

問うて曰く、聲聞乘の中にては身業口業を說いて名づけて尸羅と爲す。此に二の善業を好と名づけ、二の不善業を惡と名づく。是れは善の身口業を尸羅と名づくるなり。此の論の中にては卽ち此れを以て尸羅と爲すや。更に尸羅有りと爲すや。答へて曰く、

但だ身口の業のみを、　之を名づけて尸羅と爲すに非ず。
修・親近・樂行も　亦名づけて尸羅と爲す。

此の三事は一義なり、所謂る修習・親近・樂行なり。

*問うて曰く、若し修習・親近・樂行を以て、名づけて尸羅と爲さば、一切の法を皆な應に尸羅と名

※戒差別。

※修習尸羅。

菩薩清淨の戒は則ち無盡と爲す。

*生戒は處々に說く略して說くに八種生戒有り。四は身より生じ、四は口より生ず。身より生ずるものは、命を奪ふことを離ると、衆生を惱苦することを離ると、劫盜を離ると、邪婬を離るるとなり。口より生ずるものは、妄語と兩舌と惡口と散亂の語とを離るゝなり。是を八と名づく。是の八種戒は受より生ず。是の受の法は、若し身を以てし、若し口を以てし、若し心を以てすれば、受は和合して〔三〕二十四と爲る。敎他受も亦た二十四、隨喜受も亦二十四、修習して行ずる時も亦た二十四なれば合して九十六なり。皆な是れ欲界の繫、是れに從つて晝夜に生ず。何を以ての故に、初の受心已に滅すれば是れ第二の心、晝夜に常に生ず、福德を用ふるも亦た是の如し。所以は何ん。初めの布施の心、滅し已り、第二の心より、後に時を用つて當に生すべきもの是を善身業と名づく。十善業道の所攝なる有り、不攝なる有り欲界の所繫、是の如し。*色界の繫に二種有り。一には身より生じ、二には口より生ずるなり。身より生ずるものは、十不善道を離れ、罪の攝せさる所、口より生ずとは散亂の語を離るゝなり。是の戒は身受・口受・心受を以て、二の三は六と爲り、敎他も亦た六、隨喜も亦た六、習行時も亦た六なれば四の六にて二十四あり。先に說ける九十六を合して百二十と爲す。是の如きは、行に從ふ生戒なり。復た證道の時に戒を生じ、退道の時に戒を生じ、初生の時に戒を生ず。事廣なるを以ての故に今は但だ略して說くなり。

*「戒力」とは波羅蜜增長するに隨つて戒、轉た力を得、所得の地に隨つて戒も亦堅固にして力を得るなり。

*「戒淨」とは、毀壞缺減せさる等先きに說けるが如し。復た次ぎに戒の淨不淨の相に七つあり、梵行の法の中に說く。經說の如し。

七種の婬欲を以て戒不淨と名づく。一には婬欲を斷ずと雖も、而も染心を以て女人の洗浴按摩を

※欲界生戒九十六。

〔三〕八戒を身口意三業に乘ず。

※色界生戒二十四。

※戒力。

※戒の淨不淨。

故に名づけて「名聞戒」と爲す。法の如くに物の中に量を知つて取るが故に名づけて「小欲戒」と爲す。慳貪を斷ずるが故に「知足戒」と名づく。身心遠離するが故に「遠離戒」と名づく。衆閙語を離るゝが故に「阿蘭若戒」と名づく。他の面を覩ず、望むこと所得有るが故に多づけて「具足聖衆戒」と爲す。善根に屬するが故に「細行頭陀戒」と名づく。人天中に生ずるが故に「隨說行戒」と名づく。一切衆生を救ふが故に名づけて「慈戒」と爲す。一切苦を忍ぶが故に名づけて「悲戒」と爲す。心退沒せざるが故に名づけて「喜戒」と爲す。憎愛を離るゝが故に名づけて「捨戒」と爲す。心を降伏するが故に名づけて「自見過戒」と爲す。彼の心を護るが故に名づけて「不錯戒」と爲す。善く戒を護るが故に名づけて「善攝戒」と爲す。衆生を成熟するが故に名づけて「布施戒」と爲す。所願無きが故に「忍辱戒」と名づく。懈退せざるが故に「精進戒」と名づく。禪法を集助するが故に名づけて「禪戒」と爲す。多聞善根にして厭足すること無きが故に名づけて「智慧戒」と爲す。多聞に從つて智慧を得るが故に名づけて「求多聞戒」と爲す。七覺法を集助するが故に「親近善知識戒」と名づく。邪道を捨するが故に「離惡知識戒」と名づく。無常を觀ずるが故に「不貪身戒」と名づく。善根を勤集するが故に「不信命戒」と名づく。深心淸淨なるが故に「不悔戒」と名づく。行淸淨なるが故に「不假僞戒」と名づく。深心にして無垢なるが故に「無熱戒」と名づく。善く業を起すが故に「無憂戒」と名づく。自ら高くせざるが故に「無慢戒」と名づく。染欲を離るゝが故に「不戯調戒」と名づく。心、質直なるが故に「不自高戒」と名づく。心の調和するが故に「有差戒」と名づく。惡心發らさるが故に「調善戒」と名づく。諸の煩惱を滅するが故に名づけて「寂滅戒」と爲す。說の如く行ずるが故に名づけて「隨所敎戒」と爲す。四攝法を行ずるが故に「敎化衆生戒」と名づく。自法を失せざるが故に名づけて「護法戒」と爲す。本來淸淨なるが故に「一切願滿戒」と名づく。無上道に廻向するが故に「至佛法戒」と名づく。心を一切の衆生に等しくするが故に「得佛三昧戒」と名づく。大德舍利弗よ、是れ六十五分なり。諸の

【一〇】阿蘭若＝前出、入初地品第二註參照。
【一一】頭陀＝前出、淨地品第四註、解頭陀品第三十二參照。
【一二】七覺＝淨地品第四註參照。

に住し、究竟して捨せさるなり。此の地の中の慳貪の垢、破戒の垢は遺餘有ること無し。是の故に此の地を名づけて「離苦」と爲す。菩薩は是の如く、慳貪・破戒の心無く、四攝の法の中に於ては愛語偏に利く、六波羅蜜の中には戒度偏に利くして、利名多く行じ、勢力轉た深きなり。

問うて曰く、若し第二地の中には尸羅波羅蜜已に勢力を得。今此の地の中にて、應に尸羅波羅蜜の分・生・力・淨・差別を解説すべし。答へて曰く、

略して*尸羅度を説くに、　六十五分有り、
生・力・淨・差別は、　處々の論中に説く。

尸羅波羅蜜は無量無邊なり。但だ略して説くに、六十五分有り、餘戒の生戒・力戒・淨戒の差別は、論中の先後に處々に相を説けり。寶頂經の中の和合佛法品の中の如し。

*無盡意菩薩、佛前に於て六十五種の尸羅波羅蜜分を説く。尸羅を不惱と名づく。一切の衆生、他物の中に於て、劫盗の想無く、外色に著せず、衆生を誑かさず、眷屬具足するが故に兩舌せず。多くの惡言を忍ぶが故に惡口有ること無し。常に利益の語を思惟し籌量するが故に散亂の語無し。人の樂を喜ぶが故に心に貪取無し。諸苦を忍ふが故に瞋惱有ること無し。餘師を稱譽せさるが故に名づけて正見と爲す。淨心を信ずるが故に佛を信じ、法の眞實を知るが故に法を信じ、賢聖の衆を尊重恭敬するを樂ふが故に僧を信じ、佛を念じて五體を以て地に投じ供養し禮敬す。乃至、小戒をも深心に怖畏するが故に戒は羸弱ならず。餘乘に依らざるが故に戒を毀たず。邪行を離るゝが故に戒缺損せず、惡煩惱を起さゞるが故に「不雜戒」と名づく。畢竟して常に樂つて善法を增長するが故に「不濁戒」と名づく。意に隨つて行ずるが故に「自在戒」と名づく。智者の爲めに呵せられさるが故に名づけて「聖所讃戒」と爲す。常に念に在つて安慧なるが故に名づけて「易行戒」と爲す。一切に過無きが故に「不可呵戒」と名づく。諸根を守護するが故に名づけて「善護戒」と爲す。諸佛の所念なるが

※尸羅の分生力淨。

※六十五種の尸羅波羅蜜。

を以て念佛するに、一切法に於て貪著する所無く、亦た利益を說きたり。三昧は能く果報の勢力を成就す。

問うて曰く、若し菩薩は初地の中に於て、已に其の邊に到つて能く諸佛を見、初めて第二地に入りて即ち應さに諸佛を見るべしといはば、云何が言ふ、乃し第二地の邊に至つて乃ち諸佛を見たてまつると。若し然らば、第二地に入り、初・中に應に此の三昧を失ひ、後に至りて乃ち得るなるべしと。答へて曰く、初め第二地の中に入りて亦た諸佛を見、亦た是の三昧を退失せず汝能く偈義を解すること能はざるが故に此の難を作すなり。第二地の初中には但だ百種の佛を見るのみ。乃し其の邊に至つて百種千種の佛を見ることを得、諸佛を見たてまつり已りて、心、大いに歡喜し、佛法を得んと欲す。故に勤行精進するなり。

即ち能く四事を以て　　諸佛を供養したてまつらば、
能く諸佛の所に於て、　　復た十善[九]道を受く。

「四事」とは衣服・飮食・臥具・醫藥なり。餘の義は則ち知るべし。

是の如きの行を作し已り、　　佛に從つて善道を受く、
百千萬劫に至りて、　　毀たず、亦た失はず。

「毀たず」とは戒をして羸弱ならしめざるなり。或ひは清淨の事を以て「毀たず」と名づく。都て復た行ぜざるを名づけて「失はず」と爲す。是の菩薩、是の如く初地を過ぎて第二地に入り已る。說くが如し。

善く慳貪の垢を離れて　　清淨の捨を行ずることを樂ふ。
善く慳貪の垢を離れて　　深く清淨の戒を愛す。

「清淨」とは但だ善心を以て捨を行じ、諸の煩惱を雜へざるに名づく。「深く愛す」とは、堅く其の中

【九】善＝正藏には業に作る。今三本に據る。

と爲り、五欲の深林に入りて、喜染の著吹する所と爲り、我慢の陸地に在り、甚だ憐愍すべし。洲も無く、救ひも無く、[六]六入の空聚落に於て能く動發すること能はず、善く度する者なきなり。是の如きの衆生、我れ今應に大悲牢堅の智慧の船を以て、諸の安隱、無怖畏なる一切智の洲に載せ至らしむべし。是の諸の衆生の苦多きこと愍むべし。生死・憂悲・苦惱の牢獄に閑在し、多く貪恚愛憎を懷き、[七]四顚倒に墮し、[八]四大毒蛇の爲めに害せられ、五陰怨家の爲めに殘せられ、喜染の詐賊に陷られ、六入の空聚に在て世量の苦惱を受く。我れ應に其の生死の牢獄を破りて、自在、無礙なる涅槃の安隱、快樂を得せしむべし。是の諸の衆生、甚だ憐愍すべし。狹劣・小心にして、少利を樂しみ、縮沒して一切智心有ること無し、設ひ出づること求むる者も、則ち聲聞・辟支佛乘を樂ふ。我れ應に大心を得しめ、佛の廣大の法を樂はしむべしと。

菩薩是の如く行ずれば、　則ち持戒力を得、
善く善を業起すことを知る、　增長することを得せしむれば、
是れ則ち佛子と爲りて、　深く離垢地に入る。

「持戒力」とは一心清淨にして、十善道を具足するなり。戒は則ち福德力を修集することを得るの力なり。「能く善業を起す」とは、能く自ら增長を生ずることを知るなり。「善道も亦た他の衆生をして深く入らしむる」とは、所行轉た遠く、其の邊底を盡くすなり。「佛子」とは、能く法に隨つて行ずるを名づけて佛子と爲す。初地に於て始めて生じ、二地に至つて增長す。是の菩薩、應に是の如く勤行精進すべし。

菩薩若し離垢地の　邊際に至ることを得たらんには、
爾の時則ち　百種の佛を見ることを得ん。

初地の中に已に般舟三昧の見現在佛助三昧法を說きたり。所謂る三十二相・八十種好・四十不共法

の思惑なり。無明流は總じて三界の愚癡を云ふ。之を四流といふ。
【六】 六入＝大乘品第三十參照。
【七】 四顚倒＝序品第一註參照。
【八】 四大＝地水火風。

資生の所須、或ひは信戒等の諸の功德を具せざるが故に名づけて少と爲すなり。餘の句は解し易し、偈の中に說く所の如し、復た釋を須たず。是の如く思惟し已らば、衆生甚だ愍むべし、二乘に墮在することを、我れ當さに爲めに願を發して、大乘に住せしむべしと。是の事此の如し、十地經の中に金剛藏菩薩自ら說く、是の菩薩は十不善業道を離る。亦た衆生をして十善業道に住せしめ、衆生の爲めに深く勝心・好心・樂心・憐愍心・慈悲心・利益心・守護心・我所有心・大師心・攝取心・受取心を求め、是の念を作さく、此の諸の衆生甚だ憐愍す可し、種種の邪意邪見に墮して、邪なる險道を行く。我れ今應さに眞實正見の道中に住在せしむべし。是の諸の衆生の種類同じからず、互に相諍競し、常に忿恚を懷き、瞋惱熾盛なり。然るに我れ當さに無上の大慈に住せしむべし。是の諸の衆生厭足有ること無く、他の利を貪求して邪命に自活す。我れ當さに淸淨の身口意業に住せしむべし。是の諸の衆生は貪欲・瞋恚・愚癡・因緣の中に在り、常に種々の煩惱・結使を起して、而かも方便もて自ら出でんことを求欲せず。我れ當さに諸の苦惱の事を滅して、無苦惱の處に住せしむべし。是の諸の衆生、無明の爲めに翳せられ、黑闇の稠林に入りて、自ら出離すること能はず。智慧明かに諸見の險惡道の中に入在して、我れ應に之を救ひ、無礙の智慧の眼を得せしむべし。是の惠眼を以て、他人に隨はず、一切の法に於て如實の相を知る。是の諸の衆生、生死の長流に墮在し、地獄・畜生・餓鬼・阿修羅坑に墮し、邪曲の網の中に入らんと欲す。種々の煩惱の惡草に覆はれ、導師有ること無く、出心を生ぜず、道を非道と言ひ、非道を道と言ふ。魔民、怨賊常に共に隨逐して善師有ること無く、魔意に隨順して佛法を遠離す。是の如きの衆生、我れ應に此の諸の生死險惡の道を度りて、無畏無衰の一切智慧の城に住することを得せしむべし。是の諸の衆生、欲流・[五]有流・見流・*無明流の爲めに漂はされ、種々罪業の濤波に覆はれ、愛河に沒在して生死の波浪に隨ふ。洄澓の爲めに轉ぜられ、自ら出づること能はず。欲覺・瞋覺・惱覺の鹹水の爲めに淹爛し、身見羅刹の執持する所

【五】見流は總じて三界の見惑を云ふ。欲流は無明を除く餘の欲界の思惑にして、有流は無明を除く餘の色、無色界

べし、諸法の實相を知らず、故に多く妄想を行じて、諸の邪見を生ず。邪見に因るが故に、諸の煩惱を起す。煩惱に因るが故に、而かも諸の業を起す。業因緣を起すの故に、生死に輪轉す。我れ先に發心して、阿耨多羅三藐三菩提を求む。衆生を度せんが爲めの故に、當に正見を說くべし。是の諸の衆生は是れ我が度すべきもの、今當に爲めに正見を說き、眞道に入らしめて、度脫を得せしむべし、と。是の如く念じ已つて、諸の衆生に種種の煩惱有ることを知る。所謂る

所起の煩惱　及び諸の煩惱垢を觀ずる、
種種の黑惡業は、　種種の苦惱を受く。
諸の衆生を愍念するに、　多く闕少する所有り。
種種に觀察し已つて、　是れ皆な我が有なるが如くで、
即時に悲心を以て、　方便して大願を發す、
如何が衆生をして是の諸の苦を、　滅することを得せしめん。

「煩惱」、「煩惱垢」とは、使の所攝を名づけて煩惱と爲し、纏の所攝を名づけて垢と爲す。使の所攝の煩惱とは貪・瞋・慢・無明・身見・邊見・見取・戒取・[二]邪見・疑なり。是の十根本は三界の[三]見諦、思惟に隨つて斷ずる所の分別なり。故に[四]九十八使と名づく。使の所攝に非るは不信・無慚・無愧・諂曲・戲悔・堅執・懈怠・退沒・睡眠・佷戾・慳嫉・憍・不忍食・不知足なり。亦た以て三界の見諦、思惟の斷ずる所の分別なり。故に一百九十六の纏垢あり。人有りて言く、煩惑は深心に在り、垢は淺心に在りと。人有りて言はく、諸の障蓋を名づけて纏垢と爲す、餘は皆煩惱と名づくと。「黑惡業」とは即ち是れ七不善業道及び貪取・瞋惱・邪見相應の思なり、能く苦報を生ず。「種種の苦惱」とは身中の種種の惡事を名づけて苦と爲し、心中の種種の惡業を名づけて惱と爲す。又今世の苦を名づけて苦と爲し、後ち惡道に墮するを名づけて惱と爲す。「多く少くる所有り」とは、或ひは諸根、支體、或ひは

【二】邪見＝身見より邪見に至るを五邪見といふ。大乘品第三十註參照。
【三】見諦＝四諦の理を見ること。
【四】九十八使九十八隨眠のこと。見思二惑の總數。

盜不善行に二種の果報有り、一つには貧窮、二つには財を失ふなり。邪婬不善行に二種の果報有り。一つには醜惡の妻婦を得、又貞良ならず、二つには他の爲めに壞せらるゝなり。妄語不善行に二種の果報有り、一つには人は謗毀せられ、二つには人の爲めに欺誑せらるゝなり。兩舌不善行に二種の果報有り、一つには惡眷屬を得、二つには眷屬壞すべし。惡口不善行に二種の果報有り、一つには耳に惡聲を聞く、二つには常に鬪諍すること有るなり。散亂語不善行に二種の果報有り、一つには語りて信受せられず、二つには言ふこと本末無きなり。貪取不善行に二種の果報有り、一つには足ることを知らず、二つには多欲にして厭ふことなきなり。瞋惱不善行に二種の果報有り、一つには惡性、二つには衆生を惱ますことを喜ぶなり。邪見不善行に二種の果報有り、一つには其の心、諂曲、二つには邪見に墮在するなり。

已に法を愛樂することを知り、　法に於て心動ぜず、
諸の衆生の中に於て、　慈悲心轉た勝れたり。

「愛法」とは但だ法を愛して、更に勝事無きなり。此の中の法とは先きに說ける十善業道なり。「樂法」とは但だ法を樂しみて、更に餘事無きなり。「法に於て心動ぜず」とは、乃至命を失ふとも終に法を捨てざるなり。菩薩は是の如きの法を行じ、衆生の中に於て慈悲轉た勝れたり。初地の中にも慈悲有りと雖も此の地に及ばず、罪福の業因緣に通達するを以ての故に。衆生の皆な業に屬して、自在を得ざるを愍むべし。則ち瞋恨・憎恚の心無し。是の如きの行は慈悲轉た勝れたり。是の念を作すらく、

咄なる哉、諸の衆生、　深く邪見に墮せり。
我れ應に正見を說きて、　正道に入ることを得せしむべし。

菩薩は罪福の業因緣に通達すれば、諸の衆生に於て深く慈悲を行じて、是の念を作す。衆生愍む

卷の第十六

護戒品　第三十一

是の菩薩是の如く諸の善道を行ず。

善・不善の道に於て、　總相及び別相の、
各各に分別して知るに、　二種の果報有り。

「十善業道の總相の果報」とは、若しは天上に生じ、若しは人中に生ずるなり。別相の果報とは、殺生を離るゝ善行に二種の果報有り。一つには長壽、二つには少病なり。劫盜を離るゝの善行に二種の果報有り。一つには大富、二つには獨り財物を有するなり。邪婬を離るゝの善行に二種の果報有り。一つには妻婦貞良、二つには外人の爲めに壞せられざるなり。妄語を離るゝ善行に二種の果報有り、一つには人の爲めに誹毀せられず、二つには人の爲めに欺誑せられざるなり。兩舌を離るゝの善行に二種の果報有り、一つには好き眷屬を得、二つには人の爲めに壞せられざるなり。惡口を離るゝの善行に二種の果報有り、一つには意に隨つて所樂の音聲を聞くを得、二つには鬪諍有ること無きなり。散亂の語を離るゝの善行に二種の果報有り、一つには人其の語を信受す、二つには所言、決定するなり。貪取を離るゝの善行に二種の果報有り、一つには知足、二つには少欲なり。瞋惱を離るゝの善行に二種の果報有り、一つには所生の處に在つて常に他の好事を求む、二つには衆生を惱害することを喜ばざるなり。正見の善行に二種の果報有り、一つには諂曲を離る、二つには所見清淨なるなり。

十不善道も亦是の如し。「總相の果報」とは上行は地獄に墮し、中行は畜生に墮し、下行は餓鬼に墮すなり。別相の果報とは、殺生不善行に二種の果報有り、一つには短命、二つには多病なり。劫

【一】此の品は第二離垢地の主なる行相としての護戒を說く。

※十善各各二種果報あり。

※總別相の果報。

是の故に功德藏たる　　諸佛を世尊と名づく。

是の如きの功德成就せば、十善業道は能く菩薩をして阿耨多羅三藐三菩提に至らしむ。是の故に佛道を求むる者は、應に是の如く十善業[三七]道を修すべし。

【三七】道＝正藏には缺く今三本に據る。

可作及び易作は　　自ら己身に屬す。
無量の大功德あつて、　　疾く利益を得果す。
智者は是の如く知つて、　　後に過咎有ること無し。
應に勤精進を加へて　　是の如き事を作すべし。

「一切種清淨、一切勝處來」とは、五の因緣を以ての故に諸の勝處、一切種清淨なり。一には深心清淨、二には廻向清淨、三には自ら說の如く勝處を行じ、四には他人をして行ぜしめ、五には諸の勝處相違の法、所謂る妄語・慳貪・戲調・愚癡を離るるなり。說くが如し。

菩薩深淨心もて　　諂曲を遠離し、
皆四勝處を以て、　　佛道に廻向し、
先づ自ら善法を修し、　　後に他人をして行ぜしむ。
菩薩は是の如くんば　　四勝處清淨なり。

*「十善道能く十力世尊に至らしむ」とは、是の如く十善業道を修習すれば、能く人をして十力に至らしむ。[三六]「十力」とは、名づけて正遍知と爲す。「正遍知」とは、則ち是れ佛なり。五の因緣を以ての故に世尊と名づく。一には過去世の疑ひを斷じ、二には未來世の疑ひを斷じ、三には現在世の疑ひを斷じ、四には過三世法の疑ひを斷じ、五には不可說法の疑ひを斷ず。說くが如し。

無始の過去世に、　　通達して疑ひ有る無し。
無邊の未來世に、　　通達して疑ひ無きを知る。
十方に邊有ること無く、　　現在一切世、
三世を出過せる　　無爲微妙の法と、
十四の不可說も　　亦通じて疑ひ有ること無し。

※世尊と名づくる五因緣。

【三五】　十力＝入初地品第二參照。

多聞正論より生じて、　惠命を貪るが故に、
命を失ふ時罪惡を、　起さんことを怖畏す。
又、一切の人を見るに、　死生*を脱する者無し。
財智、方便力を以て　免る可らず。
善法を修集する者は、　何ぞ是命を惜むことを得んや。

「一切事中の上」とは、若し人所作有るの事、必ず能く究竟するを、是を上と名づく。菩薩は五事を以て發すれば必ず究竟を得、一には財物、二には布施、三には持戒、四には修定、五には道德なり。說くが如し。

勤求して財利を聚め、　慇懃に布施を行ず。
次第に淨く持戒し、　精進して禪定を求む。
種種の方便を行じて、　八道解脫を生ず。
是を諸事中と名づけ　之を名づけて[三四]上人と爲す。

*「所作に過咎無し」とは、是の菩薩の作す所は智者呵せず。五の因緣を以ての故に所作に過無く、智者呵せず。一には作す可き事を作し、二には大果利あり。三には法を壞せず。四には次第に過無し、五には大名聲あり。說くが如し。

先づ種種に籌量し、　自ら作し易き事を作し、
是の事の得らるるより　無量の大果利あり。
善法を妨げず。　作し已て惡[三五]隨無し。
善人の讚歎する所、　名聞廣く流布す。
智者所起の業を、　名づけて過咎無しと爲す。

※生＝正藏は王に作る。今元明二本に據る。

※一切所作に過咎なき五因緣。

【三四】　上人＝後世高德を上人といふの典據の一。序品第一註參照。

【三五】　隨は墮か。

を貪せず。一には樂無常なること水泡の如く、二には世樂は苦に變じ。三には衆緣より生ずるが故に、四には渇愛より起るが故に、五には少樂は蜜滴の如きが故なり。說くが如し。

樂少に住するにと泡の如く、　苦に變ずること毒食の如し。
〔三二〕三合は觸より有り、　貪欲癡の故に生ず。
若し貪愛を離るれば、　更に別に樂有ること無く、
枯井蜜滴の如くんば、　樂少にして而も苦多し。
衆生を利益する者は、　應に著有るべからず。

「無量に及ぶ身命」とは、菩薩は五の因緣を以ての故に身を貪惜せず。一には身は先世より來らず。二には去つて後世に至らず。三には堅牢ならず、四には是の身に我無し。五には我所無し、說くが如し。

汝の身は衆穢の聚なり。　不淨遍く充滿せり。
先世より來らず、　持して後世に至らず。
久く好く供事すと雖も、　而も大恩分を破す。
是身堅固ならず、　沫の久しからずして壞するが如し。
緣生にして定性無し。　性無ければ自ら在らず。
是の故に應に知るべし。　我に非ず、我所に非ず。
是の身に無量の過あり。　應に貪惜有るべからず。

菩薩は五の因緣を以ての故に壽命を貪惜せず。一には〔三三〕慧命を樂ふが故に、二には罪を怖畏するが故に、三には無始生死の中の無量の死を念ずるが故に、四には一切衆生と與に受くるが故に、五には免る可らざるが故なり。說くが如し。

〔三二〕三合＝惑業苦の三か。

※壽命不貪惜の五因緣。
〔三三〕慧命＝智慧は佛の壽命なるを以て、正法に依る正慧を慧命といふ。

※「勤精進」とは、五事の中に於て勤行精進するなり。一には未生の惡法を生ぜざらしめんが爲の故に勤行精進す。二には已生の惡法を斷滅せんが爲めの故に勤行精進す。三には未生の善法をして生ぜしめんが爲めの故に勤行精進す。四には已生の善法を增長せんが爲めの故に勤行精進す。五には世間事中の所作有るに、能く障礙すること無きが故に勤行精進す。說くが如し。

已生の惡法を斷ずること、　猶し毒蛇を除くが如し。
未生の惡法を斷ずること、　預め流水を斷ずるが如し。
善法を增長すること、　甘果の栽に漑ぐが如し。
未生の善を生ぜんが爲めには、　木を攢みて火を出すが如し。
世間善事の中、　精進して障礙無し。
諸佛、是の人を說いて　名づけて勤精進のものと爲す。

「堅心の衆生を化す」とは、若しは菩薩、五乘中に於て衆生を敎化する時、供養・輕慢・憎愛・怖畏・苦樂・疲極等の事の中に其の心轉ぜず。是を堅心の衆生を化すと名づく。「五乘」とは、一には佛乘、二には辟支佛乘、三には聲聞乘、四には天乘、五には人乘なり。說くが如し。

應に一心一切の　諸の力勢を以て、
種種の方便に依り、　憎愛の心を離れて、
諸の衆生を敎化し、　垢を離れて心淸淨なれば、
無量世に得難き、　無上乘を得しむべきが如し。
若し人、勢力無く、　大乘に住するに堪へずんば、
次に辟支佛、　聲聞、天人乘を敎へよ。

※「自樂を貪せず」とは、所謂る一切の諸の樂に著せざるなり。菩薩は五の因緣を以ての故に、自樂

※勤精進の五事。
※自樂不貪の五因緣。

若し根賊の爲に牽かれ、　人をして悪道に墮せしめ、
又、天人の中に墮して、　涅槃に至ることを得されば、
今此の諸根は賊なり。　何ぞ慚愧、正念、
及び智慧を以て、　諸根の賊を摧破せざらん。
譬へば世間の人　軟語・欺誑、
賊物及び刀矟を以て、　此の四を以て賊を除くが如し。
此の五陰を以ての故に、　生・老・病・死を受け、
亦大怖畏に墮し、　諸の急苦惱を得。
五陰の因緣の故に、　憂悲し及び啼哭す。
五陰の因緣の故に、　種種の諸苦を受く。
是の故に汝當に知るべし、　應に知見の法を以て、
此の五陰を摧破すること、　猶ほ怨賊を破するが如くすべし。

*「堪受」とは、心志の力強くして大人の相有り、事を見ること深遠なるなり。五の因緣を以ての故に名づて堪受者と爲す。一には所願の事成るも其の心高からず。二には所願、成らざるも其の心下からず。三には苦惱己を切むれども其の心動ぜず。四には變事身に加ふれども心亦異ならず。五には其の心深遠にして若しは瞋、若しは喜、知ることを得べき事難し。説くが如し。

身心に新に苦至るも、　其の意、亦動ぜず。
隨意の樂事至るも、　大智の心異ならず。
若し瞋・喜・怖畏、　他人是の如き深心の相を
測ること能はず。　是を堪受者と説く。

※堪受者の五因緣。

五。には五陰の賊を破するが故なり。說くが如し。

惡魔、兵衆を起し、　道樹にて佛を害せんと欲し、
常に佛に便りを求め、　聽者の心を撓亂す。
佛日、世間に出づれば、　魔請ひて涅槃せしむ。
常に受學の者を亂し、　解脱道を破す。
乃至今日に於て、　其の心猶ほ息まず。
是の涅槃を憎む者は、　善人の大賊なり。
應に戒・定・慧を以て　魔力の怨を摧破すべし。
自ら智慧有りと謂ひ、　常に佛を輕慢し、
種種の因緣を以て、　佛法を滅せんとするが故に出で、
常に佛の弟子を憎み、　自ら失し他を教へて失せしむる、
是の諸の外道の輩は、　世間の大賊なり。
當に無瞋の心を以て、　應に多聞慧、
及び大心力を以て、　外道の怨を摧破すべし。
煩惱力、業を起し、　輪轉して惡道に墮す。
煩惱の力、障ふるが故に、　大道を行ずること能はず。
煩惱の力を以ての故に、　種種の邪見に墮す。
煩惱の力を以ての故に、　甘露の道を行ぜず。
是の因緣を以ての故に、　煩惱最も大賊なり。
正念定慧を以て、　此の煩惱賊を破すべし。

を以ての故に應に正法を[三〇]愛護すべし。一には諸佛の恩を報ずる事を知るが故に、二には法をして久住ならしむるが故に。三には最上の供養を以て諸佛を供養するが故に、四には無量の衆生を利益するが故に、五には正法第一にして得難きが故なり。說くが如し。

若し人諸佛所愛の事を、　施作せんと欲するに、
亦法をして久住せしめば、　上を以て佛を供養すとなす。
若し衆生の重病を、　療治せんと欲せば、
亦諸の世尊は苦に從つて　是の法を得を知る。
是の因緣を以ての故に、　法の難得たるを知る。
是の故に有智の者は、　應に法を愛護すべし。

是の中に於て五の因緣を以ての故に、名づく愛護正法と爲す。一には說く所の如く行じ、二には他人をして法の如く行ぜしめ、三には佛法の刺棘を除破するが故に、四には四黑印を離れ、五には四大印を行ず。說くが如し。

自ら佛法の中に於て、　佛の所教の如く住し、
悲心にして法を悋まず、　亦他をして住することを得せしむ。
又、魔衆及び　外道の論師を破す。
若し佛法を憎む者は、　無瞋の心を以て破し、
四黑印を遠離し、　[三一]四大印を受行す。
是の如くんば則ち名づけて　正法を愛護すと爲す。

*「勇健」とは、菩薩、五の因緣を以ての故に名づけて勇健と爲す。一には魔賊を破するが故に、二には外道の賊を破するが故に、三には煩惱の賊を破するが故に、四には諸根の賊を破するが故に、

【二九】愛＝正[illegible]は受なるも今三本に據る。以下之に准ず。
※正法愛護の五法。
【三〇】四大印＝前出。
※勇健の五因緣。

滅禪定の中に於て、　自舍に入出するが如し。
一切の淨・不淨、　心に隨ひて而も能く轉ず。
命、他の爲に害せられず、　自緣も亦無盡なり。
是の如き等の自在、　一切の法も亦爾り。
是の故に人師子を、　名づけて自在者と爲す。

「能く惡意を破す」とは、所謂る正道を遠離せる凡夫、[二四]九十六種外道等なり。「略して惡意を說く」とは、五陰を我と爲すと說き、或は我に五陰有りと言ひ、[二五]或は五陰の中に我有りと言ひ、或は我中に五陰有りと言ひ、或は五陰を離れて我有りと言ふ。說くが如し、

若し五陰是れ我ならば　卽ち斷滅に墮すと爲す。
則ち業因緣を失ふ。　功にして解脫する無し。
餘殘[二六]四種有り。　異陰、相有ること無く、
相無ければ法有ること無し。　皆應に是の如く破すべし。

復次に[二七]五邪見を名づけて惡意と爲す。所謂る邪見・身見・邊見・見取・戒取なり。說くが如し。

因果を破するは邪見なり。　二十種の身見、
有見及び無見、[二八]　下事以て最と爲し、
但だ戒力を以ての故に、　而も解脫を得ん。
先の一異の破の如く、　此見も是の如く破す。
正意八道破を　說いて解脫を得と名づく。

「諸佛の正法を守護す」とは、若し人能く諸佛の所敎の法、所謂る[二九]十二部經を守護し、以て其の心に能く信じ、能く受くれば、十善業道は能く此人をして阿耨多羅三藐三菩提に至らしむ。五の因緣

【二四】九十六種外道＝經論中、印度外道の總數を擧ぐるに、九十五種とするものと九十六種とするものとあり、普通に九十六種とするは佛敎中の一派（犢子部）を加ふるためと傳ふ。

【二五】五陰と我との關係につき五異見を列擧す。

【二六】四種＝五異見中の二、三、四、五をいふ。

【二七】五邪見＝五見とは身・邊・邪・見取・戒禁取の五なり。一に身見とは無我なるを知らずして自我を所有すと執着する我見・我所見をいふ。二に邊見とは自我の執着を起し、自我の死後も永續するか、斷無なるかの一邊に偏る見解をいふ。三に邪見とは道德上の因果を撥無して善の價値を認めず、惡の恐るべきを顧みざる謬見をいふ。四に見取見とは劣なる智見・或は其他の劣事を取りて勝れたる見解なりとする斷見をいふ。五に戒禁取見とは邪道を執して生天（未來の幸福）或は涅槃の因行となす誤解を言ふ。

【二八】十二部經＝九分敎（念佛品第二十註）に阿波陀那、闍他伽、優婆提舍の三部を加ふるをいふ。

切の法を證するが故に、四には墮落の者を攝取し、五には已墮落の者を能く之を拔濟す。說くが如し。

佛の教への比無きを尊び、　佛子四八
及以六三種有り。　諸天の師と爲るに堪へたり。
佛は智慧の眼を以て、　諸法を現前に見たまふ。
逆惡にして善根を斷じ、　及び諸の破戒等の、
是の如きの墮落の人を、　攝取し、濟度す。
若し人、佛力自在の中に、　於て遍行せば、
涅槃及び天福、　常に此の人の手に在り。

*是の中に於て、諸佛は佛力を以て能く五種の事を爲したまふ。一には衆生をして聲聞乘を學ばしめ、二には衆生をして辟支佛乘を學ばしめ、三には衆生をして大乘の法を學ばしめ、四には力具足する者をして解脫を得せしめ、五には劣なる者をして世樂に住せしむ。說くが如し。

諸佛は神力を以て、　衆生をして厭離せしめ、
或は小乘、中乘及び　大乘を學はしめたまふ。
有力具足の者は、　其をして解脫を得せしめ、
力不足の者は、　天に生じて世樂ならしむ。

「自在」とは、諸佛五事の中に於て自在なり。一には諸佛の神通自在、二には自在の中に自在を得、三には滅盡の中に自在を得。四には聖如意の中に自在を得。五には壽命の中に自在を得。說くが如し。

飛行等の自在、　自心に自在を得。

※佛力の五種。

※五事自在。

若し一惡人を捨つれば、　則ち佛恩に背くと爲す。
是の故に惡衆生も、　應に中に於て捨つ可らず。
若し人、無量　阿僧祇劫の中に於て、
修集するところの佛道は、　大悲を根本と爲す。
若し貪欲の心、　瞋恚・怖畏の心を以て
一にも度す可き者を捨つれば、　是れ佛道の根を斷ずるなり。

是の故に善業道は能く捨てざる者をして、阿耨多羅三藐三菩提に至らしむ。「深樂佛慧」とは、若し人、深く佛慧を樂はば、便ち疾く阿耨多羅三藐三菩提を得。五の因緣を以ての故に深く佛慧を樂ふ。一には佛慧は與等無し。二には佛智能く人をして世中の尊と爲らしむ。三には佛は佛智を以て自ら其の身を度す。四には佛智亦他人を度す。五には佛智は是れ一切功德の住處なり。說くが如し。

諸佛の智慧、　天上及び世間、
一切與に等しき、無し。　何に況や勝るを得んや。
諸佛は此の智を以て、　天、阿修羅、
一切世間の人の爲に、　恭敬して禮を作す。
佛は智を以て自ら度し、　亦他人を度したまふ。
若し是の佛智を得ば、　是れ功德藏の者なり。

「諸佛の力及び自在法中に於て盡遍行を樂ふ」とは、遍行とは久習に名づく。一切の行力を十種の智力と名づく。自在を隨意所作に名づく。若し人、深く佛の十力及び自在の法の中に盡く遍行せんことを樂はば、是の如きの人は阿耨多羅三藐三菩提を久しからずして疾く得ん。五の因緣を以ての故に盡遍行を樂ふ。一には諸佛の教勅を尊重し、二には諸佛は大弟子を有するが故に。三には身に一

利衰等の[三]八法は、　世に處して必ず應に受くべし。
亦過去世を念じ、　空しく無量苦を受く。
何に況や佛道の爲めに、　當に受けざるべけんや。

「一切を捨せず」とは、或は衆生有りて第一弊惡にして功德有ること無く、利益すべからず。菩薩、此に於て捨心を生ぜず、問うて曰く。若し是の惡人度す可からずんば、云何が捨せざると。答へて曰く。五の因緣を以ての故なり。一には小人の法を賤むが故に、二には大人の法を貴ぶが故に、三には諸佛を誑(たぶらか)すを畏るるが故に、四には恩を知るが故に、五には是の世間の事の爲の故に世間を出づ。說くが如し。

衆生を度せん欲すが故に、　心を生じ重擔を持す。
惡怨賊の中に於て、　心常に應に捨つべからず。
小を賤み大人を貴ぶ。　是の小大の差別あり。
應に衆生の中に、　愍憐の心を還息すべからず。
諸の急難の中に於て、　無事に而も利益し、
重擔を擔ふ時、　而かも中に懈廢せず。
若し無上心を發したるに、　或は衆生を捨つる有り、
若しは自心に疲苦し、　及び惡人に害せらるれば、
即ち十方三世の佛を　欺誑すと爲す。
諸佛、世中の尊は、　衆生を利益せんが爲に、
種々の苦行を行じ、　佛道を修集す。
佛は恒沙劫に於て、　樂を捨て、福業を作す。

【三】八法＝一に利、二に衰、三に毀、四に譽、五に稱、六に譏、七に苦、八に樂をいふ。

衆生を利するが爲の故に、　次第に是の法を說く。
自利及び利他、　種種の功德を說き、
亦諸の佛子、　所樂の十種の地を說く。
大乘を求法する者、　是の如く次第に度す。

「引導」とは、衆生所樂の門に隨ひ、是の門を知り已りて、是の門を以て衆生を引導するに其の所樂に隨ひ、其の勢力に任せて、而も得度せしむ。說くが如し。

或は諸の衆生有つて、　深經書、
難事及び工巧、　呪術、愛語、
善財及び資財、　布施・戒・定・慧を以て
是の如く籌量し已つて、　引來して大乘に入る可し。
或は女身を現じ、　諸の男子身を引導し、
復た男子身を現じて、　女人を引導す。
五欲の樂を示［三］現し、　然る後、欲の過を說き、
而して一切の人をして、　五欲を離るゝ事を得せしむ。

善く是の五事を行ずる、是れを菩薩、善く方便を受行すと名づく。「能く苦惱を忍ぶ」とは、若しは人有つて算數劫を過ぎ、生死の中に於て能く諸の苦惱を忍ぶなり。十善業道、能く此人をして阿耨多羅三藐三菩提に住せしむ。

問うて曰く、一切の人、皆樂を樂ひ、苦を惡む。是の人云何が能く苦惱を忍ぶやと。答へて曰く。五の因緣を以ての故なり。一には無我を樂み、二には空を信樂し、三には世法を籌量し、四には業の果報を觀じ、五には過算數劫に唐しく苦惱を受くる事を念ず。說くが如し。

無我空法を樂ひ、　又業の果報を知る。

【三】現＝正藏には衆に作るも今三本に依る。

に十種願、次に十究竟、次に菩提心を退失することを遠離するの法を讃歎す。次に菩提心を退失せざるの法を修集す。次に堅心、精進、次に堅固、堪受、次に堅誓、復次に初に能く諸地を得るの法を說く。次に能く諸地に住するの法を說き、次に能く諸地の底を得るの法を說き、諸地の垢を遠離するの法を說き、次に能く淨地を作すの法を說き、次に諸地久住の法を說き、次に能く諸地の邊に到るの法を說き、次に能く諸地を退失せざるの法を說き、次に諸地の果を說き、次に諸地の果の勢力を說く。復次に或は初に[二]歡喜地を說き、次に離垢地を說き、次に明地を說き、次に炎地を說き、次に難勝地を說き、次に現前地を說き、次に深遠地を說き、次に不動地を說き、次に善慧地を說き、次に法雲地を說く。說くが如し。

初に施、次に持戒、　果報天に生ずることを得。
無常の在家は過にして、　出家を大利と爲す。
次に無上の四諦は、　結を斷じ、四果を證す。
是の方便の次第、　人をして初乘に住せしむ。
初に生死の過を說き、　次に涅槃の利を說く。
諸根を守護し、　持戒及び禪定、
他の智慧に隨はず、　功德獨處を樂ひ、
自に依り、他に依らず。　樂うて自ら利樂を求め、
亦他人を捨てず。　深く頭陀法を行ず。
其の中乘を求むる者は、　敎法相是の如し。
四十の不共を以て、　佛の無量の德を說き、
亦菩薩、時に　一切所行の法を說く。

【二】十地の名は序品第一參照。

先づ其の意を知り已りて、　漸く佛意に住せしむ。
遍く世間の事を知り、　自らも利し他を利す。
若し能く是の如くんば、　說きて善方便と名づく。

「轉じて道に入る事を知る」とは、能く外道凡夫の意を轉じて佛道に入らしめ、亦衆生の惡事を轉じて善事の中に住せしめ、亦知りて聲聞辟支佛道を轉じて大乘の中に入らしめ、已に佛法に在る者をば外道に入らしめざるなり。先づ是の事を知り已つて隨順して修行す。說くが如し。

若し人、衆生をして、　外道の法及び諸の
不善の者を遠離して、　佛の上寂滅に入らしむ。
若し諸の衆生の、　上中下の心を知り、
知り已りて能く引導せば、　是を善方便と名づく。

「事の次第を知る」とは、聲聞乘の中の如き、初に布施を說き、次に持戒、次に生天、次に五欲過患、次に在家苦惱、次に出家利樂、次に苦諦を說き、次に集諦、次に滅諦、次に道諦、次に[19]須陀洹果、次に斯陀含果、次に阿那含果、次に阿羅漢果、次に不壞解脫、次に諸の無礙を說くなり。辟支佛乘の中にも亦說く。我・我所の物は多く過患相り。此の過患の物を捨つれば大利益を得。在家を過惡と爲し出家を利益と爲す。次に衆閙亂語を過惡と爲し、獨行を善利と爲す。聚落を過患と爲し、阿練若處を善利と爲す。多欲多事を厭離して少欲少事を樂ふ。諸根を守護し、飲食に節を知る。初夜、後夜、時に隨て覺悟す。緣取の相を觀じて樂つて空舍に住し、持戒・禪定・智慧を貴びて奇異を現ぜず。他をして歡喜せしむ。但だ自ら利益して深法を樂つて他智に隨はず。大乘の中の次第の如きは、初に檀波羅蜜を說き、次に[20]尸羅波羅蜜・羼提波羅蜜・毘梨耶波羅蜜・禪波羅蜜・般若波羅蜜なり。初に諦勝處を說き、次に捨勝處・滅勝處・慧勝處を說く。復次に初に發菩提心を讚歎し、次

【一九】須陀洹果＝前出、調伏品第七註參照。
【二〇】尸羅＝戒度の漢音譯。序品第一の註參照。

畜生の苦を以ての故に、三には餓鬼の苦を以ての故に、四には惡人返復無きを以ての故に、五には生死過惡なるを以ての故なり。若し此の五事其の心を障へざれば是を無礙大悲と名づく。說くが如し。

　第一地獄の苦、　畜生、餓鬼苦、
　惡人及び生死の　障へざるを大悲と名づく。
　菩薩は能く是の如し。　佛は無礙の悲を說きたまふ。

「善く方便を受行す」とは、菩薩は五の因緣を以ての故に善く方便を受行すと名づく。一には方時を知り、二には他心所樂を知り、三には轉じて道に入るを知り、四には事の次第を知り、五には衆生を引導することを知る。「方時を知る」とは、是の方處を知るなり。應に是の如きの說法を以て、是の時中を知るべし。應に是の如き說法を以て、是の方處を知るべし。應に是の如き因緣を以て衆生を度し、是の時中を知るべし。應に是の如きの因緣を以て衆生を度し、菩薩は先づ是の事を知り已つて隨順して行ずべし。說くが如し。

　若し世尊の意を以て　他人の爲に解說し、
　先づ應に二事を知つて、　後に時方に隨ひ說くべし。
　若し時方を知らずして、　佛[一八]慧を說かんと欲するに、
　利を爲す所を得ずして、　而も更に過咎有り。

「他心所樂を知る」とは、他の深心は何事に在るとやせん何の所樂とやせんを知るなり。菩薩は先づ已を知り、衆生の所知、所樂に入つて隨順して度脫の方便を起發す。是の如くんば則ち虛しからず。說くが如し。

　菩薩、衆生の　深心測り難きの意を知り、

【一八】慧＝正藏は意に作るも今三本に據る。以下之に准ず。

五には無因緣に轉ぜず。說くが如し。

二乘の解脫を聞き、　何ぞ此の道を爲さざらん。
若し未だ位に入らざれば、　則ち菩薩の道を失ふ。
又外道の事を貪らば、　或は魔の爲に壞せらる。
或は復た因緣無くんば、　自ら菩薩の道を捨つ。

「善願」とは、菩薩は五の因緣を以ての故に善願と名づく。一には先づ得失を籌量する者、二には道を知る者、三には道果を知る者、四には自樂を貪惜せざる者、五には衆生の大苦を滅せんと欲する者なり。是の如く願を作すを名けて善願と爲す。說くが如し。

先づ世の過患と、　佛道の大利益とを見、
無上道を行じ、　及び其の無量の果を知らば、
自らの寂滅の樂を捨て、　衆生の苦を除かんと欲す。
是の無比の願を發さば、　諸佛の爲に讃ぜらる。

「大悲無礙」とは、五の因緣を以ての故に菩薩に大悲有るを知る。一には無量の衆生を利安するが故に、二には身を惜まず。三には命を惜まず。四には時の久遠を觀ぜず。五には怨親の中に等心に利益するなり。說くが如し。

內外所愛の物の、　中に於て貪著せず、
衆生を利するが爲の故なり、　及び身命を捨つ。
生死の無量劫も、　猶し[七]一眴頃の如し。
怨親の中に平等なるを、　菩薩の大悲と名づく。

「無礙」とは、菩薩は五の因緣を以ての故に悲心に礙有り。一には地獄の苦を以ての故に、二には

【七】一眴頃＝眴とは目くばせすること。僅少の時間をいふ。

を行ずること能はず。若し人以て阿耨多羅三藐三菩提心を發すことを堪受して、能く精進して六波羅蜜を行ずれば、是を實に無量の功德を堪受すと名くるなり。精進希有なるが故に所修の善業道も亦希有なり。說くが如し。

希有の大精進を　　凡人は念じ已りて怖る。
菩薩は實に之を行ず。　　何ぞ希有ならざるを得ん。

「心堅」とは、人有りて、精進の心を發して佛道を修習するに、若し障礙有れば心堅固ならず、則ち成ずる能はず、是の故に精進を發して希有に安住して、堅心の中に則ち其の事を成し、諸の障礙を壞す。是れ菩薩善業道を修する第一希有と爲す。說くが如し。

若し人堅心無くんば、　　尙ほ小事すら成ぜず。
況や佛道を成じ、　　世間無上者たらんをや。

「慧」とは、是の堪受・精進・堅心、皆慧を以て根本と爲す。是の故に菩薩は慧を第一希有と爲す。能く是の如く堪受・精進・堅心を生ずるが故に慧を以て希有と爲す。慧を以て希有と爲すが故に所修の善業も亦希有なり。說くが如し。

人有り、堪受して、　　佛法を得んと欲せば、
精進して堅心を得るが如く、　　皆慧を以つて本と爲す。

「果」とは、善業を修するが故に無量邊の諸佛の法を得。是の故に希有なり。說くが如し。

此の善を行じて道を得。　　無量の功德力を
諸の衆生の師と爲す。　　誰か聞きて行ぜざらん。

「堅願」とは、菩薩は五の因緣を以ての故に名づけて堅願と爲す。一には聲聞乘に於て心轉ぜず。二には辟支佛乘に於いて轉ぜず。三には外道の事に於いて轉ぜず。四には一切の魔事に於て轉ぜず。

衆生を教化して涅槃の樂を得せしむ。說くが如し。

　菩薩は無量の善　　功德もて自ら莊嚴するは、
　皆衆生無量の大苦を、　　度せんが爲なり。

「究竟無量」とは、初地の中に發願を爲すが故に、已に[一六]十究竟を說く。是の究竟無量なるが故に、菩薩所修の善業道も亦無量なり。是の故に一切世間に勝る。說くが如し。

　菩薩、善道を修するは　　十究竟より生ず。
　是の故に一切に勝り、　　能く壞する者有ること無し。

「廻向無量」とは、初地の中に說けるが如く、菩薩の廻向の果報は無量なり。是の廻向の果報無量なるを以て、所修の善業も亦無量なり。是の故に一切世間に勝る。說くが如し。

　無量の因緣を以て、　　善業道を修し、
　佛乘に廻向するが故に、　　是を以て最上と爲す。

「希有」とは、諸の菩薩善道を修するに、五の因緣を以ての故に、希有と名づく。一には堪受の故に、二には精進の故に、三には心堅の故に、四には慧の故に、五には果の故なり。「堪受」とは、我、當に天人中の尊、一切智慧者と作るべし。能く是の如く堪受する、是を希有と爲す。若し人指を以て三千大千世界を擧げ、虛空中に於て住せしむること百千萬劫にして、是の事成す可きも、難と爲すに足らず。若し發願して、我當に作佛すべしと言はば、是れ希有にして甚だ難しと爲す。說くが如し。

　無量の佛法の爲に、　　誓を立てて當に作佛すべし。
　是の人、比あること無し。　　況んや勝る者有らんをや。

「精進」とは、多く人有りて阿耨多羅三藐三菩提を發すことなし。堪受するも、精進して六波羅蜜

【一六】十究竟＝釋願品第五に出づ。

切世間に勝る。說くが如し。

菩薩は人中の寶、　深心と淨心とを具す。
是の善法力を以て、　世間の及ばざる所なり。

[14]「方便」とは、菩薩は方便を以て善法を修す。餘人に無き所なり。是の故に一切世間に勝る。「無量修」とは、菩薩は五因緣を以ての故に、無量修と名づく。一に時無量、二に善根無量、三に緣無量、四に究竟無量、五に廻向無量なり。「時無量」とは、謂く菩薩、善業道を修行して時量に過ぐ。時量に過ぐるが故に所修の善業道も亦無量なり、是の故に一切世間に勝る。說くが如し。

諸の菩薩師子、　所修の善業道は、
諸の算數の時を過ぐ、　故に修善最勝なり。

「善根無量」とは、諸の菩薩は無量無邊の善根を修す。是の善根より修するの善業道も亦無量なり。是の故に一切世間に勝る。大乘法の中の淨毘尼經の如し。佛、迦葉に告げたまはく、譬へば[15]生酥四大海に滿つるが如し。菩薩の有爲の善根資糧も亦是の如し。是の福德、無爲の智に廻向せば則ち一切の衆生を利益す。是の故に菩薩は有爲に處ると雖も、能く一切世間に勝る。說くが如し。

一切の衆生の爲に、　及び佛道を求むるが故に、
善根は則ち無量なり。　是れを以て世間に勝る。

「緣無量」とは、菩薩は有量衆生に緣るが故に善根を修集せず。而も所修の善根は若干の衆生を利益する事を爲すを言はず。菩薩は但だ一切衆生に緣るが故に、善根を修集す。是の故に菩薩は無量の衆生に緣りて、修する所の善業道も亦無量なれば、一切世間に勝る。淨毘尼經の中の如し。佛諸の天子に告げたまはく、大菩薩の如き薄く慈悲心を有ちて他を利益せんことを求むるに、是の心、能く無量の衆生をして利樂を得せしむ。深發心の菩薩の勤行精進も亦是の如し。能く無量阿僧祇の

【一四】方便＝Upāyakauśalya。善巧方便ともいふ。方便は般若の眞智に對し、他人を利益する方法手段をいひ、實に對する權道の智なり。對手によりては眞實の歸著を明示し得ざるがために、假りに便法を設くるをも方便といふ。善權とも云はる。般若經にては常に般若と方便とを併擧して菩薩の學行を說くを例とせり。

【一五】生酥＝Navanīta。涅槃經卷十四に乳、酪、生酥、熟酥、醍醐の五味とせり。聲聞緣覺を乳と酪とに比し、菩薩を生熟二酥とに配し、佛を醍醐に較す。

有なり。所謂る菩薩、初めの一の發願は、一切の聲聞、辟支佛に勝る。又偈の中に說くが如し。

菩薩の初發心は、　大慈悲と合す。
無上道の爲に、　卽ち是の心勝ると爲す。
是の故に此の願を以て、　世間の上に住す。

「堅心」とは、菩薩、諸の苦惱に於て、所謂る[一]活地獄・黑繩地獄・合會地獄・小叫喚地獄・大叫喚地獄・小炙地獄・大炙地獄・阿鼻地獄・沸屎・劍林・灰河・阿浮陀・尼羅浮陀・阿波簸・阿羅羅・休休・欝鉢羅・拘勿陀・須曼那・分陀利・鉢頭摩・寒熱地獄の中の種種の拷掠、是の如きの苦惱・畜生・餓鬼・阿修羅・人天共に相食噉し、互に相恐怖し、飢餓・穀貴、天より退失し、慳妬・瞋惱・恩愛別離・怨憎合會・生老病死・憂悲惱等の此の六道の中の所有の諸苦に於いて、若しは見、若しは聞き、若しは受くるに十善道を修し、阿耨多羅三藐三菩提の爲にするに、時に心終に壞せず。是れを以ての故に、此の菩薩は堅心を以て十善道を修し、一切世間に勝る。說くが如し。

地獄及び畜生、　餓鬼、阿修羅、
天、人、六趣の苦も　其の心を動かすこと能はず。
是の故に諸の菩薩、　此の堅固心を以て、
修するところの十善道は、　一切世間に勝る。

「深心」とは、大心・閑心・愛心・念心なり。諸の菩薩は是の如き等の心を以て十善道を修し、一切世間に勝るなり。諸佛世尊及び[二]久行の菩薩を除く。說くが如し。

深心及び用心、　利益世間心、
菩薩是の心を以て、　一切世間に勝る。

「善清淨」とは、菩薩、十善業道を修するに、[三]三種清淨なるなり。餘人に無き所なり。是を以て一

【一】活地獄等＝前出、序品第一註參照。

【二】久行の菩薩＝新發意の菩薩に異り久しき間の修行を經たる菩薩をいふ。

【三】三種＝深心、用心、利世心。

り。「他利の爲に修行す」とは、菩薩、十善道を修行するに、廻向して一切衆生を利安するが故なり。是の因縁を以ての故に能く算數に過ぎたる衆生を度す。「清淨に修行す」とは、不壞行・無雜行・不濁行・自在行・具足行・不貪着行・智者所讃行者なり。「壞」とは、行有り不行有るなり。此と相違するを不壞行と名づく。「雜」とは、自ら作さずして、他をして作さしむるなり。之と相違るを不雜行と名づく。「漏」とは、煩漏罪業と合行するなり。此と相違るを名づけて不濁行と爲す。「自在」とは、破戒の人、田業・妻子・財物の爲めに繋れて自在を得ざるなり。「持戒」とは、是の如き事無く、意に隨ひて自在にして繋屬されざるなり。「具足」とは、盡く一切の大小戒を行じて諸の煩惱を遮止し、常に憶念守護し、禪定の爲に因縁と作り、佛道に廻向し、能く[七]眞際法性を同からしむるなり。是れを具足と名く。「不貪著」とは、世間に向かず、戒相を取して自ら高うじて他を卑めざるなり。「智者所讃」とは、聲聞法の中には生死に隨はず、但だ涅槃の爲の故に智者の所讃と名づく。此の大乘の法の中には、尙ほ聲聞、辟支佛乘に廻向せず。況や生死をや。但だ阿耨多羅三藐三菩提に向ふ。是を智者所讃の十善道と名づく。

問うて曰く、修に何の相か有りて名づけて善修と爲すやと。答へて曰く、無量と希修とに十善道を修するを以て一切世間に勝る。是れを善修と名づくと。

問うて曰く、云何が菩薩、此の修を以て一切世間に勝るやと。答へて曰く。諸の菩薩、五事を以て修するが故に一切世間に勝る。一には願、二には堅心、三には深心、四には善清淨、五には五方[八]便なり。「願」とは、菩薩所行の願なり。一切凡夫の人及び聲聞、辟支佛の人に無き所、是れを以ての故に菩薩所行の願は一切世間に勝る。大智經の[九]毘摩羅過多女の問の中の如く、佛、[一〇]目犍連に因りて說きたまはく、菩薩、初發願より乃至道場にて、能く一切世間の天及び人の爲に福田を作す。又一切の聲聞、辟支佛に勝る。又淨毘尼中の如き、摩訶迦葉、佛前に於て說かく。世尊、善說は希

【七】眞際法性＝如（眞如）、法性のこと。眞理の究極。

【八】この品には初頌を解釋するに各頌毎に數多の五法を以てせり。

【九】毘摩羅達多＝Vimalā。毘舍離の娼女比丘尼のこと。婦にて嘗て目連を誘惑せんとして非難せられ、慚愧して發心出家す。

【一〇】目犍連＝前出、四十不共法品第二十一註參照。

大東品[三] 第三十四[四]

問うて曰く、[五]仁、已に說くが如く、十善道は能く人をして聲聞辟支佛地に至らしむ。と十善道、◎復た何等の衆生をして佛地に至らしむるや。答へて曰く。

所行の十善道は　二種の人に勝る。
無量と希有との修は　一切世間に勝る。
堅善の二願を發して、　大悲無礙を成ず。
諸の衆生を捨てずして、　諸の苦惱を忍辱す。
善く方便を受行し、　深く諸佛の慧を愛す。
佛力自在に於いて、　樂ふ盡遍行を者なり。
能く邪見意を破り、　佛の正法を愛護す。
健かに精進して、　堅心をもて衆生を化するに堪受す。
自樂と及び無量の身命とに、　貪著せず、
一切事の中の上にして、　所作過咎無し。
一切種清淨にして、　一切勝處より來る。
善道此の人をして、　十力世尊に至らしむ。

「所修の十善道は二種の人に勝る」とは、菩薩、十善道を修するに、聲聞、辟支佛を求むる者に於て、轉た勝と爲す。「轉た勝る」とは、一心に修行し、常に修行し、自利の爲の故に修行し、他利の爲の故に修行し、淸淨に修行するなり。「一心に行ず」とは、意を用ひて修行するなり。「常に修行す」とは、中に休息せざるなり。「自利の爲の故に修行す」とは、天人に生るゝ因緣、[六]泥洹の因緣な

【三】此の品は上の聲聞辟支佛に對し、十善道と佛地に至るべき菩薩との關係を明かす。又この一品は初頌の二十四句の細釋たり。
【四】三十＝正藏には三に作る。今宋、元、宮本に據る。
【五】仁＝爾に同じ。
○十善道と菩薩。
【六】泥洹＝Nirvāṇa。涅槃の古譯。

疾く三昧に入る。疾く三昧に入る故に禪定者は常定者なりと名づく。※若し能く是の如く諸法を修集すれば、則ち諸佛を供養し、恭敬すと爲す。若し人、香華の四事を以て佛に供養するを、佛に供養すと名づけず。若し能く一心に不放逸にして親近し、聖道を修集せば、是を諸佛を供養し、恭敬すと名づく。經に說くが如し。般涅槃の時に、佛、阿難に告げたまはく。天より[一]文陀羅華及び[二]栴檀末香を雨らし、天伎樂を作すを如來を供養すと名づけず、阿難よ、若し比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷一心に不放逸に親近し、聖法を修集する、是れを眞に佛を供養すと名づく。是の如きの衆の功德、皆是れ中勢力の人は出家を樂ひ、善心縮沒せざる者なり。最上の勢力は能く成佛を得。下勢力の者は聲聞と作る。是を以ての故に中勢力の人は辟支佛と作る。出家を樂ふが故に能く衆の功德を成す。何を以ての故に、若し居家に在らば則ち少欲少事なること能はず、身心を遠離すること能はず。亦禪定することを能はず。若し心縮沒して淸淨ならざる者は、衆事を成辦すること能はず。甚深の因緣の法を知ること能はず、出性を證すること能はず。法の如く眞に諸佛を供養し、恭敬すること能はず。是の如き衆生は是れ中勢力なり。是の念を作さく、我れ中勢の人なるも常に出家を樂ひ、心縮沒せずんば、諸の所願、功德の事、皆自然に來らん。復た是の思惟を作さく、是の中勢力、樂つて何の果を得ると爲すや。即ち知る、當に智慧の果を得べし。何を以ての故に、智慧能く照明と爲る。經中に說くが如し。諸の比丘よ、一切の光明の中に智慧の光を勝と爲すと。復た是の念を作さく。我、樂ふ所の慧光は云何にして當に得べきや。即ち知る。若しは二勝處より來り、若しは三勝處より來る。「二勝處」とは、先に已に說けり。「三勝處」とは、謂諦と捨と寂滅所となり。或は諦と捨と慧、或は諦と寂滅と慧となり。是れを以ての故に、我、當に是の如き諸の勝處を修集すべし。我是を修集し已りて智慧の光明を得。所願、智慧自然にして至る。是の如く想ひ、是の如く助道法を修集する者は十善道、能く辟支佛地に至らしむ。

※供養の眞義。
【一】文陀羅華＝白蓮華。
【二】栴檀末香＝戒報品第三十五註參照。

少事と爲す。是の如きの人、少欲小事にして衆閙語を樂はず、可畏を遠離し、深邃の處に親近することを樂ふ。其の心深なり。是の人。是の念を作さく。若し我可畏を遠離して深邃の處に住すれば人則ち來らず。遠離處に住するを以ての故に、心も亦深遠なり。若し人自ら深遠ならず、戲調を喜ぶ者は、外人往來して則ち難と爲さず。是の如きの人は衆生と和合せず。衆生を捨つると雖も亦衆生をして諸の善根を種ゑ、大利益を爲さしめんと欲して、是の念を作さく。我云何が衆生と和合し、亦能く衆生を利益せざらん。是の如く思惟し知り已りて、我當に衆生の爲に福田の利と作りて、其の供養を受くべしと。是の如く衆生と和合せず而も能く大利益と作す。是の人、復た思惟すらく、我云何が福田地を得べき。卽ち自ら見知すらく、若し我、深樂して福田地を爲し、常に出性を觀ぜば、然る後に福田地の法自然に而も來り、乃至出性の法も亦自然に來る。所謂持戒・禪定・智慧等なり。復た是の念を作さく、我云何が疾く福田地及び出性の法に至るべき。我當に正觀を爲せば、諸の現に理趣有るの事に於て、皆悉く成辦し、諸主を供養して、恭敬すべし。是の如く福田地及び出性の法、久しからずして疾く得ん。何を以ての故に、我、當に有理の事を成辦し、正しく諸法を觀ずじて、能く不隨他智を得べし。又諸主を供養し、恭敬するが故に善根を增厚せしむ。善根增厚なるが故に智慧深厚なり、智慧深厚なるが故に能く實事に通達す。能く實事に通達するが故に能く厭を生ず。厭より則ち離を生ず。離より解脫を得。解脫を得るが故に、前後所集の善根、福用と爲すことを得、然る後に出性の法を證することを得。「諸主」と云ふは諸佛世尊なり。是れ諸の善根を種うる時、是れ最大の因緣なり。是の人、復思惟らく、我、云何が能く疾く理趣有るの事を成ずべきわ。是の人卽ち自ら知見すらく、若し我、集めて心を一處に繫ぎ、其の所緣を知り、常に禪定を樂ふ。是の人、能く心を一處に繫くれば、則ち能く三昧を得。三昧を得るが故に有理の事皆能く成辨す。經中に說くが如し。禪定を得れば能く如實に知り、如實を見る。若し人已に繫心を行ずれば、則ち

し。我は則ち然らず。樂つて他人に隨はず。是を以ての故に、我應に十善道をして轉勝ならしむべし。是の因緣を以ての故に、我樂つて他の十善道に隨はず。我辟支佛に至るべし。是の如く思惟し已つて、常に遠離を樂ひ、是の念を作す。若し我常に憒鬧を樂へば則ち諸の惡、不善の法を集らと爲す。可染・可瞋・可癡の事に近づくを以ての故に、是の遠離の中に於て、應に甚深の因緣法を修習すべし。復た是の念を作す。若し我甚深の因緣法を修習せざれば、則ち不隨他の智を得ず。我今何が故に常に甚深の因緣を修習せずして、然る後に不隨他智を得べけんや。「甚深」とは、其の底を得難く、通達すべからず。一切の凡夫、無始の生死の中より、所有る經書及び技藝は皆其の邊底を得べし。唯だ甚深の因緣のみ底を得可らず。兎等小虫は大海の邊底を得ること能ざるが如し。若し、人、方便、大悲心有りて、及び甚深の因緣を修集すれば、卽ち阿耨多羅三藐三菩提を得。若し此の二事を離れて甚深の因緣智を修集すれば、則ち辟支佛を成ず。「方便」とは、衆生を成就し、敎化する中に、種種に思惟して錯謬せざるに名づく。亦た甚深の法に於て相を取らざる大悲を深と名づく。衆生を憐愍すること聲聞、辟支佛に勝る、何に況や凡夫おや。小欲小事にして憒鬧語を惡賤す。是の如くんば、則ち辟支佛地を得。若し大欲大事にして好んで衆人を聚め、方便、大悲の爲に護らるる者は、則ち阿耨多羅三藐三菩提を得易しと爲す。何を以ての故に、辟支佛を求むる人、小欲なる者は是の念を作す。但だ自ら身を度せんと。「少事」とは、但だ自ら善根を成就して餘人に及ばず。是の人、敎化衆生の事を捨離するが故に、衆閙に親近せず。菩薩は大欲大事にして是の念を作す。我まさに一切衆生を度すべし。此の大欲の因緣を以ての故に、則ち大事を以て衆生を敎化すと爲す。衆生を敎化するは此れ小事に非ず。若し憒鬧語を憎惡すれば此の事成らず。是の故に菩薩は憒鬧の中に入り、又憒鬧の語を用ふ。但し著する所無し。復次に眞實の功德を覆ふが故に是を小欲と爲し、事務少きが故に名づけて小事と爲す。憒鬧を惡賤するを小欲と名づけ、獨處を樂ふが故に名づけて

巻の第十五

分別聲聞辟支佛品之餘

*問うて曰く、十善道は何等の人をして辟支佛地に至らしむるやと。答へて曰く、

聲聞所行の　十善道に於いて轉た勝れ、
深禪、他に隨はず、　常に遠離を憙び、
恒に善く甚深因緣法を、　修習せんことを樂ふ。
方便力と、　及以大悲心と、
少欲及び少事とも遠離して、　憒閙の語を惡賤す。
常に遠離處を樂ふ。　威德深重の人、
喜んで福田地を爲し、　常に出性を觀じ、
有理の事を成辨し、　諸生を恭敬す。
已に繫心を成就し、　心、所緣に在るを知り。
常に禪定を樂ふ。　中の人の勢力は、
出家の法を樂ひ、　善心縮沒せず。
慧光明を得る者は、　或は二勝處より、
或は二勝處より來る。　十善の業道は、
能く是の如きの人をして、　緣覺地に至らしむ。

「聲聞所行の十善道に於いて轉た勝れ」とは、聲聞の人の行ずる所の十善道に過ぎて、而も菩薩の所行に及ばず。是の念を作す。聲聞の人は他に隨て聞き而して道を行じ、然る後、自證普慧を得べ

※十善道と辟支佛地。

問うて曰く、若し一切の有爲法は皆是れ熾然にして、唯だ涅槃寂滅のみ能く救護と爲すと觀ぜば、十善道は皆聲聞地に至らしむるやと。答へて曰く、然らず。佛の結したまふ所の戒は禪定の爲めの故に此の戒を貴重す。決定心を有りて毀犯せず、一切の事を捨て、但だ坐禪を樂ひ、盡苦の智を求めて常に勤めて解脫の因緣を修習し、先世の中に於て或は一勝處より來り、二勝處より來る者は、十善道、能く此の人をして聲聞地に至らしむ。何を以ての故に、持戒清淨なれば即ち心に悔せず。心悔せざるが故に觀喜を得。觀喜を得るが故に身輕軟なり。身輕軟なるが、故に心快樂なり。心快樂なるが故に心を攝して定を得。心を攝して定を得るが故に如實の智慧を生ず。如實の智慧を生ずるが故に、即ち厭を生じ、厭より離を生じ、離より解脫を得。若しは一、若しは二、勝處より來る者、尊者[二五]羅睺羅の如く諦勝處より來り、尊者[二六]施日羅の如く捨勝處より來り、尊者[二七]離跋多の如く寂滅勝處より來り、尊者[二八]舍利弗の如く慧勝處より來り、或は諦、捨二勝處より來り、或は諦、寂滅二勝處より來り、或は諦、慧二勝處より來り、或は捨、寂滅二勝處より來り、或は捨、慧二勝處より來り、或は寂滅、慧二勝處より來る。是の如く十善道は能く聲聞地に至らしむ。

【二五】羅睺羅＝前出、四十不共法中善知不定品定二十三。
【二六】施日羅＝Saila (?) 三百人の弟子と共に歸佛せし施羅か。
【二七】離跋多＝Revata khadiravaniya 舍利弗の弟、母に結婚をすすめられし時、長兄既に出家したれば我も又出家すとて佛弟子となる。
【二八】舍利弗＝前出、分別布施品第十二註。

不淨なり。何ぞ況んや多きをやと。是の如く一念の中にも生を受くるは尙ほ苦し。何ぞ況んや多きをや、諸の比丘よ、當に生を斷ずるを學ばば更に受けしむこと莫かるべし。聲聞の人、是の語を信受するが故に乃至一念の中にも生を受くるを樂はず。是の人、復た是の念を作さく、世間は無常なり、所作の事及び受命に於いて都て安隱の相無し。死常に人を逐ふ。誰か能く死の時節を知らんや。死時を知らずんば何の業果報を受くるとや爲ん。何の心を生ずるとや爲ん。是の如く事の中に安隱ならざるが故に、信ず可からざるが故に、應に疾く苦を盡さんことを求むべし。菩薩は則ち爾らず。恒河沙無量阿僧祇劫に於いて生を受くるは、阿耨多羅三藐三菩提を得て諸の衆生を度せんが爲めなり。是の故に偈の中に說く、乃至一念の頃にも生を受くるを樂はざれ。善道、是の人をして能く聲聞地に至らしむ。

問うて曰く、是の人樂つて何の事を修集するが故に、生を受くるを樂はざるやと。答へて曰く、是の人・地・水・火・風の四大を觀じて憙んで瞋恨を生ずるが故に、臭穢を淨めず、恩を知らざるがだに、毒蛇の想を生じ、色・受・想・行・識の五陰は能く智慧の命を奪ふが故に、怨賊の想を生じ、眼・耳・鼻・舌・身・意は入離・常離・不動・不變・不壞・無我・無我所なるが故に、空聚の想を生ず。若し人、世間に於いて、一切の受生及び資生の樂具は無常虛誑にして、須臾も住すること無きを以ての故に、喜悅心を生ぜず。是の如の人は、一切の生處に於いて、生に安隱の相無し。但だ涅槃の一法のみ能く救護すと爲す。經中に說けるが如し、諸の比丘よ、世間は皆是れ熾然なり。所謂る眼も然なり、色も然なり、眼識も然なり、眼觸も然なり、及び眼觸の因緣生受も皆亦是れ然なり。何事を以ての故に然るやとは、所謂る貪欲の火・瞋恚の火・愚癡の火・生・老・病・死・憂・悲・苦惱の火の熾烈なる所、耳・鼻・舌・身・意も亦是の如し。一切の有爲法は皆是れ熾然なりと觀じ、唯だ涅槃寂滅の法のみ能く救護爲り。涅槃の一法を貴ぶが故に一切の事を捨て、坐禪を勤習す。

問うて曰く、一切の三界を怖畏する者には、十善道は皆能く聲聞地に至らしむと。若し爾らば菩薩も亦三界を怖畏するは身の爲めの故なり。復た衆生の爲めに勤行精進して涅槃を求む。是の如くんば、十善道も亦應に聲聞地に至らしむべきやと。答へて曰く、必ずしも一切の三界を怖畏する者、盡くは聲聞地に墮せず。何等をか墮すと爲すや。樂つて功德の少分を習行する者は、佛の敎化したまふ所の六波羅蜜の中に於いて少分を受行す。是の如きの人は聲聞地に墮す。若し人能く諸佛の功德を取りて遍く智慧を學ばば、十善道は必ず此の人をして徑に佛道に至らしむ。他に隨つて聲を聞き三界を怖畏して功德の少分を取るに、是の人に二種の十善道有り。能く聲聞地に至らしむる者と、能く辟支佛地に至らしむる者となり。

問うて曰く、是の人云何んが倶に他に從ひて聞き、三界を怖畏して功德の少分を取るに、十善道能く聲聞地に至らしめ、辟支佛地に至らしむるやと。答へて曰く。志、劣弱なる者は阿羅漢と作り、小しく堅固なる者は辟支佛と作ると。

問うて曰く、十善道は一切の志、劣弱なる者をして、聲聞地に至らしむるやと。答へて曰く、然らず。何を以ての故に　所謂る志弱くして、生死を厭離せんと樂ふ者は但に志、劣にして厭離無き者には非ずと。

問うて曰く、何事を觀じて厭離を樂ふ心を知るを得るかと。答へて曰く、有爲の法は無常にして、一切の法は無我なりと觀ずるは、當に是れ必ず厭離を樂ふと知るべし。

問うて曰く。已に厭離を樂ふを知る。菩薩も亦是の如く有爲無常、一切法無我なりと觀ずるに、是の十善道、何んぞ此の人をして聲聞地に墮せしめざるを得るやと。答へて曰く。是の人深く厭離して大悲を離るゝが故なり。乃至一念の中にも生を受くるを樂はず。世間に安穩の相有ることを信ぜず。經中に[二四]說くが如し。佛、諸の比丘に告げたまはく、譬へば小糞の如きすら尙ほ臭穢にして

【二四】說＝正藏には缺けども三本による。

少功徳分を樂ふ。　其の志甚だ劣弱にして、
心に厭離を樂ひ、　常に世の無常を觀ず。
及び一切の法は、　皆亦我有ること無きを知る。
乃至一念の頃も、　生を受く受くるを樂はず。
常に世間に而も、　安隱の法有ることを信ぜず。
〔二〕大を觀ること毒蛇の如く、　〔三〕陰は拔刃の賊の如く、
〔三〕六入は空聚の如し。　世の富樂を樂はず。
堅く戒を持するを貴ぶは、　而も禪定の爲の故なり。
常に安禪を樂ひ、　諸の善法を修習し、
唯だ涅槃を觀して、　第一救護の者とす。
常に盡苦の慧を求め、　樂集して解脫を行ず。
但だ自利を貴び、　一一勝處より來る。
善道は是の人をして、　能く聲聞地に至らしむ。

他の音聲に隨ふ者は他の所說を聞き、隨順して行じ、自ら智惠を生ずること能はず。

問うて曰く、十善道は能く一切の他に從つて聞く者をして皆聲聞は作さしむるやと。答へて曰く、爾らず。若し大悲心無くば十善道は能く此の人をして聲聞地に至らしむ。若し菩薩有りて諸佛に從ひて法を聞くに、大悲心有るを以ての故に、十善道は聲聞地に至らしむる能はずと。

問うて曰く、一切の大悲心無き者には、十善道は皆能く聲聞地に至らしむるやと。答へて曰く、然らず。三界を怖畏する者には、十善道は能く此人をして聲聞道に至らしむ。餘の怖畏せざる者には人天の善處に生ぜしむ。三界を樂しむを以ての故なり。

【二】大＝四大なり。地・水・火・風の四。
【三】陰＝五陰。淨地品第四註に出づ。
【三】六入＝六根或は六境をいふ。

三禪の中思を修するが故に無量淨天に生ずることを得。三禪の上思を修して遍淨天に生ずることを得。四禪の下思を修するが故に阿那婆伽天に生ず。四禪の中思を修するが故に福生天に生ず。四禪の上思を修するが故に廣果天に生ず。無想定の中思を修して無想天に生ずることを得。無漏熏修の四禪の下思を以ての故に不廣天に生ず。無漏熏修の四禪の勝思を以ての故に不熱天に生ず。無漏熏習の四禪の勝思を以ての故に喜見天に生ず。無漏熏習の四禪の勝思を以ての故に妙見天に生ず。無漏熏習の四禪の最上思を以ての故に阿迦膩吒天に生ず。虛空處定相應の思を修して空處天に生ずることを得。識處定相應の思ひ修して識處天に生ずること得。無所有處が定相應の思を修して無所有處天に生ずることを得。非有想非無想處定相應の思を修して非有想非無想處天に生ずることを得。是れを生死世間の衆生往來の處と名づく。

[一九]分別聲聞辟支佛品第二十九[二〇]

*問うて曰く、是の十善業道は但だ人天に生ずる因緣のみ。更に餘の利益有りやと。答へて曰く、有り。

所有る聲聞乘、　辟支佛、大乘は、
皆十善道を以て、　而も大利益を爲す。

凡そ生死を出づる因緣に唯だ三乘有り。聲聞・辟支佛・大乘なり。是の三乘は皆十善道を以て大利益を爲す。何を以ての故に、是の十善道は能く行者をして聲聞地に至らしめ、亦能く辟支佛地に至らしめ、亦能く人をして佛地に至らしむと。

問うて曰く、是の十善道は能く何等の衆生をか聲聞地に至らしむるやと。答へて曰く、

他に隨つて大悲無く、　三界を畏怖し、

【一九】この品は十善道と聲聞地との關係を明かす。
【二〇】二十九＝正藏は二に作る。今宋・元・宮本に依る。
※十善道と三乘。

是の如きは總相の說なり。是の中に應に廣く分別して差別して差別すべし。諸の阿修羅夜叉は鬼道の中に生ずる有り。諸の龍王は畜生の中に生ずる有り。受くる所の快樂或は諸天と同じきも、是の諸の衆生は不善の因緣を以ての故に生ず。生じ已つて善業の果報を受く。最下の十善道を行ずれば閻浮提の人中に生ず。貧窮下賤の家に在るは、所謂る[一七]梅陀羅、邊地の工巧小人等なり。轉た勝れば居士の家に生ず。轉た勝れば婆羅門の家に生ず。轉を勝れば刹利の家に生ず。轉た勝れば大臣の家に生ず。轉た勝れば國王の家に生ず。十善道に於いて轉た復た勝る者は[一八]瞿陀尼に生ず。轉た勝れば弗婆提に生ず。轉を勝れば欝單越に生ず。轉た勝れば四天王の處に生ず。轉た勝れば忉利・天炎摩天・兜率陀天・化樂天に生ず。上の十善道を習行すれば他化自在天に生ず。是の中に於いても亦應に種々小大差別して分別すべし。人中の小王・大王・閻浮提王・轉輪聖王の如き、四天王處に四天王有り。忉利天の中に釋提桓因有り。炎摩天の上に須炎摩天王有り。兜率陀天の上に珊兜率陀天王有り。化樂天の上に善化天王有り。他化自在天の上に他化自天王有り。是れを過ぎて以上は、禪定思を行じて上界に生ずることを得るを要す。

問うて曰く、若し禪定思を以て上界に生ずるを得ば、何を以ての故に、乃至、非有想非無想處は皆十善道を以ての故に生ずることを得と說くと。答へて曰く、禪定を修して色界無色界に生ずと雖も、要は應に先づ堅く十善道に住し、然して後に禪定を修することを得べし。是を以ての故に、彼の處も十善業道を以て大利益と爲す。是を以ての故に、非有想處も皆十善道の因緣を以ての故に、生ずることを得と說くなり。所以は如何ん。先づ清淨の十善道を行じて欲を離れ、初禪の下思を修して梵衆天に生ずることを得。初禪の中思を修して梵輔天に生ず。初禪の上思を修するが故に大梵天に生ずることを得。二禪の下思を修して少光天に生ず。二禪の中思を修して無量光天に生ずることを得。二禪の上思を修して妙光天に生ずることを得。三禪の下思を修して小淨天に生ずることを得。

【一七】梅陀羅＝Candra　印度の卑族。

【一八】瞿陀尼＝以下の欲・色・無色の三界の名目については四十不共法品第二十一註參照。

問うて曰く、何を以ての故に先づ自ら十善道に住し、後に乃ち他をして住せしむるを要するやと。

答へて曰く、

惡業を行ずる者は、　　他善をして易からざらしむ。
自ら善を行ぜざる故に　　他は則ち信受せず。

若し惡人自ら善を行ぜずして、他をして善を行ぜしめんと欲するは、則ち甚だ難しと爲す。何を以ての故に、是の人自ら善を行ぜずんば、他人其の語を信受せざればなり。偈に說くが如し、

若し人自ら不善なれば、　　他をして善ならしむこと能はず。
若し自ら寂滅せざれば、　　他をして寂せしむること能はず。
是を以つての故に、汝當に　　先づ自ら善と寂とを行じ、
然して後他人に教へて、　　善と寂滅とを行ぜしむべし。

是の菩薩は當に是の如く善法を行ふべし。

阿鼻地獄より、　　乃至有頂に至るまで、
十業の果及び其の　　受報の處を分別す。

當に是の如く、正しく知るべし。下、阿鼻地獄より上、非有想非無想處に至るまで、皆是の善不善の種々の業の果報を受くる處なり。中に於いて上の十不善道を習行するが故に阿鼻地獄に生ず、小しく減ずるは大炙地獄に生ず。小しく減ずるは小炙地獄に生ず。小しく減ずるは大叫喚地獄に生ず。小しく減ずるは小叫喚地獄に生ず。小しく減ずるは僧伽陀地獄に生ず。小しく減ずるは大陌地獄に生ず小しく減ずるは黑繩地獄に生ず。小しく減ずるは活地獄に生ず。小しく減ずる劍林等の小眷屬地獄中に生ずる中にも、亦應に是の如く轉た小にして分別すべし。中の十不善道を行ずれば畜生の中に生ず。畜生の中にも亦應に轉小にして分別すべし。下の不善道を行ずれば餓鬼の中に生ず。

種の清淨を以つて十善道に住す。所謂る自ら殺生せず。他を教へて殺さしめず。殺生罪に於いて心喜悅せず、乃至正見も亦是の如し。

問うて曰く、菩薩は初地の中、已に十善道に住す。此の中、何が故に重ねて說くと。答へて曰く、初地の中に十善道に住せざるには非ず。但だ此の中、轉た勝れて增長して三種の清淨を以つての故に、先づ初住の中、閻浮提の王と作ると雖も、此の三種の清淨を行ふこと能はず。是の故に、此の中に三種の清淨を說く。菩薩は是の二地に住し、是の如く諸業を分別することを知りて決定の心を生ず。

世の所有る惡道は、　　皆十不善より生ず。
世の所有る善道は、　　十善に因りて生ず。

「世間の所有る惡道」とは、所謂る三種の地獄道・熱地獄・冷地獄・黑地獄なり。三種の畜生道は水行畜生・陸行畜生・空行畜生なり。種々の鬼道に飢餓鬼の者、食不淨鬼の者、火口の者、阿修羅夜叉等有り。皆十不善道を行ずるに由る。上中下の因緣有るが故なり。出世間の所有る善道は若しは天、若しは人、皆十善道を行ずるに由りて生ず。三界所攝の天に〔二六〕二十八有り。「人」とは、四天下の人是れなり。是の如く、決定して知り已つて是の念を作さく、我自ら善處に生じ、亦衆生をして善處に生ぜしめんと欲すと。

是の故に我自ら應に、　　十善道に住すべく、
亦餘の衆生をして、　　即ち此の善道に住せしめん。

若しは善處に生じ、若しは惡處に生ずるは、皆十善十、不善道に屬す。我是の世間の諸業因緣の有無を知るに定生有り。是の故に、我應に先づ自ら十善道を行じ、然る後諸の衆生をして亦十善道に住せしむべしと。

【二六】二十八有＝煩惱の分類中、欲惑九品にて二十八生を潤すをいふ。

問うて曰く、前の七事何が故に是れ業にして亦た業道なるやと。答へて曰く、常に此の事を修習するが故に、能く人天の好處に至れば、名づけて道と爲す。是の七は能作の故に名づけて業と爲すと。問うて曰く、餘の三は何が故に但だ業道にして業に非さるやと、答へて曰く、三は是れ諸の善業の根本なり。諸の善業は中に從つて行ずるが故に、名づけて業道にして業に非ずと名づく。*復た次に、

戒法は卽ち是れ業、　業は或は戒にして戒に非ず。
業及び業道に於いて、　四種の分別有り。

身口の業は是れ戒。意業は是れ業にして戒に非ず。業及び業道に於ける四種の分別とは、業にして業道に非ざる有り、業道にして業に非ざる有り、業にして亦是れ業道なる有り。業に非ず、業道に非ざる有り。「業にして業道に非ず」とは、三種の不善の身業は業道の攝せざる所なり。所謂る手に鞭杖等を擧るなり。及び三種の善は身業にして業道の攝せざる所なり。所謂る迎逆、敬禮等の是の二の善、不善は業にして業道の取攝に非ず。或は人有り言ふ、亦是れ業道なり。何を以つての故に、是の二業は或時は善惡の處に至るが故に、名づけて業道と爲すと。不定を以つての故に業道と說かず。「業道にして業に非ず」とは、後の三不善及び三善は是れ煩惱性なるが故に業に非ず。能く業を起すが故に、名づけて業道と爲す。三善は是れ善根性なるが故に業に非ず、能く善業を起すが故に名づけて業道と爲す。「亦業にして亦業道なり」とは、所謂る殺生、不殺生等の七事是れなり。業にも非ず、業道にも非ず」とは、餘法是れなり。復た次に、

菩薩、初地の邊、　三種の清淨を以つて、
十善道に安住せば、　則ち決定の心を生ず。

是の菩薩は第二地の中に於いて了了に分別して、是の如く十善、十不善道を知り、知り已つて三

※業及び業道を分別す。

身業を起す、是を殺生を離れずと名づく。何等か是れ殺生罪に非ざる。此の人、先に殺因緣を作すと雖も、而も衆生死せず、又身動かず、口說かず。但だ心に我今日より當に衆生を殺すべしと念ず。是れを殺生を離れずして殺生罪に非ずと名づく。是の二門分別するに四種の分別と爲る。所謂る。善と不善と各々二種あり。

但だ善不善ならずして　　身心二種の業あり。
亦復た應當に知るべし。　　更に餘の分別有ることを。

身の殺生、劫盜、邪婬を除く餘殘の打縛・閉繫・鞭杖・牽挽等は、但だ死せざるのみ。是の如き不善の身業は奪命等の所攝に非ず。善の中、迎送・合掌・禮拜・恭敬・問訊・洗浴・按摩・布施等は善の身業にして、不殺生等の所攝に非ず。意業の中、貪取・瞋惱・邪見を除く餘の所有の不守攝心は諸の結使等の不善法なり。又意業の中に不貪取・不瞋惱・正見を除く。餘の善守攝心は信戒・聞足・慧等の善法なり。

七業も亦[一五]業道なり。　　三業道は業に非ず。

殺生・劫盜・邪婬・妄語・兩舌・惡口・散亂語の七は是の業は卽ち業道なり。貪取・瞋惱・邪見は是れ業道にして業に非ず。此の三事思に相應せば是れ業なり。

問うて曰く、前の七事は何故にか亦是れ業、亦是れ業道なりやと。答へて曰く、是の七事を習行せば轉た增するが故に、地獄・畜生・餓鬼に至る。是を以つての故に名づけて業道と爲す。是の七は能作の故に業と名づく。三は是れ業道にして業に非ずとは、是れ不善業の根本なり。是を以つての故に三を業道にして業に非ずと名づく。善の中にも亦是の如し。所謂る殺生・劫盜・邪婬・妄語・兩舌・惡口・散亂語を離るるも亦業にして亦業道なり。餘の三の不貪取と不瞋惱と正見とは是れ業道にして、業に非ず。此の三、思と相應する是れ業なり。

【一五】業道＝業は善惡の業をいひ、この業が趣處に趣かしむるを道といふ。業の道なるが故に業道と云ふ。

欲す。東天竺の人、天寺中に於いて生を殺すが如し。此事を以つての故に天上に生ぜんと欲す。是を癡より生ずと名づく。復た人有り、貪心を以つての故に他物を取り、是の念を作す。我當に意に隨つて好色・聲・香・味・觸を得べしと。是を貪より生ずと名づく。復た人有り、瞋心を以つて彼の人を喜ばざるが故に、財物を劫盜して其を惱ましめんと欲す。是を瞋より生ずと名づく。復た人有り、邪見にて果報を知らず、他物を劫盜す、是を癡より生ずと名づく。諸の婆羅門、世間の財寶は皆是れ我が物なるも我が力弱きが故に諸の小人等非法を以つて取用す。若し我取らんには自ら其の物を取るも、過罪有ること無しと說くが如く、是の如き心を以つて他物を劫盜するは、是も亦癡より生ずるなり。若し人、色の因緣に貪著するが故に而も邪婬せば、是を貪より生ずと名づく。若し人、瞋つて喜ばず、是の念を作さく、是の人、我が母、婦、姊妹、女等を犯せば、我も還へつて婬事を以つて、彼の母、婦、姊妹、女等を汚さんと。是を瞋より生ずる邪婬と名づく。若し人邪見にて果報を知らず、而も故らに犯さば是を癡より生ずと名づく。人有りて云ふが如し、人中に邪婬有ること無し。何を以つての故に、女人に皆男子の爲めの故に生ず。餘の所有物の如しと。所須有るが如し。若し與に事に從ひて邪婬罪無くとも、是の心を以つて婬欲を作す者は、是を癡より生ずと名づく。劫盜罪の如く、妄語も亦是の如し。財を貪らんが爲の故に妄語せば、是を貪より生ずと名づく。彼を誑して苦惱を得しめんと欲することを爲す。是を瞋より生ずと名づく。邪見にして業の果報を知らざる故に妄語す、是れを癡より生ずと名づく。兩舌・惡口・散亂語も亦是の如し。三不善道は則ち是れ根本、是より分別して七種の身口業果を生ず。

問うて曰く、殺生を離れざる皆是れ殺生罪なりや不や。若しは殺生罪皆是れ殺生を離れざるやと。答へて曰く、殺生を離れずして即ち是れ殺生罪有り。殺生を離れずして殺生罪に非ざる有り。何等か是れ殺生を離れずして即ち是れ殺生罪なる。若し衆生有りて、是の衆生を知るが故に命を殺奪する

所有の諸法、若しは已生、若しは今生、若しは當生によりて是の因緣も亦是の如し。「所緣」とは、衆生に緣る。「與誰作緣」とは、是の不殺生の邊の所有の諸法、若しは已生、若しは今生、若しは當生に因りて不殺生に緣る。「增上」とは、諸の善根增上し、正念も亦增上す。隨つて何心を以つて殺生せざるも是なり。心も亦增上す。「與誰作增上」とは、是の不殺生の邊の所有の諸法、若しは已生、若しは今生、若しは當生に於いてす。「何利益」とは、殺罪と相違する是を名づけて利と爲す。「何果」とは、殺生と相違するを名づけて果と爲す。不劫盜・邪婬・妄語・兩舌・惡口・散亂語・不貪・不恚・正見も亦是の如し。但し所緣と異有り。不劫盜は所用物に緣り、不邪婬は衆生に緣り、不妄語・不兩舌・不惡口・不散亂語は名字に緣り、不貪取は所用物に緣り、不瞋惱は衆生に緣り、正見は或は名字に緣り、或は義に緣る。有漏は名字に緣り、無漏は義に緣る。是の菩薩、善等の論及び起等の十二論に於いて十善道を行じ、應に是の如く分別して知るべし。又知る。

七種の不善處は　貪瞋癡を以つて生す。
及び四門の分別あり、　業と衆生と各二あり。

*是の菩薩、七不善の業道は貪・瞋・癡を以つて生ずることを知り、而も世に分別して又七種の不善業を知る、中に四門の分別あり。是の殺罪は或は貪より生じ、或は瞋より生じ、或は癡より生ず。「貪より生ず」とは、若し人衆生を見て貪著の心を生じ、是の因緣により、好色・聲・香・味・觸を受用す。或は齒・角・毛・皮・筋肉・骨髓等を須ゐて、是の人是の如く貪心を生ずる故に、他の命を奪ふ。是を貪より生ずる殺罪と名づく。若し人瞋心もて喜ばずして衆生を殺さば、是を瞋より生ずと名づく。若し人邪見もて後世の善惡の業を知らずして衆生を殺さば、是を癡より生ずる殺罪と名づく。或は福德と爲すを以つての故に、或は苦を度せしめんと欲すが故に殺す。[一四]西方安息國等の如し。復た福德の因緣を取ること有るが故に殺す。是の殺業の因緣を以つての故に、天に生れんことを得ん事を

※七種の善、不善を四門分別す。

【一四】西方安息國＝波斯地方の古王國 Parthia のこと。西紀前第三世紀中葉の建國。Arsak 朝といふ。一時東北は康居、東南はアフガニスタンと境を接し、西南はチグリス、ユーフラテス河に及び、廣大なる範圍を有せし帝國。安世高、安法欽等の故國と傳へらる。

せず。或は業行に隨ひ、或は業行に隨はず、或は共業生、或は不共業生なり。亦た心說非業、報除因報、可以身證、慧證、或は可斷、或は不可斷なり。有漏は斷つ可く、無漏は斷つ可からず。可知見も亦是の如し。正見は是れ善性、或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫、或は非三界繫なり。「欲界繫」とは、若しは凡夫、若しは賢聖、欲界の念、正見に相應する是れなり。色、無色界も亦是の如し。「不繫三界」とは、賢聖の無漏正見なり。或は有漏、或は無漏とは、三界の繫は是れ有漏、不繫は是れ無漏なり。心數法・心相應・隨心行・共心生・無色無作・有緣・非業・業相應・隨業行・共業生・非先業報・除因報・可以身證慧證と或は可斷、或は不可斷なり。有漏は斷つ可く、無漏は斷つ可からず。可見、可知も亦是の如し。是を善等の二十種の分別と名づく。

※何より起る等の十二論とは、一に從何起、二には起誰、三に從何因起、四に與誰作因、五に何緣、六に與誰作緣、七に何所緣、八に與誰作緣、九何增上、十に與誰作增上、十一に何失、十二に何果殺罪なり。「何從起」とは、三の[三]不善根より起り、又邪念より起る、又隨て何の心を以つて衆生の命を奪ふも是の心より起る。「起誰」とは、殺罪の邊の所有の諸法、已生・今生・當生に從つて是の因緣も亦是の如し。「何所緣」とは、衆生に緣りて、又何心に因りて衆生の命を奪ふも、亦此の心に緣る。「與誰作緣」とは、殺罪邊、所有の諸法、若しは已生、若しは今生、若しは當生に因りて是の法、殺生罪を緣ず。「何失」とは、今世の惡名、人信ぜざる所等なり。「何果」とは、地獄・畜生・餓鬼・阿修羅等及び餘の惡處に墮して苦惱の報を受くるなり。「增上」と「與誰增上」とは、從何處起の中に於いて說けるが如し。劫盜・邪婬・妄語・兩舌・惡口・散亂語・貪取・瞋・惱・邪見も亦是の如し。但し所緣に異り有り。劫盜罪は所用物に緣り、邪婬は衆生に緣り、妄語・兩舌・惡口・散亂語は名字に緣り、貪取は所用物に緣り、瞋惱は衆生に緣り、邪見は名字に緣る。餘の殘りも上の如し。不殺生は三善根より起り、又正念より起る。又隨つて何心を以つて殺生を離るも是の心より起る。「起誰」とは、是の法

※從何起等の十二論。
一、從何起＝何より起る。
二、起誰＝誰に起る。
三、從何因起＝何の因より起るか。
四、與誰作因＝誰と與に因となるか。
五、何緣＝何をか所緣。
六、與誰作緣＝誰と與に緣となるか。
七、何所緣＝何の所緣。
八、與誰作緣＝誰と與に緣となるか。
九、何增上＝何をか增上。
十、與誰作增上＝誰と與に增上か。
十一、何失＝何の失か。
十二、何果＝何の果か。
【三】三不善根＝貪・瞋・痴。

れを不共心生と名づく。又人有り、先に殺生を遠離し、若しは睡り、若しは覺むるも、心餘事を緣じ、念念の中に於いて殺生せず、福常に增長するを得るは亦不共心生なり。「或は是れ色、或は非色」とは、一には是色、二には非色なり。一には是「作」、二には「非作」、一には「有緣」、二には「無緣」、是「業」と「非業相應」、「不隨業行」、或は「共業生」或は「不共業生」とは、共心生不共心生の如し。心と思とを除くを異と爲す。「非先業報」は因報を除く。可修と可善知は身證と慧證とを以てすべし。或は「可斷」或は「不可斷」とは、有漏は則ち可斷ず、無漏は不可斷ずなり。可知知見も亦是の如し。離劫盜・離邪婬・離妄語・離兩舌・離惡口も亦是の如し。離散亂語は或は欲界繫、或は色界繫、或は不繫三界なり。「欲界繫」とは、欲界の身心を以て散亂語を離るゝなり。色界繫も亦是の如し。不繫三界とは、不殺の中に說けるが如し。或は有漏、或は無漏なり。「有漏」とは、繫なり。「無漏」とは、不繫なり。餘は離妄語の中に說けるが如し。「不貪取」とは、是れ善性、或は欲界繫、或は非繫三界なり。「欲界繫」とは、欲界凡夫の不貪取及び賢聖の不貪取善行なり。是れ欲界繫なり。「非三界繫」とは、諸の賢聖の不貪取、無漏の善行なり。是れ或は有漏、或は無漏なり。欲界繫は是れ有漏、三界に繫せざるは是れ無漏なり。是れ心數法・心相應・隨心行・共心生・無色・無作・有緣・非業・業相應・隨業行・共業生・非先業報・除田報・可修・可善知・可以身證・慧證、或は可斷或は不可斷なり。有漏は斷つ可く、無漏は斷つ可からず。知見も亦是の如し。離瞋惱は是れ善性、或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫、或は不繫三界なり。「欲界繫」とは、欲界の不瞋惱善根なり。餘の二界も亦是の如し。「不繫」とは、餘の不繫是れなり。或は有漏、或は無漏なり。繫三界は是れ有漏、餘は是れ無漏なり。心數法は或は心相應、或は心不相應なり。纒と相違する不瞋の善根は心と相應し、使と相違する不瞋の善根は心と相應ぜず。隨心行、共心生も亦是の如し。無色、無作は或は有緣或は無緣なり。心相應應は是れ有緣、心不相應は是れ無緣なり。非業は或は業と相應し、或は業と相應

との共生を除くを異と爲す。[九]十五には非先世業報。十六には不可修。十七には應善知。十八には應に慧證を以つてして、身證を以つてせず。十九には可斷。二十には可知見なり。不離劫盜罪、不離邪婬罪、不離妄語罪の中には、但だ一には共心生、二には不共心生、一には有色、二には無色、一には作、二には無作、一には有緣、二には無緣なり。餘は殺の中に說くが如し。不離兩舌、不離惡口も亦是の如し。不離散亂語、或は不善、或は[一〇]無記は不善心より生ず。是の不善は無記心より生ず。是の無記は或は欲界繫、或は色界繫なり。「欲界繫」とは、欲界の身心を以つてなり。「散亂語」は是れ欲界繫なり。色界繫も亦是の如し。餘は妄語の中に說くが如し。「貪取」は欲界繫にして是れ有漏の心數法と、非心相應と、非隨心行と、心共生と、無色と、無作と、有緣と、非業相應と、非隨業行と、非共業生と、非先世業報と、除因報と、非可修と、應善知と、應以慧證と、身證と、可斷と、可見知となり。「瞋惱」は或は心相應或は心不相應なり。[一一]纏の所攝を心相應と名づけ、[一二]使の所攝を心不相應と名づく。隨心行、不隨心行も亦是の如し、共心生と不共心生とは、有覺の衆生は心と共生し、無覺の衆生は心と共生せず。心相應の如く、隨心行、共心生、業相應、隨業生、共業生も亦是の如し。心不相應の如く、不隨心行、不共心生、業不相應、不隨業行、不與業共生も亦是の如し。餘の分別は貪取の中に說くが如し。瞋惱の如く邪見も亦是の如し。十善道の中の(不)離奪他命は是れ善性と或は欲界繫、或は不繫三界なり。「欲界繫」とは、欲界の身を以つて他命を奪ふを離る、是れ欲界繫なり。「非三界繫」とは、學無學の人、八聖道に攝されて殺生正業を離るるなり。是れ或は有漏或は無漏とは、欲界繫は是れ有漏、三界繫に非ざるは是れ無漏なり。非心數法、非心相應、非隨心行或は共心生或は不共心生なり。何等か是れ「共心生」なりや。行人、虫を見て是の念を作す、我れ當に身業を遠離して傷害せざるべしとの如きは、是れ離奪命善行共心生と名づく。何等か是れ離殺生善不共心生なりや。人有り、身動かず、口言はずして但だ心に今日より殺生せずと念ず。是

【九】思は造作の義にて業を生ずる根本をいふ。心と思の伴起すると否との別を指す。

【一〇】無記＝善にも惡にも非らざる中間性をいふ。

【一一】纏＝煩惱の異名にして人を束縛するが故に纏といふ。普通に無慚・無愧等の八纏或は十纏を數ふ。

【一二】使＝前出序品第一註「結」參照。普通に貪瞋痴等の十使を擧げ時には見思二惑の總稱(百二十八使)とす。

善道、不善道に、　各二十の分別あり。
何處より起る等を知るに、　十二種の分別あり。

*菩薩は十善道十善道等種種の別相に於いて、二十種の分別を知る。又是の二十種分別に於いて善く何處より起る等の十二種の分別を知る。*此の十不善道中に於いて二十種の分別有り。所謂る不離奪他命罪なり。一には是れ不善。二には欲界繫[二]。三には有漏[三]。四には非心數法[四]。五には心不相應[五]。六には不隨心行。七には或は共心生[六]或は不共心生なり。何等か「共心生」なりや。實に衆生有り。是の衆生を知つて身業を以つての故に其の命を奪ふ。是れを共心生と名づく。云何が不共心生と名づくるや。若し人衆生を殺さんと欲して、捉持牽挽するに、地に撲著し已りて然る後能く死す。是れを不共心生と名づく。又身動かず、口言はず、但し心を生じて、我今日より當に衆生を殺すべしと、是の如き奪他命罪、是れを不共心生と名づく。又是の「不離奪他命」とは、若しは睡、若しは覺、常に積習増長するを亦不共心生と名づく。八には或は色、或は非色。初の共心生の殺罪は是れ色なり。第二の[七]殺罪と第三第四は是れ色に非ず。九には或は作[八]、或は非作。有色は是れ作、餘は無作なり。十には或は有緣或は無緣。色は是れ有緣、餘は是れ無緣なり。

問うて曰く、是の心は有緣と爲すや、無緣と爲すやと。答へて曰く、有緣に非ず。

問うて曰く、若し心有緣に非ざれば、身動かず、口言はざるの時、但だ心に念を生じて、我今日より當に衆生を殺すことを作すべしと。是の如き罪業は云何が名づけて非緣と爲すやと。答へて曰く、若し殺罪是れ心なれば、則ち應に有緣なるべし。今は實に殺罪は是れ心に非ず。若し心是れ殺罪ならば、卽ち是れ身業なり。而も心は實に身業に非ず。是の故に殺生罪は有緣と名づけず。但し殺生罪の共心は身世に在りて生ず。是れ無作を以つての故に非緣と言ふ。十一には是業。十二には非業相應。十三には不隨行。十四には或は共業生或は不共業生。共心生の如く異り無し。但だ心と思

※善等の二十種分別、十二種分別。
【二】繫＝繫縛のこと。
【三】有漏＝前出、淨地品第四註。
【四】心數法＝心數は新譯にての心所の舊譯。心に相應して心の有する所の數多の心作用をいふ。
【五】心不相應＝心と相應せざる諸法にして五位中の一。下に非心相應といふ。
【六】共不共は身口(色)と意(非色)との共不に就いて云ふ。
【七】前節の不共心生のこと。
【八】作は表、非作は無表の意。

の婦、鞭杖惱害等の障礙有るを知りて、此の事の中に於いて、貪欲の心を生じて身業を起す。或は自の所有の妻妾、若しは受戒、若しは懷妊、姙若しは乳兒、若しは非道[一]なれば、是れを邪婬と名づく。此の事を遠離するを名づけて「善身行」と爲す。「妄語」とは、覆相・覆心・覆見・覆忍・覆欲、是の如き相を知りて而かも更に異說す、是れを妄語と名づく。此の事を遠離するを名づけて「遠離妄語善行」と爲す。「兩舌」とは、他と離別せしめんと欲して、此の事を以つて彼に向つて說き、彼の事を以つて此に向つて說く。他と離別せしめんと爲すが故に、和合する者をして別離せしめ、別離する者則ち隨順せば　樂つて別離を爲さしめ、別離を喜び、別離を好む、是れを兩舌と名づく。此の如き事を離るゝを名づけて「遠離兩舌善行」と爲す。「惡口」とは、世間の所有る惡語・害語・苦語・麁語・弊語は他をして瞋惱せしむ、是れを惡口と名づく。此の事を遠離するを名づけて「離惡口善行」と爲す。「散亂語」とは、非時語・無利益語・非法語・無本末語・無因緣語、是れを散亂語と名づく。此の事を遠離するを名づけて「離散亂善行」と爲す。「貪取」とは、他に屬するの物、他の欲する所、他の田塢、他の財物を心に貪取して願つて得んと欲するなり。此の事の中に於いて貪らず、妬まず、欲得せんと願はざる、是れを「不貪善行」と名づく。「瞋惱」とは、他の衆生に於いて瞋恨心を礙して心に瞋惱を發して、此の念を作す。何んぞ打縛殺害せざらんと。是れを瞋惱と名づく。此の如き事を離るゝを名づけて「無瞋惱善行」と爲す。「邪見」とは、言ふ心布施も無く、思として報ずること有ること無く、善惡の業に果報なく、今世も無く、後世も無く、父母も無く、沙門も無く、婆羅門も無く、能く此世後世を知つて、了了通達して自身に證を爲す。是を邪見と名づく。「正見」とは、施す者有らば思報あり、善惡の業報有り、今世後世有り、世間に沙門婆羅門有りと爲して、此世後世を知り、了了通達して自身に證を作す。是を「正見善行」と名づく。是の菩薩是の如く正見道に入る。

【一】非道＝婬戒に非時非處非量非支の制あり。

卷の第十四

分別二地業道品の餘

菩薩、此の地に住せば、　自然に惡を行ぜず。
深く善法を樂ふが故に、　自然に善道を行ず。

*問うて曰く、十不善道は自然に作さざるや。自然に十善道を行ずるや。此の二種の道は幾くか是れ身行、幾くか是く口行、幾くか是れ意行なりやと。答へて曰く、

身と意との二に三種あり、　口に四あり、善も亦爾り。
略說せば則ち是の如し、　此れを應當に分別すべし。

不善の身行に三種あり、所謂る他命を奪ふと劫盜と邪婬となり、不善の口行に四種あり、妄語と兩舌と惡口と散亂語となり。不善の意行に三種あり、貪取と瞋惱と邪見となり。善の身行にも亦三種有り、奪命と劫盜と邪婬とを離るるなり。善の口行にも亦四種あり、妄語と兩舌と惡口と散亂語とを離るるなり。善の意業に三種有り、不貪取と不瞋惱と正見となり。身口意の業道は、是れ善・不善は應に須く論議して、人をして解すことを得しむべし。初に「奪命不善道」とは、所謂る他の衆生有りて、是の衆生を知るが故に惱害を行ず。是の惱害に因らば、則ち壽命を失うて、此の身業を起す、是を初に奪命不善道と名づく。此の事を離るゝが故に名づけて「離奪命善行」と爲す。「劫盜」とは、所謂る他に屬するの物、是の物他に屬するを知りて劫盜の心を生じ、手に此の物を捉へ擧げて此の處を離し、若しは劫め、若しは盜み、是れ我が物なりと計して我所の心を生ず。是れを劫盜行と名づく。此の事を離るゝをば名づけて離劫盜善行と爲す。「邪婬」とは、所有る女人、若しは父母の爲めに護られ、若しは親族に護られ、姓の爲に護られ、世法に護られ、戒法に護られて、若しは他人

※十善道と十不善道とを重釋す。

問うて曰く、若し此の法を深樂し、堅固にせば何の異事を得るやと。答へて曰く、

若し其の一時に、　深樂堅固の心を得ば、

更に復た功を用ひず。　使の常に隨逐するが如し。

使の一時に生じて常に人に隨逐するが如く、菩薩は是の如く一時に深樂堅固の心を得已つて、即ち常に隨逐し、更に功を用ふることを須ひずして生じ、若しくは少因緣を以つて便ち生ずるなり。何を以つての故に。根、深く入るが故に莖節、相續するなりと。

*問うて曰く、若し菩薩是の十種の心を得ば何等の果を得るやと。答へて曰く、

若し是の諸の心を得て、　正しく第二地に住せば、

三種の離垢を具す。　惡と業と及び煩惱となり。

若し菩薩是の直等の十心を得ば、即ち第二菩薩地に住すと名づく。一。に離垢とは、地名なり。二。に離垢とは、此の地中に於いて、十不善道の罪と業の垢を離る。三。に離苦とは、貪欲、瞋恚等の諸の煩惱の垢を離るるが故に名づけて離垢と爲す。復た次に離垢の義とは。

※十心の得果。

若し人少勢力にて、　大乘を發すに堪へずんば、
次に當に敎へて、　辟支聲聞乘に住せしむべし。
若し人辟支聲聞乘に　住するに堪へずんば、
應に此の衆生に敎へて、　福の因緣を行ぜしむべし。
三乘に住するにも任ぜず、　人天の樂にも堪へずんば、
常に今世の事を以つて、　隨つて之を利益すべし。
若し諸の衆生有つて、　菩薩の利を受けずとも
此れに於いて應に捨すべからず。　應に大慈悲を生ずべし。

汝、云何ぞ菩薩は不離心を得て、不貪心を生ずと言ふや。若し菩薩貪ならずんば、衆生は則ち捨離せらる。何ぞ能く度せんやと。答へて曰く、應に菩薩道に隨順して捨心を行ずべし。何を以つての故に。是の人、捨心に因つて廣快心を生じて是の念を作せばなり、我れ若し是の衆閙を捨つれば當に禪定を得べく、禪定に因つて妙廣快法を生じ、是の法を得已つて其の後に則ち能く衆生を利益すること、今に勝ること千萬倍ならんと。是の故に多く衆生を利益せんが爲めに、少時捨心して權に衆閙を捨て、當に禪定・五神通等を得て衆生を利益すべし。菩薩は何が故に是の如き方便を作すや。菩薩は爲めに大心を得て而も是の念を作す。大人は大利益を樂ふが故に、小利を存せず、是の故に、我れ今當に大人の法を求めて、隨つて修學すべし。應に是の如く勤めて、精進を加へて大利益を爲すべしと。所謂る諸禪定・神通滅苦・解脫等なり。是の故に汝が說は非なり。

問うて曰く、初地の中に已に直心等の法有り。何が故ぞ、復た、菩薩は二地を得んと欲せば十心を生ぜよと說くやと。答へて曰く、初地に此の法有りと雖も未だ深樂を得ず、未だ堅固有らず。此の地中に在りては心常に憙樂し、轉た深く堅固にして施用に堪任す。是の故に汝が難は非なりと。

なり。先の伏心已に遮して寂滅なり。復た人有つて言く、諸の禪定を得る、是を寂滅心と名づく、經に說くが如し、「若し人善く禪定の相を知つて、其の味を貪らずんば、是を寂滅心と名づく」と。寂滅心を得已らば、必ず眞妙心を生ず。「(六)眞妙心」とは、諸の禪定・神通・所願事の中に於いて意の如く用を得るなり。譬へば眞金の意に隨つて用ゐらるるが如し。行者既に直心乃至眞妙心を得已らば、是の心を守護するが爲めの故に樂つて不雜心を生ず。「(七)不雜心」とは在家出家と與に從事せざるなり。是の人是の念を作す。我れ是の如き等の心を得たり。皆禪定力に由るが故に、是の諸心を以つて、當に第二地等の無量の利益を得べしと。若し衆人と與に雜はる者は、則ち此の利を失す。何を以つての故に。若し人衆人と雜行せば、則ち眼等の六根或る時は還つて諸の不善法を發す。何を以つての故に、可染・可瞋・可癡の法に親近するが故なり。諸根發動して煩惱の火然ゆれば、煩惱の火然ゆるが故に、則ち此の利を失す。此等の過を見るが故に、不雜心を生じて應に在家出家の者と與に雜行すべからず。是の人是の不雜心を得已つて次に不貪心を生ず。「(八)不貪心」とは、在家出家の人中、所謂る父母・兄弟・和上・師長等に於いて貪著を生ぜず。是の念を作す、若し我れ在家出家に於いて貪著を生ぜば、必ず當に來往問訊すべし。我は則ち何ぞ不雜心有らんやと。是の故に我れ諸の禪定等の利をして不雜心に住せしめんと欲せば當に在家出家に於いて貪著心を捨すべしと。

*問うて曰く、菩薩の法は應に衆生を捨ずべからず、應に捨心を生ずべからず。助菩提中に說くが如し。

菩薩は初め精進して、　所有る方便力もて、
應に諸の衆生をして、　大乘中に住せしむべし。
若し人恒沙の衆生に、　敎へて羅漢に住せしむるは、
一人を敎へて、　大乘に住せしむるの勝と爲すに如かず。

※十心の決擇。

と、能く五神通に遊戯すると、常に智に依ると、常に善惡の衆生を捨てざると、所言決定せると、言必ず皆實なると、一切善法を集めて心に厭足無きとなり。是を三十二法と爲し、七法と爲す。菩薩の此を成就する者を名づけて眞實の菩薩と爲す。

分別二地業道品[26] 第二十八[27]

諸の菩薩は已に　初地を具足することを得て、
第二地を得んと欲せば、　當に十種の心を生ずべし。

*諸の菩薩已に歡喜初地を得ば、二地を得んが爲めの故に十種の心を生ぜよ。是の十心に因つて能く第二地を得。人、樓觀に上らんと欲せば要ず梯に因つて上るが如し。問うて曰く、何等か是れ十心にして、第二地を得る方便なりやと。答へて曰く、

直心と堪用心と、　軟と伏と寂滅との心と、
眞妙と、雜と貪とにあらざると、　快と大心とを十と爲す。

諸菩薩已に初地を具足して第二地を得んと欲せば、是の十方便心を生ぜよ。一には直心、二には堪用心、三には柔軟心、四には降伏心、五には寂滅心、六には眞妙心、七には不雜心、八には不貪心、九には廣快心、十には大心なり。(一)「直心」とは、諂曲を離るるなり。諂曲を離るるが故に心轉た柔軟なり。(二)「柔軟」とは、剛强麁惡ならざるなり。菩薩是の柔軟心を得ば、種種の禪定を生じ、亦諸の善法を修習す。諸法實相を觀ずれば、心則ち(三)「堪用」なり。心堪用なるが故に伏心を生ず。(四)「伏心」とは、善く能く眼等の諸根を降伏するなり。經中に說くが如し。「何等か是れ善道なりや。所謂る比丘の眼根乃至意根を降伏するなり」と。大根を降伏するを以ての故に、名づけて伏心と爲す。心已に降伏すれば、則ち寂滅心を生じ易し。(五)「寂滅心」とは能く貪欲・瞋恚・愚癡等の諸の煩惱を滅する

【二六】この品以下は第二離垢地得道の相を明す。
【二七】二十八＝正藏に一に作る。今宋、元、宮本による。

※第二地得道の十心。

但だ空願を發して、　自ら是れ菩薩と言ふは、
名字のみにして菩薩爲るには非ず。　略說せば、
能く三十二法を成就する者を、　乃ち名づけて菩薩と爲す。

若し人發心して佛道を求めんと欲し、自ら是れ菩薩なりと言ふも、空しく名號を受けて功德・慈悲心・諸波羅蜜等を行ぜざれば、是を名づけて菩薩とは爲さず。土城を寶城と名づけざるが如し。但だ自ら身を誑し亦諸佛を誑し、亦世間の衆生を誑かすなり。

※若し人三十二妙法有つて亦能く發願せば、是を眞實の菩薩と名づく。何等か三十二なりや。一には深心に一切衆生の爲めに諸の安樂を求む。二には能く諸佛の智中に入る。三には自ら作佛・不作佛に堪任するを審知す。四には他を憎惡せず。五には道心堅固なり。六には假りに僞つて結託して親愛ならず。七には乃至未だ涅槃に入らざれば常に衆生の爲めに親友と作る。八には親疎に心を同じうす。九には已に善事に許して心に退轉せず。十には一切衆生に於いて大慈を斷ぜず。十一には一切衆生に於いて大悲を斷ぜず。十二には常に正法を求めて心に疲懈無し。十三には勤めて精進を發して心に厭足無し。十四には多聞にして而も義を解す。十五には常に己が過を省みる。十六には彼の闕を譏らず。十七には一切の見聞事中に於いて常に菩提心を修す。十八には施して報を求めず。十九には戒を持して一切の生處を求めず。二十には一切の衆生に於いて忍辱にして瞋礙無し。二十一には能く勤精進して一切の善根を修習す。二十二には無色定生に隨はず。二十三には方便所攝の智慧あり。二十四には四攝法の所攝の方便あり。二十五には持戒、毀戒のものを慈愍して二無し。二十六には一心に法を聽く。二十七には一心に阿練若處に住す。二十八には世間の種種の雜事を樂まず。二十九には小乘に貪著せず。三十には大乘の利益を見て大なりと爲す。三十一には惡知識を遠離す。三十二には善知識に親近す。菩薩は是の三十二法に住して能く七法を成ずるなり。所謂、四無量心

※眞實の菩薩の三十二妙法。

好き堅牢の船を捨て、　石を抱いて渡らんことを求めんと欲するなり。

復た九法有り、應に疾く遠離すべし。一には阿耨多羅三藐三菩提を聞かず、二には聞き已つて信ぜず、三には若し信ずるも受けず、四には若し受くるも誦持せず、五には若し又誦持するも義趣を知らず、六には若し知るも說かず、七には若し說くも說の如く行ぜず、八には若し說の如く行ずるも常に行ずること能はず、九には若し能く常に行ずるも善く行ずること能はざるなり。說くが如し、

癡人は無上正眞道を、　聞かんと欲せず、
聞き已るも信ずること能はず、　又誦持すること能はず、
義を知らず、說かず、　所說の如く行ぜず、
常に善く行ずること能はず、　又安慧を念ずること無し。
是の如き愚癡の人は、　道果を得るに堪へざること、
猶し罪惡人の　天上に生ずるを得ざるが如し。

復た十過有り、應に疾く遠離すべし。所謂る十不善道なり。說くが如し、

癡人は少時に於いて、　貪愛の弊、五欲あり。
十善道を捨離して、　十不善道を行ず。
諸天の樂は手に在るに、　而も復た自ら捨棄す。
小錢利を貪つて、　而も大寶藏を捨つるが如し。

*問うて曰く、汝の、無上道相を說くの時、種種の因緣をもて空發願の菩薩の、自ら菩薩と言ふを、但だ名字の菩薩なりと訶罵す。若し是の三を、名づけて菩薩と爲さざれば何の法を成就するを名づけて眞の菩薩と爲すやと。答へて曰く、

※名字菩薩と眞實菩薩。

四には懈怠・五には調戯・六には愚癡なり。説くが如し、

慳貪垢汚の心あり、　破戒にして而も懈怠、
無知なること牛羊の如く、　瞋を好むこと毒蛇の如く、
心亂るること〔一五〕獼猴の如く、　諸蓋を遠離せざれば、
天に生ずるすら甚だ難しと爲す。　何に況んや佛道を得るをや。

復た七過有り、應に疾く遠離すべし。一には多く事務を樂ひ、二には多く讀誦を樂ひ、三には睡眠を樂ひ、四には語説を樂ひ、五には利養を貪り、六には常に人をして喜ばしめんと欲し、七には道心に迷悶して愛行に隨ふなり。説くが如し、

弊人は事務を樂ひ、　多く外經を誦せんと樂ふ。
癡人は睡眠を樂ひ、　共に聚つて衆と語らんことを樂ふ。
作佛せんと願欲すと雖も、　而も深く利養に著す。
是れ恩愛の奴僕にして、　佛道に迷悶す。
是の如き諸の惡人は、　自ら是れ菩薩なりと言ふ。

復た八法有り、應に疾く遠離すべし。一には邪見、二には邪思惟、三には邪語、四には邪業、五には邪命、六には邪方便、七には邪念、八には邪定なり。説くが如し、

若し人有つて愚癡にして、　八邪道を行じ、
邪に諸の經法を學び、　好んで邪師に隨逐し、
八聖道、深妙の　諸の功德を遠離し、
堅く煩惱に深著して、　而も或は菩提を願ふ。
是の如き愚癡の人は、　大海を度らんと欲して、

【一五】獼猴＝大猿のこと。

佛說きたまはく、命を愛する者は、　首を斬らば則ち大いに畏る。
是の如く作佛せんと欲せば、　二乘を應に大いに畏るべし。

復た三過有り、應に疾く遠離すべし。一には諸の菩薩を憎み、二には菩薩の所行を憎み、三には甚深大乘經を憎むなり。說くが如し、

小智は小緣を以つて、　諸の菩薩を憎恚し、
亦菩薩道を憎み、　亦大乘經を憎む。
解せざるが故に信ぜず、　大地獄に墮在し、
怖畏して大いに驚喚す。　是の事應に遠離すべし。

復た四過有り、應に疾く遠離すべし、一には諂、二には曲、三には急性、四には無慈愍なり。說くが如し、

自ら是れ菩薩なりと言ふとも、　其の心に諂曲多く、
急性にして容るる所無く、　慈愍の心を行ぜざれば、
是れ阿鼻獄に近し、　佛道を離るること甚遠なり。

復た五過有り、應に疾く遠離すべし。一には貪欲、二には瞋恚、三には睡眠、四には調戲、五には疑なり、是を五蓋覆心と名づく。說くが如し、

若し人放逸ならば、　諸蓋則ち心を覆ひ、
生天することすら猶尚難し。　何に況んや得果に於てをや。
若し勤行精進せば、　則ち能く諸蓋を裂く。
若し能く諸蓋を裂かば、　願に隨つて悉く皆得。

復た六過有り。六波羅蜜と相違す。應に疾く遠離すべし。一には慳貪、二には破戒、三には瞋恚、

是の如き等の法は、菩薩は應に生ずべく、生じ已らば應に守護すべく、守護し已らば應に增長すべし。一善事に於いて一より轉た增すべし。

*亦應當に知るべし。佛道を求むる者は一。惡。法に於いて應に疾く遠離すべし。所謂る放逸を遠離するなり。說くが如し。

若し人、生死の險惡道を、度すること能はされば、
是を呵責すべきことと爲す。最も是れ罪惡事なり。
富樂を樂ふと雖も、而も貧賤の家に生れ、
善根を種うること能はずして、人の爲めに奴僕と作る。
皆放逸の因緣の、致す所に由る。
是の故に有智の者は、疾く遠ざかること惡毒の如し。
若し未だ大悲を成ぜざれば、無生忍不退なるも、
而も放逸を行ぜば、是れ則ち名づけて死と爲す。

復た二。過。有り、應に疾く遠離すべし。一には聲聞地を貪り、二には辟支佛地を貪るなり。說くが如し。

若し聲聞地、及び辟支佛地に墮せば、
是を菩薩の死と名づけ、亦一切失と名づく。
地獄に墮すと雖も、應に怖畏を生ずべからず。
若し二乘に墮せば、菩薩は應に大いに畏るべし。
地獄に墮すと雖も、永く佛道を遮せず。
若し二乘に墮せば、畢竟じて佛道を遮す。

※十類の惡法。增一十法。

戯論なり。說くが如し。

若し人決定心もて、　八大人覺に住し、
佛道を求めんが爲めの故に、　諸の惡覺觀を除かば、
是の如くんば則ち久しからずして、　疾く無上道を得。
人の善を行ずる者の如く、　必ず當に妙果を得べし。

復た九法有つて能く佛道を攝す。所謂る大忍・大慈・大悲・慧・念・堅心・不貪・不恚・不癡なり。說くが如し。

大忍・大慈、　及び大悲を具足し、
又能く慧・念、　及び慳心の中に住して、
深心に無貪、　無恚癡の善根に入る。
若し能く是の如くなる者は、　佛道則ち手に在り。

復た十法有つて能く佛道を攝す。所謂る[一四]十善道なり。自ら殺生せず、他に敎へて殺さしめず、殺を見て心稱讚せず、殺を見て心喜ばず。乃至邪見も亦是の如し。是の福德を以つて阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。說くが如し。

衆生を惱害せず、　亦劫盜を行ぜず、
他婦を婬犯せず、　是の三を身業と爲す。
妄語・兩舌せず、　惡口・綺語せず、
貪・惱・邪見せず、　是れ七の口・意行なり。
是の如んば則ち能く、　無上佛道の門を開く、
若し佛を得んと欲せば、　當に是の初門を行ずべし。

【一四】十善道＝偈に出づ。

如し。

諦・捨・定を具足し。　慧利清淨なることを得て、
精進して佛道を求めば、　當に此の四法を集むべし。

復た五法有つて能く佛道を攝す。一には信根、二には精進根、三には念根、四には定根、五には慧根なり。說くが如し。

信根と精進根と、　念と定と慧と堅牢にして、
是の法大悲と合せば、　終に佛道を退せず。
人の五根を得て、　能く五塵に通達するが如く、
かくの如く信等の根を得て、　能く諸の法相に通ず。

復た六法有つて能く佛道を攝す。所謂る布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧波羅蜜なり。說くが如し。

說く所の如く六度もて、　諸の煩惱を降伏して、
常に善根を增長せば、　久しからずして當に佛を得べし。

復た七法有つて能く佛道を攝す。所謂る七正法なり。信・慚・愧・聞・精進・念・慧なり。說くが如し。

七正法を得んと欲せば、　當に定・精進を樂ふべし。
七邪法を除去して、　能く諸の功德を知らば、
是の人能く疾く、　無上佛菩提を得。
生死に沒する者を拔いて、　安隱の處に在らしむ。

復た八法有つて能く佛道を攝す。所謂る[一三]八大人覺なり。少欲・知足・遠離・精進・念・定・慧・樂不

【一三】八大人覺＝本文に詳說す。

※初地菩薩所行の法を要說す。

※十類の善法。増一十法。

*問うて曰く、汝、菩薩所行の法を廣說せんと欲するに、初地の義尙多し、諸の學者轉た增廣せば、則ち懈怠心生じて讀誦すること能はざらんことを恐る。是の故に汝今應に多く讀誦すること能はざる者の爲めに、略して菩薩所行の諸法を解すべしと。答へて曰く、

菩薩の所有る法、　是の法は皆應に行ずべし。
一切の惡は應に捨つべし。　是を則ち略說と名づく。

*上來の諸品に說く所の如く、諸地の法を能く生じ、能く增長するは上の諸品中に說くが如し。若し餘處に於いて說かば、皆應に菩薩過惡の事を生ぜしむべく、皆應に遠離すべし、是を略して菩薩の所應行を說くと名づく。法句の中に說くが如し、「諸惡を作す莫れ、諸善を奉行せよ。自ら其の意を淨む、是れ諸佛の教なり」と。一法有つて佛道を攝す。菩薩應に行ずべし。云何が一と爲すや。所謂る善法の中に於いて一心に放逸せざるなり。佛、阿難に告げたまふが如し。「我れ放逸せざるが故に阿耨多羅三藐三菩提を得」と。說くが如し。

放逸せざれば成佛す。　世間に與に等しきこと無し。
若し能く放逸せざれば、　何事か成ぜざらんや。

復た二法有つて能く佛道を攝す、一には不放逸、二には智慧なり。說くが如し。

不放逸と智慧と、　佛是の利門を說く。
不放逸にして、　而も事成ぜざる者を見ず。

復た三法有つて能く佛道を攝す。一には學勝戒、二には學勝心、三には學勝慧なり。說くが如し。

戒は上三昧を生じ、　三昧は智慧を生じ、
智は諸の煩惱を散ず。　風の浮雲を吹くが如し。

復た四法有つて能く佛道を攝す。一には諦處、二には捨處、三には滅處、四には慧處なり。說くが

菩薩は是の中に住して、　多く閻浮王と作り、
常に慳貪の垢を離れて、　三寶の念を失せず。
心常に作佛を願ひ、　諸の衆生を救護す。

「初地」を歡喜と名づく。已に略して說き竟りぬ。諸佛の法は無量無邊なれども是の地を本と爲す。若し廣く說かば亦無量無邊なり。是の故に略說と言ふ。菩薩は是の地の中に住して、多く閻浮提に勢力ある轉輪王と作り、先世に是の地を修習する因緣の故に、布施を信樂して慳貪の垢無く、常に三寶に施すが故に、三寶の念を失せず。常に作佛を念じ、諸の衆生を救ひ、是の如き等の善念常に心中に在り。復た次に、

若し出家を得んと欲して、　勤心に精進を行せば、
能く數百の定を得、　數百の佛を見ることを得、
能く百世界を動す。　飛行も亦是の如し。
若し光明を放たんと欲せば、　能く百世界を照し、
數百種の人を化し、　能く壽百劫を住し、
能く數百の法を擇び、　能く百身を變作し
能く百菩薩を化して、　示現して眷屬と爲す。
利根は是の數に過ぐ、　佛の神力に依るが故なり。
已に初地の相、　果力淨治の法を說きぬ。
今當に復た更に、　第二無垢地を說くべし。

「果」とは、數百定を得、數百佛を見る等に名づく。「勢力」とは、能く數百の衆生を化するに名づく。餘の偈の義は先に已に說けば、復た餘の偈を解せず。今當に復た第二無垢地を說くべし。

だ佛に至る道を行く。彼の好道には多く飲食有るが如く、十住の道にも亦是の如く多く布施・持戒・修禪を行ず。彼の導師は多くの財物を以て、善く能く法を治め、大勢力有るが如く、菩薩も亦是の如く財物有つて法を治むるが故に大勢力有り。「財」とは、七財なり。所謂る信・戒・慚・愧・捨・聞・慧なり。「法を治む」とは、一切の魔・種種の沙門・婆羅門・外道論師を悉く能く摧伏す。是を威勢と爲す。彼の大城には怨賊・疫病・暴死・種種の衰惱有ること無きが故に、名づけて「安隱」と爲すが如く、涅槃の大城も亦是の如く、諸魔・外道の諸流・貪欲・瞋恚・放逸・死・憂悲・苦惱・啼哭有ること無きが故に、名づけて安隱と爲す。彼の大城には多く飲食有るが故に名づけて「豐饒」と爲すが如く、涅槃の城も亦是の如く、多く諸の深禪定・解脫・三昧有るが故に、名づけて豐饒と爲す。彼の大城は多く容受する所なるが故に、名づけて大城と爲すが如く、涅槃の城も亦是の如し、多く衆生を受くるが故に名づけて大〔城〕と爲す。假令ひ、一切の衆生をして諸法を受けざらしむるが故に皆無餘涅槃に入るも、而も涅槃の性は增すこと無く、減ずることも無し。彼の導師は、能く多衆を將ゐて安隱の好道を示すが故に、名づけて導師と爲すが如く、菩薩も亦是の如し。善く衆生を將ゐて佛法を示し、涅槃を示し、生死の險道より涅槃に至るを得しむるが故に、名づけて大導師と爲す。彼の導師は善く道の相を知るが故に身及び餘人皆惡有ること無きが如く、菩薩も亦是の如く自ら貪・瞋・恚等の諸蓋・諸惡・苦行・老死・深坑を行せず、亦寒熱地獄・餓鬼に墮せざるが故に名づけて、自ら惡を得ず、隨從する所の者も亦惡を得ずと爲す。是の故に偈の中に說く、善く道相を知るが故に自ら惡を得ず、餘も惡を得ずと。

〔二三〕略行品　第二十七

菩薩の歡喜地、　*今已に略して說き竟りぬ。

【二三】この品は上來廣說せる初地を結し、行者の爲めに、十類の善法と十類の惡法とを擧ぐ。

※初地を結す。

く、大乘を發さん者の福徳因緣に、第一に五欲有り。是の故に無しと言ふことを得ず。但だ惡しきもの無きのみ。復た次に深叢林の如きは入り難く、過ぎ難く、諸の難礙多し。菩薩の五欲は則ち然らず、凡夫の五欲に於いて諸の過惡を生ずるが如きにはあらず。是の如きの故に但だ「〔惡〕叢林無し」と說くのみ。「道の寬博にして多く容れ、相ひ妨礙せざるが如く、十住の道も亦是の如く容受する所多し。無量百千萬億の衆生共に無上道心を發すに而も相ひ妨礙せず、是の百千萬億の衆生、若しは一切の衆生、倶に阿耨多羅三藐三菩提心を發して、同じく此の道を行ずるも相ひ妨礙せず。道は多人の所行なるが如く、十住の道も亦是の如く恒河沙に等しき過去・現在の諸佛は菩薩道を行ずる時に皆此の道を行ず。彼の好道は行くに疲厭せざるが如く、十住の道も亦是の如く、多く因果諸樂有り。所謂る多く人天の中に生じて果報を受け、離欲を樂ふが故に歡喜樂・禪定樂・無喜樂・現在樂を受け、是の諸樂を得るが故に疲厭有ること無し。道に多く華果根有るが如く、十住の道も亦是の如く多く根・華・果あり。「根」とは、〔九〕三善根、「華」とは、〔一〇〕七覺華是れなり。經に說くが如し、「七華とは、七覺意是れなり」と。「果」とは〔一一〕四沙門果是れなり。是の如き等は好道功德に違つて過つこと無きが故に名づけて離惡と爲す。導師は道中にて是の中に應に食すべく、是に應に宿すべく、彼處にも亦應に宿すべきを知るが如く、菩薩、十地を行くも亦是の如し。何處に宿す可く、何處に食す可きかを知る。「宿す可し」とは、諸の現在の有佛の處に名づけ、「食すべし」とは、善法を修習すること得可き處に名づく。食は能く諸根を利益して亦壽命を助くるが如く、諸の善法も亦是の如く能く信等の諸根を益して慧命を助成す。「異處宿」とは、彼の佛所より餘の佛所に至るに名づく。復た次に此の佛國土と彼の佛國土との中間も亦異處と名づく。「善く道を轉ずるを知る」とは、彼の導師は道の不安隱なるを知れば則ち轉ずるが如く、菩薩も亦是の如く、善く是の道は聲聞に至り、是の道は辟支佛に至り、是の道は佛に至るを知り、是の如く知り已つて聲聞道・辟支佛道を捨て但

【九】 三善根＝三毒に對して無貪・無瞋・無慧（爲智慧）を三善根といふ。
【一〇】 七覺華＝七覺支のこと。入初地品第二に出づ。
【一一】 四沙門果＝四果の聖者のこと。

墮して死すと」。道中に師子・虎狼・諸惡獸等無きが如く、十地の道も亦是の如く瞋恚・鬪諍有ること無し。師子等の惡獸は好んで他を惱害するが如く、瞋恚等の他を惱まさんが爲めの故に生ずるも亦復た是の如し。惡獸等は肉を噉ひ血を飲むが如く、瞋恨等も多聞慧の肉を食し、修慧等の血を飲むこと亦復た是の如し。彼の好道に寒熱過患有ること無きが如く、十地の道も亦是の如し。[七]寒氷地獄に墮せざるが故に寒過患有ること無く、[八]熱地獄に墮せざるが故に熱過患有ること無し。

*彼の好道には深坑等の諸難無きが如く、十地の道も亦是の如し。外道の苦行等の諸難有ること無し。所謂る身を灰にし。氷に入り、髮を拔き日に三たび洗ひ、一足を翹げ、日に一食、二日に一食、乃至一月に一食して默然として死に至り、常に一臂を擧げ、常に忍辱を行じ、五熱もて身を炙り、刺蕀の上に臥し、火に入り、水に入り、自ら高巖より投じ、深爐の中に立ち、牛屎もて身を燒き、直に一方に趣いて諸難を避けず、常に濕へる衣裳を著け、水中に臥する等、身苦しく、心苦しくとも正智に至らざる、是の如き等のこと無きが故に名づけて無難と爲す。道に邪徑無きが如く十地の道も亦是の如し。身口意の惡業無きが故に名づけて「邪徑無し」と爲す。道に刺蕀無きが如し。十地の道も亦是の如し。諸の業障の刺蕀無きが故に名づけて「刺蕀無し」と爲す。刺、脚を刺さば則ち行路を廢するが如く、業障の刺蕀も佛法を行じて涅槃に入ることを障ふ。道の正直なるが如く、十地の道も亦是の如し。一切の諂曲・欺誑無きが故に名づけて正直と爲す。道に岐道少きが如く、十地の道も亦是の如く異道少し。何を以つての故に、大乘を發す者は、聲聞・辟支佛の道を行ずること少し。是の故に異道少し。或は菩薩有つて二乘道を行ぜば當に知るべし、未だ菩薩地に到らず、未だ正位に入らざるなりと、邊行を行ずるが故なり。彼の好道に諸の叢林、妨礙無きが如く、十住の道も亦是の如く五欲諸惡の叢林有ること無し。

*問うて曰く、何が故ぞ「都て五欲叢林無し」と言はずして、但だ「惡林無し」と言ふやと。答へて曰

【七】寒氷地獄＝前出、序品第一註參照。
【八】熱地獄＝前出、序品第一註參照。

※外道の苦行。

※第六問答。

長せしむ。火の能く燒き、能く煮、能く照すが如く、智慧の火も亦是の如し、諸の煩惱を燒き、諸の善根を成熟し、四聖諦を照す。火は是れ智慧なるが如く、薪は是れ能く智慧等を生ぜしむる諸法なり。「多水」とは、多くの諸の流河渠有つて意に隨つて取用し、大衆を充足するに名づく。泉井及び池の爾ること能はざる所なり。復た次に「多水」とは、人の、船に乗り、水に隨つて大城に至るに、井泉・[四]陂池の水は爾ること能はざるが如し。經に說くが如し。「信を大河と爲し、福德を岸と爲す。河は熱を除き、渇を除き、垢を除き、能く勢力を生ずるが如く、善法中の信も亦是の如く、能く三毒の熱を滅し、三惡行の垢を除き、[五]三有の渇を除く。涅槃の爲めの故に」と。善法の中に於いて勢力を得ば、彼の好道に多くの諸根藥草有つて、則ち行く者乏しきこと無きが如く、十地の道も亦是の如し。「根」とは深心所愛に名づく。根有るが故に則ち芽莖・枝葉等及び諸の果實を生ずるが如く、深心に道を愛せば正憶念・大願等の諸の功德を生ず。「藥草」とは、諸波羅蜜に名づく。藥草の能く諸毒を滅するが如く、諸波羅蜜の藥草は貪・恚・癡の毒、諸の煩惱の病を滅すること亦復た是の如し。彼の好道韋婆陀を失せざれば、則ち行道安隱なるが如し。「韋陀」とは、秦には無對義と言ふ。是れ符檄なり。行者は符檄を失はざれば、則ち至らんと欲する所に在つて、障礙有ること無きが如く、十地の道も亦是の如し。韋婆陀を失せずんば則ち過ぐる所の諸地に在つて所集の善根は則ち能く意に隨つて助成し、現在の善根を增長し、彼又能く聲聞道・辟支佛道・欲界・色界の諸天道の衆生を教化して佛道に住せしむ。若しは魔・若しは外道も干亂(かんらん)すること能はず。是を韋婆陀を失はずと名づく。彼の好道に蚊虻・毒蟲の屬有ること無きが如く、十地の道も亦是の如し、憂愁・啼哭の弊有ること無し。彼の好道に賊難有ること無きが如く、十地の道も亦是の如く[六]五蓋・諸惡賊衆有ること無し。佛、比丘に告げたまふが如し。聚落の賊とは、所謂る五蓋なり。賊の先づ人の物を奪つて後に乃ち命を害するが如く、五蓋の賊も亦是の如く、先づ善根を奪つて後に慧命を斷じ、則ち放逸に

【四】陂＝陂は溜池。

【五】三有＝三界のこと。前出。

【六】五蓋＝前出、分別法施品第十三。

の如き等の事を名づけて好道の相と爲す。此と相違するを名づけて惡道の相と爲す。「此處」とは、人衆の止宿し、食息するの處に名づく。「彼處」とは、是處より至る異處に名づく。若し二宿の中間なるも亦異處と名づく。「轉道」とは、岐道有ることを見るに名づく。大城に至らん者は是の道を行くべく、餘を捨つべし。「資糧」とは、[一]麨蜜摶等の、道路にて食する所に名づく。「大力」とは、大勢力あつて多く財物有り善く治法を解するに名づく。「備足」とは、多く飮食有つて乏少する所無きに名づく。「安」とは、賊寇の恐怖の事無きに名づく。「隱」とは、疾病・苦痛・衰患有ること無きに名づく。「大城」とは、多く人衆を容るるに名づく。能く多くの人衆をして大城に至るを得せしむるに名づく。導師は、善く道相を解して自ら患難無く、亦人衆をして患難有ること無からしむ。善く道を諳ずるが故に、寒熱・飢渴・怨賊・惡獸・毒虫・惡山・惡水・深坑坎等、是の如き患難有ること無し。何を以つての故に、善く道路の好惡の相を知るが故なり。此を以つて歡喜等の十地に喩ふ。人の路を行くに、去つて休息せざれば能く大城に至るが如く、菩薩は是の如く、是の十地を行ぜば佛法に至り、涅槃の大城に入ることを得。彼の好道には薪・草・水等有つて行く者乏しきこと無きが如し。「草」とは、人の馬に乘るに路に好草多ければ、馬力强盛なるが如きに名づく。十地道の功德も亦是の如し。諦・捨・滅・慧の四勝處は諸の功德を助くるが故に名づけて草と爲す。何を以つての故に、若し人、實事を貴び、樂つて諦語に隨ひ、常に實語に親近せば、實に利樂有るを見て實語に隨ひ、深く妄語を惡み、妄語を遠離し、妄語の過を見て、樂つて聞かんことを欲せず。是の如き等の因緣にて諦勝處を得よ。捨等の三[二]處も亦應に是の如く知るべし。彼の好道は諸の象・馬・牛・驢等を須て大城に至るを得るに草其の力を助成せしむるが如く、是の如く諦・捨・滅・慧の處は能く佛法に至つて涅槃の大城に入らしむ。「薪」とは、多くの聞・思・[三]修の慧の、能く大智慧業に至るに名づく。薪の火をして然えしめ、亦猛盛ならしむるが如く、是の如く聞・思・修の慧は能く大慧を生じ、能く增

【一】麨蜜摶＝麨は米麥を熬り之を挽きて作りし粉。摶は手にてまろむること。おにぎりのこと。
【二】三處＝捨、滅、慧。
【三】聞・思・修の三慧。

卷の第十三

譬喩品の餘

*問うて曰く、菩薩は善く是の諸法を知らば、未だ佛道を得ずとも終に退せずとは、其の喩云何。答へて曰く、

大力の導師は、　善く好道の相と、
此處と彼處と、　轉道の宜しき所とを知りて、
資糧と及び行具とを、　皆悉く備足せしめ、
彼の險道中に於いても、　衆をして安隱を得て、
大城邑に至るを得せしめ、　能く衆をして患無からしむるが如し。
是の大導師は、　善く能く道を知るに由るが故に、
善く諸地の轉を知り、　助道の法を具足するなり。
菩薩は善く道の、　好惡此彼の處を知り、
自ら生死の險を度り、　兼ねて多くの衆生を導きて、
安隱處なる、　無爲の涅槃城に至らしめ、
悉く惡道に於いて、　衆の苦患に遇はざらしむ。
菩薩の方便力は　善く能く道を知るが故なり。

「好道の相」とは、多く薪・草・水有つて、寇賊・師子・狼虎及び諸の惡獸・毒虫の屬有ること無く、不寒・不熱にして惡山・溝坑・絕澗・險隘・深榛・叢林・隈障有ること無く、亦高下も無く、平直夷通して岐道少く、寬博にして多容、多くの人の行處にして、行くに厭惓無く、多く華果、食ふ可き物有る、是

※導師の喩もて、菩薩の地に通達する法に喩ふ。

*問うて曰く、汝は、是の諸法の中に於て、應に善く方便を知るべしと說けども、是の方便を得て何の用をか爲さんと。答へて曰く

菩薩若し善く、　諸地の中の相と得とを知らば、
佛道を成ずることを得ずとも、　終に初地を轉ぜず。

「相」とは、諸地を助くる等の十法に名づく。「得」とは相違法に名づく。八種有り、滅等の八法の應に行ずべからざるものなり。若し菩薩、善く是の法を知らば佛道を得ずとも終に退轉せずと。

※方便の用。

は上に已に說きたり。「清淨の法」とは、是の法を用つて能く初地を淨むるなり。所謂る先に初地の中の七法を說きたるが如し。

菩薩は初地に在つて、　多く能く堪受する所あり、
諍訟を好まず、　其の心に喜悅多く、
常に清淨を樂ひ、　悲心もて衆生を愍み、
瞋恚の心有ること無し、　多く是の七事を行ず。

是の如きの七法は能く初地を淨治す。「一地より一地に至る」とは、初地より二地に至り、二地より三地に至るが如し。餘も亦た是の如し。初地より二地に至れば不諂曲等の十心を得るが故に。二地より三地に至れば信樂等の十心を得るが故に。是の如き等の種種の心、種種の法を得るが故に、能く一地より一地に至るなり。「住地轉た增益す」とは、初地の中には檀波羅蜜多く、第二地の中には尸羅波羅蜜多く、又信等の諸法轉た勢力を得、第三地の中には多聞多く、又布施・持戒・信等轉た勢力を得るが如し。餘地の中にも亦た是の如し。「能く退せしむる者無し」とは、是の地の中に住すれば若しは沙門・婆羅門・若しは天魔・梵及び餘の世間にして能く轉ぜしむる者無し。何を以ての故に。大功德力を得るが故に、深く法性の底に入るが故に、大信解の故になり。「菩薩の淨地より無量佛地に至る」とは、若し菩薩は清淨なる一切地を具足し已らば則ち佛地を得るなり、此の諸事の中に於て皆應に善く方便を知るべし。「諸の善人を請問す」とは、正法を成就するが故に名づけて善人となす。正法とは、略して說かば、一には信、二には精進、三には念、四には定、五には慧、六には身口意の律儀、七には無貪・無恚・無癡なり。「憍慢を除捨す」とは、自ら謂く、我れは勝人の中に於て勝れたりといふを名づけて大慢となす。己と等しき中に於て勝れたりとし、心自ら高うするを名づけて憍慢となす。大なること他に如かず小は(他が)如かずと言ふを名づけて小慢となす。

問うて曰く、菩薩、何を用つて是の初地の相等を聞くを爲すやと。答へて曰く、是の菩薩、初地の相等の法の中に應に善く方便を知るべし。是の故に應に聞くべきなり。

△問うて曰く、菩薩は但だ應に此の法の中に於てのみ方便を知るべきや。更に餘法の中に於ても善く方便を知るやと。答へて曰く、是の諸法の中にて應に善く方便を知り、亦餘法に於ても善く方便を知るべしと。

問うて曰く、若し爾らば略して說くべしと。答へて曰く、

法にして能く地を助するもの有り、　法にして地に違するものあり、
法にして能く地を生ずるもの有り、　法にして能く地を壞するもの有り、
諸地の相の果有り、　諸地の中に諸地の
清淨分を得ること有り、　地より一地に至り、
住地轉た增益して、　能く退せしむる者無し。
菩薩の淨地より、　無量佛地に至るまでの
此の諸事中に於て、　應に善く方便を知るべし。
諸の善人を請問して、　憍慢を除破すべし。

「初地の法を助く」とは、所謂る信・戒・聞・捨・精進・念・慧等なり。是の如き等及び餘の諸法の初地に隨順する、是を助法と名づく。「相違する法」とは不信・破戒・少聞・慳貪・懈怠・亂念・無慧等及び餘の不隨順にして初地を助くること能はざるもの是なり。「地を滅するの法」とは、能く此の地を退失せしめ障礙して現ぜさらしむること、劫盡くるの時に、萬物都て滅するが如し、何ものか是れなる。所謂る能く菩提心を偸奪するの法なり。是れ先に已に說けり。「地を生ずる法」とは、初地を能く生じ、能く成ずるもの、所謂る菩提心を偸奪せざる法なり。是れ先に已に說きたり。地相と得果と地分と

△喩を以て初地七法を明かす。

初發心より乃し諸佛現前三昧を成ずるに至るまで、其の中間に於て具さに初地の功德を說き、能く是の諸の功德を生じ、生じ已つて修集し增長するを名づけて初地と爲す。「修果」とは、先に已に處處に若干福德を得と說き、聲聞・辟支佛地に廻向せず。今當に更に說くべし。菩薩は初地の果を得て能く菩薩の數百の定等を得るなり。「初地の分」とは、所有る諸法にして初地を合成するものを、名づけて諸分となす。麴米等は合して能く酒を成ずるが故に、酒の因緣と名づくるが如し。所有る諸法の能く初地を成ずるものを名づけて初地の分と爲す。所謂る、

信力轉た增上し、　大悲心を成就し、
衆生類を慈愍し、　善を修して心に倦むこと無く、
妙法を喜樂し、　常に善知識に近づき、
慚愧し及び恭敬し、　柔輭にして其の心を和す。
觀法して著すること無きを樂ひ、　一心に多聞を求め、
利養を貪らず、　奸欺諂誑を離れ、
諸の佛家を汚さず、　戒を毀つて佛を欺かず、
深く薩婆若を樂ひ、　動ぜざること大山の如し、
常に修習して、　轉上の妙法を行ぜんことを樂しみ、
出世間法を樂つて、　世間法を樂はざれば、
卽ち歡喜地を治す。　治し難きを而も能く治す。
是の故に常に一心に　此の諸の法を勤行して、
菩薩は能く是の如きの　上妙法を成就するを、
是れを則ち菩薩初地中に　安住すと爲す。

とは、諸佛菩薩に從ひ聞く所及び已に勝るる者なり。「諸地の分を得んが爲めに」とは、是の地の分を得んが爲めの故に勤行し、精進するなり。此の中の初地の相は、先に說くが如し。

菩薩初地に在りて　多く能く堪受する所あり。
諍訟を好まず、　其の心喜悅多し。
常に淸淨を樂ひ、　悲心衆生を愍み、
瞋恚の心有ることなく、　多く是の七事を行ず、

是の故に堪受・不諍・喜悅・淸淨・悲心・無瞋等の七法は是れ初地の相なり。此の堪受等の七法を成就するを名づけて「得」となす。
復た次に堪受等の七法の相は卽ち初地の得なり。偈に說くが如し。

若し厚く善根を種ゑ、　善く諸行を行じ、
善く諸の資生を集め、　善く諸佛を供養し、
善智識に護られ、　深心を具足す。
悲心もて衆生を念じ、　無上の法を信解す。
此の八法を具し已つて、　當に自ら發願して言ふべし。
我れ已に自ら度することを得て、　當に復た衆生を度すべし。
十力を得んが爲めの故に、　必定聚に入らば、
則ち如來の家に生じ。　諸の過咎あることなし。
則ち世間の道を轉じ、　出世の上道に入る。
是を以て初地を得。、　此の地を歡喜と名づく。

是の故に當に知るべし。菩提の爲めの故に得る所の決定心を名づけて、初地の修名を得と爲す。

諸佛を見ることを得已て、　勤心に而も供養せば、
善根增長を得て、　能く疾に衆生を化す。

「供養」とは、心意清淨なるに名づく、恭敬し、歡喜し、念佛せば無量の功德有り。種々の讚歎を以てするを「口供養」と名づく。敬禮、華香等を「身供養」と名づく。是の故に福德轉た更に增長すること、穀子地に在て雨潤へば生長するが如し。「疾く敎化す」とは、衆生をして三乘の中に住せしむるなり。是の如く菩薩は善根を增長す。

初の二攝法を以て、　諸の衆生を攝取す、
後の餘の二攝法は、　未だ能く信受することを盡さず。

「初の二」とは、布施、愛語なり。利益、同事名づけて「後の二」と爲す。是の菩薩初地に在りて、具に解すること能はざるが故に但だ能く信受す。

爾の時諸の善根、　佛道に廻向すること、
彼の成練金の調熟すれば、　則ち用ふるに堪ふるが如し。

智慧の火に煉せらるるが故に、菩薩の所行事中に於て、善根成熟して則ち任用に堪ふ。

譬喩品[五〇]　第二十六

*是の菩薩、應に地相と、　得る修果とを聞きて、
諸地の分を得んが爲めの故に、　勤行し、精進すべし。

「相」とは、是れ相貌、因りて以て知ることを得。「得」とは、成就なり。是の法を以ての故に是の法を成就すと名づく。「修」とは、得修、行修に名づく。「常に果を念す」とは、因に從つて事成すること有るを名づけて果と爲す。是の菩薩十地の行を得んと欲せば、應に善く相を聞き修果を得べし。「聞」

【五〇】此の品は譬喩を舉げて初地の得相を明かす。
※初地の七法を明かす。

常に多聞を求め、過去の諸佛・菩薩道を行ずる時、是の三昧に隨喜するが如し。我れも亦是の如し。今現在の菩薩是の三昧に隨喜するが如く、我も亦是の如し。未來の諸佛、菩薩道を行ぜん時、是の三昧を隨喜するが如く、我れも亦た是の如し。過去・未來・現在の菩薩所行の三昧の如く、我も亦隨喜して皆多聞を得んと爲す。我れも亦是の如し、多聞を求むるが故に是の三昧に隨喜す。䟦陀婆羅よ、是の福德に隨喜すること、上の福德に於て百分が一にも及ばず。百千萬億分の一にも及ばず。乃至算數、譬喩の能く及ぶ能はざる所なり。是の三昧は是の如く無量無邊の果報を得。復た次に、

是の三昧に住する處、　少中に多くの差別あり。
是の如き種々の相、　皆な當に論義を須ふすべし。

是の三昧所住の處の少相・中相・多相・是の如き等應に分別すべし。是の事を知らば當に解釋すべし。「住處」とは、或は初禪に於て得べし。或は第二禪、或は第三禪、或は第四禪に得べし。或は初禪の中間に勢力を得、能く是の三昧を生ず。或は少とは、人の勢力少なるが故に名づけて少と爲す。又、少時住するが故に名づけて少となす。又、少佛世界を見るが故に名づけて少となす。中、多も亦た是の如し。是の三昧を說くは或は有覺有觀、或は無覺有觀、或は無覺無觀、或は喜相應、或は樂相應、或は不苦不樂相應、或は入出息有り。或は入出息無し、或は是れ定んで善性、或は有漏、或は無漏、或は欲界繫、或は色界繫、或は無色界繫、或は欲界に非ず、或は色界に非ず、或は無色界繫に非ずと說く。是の三昧は是れ心數法・心相應・隨心行法・共心行法・非色・非現・能緣・非業・業相應・隨業行・非先世業果報・除因緣・可修可知可證なり。亦身證を以てし、亦慧證を以てす。或は斷ず可く、或は斷ず可からず、有漏は應に斷ず可く、無漏は斷ず可からず。知見も亦た是の如し。七覺と合せず。是の如き一切諸分別三昧の義皆な應に此の中に說くべし。復た是の三昧を修習せば、諸佛に見ゆることを得。說くが如し。

かんに、若し劫盡の時、設ひ此の火に墮すとも、火卽ち尋で滅せん。陂陀婆羅よ、是の三昧を持する者は、若しは官時有り、若しは怨賊・師子・虎狼・惡獸・惡龍・諸毒虫等、若しは夜叉・羅刹・鳩槃荼・[48][49]毘舍闍等、若しは人非人等に遇ひ、若しは身を害し、若しは命を害し、若しは戒を毀するに、是の處有ることなし。若しは讀誦して人の爲めに說く時も亦衰惱無し。唯だ業報の必ず應に受くべき者を除く。

復た次に陂陀婆羅よ、菩薩は是の三昧を受持し、讀誦する時、眼・耳・鼻・舌・口・齒の漏、風寒冷の病、是の如き等の病を得。是の病を以ての故に壽命を失ふこと、是の處有る事なし。唯だ業報の必ず應に受くべき者を除く。復た次に陂陀婆羅よ、若し人是の三昧を受持し、讀誦する者は諸天、守護し、諸龍・夜叉・摩睺羅伽・人非人・四天王・帝釋・梵天王、諸の佛世尊皆共に護念す。復た次に是の人は皆な諸天愛念し、乃至諸佛も皆護念するる所と爲る。復た次に是の人は諸天共に稱讚し、乃至諸佛皆共に稱讚する所となる。復た次に諸天皆此の菩薩を見んと欲し、其の所に來至し、乃至諸佛も皆是の菩薩を見んと欲し、其の所に來至す。復た次に是の菩薩、是の三昧を受持すれば未だ聞かざる所の經を自然に聞くことを得。復た次に是の菩薩、是の三昧を得ば、乃至夢中にも皆是の如きの諸の利益の事を得。陂陀婆羅よ、菩薩は若しは我れ一劫、若しは一劫を減じて說かんに、是の三昧を受持し、讀誦する者は功德を得ること盡くべからず。何に況や成就することを得ん者をや。陂陀婆羅よ、如し人百歲の中に於て身力輕健にして、其の疾きこと風の如し。是の人百歲行じて休息せず、常に東方、南西北方、四維上下に至らんに、汝が意に於て云何ん。是の人詣る所の十方に人有り、能く數は里數を知るや不やと。陂陀婆羅言く、數ふ可からず。唯だ如來と舍利佛と阿惟越致とを除く、餘は知ること能はず。若し善男子、善女人有つて、是の人の所行處の中に滿る眞金を以て布施せんに、若し人有つて但だ是の三昧を聞き、四種隨喜を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、

【四八】　鳩槃荼＝Kumbhāṇḍa　鬼の名。南方增長天王の領鬼にして、人の精氣を噉ふ鬼なり。その他皆前出。
【四九】　毘舍闍＝前出、釋願品第五。

進を修す。三十五には常に[四二]九想を觀ず。三十六には大人の[四三]八覺を得。三十七には諸の禪定三昧を具足す。三十八には此の禪定に於て貪る所無く、得る所無し。三十九には法を聽き心を專らにす。四十には五陰想を壞す。四十一には事想に住せず。四十二には深く生死を怖畏す。四十三には五陰に於て怨賊の想を生ず。四十四には諸[四四]入の中に於て空聚想を生ず。四十五には四大の中に於て毒蛇想を生ず。四十六には涅槃の中に於いて寂滅想、安穩樂想ヽ生ず。四十七には五欲の中に於て涎唾想を生じ、心に出離を樂ふ。四十八には佛教に違せず。四十九には一切衆生に於て諍訟する所無し。五十には衆生を敎化して一切功德に安住せしむ。復た次に、

是の如きの三昧の報を、　　菩薩は應當に知るべし。

菩薩、是の般舟三昧を行ぜば、果報も亦た應に知るべし。

問うて曰く是の三昧を修習すれば何の果報を得るやと。答へて曰く無上道に於て不退轉の報を得。復た次に經に說く所の果報の如し、佛、[四五]颰陀婆羅菩薩に語りたまふ。譬へば人有つて、能く三千世界の地を推碎するが如し、皆な微塵の如く、又三千大千世界中の所有る草木、華葉一切の諸物、皆な微塵と爲す。颰陀婆羅よ、一微塵を以て一佛の世界と爲す、爾所の世界、皆な中に滿つるに上妙珍寶有り。以て用ひて布施せんに、颰陀婆羅よ、意に於て云何ん。是の人、是の布施の因緣を以て福を得ること多きや不やと、甚だ多し、世尊よと。佛言(のたま)はく、颰陀婆羅よ、我れ今實に汝に語らん。若し善男子有つて[四六]諸佛現前三昧を聞くことを得て驚かず。畏れざれば其の福無量なり、何に況や信受し、持讀し、誦諷し、人の爲めに解說せんをや。何に況や定心し、習修し、[四七]一搆の牛乳頃の如くならんをや。颰陀婆羅よ、我が說く此の人の福德は倘量有ること無し、何に況んや能く是の三昧を成ぜんことを得る者をやと。

佛、又、颰陀婆羅に告げたまはく、若し善男子、善女人有つて受持し、讀誦し、他人の爲めに說

【四二】想＝正藏は相なれども今三本に據る。九想は九相にも作る。想は能觀の心につき、相は所觀の對象についていふ。人の屍相に於いて貪著の心を止めしめんがため九種の想を觀ずるをいふ。九想とは、一に脹想、二に靑瘀想、三に壞相、四に血塗想、五に膿爛想、六に噉想、七に散想、八に骨想、九に燒想なり。

※**般舟三昧行の果報。**

【四三】八覺＝華嚴經卷十三に、一に欲覺、二に瞋覺、三に惱覺乃至七に族姓覺、八に輕侮覺等の八惡覺あり。この八惡覺に對する八善覺の類か。

【四四】入＝十二入の入に同じ。

【四五】颰陀婆羅＝Bhadrapāla, 又、跋陀婆羅に作る。王舍城、長者の子。在家の菩薩なり。賢護長者、賢護菩薩と云ふ。

【四六】諸佛現前三昧＝般舟三昧を云ふ。

【四七】一搆牛乳頃＝明本に搆牛乳頃に作る。

十二には利養に存せず。四十三には諸物の中に於て心に染著せず。四十四には渇愛する所無し。四十五には正法を守護す。四十六には衣鉢に著せず。四十七には遺餘を蓄へず。四十八には但だ乞食を欲す。四十九には次第に乞食す。五十には常に慚愧を知り、心常に悔有り。五十一には金銀・珍寶・錢財を蓄へず、諸の不善の悔を離る。五十二には心に纒垢なし。五十三には常に慈心を行ず。五十四には瞋恚を除斷す。五十五には常に悲心を行ず。五十六には愛著を除斷す。五十七には常に一切世間を利安せんことを求む。五十八には常に一切衆生を憐愍す。五十九には常に經行を樂ふ。六十には睡眠を除却す。

出家の菩薩、是の如き等の法中に住して應に是の三昧を修習すべし。復た次に。

餘の三昧の法を修するも、　亦た是の如く學すべし、

能く是の般舟三昧を生じ、餘の助法も亦た應に修習すべし。何等か是れなりや。

一には佛恩に緣て常に念じて前に在り。二には心を散亂せしめず。三には心を繫して前に在り。四には根門を守護す。五には飲食の止足を知る。六には初夜、後夜常に三昧を修す。七には諸の煩惱障を離る。八には諸の禪定を生ず。九には禪中に味を受けず。十には色相を散壞す。十一には不淨相を得。十二には五陰を貪らず。十三には[三九]十八界に著せず。十四には十二入に染せず。十五には族姓を恃まず、十六には憍慢を破す。十七には一切の法に於て心常に空寂なり。十八には諸の衆生に於て親族の想を生ず。十九には戒を取せず。二十には定を分別せず。二十一には應に多學せんと勤むべし。二十二には是の多學を以て憍慢せず。二十三には諸の法に於て疑ひなし。二十四には諸佛に違せず。二十五には法に逆はず。二十六には僧を壞せず。二十七には常に諸の賢聖に詣づ。二十八には凡夫を遠離す。二十九には出世間論を樂む。三十には[四〇]六和敬法を修す。三十一には常に五解脫處を修習す。三十二には[四一]九瞋惱事を除く。三十三には八懈怠法を斷ず。三十四には八精

【三九】十八界＝前出、淨地品第四。

【四〇】六和敬法＝分別法施品第十三註參照。

【四一】九瞋惱＝九瞋惱・八懈怠・八精進は通用の術語に非ず。本書中に解說を見ず。

を生ぜず。十一には心常に出家を願ふべし。十二には常に齋戒を受くべし。十三には心、寺廟に住せんと樂ふべし。十四には慚愧を具足すべし。十五には淨戒の比丘に於て恭敬心を起すべし。十六には法を慳悋せず。十七には說法の者に於て愛敬心を深くすべし。十八には說法の者に於て父母、大師の相を生ずべし。十九には說法の者に於て、諸の樂具を以て敬心供養すべし。二十には恩を知り恩を報ずべし。是の如く在家の菩薩は、是の如き等の功德に住せば則ち能く是の三昧を學す。

*出家の菩薩も是の三昧の法を修習せば所謂る一には戒に於て瑕疵無し。二には持戒雜汚せず三には持戒濁らず。四には戒を清淨にす。五には戒を損ふこと無し。[三二]六には戒を取らず。七には戒に依らず。八には戒を得ず。九には戒を退せず。十には聖の讚する所の戒を持す。十一には智の稱する所の戒を持す。十二には[三三]波羅提木叉の戒に隨ふ。十三には威儀行處を具足す。十四には乃至微小の罪も心に大に怖畏す。十五には身口意の業を淨む。十六には[三四]命淨。十七には所有る戒を盡く受持す。十八には甚深の法を信樂す。十九には無所得の法に於て心能く忍んで、空・無相・無願の法の中に心驚かず。二十には勤めて精進を發す。二十一には念常に前に在り。二十二には信心堅固なり。二十三には慚愧を具足す。二十四には利養を貪らず。二十五には嫉妬無し。二十六には頭陀の功德に住す。二十七には細行の法の中に住す。二十八には世間の俗語を說くことを樂はず。二十九には聚語を遠離す、三十には恩に報ずることを知る。三十一には[三五]恩を作し恩に[三六]報ずることを知る。三十二には和尙、[三七]阿闍梨の所に於て恭敬忌難心を生ず。三十三には憍慢を破除す。三十四には我心を降伏す。三十五には善知識に遇ふが故に勤心に供給す。三十六には從つて聞く所の是の法處、若しは經卷、若しは誦處を得ば、此の人の所に於て父母の想、善知識の想、大師の想、大慚愧、愛敬の想を生ずべし。三十七には常に阿練若を樂ふ。三十八には城邑聚落に住することを樂はず。三十九には[三八]檀越、善知識の家に貪著せず。四十には身命を惜まず。四十一には心常に死を念ず。四

※出家菩薩持戒の功德。

【三二】　六・七・八は外道の戒。九以下は佛戒なり。

【三三】　波羅提木叉＝Pratimokṣa 戒律の異名。別解脫・別處々解脫、隨順解脫等と義譯せらる。身や口に犯す過惡を戒律に依りて別別に解脫するより斯く名づけらる。

【三四】　淨命＝邪命に對する語。

【三五】　恩を作し＝他に對し恩を施すこと。報恩とは、他より受けし恩を報ずること。

【三六】　報恩＝正藏には報恩者とあれど今三本に據り者字を除く。

【三七】　阿闍梨＝前出、調伏品第七。

【三八】　檀越＝前出、淨地品第四。

三菩提を得せしむ。四には當に諸佛の正法を護持すべし。是を四と爲す。

復た四法有り、一には少語言。二には在家出家共に住せず。三には常に心を繫する所緣相を取る。四には遠離空閑の靜處を樂ふ。是を四と爲す。

「初の五法」とは、一には無生忍法、一切諸の有爲の法を厭離して一切諸の所生の處を樂はず、一切諸の外道の法を受けず、一切世間の諸欲を惡厭し、乃至念ぜず。何に況んや身に近づけんをや。二には心常に無量の諸法を修習して、一處に定至して諸の衆生に於て瞋礙有ること無し。心常に隨順して[三〇]四攝法を行ず。三には能く慈・悲・喜・捨を成就し、他過を[三一]說かず。四には能く多く諸の所說の法を集め、所說の如く行ず。五には身口意業及び見を淸淨にす。是を五と爲す。

復た五法有り、一には經に讃する所の如く布施を樂ひ、慳心有ること無く、深法を樂說して悋惜する所なく、亦能く自ら住す。二には忍辱柔和にして同じく歡喜に住し、惡口、罵詈、鞭捶の縛等但だ業緣を推し、他人を恚らず。三には常に樂つて是の三昧を聽き、讀誦し、通利して人の爲めに解說して流布せしめ、增廣勤行し、修習す。四には心に妬嫉なく、自ら身を高うせず、他人を下さず、眠睡の蓋を除く。五には佛法僧寶に於て信心淸淨にして、上中下座に於て深心に供奉し、他に小恩有るも常に憶うて忘れず、常に眞實の語中に住す。是を五と爲す。復た次に、

出家の諸の菩薩の、　學ぶ所の三昧の法、
在家の菩薩の者も、　應當に是の法を知るべし。

若し在家の菩薩、是の三昧を修習せんと欲せば、一には當に深く信心を以てすべし。二には業の果報を求めず。三には當に一切內外の物を捨つべし。四には三寶に歸命すべし。五には淨く五戒を持し、毀缺有ること無かれ。六には具足して十善道を行じ、亦た餘人をして此の法中に住せしむ。七には婬欲を斷除すべし。八には五欲を毀呰すべし。九には嫉妬せず、十には妻子の中に於て愛著

※種種の五法。

【三〇】四攝法＝淨地品第四に出づ。
【三一】說く＝正藏には出とあれども宮本による。

※在家菩薩持戒の功德。

するが故に十方眞實の諸佛を見ることを得。

問うて曰く、是の如きの定、何法を以てか能く生じ、云何か得べきやと。答へて曰く、

善知識に親近して　精進して懈退無く、
智慧甚だ堅牢にして　信力妄動せず。

是の四法を以て能く是の三昧を生ず。「善知識に親近す」とは、能く是の三昧を以て人を教誨する者を名づけて善知識となす。應に恭敬を加へ勤心に親近し、懈怠、廢退、捨離有ること莫くんば、則ち是の深三昧、義利智、通達智不失智を聞くことを得べし。名づけて堅牢信根深固と爲す。若しくは沙門、婆羅門、若しくは天魔、梵及び餘の世人能く傾動すること無きを名づけて信力不可動と爲す。是の如きの四法は能く三昧を生ず。復た次に、

慚愧、愛、恭敬、　説法する者を供養すること、
猶し諸の世尊の如くんば、　能く是の三昧を生ず。

「慚愧・愛・恭敬」とは、説法の者に於て深く慚愧を生じ、恭[二八]敬・愛樂・供養すること佛の如くすべし。是の如き四法は能く是の三昧を生ず。

復た次に「初の四法」とは、一には三月に於て未だ嘗つて睡眠せず。唯だ便利、飲食、坐起を除く。二には三月乃至[二九]彈指に於ても我心を生ぜず。三には三月に於て經行息まず。四には三月に於て兼て法施を以て利養を求めず、是を四と爲す。

復た四法有り。一には能く佛を見る。二には安慰して人を勸めて是の三昧を聽かしむ。三には常に菩提心を行ずる者を貪嫉せず。四には能く菩薩の行ずる所の道法を集む、是を四と爲す。

復た四法有り。一には佛像乃至畫像を造作す。二には當に善く是の三昧經を書寫し、信樂者をして已に讀誦することを得せしむ。三には増上慢の人に敎へ、増上慢の法を離れしめて阿耨多羅三藐

【二八】敬＝正藏は恪とあるも明本に據る。

【二九】彈指＝指を彈く間の僅少の時間の單位を云ふ。

する故に、諸法は虚空の如くなることを知る。虚空は障礙無きが故に、障礙の因縁とは、諸の須彌山由乾陀等の[二五]十寶山、鐵圍山、黒山、石山等、是の如き無量の障礙の因縁あり。何を以つての故に、是の人未だ天眼を得ざるが故に、他方世界の佛を念ぜば、則ち諸山の障礙有り。是の故に新發意の菩薩は、應に十號の妙相を以つて佛を念ずべし。說くが如し。

新發意の菩薩、　十號の妙相を以つて、
佛を念ぜば毀失無きこと、　猶し鏡中の像の如し。

「十號の妙相」とは、所謂る如來、[二六]應供、正遍知、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、佛世尊なり。「毀失無し」とは、觀る所の事、空なること、虚空の如く、法に於て失ふ所なし。何を以つての故に、諸法は本來無生寂滅の故に。是の如きの一切の諸法は皆亦た是の如し。是の人、名號を緣ずるを以つて禪法を增長せば、則ち能く相を緣ず。是の人、爾の時即ち禪法に於て相を得、所謂る身に殊異快樂を得。當に知るべし、[二七]般舟三昧を成ずることを得、三昧成ずるが故に諸佛を見ることを得。「鏡中の像の如し」とは、若し菩薩此の三昧を成じ已れば、淨明の鏡に自ら面像を見るが如く、清澄なる水中に其の身相を見るが如し。初の時、先きに念ずる所の佛に隨ひ、其の色像を見、是の像を見已つて後、若し他方の諸佛を見んと欲すれば、念ずる所に隨つて方に諸佛を見、障礙する所無きことを得。是の故に是の人、

未だ神通有らずと雖も、　飛行して彼に到り、
能く諸の佛を見、　法を聞くに障礙なし。

是の新發意の菩薩、諸の須彌山等の諸山に於て、能く爲めに障礙と作ることなし、亦た未だ神通、天眼、天耳を得ず、未だ飛行して此の國より彼の國に至ること能はず、是の三昧力を以ての故に、此の國土に住して他方の諸佛世尊を見たてまつることを得、所說の法を聞き、常に是の三昧を修習

【二五】由乾陀の十寶山＝由乾陀山 Yugandhara は須彌山を繞る八山の一。又十山王の一。長阿含三十に「伊沙陀羅を去る遠からずして山あり……七寶所成」といふ。十寶山は十山王に同じ。十山王とは、雪山・香山・神仙山・由乾陀山・馬耳山等の十山をいふ。華嚴大疏卷四十四參照。

【二六】如來等の十號＝原音は易行品第九註參照。

【二七】般舟三昧＝前出、地相品第三註。

一切衆生に於て、　大慈悲心を行じ、
第一の智慧を以つて、　常に大勢を出し、
悉く無量種の　希有の諸の難事を作したまふ。
一切諸の世間　共に無量劫を盡して
之を說くとも盡すべからず。　亦た算數の及ぶところに非ず。
是の如き等の諸事は、　人天を超越し、
一切世間の中、　奇特なること比有る事なし。
大業所獲の果は、　一切智を具足して、
能く生死の王を破し、　法王の處に安立す。

[二二]助念佛三昧品　第二十五

菩薩は應に此の　四十不共法を以つて、
諸佛の[二三]法身を念ずべし。　佛は色身に非ざるが故に。

△是の偈は次第に略して[二四]四十不共法六品中の義を解す。是の故に行者は先づ色身の佛を念じ、次に法身の佛を念ずべし。何を以つての故に、新發意の菩薩は應に三十二相八十種好を以つて佛を念ずべし。先に說くが如く、轉た深入して中勢力を得、應に法身を以つて佛を念じ、心轉た深入して上勢力を得べし應に實相を以つて佛を念じて貪著せざるべし。

色身に染著せず、　法身にも亦た著せされ。
善く一切法を知らば、　永寂虛空の如し。

是の菩薩、上勢力を得ば、色身法身を以つて深く佛に貪著せず。何を以つての故に、空法を信樂

【二二】此の品は念佛三昧を修する助道法を說く。般舟三昧經と密接なる關係あり。
△得般舟三昧の法。
【二三】法身＝四十不共法品第二十一註色身を參照。
【二四】四十不共法六品＝本論の現形にては四十不共法品は第二十一、第二十二、第二十三の三品なるも、原典の分品は六品なりしか。或は四十不共法を說ける前後の諸品を取りしか。

善哉、大聖尊、
悉く是れ慧の勢力なり。
衆生、世尊に因り、
無量に[一九]六天に生じ、
亦[二〇]梵世に至らしめらる。
斯れ皆な慧力に由るなり。
世尊は生死に於て、
苦樂に迷悶せらるとも
菩提心を失はず。
斯れ皆な是れ慧力なり。
世尊は生死に於て、
常生せんことを樂はず、
涅槃を樂つて取したまはず。
斯れ皆な是れ慧力なり。
道場に安坐したまふ時、
魔及び軍衆を降して、
諸の群生を度脱したまふ。
斯れ皆な是れ慧力なり。
本と菩提を求むる時、
無量の[二一]助法を集めたまふ、
聞者は常に迷悶す、
何に況んや能く受行せんをや。
世尊は能く堪忍したまふ。
斯れ皆な是れ慧力なり。」
經書、諸の技術、
世世に自知を生じて、
亦た能く兼ねて人を敎へたまふ。
斯れ皆な是れ慧力なり。
無量佛に親近して、
悉く甘露の敎を飮み。
種種に諮り請問し、
亦た隨つて而も分別したまふ。
經法智慧の中、
未だ曾つて悋惜有らず、
乃至僕僮奴も、
亦た善語を諮受したまふ。
世尊是れを以つての故に、
慧勝處流布す。
世尊は前世に於て、
是の菩提を求めたまふ時、

【一九】六天＝欲界の六欲天なり。
【二〇】梵世＝梵天のこと。色界天なり。
【二一】助法＝助道法のこと。

一禪定として、　先來不生の者の有る事なし。
此の諸定の中に於いて、　亦た其の味を受けず。
世尊は諸定に因つて、　三種の神通を得、
此れを以て衆生を度したまふ。　是の故に一切勝たり。
世尊は無量劫に、　等心もて慈化を弘め、
阿僧祇の衆生をして、　梵世に住せしめたまふ。
能く巧方便を以つて、　善く禪定を說くが故なり。
世尊は菩薩の時、　常に無量世に於いて、
貪煩惱の纏無く、　而も世間に從來したまふ。
過去に値ふことを得たる者は、　無量にして天上に生じ、
過去の諸の菩薩の　寂滅を行ずべき所。
世尊は菩薩の時、　亦た等しくして異り有ること無く、
是の故に寂滅に於て、　勝處悉く充滿したまふ。
世尊は菩薩の時、　所有る諸の智慧あり、
慧を以つて菩提を求め、　今是の慧報を成す。
一切の資する所の食は、　人地に依つて生ずるが如し。
世尊世世に於て、　[15]十闇惡道を捨て、
常に十善道を行じたまふ。　斯れ慧の氣[16]力に由つて
[17]五欲、[18]五蓋を捨て、　種種の禪定を得、
無量劫數の世、　他人より受けたまはず。

[一五] 十闇惡道＝十不善道のこと。
[一六] 力＝正藏は分なれど今三本に據る。
[一七] 五欲＝淨地品第四に出づ。
[一八] 五蓋＝分別法施品第十三に出づ。

惱者に施を求むることも無し。
求むる者を戲弄することも無く、
少物を輕んじ、
聲聞乘、
一世の施を限らず、
世尊は無數劫に、
皆無上道の爲めにして、
諸の佛法の中に於て、
諸佛の法を修習し、
是の如き施法を說くは、
猶日の光明は星月の中に
是の如き勝捨處は、
猶亦世尊の如きは、
是の故に能く是の如きの
名聞、無量劫に、
世尊は無量劫に、
諸の禪定門を開き、
先に五相を離れ、
淨[一三]三三昧に入りて、
世尊は善く[一四]六十五種の

競勝の施を[一一]妬むことなし。
自ら手をもて施さざることも無し。
多を以て自ら高うじて施さず。
辟支佛乘を以て施さず。
非時施有ること無し。
諸の希有の施を行ずるに、
自ら樂を求めんが爲めにせず。
出家して遠離を行じ、
諸の天人の爲めに說く。
諸の施の中に於いて上なり。
殊勝なるが如し。
諸の天人に超越せり。
一切世間の上なり。
勝捨處を求具したまふ。
流布して窮まり已むこと無し。
清淨戒を護持して、
深寂處を得んが爲めに、
後に[一二]八解脫を行じ。
亦た三解脫に住したまふ。
禪を分別し、

【一一】妬＝正藏は垢なれども今三本に據る。
【一二】八解脫＝前出、釋願品第五。
【一三】三三昧＝前出、淨地品第四。
【一四】六十五種の禪＝禪定の分類に四禪、四定、八背捨、八勝處、十一切處等、世間禪出世間禪の分類あるも、六十五禪の法數は更に稽ふべし。

肉を割きて骨髓を出し、
及以び身を擧げて施して、
諸の衆生を憐愍して、
悉く施すに惜しむ所なし。
生死を出でんことを求めんが爲めに、
以て自ら樂しむことを求めず。
虛空の諸の星宿、
地上の所有る沙、
世尊、菩薩の時に、
布施したまふ數は是に過ぎたり。
終に非法を以て、
財を求めて而も布施せず。
知らざるに施すこと無く、
人を侵惱して施すこと無し。
好物を貪惜して、
而も惡き者を以て施さず。
諂曲の心もて施すこと無く、
惜んで而も强いて施すことも無し。
恚無く、疑心も無く、
邪も無く、輕笑もなし。
厭無く不信にして、
顰面等もて布施することも無し。
分別の心有りて、
此に應じ、彼に應ぜざるのことも無し。
但だ悲心を以ての故に、
平等にして而も施を行ず。
衆生を輕んじて、
以て非福田と爲さず。
聖を見ば心に恭敬し、
破戒の者は憐愍し、
自ら其の身を高うじて
他人を卑下せず。
亦稱讃の爲めにせず、
報を求めずして等しく施さず。
悔無く憂愁も無し。
惡賤の心をもて施すこと無く、
急恨の心を待つこと無し。
法として應當に施すこと無く、
不敬の心もて施すことも無し。
著地を棄るの施もなし。

堅心なること無量劫なり。
精勤して、此の如きの、
無量劫數の中に、
諸の往古佛の如く、
無量劫にして乃ち成ず。
本實諦を護らんが爲めに、
諸の富樂を捨ることを得たり。
見聞覺知の法を、
毎に先づ善く思惟し、
若し不見等に於て、
而も能く實の如く說きて、
他の匿事を說かず、
常に安慧に在ることを念じて、
第一の眞の妙諦は、
餘は皆虛妄なり。
飮食臥具等、
名好、象馬車、
金、銀、珍寶等、
國土及び榮位、
愛子〔一〇〕并に親婦、

是の故に佛道を成じ、
大願を成滿せんと欲し、
諸の難苦行を行ず。
四功德處を說いて、
今、安住の中に、
身及び親愛、財寶、
是の故に、無量劫數の中に、
具足することを得たり。
而して後、人の爲めに說く。
及び中に於て疑有らんに、
益する所、量あること無し。
義を嫌て而も逆を拒み、
化に順じて安隱ならしむ。
涅槃の實を最と爲す。
世尊の德は、
堂閣妙樓の觀、
端嚴、諸の婇女、
聚落、諸の城邑、
并以に四天下の、
支節及び頭目を具足したまへり。

〔一〇〕并＝正藏には所とあり。今三本による。

三礙は解脱を得て、　無礙解脱と號す。
四十不共の法は、　功德量る可からず。
能く廣く說く者なし。　我已に略して說き竟んぬ。
世尊若し一劫に、　此の佛法を稱說すとも、
猶ほ盡すこと能はず。　況んや我に此の智なし。
世尊の大慈の晉[九]は、　無量の業を善集す。
四功德の處なるが故に、　佛の無量の法を得。
世尊の稱說したまふ所は、　四功德の勝處なり。
我今還つて此を以て、　如來を稱讚せん。
三十二相具したまへば、　相に百の福德と、
八十種の妙好とあり。　三界に誰か能く有せん。
三千大千界の　衆生の所有の福は、
果報を百倍となして、　相に是の如きの德を有す。
此の如き諸の福德は、　並及び其の果報を、
復以て百倍となして、　一白毫相を成ず。
三十相の一一の　福德及び果報は、
復以て千倍と爲して、　一の肉髻相を成ず。
世尊の諸の功德は、　度量することを得べからず。
人の尺寸を以て、　空を量るに盡す可からざるが如し。
初發の大心より、　衆生を度せんが爲めの故に、

【九】晉＝正藏は陰に作る。今三本に據る。

心に疑畏有ること無し。　餘漏盡さざるあり。
自ら障礙の法を說いて、　中に於て疑難無し。
此の法を用ふること有りと雖も、　爲めに障礙すること能はず。
說く所の八聖道は、　心に疑畏有ること無し。
有は是の八道は、　解脫に至ること能はずと言ふとも、
實の如く是の因と、　是の果と及び非とを知る。
故に一切智と號す。　名聞は流れて無量なり。
三世の所有る業、　是の諸業の定報、
及び非定の果報を、　種々皆悉く知る。
諸禪三昧の中、　麁細深淺の事、
皆悉く能く了知したまひ、　禪中に等しき者なし。
先づ衆生の根に、　上中下の差別、
種々の樂及び性あるを知り、　宜しきに隨つて而も說法す。
道を行ひて諸の利を得、　兼ねて以て人を化導す。
是を以て弟子の衆、　實の如く善利を得。
宿命知無量にして、　天眼見、無邊なり。
一切人天の中に、　能く其の限を知ること無し。
金剛三昧に住して、　煩惱及び氣を滅し、
又、人の漏盡を知る。　故に漏盡力と名づく。
煩惱、諸の禪障、　一切法の障礙の、

唯獨り世尊ありて、　智慧能く通達したまへり。
善く不相應、　非色法中の事、
一切の諸の世間、　悉く皆知る能はざるを知りたまふ。
世尊の大威力は、　功德量る可からず。
智慧は無邊際にして、　皆與に等しき者無し。
四問答の中に於て、　超絕して倫匹無く、
衆生の諸の問難は、　一切皆答へ易し。
若し諸の世間の中に、　佛を害する事有らんと欲する者は、
是の事皆成ぜず、　不殺の法を成ずるを以てなり。
若し三時の中に於て、　諸有の所說は、
言は必ず虛[五]妄ならず、　常に大果報あり。
凡そ所說の法有らば、　是れ希有に非ずと云ふこと無し。
義趣尙ほ謬たず、　況んや言辭に於てをや。
[六]三聖の弟子にて、　上中下の差別あり。
[七]四雙八輩等の、　第一の大導師にして、
身口意の業と命とは、　畢竟常に淸淨なり。
是の故に此の中に於て、　復た防護を須ゐず。
自ら一切智を說いて、　心に疑畏あることなし。
若し人來つて我を難ぜば、　恐らくは知らざる所あらん。
自ら[八]漏盡相を說いて、　盡く無漏邊に到りて、

【五】妄＝正藏には設とあるも三本に據る。
【六】三聖＝聲聞、緣覺、菩薩の三を云ふ。
【七】四雙八輩＝八輩は刹利・婆羅門・長者・沙門（四部）及び四王・忉利・魔・梵を云ふ。四雙は四部より出でし佛の正弟子を云ふ。即ち比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷なり。小乘にては其の所求は四向四果・究極は羅漢なり。
【八】漏盡＝前出、入初地品第二。

卷の第十二

讃偈品第二十四[1]

已に是の如く四十不共法を解し竟る、應に是の四十不共法の相を取りて念佛すべし。又應に諸の偈を以て佛を讃ふること、現に前に在して、對面して共に語るが如くすべし。是の如くんば卽ち念佛三昧を成ず。[2]偈に說くが如し。

聖主大精進し、　[3]四十の獨有法あり。
我れ今佛の前に於て、　敬心に以て稱讃す。
如意及び飛行は、　其の力邊限なし。
聖如意中に於て、　與に等しき者有ること無し、
聲聞中、自在にして、　他心智無量なり。
善く能く心を調伏して、　意に隨つて而も應適す。
其の念大海の如く、　湛然として安隱に在り、
世間に法有りて、　而も能く擾亂する者無し。
諸佛の稱歎したまふ所は　金剛三昧の寶なり。
之を得て胸中に在れば、　賢の直心を懷くが如し。
善く不定の法、　[4]四無色定の事を知り、
微細にして分別し難きをも、　盡く知りて餘り有ること無し。
衆生若しは已に滅し、　今滅し及び當に滅すべきも、

【一】この品は偈頌を以て佛を讃し、次品と共に念佛三昧を成ずべきをこと說く。
【二】以下偈頌中の法數及び術語は四十不共法を參照。
【三】四十獨有法＝四十不共法なり。
【四】四無色定＝前出、釋願品第五。

佛と同じく止まる諸師にして佛と等しき者無し。二十には諸師の[五七]弟子衆を得ること佛の如き者有ること無し。二十一には端正第一にして見る者歡悅す。二十二には佛の使ふ所人能く害する者無し。二十三には佛を度せんと欲する者は傷害有ること無し。二十四には心初めて生ずる時能く思惟の結を斷ず。二十五には度す可き衆生は終に時を失はず。二十六には[五八]第十六の智をもて阿耨多羅三藐三菩提を得。二十七には世門第一の福田なり。二十八には無量の光明を放つ。二十九には行ずる所餘人に同じからず。三十には百福德の相あり。三十一には無量無邊の善根あり。三十二には入胎の時。三十三には生ずる時。三十四には佛道を得る時。三十五には轉法輪の時。三十六には長壽命を捨する時。三十七には入涅槃の時、能く三千大千世界を動ず。三十八には無量無邊の諸魔の宮殿を擾動して威德を無からしめ、皆驚畏せしむ。三十九には諸の護世天王・釋提桓因・夜摩天王・兜率陀天王・化樂天王・自在天王・梵天王淨居諸天等一時に來集して轉法輪を請す。四十には佛身の堅固なること[五九]那羅延の如し。四十一には未だ結戒有らざるに而も初めて結戒す。四十二には施作する所有つて勢力人に勝る。四十三には菩薩、胎に處せば母一切の男子に於いて染着心無し。四十四には力能く一切の衆生を救度す。佛の不共法は是の如き等の無量無數有り、餘事を妨ぐるが故に廣く說くことを須ひず。聲聞の法は佛法に似たりと雖も、優劣同じからずして則ち差別有り。

*復た次に總じて諸佛の一切諸法は無量無邊不可思議第一にして希有なることを說くに、一切衆生の共にすること能はざる所なり。假使十方の諸の三千大千世界の諸の算數に過ぎ、是の中の所有る衆生の智慧皆大梵天王の如く、皆大辟支佛の如く、皆舍利の如くにして、是の諸の智慧を合集して一人をして得しめんに、佛の四十不共法中の微少の分に及ばんと欲するも是の處有ること無し。若しは一法に於いてすら百千萬億分中の其の一にも及ばず。諸佛は是の如く無量無邊の功德の力有り、何を以ての故に、無數大劫に四功德處に安住し、深く六波羅蜜を行じ、善く能く菩薩一切の所行の諸法を具足して一切衆生と共にせざるが故に、果報も亦共にせず。

【五七】弟子衆、正藏には第子衆とあれども今三本に據る。

【五八】第十六の智＝前出。

【五九】那羅延＝Nārāyaṇa. 天上力士の名、梵天王の異名。

※佛の不共行を稱讃す。

飲食・資生・苦樂・所作の事業、所受の果報、心は何の所へか行き、本何より來りしか、是の如き等の事、天眼清淨にして人眼に過ぐるを以て六道の衆生の業に隨ひ、身を受くるを見る、是れ「第九力」なり。大力の聲聞は天眼を以て小千國土を見、亦中衆生の生時死時を見る。[五五]小力の辟支佛は千小千國土を見、中衆生の生時死時を見る。中力の辟支佛は百萬小千國土を見、中衆生の生時死時を見る。大力の辟支佛は三千大千國土を見、中衆生の生死の所趣を見る。諸佛世尊は無量無邊不可思議の世間を見たまひ、亦是の中の衆生の生時死時を見たまふ。「第十力」とは、欲漏・有漏・無明漏・一切の漏盡き、諸の煩惱及び[五六]氣都て盡くる、是を第十力と名づく。

※一無礙解脫」とは、解脫に三種有り。一には煩惱障礙に於ける解脫、二には定障礙に於ける解脫、三には一切法障礙に於ける解脫なり。是の中に慧解脫を得る阿羅漢は煩惱の障礙を離るゝことを得て解脫す。共解脫の阿羅漢及び辟支佛は煩惱の障礙を離るゝことを得て解脫し、諸の禪定の障礙を離るゝことを得て解脫す。唯だ諸佛のみ有つて、三解脫を具したまふ。所謂る煩惱障礙解脫・諸禪定障礙解脫・一切法障礙解脫なり。總じて是れ三種の解脫の故に佛を無礙解脫と名づく。常に心に隨つて共生し、乃至無餘涅槃にして則ち止む。

△是の四十不共法は略して佛法の門を開き、衆生をして解せしむるが故に說けるも、說かさる所は無量無邊なり。所謂る一には常に慧を離れず。二には時を知つて失せず。三には一切の習氣を滅す。四には定波羅蜜を得。五には一切の功德殊勝なり。六には所宜に隨つて波羅蜜を行ず。七には能く頂を見る者無し。八には與に等しき者無し。九には能く勝る者無し。十には世間の中に上なり。十一には他に從つて聞いて道を得ず。十二には法を轉ずる者にあらず。十三には自ら是れ佛なりと言ひて佛前に到ること能はず、十四には不退法の者なり。十五には大悲を得る者なり、十六には大慈を得る者なり。十七には第一に信受すべき者なり。十八には第一に名聞利養あり。十九には

【五五】小力＝正藏には小字のみ力字を缺く今明藏による。

【五六】氣＝習氣に同じ。前出。二一七頁參照。

※第四十法無礙解脫。

△更に餘の四十四不共法を解す。

名づく。復た次に「垢」は有漏定と名づけ、「淨」を無漏定と名づく。「三昧、解脱等を分別す」とは、是の如く禪は分別して他の衆生・他人・上下の諸根を知り、實の如く知るを「第四力」と名づく。他の衆生とは凡夫是なり。他人とは須陀洹等の諸賢聖是なり。或は人有つて言く、衆生を名づけて凡夫と爲す。及び諸の學人の煩惱未だ盡きざるが故に。他人とは阿羅漢等なり、煩惱盡くるが故にと。或は人有つて言く、衆生と人とは一種の名にして差別有りと。「諸根」とは、信と精進と念と定と慧と非眼等の根なり。上なるを猛利と名づく、堪任して道を得ればなり。下なるを闇鈍と名づく、道を堪受せざればなり。佛は此の二根の上下に於いて實の如く知つて錯謬したまはず。他の衆生、他人の心各樂ふ所有り、實の如く知るは是れ第五の力なり。「所樂」とは、向ふ所の事を貴しと爲すに名づく。人有つて財物、世樂を貴び、或は福德善法を貴重すること有るが如し。是の事、佛は實の如く知りたまふ。世間の種種性・無量性を佛は實の如く知りたまふ、是れ「第六力」なり。「種種の性」とは雜性萬端なり。「無量性」とは、一一の性に於いて無量種の分別有り。「性」とは、先世より來、心に常に習用し、常に樂行修習する所なるが故に性を成ず。是に二あり、善惡の性なり、佛は實の如く知りたまふ。一切處の道に至つて實の如く知るは是れ「第七力」なり。「一切處の道に至る」とは、能く一切の功德を得るなり。是の道を名づけて至一切處の道と爲す。所謂る五分三昧、若しは五知三昧、若しは[五三]八聖道分是れなり。或は聖道所攝の諸法、或は[五四]四如意足なり。經に說くが如し。比丘よ、善く四如意足を修習すれば利として得ざること無しと。人有つて言く、四禪是れなりと。經に說くが如し。比丘よ、四禪を得ば心一處に安住し、清淨にして諸の煩惱を除き、諸の障礙を滅して調和堪用し復た動轉せず、若し迴向せば宿命の事を知ると。卽ち宿命の事を知る、是れ「第八力」なり。佛は若し自身及び一切衆生の無量無邊の宿命を念ぜんと欲せば、一切の事、皆悉く知り、恒河沙等の劫を過ぎし事をも知りたまはざること有ること無し。是の人は何れの處に生れ、姓名・貴賤・

【五三】八聖道分＝序品第一に出づ。
【五四】四如意足＝入初他品第二に出づ。

たまふと。又經に説く、身口意の惡業に妙愛の果報有りとは是の處有ること無し。若し身口意の善業に妙愛の果報有りとは則ち是の處有り。是の如き等の五藏の諸經に、應に此の中に廣く説くべし。

「第二力」とは、過去・未來・現在の諸業、諸法の受に於て佛は實の如く分別して處所を知り、事を知り、果報を知りたまふ。佛は若し一切衆生の過去の諸業、過去の業報を知らんと欲したまへば卽ち能く知りたまふ。或は業は過去にして報は現在に在り、或は業は過去にして報は未來に在り、或は業は過去にして報も過去に在り、或は業は過去にして報は過去・未來に在り、或は業は過去にして報は過去・現在に在り、或は業は過去にして報は未來・現在に在り、或は業は過去にして報は過去・未來・現在に在り、或は業は現在にして報も現在に在り、或は業は現在にして報は未來に在り、或は業は現在にして報は現在・未來に在り、或は業は未來にして報も未來に在り。是の如き等の分別有り。「受法」とは、四受法なり。現に樂を受け後世に苦を受く、現に苦を受け後世に樂を受く、現に樂を受け後に樂を受く、現に苦を受け後に苦を受く。「處」とは、業の時方の所在に隨つて又是の業の受くる報の處を知るなり。「事」とは、或は因緣に隨ひ、或は三不善根に隨ひ、或は多く自ら作し、或は多く他に因る。是の如き等の善惡業の因緣を佛は盡く知りたまふ。「報」とは、諸業は各各報有ることを知るなり。善業は或は善處に生じ或は涅槃を得、惡業は諸の惡處に生ず。佛は悉く是の諸業の本末の因緣、自身及び他を知りたまふ。是の智力は不退の故に名づけて力と爲す。「三力」とは、佛は禪定・解脫・三昧・垢淨相に於いて實の如く知りたまふ。「禪」とは、四禪なり。「定」とは、四無色定・四無量心等を皆名づけて定と爲す。「解脫」とは、八解脫なり。「三昧」とは、諸の禪、解脫を除く餘の定を盡く三昧と名づく。人有つて言く、[五一]三解脫門及び[五二]有覺有觀の定、無覺有觀の定、無覺無觀の定を名づけて三昧と爲すと。人有つて言く、定は小、三昧は大なり。是の故に一切の諸佛菩薩の得る所の定は皆三昧と名づくと。是の四處は皆一切の禪波羅蜜を攝在す。「垢」を受味に名づけ、「淨」を不受味に

【五一】三解脫門―三三昧に同じ。
【五二】三三昧のこと。入初地品第二に出づ。

諸の煩惱を斷じ、及び煩惱の【五〇】習氣(じつけ)を斷ずるが故なり。三には我は障道の法を說く、此の中に若し沙門・婆羅門、諸の天魔・梵及び餘の世間智人有つて法の如く難じて言く、是の法は用ふと雖も道を障ふこと能はずと。我は此の中に於いて微畏相も有ることを見ず。是の相を見ざるが故に安隱を得て疑畏有ること無し。是の三無畏は善く障解脫の法を知るが故なり。四には我が說く所の道は法の如く說く。行ずる者は苦盡くるに至ることを得。若し沙門・婆羅門、諸の天魔・梵及び餘の世間の智人有つて法の如く難じて言く、是の如き法は說の如く行ずと雖も、苦を盡すの道に至ること能はずと。我は此の中に於いて微畏の相有ること無し。是の相を見ざるが故に安隱を得、疑畏有ること無し。是の四の無畏は善く苦の盡くる道に至るを知るが故なり。是の四無畏は皆怖畏・心驚・毛竪等の相を過ぐるが故に名づけて無畏と爲す。又大衆に在つて威德殊勝の故に名づけて無畏と爲す。又善く一切の問答を知るが故に名づけて無畏と爲す。諸天會經は此の中に應に廣く說くべしと。

問うて曰く、若し佛は是れ一切智人なれば、應に一切の法に於いて盡く無畏なるべし。何を以て但だ四と說くやと。答へて曰く、略して大要を擧げて以て事端を開くのみ。餘は亦是の如し。

※「佛の十力」とは、力は扶助に名づく。氣勢窮盡す可からず、能く沮壞すること無し。十の名有りと雖も而も實には一智なり。十事に緣るが故に名づけて十力と爲す。佛智は一切の事に緣るが故に應に無量の力有るべし。此の十力を以て衆生を度するに足るが故に但だ十力を說く。但だ此の十力を開かば餘は皆知る可し。「初力」とは、一切の法の因と非因とに決定して通達する智を名づけて初力と爲す。佛の說きたまふが如し。若し是れ狂人、是の語を捨てず、邪見を捨てず、是の心を捨てず、來つて佛前に在らば是の處(ことわり)有ること無からん。佛、阿難に告げたまふが如し。世間に二佛一時に出世したまふとは是の處有ること無し。一佛出世したまふとは則ち是の處有り。是の事は一佛世界の爲めの故に說く、而も實には十方無量無邊の諸世界の中に、百千萬億無數の諸佛一時に出世し

【五〇】習氣＝煩惱を斷じても尙その氣分の殘りあるをいふ。法相宗にては、迷ひ卽ち惑に現行と種子と習氣（現實と潛在と氣分）の三を分つ中の習氣を云ふ。卽ち惑の現行や種子を制伏し、その根本を斷つも、尙殘れる氣分を指す。

※第三十法より第三十九法、佛の十種力。

問うて曰く、四衆も亦能く說法して外道を破し、佛法に入らしむ。何を以てか但だ佛を稱して最上の導師と爲すやと。答へて曰く、當に以て喩を假つて說くべし。若し一切衆生の智慧、勢力皆辟支佛の如くならんに、是の諸の衆生若し佛意を承けずして一人を度せんと欲せば、是の處（ことわり）有ること無し。若し是の諸人說法の時乃至全く無色界の結使、毫釐の分をも斷ずること能はず。若し佛、衆生を度せんと欲して言說する所有らば乃至外道・邪見・諸龍・夜叉等及び餘の佛語を解せざる者も皆悉く解せしむ。是れ等も亦能く無量の衆生を轉化す。乃至今日の聲聞の衆は衆生をして四果の中に住せしむ。皆是れ如來最上の導師の相なり。是の故に佛を最上の導師と名づく。衆聖の中に於いて不共の法なり。

※「四不守護法」とは、諸佛は身業を守護せず、口業を[四九]守護せず、意業を守護せず、資生を守護したまはず、何を以ての故に、長夜に種種の清淨業を修習するが故に、皆善く見知して一切の煩惱の法を斷ずるが故に、一切無比の善根を成就するが故に、善行は行ず可く、法として訶す可きこと無きが故に、具足して捨波羅蜜を行ずるが故なり。「捨」とは、眼に色を見て憂喜の心を捨つ、乃至意法も亦是の如し。婆阿提僻多羅等の諸經も應に此の中に說くべし。

△「四無所畏」とは問うて曰く、一法の名を無畏と爲す。何を以ての故に四有りやと。答へて曰く、四事の中に於いて疑畏有ること無きが故に四有り。一には佛、諸比丘に告げたまふが如し。我れ自ら誠言を發しぬ、是れ一切智人なり。此の中に若し沙門・婆羅門・諸天魔・梵及び世間の智人有つて法の如く難じて言く、如來は此の法を知らずと。我れ此の中に於いて乃至微畏の相有ることを見ず。是の相を見ざるが故に安隱無畏を得と。是れ初の無畏なり。實の如く盡く一切法を知るが故なり。二には自ら誠言を發して、我れ一切の諸漏盡きたりと。若し沙門・婆羅門・諸天魔・梵、言く、是れ漏盡きずと。乃至是の相有るを見ず、是の相を見ざるが故に安隱にして無畏なり。是の二無畏は善く

※第二十二法より第二十五法四不守護法。

【四九】守護＝正藏には護とあれども今三本に據る。

△第二十六法より第二十九法四無所畏。

乃ち道を得ん。佛は先に觀察籌量して、應に得度すべきに隨つて而も爲めに法を說き、而も之を度脱したまふ。是の故に一切の說法は皆悉く不空なり。經に說くが如し、世尊は先づ知見して而も說法したまふ。知見せざれば說法したまはずと。

※「無謬無失なり」とは、諸佛の說法には謬無く、失無し。「謬無し」とは、語義乖違せざるが故に。「失無し」とは、義を失せざるが故に、道の因緣を失せざるが故に不失と名づけ、道果の因緣を謬らざるが故に不謬と名づく。少からざるが故に不失と名づけ、過らざるが故に不謬と名づく。【四七】四無礙智に通達するを以ての故に、安慧を念じて常に調和するが故に、斷・常・無因・邪因等の諸見を遠離するが故に、所說の法の中に人をして迷悶有らしめず。言ふ所の初後の相違の過無く、此の義、經に隨ひ、應に此の中に廣く說くべし。經に說くが如し。諸比丘よ、汝が爲めに法を說かん。初も善、中も善、後も善、語も善、義も善、淳一にして雜無し、具さに梵行を說く。

△「希有の事を以て法を說く」とは、敎化する所に隨つて卽ち道果を得る、是を希有と名づく。若しは答ふる所有り、若しは受記する所、皆實にして異ならず。是も亦希有なり。佛は所說に道有り、此の道は煩惱を雜へず、能く煩惱を斷ず。是も亦希有なり。佛は所說有れば皆利益有り、終に空言ならず。是も亦希有なり。若し人、佛法の中に於いて勤心に精進せば、能く不善法を斷じて善法を增益す。是も亦希有なり。復た次に【四八】三希有有り。神通を現ずる希有、逆つて彼の心を說く希有、敎化有る希有なり。是の三希有を以て說法するを名づけて希有を以て說法すと爲す。

◎「諸の衆聖中の最上の導師」とは、諸佛は一切衆生の心の所行・所樂・結使の深淺、諸根の利鈍、上中下の智慧を知り、善く知つて通達したまふが故に、衆聖の中に於いて最上の導師たり。又能く善く四諦の相を知り、善く諸法の總相、別相を知りたまふ。又說法の不空、因緣の不謬、不失の法を以ての故に衆聖の中に於いて最上の導師なりと。

※**第十九法無謬無失。**

【四七】 四無礙智＝前出。二一一頁參照。

△**第二十法無能害者。**

【四八】 三希有を釋す。

◎**第二十一法賢聖中大將。**

天人此を見て希有の心を起して益々更に信樂す。又、長壽天に、佛の先世に惡業行有ることを見て、若し今受けざれば惡行に報無しと謂はん。佛は其の邪見を斷ぜんと欲したまふが故に、現に此の報を受けたまふ。復た次に佛は苦樂に於いて異有ること無く、吾我の心無し、畢竟空なるが故に、諸根は調柔にして變ずべからざるが故に。方便を作して苦を離れ、樂を受く須からず。菩薩藏の中に說くが如し。佛は方便を以ての故に現に此の事を受く、應當に廣く知るべし。是を佛の不可殺害不共法と名づく。

※「說法不空」とは、諸佛の所有る言說は皆果報有り、是の故に諸佛の說法は不空なり。何を以ての故に、諸佛は未だ說法せざるの時、先づ衆生の本末心は何處に在りやを觀じ、結使の厚薄、其の先世に從ふ所の功德を知り、其の根性、勢力の多少を見、其の障礙の方處、時節を知りたまふ。應ずるに軟法をもて度す可く、苦の事を度す可し、或は復た應に軟を以て苦の事を度すべし。或は小を須ひて度を發し、或は廣く分別して度す。[四三]陰・[四四]入・[四五]界・十二因緣を以て而も得度すべき者有り、或は信門を以てし、或は慧門を以て而も入ることを得る者あり、是の人は應に佛に從つて度すべく、是の人は聲聞に從つて度すべく、是の人は應に餘緣を以て得度すべし。是の人は應に聲聞乘を成ずべく、是の人は應に辟支佛乘を成ずべく、是の人は應に大乘を成ずべし。是の人は久しく貪欲を習ひ、瞋恚を習ひ、愚癡を習ふ。是の人は貪欲・瞋恚を習ひ、是の人は貪欲・愚癡を習ふ。是の如く各各分別す。是の人は斷見に墮し、是の人は常見に墮し、是の人は多く身見に著し、是の人は多く邊見を習ひ、是の人は多く戒取・見取を習ひ、是の人は多く憍慢を習ひ、是の人は多く自卑諂曲を習ふ。是の人は心に疑悔多く、是の人は好んで言辭を樂む。義理を貴ぶ有り、深義を樂ふ有り、淺事を樂ふ有り。是の人は先世は[四六]助道法を集め、是の人は今世に助道法を集め、是の人は但だ福報善根を集め、是の人は但だ集めて善根を貫穿す。是の人は應に疾く道を得べし、是の人は久しくして

※第十七法所說不空。

【四三】陰＝五陰。
【四四】入＝十二處。
【四五】界＝十八界。

【四六】助道法＝諸の道品は諦理を得ることを資けく果德を證せしむれば助道法と云ふ。

是を反問答と名づく。「置答」とは[四〇]十四種の邪見是れなり。所謂る世間は常なり、世間は無常なり、世間は常無常なり、世間は非常非無常なり。世間は有邊なり、世間は無邊なり、世間は亦有邊亦無邊なり。世間は非有邊非無邊なり、如來は滅後に有り、如來は滅後に無し、如來は滅後に亦有亦無なり、如來は滅後に非有非無なり、身卽ち是れ神と身異神異となり。上の如く一切の衆生は大辟支佛の智慧の如く樂說して是の如き四種を以て佛に問ひたてまつる。佛は皆隨順して其の問ふ所に答へたまふ、多からず、少からず。是の故に佛は答波羅蜜を具足したまふと說く。能く害すること有ること無し。佛は不可殺の法を得たまふが故に、能く佛は身分支節を斷ずること無く存亡自在なり。經に說くが故し。若し人方便をもて佛を害せんと欲せば是の處有ること無しと。

問うて言く、佛の壽命は定と爲すや、不定と爲すやと。答へて曰く、人有つて言く、不定なりと。若し佛の壽命に定有らば、餘の壽命を定むる者に於いて何の差別か有らんや。而も實には佛の壽命は不定なり。能く害する者無きを乃ち希有と爲す。人有つて言く、佛の壽命は定有り、餘人の壽命も定まれりと雖も而も手足、耳鼻斷ず可し。佛には是の事無しと。

問うて曰く、云何ぞ佛の害す可からざる、是れ不共法なりやと。答へて曰く、諸佛は不思議なり。喩を假つて知る可し。假使一切十方の世界の衆生皆勢力有つて、設へば一魔有つて爾所の勢力有らん、復た十方一一の衆生の力惡魔の如くならしめんに、共に佛を害せんと欲するも尙佛の一毛をも動かすこと能はず。況んや害する者有らんをやと。

問うて曰く、若し爾らば[四一]調達は云何ぞ佛を傷つくることを得たるやと。答へて曰く、此の事先に已に答ふ。佛は衆生に三毒の相を示さんと欲したまふ。調達は持戒修善すと雖も利養に貪著して而も大惡を作す。又佛は諸の人天に於いて心に異有ること無し。加ふるに慈愍を以て調達・[四二]羅睺羅を視ること左右の眼の如きことを知らしむ。佛は常に等心を說き、是の時其の平等なることを現ず。

有軍、勝軍と云ふ。
【四〇】十四邪見＝本文に詳し。世界の存在に關し八、如來に關し四、身神に關し二とにて十四。
【四一】調達＝前出。四十不共法中雜一切智人品第二十二參照。
【四二】羅睺羅＝Rāhula. 羅云、羅吼羅に作る。佛の嫡子。十大弟子の一人、密行第一と稱せらる。

「具足答波羅蜜」とは、一切の問難の中に佛は善く能く具足して答へたまふ。何を以ての故に、[三五]四種の問答の中に於いて錯亂有ること無く、善く義を知るが故に、具足して義波羅蜜を壞せざるが故に、一切衆生の性の所行、所樂を樂欲し、深知するが故に。舍利弗、佛に白して言すが如し、世尊、佛は人の爲めに善法を說き、而も是の中に多く衆生有つて證を得、證し已つて心に[三六]渴愛無し、渴愛無きが故に世間に於いて受くる所無し、受くる所無ければ己心は則ち內滅す。佛は善法の中の無上事に於いて盡く知つて餘無く、更に勝者無しと。

問うて曰く、汝が言ふ四種の問答とは何を謂ひて四と爲すやと。答へて曰く、一には定答、二には分別答、三には反問答、四には置答なり。「定答」とは一比丘、佛に問ひたてまつるが如し。世尊、頗し色にして常に變異せざるもの有りや不や。世尊、受・想・行・識は常に變異せざるや不やと。佛答へて言く、比丘よ、色の常にして而も變異せざるもの有ること無し。受・想・行・識も常にして而も變異せざるもの有ること無しと。是の如き等を名づけて定答と爲す。「分別答」とは[三七]布多梨子梵志の[三八]婆摩提に問ふが如し、人有つて故に身口意の業を作るに何等の果報をか受けんやと。婆摩提定めて答ふ、人有つて身口意を以て故に業を作らば苦惱の報を受けんと。是の問は應に分別答なるべし。是の梵志後に來つて佛に是の事を問ふ。佛答へて言はく、布多梨子よ、人有つて若し身口意に故に業を作らんに、是の業或は苦の報を受け、或は樂の報を受け、或は不苦不樂の報を受けん。若し苦の業を作らば苦の報を受けん、樂の業は樂の報を受けん、不苦不樂の業は不苦不樂の報を受けんと。是の如き等の諸經は皆分別答なり。「反問答」とは[三九]先尼梵志が佛に問ひたてまつりしが如し。佛言はく、我れ還つて汝に問はん、汝が意に隨つて答へよ。先尼よ、汝が意に於いて云何、色は是れ如來なりや不や。受・想・行・識は是れ如來なりや不やと。答へて言く、非なり、世尊よを、色・受・想・行・識を離るる、是れ如來なりや不やと。答へて言く、非なり、世尊よと。是の如き等の經に應に廣說すべし。

※第十六法一切問答及受記具足波羅蜜。

【三五】四種問答＝後節に委し。

【三六】渴愛＝渴して水を求むる如く欲に愛着するをいふ。

【三七】布多梨子＝Potalipatra、哺羅陀子とも音譯す。哺利多經（大正一の七七三）の哺利多のこと。次の註を見よ。

【三八】婆摩提＝Samiddhi　三彌提とも音譯す。佛、王舍城の竹林精舍に住せられし時、異學の布多梨子と遇ひ、業に就いて語り、その語る所を阿難に報じ、共に佛所に行いて敎へを請ふ。佛はその問答について分別して說くべきを一向に說きたるは誤りなりと叱す。分別大業經（大正二の三七九）參照。

【三九】先尼＝Senika、外道の名。西佛迦、栽尼に作る。譯し

には義、四には無常、五には生、六には不生、七には度なり。佛は第六識を以て皆悉く知りたまふ。佛は四諦の相を知り及び世俗法を知りたまふ。是の故に諸佛は善く心不相應、無色法を知りたまふと言ふ。

「勢力波羅蜜」とは一切の所知法に於いて餘無し、中に一切種智の勢力・十力・[三〇]四無所畏・四功德處の助成を得るが故に、又善く十力を得るが故に、是の故に佛は能く勢力婆羅蜜を成就したまふ。是の勢力は[三一]第十六心中に在つて增益を得、一切智は常に佛身に在り、乃至無餘涅槃は是の事に因るが故に、一切法中に於いて無礙智を得。

「無礙智波羅蜜」とは法・義・辭・樂說の此の四法に於いて勢力無量にして、通達無礙なり。經中に說くが如し。佛、諸の比丘に告げたまはく、如來の[三二]四弟子は第一念力・智慧力・堪受力を成就す。善く射るものは樹葉を射て、卽ち過ぐるに難無きが如し。是の諸の弟子は[三三]四念處を以て來つて問難す。我は常に休息せず、飲食・便利・睡眠を除いて百年中に於いて、如來は常に答へて樂說したまふ。智慧窮盡有ること無し。佛は此の中に於いて少欲の相を以て自ら智慧を論じたまふ。若し三千大千世界の所有る四天下の中に滿つる微塵を、爾所の塵數に隨つて爾所の三千大千世界と作し、中に滿つる衆生皆舍利弗の如く、辟支佛の如く、皆悉く智慧を成就し樂說せん。壽命も上の塵數大劫の如くならん。是の諸人等四念處に因つて其の形壽を盡して如來に問難せん。如來還つて四念處の義を以て其の所問に答へたまふ。言義重からず、樂說して盡くること無し。[三四]「法無礙智」とは善く能く諸法の名字を分別して通達無礙なり。「義無礙」とは、諸法の義に於いて通達無礙なり。「辭無礙」とは、衆生の類に隨つて諸の言辭を以て其の義を解せしめ、通達無礙なり。「樂說無礙」とは、問答の時善巧に說法して窮盡有ること無し。餘の賢聖は究盡すること能はず。唯だ諸佛のみ能く其の邊を盡すこと有り。是の故に無礙智波羅蜜と名づく。

續するものを無表業と云ふ。

【二六】無作有り＝無表業。

【二七】故、正藏は缺く今。三本に依る。

※第十四法大勢波羅蜜。

【二八】比智＝佛の絕對智に對する相對智の意。

【二九】七百不相應法＝七百は五百煩惱の如く多數の意味か。更に考ふべし。

△第十五法無礙波羅蜜。

【三〇】四無所畏＝又四無畏と云ふ。智度論第四十八に依れば一に一切智無所畏、二に漏盡無所畏、三に說障道無所畏、四に說盡苦道無所畏なり。この品後段に詳なり。十力、四功德處等前出。

【三一】第十六心＝見道に入り、四諦の理を觀じて得たる八忍八智中の道類智を云ふ。

【三二】四弟子＝正藏には四弟子とあるも今三本に據る。

【三三】四念處＝前出。入初地品第二。

【三四】四無礙智を釋す。

聲聞の弟子滅度して無餘涅槃に入る。及び辟支佛を號して成と曰ひ、號して華相と曰ひ、號して見法と曰ひ、號して法篋と曰ひ、號して喜見と曰ひ、號して無垢と曰ひ、號して無得と曰ふ。是の如き等の諸の辟支佛無餘涅槃に入ると、佛は悉く通達したまふ。復た次に未だ滅度せず、有餘涅槃に在るも生緣、都て盡くと、是の事を通達したまふを、亦通達して滅を知ると名づく。經に說くが如し、佛、阿難に告げたまはく、我は此の人に於いて悉く知つて微闇も有ること無し。是の人、畢定して盡く是れ內法、是の人、命終して當に涅槃に入るべしと。亦滅を知るに名づく。又餘の人に於いて四諦に通達して能く其の事を知るを、亦滅を知ると名づく。經に說くが如し、佛、阿難に告げたまはく、我は何の方便もせずして、此の人をして卽ち此處に於いて漏盡解脫せしめんと。佛、阿難に告げたまふが如し、汝、禪定を樂ふや、結使を斷ぜんことを樂ふやと。亦通達して滅を知るに名づく。佛、舍利弗に告げたまふが如し、我は涅槃を知り、涅槃に至る道を知り、涅槃に至る衆生を知ると。是の如き等の諸經は此の中に應に說くべし、是を諸佛は通達して滅を知りたまふと名づく。

*「善く心不相應、非色法を知る」とは戒善根使・善律儀・不善律儀等の諸の心不相應・非色法なり。[二四] 聲聞・辟支佛は通達すること能はず。諸佛は善く通達すること目前に現ずるが如し、心不相應の諸法の中に於て第一の智慧力を成就するが故にと。

問うて曰く、戒・善律儀・不善律儀は是れ色法なり。何を以てか非色の法と言ふやと。答へて曰く、戒善律儀・不善律儀に二種有り、[二五] 作有り[二六] 無作有り。作は是れ色、無作は非色なり。無作は非色なるが[二七] 故に佛は不共力を以ての故に、現前に能く知りたまふ、餘の人は比[二八] 智を以て知ると。

問うて曰く、諸佛は但だ善く心不相應・非色法を知つて善く相應法を知らさるかと。答へて曰く、若し不相應法に通達せば相應法は復だ論ずる所無し。人の能く毫毛を射ば麁物は則ち論ぜさるが如し。

復た次に[二九] 七百不相應法中、聲聞・辟支佛は第六識を以て能く七法を知る。一には名、二には相、三

（平等相）を知了すると、萬有個個の種種相（差別相）を殘りなく知盡するとの二意あり。總じては兩意を含みて一切智といふも、別しては諸法の一相を知了するを一切智と云ひ、諸法の差別相を知盡するを一切種智と云ふ。龍樹は時に三智を分ち、（一）一切智は總相（空の一相）を知る聲聞、緣覺の智。（二）道種智は別相（種種差別相）を知る菩薩の智。（三）一切種智は總相別相に通達する佛の智とす。

【二二】毘婆尸佛、尸棄、毘式婆、鳩樓孫、加那含牟尼、迦葉佛の過去六佛。之に釋迦佛を加へ過去七佛といふ。易行品第九參照。

第十三法善知心不相應無色法。

【二三】此經中＝正藏には經此中とあれども今三本に據る。

【二四】非色法＝色Rūpaとは、質礙の義。形質ありて互に障礙する性質あるもの、卽ち物質及び物質より成れるものをいふ。その色法に非ざるものを非色法と云ふ。

【二五】作有り＝表業。業の分類には種種あるも、身、口二業等の如く外に表はるる事を表業と云ふ。その表業により、その表業の終りし後も、外には表はれずに、善惡の業を相

若干の衆生は第三處[19]に生れ、若干の衆生は[20]第四處に生る。若干の衆生は爾所の時に生來し、若干の衆生は爾所の時を經て當に退沒すべし。若干の衆生は畢定して壽命あらず。若干の衆生は極めて壽にして爾所の時ならん。若干の衆生は畢定して壽命あり、若干の衆生は欲界より命終して、來つて此の中に生れ、若干の衆生は色界より命終して、來つて此の中に生れ、若干の衆生は無色界より命終して、還つて此の中に生れ、若干の衆生は人中より命終して、即ち來つて此に生れ、若干の、衆生は天中より命終して、即ち來つて此に生る。是の諸の衆生は此に於いて命終し、若しは欲界に生れ、若しは色界に生れ、若しは無色界に生る。是の諸の衆生は此の中に命終し、若しは天道に生れ、若しは人道に生れ、若しは阿修羅道に生れ、若しは地獄・畜生・餓鬼道中に生る。是の諸の衆生は彼處に於いて涅槃に入る。若干の衆生は皆是れ凡夫、若干の衆生は是れ佛、賢聖の弟子、若干の衆生は凡夫の弟子、若干の衆生は聲聞乘を成じ、若干の衆生は辟支佛を成じ、若干の衆生は皆大乘を成ず。若干の衆生は聲聞乘を成ぜず、若干の 衆 生は辟支佛乘を成ぜず、大乘を成ぜず。若干の衆生は行滅の者、若干の衆生は不行滅の者、若干の衆生は上行、若干の衆生は某佛の弟子たり。諸佛は又是は定んで味を受け、是は定んで味を受けず。是は善、是は無記、是は定んで中に若干の結を斷じ、是は定んで上中下を知りたまふ。略して無色諸定を說かば、唯だ諸佛のみ有り、[21]一切種智を以て悉く能く大小・深淺・心相應・不相應・果報・非果報等を分別す。是を諸佛は具足して悉く無色定處を知つて通達すと名づく。

*〇〇「滅法」とは、諸の辟支佛、諸の阿羅漢の過去、現在に滅度せる者、諸佛は通達したまふこと、經中に說くが如し。諸比丘よ、是の賢劫の前九十一劫、[22]毘婆尸佛出でたまふて三十一劫に至り、二佛有つて出でたまふ。一を尸棄と名づけ、二を毘式婆と名づく。此の賢劫の中に鳩樓孫・迦那含牟尼・迦葉佛出でたまふと。是の如く過去の諸佛を大いに知見したまふ。[23]此の經中に應に說くべし、及び諸の

【一九】第三處＝無所有處定。
【二〇】第四處＝非想非非想處定。

※第十二法具足通達諸永滅事。
【二一】一切種智＝一切法萬有を知了する佛智、即ち最上完全なる智にして無上正等覺といふも同義なり。一切法を知了するに萬有の歸趣たる一相

而も定答を作さば、一切の智人と名づけず。是の故に不定事の中に於いては必ず應に不定智を用ふべし。是の故に不定智不共法有り。復た次に若し人一切法の中に於いて決定して知らば、是の人は卽ち必定して邪論中に墮す。若し一切の法必定せば、則ち諸の作爲する所則ち人の巧方使を須ひずして而も得ん。說くが如し。

若し好醜已に定まば、　人の功則ち應に定むべし。
諸の因緣を須ひず、　方便して而も修習せよ。

復た次に現見に自ら身を守護せずんば則ち衆苦有り。若し自ら身を防護せば則ち安利なり。又、種種業事を作す中に、諸の疲苦を受くれば後に種種の富樂果報を得るが如し。或は復た人有つて、今世に靜默として都て所作無きも而も果報を得。是の故に是の不定事有り、是の不定事を知るが爲めの故に不定智有ることを知ると。

問うて曰く、汝、守護し、守護せず、功を施し、功を施さずして而も亦不定の事の成ずる者有り、人有つて自ら防護を好み而も苦惱を得、自ら防護せずして苦惱を得ず。又自ら疲苦を勤めて功果を得ず、勤めて功を施さずして而も功果を得。是の事不定なりやと。答へて曰く、汝が所說は則ち我が不定の義を成ず。若し不定の事有らば應に不定の智有るべし。我れ若し人自ら防護せざれば悉く皆苦を受くとは言はず。又、功業を離れて果報有りとも言はず。人有つて功夫を作すと雖も、先世の罪障の故に受樂することを得ず。一切皆爾りと言はず。是の故に汝が難は非也。是れを諸佛は不定の事の中に於いて獨り不定の智有つて具足すと名づく。

*「無色處を知る」とは、聲聞、辟支佛は[一七]無色處に生れて衆生及び法の少分を知る。諸佛世尊は無色處に於いて、衆生及び法を具足して悉く知りたまふ。是の無色處に若干の衆生有つて此處に生れ、若干の衆生は彼處に生れ、若干の衆生は[一八]初無色定處に生れ、若干の衆生は[一九]第二處に生れ、

※第十一法善く無色定事を知る。
【一七】無色處＝無色界のこと。
【一八】初無色定處＝空無邊處定。
【一九】第二處＝識無邊處定。

よ、諸の婆羅門、在家の白衣は能く福德善根を修すること有れば則ち在家の者に勝る。是の事云何と。佛言く、我れ此の中に於いて定答せず。出家或は善を修せざること有れば則ち在家に如かず。在家能く善を修せば則ち出家に勝ると。又、大涅槃經の中に說く、巴連弗城は當に三事を以て壞すべし、或は水、或は火、或は內人外人と與に謀ると。又、[一三]波梨末梵志に因つて說く、是の裸形の波梨末梵志は、若し是の語を捨てず、若し是の心、若し是れ邪見にして我が目前に到らば、是の處有ること無からん。若しは皮繩斷、若しは身斷、終に佛前に來到せざらんと。又、筏喩經の中に說かく、我が此の法は甚深なり。方便を以て說いて淺く解し易からしむ。若し直心に教の如く行ずる者あらば、二種の利を得。若しは今世に漏を盡し、若しは漏を盡さずとも當に[一四]不還道を得べしと。又、增一阿含舍迦梨經中に、佛、阿難に告げたまはく、若し人故に業を起さば報を受けずして而も道を得る者有ること無し。若しは現に報を受け、若しは生に受け、若しは後に受くと。又增一阿浮羅經中に說かく、佛、諸比丘に告げたまはく、諸の惡人は死して若しは畜生と作り、若しは地獄に墮す。善人の生處は若しは天、若しは人なり。又無畏王子經中に說かく、無畏、佛に白して言く、佛の所說に能く他をして瞋らしむること有りや不やと。佛言く、王子よ、是の事不定なり。佛は或は憐愍の心の故に他人をして瞋つて善因緣を種うることを得しめたまふ。乳母の曲指を以て小兒の口中の惡物を鉤出し、傷つくと雖も患無からしむるが如しと。又、阿毘曇の中に說かく、衆生に三品あり。[一五]不定聚より或は邪定に墮し、或は正定に墮す。是の如き等の[一六]四法藏の中に無定の事數千萬種ありと。

問うて曰く、若し人智慧不定にして決定心無く、事の中に於いて或は爾り、或は爾らずとせば、則ち一切智人と名づけず。一切智人とは、不二語の者、決定語の者、明了語の者なり。是の故に善く不定を知るは名づけて佛の不共法と爲すことを得ずと。答へて曰く、不定事は若しは爾り、若しは爾らずとは、衆因緣に隨屬するが故に、是の中には應に定說すべからず。若し人不定の事にして

【一三】波梨末＝Pāthikaputra 裸形外道の名。

【一四】不還道＝不還果のこと 調伏品第七註四果參照。

【一五】不定聚＝正、邪、不定の三聚。

【一六】四法藏＝四法品第十九に、一值佛、二聞六度、三說法無瞋、四阿蘭若樂住を四廣大藏と云ふ。この類か。四十不共法品第二十二に五法藏を解く。併せて參照すべし。

問うて曰く、汝が所執も亦同じく此れ過なり。若し可知、是れ一なれば、苦樂等も亦應に是れ一なるべし、而も實には一ならずやと。答へて曰く、我は一切の可知は是れ一なりとは言はず、汝が所執は一切皆是れ一なり。是の故に汝と同じく過らず。復た次に汝が說く、同じく過有るが故に、汝が自ら執る中に過有り。若し人自ら所執中の過を受くれば即ち[九]負處に墮す。汝の所執に過有るを知らば、應に復た他の過を說くべからず。是の故に、汝が說く同じく過有りとは、是の事然らず。復た次に若し知と可知との二法一爲りと謂はば、應に可知の法を用ふべし。瓶衣等の物を知るは、而も實には知を用ひて一切の物を知る。若し瓶衣等は知に於いて異無しと謂はば、今瓶衣等は物を知ること能はず。即ち應に異有るべし、而も實には知を用ひて一切の物を知る。是の如く處處に過有るが故に一切は皆是れ一なりと言ふを得ず。復た次に知と所知と是の二を名づけて一切知と爲す。是れ一切法の故に。如來を名づけて一切智と名づくとは、是れ一切智人は金剛三昧に因る。是の故に金剛三昧を成ず。汝が先に言く、金剛三昧は成ぜず、一切智は成ぜずとは、是の事然らず。

[一〇]四十不共法中善知不定品第二十三

※「能く不定の法を知る」とは、諸法は未だ生ぜず、未だ出でず、未だ成ぜず、未だ定らず、未だ分別せず、是の中に如來の智慧は力を得。佛、分別業經の中に說くが如し。佛、阿難に告げたまはく、人、有つて身に善業を行じ、口に善業を行じ、意に善業を行ず。是の人、命終して而も地獄に墮す。人有つて身に惡業を行じ、口に惡業を行じ、意に惡行を行ず。是の人命終して而も天上に生ずと。阿難、佛に白して言く、何が故ぞ是の如くなると。佛の言く、是の人或は先世の罪福の因緣已に熟し、今世の罪福の因緣未だ熟せず、或は命終に臨んで正見・邪見・善惡の心を生ず。終に垂んとするの心其の力大なるが故にと。又、首迦經の中に說かく、[一一]叔迦婆羅門の子、佛に白して言さく、[一二]瞿曇

【九】負處に墮す＝議論して負くること。

※第十法善く不定事を知る。

【一〇】この品は前來の四十不共法中、第十法より第四十法までを釋し、更に餘の不共法を釋す。

【一一】叔迦婆羅門＝Śuka 王舍城の女にて毘舍種の出。初め在家の弟子なりしかど後出家せり。

【一二】瞿曇＝Gautama 新に喬答摩と云ふ。佛の俗姓なり。

いて第一導師にして、善く正法を說く、宜しく勤めて精進して道果を得可しと言ふ。是の如き等の因緣により自ら其の身を讚ずるは、自ら貴しと爲して他人を輕賤するには非ず。惡人を呵するは惡法を除滅せしめんと欲して、衆生を憎恚する爲には非ず。人有つて如法の利を求めんに、其の心、淸淨質直にして而も惡知識と和合せば、此を遠離せしめんと欲するが故に、而も之を呵罵す。未だ佛を得たまはざる時にも、尙髓腦を以て人に施したまふ。何に況んや成佛して而も當に呵罵すべけんや。

＊汝が說く、佛法は初後に相違すとは、今當に答ふべし。佛法中には始終相違の事有ること無し。汝等は佛法の義を知らざるが故に、以て相違と爲す。是の涅槃道とは、[八]迦葉佛の滅してより已來、復た人の說くこと無く、亦人の得しこと無し。是の故に我は新に道を得と言ふなり。餘處に復た我は故道を得と說くは、是の道は錠光等の諸佛の得る所、所謂る八聖道にして能く涅槃に至るなり。一道一因緣の故に名づけて故道と爲す。是の故に當に知るべし、佛は一切智を成じたまふことを。

＊問うて曰く、言ふ所の一切智とは云何が名づけて一切智と爲すや。一切を知るが爲めの故に名づけて一切智と爲すやと。答へて曰く、「一切智」とは「知」は可知なり。「可知」とは五法藏なり。過去・未來・現在・出三世・不可說所用なり。此の五藏を知るを名づけて知と爲す。是の故に知及び所知を名づけて一切と爲すと。

問うて曰く、知・可知を一切に名づくとは、是の事然らず。何を以ての故に、是の法は但だ是れ一なり。知可知も亦是れ可知なるが故に。世間に是の人は知利なり、是の人は知鈍なりと言ふが如しと。答へて曰く、若し一切是れ一なれば則ち寒熱相違するも、皆應に是れ一なるべし、明闇、苦樂の諸の相違の事も亦應に是れ一なるべし。但だ是の事然らず。是の故に一切は皆是れ一なりと言ふを得ずと。

※第十問に答ふ。

【八】　迦葉佛＝過去六佛の最後出世の佛にして釋迦佛の出世まで佛無し。

※一切智は知可知なり。

とは、今當に答ふべし。佛は其の死と不死とを念じたまはず。但だ此の人、結使微薄にして、化度に堪任せんことを念じたまふ。所念の處に隨へば則ち智を生ずること有り、是の故に佛は先づ自ら說きたまひ、而して後に天理を告げたまふが故に宜然なり。又佛は先に出家して此の二人に就いて曾つて宿止を經たまふ。諸天、人民は儻し能く佛は其の妙法を受け、餘處に道を得たまひしことを疑ふ。佛は彼の病を斷ぜんと欲したまふが故に、卽時に唱言したまはく、彼の人長衰すること此の如し。妙法如何ぞ聞かざるやと。是の如き義を推さば、[六]五比丘の事も亦復た知る可し。但だ其の度す可き因緣を念じて其の住止所在を念じたまはず。後に住處を念ぜば卽便知ることを得。是の[illegible]に應に一切智人を破すべからず。汝が言く、[七]巴連弗城の壞せるを疑ふとは、今當に答ふべし。是の城の破因緣不定なり。不定の因緣にして而も定と說くは、是れ則ち過と爲す。又我れ先に四十不共法中に諸佛は善く不定を知ると說けり。答ふれば則ち此の難を受けず。

*汝が說く、佛は諸比丘に問ひたまはく、汝等の聚會は何の所說の爲なりやとは、今當に答ふべし。佛は將に法門を說きたまはんと欲するが故に、是の如き問を作したまふ。或は結戒せんと欲したまふが故に、其に命じて自ら是の如き種種の說法を說きたまふが故に、問ふて而も咎無し。世間にも亦知つて而も復た問ふこと有り。人の食ふを見て、問うて、食ふやと言ふが如く、天寒き時に問ふて、寒きやと言ふが如し。佛も亦是の如く知つて、而も復た問うて俗に隨ふに咎無し。

*汝が言く、自ら讚して他を毀すは一切智人に非ずとは、今當に答ふべし。佛は身を貪らず、供養を貪らず、他人を恚せず、增上慢したまはず。自ら我は世間に於いて最第一なりと說きたまふ所以は、衆生の諸根猛利にして惡知識を捨てゝ我れを以て師と爲さば、是の人長夜に當に安隱を得べしと信ずること有り、是の故に佛は自ら身を讚したまふ。復た次に人有つて第一樂道を求め、而も懈怠にして精進すること能はざる有り、是の故に佛は無上利中に應に懈怠すべからず、我は世間に於

【五】阿闍迦蘭＝第二十二品註參照。

【六】五比丘＝第二十二品註參照。

【七】巴連弗城＝第二十二品註參照。

※第六問に答ふ。

※第九問に答ふ。

多讀多誦を貴ばず。又佛說の如く、一法句を行じて能く自ら利益するを名づけて多聞と爲す。智慧も亦是の如し。若し所說の如く行ずること能はずんば、何ぞ智慧を用ひんや。是が爲めの故に、智慧を以てせざるが故に、說いて上座と爲す。譬へば世間の現事の如し、弟、多聞多智なりと雖も、而も兄、爲めに禮を作さず。是の故に、智慧を以てせざるが故に、先づ禮拜供養を受く。是の如く多聞智慧なりと雖も、應に先づ受戒の者を禮すべし。若し先づ多聞智慧を供養せば則ち鬪亂を爲す。餘の沙門の果を得ること、[二]斷結、神通を得ること最も知り難し。是の人は果を得、是は果を得ず、是は斷結多く、是は斷結少し、是は神通を得、是は神通を得ず、此を以て上座と爲す可からず。同じく[三]道果・斷結・神通を得ば、誰をか上座と爲さんや。是の故に佛敎に隨つて行ずるを最第一と爲す。

*汝が說く、佛は說法に於いて疑を生ずとは、今當に答ふべし、佛は深法に於いて倘疑を有したまはず。何ぞ況んや應說、不應說の中に而も疑有らんや。佛は、我は都て法を說かずとは言ひたまはず。但だ云ふ、心に閑靜を樂ひ、[四]多事を務めずと。而して後に說法の中に於いて咎無し。復た次に諸の外道の言く、佛は大聖と爲り、寂默にして戲論無し、何ぞ衆を畜へて而も敎化することを用ひんや。爲めに設使ひ敎化すとも亦盡すべからず。分別して何ぞ說法を用ひん、弟子を畜養するは、是れ貪著の相に似如たり。是の故に佛は自ら思惟したまはく、我が法は甚深にして智慧・方便無量無邊なり、而も度す可き者少しと、是の故に自ら默然に如かずと言ふ。又外道の譏訶する所を防ぐが故に、梵天王をして說法を求請せしむるに、即時に梵天王等佛に白して言く、衆生は愍む可し。中に利根・結使薄き者有り、化度す可きこと易しと。是の故に諸の梵王等の請を受け、人大寶藏を得て應に餘人に示すべきが如し。是の如く諸聖は自ら法利を得ば、亦應に人を利すべし。

汝が所說の如く、佛は[五]阿蘭迦蘭等の先に已に命終せるを知りたまはず、爲めに說法せんと欲す

【二】斷結＝煩惱を斷ずること。結とは煩惱の異名なり。

※第八問に答ふ。

【三】道果＝道は菩提、果は涅槃なり。涅槃は菩提の道に由て證せらるるものなれば道果と云ふ。

【四】多＝正藏には與とあるも今三本に據る。

※第七問に答ふ。

卷の第十一

四十不共法中難一切智人品の餘[一]

*汝が說く、耆年、貴族家等は應に上座と爲すべしとは、今當に答ふべし。道法の中には耆年、貴族家等は道に於いて益無し。何を以ての故に、佛法の中に生ずるを名づけて貴族、好家の中に生ずと爲す。大戒を受けてより其の年數を數へて名づけて耆年と爲す。汝が謂く、耆年を應に供養すべしとは、先づ出家の戒を受くること是れ大なるに非ずや。又戒を受けてより以後諸姓等の差別有ること無し。大戒を受けてより、名づけて佛家に生在すと爲す。是れ則ち先の大小の家名を失して、皆一家と爲すなり。汝が說く、持戒とは、出家は先づ持戒に在つて日に久しく、長夜護持して年歲多きが故に應に上座と爲すべしとは、結戒の中に說くが如し。汝が說く、持戒の人は應に破戒の者を禮すべからずとは、今當に答ふべし。破戒の人とは、尙應に共に住すべからず。何に況んや禮拜供養せんをや。其の自ら是れ比丘なりと言ふを以ての故に、其の大小に隨つて而も爲めに禮を作す。泥木、天像を禮するが如し。眞天を念ずるを以ての故に。佛は年少に勅したまふに、應に上座を禮すべし、佛敎に順ずるが故に則便福を得と。汝が說く、頭陀を以ての故に應に敬禮すべしとは、今當に答ふべし。若しは頭陀の人は五種有るが故に、分別を得ること難し。一には愚癡にして所知無きが故に、貪受にして法を雜ず、二には鈍根悕望にして利を得、三には惡意もて人を欺誑す、四には狂亂、五には作念なり。「頭陀法」とは諸佛賢聖の共に稱讚したまふ所なり。其の涅槃の道に隨順するを以ての故に、是の五種の人は頭陀の法を行じ、眞僞別ち難し。「多聞」とは、多聞の人なり。亦頭陀の如く分別す可きこと難し。何を以ての故に、或は樂道を以ての故に多聞し、或は利養を以ての故に多聞す。是の如き等も亦分別すること難し。又佛法は說の如く行ずるを貴んで、

※第五問に答ふ。

【一】 この品は前品の十問に對する答釋の後部、第五問より第十問までの答釋。倂せて一切智を解す。

らず。後に犯す者有れば事の輕重に隨ひ、是の如き罪を作らば是の如く之を治む。佛も亦是の如し。先に總じて戒を說き、後に犯す者有れば其の罪相を說く。如し惡を作す者有れば敎へて懺悔せしむ。是の如きの罪を作らば應に是の如く懺すべしと。[五六]不見擯・滅擯は共に住せざる等、是の如きの事を成ずるが故に後に乃ち結戒す。

【五六】擯＝敎團の制規を犯せるものを敎團より擯出するに種種の規定あり、比丘七種治罰法の一。

は先に十二年中に一偈を說いて[五四]布薩法と爲す、所謂る一切の惡は作すこと莫れ、一切の善は當に行ずべし、自ら其の志意を淨うせよ。是れ則ち諸佛の敎へなりと。是の故に當に知るべし、先づ已に結戒することを。復た次に佛は諸の小惡の因緣は皆應當に離るべしと說きたまふ。說くが如し、

身の諸の惡行を離れ、　亦口の諸惡を離れ、
意の諸の惡行を離れ、　餘の惡を悉く遠離せよ。

是の如きの說は當に知るべし。先づ已に結戒せることを。復た次に佛は先に已に諸の守護法を說きたまふ。說くが如し、

身を護るを善哉と爲す。　能く口を護るも亦善、
意を護るを善哉と爲す。　一切を護るも亦善、
比丘は一切を護つて、　諸惡を遠離するを得よ。

是の如き說は當に知るべし、先づ已に結戒せることを。復た次に佛は先づ善相を說きたまふ。說くが如し、

手足は妄に犯すこと勿れ、　言を節して所行を愼み、
當に樂つて定意を守るべし、　是を眞の比丘と名づく。

是の如き說は當に知るべし。先づ已に結戒せることを。復た次に沙門の法を說きたまふが故に當に知るべし、先づ已に結戒せることを。[五五]沙門に四法有り、一には瞋に於いて報ぜず、二には罵に於いて默然し、三には杖捶能く受け、四には害する者之を忍ぶ。復た次に佛は四念處を說きたまふ。身を觀じ、受を觀じ、心を觀じ、法を觀ず。是れ涅槃道の住處なるが故なり。當に知るべし、先に已に結戒せることを。若しは微小の惡も尙聽したまはず、何に況んや身口の惡業をや。是の如き等の因緣は當に知るべし。先に已に結戒せることと王者の制を立つるが如きことを。應に惡を作すべか

【五四】布薩＝Upavasatha（巴）Uposatha 今は Poṣadha の音譯。出家は半月每に衆僧を集めて戒經を說き、互に懺悔進德を勵む儀式をいふ、

【五五】沙門の四法＝本文に詳し。

答へて曰く、佛も亦先に此の事を知りたまふ。大いに衆生を利益せんが爲めに諸佛は但だ人に食を受くるを以ての故にするに非ず。以て衆生を利益し、度脫せんが爲めに淸淨心を以て迎逆し、敬禮し和顏瞻視すること有り、此れ皆大利なり。何を必ずしも飮食ならんや。種種の門を以て衆生を利益したまひ、空しく聚落に入りたまふに非ず。汝が說く、佛は醉象に逆趣したまふとは、今當に答ふべし。佛は此の事を知りたまふと雖も因緣を以ての故に往いて此の醉象必ず應に度することを得べきを以てなり。又能く其の佛を害する罪業を障ふればなり。復た次に此の象の身は黑山の如し。衆人、此の頭を低れて佛を禮するを見て皆恭敬を起す。是の因緣を以ての故に佛は故に往趣したまふ。復た次に佛は此の象に趣きたまうて過失有ること無し。若し惡事有らば此の難を作す可し。汝が[五二]隨蘭若に至るを難ずるは先世の業の果報を受くるが爲めの故なり。汝、須逗叉多羅を畜へて弟子と爲すと說くは、今當に說くべし。佛は身口意の命、守護を須ひたまはず、畏るゝ所無きが故に聽して弟子と爲したまふ。復た次に是の人は常に佛に近づくが故に種種の大神力を見ることを得、諸の天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅等の諸王來つて佛を供養し、種種甚深の要法を請問するを見て心に淸淨を得、心淸淨の故に利益の因緣を得。是の故に惡なりと雖も聽して弟子と爲したまふと。

問うて曰く、此の人佛に於いて多く惡心を生ず。是の故に應に聽して弟子と爲すべからずと。答へて曰く、若し聽して弟子と爲さゞるも亦惡心有らん。是の故に聽して弟子と爲すに咎無し。汝が說く、先に未だ罪を作らざる時に何を以て戒を制せざるやとは、今當に答ふべし。佛は先に戒を結び、八聖道の正見・正思惟・正語・正業・正命・正精進・正念・正定を說きたまふ。是れ涅槃道に至るを說くが故なり。已に一切の諸戒を說きたまふ。復た次に佛は三學を說き、善く戒を學し、善く心を學し、善く慧を學せしめたまふ。當に知るべし。已に一切の諸戒を說きたまふを。復た次に佛は諸比丘に告げたまはく、一切の惡は決定して應に作すべからずと。是れ先づ[五三]結戒に名づけざるか。佛

【五二】隨蘭若＝Verañjā 毘蘭若、隨蘭然は印度の市の名。佛、遊行の時、土地飢うるを以て馬麥を食したまふ。

【五三】結戒＝戒律を結成して敎團の制規を作ること。

佛の度したまふ所に非ずと。

問うて曰く、若し餘の人度せば、佛は何を以てか聽きたまふやと。答へて曰く、善惡各時有り、出家して便ち惡なるにあらず、調達、出家の後に持戒、諸の功德有り、是の故に出家に過無し。復た次に調達十二年に於いて清淨に戒を持し、六萬の法藏を誦す。此の果報は當來空しからず、必ず利益有り。汝が說く、「調達が機關激石」とは我れ今當に說くべし、諸佛は無殺の法を成就したまふが故に一切世間に能く命を奪ふ者無しと。

問うて曰く、若し不殺の法を成就せば何が故ぞ迸石して而も來るやと。答へて曰く、佛は先世に種うる[五〇]壞身の業に於いて定んで報應を受け、衆王に業報の捨つ可からざることを示したまふが故に現に受く。是の故に自ら來る。汝、旃遮が女を佛は先づ說きたまはずと言ふは、我れ今當に答ふべし、旃遮が女の故を以て佛を譏るは一切智人の因緣を壞すること能はず。若し佛先に旃遮が女は當に來つて我を謗るべしと說きたまへば旃遮が女は則ち來らず。復た次に佛は先世に人を謗る罪業の因緣は今必ず應に受くべし。汝が說く、佛は何を以てか孫陀利の祇洹に入る事を遮したまはざるやとは、我れ今當に答ふべし。此の事は一切智人の因緣を壞すること能はず。佛は力有つて一切衆生をして盡く樂人作らしむること無し。又諸佛は一切の諍訟を離れて自ら身を高ぜられず。持戒を著せられず。是の故に遮したまはず。復た次に佛は先世の業熟するが故に必ず應に七日の謗を受けたまふべし。又衆生は佛の謗るを聞き憂ひたまはず。[五一]宣明に喜びたまはざるを見るが故に、無上道心を發して是の願を作して言く、我等も亦當に是の如き清淨心を得べしと。是の故に咎無し。汝先に佛は婆羅門の聚落に入り、鉢を空しくして而も出でたまへば一切智人に非ずと說くは、今當に答ふべし。佛は飮食を以てせず。先づ人心を觀じ、聚落に入りたまへば、已に魔其の意を轉ずと。

問うて曰く、是の事佛は應に先づ知りたまふべし。我れ聚落に入らば魔、當に人心を轉ずべしと。

【五〇】壞身＝佛身を金剛不壞といふ。本節は業報の避くべからざるを說く。

【五一】宣＝正藏に雪とあり。今明藏に從ふ。

が故に便ち都て智者無しと言ふ。若し人一人河を度ること能はざるを見て便ち能く度る者無しと言はゞ、是の人正說と名づけず。何を以ての故に、自ら餘の大力有る者は能く度ればなり。此も亦是の如し、設使ひ餘人盡く知ること能はずとも一切智者之を知るに何の咎あらん。復た次に[四九]脾婆仙人は皆韋陀を讀むも、亦應に一切智を成ずべし、若し盡く韋陀を讀むこと有らば、何を以てか一切智無しと言はんや。

*若し汝經書の能く貪欲・瞋恚を生ずること有りと言はゞ我今當に答ふべし。若し人長壽を欲せば應に死の因緣を離るべし。佛も亦是の如く一切衆生の貪欲・瞋恚を生ずる經書を知らば則ち貪欲・瞋恚有りと因緣を知るべし。復た次に汝が說の如く能く貪欲・瞋恚を斷ぜんと欲せば應に貪欲・瞋恚のは是の處有ること無きなり。佛は是を知りたまふと雖も用ひず、行ぜざるが故に過咎無し。△人、死の因緣を知るとも則ち死せず、若し死の因緣を行ぜば則ち死するが如し、是の事も亦爾なり。汝が說の若く、未來の事を知らざるが故に一切智者と名づけずとはば、我れ今當に答ふべし。此は則ち難に非ず。我等すら亦一切智者を難ずること有るを知る。經中に說くが如し。佛、諸比丘に告げたまはく、凡夫の無智に三相有り、應に思ふべからざるに而も思ひ、應に說くべからざるに而も說き、應に作すべからざるに而も作す。是の故に皆已に總じて說けり。汝等未來世の凡夫は皆其の中に在り。利益無きが故に、何ぞ分別して其の名字等を說くを用ひんやと。若し佛は難有るを知りたまうて豫め答へずと謂はゞ亦此を須ひず。今現に四衆の中にも亦善く疑難を斷ずる者有り。今亦能く諸の難問を破する者有り。何ぞ先に答ふるを用ひんや。汝今日現に比丘の中に能く婆羅門を破する者を見るが如し。是の故に先づ答ふるを用ひず。又先時にも亦答ふる有り、衆經に散在す。人具に佛法を知ること能はざるが故に處所を知らず。若し調達を受けて出家せしむるの事を言はゞ、我れ今當に答ふべし。調達を受けて出家せしむるは則ち一切智人に非ずと謂ふは、是の語然らず調達の出家は

【四九】脾婆仙人＝Viśvamitra（巴）Vessamitta毘波（沙）密、毘奢密多。十古仙人の一。五通仙人と傳へらる。數數阿含に出づ。本行經には毘商密多といふ。

※第三問に答ふ。

△第四問に答ふ。

べからずとはいふ可からず。先に汚泥有つて後に蓮花有り、先に病有つて後に藥有るが如し。是の如く先に在つて出づる者を以て貴しと爲す可からず。是の故に韋陀先に出でて佛法後に出づれば信ず可からずと謂ふは、是の事然らず。復た次に過去の[四八]錠光等の諸佛は皆先に出世し、其の法則は古に出で、韋陀は是の後に出づ。若し汝先に久しきを以て貴しと爲さば、此の諸佛及び法則は應に是れ貴かるべしと。

問うて曰く、韋陀は善寂滅を作すこと能はず、是の故に佛法中に說かずと。若し佛、寂滅を作す能はざるを知らば、何を用つて知と爲さんや。若し知らざれば則ち一切智人に非ず。二俱に過有りと。答へて曰く、汝が語は非なり。佛は先に、韋陀の善寂滅なる能はざるを知りたまふが故に說かず、亦修行したまはざるなりと。

*問うて曰く、若し佛、韋陀は利益有ること無きを知るが故に、而も修習せずと說かば、何を用つてか知と爲さんやと。答へて曰く、大智の人は應に悉く是れ正道なるか、是れ邪道なるかを分別し、無量の人衆をして險惡道を度す。故に正道を行かしめんと欲す。譬へば導師の善く邪道、正道を分別するが如し、佛も亦是の如し。既に自ら生老死の險道を出づることを得。亦、復た衆生をして出でしめんと欲したまふが故に、善く八眞聖道を知り、韋陀等の邪險惡道を知りたまふ。邪惡道を離れんが爲めの故に、正道を行ぜんがための故に、但だ知つて而も說きたまはず。猶し農夫の穀種を植うるが爲めに、秋に至つて收獲す。亦草藪を得るが如く、佛も亦是の如く無上道の爲めの故に勤行精進して菩提道を得、亦韋陀等の諸の邪道を知る。是の故に咎無し。汝が先に說くが如き、人能く具に四韋陀を知ること有ること無しとは、此の難然らず。世間の人は各念力有り、人一日に能く五偈を誦する有り、百偈を誦する有り、二百偈を誦する有り。若し人一日に十偈を誦せずんば則ち能く百偈を誦し、百偈を出づる無しと謂はゞ、此は實語に非ず。汝等は盡く知ること能はざる

に不幸とせらる。

【四四】韋陀の三義＝本文に詳し。

【四五】五大＝大とは一切の事物に周遍するの意味。地、水、火、風、空なり。

【四六】昴＝星すばる星のこと。

【四七】參＝桂往(のらえ)。しその屬。

【四八】錠光＝Dipamkara 燃燈とも譯せられ、過去佛の首位に配せらる。

※正道を說かんが爲めに外經を說かず。

世間は無常なるに而も別に常世間有りとす。一たび天祠と作り、墮落し、再び亦墮落し、三たび作(な)せば則ち墮せずと說くが如きは、是を無常中の常顚倒と爲す。世間は苦にして而も常樂の處有りと說く、是を苦中の樂顚倒と爲す。又說かく、我が神は轉た子の爲めに願つて壽を以つて百歲ならしむ。子は是れ他身、云何が我が爲めならんや。是を無我中の我顚倒と爲す。身は清淨第一にして比すること無し、金銀珍寶も身に及ぶ者無しと說く。是を無淨中の淨顚倒と名づく。顚倒とは則ち實無し、實無きに云何が寂滅有らんや。是の故に韋陀中に善寂滅の法無しと。

*問うて曰く、韋陀中に說く、能く韋陀を知る者は清淨安隱なりと。云何か善寂滅の法無しと言ふやと。答へて曰く、韋陀を知る者は安隱と說くと雖も、畢竟解脫には非ず、異身中に於いて解脫の想を生ず。是の說は[四三]長壽天に因つて說いて解脫と爲す。是の故に韋陀中には實には解脫無し。復た次に韋陀中に略して說いて[四四]三義有り、一には呪願、二には稱讚、三には法則なり。「呪願」とは名づけて我をして妻子・牛馬・金銀・珍寶を得せしむと爲す。「稱讚」を名づけて汝、火神は頭黑く、頸赤く、體黃にして常に衆生の[四五]五大中に在りと爲す。「法則」を名づけて是の事應に作すべく、是れ應に作すべからずと爲す。[四六]昴星(はうせい)より初めて火法を受くるが如し、而も實には呪願、稱讚の法は則ち寂滅解脫有ること無し。何を以ての故に、世樂に貪著して[四七]蘇を然やすも呪願は眞の智慧無く、煩惱を斷ぜざれば何ぞ解脫有らんやと。

*問うて曰く、韋陀の法は古より之有り、第一にして信ずべし。汝、善寂滅無きが故に信ずべからずと言ふは、是の事然らず。何を以ての故に、佛法は近く乃ち世に出づ。韋陀は古より久遠にして常に世間に在り。是の故に古法を信ずべし。近法は信ずべからず。汝、韋陀の中に善寂滅の法無しと言ふ、是の事然らずと。答へて曰く、時は信ずべからず。無明先に出でて正智後に出づ、邪見先づ出でて正見後に出づ。無明・邪見先に出づるを以ての故に信ず可く、正智・正見は後に出づれば信ず

佛、出家の始め此の仙を訪ひ、次に欝頭羅弗に往く。

【三九】 巴連弗城＝Pāṭaliputra 波吒釐、波吒梨耶等に作る。摩竭陀國の首都なり。

※韋陀に解脫なし。

【四〇】 尼犍子＝Nirgrantha. 佛在世時の六師外道の一。耆那敎 Jaina のこと。釋尊當時敎勢盛んなりしを以て、佛敎經典に屢〻外道の代表とせらる。

【四一】 五法藏＝前出。出三世法は前の無爲に當る。

【四二】 四顚倒、本文に詳し、又序品第一註參照。

※古法賴からず。

【四三】 長壽天＝長壽なる天を云ふ。色界第四禪の無想天の壽命は五百大劫なり。又無色界の第四處非想非非想處は八萬劫なり。一は色界の最長壽、一は三界の最長壽なり。これらの天に生をうくることは共

きは、我れ今當に答ふべし。若し所知法無量無邊なれば智も亦無量無邊なり。無量無邊の智を以つて無量無邊の法を知るに咎無し。若し是の知も亦應に智を以つて知るべし、是れ則ち無窮なりと謂はば今當に答ふべし、法は應に智を以つて知るべし、智は世間の人の言ふが如し。我は是れ智者、我は是れ無智の者、我は是れ麁智の者、我は是れ細智の者なりと。是の因緣を以つて、智を以つて智を知るが故に、則ち無窮の過無し。現在の智を以つて過去の智を知る如くんば、則ち盡く一切の法を知つて遺餘有ること無し。復た次に人他を數ふるに身を通じて十と爲すが如く、知も亦是の如し、自ら知り亦他を知らば、則ち咎有ること無し。燈の自ら照し亦他を照すが如し。汝が所說の如く、百千萬億の智人を和合すとも尙盡く一切の法を知ること能はず。何に況んや一人智者をやとは、是の事然らず。何を以ての故に。一切智慧の人は能く衆事を知る、復た衆多なりと雖も智慧有ること無くんば能く知る所に有らず。百千の盲人も導と作るには任へざるも、一人眼有れば導師と爲るに任ずるが如し、是の故に汝一人を以つて難しと爲し、復た佛よりも多智なりと雖も、則ち智無しとは是の事然らず。

＊汝が佛は韋陀等の外經を說かざるが故に一切智人に非ずと謂ふは今當に答ふべし、韋陀中には善寂滅の法無く、但だ種種の諸の戲論の事のみ有り。諸佛の所說は皆善寂滅爲るが故に佛は韋陀等の經を知りたまふと雖も人をして善寂滅を得しむること能はず、是の故に說きたまはずと。

問うて曰く、韋陀の中にも亦善寂滅、解脫の說有り。世間は先づ皆幽闇にして都て所有無し、初めて大人の出現すること有り、日の如し。若し見ること有る者は死難を度することを得。更に餘の導有り。又說く、人身小なれば則ち神小なり、人大なれば則ち神大なり。身は神の宅と爲り、常に其の中に處す。若し智慧を以て神の縛を開解すれば則ち解脫を得と。是の故に當に知るべし、韋陀の中にも寂滅解脫有りと。答へて曰く、是の事無き也。何を以ての故に、韋陀經中にも[四二]四顚倒有り、

【三三】十二頭陀＝頭陀(Dhūta)とは、衣服、飮食、住處の三種の貪着を離るる行法にして、この行者の守るべき衣、食、住に關する十二の條項を十二頭陀と云ふ。一に納衣、二に三衣を着すること〔以上衣〕。三に乞食、四に不作餘食、(午前中一度正食を作すのみ)、五に一坐食、(正食の外更に小食をも作さず)、六に一揣食(一九の食を鉢中に受くるのみ、多く受けず)、〔(三)以下は食〕、七に阿蘭若處、八に塚間坐(墳墓の處に住す)、九に樹下坐、十に露地坐、十一に隨坐(草地に坐す)、十二に常坐不臥〔七以下は住〕なり。

【三四】八難＝前出、共行品第十八。

※第二間に答ふ。

【三五】五比丘＝佛の最初に度せし五人の比丘を云ふ。一、憍陳如、二、頞鞞、三、跋提、四、十力迦葉、五、摩男俱利。

【三六】波羅捺鹿野苑＝迦尸 Kāśi 國の市なる波羅捺 Bārāṇasī の鹿野苑 Mṛgadāva をいふ。

【三七】鬱頭藍弗＝數論の人。Udraka Rāmaputra。佛出家の始めに此の仙を訪ふ。

【三八】阿羅邏＝Ārāḍakālāma

事を知りたまはざるが故に則ち一切智人と名づけず。一切智人の法は應に度すべき者は度す可し。則ち置すべからず。

*復た次に佛は處處に疑語有り。[三九]巴蓮弗城の如し。是の事當に三因緣を以つて壞すべし。若しは水、若しは火、若しは內人外人と與に謀る。若し佛是れ一切智人ならば則ち應に疑惑語有るべからず。是の故に知りぬ、一切智人に非ざることを。復た次に佛は比丘に問ひたまはく、汝等が聚會何事を說くことを爲すやと。是の如き等の問は、若し一切智人なれば、則ち應に是の如き等の事を問ふべからず。他に問ふを以つての故に一切智人に非ず。

△復た次に佛は自ら身を稱讚して他人を毀呰したまふこと經中に說くが如し。佛、阿難に告げたまはく、唯だ我れ一人、第一にして比無く、與に等しき者無しと。諸比丘に告げたまはく、[四〇]尼犍子等は是れ弊惡の人、五邪法を成就す。諸の尼犍子等は無信・無慚・無愧・寡聞・懈怠・少念・薄智なりと。又梵志、尼犍の諸の外道の弟子等の諸の不可事を說きたまふ。若し自ら稱讚し、他人を毀呰せば、世人すら尙愧づ。何に況んや一切智人をや。此の事有るが故に一切智人には非ず。

◎復た次に佛經は始終相違すること經中に說くが如し。諸比丘よ、我れ新に道を得と。又言く、我が得るは往古諸佛の得る所の道なり。世間の有智すら尙始終相違を離る。何に況んや出家一切智人をや、而るに相違有り。始終相違を以つての故に當に知るべし、一切智人に非ざることを。是の故に汝が金剛三昧は唯だ一切智人のみ得と說く、是の事然らず。一切智人無きが故に一切智三昧も亦成ぜずと。

▲答へて曰く、汝此を說くこと莫れ。佛は實に是れ一切智人なり。何を以つての故に、凡そ一切の法に[四一]五法藏有り。所謂る過去法・未來法・現在法・出三世法・不可說法なり。唯だ佛のみ實の如く遍く是の法を知りたまへり。*汝が先に知る所の、法は無量無邊なるが故に一切智人無しと難ずるが如

※佛語に疑語あり。

△自ら稱讚し他を毀呰す。

◎佛經は始終相違す。

▲佛は一切智人なることを證す。

※第一問に答ふ。

は應に多く斷ぜる者を禮すべし。「神通」とは、若し未だ神通を具せざる者は應に神通を具する者を禮すべきなり。佛は若し是の如く次第に善く供養恭敬の法を說かば、是を上說と爲すも而も實には爾らず。是の故に知りぬ、一切智人に非ざることを。

*復た次に佛は尚現在の事を知りたまふこと能はず。汝若し我れ云何が佛現在の事を知らざることを知ると謂はば、今當に之を說くべくし。衆生有つて結使薄き者、業障無き者、[三四]八難を離るる者、深法を行ずるに堪ふる者、能く正法を成ずる者を而も佛は知りたまはず。佛成道し已つて初めて法を說かんと欲するに是の疑を生ず。我が所得の法は甚深・玄遠・微妙・寂滅にして知り難く解し難し。唯だ有智の者は以つて內に世間の衆生は世事に貪著することを知る可し。此の中一切の煩惱を除斷し、滅愛厭離すること、第一の難見なり。若し我れ法を說いて衆生解せずんば徒に自ら疲苦せん。是の如き疑を生ずるに而も實に衆生の結使薄く、業障無き者有り、八難を離るる者、深法を行ずるに堪ふる者、能く正法を成ずる者有り。佛は是の如き衆生を知りたまふこと能はず。是の故に當に知るべし、現在の事を知らざることを。又是の念を作す。昔、我れ苦行のとき五比丘[三五]供養し、執侍す。應に先に利益すべし。今何處に在りやと。是の念を作し已る時に天の告有り、今、[三六]波羅捺鹿野苑中に在りと。是の故に當に知るべし、佛は現在の事を知りたまはざることを。現在の事を知りたまはざるが故に則ち一切智人に非ず。

*復た次に佛は道を得已つて請を受け、法を說き而も是の念を作したまふ。我れ今法を說くに誰か應に先づ聞くべきやと。即ち復た念言す、[三七]鬱頭藍弗、此の人、利智にして開悟すべきこと易しと。爾の時、此の人先に已に命終す。而も佛は訪ね求めたまふ時に天、告げて言く、昨夜命終すと。佛は又思惟廻心して[三八]阿羅邏を度せんと欲す。天復た白して言く、是の人亡きより來た七日と。若し佛是れ一切智者ならば、先に應に此の諸人の命終を知りたまふべし。而も實には知りたまはず。過去の

※現在を知らず。

【三三】四姓の階級＝前出。分別布施品第十二註。

※過去を知らず。

則ち一切智人に非ず。復た次に佛は[三一]須涅叉多羅を受けて弟子と爲したまふ故に、則ち未來の事を知りたまはず。是の人惡心堅牢にして化し難く、佛語を信ぜず。佛若し知りたまはば云何ぞ受けて弟子と爲さんや。受けて弟子と爲すが故に則ち未來の事を知りたまはず、未來の事を知りたまはざるが故に則ち一切智人には非ず。復た次に若し佛是れ一切智人なれば、則ち應に未だ罪を犯すこと有らざる者を防護すべく、當に爲に結戒すべし。先づ結戒の因緣を知らざるを以つて、罪を作り已つて方に乃ち結戒あるは則ち未來の事を知らず。未來の事を知らざるが故に則ち一切智人に非ず。

＊復た次に佛法は但だ出家、受戒の歲數を以つて上座に處在し、恭敬し、禮拜して、耆年・貴族・諸家・功德・智慧・多聞・禪定・果斷・神通を以つて大と爲さず。若し是れ一切智者なれば應に耆年・貴族・諸家・功德・智慧・多聞・禪定・果斷・神通を以つて大と爲し、供養し、恭敬すべし。若し是の如くんば名づけて善制と爲す。「歲數」とは、受戒年數なり。五歲道人は六歲の者を禮するが如し。「貴族」とは、世間に四品の衆生有り。[三二]婆羅門・刹利・韋舍・首陀羅なり。首陀羅は應に韋舍・刹利・婆羅門を恭敬すべし。韋舍は應に刹利・婆羅門を恭敬すべし。刹利は應に婆羅門を恭敬すべし。「諸家」とは、工巧家・商估家・居士家・長者家・大臣家・王家等なり。其の小家は應に大家を恭敬すべし。是の如く貧賤の中に於いて出家する者は應に富貴の中に出家する者、功德者を恭敬すべし。「功德」とは毀戒の人、應に持戒の者を恭敬し、禮拜すべきなり。持戒の者は應に毀戒の者を禮すべからず。[三三]十二頭陀を行ぜざる者は應に十二頭陀を知ずる者を禮すべし、具足して頭陀を行ぜざる者は應に具足して頭陀を行ずる者、智慧者を禮すべし。「智慧」とは、智慧無き人、應に智慧有る者、多聞の者を禮すべきなり。「多聞」とは、小聞の人は應に多聞の者を禮すべきなり。多く誦せざる者は應に多く誦する者を禮敬すべし。「果」とは須陀洹は應に斯陀含を禮敬すべし。是の如く展轉して應に阿羅漢を禮すべし。一切の凡夫は應に得果の者を禮すべし。「斷」とは少しく結使を斷じ、及び未だ斷ぜざる者

孫陀羅と關係ありと言ひふらし、後、人をしてこの女を殺し、祇園精舍の塵溜に埋めしむ。爲に一時、佛を非難する聲起りしも、その僞謀が露顯し、外道は刑に處せられたり。

【二七】佛云云＝佛、波羅杯に乞食されしかども、村民ために食を施さざりしこと、增阿含馬王品に出づ。

※僧團の順位不都合なり。

【二八】阿闍世＝摩揭陀國王 Ajātaśatru 歸佛以前の阿闍世が調達にそそのかされて、調達が佛を害せんとする計謀に參與せしこと諸經に出づ。調達が醉象を放つて佛を害せんとせしは耆聞の記傳なり。

【二九】惡涅達多＝Agnidatta 舍衞國人。波斯匿王の師傅。佛の神變を見て弟子となる。

【三〇】韋羅闍國＝毘蘭若 Verañja 印度の市名。下に毘蘭若に作る。

【三一】須涅叉多羅＝Sunakṣatra 毘舍離の離舍人。佛の侍者たりしことあり。

佛は經書に豫め是の人、是の如き姓、是の如き家のもの某處に在つて、是の如き事を以つて一切智人を難ずるを記したまふこと無し。若し佛は盡く知りたまふと謂はば、何を以つての故に是の事を說きたまはざるや。是の故に知りぬ、一切智人には非ざることを。復た次に佛は若し盡く未來世の事を知りたまはば、應當に豫め[二三]調達出家し已に僧を破すことを知りたまふべし。若し知りたまはば應に出家を聽すべからず。復た次に佛は木機、激石を知りたまはず、佛若し豫め知らば則ち應に中に於いて經行すべからず。復た次に佛は[二四]旃遮婆羅門の女の婬を以つて謗を欲せしことを知りたまはず、若し佛先に知りたまはば應に諸の比丘に告げたまふべし。未來に當に是の事有るべしと。復た次に[二五]梵志有つて佛を嫉むが故に餘處に於いて梵志の女、[二六]孫陀羅を殺し、祇洹塹中に埋むるに佛は是の事を知りたまはず。若し是を知りたまはば、應に諸の梵志の所に於いて此の女の命を救ひたまふべし。調達の推す所の石下に至り、婆羅門の女、梵志女の事を說きたまはず。知りたまはざるを以つての故なり。當に知るべし、佛は盡くは未來世を知りたまはず、是の故に一切智人に非ず。復た次に[二七]佛は婆羅門の聚落に入り、乞食して鉢を空にして出でたまふ。豫め魔時に諸人の心を轉ずるを知りたまふこと能はず。乃ち一食を得ざるに至る。佛若し知らば則ち應に婆羅門の聚落に入るべからず。是の故に知りぬ,佛は盡くは未來の事を知りたまはざることを。復た次に[二八]阿闍世王、佛を害せんと欲するが故に守財醉象を放つ。佛は知りたまはざるが故に王舍城に入りて乞食したまふ。若し豫め知りたまはば則ち應に城に入るべからず。是の故に未來の事を知りたまはず、未來の事を知りたまはざるが故に則ち一切智人に非ず。復た次に佛は[二九]惡涅達多、佛を請ふの因緣を知りたまはず、卽ち其の請を受け、諸比丘を將ゐて[三〇]韋羅闍國に詣りたまふ。是の婆羅門先請を忘るるが故に佛をして馬麥を食ましむ。若し佛豫め知りたまはば、則ち應に請を受けて三月馬麥を食むべからず。是の故に知りぬ、佛は未來の事を知りたまはざることを。未來の事を知りたまはざるが故に

【二二】韋陀＝Veda 吠陀に同じ。智の義にして印度婆羅門敎の根本聖典を云ふ。四吠陀とは梨俱吠陀 Ṛgveda 沙磨吠陀 Sāmaveda 夜柔吠陀 Yajurveda 阿闥婆吠陀 Atharvaveda なり。印度上代宗敎の天啓聖典と信ぜられ、婆羅敎系の聖典は多く之に基く。

【二三】調達＝Devadatta 提婆達多のこと。佛の聲名の高きを妬み、常に僧團の中にありて惡事を爲す。今、有部破僧事に依るに、提婆は世尊に、自ら僧伽を統率せんことを乞ひ、許されざるや、新規の戒律を始め、再び許されざるや、自ら五百人の比丘を率ゐて獨立し、僧團の和合を妨げしと傳へらる。

【二四】旃遮婆羅門＝Ciñcā 外道の女。舍衞國の外道等は佛の德望の愈ゝ高きをねたみ、旃遮の美貌を種に佛を傷つけんとし、旃遮があだかも佛と通じて姙みしが如く裝はしめ、衆中にて佛を詈らんとせしも、帝釋、四王天等のためにその謀を破られ、旃遮は無間地獄に陷れりと傳へらる。

【二五】梵志＝Brahmacārin 婆羅門四時期の一、修行者なり。

【二六】孫陀羅＝Sundarī 遊行女なり。佛の名聲盛んなるにつれ、外道之を憎み、佛は

法は虚空の如く、遍く一切法中に在り、是の故に應に一切智人有るべしとは、是の事然らず。智の大力は爾るべし、大智は自ら知ること能はず、指端の自ら觸れざるが如し。是の故に一切智無し。若し更に智有つて、能智是れ智なりと謂はば、是も亦然らず。何を以つての故に、無窮の過有るが故なり。智若し自ら知り、若し他を以つて知らば二倶に然らず。若し是の知に無量の力有らば、自ら知らざるを以つての故に無量の力有りと言ふことを得ず。是の故に能く一切の法を知る智有ること無し。一切法を知る智無きが故に則ち一切智者無し。何を以つての故に、智を以つて一切法を知るが故なり。

*復た次に、知る所の法は無量無邊なり。若し百千萬億の智人を和合するとも尚盡く知ること能はず。何に況んや一人をや。是の故に一人にして能く一切法を知ること有ること無く、一切智有ること無し。若し遍く一切の山河・衆生・非衆生を知るを以つて一切智人と名づけず、但だ盡く一切經書を知るを以つての故に、一切智人と名づくと謂はば是も亦然らず。何を以つての故に、佛法中には韋陀等の經書の義を說かず。若し佛は是れ一切智人といはば、應に韋陀等の經書をも用ふべし、而も實には是を用ひざるが故に、佛は一切智人に非ず。又四韋陀羅經は有量有限なるに、今世に尚盡く能く知る者無し。況んや盡く一切の經書を知ること有らんや。是の故に一切智人有ること無し。

△復た次に、經書は能く貪欲を增長すること有り、歌舞・音樂等なり。若し一切智人是の事を知らば卽ち貪欲有り。是の經書は是れ貪欲の因緣なり。若し因有れば必ず果有り。若し一切智人此の事を知らざれば則ち一切智人と名づけず。復た次に、諸の經書は能く瞋恚を助け、人を喜諍せしむること有り。所謂る治世の經書等なり。若し此の事を知らば則ち瞋恚有り。何を以つての故に、因有れば必ず果有るが故に。若し知らざれば則ち一切智人と名づけず、是の故に一切智人無し。

◎復た次に、佛は必ずしも盡く未來世の事を知りたまはず。譬へば我が今一切智人を難ずるが如き、

※**外經を說かず。**

△**經書は三毒を增上す。**

◎**未來世を知らず。**

へて曰く、是の三昧は諸定中に於いて最第一と爲す。是の故に是の三昧に住せば能く諸の功徳を得と。

※問うて曰く、何が故に是の三昧は諸定中に於いて最も第一と爲すやと、答へて曰く、是の三昧は無量無邊の善根の成ずる所なるが故に、諸定中に於いて最第一と爲すと。

△問うて曰く、是の三昧は何が故に無量無邊の善根の成ずる所なりやと。答へて曰く、是の三昧は唯だ一切智人のみに有りて餘人に無き所なり。是の故に名づけて金剛三昧と爲すと。

〔二〕四十不共法中、難一切智人品　第二十二

◎問うて曰く、汝說かく、金剛三昧は唯だ一切智人のみに有りて餘人の無き所なりと。是の若き三昧は但だ一切智人にのみ有り、餘人に無くんば卽ち是の三昧無し。何を以つての故に、一切智人は無きが故に。※何を以つての故に、所知法は無量無邊にして而も智慧は有量有邊なり。此の有量有邊の智慧を以つて無量の事を知るべからず。今現に閻浮提の水陸の衆生の如き諸の算數に過ぎたり。是の衆生に三品あり。若しは男、若しは女、非男非女なり在胎・孩童・少壯・衰老、苦樂等の法、過去・未來・現在の諸の心・心數法及び諸の善惡業の已に集め、今集め、當に集むべきもの、已に報を受け、今報を受け、未だ報を受けざるもの、萬物の生滅及び閻浮提中の山河・泉池・草木・叢林・根莖・枝葉・花果の知る可き所の者邊際有ること無し。餘の三天下も亦是の如し。四天下の如く三千大千世界の物も亦是の如し。三千大千世界の物の如く、一切世界の知る可き所の物も亦是の如し。但だ世間の數すら尙無量無邊にして知るを得可きこと難し。何に況んや諸の閻浮提の諸の世間の中の衆生、非衆生の諸の物の分をや。是の因緣を以つて當に知るべし。知る可き所の物は無量無邊の故に一切智者無し。若し智慧に大力有り、所知法の中に於いて障礙無きが故に、遍く一切を知ると謂はば、可知

※諸定中の最第一なり。

△無量善根の所成なり。

【二】この品の前半は一切智人に關する問答の續品。後半は第一問より第四問に至る答釋なり。

◎一切智人の有無を問ふ。

※所知法は無量無邊知慧は有量有邊なり。

く貫穿するが故に、諸の功德利益力を得るが故に、諸の禪定中、最上なるが故に、能く壞する者無し。是の故に名づけて金剛三昧と爲す。金剛寶の物の能く破する者無きが如く、是の三昧も亦是の如し。法の以つて壞すべき者有ること無きが故に是を金剛三昧と名づく。

*問うて曰く、何が故に壞すべからざるかと。答へて曰く、一切の處は閡有ること無きが故に。帝釋金剛の閡處有ること無きが如く、是の三昧も亦是の如しと。

△問うて曰く、是の三昧は何が故に一切處不閡と名づくるやと。答へて曰く、正に一切法に通達するが故に。諸佛は是の三昧に住して悉く過去・現在・未來に通達して三世に過出し、五藏所攝の法を說く可からず。是の故に一切處不閡と名づく。若し諸佛是の三昧に住して諸の所有の法、若し通達せざれば名づけて有礙と爲す。而も實には爾らず、是の故に無礙と名づくと。

◎問うて曰く、何を以つての故に是の三昧は一切法に通達するやと。答へて曰く、是の三昧は能く一切障礙の法を開くが故に、所謂る煩惱障閡・定障閡・智障閡・能く開くが故に是を能く一切法に通達すと名づくと。

*問うて曰く、是の三昧は何の故にか能く一切障を開き、餘の三昧は能はざるかと。答へて曰く、是の三昧は善く等しく二法を貫穿して、能く諸の煩惱の山を壞し、餘無からしむるが故に、正しく遍く一切の法に通達するが故に、善く不壞心解脫を得るが故に、是の故に此の三昧は能く一切の障閡を開くと。

△問うて曰く、是の三昧は何が故に等しく二法を貫穿するかと。答へて曰く、是の三昧に住せば力を得るが故に能く一切の諸の功德を得。餘の三昧は是の如き力無し。是の故に是の三昧は能く等しく貫穿すと。

◎問うて曰く、何が故に、是の三昧に住せば力を得るが故に、能く一切の諸の功德を得るかと。答

※一切不可壞なり。
△一切處不閡なり。
◎一切法に通達す。
※一切障を開解す。
△二法を貫穿す。
◎一切功德を得。

とも、若し佛聽きたまはざれば則ち知ること能はず。七方便經の中に說くが如し。行者は善く定相を知り、善く住定相を知り、善く起定相を知り、善く安隱定相を知り、善く定行處相を知り、善く定生相を知り、善く諸の定法に宜しきと諸の定法に宜しからざるとを知る。是を諸佛第一の調伏心波羅蜜と名づくと。

「諸佛は常に慧に安んず」とは、諸佛は慧に安じて常に念を動ぜず、常に心に在り、何を以つての故に、先づ知つて而して後に行じ、意の所緣中に隨つて住す。疑行無きが故に、一切の煩惱を斷ずるが故に、動性を出過するが故に。佛、阿難に告げたまふが如し。佛は此の夜に於いて阿耨多羅三藐三菩提を得たまひ、一切世間若しは天魔・梵・沙門・婆羅門・苦道を盡すを以つて、教化周く畢つて無餘涅槃に入り、其の中間に於いて、佛は諸受に於いて起を知り、住を知り、生を知り、滅を知りたまふ。諸相・諸觸・諸覺・諸念も亦起を知り、住を知り、生を知り、滅を知る。惡魔は七年晝夜息まず、常に佛を隨逐して佛短を得ず、佛を見ず、念念に在らずして慧に安んず。是を諸佛は常に慧行中に住安すと名づく。

「法を忘失せず」とは、諸佛は不退の法を得るが故に、[一九]五藏法に通達するが故に、無上法を得るが故に諸佛は常に忘失したまはず。諸佛は菩提樹下に得る所乃至無餘涅槃に入りたまふまで、若しは天魔・梵・沙門・婆羅門及び餘の聖人も、能く佛をして忘失する所有らしむこと無し。法印經の中に說くが如し。道場の所得、是を實得と名づく、更に勝法無しと。衣毛竪經に說くが如し。舍利弗よ、若し人實語にして能く法に於いて忘失せざる者有らば、應に說くべし、我れ是なりと。何を以つての故に、唯だ我一人忘失する所無しと。是を諸佛は法に於いて忘失すること無しと名づく。

「金剛三昧」とは、諸佛世尊の金剛三昧なり。是れ不共法なり。能く壞すること無きが故に、一切の處に於いて障礙有ること無きが故に、[二〇]正遍知を得るが故に、一切法の障礙を壞するが故に、等し

△第七常に安慧處在り。

◎第八法常に妄語せず。

【一九】五藏法＝本論本には數所にこの語あり、過去、未來、現在、無爲、不可說の五法を云ふ。發菩提心品第六の註參照。その他、念佛品第二十參照。分別功德論等に一に契經藏、二に毘尼藏、三に阿毘曇藏、四に雜藏、五に菩薩藏の五藏を說くも今それ等とは異る。

※第九金剛三昧力を得。

【二〇】正遍知＝佛のこと。易行品第九註參照。

れば聞くを得ること能はず。諸佛の聞く所の音聲は大神力有つて障ふと雖も、亦能く聞くことを得。聲聞は能く千國土内の音聲を聞く。諸佛世尊の聞く所の音聲は無量無邊の世界を過ぎ、最細の音聲をも皆亦聞くことを得。大神力の聲聞は梵世界に住し、大音聲を發せば能く千國土内に滿つ。諸佛世尊、若しは此に住し、若しは梵世に住し、若しは餘處に住したまふに、音聲は能く無量無邊世界に滿つ。若し衆生をして無量無邊の世界を過ぎて、最細の音聲を聞かしめんと欲せば、能く聞くを得しめ、聞かざらしめんと欲せば卽便ち聞かず。是の故に但だ諸佛有れば聲聞中に於いて自在力を得、他心を知る。

*「無量自在力」とは、諸佛世尊は無量無邊世界現在の衆生に於いて悉く其の心を知りたまふ。餘の人は但だ名相に隨ふが故に知り、諸佛は名相の義を以つての故に知りたまふ。又餘の人は無色界の衆生の諸心を知ること能はず。諸佛は能く知りたまふ。餘の人は他人を知るの智有りと雖も、大力の者障ふれば則ち知ること能はず。假令一切の衆生、心通を成就して、皆[16]舍利弗・[17]目揵連・辟支佛等の如きも、其の神力を以つて一人の心を障ふれば他をして知らしめず、而も佛は能く彼の神力を壞して其の心を知るを得たまふ。復た次に佛は神力を以つて衆生の上中下の心、垢心・淨心を知り、又諸心各所緣有り、是の緣より是の緣に至る次第を知り、遍く一切の諸緣を知りたまふ。又實相を以つて衆生の心を知り、是の故に諸佛は無量力を以つて悉く他心を知りたまふ。

*[18]「第一調伏心波羅蜜」とは、善く諸の禪定・三昧・解脫の住・入・起時を知る。諸佛は若しは定に入り、心を一緣中に繫せんと欲し、意の久近に隨つて、意の如く能く住し、此の緣中より更に餘緣に住し、意に隨つて能く住したまふ。若し佛、常心に住して人をして知らざらしめんと欲すれば、則ち知ること能はず。假使一切の衆生他心を知るの智、大梵王の如く、大聲聞・辟支佛の如く、智慧を成就して他人の心を知り、此の諸智を以つて一人をして得せしめんに、是の人、佛の常心を知らんと欲す

この三天は色界第二禪天なり。
【一二】少淨、無量淨、遍淨＝この三天は色界第三禪天なり。
【一三】廣果＝色界第四禪天なり。
【一四】阿迦尼吒天＝Aganistha 新譯に阿迦尼瑟吒と云ふ。色界十八天の最上なれば色究竟天、有頂天と云ふ。この上は無色界なれば唯心識のみにて形體なし。

※第五法無量の知力もて他知。
【一五】抹＝正藏には末とるも明本に據る。
【一六】舍利弗＝分別布施品第十二參照。
【一七】目揵連＝Mahā-maudgalyāyana. 摩訶目犍連、又目連に作る。十大弟子の一人。神通第一と稱せらる。

※第六法心に自在を得。
【一八】第一調伏心波羅蜜＝本文に詳なり。

長ぜしめず。一念の中に於いて能く千國土梵世界に至り、能く千國土に於いて意に隨つて變化す。能く千國土を動じ、能く身より光明を出し、相續して絶えず、千國土を照す。設使身滅すとも能く神力を留めて變化すること、本の如く千國土に於いてす。小辟支佛は能く萬國土に於いて萬種に變化す。中辟支佛は能く百萬國土に於いて百萬種に變化す。大辟支佛は能く三千大千國土に於いて變化すること上如のし。諸佛世尊は能く諸の恒河沙世界の算數を過ぎて變化し、身より水火を出し、能く恒河沙等の世界を一五抹して微塵の如くせしめ、又能く還つて合して能く住せしむ。壽命無量劫數なるを還つて能く少からしめ、少くし已つて還つて能く長ぜしめ、能く無量時に於いて住す。變化意に隨ひ、能く一念を以つて無量無邊恒河沙等の世界に至り、能く常身を以つて立つて梵世に至る。又能く無量無邊阿僧祇世界を變化して皆、金と作らしめ、或は銀・瑠璃・珊瑚・車璖・馬瑠と作らしむ。要を取つて之を言へば能く無量の寶物と作らしむること、意の所作に隨ふ。又、復た能く恒河沙等の世界の大海水を變じて皆乳・酥油・酪蜜と爲らしめ、意に隨つて而も成ず。又能く一念を以つて諸山を變化して皆是れ眞金ならしむ。諸の算數を過ぎて稱計すべからず。又能く無量無邊の世界・一切の欲界・色界・諸天宮殿を震動せしめ、又一念を以つて能く若干の金色光明をして遍く是くの如き無量の世界を照さしめ、日月・光明及び欲色界・諸天宮殿の光明を皆現ぜさらしむ。滅度の後と雖も能く是の如き諸世界の中に於いて意に隨つて久しく近し。流布の神力は常に斷絶せず。

*「聞聲自在」とは、諸佛所聞の聲中意に隨つて自在なり。若しは無量百千萬億の技樂同時に倶に作し、若しは無量百千萬億の衆生一時に言を發し、若しは遠く、若しは近く意の所聞に隨ふ、假令恒河沙等の三千大千世界の所有る衆生、同時に倶に若干百千萬種の伎樂を作して世界に遍滿し、復た恒河沙等の世界の衆生有つて同時に一切世界に遍滿するも、諸佛は若し中に於いて一音聲を聞かんと欲せば、意に隨つて聞くことを得、餘は聞かず。聲聞の聞く應き所の者は若し大神力の障ふる者有

多聞天（北）」、（十）忉利天、（十一）閻摩天、（十二）兜率天、（十三）化樂天、（十四）他化自在天、（九）以下の六を六欲天といふ」（十五）初禪天、（十六）梵王天、（十七）第二禪天、（十八）第三禪天、（十九）第四禪天、（二十）無想天、（二十一）五那含天、（（十五）以下（二十一）までを色界とす。」、（二十二）空處、（二十三）識處、（二十四）無所有處、（二十五）非想非非想處（（二十二）以下の四を四無色界とす」の二十五これなり。（九）より（二十五）までを天界にして、この二十五有を約說すれば三界或は六道となる。

【八】閻浮提等＝人界四州をいふ。前出。七」を見よ。

【九】四大王天以下他化自在天＝この六天は欲界の六欲天なり。

※第四法聞聲自在。

【一〇】梵天＝Brahma 色界の初禪天なり。此天は欲界の婬欲を離れ、寂靜淸淨の存在とせらる。此中に三天あり。一、梵衆天、二、梵輔天、三、大梵天。

【一一】少光、無量光、光音＝

諸天魔及び梵・沙門・婆羅門及び諸の神通を得し者も礙を爲すこと能はずと。是の故に飛行無礙と說く。又、飛行自在とは、意の如く所作して地に出沒し、能く石壁・諸山・障礙等を過ぐるなり。佛は此の事に於いて諸の聖人に勝れたまふ。又、佛は能く常身を以つて立つて梵天に至りたまふ。聲聞の人の及ぶ能はざる所なり。是の如き等の差別有り。

＊「變化自在」とは、變化の事の中に無量の力有り。餘の聖の變化は有量有邊なり。諸佛の變化は無量無邊なり。餘の聖は一念の中に於いて一身を變化し、佛は一念を以つて意に隨つて變化して無量の事有り。大神通經の中に說くが如し。佛、臍中より蓮華上に出でたまふに化佛有り、次第に遍滿して上、阿迦尼吒天に至る。諸佛變化の所作に衆事あり。種種の色、種種の形、皆一念を以つてす。又聲聞の人は能く千國土內に於いて變化し、諸佛は能く無量無邊の國土に於いて變化自在なり。又能く倍して是の諸佛は堅固變化三昧を得、又諸佛は變化し、能く恒沙世界を過ぐるに皆一身より出でたまふ。復た次に佛は能く普く十方無量無邊の世界に於いて生を現じ、身を受け、地に墮ちて七步行き、出家し、學道して魔軍衆を破し、道を得、法輪を轉じたまふに、是の如き等の事皆一念を以つて之を作したまふ。是の諸の化佛は皆亦、復た能く佛事を施作したまふ。是の如き等の諸佛の變化する所の事は無量無邊なり。

＊又、聖如意中に於いて無量の力有り。「聖如意」とは、所謂る身より光を放つこと猶し猛火の如く、又諸雨を出して變化し、壽命意に隨つて長短なり。一念の頃に於いて能く梵天に至り、能く諸物を變じ意に隨つて自在に能く大地を動ず。光明能く無量世界を照して而も斷絕せず。「聖如意」とは、凡夫と等しからざるが故に、量有ること無きが故に、諸量を過ぐるが故に、諸の凡夫等は諸物を變化すと雖も少くして言ふに足らず、聲聞の人は能く千國土を裂いて還つて便ち合せしむ。能く壽命をして若しは一劫に至り、若しは一劫を減ぜしめ、還つて能く短ならしむ。短ならしめ已つて能く

※第二法變化自在。

※第三法聖如意無邊。

【七】 便宜上左に三界二十五有の名目を列ぬ。(一)地獄、(二)餓鬼、(三)畜生、(四)阿修羅、(五)東弗婆提、(六)南閻浮提、(七)西瞿耶尼、(八)北欝單越、(五)以上の四を人界（人間界のこと）四洲といふ)、(九)四王天（持國天(東)、增上天（南）、廣目天（西）、

得。若しは結跏趺し、安坐して而も去らんに亦能く去ることを得。若しは安臥して而も去らん欲するも亦、復た能く去る。若しは青琉璃の莖、眞珊瑚の葉に於て、黄金を鬚と爲し、如意珠の臺にて無量に圍遶せられ、日の初めて出づるが如く、是の寶蓮華、空中に遍きに、上を蹈んで而して去らんと欲し、若しは日月の宮殿・帝釋の勝殿・[三]夜摩天・[四]兜率陀天・[五]化樂天・[六]他化自在天、[七]諸の梵王等の宮殿の如き、意に隨つて化作し、彼の宮殿の如き中に坐して而も去らんと欲せば、卽ち能く成辦す。若しは更に餘の種種の因緣を以つて意に隨つて能く去る。是の故に說いて言く、諸の所願に隨つて皆能く滿足すと。是の故に諸佛は能く一歩を以つて恒河沙等の三千大千世界を過ぎたまふ。人有つて言く、佛は能く一念の頃(あひだ)にも若干百千國土を過ぎたまふと。人有つて言く、若し佛の一歩一念に能く是の如く去ることを知らば、卽ち量ることを得べし。經の中に說かく、諸佛の力は無量なり。是の故に當に知るべし。諸佛は虛空飛行自在にして無量無邊なり。何を以つての故に、大聲聞弟子の若き神通自在にして一念の頃を以つて能く[八]百億の閻浮提・瞿陀尼・弗婆提・鬱多羅越・[九]四大王天・忉利天・夜摩天・兜率陀天・化樂天・他化自在天・[一〇]梵天を過ぎ、一瞬の中に若干念を過ぐ。此の諸念を積んで以つて一日・七日・一月・一歲乃至百歲を成じ、一日に五十三億二百九十六萬六千三千大千世界を過ぐ。是の如き聲聞の人の百歲に過ぐる所を佛は一念に能く過ぎたまふ。復た次に假令(たとへ)恒河中の沙の一沙を一劫と爲すに、大聲聞有つて神通第一、壽命是の如く、諸の恒河沙大劫ならんに、一念の中に於いて若干世界を過ぎ、是の如く念を積んで以つて日月歲數と爲し、自在力を以つて是の諸大劫數を盡して過ぐる所の國土を、佛は能く一念の中に過ぎたまふ。諸佛の飛行自在なること是の如く速疾なり。一切の鐵圍山・十寶山・四天王處・忉利天處・夜摩・兜率陀・化樂・他化自在・梵世・梵衆・大梵・[一一]少光・無量光・光音・[一二]少淨・無量淨・遍淨・[一三]廣果・無相・不廣・不惱・喜見・妙見・[一四]阿迦尼吒天、是の如き諸處に於いて大風・大水・劫盡の火等及び諸の天龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・緊那羅・摩睺羅伽・

【三】夜摩天＝Yama 六欲天の一。印度古傳の樂園。原音閻摩に同じ。

【四】兜率陀天＝Tuṣita 喜足天と譯す。佛敎特有の天部。補處の菩薩は此天に居る。

【五】化樂天＝Nirmāṇarati 樂變化天とも云ふ。五欲の境に於て自ら變化して樂めばなり。

【六】他化自在天＝序品に出づ。この他、梵王と帝釋とは普通にいふ梵天帝釋なり。

卷の第十

四十不共法品　第二十一

*菩薩は是の如く三十二相・八十種好を以つて佛の生身を念じ已つて、今應に佛の諸の功德法を念ずべし。所謂る、

又應に四十不共法を、　以つて佛を念ずべし。
諸佛は是れ法身にして、　但だ肉身に非ざるが故なり。

諸佛に無量の諸法有りと雖も餘の人と共ぜざる者に四十法有り。若し人念ぜば則ち歡喜を得。何を以つての故に、諸佛は是れ色身に非ず、是れ法身の故に。經に說くが如し。汝應に但だ[二]色身を以つて佛を觀ずべからず、當に法を以つて觀ずべしと。四十不共法とは一には飛行自在。二には變化無量。三には聖如意無邊。四には聞聲自在。五には無量の智力もて他心を知る。六には心に自在を得。七には常に安慧處に在り。八には常に妄語せず。九には金剛三昧力を得。十には善く不定事を知る。十一には善く無色定事を知る。十二には具足して諸の永滅事に通達す。十三には善く心不相應無色法を知る。十四には大勢波羅蜜。十五には無礙波羅蜜。十六には一切問答及び記具足波羅蜜。十七には三轉を具足して說法す。十八には所說空しからず。十九には所說に謬失無し。二十には能く害する者無し。二十一には諸の賢聖中の大將なり。二十五には四不守護。二十九には四無所畏。三十九には佛の十種力、四十には無礙解脫なり。是を四十不共の法と爲す。*今當に廣說すべし。

*「飛行自在」とは、諸佛の飛行如意自在に、如意滿足に、速疾にして無量無礙なり。所以は何ん、佛、若し虛空に於いて先づ一足を擧げ、次に一足を擧げんと欲せば卽ち能く意の如し。若し足を擧げ虛空を蹋んで去らんと欲し、若しは住立し、動ぜずして而も去らんと欲すれば卽ち能く去ることを

【一】此品は佛の四十不共法を說く。不共法とは、如來の功德は無比にして他と同ぜざるをいふ。普通に十八を擧ぐ。然るに若し廣く論ぜば一切の如來の功德は悉く不共法なり。故に地持論には百四十法を數ふ。今この品は四十法を擧げ第一法より第八法までを釋す。

※四十不共法の列名。

【二】色身法身＝佛身には生法二身、法報應三身、その他、四身、十身等の分類あり、今は生(色)法二身觀なり。色身とは肉身の佛をいひ、法身とはその本體をいふ。

※四十不共法を廣說す。

第一法飛行自在。

身形甚だ端雅、
腹圓くして高く現れず、
其の文、右に向つて旋り、
身に疵點有ること無し。
其の文、深く且つ長し、
舌、薄く面長からず、
脣色は頻婆果、
鼻、隆く、眼、明淨、
眉高く、毛、柔軟、
眉毛、齊しく整ひ、
眉毛の色、潤澤、
耳、滿ち長くして等しく
額、廣くして齊しく正しく、
髮、緻にして亂れず、
清淨にして香潔く、
呵す可き處有ること無し。
臍深くして孔無し、
威儀甚だ清淨、
手足、極めて柔軟、
修直にして潤色有り。
牙、白く圓くして纖利なり。
音、深く鴻王の若し。
睫、緻にして亂れず。
端直にして邪曲せず。
善く諸法の過を知る。
善く度して衆生を潤す。
壞せずして甚だ愛すべし。
頭相皆具足す。
黑蜂王の色の如し、
中に三種の相有り。

是を八十種好と名づく。此の八十種好を以つて間雜して三十二相を莊嚴す。若し人、三十二相・八十種好を念じて佛身を讃歎せずんば、是れ則ち永く今世後世利樂の因緣を失す。

上下四十齒は、　密緻して疏漏せず、
讒無く、妄語せず、　徒衆破す可からず。
眼の黒青白明にして、　睫相牛王の如きは、
慈心もて和視するが故に、　觀音に厭足無し。
轉輪聖王の、　四天下を典主して、
是の諸の相好有りと雖も、　光明は佛に如かず。
我が稱歎して說く所の、　諸の相好の功德、
願はくは一切の人をして、　心淨く常に安樂ならしめん。

菩薩は又應に八十種好を以つて諸佛を念ずべし、此の偈に說くが如し。

※三六 諸佛に妙好、　八十有つて身を莊嚴す。
汝等應に歡喜して、　一心に我が說を聽くべし。
世尊の圓纖指、　其の甲紫紅色、
隆高にして潤澤有り。　所有量有ること無し。
脈、平かに踝現れず、　雙足邪曲無し。
行くに師子王の如く、　威望等比無し。
行く時身右に旋り、　安庠儀雅有り、
方身次第を分つ、　端嚴にして愛樂す可し。
身堅く極めて柔軟、　支節甚だ分明なり。
行時逶迤せず、　諸根悉く充滿す。
肌體極めて密緻、　鮮明にして甚だ清淨なり。

【三四】十地なり。解題並に序品參照。
【三五】この頌のうち初の二頌は發問、次の七十八頌は三十二相を解し、終の八頌は是を稱讚して結す。
※八十隨好の頌
【三六】五十二頌全部八十隨好相を解く。

修臂下に膝を過ぐるは、
求むれば悋惜すること無く、
陰藏功德藏は、
多く人天衆を得、
薄皮耀金光は、
故に多く妙衣、
一孔に一毛を生じ、
常に最上の護と爲る。
身上師子の如きと、
常に人に愛語を行じて、
腋滿知味相は、
人天皆敬愛し、
身圓と肉髻相は、
剛强の者を勸化せば、
迦陵頻伽の音は、
言ふ所常に軟實にして、
先づ加ふるに思慮を以つてし、
故に師子の相を得、
齒白く齊密なる相は、
後に常に輕んぜざるが故に、

一切の所有の物、
意に隨つて人を化導す。
善く離散を和する故に、
淨慧眼もて子と爲す。
妙衣、堂閣を施す、
淸淨の房樓觀を得。
眉間に白毫の峙つは、
故に三界に於いて尊し。
兩肩圓くして滿つるは、
違反有ること無き者なり。
病に醫藥を施すが故に、
身に疾病有ること無し。
和悅心もて福を施し、
法王中の自在なり。
廣舌の聲梵の如く、
大聖の八音を得、
後言ふに必ず實有り。
見る者皆信伏す。
曾つて供養する所の者、
眷屬の心和同す。

(七八) 嬰旋好なり。
(七九) 嬰色青珠の如し。
(八〇) 手足有鞔の相なり。
【二六】 心＝正藏には山なれども三本に據る。
【二七】 兜羅綿＝兜羅とは梵語(Bimba)にして樹名。この樹果より採る綿を兜羅綿といふ。
【二八】 頻婆果＝頻螺、頻羅婆、避邏に作る。赤色の果實なり。
【二九】 德字云云＝字を觀じて諸法實相の理に悟入する法を字門と云ふ。然るに織田氏佛教大辭典には德字は萬字吉祥海雲相の義と譯すべきことにつき所見あり參照すべし。
【三〇】 竭支泥洹僧＝又單に竭支と僧迦鵄とも云ふ。覆腋衣と譯す。長方形にして左肩より右腋を覆ふものなり。
【三一】 袈裟＝Kasaya 具には迦沙曳と云ひ、不正・壞・染と譯す。青・黃・赤・白・黑の五正色を避けて他の雜色を用ふればなり。又形に從つて敷具、臥具と云ひ、割截衣、田相衣とも云ふ。大、中、小の別あり、小は安陀會五條、中は七條、大は僧伽梨、九條、大衣等と云ふ。
【三二】 如實智＝又正體智と云ひ平等法界の理を契證する智なり。
【三三】 結使＝煩惱の異名。

に諸佛を憶念し、閑靜の處に在つて貪欲・瞋恚・睡眠・疑悔・調戲を除却し、一心專念に障礙・失定の心を生ぜず。是の如き心を以つて專ら諸佛を念じ、若し心沒せば當に起すべく、若し散らば當に攝すべし。幷びに大衆を見ること現前の如く、未だ定に入らざる時は、常に應に相と好との二事を稱讚し、偈を以つて佛を歎じ、心をして調習せしむべし。此の偈に說くが如し。

※三五 世尊諸の相好は、　何の業の因緣をもつて得るか。
我れ相及び業を以つて、　大聖を稱讚せん。
足相千輻輪は、　淸淨に眷屬に施し、
是の因緣を以つての故に、　賢聖衆に圍遶せらる。
足下安立相は、　善を受けて持して失せず。
是の故に魔軍の衆、　毀壞することを得る能はず。
手足の指の網縵、　身相の紫金色は
善行攝法の故に、　大衆自然に伏す。
手足極めて柔軟に、　身相七處滿つるは、
意に隨つて食を施すが故に、　多く自然の供を得。
長指と廣き脚跟と、　身膅大直相とは、
殺の因緣を離るゝが故に、　乃至劫壽に於てす。
毛の上に向つて右旋すると、　足趺隆高相とは、
常に諸の善事を進む。　故に不退の法を得。
伊泥鹿蹲相は、　常に樂んで經を讀誦し、
人の爲めに法を說くが故に、　疾く無上道を得。

(五一) 舌薄し。
(五二) 毛紅色なり。
(五三) 毛輭淨なり。
(五四) 眼廣長なり。
(五五) 死門の相具はる。
(五六) 手足赤白なること蓮華の色の如し。
※三十二相の頌。
(五七) 臍出でず。
(五八) 腹現はれず。
(五九) 細腹なり。
(六〇) 身傾動せず。
(六一) 身持重す。
(六二) 其身大なり。
(六三) 身長し。
(六四) 手足輭淨にして滑澤なり。
(六五) 四邊の光長一丈なり。
(六六) 光身を照して行く。
(六七) 等しく衆生を視る。
(六八) 衆生を輕せず。
(六九) 衆生の音聲に隨て不增不減なり。
(七〇) 法を說いて着せず。
(七一) 衆生の語言に隨て法を說く。
(七二) 發音衆聲に應ず。
(七三) 次第因緣を以て法を說く。
(七四) 一切衆生盡く相を觀ること能はず。
(七五) 觀て厭足なし。
(七六) 髮長好なり。
(七七) 髮亂れず。

り。是の如きこと有る者は則ち知りぬ、其の人、心に清淨・寂默・湛然を得て禪定に入るが如きことを。愛無く、恚無く、餘緣無し。大悲相有れば衆生を慈愍して一切を救はんと欲す。心諂曲せず、寂滅清淨にして好醜を分別す。大志量有れば沒せず、縮せず、高からず、下からず。佛悉く瞻見し、是の如く大衆に處在して說法すれば解し易く、了し易く、樂つて聞き、厭くこと無し。音深くして散ぜず、柔軟なれば耳を悅す。臍より出で咽喉・舌根・鼻・額・上齗・齒脣の氣激變して音句を成ず。柔軟なれば耳を悅す。大密雲の如く雷聲隱震し、大海中の猛風激浪するが如く、大梵天の如く音聲をもて度すべき衆生を引道す。眉・眼・脣を離れて呵すべき語法に言闕少せず、又煩重せず、所說に疑無ければ、言必ず利益あり。誑語・可破語等、有ること無し。是の如き過を離るれば遠近等しく聞く。四種の問難を隨意に能く答へ、四諦を開示して四果を得しむ。建立する義端・因緣・結句・語言法は則ち皆悉く具足し、種種所說の事義了し易し。所宣分明の故に隱曲せず、言、卒疾ならず又遲緩せず、始終相稱して能く難ずる者無し。是の如き語を以つて敷演し、說法せば、初中後に善く義有り、利有り、唯だ法具足して能く衆生をして今世の報を得しめ、時節得て、嘗つて試す可きもの有ること無く、能く所願を滿ず。深妙の知者は內を以つて知る可し。能く衆生の三毒の猛火を滅し、能く一切身口意の罪を除き、善く能く戒・定・慧品を開示す。初めに名字を以つてし、後に義を知り、歡喜を生ぜしむ。喜より樂を生じ、樂より定を生じ、定より[三二]如實智を生じ、如實智より厭離を生ず。厭離より[三三]結使を滅し、結使を滅するが故に解脫を得。是の如く能く此の法をして次第に善く能く諦・捨・滅・慧の四處を開示せしめ、能く衆生に布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧波羅蜜を滿ぜしむるを示す。能く衆生をして次第に[三四]喜地・淨地・明地・炎地・難勝・現前・深遠・不動・善慧・法雲に至ることを得しめ、能く聲聞乘・辟支佛乘・大乘を分別し、能く須陀洹・斯陀・阿那含・阿羅漢果を證せしめ、能く人天の中の所有る富樂を成就せしむ。是を一切第一利益諸功德藏と爲す。是の如く正心

(二一) 容儀備足す。
(二二) 容儀滿足す。
(二三) 住する處安くして能く動かす者なし。
(二四) 威一切に振ふ。
(二五) 一切の衆生見るを樂ふ。
(二六) 面長大ならず。
(二七) 容貌を正しくして色を撓まさず。
(二八) 面具に滿足す。
(二九) 脣は頻婆果の色の如し。
(三〇) 音聲深遠なり。
(三一) 臍深くして圓好なり。
(三二) 毛右旋す。
(三三) 手足滿足す。
(三四) 手足意の如し。
(三五) 手文明直なり。
(三六) 手文長し。
(三七) 手文斷たず。
(三八) 一切惡心の衆生見る者和悅す。
(三九) 面廣くして殊好なり。
(四〇) 面淨滿なること月の如し。
(四一) 衆生の意に隨て和悅して與に語る。
(四二) 毛孔より香氣を出す。
(四三) 口より無上香を出す。
(四四) 儀容師子の如し。
(四五) 進止象王の如し。
(四六) 行く相は鵝王の如し。
(四七) 頭は摩陀那果の如し。
(四八) 一切の聲分具足せり。
(四九) 四牙白利なり。
(五〇) 舌色赤し。

一なり。四牙、齊等なるは戒の平地に住す。牙、漸次に細きは漸次に四諦の法を說く。鼻、高くして隆直なるは智の高山に住す。鼻の中、清淨なるは弟子淸白なり。眼、廣くして長きは智慧廣遠なり。睫、希踈ならざるは善く衆生を擇ぶ。眼の白黑鮮淨なること靑蓮華の葉の如きは、天人、婇女好眼を以つて敬禮す。眉高くして長きは名聞遠流す。眉毛潤澤なるは善く軟法を知る。耳等の相似せるは聞法の者等し。耳根壞せざるは不壞心の衆生を度す。額、平にして好きは善く諸見を離る。額、廣くして妨無きは廣く外道を破す。頭分、具足せるは善く大願を具す。髮の色、黑蜂の如きは五欲の樂を轉ず。髮厚くして緻なるは結使已に盡く。美髮、柔軟なれば軟かに利智の者能く法味を知る。髮、散亂せざるは言常に亂れず。髮、潤にして澤なるは常に麁言無し。髮に美香有るは七覺意、香華を以つて宜しきに隨つて化導す。髮の中に[二九]德字・安字・喜字有れば手足の中にも亦德字・安字・喜字有り。菩薩は是の如く、應に諸佛の大衆に處在して正法を講說し、師子座に坐することを念ずべし。其の座は琉璃・雜寶を以つて脚と爲し、眞珊瑚・妙赤の眞珠を以つて枕と爲す。金薄の幃帳、柔軟滑澤なる種種の天衣を以つて敷具と爲し、寶師子の赤金を以つて身と爲し、虎珀を眼と爲し、車渠を尾と爲し、珊瑚を舌と爲し、白金剛を舌と爲し、眞白銀を髮と爲す。毛髮長廣にして具足せり。其の床は此の四師子の上に在り、大象王牙を以つて凭机と爲し、其の足を承く。机は衆寶所成にして諸天龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽の敬禮する所と爲す。諸佛是の如く此の床上に在り、[三〇]竭支泥洹僧を著く。高からず、下からず、身の三分を覆ひ周匝齊整せり。淺色の[三一]袈裟を著く。條數分明なり、高からず、下からず、參差せず。八大聖莊嚴の衆中人天の大會に處して龍、金翅鳥と倶に共に聽法して心に瞋恨無し。一切の大衆深心に慚愧して佛を敬愛し、皆共に一心に佛の所說を聽き、受持し、思惟して所說の如く行じ、專心に聽受す。心清淨の故に能く諸蓋を障ふ。一切の大衆は如來を瞻仰して厭足有ること無し。衣毛皆堅ち泣涙して心熱し或は大喜有

ける もの。
【二四】 貪・瞋・癡・慢・疑を五鈍使と云ひ、身見・邊見・邪見・見取(見)、戒取(戒禁取見)を五利使と云ふ。
【二五】 又云云＝以下八十種好。又「八十隨形好と云ふ。三十二相を更に細別して八十種となせしもの、三十二相に隨ふ好相なり。種種異名あれば左に一般的の名を列記す。
(一) 無見頂相。
(二) 鼻高くして孔現れず。
(三) 眉初月の如し。
(四) 耳輪垂埵せり。
(五) 身堅實なること那羅延の如し。
(六) 骨際鉤鎖の如し。
(七) 身一時に廻ること象王の如し。
(八) 行く時足地を去ること四寸にして印文現はる。
(九) 爪は赤銅色の如くにして薄くて潤澤なり。
(一〇) 膝骨堅くして圓好なり。
(一一) 身淸潔なり。
(一二) 身柔軟なり。
(一三) 身曲まず。
(一四) 指圓くして纖細なり。
(一五) 指文藏覆す。
(一六) 脈深くして現はれず。
(一七) 踝現はれず。
(一八) 身潤澤なり。
(一九) 身自ら持して逶迤せず。
(二〇) 身滿足す。

り。指肉充滿せるは善根充滿なり。指、漸次に長きは次第に諸の佛法を集む。脈、覆ふて見えざるは身口意の念を覆はず。脈に亀結無きは煩惱の結を破す。踝、平かにして現れざるは法を隱藏せず。足、邪曲ならざるは墮邪の衆を度す。行、師子の如きは是れ人中の師子なり。行、象王の如きは是れ人の象王なり。行くこと鵝王の如きは高く飛ぶこと鴻の如し。行、牛王の如きは人中の最尊なり。行時、右旋するは善く正道を說く。身傴曲せざるは心常に曲せず。身堅くして直なるは堅牢の戒を讃ず。身漸次に大なるは次第に法を說く。普く身の諸分大にして端嚴なるは善く能く大妙の功德を解說す。身相具足するは法を具足する者なり。足步の間等しきは等心衆生なり。其の身、淨潔なるは三業淸淨なり。身の膚細軟なるは心性自ら軟なり。身、塵垢を離るゝは善く垢を離るゝを見る。身、縮沒せざるは心常に沒せず。身、邊量なきは善根無量なり。肌肉、緊密なるは永く後身を斷ず。支節、分明なるは善く十二因緣を說いて分別明了なり。身色無闇なるは知見無闇なり。腹、圓くして圓滿なるは弟子の行具る。腹、淨くして鮮潔なるは善く能く生死の過惡を了知す。腹、高く出でざるは憍慢の[二六]心を破る。腹、平かにして現れざるは平等の法を說く。臍、圓くして深きは甚深の法に通ず。臍の晝右旋するは弟子順敎なり。身、遍く端嚴なるは弟子遍く淨し。威儀、鮮潔なるは心淨くして比無し。身に點子無ければ黑印の法無し。手、濡れて[二七]兜羅綿に勝るは、受化の者の身輕きこと毛の如し。手の晝文深きは威儀深重なり。手の晝文長きは法を觀受する者の長く後事を遠ざく。手の晝潤澤なるは親を捨て潤を愛して大道果を得。面貌長からざるは結戒に開有り。脣赤くして[二八]頻婆果の如きは一切世間を見ること鏡中の像の如し。舌、柔にして軟なるは先づ軟語を以つて衆生を度脱す。舌薄くして廣きは功德純厚なり。舌赤くして深紅の如きは凡夫の心に解し難き佛法を解せしむ。聲、雷震の如きは雷聲を畏れず。其の聲、和柔なるは柔軟の法を說く。四牙、圓くして直なるは直道の法を說く。四牙、倶に利なるは利根の者を度す。四牙、鮮白なるは淸白第

を加ふ。餘は本經に同じ。今左に通說によりて本經に說く九部經を略說せん。
(一) 修多羅=Sūtra 契經と譯す。經典の中に直に法義を說ける長行の文をいふ。
(二) 岐夜=Geya 應頌、重頌と譯す。前の長行の文に應じ、重ねてその義を述べて頌とせるもの。
(三) 授記=Vyākaraṇa和伽羅那といふ。菩薩に成佛の記を授くる經文なり。
(四) 伽陀=Gāthā 諷誦と譯す。重頌に非ず、直に句を結んで諷詠するもの。
(五) 憂陀那=Udāna、自說と譯す。機會に應じて感動して發する頌又は散文なり。
(六) 尼陀那=Nidāna、因緣と譯す。經中見佛聞法の因緣又は佛の說法敎化の因緣を說く處なり。
(七) 如是諸經（諸は語の誤か）、梵語に Itivuttaka と云ひ、羅什は如是語とし玄奘は本事と譯せり佛弟子の過去世の因緣を說きものなり。
(八) 斐肥儞=Vaipulya 譯して方廣といふ。一切有情の利益、安樂の所依處となる廣大甚深の法を宣說するをいふ。
(九) 未曾有經、梵語に Adbhutadharma と云ひ、佛の種種の神力不思議なることを說

王の如く、世間の最上なること大梵王の如し。愛す可く、樂む可きこと淸天明月の如く、普く照し、能く然ゆること猶し朗日の如し。諸の衆生に安樂の因緣を與ふること猶し仁父の如く、衆生を憐愍し、宜きに隨つて將護すること猶し慈母の如し。所行淸淨なること天の眞金の如く、大勢力有ること天帝釋の如し。勤めて世間を利すること護世主の如く、煩惱の病を治すること猶し醫王の如く、諸の衰患を救ふこと猶し親族の如く、諸の功德を積むこと大庫藏の如し。其の戒は無量、其の定は無邊、其の慧は無稱、解脫は無等、解脫知見は無等等なり。一切の事に於いて最にして比有ること無く、一切世間の最無上の故に第一人と名づけ、大法を成ずるが故に名づけて大人と爲す。是の如く菩薩は大人の相を以つて諸佛を念觀す。是の諸佛は無量無邊百千萬億不可思議不可計劫に於いて功德を修習し、善く能く身口意業を守護し、過去・未來・現在・無爲・不可說の五藏法[二〇]中に於いて悉く諸疑を斷ず。定答・分別答・反問答・置答の四問答に於いて錯謬有ること無し。善く根力・覺道・念處・正勤・如意・[二一]三十七助道法を說き、善く、能く、無明・諸行識・名色・六入・觸・受・愛・取・有・生・[二二]老死の因果を分別し、眼色・耳聲・鼻香・舌味・身觸・意法に於いて繫著する所無し　善く[二三]九部の經法を說く。所謂る修多羅・岐夜・授記・伽陀・憂陀那・尼陀那・是如諸經・斐肥儸・未曾有經なり。[二四]貪欲・瞋恚・愚癡・憍慢・身見・邊見・邪見・見取・戒取・疑の諸使に使はるゝことを爲さず、無信・無慚愧・諂曲・戲調・放逸・懈怠・睡眠・瞋恨・慳嫉・諸惱の侵さることを爲さず。苦を見、集を斷じ、滅を證し、道を修するを知り、去る可きは已に去り、見る可きは已に見、所作已に辦じて盡く怨賊を破り、諸願を具足す。是れ世間の尊、是れ世間の父、是れ世間の主なり。是れ善來・善去・善意・善寂・善滅・善解脫の者にして無量無邊十方恒河沙等の世間の中に在りて住すること現在前の菩薩の如し。

[二五]又應に八十種好を以つて諸佛を念觀すべし。甲色、鮮赤なるは淸白の法を行ず。甲隆くして大なるは生れて大家に在り。甲色、潤澤なるは深く衆生を愛す。指圓くして纖長なるは其の行、深遠な

【二〇】五藏法＝犢子部に立つる五法藏に同じ。犢子部にては一切法を可說、不可說の二に分ち、可說法を更に有爲と無爲とに分ち、有爲法を過去、現在、未來の三法とし、五法藏とす。而して犢子部に云ふ不可說法とは非卽非離蘊の我なれども、大乘にては如來藏を意味す。

【二一】三十七助道法＝三十七菩薩分法のこと。四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支及び八正道なり。

【二二】十二因緣なり。地相品第三參照。

【二三】九部の經法＝九分敎、九分法とも云ふ。名目に多少の異說あり、涅槃經第三、等には尼陀那なく、闍陀加(本生)

は諸の功德を滿す。手足柔軟相は柔和の法を說く。纖長指相は長夜に諸の善妙の法を修集す。足跟廣相は眼廣く學廣し。大直身相は大直道を說く。足趺高相は一切の中に高毛あり。上旋相は能く衆生をして上妙の法に住せしむ。伊鹿蹲相は蹲膞漸く麁なり。臂長過膝相は臂金[一七]鋌の如し。陰馬藏相は法の寶藏有り。身金色相は無量の色有り。皮細薄相は細妙の法を說く。一一毛相は一相の法を示す。白毫莊嚴面相は佛面を觀んことを樂つて厭くこと無し。師子上身相は師子の無畏なるが如し。肩圓大相は善く五陰を分別す。腋下滿相は大善根を滿つ。得味味相は寂滅味を具足す。方身相は生死の畏を破す。肉髻相は頭未だ嘗つて低敬せず。舌大相は色眞珊瑚の如く能く自ら面を覆ふ。梵音相は身相梵天に至る。師子頰車相、肩廣相は能く外道を破す。齒齊相は淸白の禪を行ず。齒平等相は平等の心もて一切衆生に於てす。齒密緻相は諸の貪著を離る。四十齒相は[一八]四十不共法を具足す。紺青眼相は慈心もて衆生を視る。牛王睫相は睫長くして亂れず、希有の色を得て樂つて見、厭くこと無し。此の三十二相を以つて其の身を莊嚴し、八十種好、間錯して映發す。福德具足し、威力殊絕、名聞流布し、戒香を身に塗り、世法に動ぜざる所、諸の煩惱も染せざる所、惡言も汚さざる所にして、諸の神通に遊戲す。諸佛は是の如く威力猛盛にして敢て當る者無し。慧を以つて說法することは師子吼の如意自在なるが如く、精進力を以つて諸の癡闇を破し、大光明を以つて普く天地を照す。諸の問答の中に最も上有ること無く、一切仰瞻し、下觀する者無く、常に慈心を以つて衆生を觀察す。念は大海の如く、定は須彌の如く、忍辱は地の如し。[一九]衆生の種うる所の福德を增長すること水の滋潤なるが如く、能く衆生の諸の善根力を生ずること風の開發するが如く、衆生を成就すること火の物を熟するが如し。智慧無邊なること猶し虛空の如く、普く大法を雨すこと大密雲の如し。世法に染せざること猶し蓮華の如く、外道の師を破すること師子の鹿を搏つが如し。能く重擔を擧ぐること大象王の如く、能く大衆を導くこと大牛王の如し。眷屬の淸淨なること轉輪

【一七】鋌＝正藏には闕とあるも三本に據る。

【一八】四十不共法については第二十一品より第二十三品までに詳かなれば參照せよ。

【一九】衆生＝今三本に據る。

善根福德力を以つての故に、能く十方現在の諸佛を見、皆目前に在り。
*問うて曰く、但だ善根福德力を以つての故に諸佛を見たてまつることを得るや、更に餘の法有りと爲すやと。答へて曰く、

佛、[一二]跋陀婆の爲めに、　說く所の深三昧あり。
是の三昧の寶を得れば、　能く諸佛を見たてまつることを得。

「跋陀婆」は是れ在家の菩薩、能く[一三]頭陀を行ず。佛是の菩薩の爲めに般舟三昧經を說く。[一四]般舟三昧は見諸佛現前と名づく。菩薩是の大寶三昧を得れば未だ天眼、天耳を得ずと雖も、能く十方諸佛を見、亦諸佛所說の經法を聞くことを得と。
△問うて曰く、是の三昧は當に何の道を以つてか得可きやと。答へて曰く、

當に諸佛を念ずべし。　大衆の中に處在して、
三十二相を具へ、　八十好をもて身を嚴る。

行者是の三昧をもて諸佛を念ぜば、三十二相、八十種好其身を莊嚴し、比丘、親近し、諸天、供養し、諸の大衆の爲めに恭敬し、圍遶せらる。專心に憶念せば諸佛の相を取る。又諸佛の是の大願を念ぜば大悲を成就して斷絕せず、大慈を具足して深く衆生を安んじ、大喜を行じて一切の願を滿し、捨心を行じて憎愛を捨離し、衆生を捨てず。諦を行ずる處常に欺誑せず。捨を行ずる處、慳垢を淨除し、善を行ずる處、其の心善寂、慧を行ずる處大智慧を得。*[一五]具に檀波羅蜜を行ぜば法施の主となり、具に尸羅波羅蜜を行ぜば戒行清淨、具に羼提波羅蜜を行ぜば能く忍ぶこと地の如く、具に毘梨耶波羅蜜を行ぜば精進超絕し、具に禪波羅蜜を行ぜば諸の定障を滅し、具に般若波羅蜜を行ぜば智慧の障閡を破す。
[一六]手足輪相は能く法輪を轉じ、足安立相は諸法を安住す。手足網縵相は諸の煩惱を滅し、七處滿相

※般舟三昧。
【一二】跋陀婆＝Bhadrapāla 跋陀婆羅、跋陀和に作る。或は賢護菩薩、賢護長者とも云ふ。
【一三】頭陀＝地相品第三に出づ。
【一四】般舟三昧、入初地品第二に出づ。
△般舟三昧得道の法。
※修六波羅蜜。
【一五】六波羅蜜は序品第一註參照。
【一六】以下三十二相の用を明かす。第十八品末と對照すべし。

成る。大悲を得るが故に衆生の中に於いて則ち「慈心」を生じ是の念を作す。我れ應に力に隨つて衆生を利益すべし。則ち實悲と成る。慈を行じ、衆生を利する時卽ち能く捨を行じ、內外の所有るもの皆能く施與し、是の念を作す。我が是の物の如き衆生を利益し、安樂にせんと欲するが爲めに則ち實慈を成ずと、又諸の衆生は我が語を信受し、捨を行ぜんと欲するが爲めに、利財物を求むるが故に種種の諸の苦惱の事を堪受して、是の念を作す。若し疲厭有れば則ち世間の技藝・經書・田作・工巧、諸の財利を求むるの因緣に於いて則ち獲る所無し。是の故に應に世間の技藝・經書等に於いて疲厭有ること無かるべし。堪受を以つての故に能く義趣を知る。是の念を作せ。世間の經書は義を以つて味と爲す。若し人善く經書の義味を知らば、則ち世間の法に於いて悉く能く通了す。能く通了するが故に則ち能く上中下の衆生を引導すと。是の念を作せ。若し人慚愧有ること無ければ、則ち衆生をして歡喜せしむること能はず。歡喜せしむるが爲めの故に當に慚愧を行ずと。是の念を作せ。若し堪受すること無ければ則ち世間、出世間の利を成ぜず。堪受すること有るが故に則ち能く一切の衆生を引導し、皆歡喜せしむ。心歡喜するが故に我が語を信受す。信受するを以つての故に勤めて方便を行じ而も唱導を作すと。是の念を作せ。若し衆生の佛を供養する者は則ち利益する所多し。衆生をして佛を供養せしめんと欲するが故に、卽ち自ら一心に佛及び形像、舍利を供養す。衆生信受すれば則便效に隨つて佛を供養し、人天の因緣を種ゑ、三乘の菩薩に住す。是の如くして次に十法を行ぜば則ち能く初地を淨治す。

念佛品　第二十〔二〕

菩薩は初地に於いて所行の處を究竟すれば、自ら善根力を以つて能く數百の佛、菩薩を見る。是の如く其の心を降伏して深く佛道を愛すること所聞の如くすれば初地の行を具足し、究竟して自ら

【二】此品には見佛法中、善根福德力に依るの外、念佛力による般舟三昧法あることを明かし觀佛のために三十二相八十種好を詳說す。

身口心力を以つて成就することを得せしむ。但だ佛法のみに不退轉有るにあらず。世間の事の中にも亦不退轉の相有りと。

問うて曰く、何の因緣を以つてか能く此の事を成ずるやと。答へて曰く、※堪忍の力有る者は則ち能く究竟す。說くが如し。

大堪忍の力を得れば、　深く諸佛を供養す。
佛の敎化する所に隨つて、　皆悉く能く受持す。

菩薩は堪忍の力を得るが故に、是の力を以つて諸佛に於いて供養し、敬禮し、隨宜に衣服・飲食等を供奉す。又佛の敎化、若しは持戒・禪定、若しは心意を降伏し、若しは實に諸法を觀ずるに、是の事の中に於いて堪任の力を用ふること、人の利刀を得て宜く有益の中に應じて用ひ、無益の中に於いて用ひざるが如し。說くが如し。

△信と悲と慈と捨とを以つて、　堪受して疲厭無かれ。
又能く義趣を知り、　衆生の心を引導せよ。
愧は堪受の第一、　深く諸佛を供養し、
佛の所說の中に住して、　正しく此の十法を行ぜば、
能く初地を淨治す。　是は則ち菩薩道なり。

若し菩薩、信を以つて始と爲せば、後、佛に住するが故に則ち能く初地を淨治す。是の十法の中に信を以つて初と爲すなり。「信」とは諸の佛法の因緣の中に於いて、心に決定を得、又好樂を加ふるに名づく。何を以つての故に、是の菩薩の心は性清淨の故に、深根信力を得。信力有るが故に衆生の中に於いて「悲心」を生じ、是の念を作す、一切の諸佛の法は大悲を以つて本と爲す。我れ今一心に佛法を好樂す。是の故に衆生の中に於いて應に悲心を生ずべし。此の悲漸く增すときは則ち大悲と

※堪忍力。

△信、悲、慈、捨。

は深く慚愧の心有り。「宜きに隨つて引導す」とは上中下の者に於いて各々宜き所有り。「慚愧」とは自らの所行を恥づるを名づけて慚と爲し、他に因つて恥を生ずるを名づけて愧と爲す。有る人は以らく、自ら作して羞づると他を見て愧づるとなり。世間の法中、愧を先用と爲す。經に說くが如し。二清白の法は世間を護持すと。所謂る慚愧なり。偈に說くが如し。

人に隨つて愧有る時は、　法を知り、罪福を知る。
愧無くして善人に遠かるときは、　惡として作らざるは無し。

※問うて曰く、何か故ぞ慇懃に菩薩に善く世間の宜法を知ることを教ふるやと。答へて曰く、菩薩若し世間の法を知らば則ち衆生に於いて相悅入し易く、其の心を化導して大乘に住せしむ。若し世法を知らざれば乃至一人をも教化すること能はず。是の故に「世間の法」とは則ち是れ衆生を教化する方便の道なり。菩薩は是の如く世間の法を知り、慚愧の心を具足す。說くが如し。

惡を加ふるも而も敬養せよ。　何に況んや己を利する者をや。
愧有り、恭敬有つて、　善者を輕笑せざれ。

是れ菩薩は、愧心多きが故に、諸の惡人に於いて尙能く恭敬し、供養し、迎送し、問訊す。何に況んや善人の能く我を利し、功德有る者をや。愧と恭敬との二心有るが故に、諸の賢善少知識者に於いても輕慢せず、是の念を作す。功德有る者は自ら世に隱るゝこと灰の火を覆ふが如しと。鄙薄なる世法も應に輕賤すべからず。若し我れ小因緣を以つて輕賤せば卽便罪を得と。復た次に

凡そ諸有所作、　能く究竟し難しと雖も、
則ち世間の中に於いて、　亦是れ不退の相なり。

是れ菩薩は、凡そ所作有つて若しは塔寺を起し、若しは大會を設け、若しは罪人を救はんに、是の如き等の一切世間の諸の難事の中、心に廢退無し。造る所未だ成らざれば、要ず種種の諸の方便力、

※菩薩は世法を知るべし。

らる。何等をか四と爲すや。一には乃至失命すとも惡事を爲さず。二には常に法施を行ず。三には受法せば常に其の心を一にす。四には若し染心を生ずれば卽ち能く正しく染心の染を起す因縁を觀ず。是の染根とは何をか名づけて染と爲すや、何者か是れ染なりや、何事に於いてか起り、誰か是の染を生ずるか。是の如く正しく憶念して虛妄にして無實、無有なることを知り、決定して信解す。諸法は空なるが故に法有ること無し。所有の法無きが故に是の如く正しく染の因縁を觀ず。故に諸の惡業、餘の一切の煩惱を起さず。亦是の如く觀じて菩薩は是の大人の稱歎する所の法を得、諸の惡煩惱の業を離るゝが故に、心則ち捨心を具足する者なり。說くが如し。

*捨心を具足して、　　世、出世の利を求む。
此の諸の利を求むるの時、　　心に厭倦有ること無し。

是の菩薩は捨法を具足して法施を行じ、財施を行じ、衆生を利益せんと欲するが故に、若し世間・出世間の諸利を求めて未だ得ざるも、時に心に疲懈無し。「世間の利」とは善く世間の經書・技藝・方[七]術・巧便等を解するなり、「出世間の利」とは、諸の[八]無漏根・[九]力・[一〇]覺・道法なり。說くが如し、

是の如く二利を求めて、　　心に疲懈有ること無し。
疲懈無きを以つての故に、　　能く諸の深法を聽き、
因て從つて經書を求めて、　　而も能く智慧を得。
具足して世間を知るは、　　最上第一の法なり。

「疲懈無し」とは、疲懈は厭惡に名づく。學ぶ所若し厭惡無くんば則ち心に疲倦無し。若し疲倦無ければ則ち諸の經藝・醫方・技術・禮儀・法則を求めて皆疲倦無し。疲倦無きが故に則ち智慧を得、具足して深く世間の宜法を知る。「世間の法」とは方俗の宜き所、世間の心に隨ふ。世間の治法は皆悉く能く知る。是の故に能く上中下の衆生を知つて宜きに隨つて引導す。善く世間の事を解するとき

※世、出世の二利。

【七】方術＝神仙の術、方士のわざ等。
【八】無漏根＝普通に三無漏根を說く。未知當知根（見道）、已知根（修道）、具知根（無學道）の三なり。
【九】力＝五力なり。入初地品第二に出づ。
【一〇】覺＝七覺支なり。同上。道法＝八正道なり。同上。

*二空繫と二縛と、　二障と二垢法と、
二瘡と及び二坑と、　二燒と二病法となり。

若し菩薩諸の菩薩藏等の功德を得んと欲する者は、應當に是の諸の二法を遠離すべし。何等をか「二虛空繫法」と爲すや。一には路伽耶等に應ずる經に貪著す。二には衣鉢を嚴飾するなり。「二縛」とは一には諸見に著するの縛。二には名利を貪るの縛なり。「二障の法」とは一には白衣に親近す。二には善人を疎遠するなり。「二垢法」とは、一には忍んで諸の煩惱を受く。二には諸の憒越の知識を樂ふなり。「二瘡法」とは、一には他人の過を見、二には自ら其の過を藏するなり。「二坑法」とは、一には正法を毀壞す、二には破戒にして供を受くるなり。「二燒法」とは一には穢濁の心を以つて袈裟を著、二には淨戒の者の供給を受く。出家の人に「二病」有れば治し難し。一には[五]增上慢の人、自ら謂へらく能く心を降伏すと。二には大乘を求むる者、其の意を沮壞す。若し菩薩是の如き等の法を遠離して、更に疾く阿耨多羅三藐三菩提の法を得ること有れば則ち能く疾く得ん。又、諸佛、辟支佛、阿羅漢の稱歎する所を得ん。

△問うて曰く、何等の法か是れ疾く阿耨多羅三藐三菩提を得るの法なりや。何等か是れ諸佛、辟支佛、阿羅漢の稱歎する所なりやと。答へて曰く、

能く四諦の相を行ずれば、　疾く佛の菩提を得。
又四法を行ずる者は、　三聖の稱歎する所なり。

何等をか四諦相と爲すや。一には一切の善法を求むるが故に勤行精進す。二には若し經法を聽受し、讀誦せば所說の如く行ず。三には三界殺人處の如くなるを厭離して常に免れ出でんことを求む。四には一切衆生を利益し、安樂にせんが爲めの故に、自ら其の心諦を利するを眞實不誑と名づけ、阿耨多羅三藐三菩提を得るが故に名づけて不虛と爲す。復た四法有つて[六]三聖の爲めに稱歎せ

※四法の果を得るの法。

【五】增＝正藏に增となす。今三本に據る。

△得菩提の四法と三聖稱歎の四法。

【六】三聖＝聲聞、緣覺、菩薩。

には聲聞乘の比丘を求めて坐禪を樂ふ者。三には好んで外道の【四】路伽耶經を讀み、文頌を莊嚴し、問答を巧にする者。四には親近する所の者、世間の利を得て法利を得ざるもの。是の故に菩薩は應に四善知識に親近して四惡知識を遠離すべし。若し菩薩能く四惡知識を遠離して四善知識を親近する者は、則ち四廣大藏と過一切魔事法と能生無量福德盡と能攝取一切善とを得と。

△問うて曰く、何等か是れ菩薩の廣大藏法なりや。何等か是れ能過一切魔事法なりや。何等か是れ能生無量福德法なりや。何等か是れ能攝取一切善法なりやと。答へて曰く、

諸の菩薩に、　四廣大藏の妙法と、
四攝の諸の善法と有り。　菩提心を先と爲す。

何等をか「四」と爲すや。一には佛に値ふことを得、二には六波羅蜜を聞くことを得、三には說法の者に於いて心に瞋閡(しんげ)無し、四には不放逸の心を以つて樂つて阿練若處に住す。是を四大藏と爲す。◎「能過一切魔」とは四法有り。何等か四なりや。一には菩提心を捨てず、二には一切の衆生に於いて心に瞋礙(しんげ)無し。三には一切の諸見を覺知す、四には諸の菩薩に於いて心に憍慢無し。是を四と爲す。▲「得無量福德法」に復た四法有り、何等をか四と爲すや。一には法施に於いて悕求する所無し。二には破戒の惡人に於いて大悲心を生ず。三には衆生に敎ふる中に於いて無上菩提を發さしむ。四には下劣の衆生に於いて忍辱を行ず。是を四と爲す。●「攝一切善法」とは四法有り。何等をか四と爲すや。一には空閑に於いて矯異常の行を現ぜず。二には四攝の法を行じて恩報を求めず。三には身命を惜まずして正法を護持す。四には諸の善根を種うるの時、菩提心を以つて先と爲す。是を四と爲す。是の一一の四法皆應に廣く解くべきなれども、文の煩多なるに於いての故に廣く解かず、今佛の所說の如く偈を以つて略して解かん。若し菩薩諸の菩薩藏を得んと欲し、一切の魔事を過さんと欲し、一切の善法を攝せんと欲せば皆當に遠離すべし。

【四】路伽耶經＝路伽耶とは梵語 lokāyatika 順世と譯す。世間の凡情に隨順して是れ常、是れ有等と計執する印度の順世外道の經典を云ふ。印度に於ける一種の唯物論。
※善知識に親近するの果。
△四廣大藏。
◎能過一切魔。
▲得無量福德法。
●攝一切善法。

佛說きたまふ、是の如きの法は、　一一應に遠離すべし。

何等をか四と爲すや。一には利養を貪重して法を貴ばず。二には但だ名譽の爲めにし、功德を求めず。三には自樂を求欲して衆生を念ぜず。四には眷屬を貪樂して遠離を樂はず。是れを四と爲す。

※問うて曰く、像菩薩の法云何か捨す可きや。と。答へて曰く、若しは菩薩、應に菩薩初行の功德を修すべし。是は則ち能く像菩薩の法を離るべし。是の故に菩薩、若し像菩薩の法を離れんと欲せば偈に說くが如し。

△初行の四功德は、　精勤して生ずることを得せしめ、
生じ已つて增長せしめ、　增長し已つて當に護るべし。

何等をか四と爲すや。一には空法を信解し、亦業の果報を信ず。二には無我の法を樂つて一切衆生に於いて大悲心を生ず。三には心は涅槃に在り、行は生死に有り、四には布施して爲めに衆生を成就せしめんと欲して、而も果報を求めず。若し人菩薩初行の四功德を生ぜんと欲して增長し、守護する者は、當に善知識に親近すべし。偈に說くが如し。

◎菩薩は當に四種の　善知識に親近すべし。
亦應當に四種の　惡知識を遠離すべし。

菩薩、阿耨多羅三藐三菩提を愛樂せば、應當に四種の善知識に親近し、恭敬し、供養して當に四種の惡知識を遠離すべし。何等をか四種の善知識と爲すや。一には來求の者に於いて賢友の想を生ず。以つて能く無上道を助成するが故に。二には說法の者に於いて善知識の想を生ず。以つて能く多聞智慧を助成するが故に。三には出家する者を稱讚し、善知識の想を生ず。以つて能く一切の善根を助成するが故に。四には諸佛世尊に於いて善知識の想を生ず。以つて能く一切の佛法を助成するが故に。何等をか四種の惡知識と爲すや。一には辟支佛乘の心を求めて少欲少事を樂ふもの。二

【三】像菩薩＝像とは似にして、形は菩薩なるも、眞の菩薩ならざる菩薩を云ふ。名字菩薩もその一なり。

※像菩薩の法を捨離する法。

△四功德。

◎四種の善知識。

應に四種の調和菩薩の、　　法を修習すべし。

云何か名づけて四の敗壞菩薩の法となすや。一には多聞にして而も戲調、法行に隨はず、二には敎化に於いて戲論を生じ、和尚、阿闍梨を敬順せず。三には人の信施を消すること能はず[二]、防制を毀壞して供養を受く。四には柔善の菩薩を敬せず、心に憍慢を懷く。是を四となす。云何か名づけて四の調和菩薩の法と爲すや、一には常に樂つて未だ聞かざる所の法を聞き、聞き已つて能く說く所の如く行ず。法に依り、義に依り、如說の行に依る。二には義趣に隨順して言辭に惑はず、調和して化し易く、師事の中に於いて用意施作す。三には戒・定を失せず、淸淨にして活命す。四には調和菩薩に於いて恭敬の心、隨順の情を生じ、重く憍慢を破し心に其の功德を求む。復た次に菩薩の四種の錯謬有り、常に此の中に於いて菩薩の短を求む。是を敗壞(はいえ)菩薩と名づく。若し能く四種の善道に親近せば是を調和菩薩と名づく。偈に說くが如し。

菩薩は應に四種の、　　菩薩の謬を遠離すべし。
菩薩は應に四種の、　　菩薩の道を修習すべし。

何をか菩薩の四種の錯謬と謂ふや。一には非器の衆生に於いて甚深の法を說く、是を錯謬と名づく。二には深大の法を樂ふ者の爲めに小乘を說く、是を錯謬と名づく。三には正行道の者の持戒善心に於いて輕慢して敬せず、是を錯謬と名づく。四には未成就なる者に於いて未だ信ずべからざるに信じ、破戒の惡人を攝して以つて親善と爲す、是を錯謬と名づく。何等をか四種の菩薩道と爲すや。一には一切の衆生に於いて平等の心をもて行ず。二には善法を以つて一切を敎化す。三には等しく一切の衆生の爲めに說法す。四には正行を以つて一切の衆生に行ぜしむ。若し常に菩薩四種の錯謬を行じて樂つて諸法を思惟せず、勤めて善法を修習せざれば則ち是れ像菩薩なり。是の故に、

△諸菩薩の法の中に、　　四種の　像菩薩あり。

【二】消すること＝消化し善用すること。防制は制規なり。

※四種の菩薩道。

△四種の像菩薩。

れ善根を增長する四法なりや。一には未だ聞かざる所の經之を永めて厭くこと無し。所謂る六波羅蜜、菩薩藏なり。二には衆生に於いて憍慢の心を除き、謙遜して下下す。三には法の如く財を得て趣足するのみ。諸の邪命を離れて樂つて四聖種の行を行ず。四には他の罪に於いて若しは實・不實・刺譏有ること無く、人の短を求めず。若し法の中に於いて達せざる所有るも心に違逆せず。佛を以つて證と爲す。佛は是れ一切智、其の法は無量、宜しきに隨つて說く、我が知る所に非ず。是の如く善根を增益する四法は諂曲の者の能く成就する所に非ず。是の故に、

*菩薩は應に諂曲相の　四法を遠離すべし。
應に常に直心相の　四法を修習し行ずべし。

在家・出家の菩薩は應に四諂曲の法を遠離すべし。曲木の稠林に在るが如くして出づるを得可きこと難し。是の如くして、世間に佛弟子有つて佛法に入ると雖も、生死の深林を出づるを得ること能はず。何等をか四となすや。一には佛法に於いて疑を懷いて信ぜず、定心有ること無し。二には衆生に於いて憍慢し、瞋恨す。三には他の利に於いて心に貪嫉を生ず。四には菩薩を毀謗し惡聲流布す。是を四と爲す。何等か是れ四直心相なりや。一には罪有れば卽時に發露して隱藏する所無く、過を悔いて除滅し、無悔道を行ず。二には若し實語を以つてして王位及び諸の財寶を失すとも猶妄語せず、口未だ曾て人を輕んずるの言を說かず。三には若し人惡口・罵詈・輕賤・譏謗・繫閉・鞭杖・考掠する等の罪あるも、但だ前身を怨んで他を咎めず。業の果報を信じて心に恚恨無し。四には信功德の中に安住す。諸佛の妙法甚だ信解し難し。心の淸淨の故に皆能く信受す。菩薩を敗壞するの行は四諂曲なり。菩薩を調和するに四の直行有り。是の故に菩薩は諂曲の相を行ぜざることを欲し、直心に說の如く行ぜんことを欲す。

△應に四種の敗壞菩薩の　法を捨離すべし。

※得直心相の四法。

△調和菩薩の四法。

巻の第九

四法品　第十九[一]

説く所の三十二相を得る諸業の如きは、菩薩は應に一心に修習すべし。此の如き三十二相の業を修するには慧を以つて本と爲す。是の故に、

*慧を退失するに四法あり。　菩薩は應に遠離すべし。
慧を得るに四種の法あり、　應に常に修習して行すべし。

四法有り、能く慧を退失す。菩薩の應に遠離すべき所なり。復た四有り、慧を得るの法なり。應に常に修習すべし。何等か四法ありて慧を失するや。一には法及び説法の者を敬せず。二には要法に於いて祕匿し悋惜す。三には樂法の者の爲めに障礙を作して其の聽心を壞す、四には憍慢を懷き自ら高うじて人を卑む。何等か四法ありて慧を得るや。一には法及び説法の者を恭敬す。二には聞く所の法及び讀誦する所の如く他人の爲めに説き、其の心清淨にして利養を求めず。三には多聞に從つて智慧を得ることを知るが故に、勤求して息まざること頭然を救ふが如し。四には所聞の法の如く受持して忘れず。説の如く行ずることを貴び、言説を貴ばず。是を四となす。若し人諸の善根を壞せざる者、是の人、能く失慧の四法を捨て、能く得慧の四法を行ず。是の故に智慧を増益することを求むる者なり。偈に説くが如し。

△食善根の四法、　菩薩は應に遠離すべし、
増善根の四法、　菩薩は應に修習すべし。

何等か善根を侵食する四法なりや。一には憍慢を懷き世事を貪求す。二には利養に著し諸家に出入す。三には憎嫉を起して諸の菩薩を謗す。四には未だ經を聞かず、聞けども信受せず。何等か是

【一】此品は前品末に如來に三十二相あるを説けるにより、その得相の諸業を説き廣く菩薩修行の種種の四法を擧ぐ。

※得慧の四法。

△増善根の四法。

得。是の相有るが故に多く弟子を得。好浄潔の衣服・臥具・樓閣・房舍を以つて施すが故に金色相及び皮膚薄相を得。是の相有るが故に好浄潔の衣服・臥具・樓閣・房舍を得。和尙、阿闍梨に供養すべき所父母兄弟及び尊重する所に隨つて善く能く衛護するが故に一一孔一毛生・毛右旋相・白毛莊嚴面相を得。是の相有るが故に與に等しき者無し。慚愧語・隨順語・愛語の故に上身如師子相・肩圓大相を得。是の相有るが故に見る者樂つて視、厭足有ること無し。疾病に醫藥・飲食を供給して身自ら看視するが故に腋下滿相・得味味相を得。是の相有るが故に疾病少し。園林・甘果・橋梁・茂樹・池井・飲食・華香・瓔珞・房舍を布施し、塔・福舍等を起し、及び衆と共に施す時、能く多くの物を出すが故に、身如尼俱樓樹相及び肉髻相を得。是の相有るが故に尊貴自在を得。長夜に實語・軟語を修習するが故に廣長舌相・梵音聲相を得。是の相有るが故に五功德音聲を得。五功德音聲とは易解の聲、聽者無厭の聲、深遠の聲、悅耳の聲、不散の聲なり。長夜に實語にして綺語せざるが故に師子頰相を得。是の相有るが故に言必ず信受す。初に既に供養して後に輕慢せず、意に隨つて供給するが故に齒白相と齒齊相とを得。是の相有るが故に淸淨和順、同心眷屬を得。長夜實語して讒謗せさるが故に四十齒相と齒密緻相を得。是の相有るが故に眷屬和同して沮壞すべからず。深心愛念して顏を和げ、衆生を視るに愛恚癡無きが故に紺靑眼相と睫如牛王相とを得。是の相有るが故に一切の見る者愛敬せずといふこと無し。

下平滿せるが故に腋下滿相と名づく。舌根風寒熱の爲めに壞せられざるが故に善く諸味を分別す。餘の人は爾らず、故に知味味相と名づく。身の縱廣等くして尼倶樓樹の如きが故に圓身相と名づく。肉髻團圓にして髮右に上り旋るが故に肉髻相と名づく。舌、赤蓮華の如く廣長にして薄きが故に廣長舌相と名づく。聲、梵王[四七]迦陵頻伽鳥の如きが故に梵音相と名づく。頰圓く廣きこと鏡の如きが故に師子頰相と名づく。齒白くして珂雪の如く、君坻華の如きが故に齒白相と名づく。平齊にして參差せざるが故に齒齊相と名づく。齒は密緻して疎ならざるが故に具足齒相と名づく。齒の上下相當るが故に四十齒相と名づく。眼の白黑分明にして淨く赤脉無きが故に紺青眼相と名づく。[四八]睫交亂せず、上下倶に眴て長からず、短かからず、故に名づけて牛王睫相となす。諸の尊ぶ所に於いて迎送恭敬して塔寺の中、大法會の處、說法の處に於いて人使を供給するが故に手足輪相を得。是の相有るが故に在家は轉輪聖王と作つて多くの人民を得、出家は道を學び、多く徒衆を得。受くる所の諸法堅持して捨てざるが故に安立足相を得。是の相有るが故に能く傾動することなし。常に四攝の法、布施・愛語・利益・同事を修するが故に手足網縵相を得。是の相有るが故に速に人衆を攝す。諸の香甘美輭の飲食を以つて人及び諸の所尊に供施し、所須を供給するが故に手足柔輭相及び七處隆滿相を得。是の相有るが故に多く香甘美輭の飲食を得。應に死すべきを救免し及び壽命を增し、又不殺戒を受くるが故に纖長指相と足跟滿相と身大直相とを得。是の相有るが故に壽命長遠なり。受くる所の善法增益して失せざるが故に足趺高、毛上向右旋相を得。是の相有るが故に諸の功德を得て退失せず。能く技藝及び諸の經書を以つて教授して惜まず、及び履屣等をもて施すが故に伊尼鹿蹲相を得。是の相有るが故に諸の修學する所疾に[四九]得て意の如し。來つて求索するもの有れば、遺惜する所無きが故に臑長臂相を得。是の相有るが故に能く勢力を得て能く大いに布施し、能く善く人を調へ衆生をして親里を遠離せしめず。若し乖離有れば還つて和合せしむるが故に陰藏相を

二九、眼色如紺青相
三〇、眼睫如牛王相
三一、眉間白毫相
三二、頂上肉髻相

【四四】先に說く＝易行品第九を指す。

【四五】伊泥鹿＝Aineya因尼延伊梨延陀に作る。鹿の名なり。鹿は漢語。

【四六】珂雪＝雪の如き白き貝なり。以て物の白きに譬ふ。

【四七】迦陵頻伽鳥(Kalavinka)譯して好聲、和雅と云ふ。その聲餘鳥に優る。

【四八】睫＝まつげ。

【四九】疾得＝正藏には速疾とあり。

は應當に分別して三十二相を了知すべし。是の相は何の法を以つてか是の相を得、何の業を以つてか是の相を得るや。是の業亦應當に知るべし。何を以つての故に、功德を得んと欲せば當に是の相を知るべし。是の相を得んと欲せば當に是の業を知るべしと。

問うて曰く、此の如きの事は何に於いてか解することを得るやと。答へて曰く、

法相品の中に於いて、　一相に三の分別あり。

阿毘曇三十二相品の中、一一の相に三種の分別有り。悉く應に知るべし。

問うて曰く、云何が一一の相に三種の分別有りと爲すやと。答へて曰く、一には相の體を說き、二には相の果を說き、三には相を得るの業を說く。手足輪相等は四四先に已に說く。轉輪聖王も亦是の相有り。諸の菩薩も亦是の相有り。餘の人も亦有り。但だ耳手足輪の者に如かずとは、手足の掌中に千輻輪有つて具足し、明了なること印文の現るるが如し。足、安住して動かざるを足安立相と名づく。縵網輭薄にして猶鵝王の如く、畫文明了にして眞金の縷の如し。故に手足網相と名づく。柔輭なること猶し兜羅樹綿の如く、嬰兒體の如し。其色紅赤にして身の餘分に勝るを名づけて手足柔輭相となす。手掌と足下と頭上と兩腋との七處倶に滿つるが故に七處滿相と名づく。修指纖臑の故に長指相と名づく。足跟長廣の故に足跟廣相と名づく。身長七肘にして曲らざるが故に身直大相と名づく。足上隆起するが故に足趺高相と名づく。毛の上右に向つて旋るが故に毛上旋相と名づく。腨蹲漸く麁にして四五伊泥鹿の蹲の如きが故に鹿蹲相と名づく。平立するに兩手膝を摩するが故に長臂相と名づく。寶馬・寶象の陰の現れざるが故に陰藏相と名づく。第一金色光明の故に金色相と名づく。皮軟にして錬金を成ずるが如く、塵垢を受けざるが故に皮薄細密相と名づく。一一の孔に一毛生ずるが故に一一毛相と名づく。眉間の白毫の光四六珂雪の如きが故に白毛相と爲す。師子前むが如く身廣厚にして所を得るが故に師子上身相と名づく。肩圓大なるが故に肩圓大相と名づく。腋

相は佛に限らず總ての大人相なり。此の相を具する者は家に在りては輪王となり、出家すれば無上覺を得と云ふ。その名目不定なれば左に參考のため三藏法數四十八に依りて名を列ぬ。

一、足安平相
二、千輻輪相
三、手指纖長相
四、手足柔軟相
五、手足縵網相
六、足跟滿相
七、足趺高好相
八、腨如鹿王相
九、手過膝相
十、馬陰藏相
一一、身縱廣相
一二、毛孔生青色相
一三、身毛上靡相
一四、身金色相
一五、常光一丈相
一六、皮膚細滑相
一七、七處平滿相
一八、兩腋滿相
一九、身如獅子相
二〇、身端直相
二一、肩圓滿相
二二、四十齒相
二三、齒白齊密相
二四、四牙白淨相
二五、頰車如獅子相
二六、咽中津液得上味相
二七、廣長舌相
二八、梵音深遠相

氣は常に其の心に熏じ、則ち皆除滅して諸の煩惱の惡氣習性を轉ず。「燈を施ば天眼を得」とは、若し人、燈を然して佛、聲聞、辟支佛及び塔像、舍利を供養せば、是の因緣を以つて天眼の報を得。復た次に、

樂施は天耳の報、　乘施は神足を得。[四二]
正願を以て土を淨む。　攝法は僧を具することを得。

「樂施は天耳の報を得」とは、大會に於いて諸の音樂を作し、佛に供養せば天耳の報を得。「乘施は神足を得」とは、乘を輦輿、象馬等の乘に名づく。復た有る人の言く、履屣等を以つて施すも亦神足を得と。「正願を以つて土を淨む」とは、所願を以つて淸淨の土を取るに隨つて、若しは金銀・頗梨・珊瑚・琥珀・車渠・瑪瑙・無量の衆寶もて國土を淸淨にす。「攝法は具僧を得」とは、若し菩薩具足して四攝の法を行ずれば僧を具足することを得、布施・愛語・利益・同事を以つて衆生を攝取するが故に、後に成佛の時淸淨にして無量の菩薩僧及び聲聞僧を具足することを得。阿彌陀佛に二種の僧有つて淸淨具足するが如し。「願具足」とは先の十願の中に說くが如し。復た次に、

衆生を利するが故に、　一切に愛敬せらる。
平等にして心無二なれば、　最勝者と爲ることを得。

若し菩薩身口意の業を以つて所作有れば、皆衆生を利益し、安樂にせんが爲めにす。是の故に衆生皆悉く敬愛す。若し菩薩諸の衆生の怨と親と中との人に於いて、平等の心を行じて一切の衆生を捨せざれば、是の業報を以つて最勝と爲ることを得。「勝」を能く貪欲・瞋恚・愚癡一切の煩惱の惡法に勝るるに名づく。故に名づけて佛となす。

*[四三] 問うて曰く、人皆倶に眼・耳・鼻・口等有つて異有ること無し。云何か是れ佛を知ることを得るやと。答へて曰く、佛に三十二大人の相有り。是の相有る者は當に知るべし、是れ佛なり。在家・出家

【四二】乘施は神足を得、正願を以て土を淨む＝正藏には以正願淨土、乘施護神足とあり、今明本による。

※三十二相。
【四三】三十二相＝具には三十二大人相と云ふ。この三十二

は名づけて受持習學する所の法、自然に牢堅にして動轉すべからずとなす。後、成佛の時、多く菩薩、聲聞の弟子有り、是の堅固の法に住して、能く其の法を受くる所の者を障ふることなきなり。又「堅」を名づけて法、久住を得と爲す。「障せざれば守護を得」とは、若し人說法し及び人、法を聽くに、橫に與して障礙の事を作さず、後、成佛の時、諸天、世人共に法を守護し、未だ佛道を得ざるに、常に能く諸佛の正法を護持し、諸佛の滅後は遺法を守護し、乃ち能く後佛の出世に至るまで是の因緣を以つて菩薩、聲聞、皆應に心を盡して善く法を守護すべし。「法を供養せば佛に値ふ」とは、「供養」を名づけて恭敬諸法と爲す。法施の法會には敬心をもて說法の人を供養し、法座を施設し、禪坊を起立し、講法の處を莊校し嚴飾す。是の如く深心に愛樂せば、法を供養する因緣の故に、諸佛に値ふことを得。「信解を以つて諸難を捨す」とは、「信」を諸の善法に於いて深く欲樂を生ずるに名づく。是の法を以つての故に[四二]八難を離るることを得。「解」とは能く諸罪を滅し、能く諸の善法の中に於いて心力を以つての故に意に隨つて而も解す。十の一切入の如し。意に隨つて解する所なり。若し人多くの信解の力有らば、能く無始の生死より已來の無量の罪惡を滅すること、先の悔過品の中に說くが如し。復た次に、

空を修せば放逸ならず、　貪らざれば利を成ずることを得。
說に隨はば煩惱を滅し、　燈をもて施さば天眼を得。

「空を修せば放逸ならず」とは修に二種有り。得修行修なり。修空力の故に有爲法は皆是れ虛誑なりと信ず。亦空に住せざれば諸法無定なり。是の故に常に自ら心を攝檢して放逸ならざるなり。「貪らざれば利を成ずることを得」とは、「貪」を他物の中に於いて貪取の心を生ずるに名づく。若し是の事を除かば所求皆成じ、所願皆滿す。「說に隨はば煩惱を滅す」とは、所說有るに隨つて身に卽ち之を行ずれば則ち煩惱を斷じ、諸事の中に於いて皆說の如く行ぜば世世より已來の諸の煩惱の

【四二】八難＝又、八無暇と云ふ。見佛聞法について障難ある處なり。一に地獄、二に餓鬼、三に畜生、四に欝單越（新に北拘盧洲）樂報殊勝にして全く苦なきが故に。五に長壽天、色界、無色界の長壽安隱なる處なればなり。六に聾、盲、瘖瘂、七に世智辯聰、八に佛前佛後、即ち二佛の中間にして佛なき時なり。

曰く、忍辱・法施・法忍・思惟して法を曲げず、法を尊重し、法を障へず、法を供養し、信解し、空を修し、貪嫉せず、所說に隨つて行じ、燈明施・妓樂施・乘施・正願をもて法を攝し、思量して衆生を利安し、心を一切に等しくす。此は是れ在家出家の共行の要法なり。是の故に偈に說かく、

忍を行ずれば身、端嚴なり。　法施は宿命を知り、
法忍は總持を得。　思惟すれば智慧を獲、
諸法に於いて曲らざれば、　常に正憶念を得。

「忍を行ずれば端嚴を得」とは、能く惡言・罵詈・呪誓・繫縛・刀杖・考掠・搒笞を忍べば、心動異せず、悉く能く堪受す。是の如き忍辱の獲る所の果報は人天に生じて常に端正を得、後、成佛の時相好無比なり。「法施は宿命を知る」とは、法施を行ずる者は、能く過去無量劫の事を知ればなり。「法施」を名づけて種種分別と爲す。聲聞乘・辟支佛乘・佛乘の解說義理なり。*法施の果報に三十五有りと雖も、要は[四〇]宿命を知るのみ。說法の因緣をもて人の疑ふ所を斷ず。是の故に宿命を知ることを得。「法忍は總持を得」とは、法は空・無相・無願に應じ、六波羅蜜、菩薩の諸地に應ずるに名づく。一切菩薩の所行の法、曉了に明解して、心に能く忍持するを名づけて「法忍」と爲す。是の忍を行ずる者は則ち總持を得。「總持」を名づけて聞く所の經の如く、讀誦する所の如く、其の中の義趣乃至百千萬劫にも終に忘失せずと爲す。「思惟は智慧を得」とは、思惟を名づけて善法を籌量し、義趣を分別すと爲す。是の故に能く今世、後世の利益を得。「不曲心は正念を得」とは、「不曲」とは名づけて質直無諂と爲す。此の法を修行すれば則ち一切の法の中に於いて堅固の念を得るなり。復た次に、

法を重んずれば法則ち堅し。　障せざれば守護を得。
法を供養せば佛に値ひ　信解すれば諸難を捨す。

「法を重んずれば法則ち堅し」とは、若し人、法を尊重し、恭敬すれば法則ち堅固なり。「堅法」と

※法施の果報。
【四〇】宿命＝五神通の一、地相品第三に出づ。

し。所謂る身自ら疾病を瞻視し、醫藥を供給すべし。*復た次に、

決定の心をもて布施し　施し已つて而も悔無かれ。

是の菩薩若しは正法を護持せんが爲めに、若しは病人を瞻視せんが爲めに、時に應じて供施して心に悔有ること無かれ。是を清淨施と名づく。若し果報を求めず、是は應に受くべきと、是は應に受くべからざるとを分別せず、但だ憐愍利益の心を以つて與ふる、是を清淨の施と名づく。說の如し。

若し人悲心をもて施さば、　是を清淨の施と名づく。
是を福田と言はず、　非福田とも言はず。
若し人布施を行ずるに、　爲す所無きが故に與へ、
若しは人果報の爲めにせば、　是を名づけて出息と爲す。
是の故に施を說くのみ。　心に悔恨有ること無かれ、
乃至微小の福をも、　皆無上道に向けよ。

是の布施の因緣を以つて、得る所の福德は皆應に阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべし。今世、後世の利樂及び小乘の果を求めず。但だ衆生の爲めに阿耨多羅三藐三菩提を求むること、我が先に說けるが如し。在家の菩薩の餘の行の當に說くべき者今已に說き竟んぬ。皆大乘經の中に於いて處處に抄集せり。經法に隨順して菩薩は是の行中に住し、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得よ。第二地の中には多く出家の菩薩の所行を說けり。在家、出家の菩薩の共行、今當に復た說くべし。

共行品[三九]　第十八

*問うて曰く、汝、當に在家、出家の菩薩の共行の法を說くべしと言ふ。今之を說く可し。答へて

※心に悔無かれ。

【三九】此品には出家在家に共通なる共行の法を說く。品末に三十二相を擧ぐ。

欲する所に隨つて利益して、　　敎へて無上心を發さしめよ。

是れ在家の菩薩は、自利の爲めの故に所に隨つて利益す。比丘に若しは衣を以つて施し、若しは鉢を以つて施し、是の如き等の種種の餘の財物をもて施すに、是の如き比丘、未だ法位に入らず、未だ道果を得ざれば、應に勸めて阿耨多羅三藐三菩提の願を發さしむべし。何を以つての故に、財施に因つて攝するが故に、法施を以つて攝することを得、或は所施の檀越に於いて愛敬の心有つて其語を信受すべし。*復た次に、

法を護持せんと欲するが爲めに、　　命を捨つるも惜まず。
病比丘を療治し、　　乃至身を以つて施せ。

是れ在家の菩薩は、法を護持せんと欲するが爲めの故に、乃至自ら身命を捨て、勤行精進して[三七]六十二種の外道及び諸の魔民の佛法を憎嫉する者を摧破す。佛弟子の中、或は邪行にして佛法を詭異せるもの有り。是の如きの人は法の如く摧破するを名づけて法を護持すと爲す。又應に諸の多聞說法の者に於いて、信敬の心を加へて[三八]四事をもて供養すべきを、亦法を護持すと名づく。若し自ら修多羅・毘尼・阿毘曇・摩多羅迦・菩薩藏を讀誦し、解說し、書寫する者、亦他人を敎へて讀誦し、解說し、書寫せしめば、是の因緣を以つて法久住することを得て一切を利益す。在家・出家・稱揚歎說して法久住して利す。若し法疾(すみやか)に滅すれば過患有るを說く。又如來久遠より已來、菩薩の道を行じ、諸の難行を行ぜしことを念じ、乃(いま)し是の法を得て、是の因緣を以つて諸の在家、出家に於いて勸心精進にして示敎利喜し、若しは得道せしめ、若しは阿惟越致を略說して護法の因緣に入らしめ、一切安樂の具を得せしめ、亦復た自ら能く說の如く修行するを皆法を護持すと名づく。復た次に是れ在家菩薩の法は、若し病比丘有らば應に須く療治すべし。是の菩薩乃至身を捨てゝ其の病を治せんが爲めに而も愛惜せざる、是れを最も要と爲す。出家の人は應に在家に於いて此の要事を求むべ

※護法。

【三七】六十二種外道＝六十二見の各々を正道なりと偏執する外道を云ふ。六十二見については調伏品第七參照。
【三八】四事＝入初地品第二に出づ。

はば應當に是の如き等の經を學習すべし。若し菩薩藏を讀む者に遇はば應當に六波羅蜜及び方便の事を請問し、問ひ已つて修學すべし。若し阿練若に遇はば應に其の遠離の法を學すべし。若し坐禪の者に遇はば應に其の坐禪の法を學ぶべし。餘の諸の比丘も亦應に是の如く其の所行に隨つて請問し、其の學に違逆する所無かるべし。口を攝護する者は、諸の比丘に請じて應に善く口を攝し、安詳默然として時を觀じ、土を觀じ、事に隨つて思惟し、心に錯亂せず、語言を少くすべし。又說法の者の所に於いて、諸の比丘等乏少する所に隨つて、若しは衣、若しは鉢、若しは[三四]尼師壇、資生の物、力に隨つて而も施して[三五]遺惜する所無かれ。所以は何ん。菩薩は尙應に諸の惡人に施すべし。何に況や比丘の功德有る者をや。乃至身肉も猶當に惜まざるべし。況や復た外物をや。助道の因緣なればなり。※復た次に、

若し布施を行ずる時、　　他の煩惱を生ずること莫れ。

布施を行ずる時、若し一人に與へて一人得ざれば便ち恚惱を生ず。應に善く籌量して布施を行ずべし。他人をして恚惱を生ぜしむること勿れ。何を以つての故に、

凡夫を將護するの心は、　　應に阿羅漢に勝るべし。

是の在家の菩薩、諸の比丘に衣服・飮食・醫藥・臥具を施して供養し、迎送し、敬禮し、親近して、凡夫を將護すること、心に應に阿羅漢を將護するに勝るべし。何を以つての故に、諸の阿羅漢は利衰・毀譽・稱譏・苦樂に於いて心に異、有ること無し。凡夫は愛恚、慳嫉有るが故に能く罪業を起し、是の罪業を以つて地獄・畜生・餓鬼に墮在す。是の故に應に深く凡夫を將護すべし。菩薩の事は皆一切衆生を利益せんが爲めに布施す。自樂の爲めにするに非ず。自ら後世の果報を得んが爲めにも非ず。[三六]市易の如くには非ず。復た次に、

財を以つて施すに因るが故に　　法施を以つて攝すべし。

喩寓言を以て敎理を說明せる部分を云ふ。
【三二】 摩多羅迦＝一五一頁を見よ。
【三三】 憂陀那＝Udāna 自說と譯す。
【三四】 法句＝Dhammapāda 法句經なり。
※布施を行ずる法。
【三四】 尼師壇＝地相品第三に出づ。
【三五】 遺＝正藏に匱に作る。今三本に依る。
【三六】 市易＝營利交換のこと。

に勤めて精進すべし。何の時にか當に菩薩所行の道法に隨順することを得べけん。何の時にか當に亦世間の爲めに無上の福田と作ることを得べけん。何の時にか當に恩愛の奴を離るることを得べけん。何の時にか當に是の家獄を脱することを得べけん。*説くが如し。

　諸の塔寺に禮敬し　　佛に因つて三心を生ず。

是の在家の菩薩既已に慕つて出家を尙ぶ。若し塔寺に入つて佛を禮敬するの時、應に「三心」を生ずべし。何等をか三となす。我れ當に何の時にか天龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人の中に於いて諸の供養を受くることを得べけん。何の時にか當に神力をもて舍利を世間に流布して衆生を利益することを得べけん。我れ今、深心に大精進を行じ、當に阿耨多羅三藐三菩提を得て、我れ佛と作り已つて無餘涅槃に入るべけん。◎復た次に、

　諸の比丘に詣づるの時、　所行に隨つて奉事し、
　默然として所誨に順じ、　之を濟つて惜しむ所無かれ。

是れ在家の菩薩は塔を敬禮し已つて、諸比丘の法を説く者、律を持する所の者、修多羅を讀む者、[二六]摩多羅迦を讀む者、菩薩藏を讀む者、[二七]阿練若を作す者、[二八]納衣を著する者、乞食の者、一食の者、常に坐する者、中を過ぎて漿を飮まざる者、但だ[二九]三衣の者、褐衣を著する者、隨つて敷坐する者、樹下に在る者、塚間に在る者、空地に在る者、少欲の者、知足の者、遠離の者、坐禪の者、勸化の者に造ることを求めば、應に各々諸の比丘の所行に隨つて奉事すべし。若し[三〇]阿毘曇を讀む者の所に至らば其の所説の諸法、性相・相應・不相應等に隨つて疑ふ所を請問し、問ひ已つて習學せよ。若し律を持する者に遇はば應當に起罪の因緣、罪の輕重、滅罪の法及び[三一]阿婆陀那の事を請問すべし。問ひ已つて修學し、已つて習學すべし。若し修多羅を讀む者に遇はば、應當に諸の阿含諸部の中の義を請問し、習學多聞なるべし。若し摩多羅迦・應利衆經・[三二]憂陀那・波羅蜜延、[三三]法句を讀む者に遇

※佛を禮敬する法。

◎比丘に詣づる法。

【二六】摩多羅迦＝論藏のこと。分別法施品第十三に出づ。
【二七】阿練若＝地相品第三に出づ。
【二八】納衣＝同上。
【二九】三衣＝一に安陀會衣、五條袈裟、二に鬱多羅僧衣、七條袈裟、三に僧伽梨衣・九條乃至二十五條袈裟を云ふ。
【三〇】阿毘曇＝入初地品第二に出づ。
【三一】阿婆陀那＝Avadāna 譬喩と譯す。十二部經の一、譬

園を解く。在家は則ち他を侵惱するを以つて貴と爲し、出家は則ち他を利益するを以つて貴と爲す。在家は則ち財施を貴び、出家は則ち法施を貴ぶ。在家は則ち魔[二一]幢を持ち、出家は則ち佛幢を持つ。在家は歸處有り、出家は諸の歸處を壞す。在家は身を增長し、出家は則ち身を離る。在家は深榛に入り、出家は深榛を出づ。

*復た次に、

又出家の者に於て、　心應に深く貪慕すべし。

是の在家の菩薩、是の如く出家の功德を思惟して、出家の者に於いて心、應に貪慕すべし。我れ何の時にか當に出家することを得て是の如き功德有ることを得ん。我れ何の時にか當に出家することを得て次第に沙門の法を具行し、則ち戒を說き、[二二]布薩・[二三]安居・[二四]自恣、次第して坐すべけん。我れ何の時にか當に聖人の著くる所の戒・定・慧・解脫・解脫知見の熏修の法衣を得べけん。何の時にか當に聖人の相を持することを得べけん。何の時にか當に閑林に靜住することを得べけん。何の時にか當に持鉢、乞食して得と不得と、若しは多、若しは少、若しは美、若しは惡、若しは冷、若しは熱、次第に而も受け、趣かに以つて身を支ふること瘡に塗り、車に膏するが如くなることを得べけん。何の時にか當に世の八法に於いて心に憂喜無きことを得べけん。何の時にか六情を[二五]關閉すること、狗・鹿・魚・蛇・猴・鳥を繫ぐが如きことを得べけん。狗は聚落を樂しみ、鹿は山澤を樂しみ、魚は池沼を樂しみ、蛇は穴處を好み、猴は深林を樂しみ、鳥は虛空に依り、眼・耳・鼻・舌・身・意は常に色・聲・香・味・觸・法を樂む。是れ凡夫の淺智弱志の能く降伏する所に非ず。唯だ智慧・堅心・正念有つて、乃ち能く六情の寇賊を摧伏して患を爲さしめざれば自在にして畏れ無し。何の時にか當に坐禪を樂欲し、經法を誦讀して、樂つて煩惱を斷じ、樂つて善法を修し、樂つて弊衣を著け、足ることを趣して體を障へ、昔、俗に在つて多く放逸を行ぜしことを念ずべけん。今は自利を得、又他を利するが故に當

[二一] 幢＝正藏には憧とあれども今三本による。

※出家への貪慕。

[二二] 布薩＝說戒に同じ。調伏品第七に出づ。

[二三] 安居＝Varṣa 坐夏、坐臘、雨安居とも云ふ。印度の僧徒の雨期三ケ月間一切外出を禁ぜられ、坐禪修學するを云ふ。

[二四] 自恣＝梵語 Pravāraṇa 鉢剌婆剌拏、自恣(舊)、隨意(新)と譯す。雨安居の竟日七月十六日淸衆集り、各自己が罪を他比丘に隨意にあげしめて懺悔するを云ふ。

[二五] 六情＝六根の舊譯。

行ふが故に速に老ひ、出家は善法を行ずるが故に少壯なり。在家は放逸にして死を爲し、出家は智慧の命有り。在家は則ち欺誑、出家は則ち眞實なり。在家は則ち多求、出家は少求なり。在家は則ち雜毒の漿を飮み、出家は則ち甘露の漿を飮む。在家は多く侵害し、出家は侵害無し。在家は則ち衰耗し、出家は衰耗無し。在家は毒樹果の如く、出家は甘露果の如し。在家は則ち怨憎和合し、出家は則ち怨憎會苦を離る。在家は則ち愛別離苦し、出家は則ち親愛和合す。在家は則ち癡重く、出家は則ち癡輕し。在家は則ち淨行を失し、出家は則ち淨行を得。在家は則ち深心を破り、出家は則ち深心を成ず。在家は則ち救無く、出家は則ち救有り。在家は則ち孤窮し、出家は孤窮ならず。在家は則ち[19]舍無く、出家は則ち舍有り。在家は則ち歸無く、出家は則ち歸有り。在家は則ち瞋多く、出家は則ち慈多し。在家は則ち重擔あり、出家は則ち擔を捨つ。在家は則ち事務盡くる無く、出家は則ち事務有ること無し。在家は則ち[20]罪、會し、出家は則ち福、會す。在家は則ち苦惱あり、出家は則ち苦惱無し。在家は則ち熱有り、出家は則ち熱無し。在家は則ち諍ひ有り、出家は則ち諍ひ無し。在家は則ち染著あり、出家は染著無し。在家は我慢有り、出家は我慢無し。在家は財物を貴び、出家は功德を貴ぶ。在家は災害有り、出家は災害を滅す。在家は則ち滅失し、出家は則ち增益す。在家は則ち得易く、出家は則ち遇ひ難し。千萬劫の中、時に乃し一たび得。在家は則ち行じ易く、出家は則ち行じ難し。在家は則ち流れに順じ、出家は則ち流れに逆らふ。在家は則ち流れに漂ひ、出家は則ち栰に乘る。在家は則ち煩惱の爲めに漂され、出家は則ち橋梁有つて自ら度る。在家は是れ此岸、出家は是れ彼岸。在家は則ち纏縛せられ、出家は纏縛を離る。在家は結恨を壞き、出家は結恨を離る。在家は官法に隨ひ、出家は佛法に隨ふ。在家は事故有り、出家は事故無し。在家は苦果有り、出家は樂果有り、在家は則ち輕躁、出家は則ち威重なり。在家は伴は得易く、出家の伴は得難し。在家は婦を以つて伴と爲し、出家は堅心を伴と爲す。在家は則ち圍に入り、出家は則ち

【一九】舍無く＝歸託するところ無きをいふ。

【二〇】罪會す＝罪の會集すること。

出家は則ち五欲の泥を出づ。在家は[一八]淨命を得ること難く、出家は淨命を得ること易し。在家は則ち怨賊多く、出家は則ち怨賊無し。在家は則ち惱礙多く、出家は則ち惱礙無し。在家は是れ憂處、出家は是れ喜處、在家は是れ惡道の門、出家は是れ利益の門。在家は是れ繫縛、出家は是れ解脫。在家は則ち畏を雜え、出家は則ち畏無し。在家は鞭杖有り、出家は、鞭杖無し。在家は刀矟有り、出家は刀矟無し。在家は悔熱有り、出家は悔熱無し。在家は多く求むるが故に苦なり。出家は求むること無きが故に樂なり。在家は則ち戲調、出家は則ち寂滅なり。在家は是れ愍むべく、出家は愍むべきこと無し。在家は則ち愁悴、出家には愁悴無し。在家は則ち卑下、出家は則ち高顯なり。在家は則ち熾然、出家は則ち寂滅なり。在家は他を爲し、出家は自ら爲す。在家は少勢力、出家は多勢力なり。在家は垢門に隨順し、出家は淨門に隨順す。在家は刺棘を增し、出家は刺棘を破る。在家は小法を成就し、出家は大法を成就す。在家は不善を作し、出家は則ち善を修む。在家は則ち悔有り、出家は則ち悔無し。在家は淚乳血海を增し、出家は淚乳血海を竭す。在家は則ち諸佛・辟支佛・聲聞の爲めに呵賤せられ、出家は則ち諸佛・辟支佛・聲聞の爲めに稱歎せらる。在家は則ち足るを知らず、出家は則ち足るを知る。在家は則ち魔喜び、出家は則ち魔憂ふ。在家は後に衰有り、出家は後に衰無し。在家は則ち破れ易く、出家は則ち破れ難し。在家は是れ奴僕、出家は則ち主たり。在家は永く生死に在り、出家は究竟して涅槃す。在家は則ち坑に墮ち、出家は則ち坑を出づ。在家は則ち黑闇、出家は則ち明顯なり。在家は諸根を降伏すること能はず、出家は則ち能く諸根を降伏す。在家は則ち傲誕、出家は則ち謙遜なり。在家は則ち鄙陋、出家は則ち尊貴なり。在家は由る所有り、出家は由る所無し。在家は則ち多務、出家は則ち小務なり。在家は則ち果小、出家は則ち果大なり。在家は則ち諂曲、出家は則ち質直なり。在家は則ち多憂、出家は則ち多喜なり。在家は箭の身に在るが如く、出家は身、箭を離れたるが如し。在家は則ち病有り、出家は則ち病愈ゆ。在家は惡法を

【一八】淨命＝邪命に對する語。清淨（聖）なる生活をいふ。

を以つて不善の事を起すと。又佛法に開有れば、是の人或は能く自ら過罪を除く。正念の因緣をもつて法位に入ることを得ん。若し入らば必定して阿耨多羅三藐三菩提に在らん。又佛言ふが如し、唯だ智慧有れば煩惱を破るべしと。又復た說きたまはく、應に妄に人を稱量すべからず、若し稱量せば則ち自傷とならん。唯だ佛の智慧のみ乃ち能く明了なり。此の如きの事は我が知る所に非ずと。卽ち破戒の人の中に於いて瞋恚輕慢の心を生ぜざれ。復た次に、

※菩薩若し寺に入らば、　應に諸の威儀を行ずべし。
恭敬して而も禮拜し、　諸の比丘を供養せよ。

是の在家の菩薩、若し佛寺に入らんに、初め入らんと欲するの時、寺門の外に於いて五體を地に投じて、應に是の念を作すべし。此は是れ善人の住處、是れ空行者の住處、無想行者の住處、無願行者の住處なり。此は是れ慈悲喜捨を行ずる者の住處、此は是れ正行正念者の住處なり。若し諸の比丘の威儀・具足・視瞻・安靜にして、衣鉢を攝持し、坐臥・行止・寤寐・飲食・言說・寂默・容儀・進止・皆觀察すべきを見、若し比丘四念聖所行處[一六]を修行し、持戒清淨にして經法を讀誦し、思を精しうて坐禪するを見ば、見已つて恭しく肅敬心をもつて禮拜し、親近し、問訊して應に是の念を作すべし。

◎若し我れ恒沙劫に、　常に天祀の中に於いて、
大いに施して休廢せざるも　一の出家には如かず。

是の菩薩、爾の時に應に是の念を作すべし。我れ法の如く財を求め、恒河沙等の劫に於いて常に大施を行ず。是の諸の施福も猶尚發心出家には如かず。何に況んや實有らんや。何を以つての故に在家は則ち無量の過惡有り。出家は能く無量の功德を成ず。在家は則ち憒鬧なり。出家は則ち閑靜なり。在家は則ち垢に屬す。出家は則ち屬すること無し。在家は是れ惡行の處、出家は是れ善行の處、在家は則ち諸の塵垢に染せられ、出家は則ち諸の塵垢を離る。在家は則ち[一七]五欲の泥に沒し、

※入寺の作法。

【一六】四念聖所行處＝四念處なり。入初地品第二を見よ。

◎在家出家の比較。

【一七】五欲＝阿惟越相品第八に出づ。

身及び善根を敗れば、命終して惡道に墮す。
外、詐つて威儀を現じ、遊行して賢聖に似たり。
但だ口に言說有るは、雷の而も雨無きが如し。
諸の心所行の處、錯謬せば知るを得ること難し。
是の故に諸の衆生は、妄に度量すべからず。
唯一切知有らば、悉く諸の心心の、
微密所行の處を知らん。是の故に衆生を量す。
佛言く、我と等しきものは、乃ち能く衆生を量せよ。
佛の是の如き說の若きは、誰か能く人を籌量せん。
若し外の威儀を見て、其の內德を稱量せば、
自ら其の善根を敗ること、水の自ら岸を崩すが如し。
若し此の錯謬に於てせば、則ち大業障を起す。
是の故に此の人に於て、應に輕賤を起すべからず。

是の故に在家の菩薩は、應に破戒の人に於いて輕慢瞋恚を起すべからず。又持戒、破戒の白衣の人は與に同じく住せされ。何に由つてか知ることを得ん。我れ若し此の事に於いて分別明了せんと欲せば則ち罪障を起す。罪障の因緣の故に千萬劫に於いて諸の苦分を受く。無行經の中に說くが如し。又、大乘經の中に、佛、[一四]郁伽羅長者に告げたまはく。是の如き在家の菩薩は應に破戒の比丘に於いて憐愍の心を生ずべし。是の人、垢行・惡行・不善なり。何を以つての故に、是の人、如來善寂滅聖主の法衣を[一五]被りて自ら善く輭せず、諸根を調伏すること能はず、敗壞の行を行ずと。又佛、經の中に說きたまはく、未學を輕んぜされ。此れ人の罪に非ず。是れ煩惱の罪なり。此の人异の煩惱

【一四】郁伽羅＝Ugra 具さに郁伽羅越と云ふ。知家患品第六註參照。
【一五】被＝正藏は披に作る。今三本に據る。

の念を作すべし。是の戒は必定して阿耨多羅三藐三菩提に住することを得。何を以ての故に。曾て聞く必定の菩薩にして罪を起す者有り。過去十萬劫に菩薩有りて、[八]漏盡の阿羅漢の名づけて阿羅漢と爲すを誹謗せり。又聞く、必定の菩薩にして此の劫前三十一劫に於いて、矛を以て[九]須陀洹を刺す。又此の[一〇]賢劫の中に菩薩有つて、[一一]拘樓孫佛を誹謗して、何ぞ[一二]禿人有つて而も當に道を得べきやと言ふを聞く。是の如き等の衆生は知ることを得べきこと難し。是の故に我れ此の事に於いて何ぞ知を用ふることをせん。得失好惡は彼れ自ら作つて自ら受く。何ぞ我れ預らん。我れ今若し實に彼の事を知らんと欲し、或は自ら傷害して衆生を籌量するは、佛の許さざる所、經中に説くが如し。佛、阿難に告げたまはく、若し人他を籌量せば卽ち自ら身を傷く。唯だ我れ衆生を籌量することを得べし。[一三]我と等しき者は亦應に籌量すべし。説くが如し。

瓶に蓋有るも亦空、　蓋無きも亦復た空、
瓶に蓋有るも亦滿、　蓋無きも亦復た滿、
當に知るべし諸の世間に、　此の四種の人有り。
威儀及び功德、　有無も亦是の如し。
若し一切智に非ざれば、　何ぞ能く人を籌量せん。
寧ろ威儀を見て、　便ち其の德を知るを以てせんや。
正智にして善心有るを、　名づけて賢人の相と爲す。
但だ外の威儀を見て、　何に由つてか其の內を知らんや。
內に功德の慧有るも、　外に威儀無きことを現す。
遊行して知無き者は、　灰を以つて火を覆ふが如し。
若し外を以つて內を量らば、　輕賤の心を生ず。

【八】漏盡＝漏卽ち煩惱の盡きしこと。
【九】須陀洹＝調伏品第七に出づ。
【一〇】賢劫＝諸佛出世の時代を分ける中、過去七佛中の後の四佛出世の時代をいふ。
【一一】拘樓孫佛＝過去佛の一。
【一二】禿人＝禿頭の意味で愚人のこと。
【一三】佛たらざるものは他心を觀察し得ざるをいふ。

ることを得難し。諸佛の種種の煩惱・惡賊・惡行を呵罵したまふこと如實に理有り。是の如く思惟して應に破戒の人を輕賤すべからず。又、是の念を作さく、若し我れ都て瞋恚、輕慢の心を離るること能はずんば、應に自ら思惟すべし、佛法は無量なること猶大海の如し。或は開通すること有れども而も我れ知らず。大乘決定王經の中の如し。佛、阿難に告げたまはく。或は比丘有つて根鈍闇塞にして心明了ならず。諸法の相に達せず。常に有想無想を念じて法の中に而も有想を取り、男女の想を生じ、罪礙の想を生じ、垢想を生じ、淨想を生ず。是の如き想を生ずる者を名づけて鈍根と爲す。心明了ならざれば則ち罪有りと爲す。阿難よ、若し人一切の法の中に善く解すること能はざるを名づけて不了と爲す。一切の諸法は初より以來た、本體性相常に不可得なり。是の人、是の如きの事を知らずして、是の諸想を生ずるときは則ち外道と差別有ること無し。阿難よ、我が說く所の法は皆開通有つて明了淸淨なり。此の中に罪も無く、亦罪者も無し。阿難よ、罪を疑悔・愚癡・闇冥に名づく。罪者を衆生想・我想・命想・人想を生ずるに名づく。皆[五]身見に因るを名づけて罪者と爲す。我が法中に於いて此の如き人無し。若し我が法中に定んで實に我・衆生・命・人・身見等有らば、我が法に開有りとは言はじ、是れ開せざるに非ずや。我が法は本より已來、常に淸淨明了なり。復た次に阿難よ、若し決定して罪有り、受罪の者有らば則ち身卽是れ[六]神卽ち常見に墮すれば則ち佛道無し。若し身、神に異らば卽ち斷見に墮す、亦佛道無し。是の如くんば六十二見皆是れ菩提なるべし。但だ是の事然らず。是の故に阿難よ、我れ大衆の中に於いて師子吼して說いて而も畏るる所の言無し。我が法は開有り、開有らざるに非ず。從本以來、常に淸淨明了なればなり。阿難よ、若し罪定んで有らば則ち畢竟して涅槃無ければ、我は則ち我が法に開有りと言はず。阿難よ、我が法は實に本より已來た淸淨明了なり。是の故に我が弟子、心を降して安隱にして疑悔有ること無かれ。諸の罪惡無く淸淨に道を行ぜよ。菩薩は應に是の如く思惟して應に破戒の者を瞋恚すべからず。又是

【四】身見＝無我なるを知らずして自我と所有とに執着するをいふ。五見の一。
【五】神＝數論の神我の如きをいふ。一般に靈魂說の如く常一主宰の我體ありとの主張をいふ。
【六】常見＝見とは梵語 Darśana? Dṛṣṭi の譯。是は正邪に通じ用ひられ、八正道の一たる正見はその正の場合なれども、一般には外道又は偏邪の見解主張に用ひらる。今は後者の例にして、常見とは一切事物は實有なり常なりと執するを云ひ、斷見とはその反對に一切は空無なりと執するを云ふ。
【八】六十二見＝阿惟越致相品第八に出づ。

丘、身口の業淨く、心行直善にして、衆惡無き者に親近すべしとなり。「深心愛敬」とは、上の直心、善行持戒の比丘、諸の功德を成就する者に於て、應に最上の恭敬を生じ、深心に愛樂すべしとなり。

*問うて曰く、在家の菩薩は若し持戒の比丘の功德を成就するに於て、愛敬の心を生せば、應に破戒の比丘に於いて輕恚の心を生ずべきやと。答へて曰く、

若し破戒の者を見るとも、　　應に輕恚を起すべからず。

在家の菩薩、若し破戒雜行の比丘の威儀具らず、所行穢濁にして瑕疵を覆藏し、梵行有ること無くして自ら梵行ありと稱するを見るとも、此の比丘に於いて應に輕慢して瞋恚の心有るべからず。

問うて曰く、若し瞋恨せずんば、應に何の心をか生ずべきやと。答へて曰く、

應に憐愍の心を生じて、　　諸の煩惱を訶責すべし。

在家の菩薩、若し破戒の比丘を見ば、應に瞋恨輕慢を生ずべからず。應に憐愍利益の心を生ずべし。是の念を作さく、咄なる哉、此の人、佛の妙法に遇ひ、地獄・畜生・餓鬼・色・無色界・邊地の生處を離るるを得て、諸根具足して聾瘂ならず、頑鈍ならず、佛の妙法に値ひ、別して好醜を識り、心に正見を存して義理を解知す。人身得難きこと、大海の中に一眼の龜あり、頭板孔に入るが如し。生じて人中に在ること倍して此よりも難し。既に佛法を聞き、能く諸惡を滅し、諸の苦惱を度し、正智に至ることを得て、諸の資生所有の多所を捨て、永く親族を割き、顧戀する所無し。若しは凡庶に生じ、或は種姓に在り、佛語を信ずるが故に能く捨てて出家す。常に破戒の罪を聞けり。所謂、自ら其の身を賤め、智に訶責せられ、惡名流布して常に疑悔を懷き、死して惡道に墮す。此の事を聞くことを得て而も猶破戒せんや。十善道を行じて、乃ち人身を得たり。而も法の如く善く用ひて、以て自ら利益すること能はず。咄なる哉。三毒は其の力甚だ惡く、常に衆生を陵して捨離す

※破戒の比丘を愛敬せよ。

を離れ、刀杖を棄捨し、常に瞋恚無く、慚愧心有つて衆生を慈悲す。我れ某甲、今一日一夜殺生を遠離し、[二]刀杖を棄捨して瞋恚有ること無く、慚愧心有つて衆生を慈悲せん。是の如きの法を以つて聖人に隨學す。諸の聖人の如きは常に不與取を離れ、身行清淨にして受けて足ることを知る。我れ今一日一夜、劫盜、不與取を遠離し、清淨自活を受けんことを求めん。是の如きの法を以て聖人に隨學す。諸の聖人の如きは常に婬泆を斷じ、世樂を遠離す。我れ今一日一夜、婬泆を除斷し、世樂を遠離し、梵行を淨修せん。是の如き法を以て聖人に隨學す。諸の聖人の如きは常に妄語を離れ、眞實に語り、正直に語る。我れ今一日一夜、妄語を遠離して眞實に語り、正直に語らん。是の如きの法を以て聖人に隨學す。諸の聖人の如きは常に酒を遠離す。酒は是れ放逸の處なり。我れ今一日一夜酒を遠離す。是の如き法を以て聖人に隨學す。諸の聖人の如きは常に歌舞・作業・花香・瓔珞・嚴身の具を遠離す。我れ今一日一夜歌舞・作樂・華香・瓔珞・嚴身の具を遠離せん。是の如き法を以て聖人に隨學す。諸の聖人の如きは高廣の大床を離遠し、[三]小榻に處在し、草蓐を座と爲す。我れ今一日一夜高廣の大床を遠離し、小榻に處在し、草蓐を座と爲さん。是の如き法を以て聖人に隨學す。諸の聖人の如きは常に中を過ぎて食せず、非時行、非時食を遠離す。我れ今一日一夜、中を過ぎて食せず、非時行、非時食を遠離せん。是の如き法を以て聖人に隨學す。說くが如し。

殺と盜と淫と妄語と、　飲酒と及び華香と
瓔珞と歌舞等と、　高床と中を過ぎて食するとは、
聖人の捨離する所、　我れ今亦是の如し。
此の福因緣を以て、　一切と共に成佛せん。

「持淨戒の比丘に親近す」とは、在家の菩薩が、應に諸の比丘の盡く能く清淨の禁戒を護持して、功德成就し、衆惡を防遠する者に親近すべしとなり。「戒の善因緣を以て」とは、又應に持戒の比

【二】以下八齋戒を擧ぐ。八齋戒とは殺生、偸盜、邪婬、妄語、飮酒の五戒に塗飾香鬘歌舞觀聽、眠坐高廣嚴麗牀座、食非時食の三戒を加へしものをいふ。食非時食は齋なるを以て八齋戒と云ふ。

【三】小榻＝小さな腰掛。

薩の行法に於いて未だ勢力を得ず。是を以つて未だ此の物を捨つること能はず。後に勢力を得て善根成就し、心に堅固なることを得ば當に以て相與ふべし」と。復た次に

若し衆和合せず、　　經法の事を斷ぜば、
菩薩は應に力に隨つて、　　方便して絶えざらしむべし。

衆僧或は事緣を以つて諍競乖散して、法事廢すること有らんに、在家の菩薩は應に勤心に方便して彼此の間、心に偏る所無く、若しは財物を以て、若しは言說を以て、禮敬、請を求めて還つて和合せしむべし。或は乏少の衣食の因緣を以てし、或は邪見の者の橫に障礙を作し、或は說法の者、利養を求めんと欲し、或は聽法の者、心に恭敬せずんば、在家の菩薩は此の事の中に於いて宜しきに隨つて方便して、若しは財物を以てし、若しは言說を以てし、意を下して請を求め、法事をして廢せざらしめよ。法事、廢せずんば是を佛法の燈を然して十方三世の諸佛を供養すと爲す。

*復た次に、

齋日に八戒を受け、　　淨戒の者に親近し、
戒善の因緣を以て、　　深心に愛敬を行ず。

「齋日」とは月の八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・三十日と及び三忌を遮するなり。三忌とは十五日を一忌と爲し、冬至より後の四十五日なり。此の諸の惡日は多く鬼神有つて侵剋縱暴す。世人、守護日たるの故に中を過ぎて食せず。佛、因つて敎へて一日の戒を受けしむ。既に福德を得たり。諸天來下して世間を觀察し、之を見て歡喜すれば則便護念す。在家の菩薩は諸の小事に於て猶尙增益す。何に況んや先に此の齋有つて而も隨順せざらんや。是の故に應に一日の齋法を行ずべし。既に自利を得ば亦能く人を利す。

◎問うて曰く、齋法とは云何と。答へて曰く、應に是の言を作すべし。諸の聖人の如きは常に殺生

※在家菩薩と齋戒。

◎齋法。

卷の第八

(一)入寺品　第十七

●是の如く在家の菩薩は應に諸事の中に於いて貪著の心、我我所の心を生ずべからず。何を以ての故に、貪著して捨て難き所の物に隨つて、法は應に施與すべし。若し能く施與せば則ち此の過を除く。菩薩は是の如く貪著慳惜の心有ること無くんば、以て家に處るべし。

問うて曰く、在家の菩薩或は貪惜愛著の物有つて、來り求むる者有らん、此れ應に云何かすべきやと。答へて曰く、

貪著する所の物に於いて、　來つて求索する者有らば、
當に自ら心を勸喩して、　即ち施して慳惜すること勿るべし。

菩薩、貪惜する所の物若し乞人有りて急に從つて求索し、「汝此の物を以つて我に施與せば速に成佛することを得ん」と。菩薩は卽時に應に自ら勸喩して之を施與して、是の如く思惟すべし。若し我れ今此の物を捨てずんば、此の物必ず當に我を遠離すべし。設ひ死時に至るも我に隨つて去らず。此の物則ち是れ遠離の相なり、今阿耨多羅三藐三菩提の爲めに、檀波羅蜜を具足せんがための故に施與せば、後、死時に至るも、心に悔有ること無からん。經に說かく、「不悔の心は死して必ず善處に生ず」と。是の大利を得、云何か捨てざらん。是の如く自ら勸めて猶貪惜せば應に乞者に辭謝すべし。言く、

我れ今是れ新學、　善根未だ成就せず、
心未だ自在を得ず、　願くは後に當に相與ふべし。

應に乞者に辭謝して言ふべし、「瞋恨を生ずること勿れ、我れは新發意なり。善根未だ具せず。善

【一】この品は主として在家の菩薩に對し、一切の貪着を離れ、齋戒を守り破戒をも敬愛し、入寺の法を修して、無上菩薩を得んことを說く。
◎貪著を離れよ。

彼れは我が來る處を知らず、我れは彼れが來る處を知らず。是の子は我が所有に非ず。何爲ぞ故無きに橫に愛縛を生ぜんやと。說くが如し。

彼我相ひ知らず、　來る所と所去の處とを。
彼我云何ぞ親んで、　而も我所の心を生ぜんや。

復た次に無始の生死の中に、一切の衆生は曾つて我が子爲り、我れも亦曾つて彼れが子爲り。有爲法の中に決定して此は是れ我が子、彼は是れ他の子といふこと有ること無し。何を以つての故に、衆生は六道の中に於いて轉輪して互に父子と爲れり。說くが如し。

無明は慧眼を蔽ひ、　數數生死の中に、
往來して作す所多く、　更に互に父子と爲り、
世間の樂に貪著して、　勝事有ることを知らず。
怨、數知識と爲り、　智識數怨と爲る。

是の故に我れ方便して憎愛の心を生ずること莫かれ。何を以ての故に、若し善知識有つて常に種種に利益を求めんに、若し怨賊有れば常に種種無益の想を生ず。此の憎愛の心有るときは則ち諸法平等の想に通達することを得ず、心高下なる者は死して後、邪處に生じ、正行の者は正行の處に生ず。是の故に我れ應に邪行を行ずべからず、衆生に於いて平等を行じて當に平等の薩婆若を得べし。

り。猛火聚の想、刀輪の想、草炬の想なり。復た三想有り、無利の想、刺棘の想、惡毒の想なり。復た三想有り。陵上の想、覆映の想、貪著の想なり。復た三想有り。恨の想、鞭杖の想、刀矟の想なり。復た三想有り。忿恚の想、諍訟の想、打棒の想なり。復た三想有り。怨憎會の想、離愛の想、鬧の想なり。要を取つて之を言へば是れを以て一切臭惡不淨の想、一切衰濁の想、是れ一切不善根の想なり。是の故に在家の菩薩は妻子に於いて是の如き想を見、應に厭離の心を生じ、出家して善を修し、善を爲すべし。若し出家すること能はずんば、應に妻に於いて諸の惡業を起すべからず。

*復た次に、

若し子に於いて偏愛あらば、　即ち智力を以つて捨すべし。
子に因つて平等を行ぜば、　普く諸の衆生を慈しまん。

在家の菩薩、若し自ら子に於いて愛心偏に多きことを知らば、即ち智力を以つて思惟して捨離せよ。「智力」といふは應に是の如く念ずべし。菩薩の平等の心には乃ち阿耨多羅三藐三菩提有り。高下の心には則ち菩提無し。是の阿耨多羅三藐三菩提は一相無相に從つて得べし。別異の相に從つて得ず。我れ今、阿耨多羅三藐三菩提を求めんに、若し子に於いて所愛の心偏に多きときは、即ち高下有りて平等と名づけず。即ち是れ別相にして是れ一相に非ず。若し是の如くんば阿耨多羅三藐三菩提を去ること則ち甚だ遠しと爲す。是の故に我れ應に子に於いて偏に愛心を生ずべからず。爾の時、子に於いて應に三の想を生ずべし。一には我れに於いて賊爲り。佛は等慈を說きたまひて不等を破せしむ。愛心偏に多きが故に。二には賊害爲り。是の子に因るが故に諸の善根を破して正智の命を遮す。三には我れ是の子に因つて逆道の中に行きて順道を行かずと。即時に子に因つて諸の衆生に於いて等しく慈心を行ずべし。應に是の念を作すべし。子は餘處從り來り、我も亦餘處從り來る。子は異處に至り、我れ異處に去る。我れは彼の去る處を知らず、彼れも我が去る處を知らず。

※子への三想等。

し。一には義趣有り。二には經說を見る。三には現の事を見る。應に父母妻子等の爲に、身口意の毫釐の惡業をも起すべからざれ。*復た次に、

菩薩は妻の所に於いて、　應に三の三想を生ずべし。
亦復三の三有り。　又復三の三有り。

在家の菩薩は應に三想を生ずべし。所謂る三とは妻は是れ無常の想、失の想、壞の想なり。又三想有り。是れ戯笑の伴にして後世の伴に非ず。是れ共食の伴にして受業果報の伴に非ず。是れ樂時の伴にして苦時の伴に非ず。又三想有り。是れ不淨の想、臭穢の想、可厭の想なり。又三想有り。是れ怨家の想、惱害の想、相違の想なり。又三想有り。羅刹想、毘舍闍鬼の想、醜陋の想なり。又三想有り。入地獄の想、入畜生の想、入餓鬼の想なり。又三想有り。重擔の想、滅の想、屬畏の想なり。又三想有り。非我の想、無定屬の想、假借の想なり。又三想有り。因つて身の惡業を起すの想、口の惡業を起すの想、意の惡業を起すの想なり。又三想有り。欲覺處の想、瞋覺處の想、惱覺處の想なり。又三想有り。枷杻の想〔三六〕鎖械の想、縛繫の想なり。復三想有り。持戒を遮するの想、禪定を遮するの想、智慧を遮するの想なり。復た三想有り。坑穴の〔三七〕想、羅網の想、圍合の想なり。復た三想有り。災害の想、疾病の想、衰惱の想なり。復た三想有り。罪の想、黑〔三八〕身の想、災雹の想なり。復た三想有り。病の想、老の想、死の想なり。復た三想有り。魔の想、魔處の想、相畏の想なり。復た三想有り。憂愁の想、懊惱の想、啼哭の想なり。復た三想有り。大豺狼の想、大摩竭魚の想、大猫狸の想なり。復た三想有り。黑毒蛇の想、鱣魚の想、奪勢力の想なり。復た三想有り。無救の想、無歸の想、無舍の想なり。復た三想有り。失の想、退の想、疲極の想なり。復た三想有り。賊の想、獄卒の想、地獄卒の想なり。復た三想有り。留の想、縛の想、結の想なり。復た三想有り。泥の想、流の想、漂(へう)の想なり。復た三想有り、械の想、鎖の想、黐粘(ちでん)の想なり。復た三想有

※妻への九十九想。

〔三六〕 想＝正藏には相なれども三本による。以下此の一節皆之に同じ。
〔三七〕 穴＝正藏に缺く。今明本による。
〔三八〕 身＝正藏には耳に作る。今三本による。

無く、家に在けば屬する所有り。物施し已れば畏るる所無く、家に在く者は畏るる所多し。物施し已れば菩提道を助け、家に在けば魔道を助く。物施し已れば盡くること有ること無く、家に在けば則ち盡くること有り。物施し已れば從つて樂を得、家に在けば從つて苦を得。施し已れば煩惱を捨て、家に在けば煩惱を增す。施し已れば大富樂を得、家に在けば大富樂を得ず。施し已るは大人の業、家に在くは小人の業なり。施し已るは諸佛の歎ぶ所、家に在くは愚癡の讃ずる所なり。*復た次に、

妻子、眷屬、　　及與(および)善知識に於いて、
財施及び生を畜ふる、　　應に幻化の想を生ずべし。
一切諸の行業、　　是れ則ち幻師爲(た)り。

在家の菩薩は妻子等に於いて當に幻化の想を生ずべし。幻化の事は但だ人目を誑すが如し。行業は是れ幻主なり。妻子等の事は久しからずして則ち滅す。經に説くが如し。佛、諸比丘に告げたまはく、諸行は幻化の如し。愚人を誑惑して實事有ること無し。當に知るべし、業に因るが故に有り。業盡くれば則ち滅すと。是の故に幻の如し。是の念を作すべし。

我れ彼が所有に非ず。　　彼れ我が所有に非ず、
彼我皆業に屬す。　　業に隨つて因緣有り。
是の如く正思惟して、　　應に惡業を起すべからず。

父母・妻子・親[三五]族・知識・奴婢(ぬび)・僮客等は我が爲に救ひを作し、歸を作し、趣を作すこと能はず。我に非ず、我所に非ず。五陰・十二入・十八界も尚我に非ず、我所に非ず。何に況や、父母、妻子等をや。我も亦彼が爲めに救ひを作し、歸と作り、趣と作ること能はず。我も亦業に屬し、業に隨つて受くる所、彼も亦業に屬し、業に隨つて受くる所なり。好惡の果報是の如し。三種もて籌量すべ

※妻子眷族に貪戀着無し。

【三五】族＝正藏は里に作る。今明本による。

た次に、

菩薩は求むる者に因つて、　　六波羅蜜を具す。
是の因緣を以つての故に、　　求むるものを見ば應に大いに喜ぶべし。

六波羅蜜とは、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧なり。以つて求むる者に因つては能く具足することを得。是の利を以つての故に菩薩遙に求むる者を見れば心大いに歡喜して是の念を作す。福田を行ずること自然に而も至れり。我此の人に因つて六波羅蜜を具足することを得んと。所以は何ん。若し所施の物に於いて心に貪惜せざる、是を檀波羅蜜と名づく。阿耨多羅三藐三菩提の爲に施與する、是を尸羅波羅蜜と名づく。若しは乞者を瞋らざる、是を羼提波羅蜜と名づく。當に施を行ずるの時、慮らず、空しく心を匱うて退沒せざる、是を毘梨耶波羅蜜と名づく。若しは乞者に與へ、若しは自ら與ふる時、心定んで悔ひざる、是を禪波羅蜜と名づく。一切の法を得ず、而も布施を行じて果報を求めざるを以つて賢聖の如く著する所無し。是の布施を以つて阿耨多羅三藐三菩提に廻向する、是を般若波羅蜜と名づく。復た次に、

所施の物の果報、　　種種皆能く知る。
慳惜して家に在る者も、　　亦種種の過を知る。

所施の物の獲る所の功德利物、慳惜して家に在る所有る過惡、菩薩は此に於いて皆悉く了知す。*問うて曰く、若し施さば何の功德を得んや。若し惜みて家に在れば何の過咎有らんやと。答へて曰く、菩薩は眞の智慧を以つて是の如く知る。施與し已れば是れ我が物なり。家に在く者は我が物に非ず。物施し已れば則ち堅牢なり。家に在く者は堅牢ならず。物施し已れば後世に樂み、家に在れば少時樂む。物施し已れば守護を憂へず、家に在れば守護有り。[三四]若し物施し已れば愛心薄く、家に在けば愛を增長す。物施し已れば我所無し、家に在く者は是れ我所なり。物施し已れば屬する所

※檀波羅蜜。

【三四】若＝正藏には苦とあるも麗本による。

文飾を以つて莊嚴し、現に貴人と爲ると雖も、須臾に久しからずして莊嚴は還つて貧賤と作る。家は是れ變異なり。會ふものは必ず離散す。家は幻の如し。假借和合して實事有ること無し。家は一切の富貴を夢みるが如し。久しければ則ち還つて失す。家は朝露の如し。須臾にして滅失す。家は鍼蜜渧の如し。其の味は甚だ少し。家は棘叢の如し。五欲味を受くれども惡刺人を傷く。家は是れ嗎虫なり。善く覺觀せざれば常に人を唼食す。家は淨命を汚し、多く欺誑を行ず。家は是れ憂愁なり。心多く濁亂す。家は是れ衆共なり。王賊・水火・怨親に壞せらる。家は是れ多病なり。諸の錯謬多し。是の如く長者在家の菩薩は應當に是の如く善く家の過を知るべし。*復た△次に

菩薩は當應に　在家の過惡を知つて、
布施・持戒、　善好喜に親近すべし。
若し諸の乞人を見ば　應に五の三想を生ずべし。

在家の菩薩は應に是の如く家の過患を知つて、當に布施・持戒・善好を行ずべし。「布施」を捨貪心と名づく。「持戒」を身口業清淨と名づく。「善」を善攝諸根と名づく。「好喜」を同心歡樂と名づく。「五の三想」とは、乞食を見ば應に五の三想を生ずべきに名づく。初めに三とは善知識の想、轉身大富の想、裨助菩提の想なり。又三の想有り、慳貪を折伏するの想、一切を捨するの想、一切の智慧を貪求するの想なり。又三の想有り。如來の敎に隨ふの想、果報を求めざるの想、魔を降伏するの想なり。又三想有り。來つて求むる者を見ば眷屬の想を生じ、攝法を捨てざるの想、邪を捨て正を受くるの想なり。〔三三〕又三想有り、離欲想・修慈想・無癡想なり。今當に第五の三想を解すべし。菩薩は來り求むる者に因つて、三毒をして折り薄がしめ、所施の物を捨てて「離欲想」を生ぜしむ。求むる者に於いては樂の因緣を與ふるが故に瞋恨の心薄ぐを「修慈想」と名づく。是の布施をもて無上道に廻向すれば則ち癡心薄ぐ。是を「不癡想」と名づく。餘の想の義は應に是の如く知るべし。◎復

※家の過患を離く法。
△布施、持戒、好喜。

【三三】受正＝正藏には正字を缺く。明本による。

◎六波羅蜜。

*菩薩は是の如く學して應に家の過惡を知るべし。何を以ての故に。若し過惡を知るときは或は家を捨てて道に入り、又餘の人を化して家の過を知つて出家入道せしむ。

問うて曰く、「家の過」とは云何ん。答へて曰く、經の中に說くが如し。佛、郁迦羅[三三]に告げたまはく、家は是れ諸の善根を破す。家は是れ深棘刺林にして自ら出づることを得難し。家は是れ淸白の法を壞す。家は是れ諸の惡覺觀の住處なり。家は是れ弊惡不調の凡夫の住處なり。家は是れ一切不善所行の住處なり。家は是れ惡人所聚の會處なり。家は是れ貪欲・瞋恚・愚癡の住處なり。家は是れ一切苦惱の住處なり。家は是れ先世の諸の善根を消盡する處なり。凡夫は此の家の中に住して、應に作すべからずして而も作し、應に說くべからざるを而も說き、應に行ずべからざるを而も行ず。此の中に在りて住して、父母及び諸の師長を輕慢し、諸尊・福田・沙門・婆羅門を敬せず。家は是れ貪愛・憂悲・苦惱・衆患の因緣なり。家は是れ惡口・罵詈・苦切・刀杖・繫縛・考掠・割截の所住の處なり。未だ種ゑざる善根は種ゑず。已に種ゑたるは能く壞す。能く凡夫をして此の貪欲の因緣に在りて而も惡道に墮し、瞋恚の因緣、愚癡の因緣によりて而も惡道に墮し、怖畏の因緣によりて而も惡道に墮せしむ。家は是れ戒品を持せず、定品を捨離し、慧品を觀ぜず、解脫品を得ず、解脫知見品を生ぜず。此の家の中に於いて父母の愛を生じ、兄弟・妻子・眷屬・車馬は貪求を增長して厭足有ること無し。家は是れ滿つること難きこと海の流を呑むが如し。家は是れ足ること無きこと火の薪を焚くが如し。家は是れ息むこと無きこと覺觀相續して空中の風の如し。家は是れ後に惡有ること美食に毒有るが如し。家は是れ苦の性なり。怨の詐り親しむが如し。家は是れ障礙なり。能く聖道を妨ぐ。家は是れ鬪亂なり。種種の因緣共に相ひ違諍す。家は是れ多瞋なり。好醜を呵責す。家は是れ無常なり。久しと雖も失壞す。衣食等を求めて方便して守護す。家は是れ衆苦なり。家は是れ多疑の處なり。猶し怨賊の如し。家は是れ無我なり。顚倒貪著して假名を有と爲す。家は是れ技人なり。種種

※家の過患を解く。

【三三】郁迦羅＝Ugra。又郁迦に作り、具には郁迦羅越と云ふ。舍衛國長者の名。

何ぞ此れ等を用ひて而も共に事に從はんや。菩薩は衆生の惡罪除き難きことを知見せば、應に還つて是の念を作すべし。是れ等の惡人は少きに非ず。精進して能く住せしむることを得ること、所樂の法の如し。是れ等の爲めの故に、我れ當に心を加へて勉力て億倍の精進を勤行して後、大力を得て乃ち能く化すべし。此れ惡中の惡なり。難悟の衆生には大醫王の如く、小因緣を以つて便ち能く衆生の重病を療治せんと。菩薩は是の如く煩惱の病を除きて隨意所樂の功德に住せしむ。我れ重罪大惡の衆生に於いて倍々應に憐愍して深く大悲を起すべきこと、彼の良醫の多く慈心有りて、衆病を療治するに、其の病重き者には深く憐愍を生じて、勤めて方便を作して爲めに良藥を求むるが如し。菩薩は是の如く諸の衆生の煩惱病者に於いて悉く、應に憐愍すべし。惡中の惡、煩惱の重き者に於いては深く憐愍を生じ、勤めて方便を作し、心を加へて療治すべし。何を以ての故に、

菩薩は所住に隨つて、　衆生を開化せずして、
三惡道に墮せしむれば、　深く諸佛の責を致す。

菩薩は所住の國土・城邑・聚落・山間・樹下に隨つて、力めて能く衆生を饒益し、教化すべし。而も懈厭、嫌恨して世樂に貪著し、開化すること能はず、惡道に墮せしむれば是の菩薩は卽ち十方現在の諸佛の爲めに深く呵責せられん。甚だ慚恥すべし。云何か小因緣を以て而も大事を捨てん。是の故に、菩薩、諸佛のために呵責せられんことを欲せずんば、種種の諂曲重惡の衆生に於いて心應に沒すべからず、力に隨つて饒益し、應に諸の方便を以て勤心開化すべし。譬へば猛將の兵を將いて傷損する所多ければ、王は則ち深く責むるも〔諸の兵衆は知る所無きを以ての故に、王は之を責めさるが如し。

〔三二〕知家過患品　第十六

【三二】妻子眷族への愛著は一切家への執著による。卽ち家の過患は求無上菩提の最大の障閡なることを說く。

も亦應に修行すべし。復た次に在家の菩薩に所應の行法あり。

　應に利すべき衆生に隨つて、　法を説き而も教化せよ。

是の菩薩は諸の衆生に於いて乏しき所有るに隨つて皆能く施與す。若しは國土・城郭・聚落・林間、樹下に在らんに、是の中の衆生、利益する所に隨つて說法し、教化すべし。所謂る不信の者には爲めに信法を説く。不恭敬の者には爲めに禮節を説く。少聞の者の爲めには多聞の法を説く。慳貪の者の爲めには布施の法を説く。瞋恚の者の爲めには和忍の法を説く。懈怠の者の爲めには精進の法を説く。亂意の者の爲めには正念處を説く。愚癡の者の爲めには智慧を解說す。復た次に、

　諸の乏しき所の者に隨つて、　皆亦應に給足すべし。

諸の衆生乏少する所有らば皆應に給足すべし。人有つて富めりと雖も猶足らざること有り。乃至國王も亦應に乏少する所有るべし。是の故に先づ貧窮の者には財を施すと雖も、今更に乏少する所に隨つて而も之を給足すべしと説く。復た次に、

　諸の惡衆生有つて、　種種に惱事を加へ、
　諂曲にして憍逸を懷き　惡罵、輕欺誑、
　恩に背きて反復すること無く、　癡弊にして開化し難きも
　菩薩は心に愍傷して、　勇猛にして精進を加へよ。

諸の惡衆生は、種種の惡事を以つて菩薩を侵嬈す。菩薩は此に於いて心に懈厭すること無れ。應に是の念を作すべからず。是の如き惡人は誰か能く調伏し、誰か能く教化し、誰か能く勸勉して生死を度し、涅槃を究竟せしめん。誰か能く此と與(とも)に生死に往來せん。誰か能く此れと和合同事せん。諸惡理(ことわり)無し。誰か能く之を忍ばん。我意を止息して、復た共事せざらんや。我れ悉く捨遠して、復た共事せざらんや。亦、復た之と和合すること能はずば、是れ惡中の惡なり、返復有ること無し。

ず、乃至一草をも與ふるに非ずんば取らざれ。邪婬を離れて房内を厭惡し、遠外の色を防ぎて目に邪視せず、常に惡露を觀じて厭離の想を生じ、五欲は究竟して皆苦なりと了知すべし。若し妻欲を念ぜば亦應に除捨すべし。常に不淨を觀じて心に怖畏して結使に逼めらるることを懷ひ、欲を離れて著せず、常に世間は苦たり、無我なることを知つて應に是の願を發すべし。我れ何れの時に於いてか心中に當に欲想を生ぜざることを得べきと。況や復た身に行ずるをや。妄語を遠離し、樂（ねが）つて實語を行じて人を欺かず、心に相應し、有念安慧は見聞覺知の如くにして人の爲めに說く。法を以つて自ら處し、乃至命を失すとも、言詭異せざれ。酒は是れ放逸衆惡の門なり。常に應に遠離して口を過さざるべし。狂亂せず、迷醉せず、輕躁せず、驚怖せず、無羞ならず、戲調せず、常に能く一心に好醜を籌量せよ。是の菩薩、或る時は樂つて一切を捨て、而も是の念を作す。食を須ふる（もの）には食を與へ、飮を須ふる（もの）には飮を與ふべしと。若し酒を以て施すときには、應に是の念を生ずべし。今は是れ檀波羅蜜を行ずる時なり。所須に隨つて與へ、後には當に方便して敎へて酒を離れしめ、智慧を念ずることを得て不放逸ならしむべしと。何を以ての故に。檀波羅蜜の法は悉く人の願を滿たしむ。在家の菩薩は酒を以て施すとも是れ則ち罪無し。是の五戒の福德を以て阿耨多羅三藐三菩提に廻向し、五戒を護持すること重寶を護るが如く、自ら身命を護るが如くすべし。

*問うて曰く、是の菩薩は但だ應に五戒を護持して諸の餘の善業を護持せざるべきやと。答へて曰く、

菩薩は應に堅く、　總相五戒の中に住すべし。
餘の身口意の業も、　悉く亦復た應に行ずべし。

在家の五戒は已に其の義を說く。此の五戒を受くれば應に堅牢に住すべし。及び餘の三種の善業

り。又、五學處とも名づけらる。
【二九】 無＝正藏に缺くも今三本による。
【三〇】 三自歸は上の三歸のこと。

※餘の善業を說く。

貧者には施すに財を以つてし、　　畏者には無畏を施す。
是の如き等の功德は　　乃至堅牢なるに於てす。

「貧なるものに施すに財を以てす」とは、人有つて先世に福德を種ゑず、今、方便無くして資生儉少し。是の如きの人には力に隨つて給恤せよとなり。「無畏を施す」とは、種種の諸の怖畏、若しは怨賊の怖畏、飢餓の怖畏、水火寒熱等に於て、菩薩は此の衆の怖畏の中に於て諸人を救喩して、安隱歡悅ならしめ、怖畏無からしむ。是の如き功德最も堅牢なり。最も後に在る者には、諸の憂ふる者に於いて爲めに其の憂を除き、無力の者に於いては而も忍辱を行じ、慢・大慢等を離れ、諸の所尊に於いて深く恭敬を加へ、多聞の者に於いては常に親近を行じ、智慧の者に於いては善惡を諮問し、自ら行ずる所に於いては常に正見を行じ、諸の衆生に於いて不諂、不曲にして假愛を作さず、善を求めて厭くこと無く、多聞無量にして諸の施す所には堅心を作して成就せしめ、常に善人に與して而も共に從ひ事へ、惡人の中に於いては大悲心を生じ、善知識、非善知識に於いては堅固の善知識の想を作す。等心の衆生には要法を恪まず、聞く所の如き者には人の爲めに演說し、諸の法を聞く所には其の趣味を得、諸の五欲、戲樂の事の中に於いては無常想を生じ、妻子の所に於いては地獄の想を生じ、資生の物の所に於いては疲苦の想を生じ、產業の事に於いては憂惱の想を生じ、諸の求むる所に於いては破善根の想を生じ、居家の中に於いては牢獄の想を生じ、親族、知識には獄卒の想を生じ、日夜思量して何の利かあるの想を得、不牢の身に於いて牢身の想を得、不堅の財に於いて堅財の想を生ず。*復た次に

在家の法は五戒なり。　　心、應に堅牢に住すべし。

在家の菩薩は[三〇]三自歸を以つて上の諸の功德を行じ、應に堅く五戒に住すべし。「五戒」とは、是れ總じて在家の法なり。應に殺心を離れて衆生を慈愍すべし。自ら止足することを知つて他物を貪ら

【二一】九結＝結とは結集、繫縛の義、煩惱の異名なり。一に愛結、二に恚結、三に慢結、四に癡結、五に疑結、六に見結（身見・邊見・邪見等）、七に取結（見取見・戒禁取見の二）、八に慳結、九に嫉結なり。
【二二】聲聞十種力は詳かならず。
【二三】借＝正藏に缺く。今三本による。
【二四】脫＝正藏に缺く。今三本による。
【二五】名＝正藏には故に作るも三本による。
【二六】十力＝入初地品第二に出づ。
【二七】四無所畏＝又四無畏と云ふ。無畏とは佛の大衆中に於て法を說くに、畏るることなき德を云ふ。一に一切知無所畏、佛は一切知人として畏心なきを云ふ。二に漏盡無所畏、佛は一切煩惱を斷盡せりと明言して畏心なきを云ふ。三に說障道無所畏、四說盡苦道無所畏、詳くは四十不共法品に出づ。
※**五戒を說く。**
【二八】この品は五戒を中心として大乘菩薩行を明かす。五戒とは在家の人（優婆塞、優婆夷）の護持する戒なり。一に不殺生、二に不偸盜、三に不邪淫、四に不妄語、五に不飲酒な

世法に憂喜無く　　能く自利を捨てゝ
常に勤めて他利を行ずれば　　深く恩を知つて倍々報ず。

「世間の法」とは、利衰・毀譽・稱譏・苦樂なり。此の法の中に於いて心に憂喜無きなり。「自利を捨てゝ勤めて他利を行ず」とは、菩薩乃至未だ曾つて知識せざる無因[二九]無緣の者の所行の善行は、自利を捨て置いて彼の善を助成せよとなり。

※問うて曰く、自利を捨てゝ勤めて他利を行ずとは此の事然らず。佛說きたまふが如し。大いに人を利すと雖も應に自ら己が利を捨つべからず。說くが如し。人を捨てゝ以て一家を成し、一家を捨てゝ一聚落を成し、一聚落を捨てゝ一國土を成し、一國土を捨てゝ以て己身を成し、己身を捨てゝ以て正法の爲めにす。

先づ自ら己が利を成し、　然る後乃ち人を利す。
己が利を捨てゝ人を利せば　後に則ち憂悔を生ぜん。
自利を捨て、人を利して　自ら智慧爲りと謂ふ、
此れ世間の中に於いて　最も第一の癡と爲す、と。

答へて曰く、世間の中に於いて他の爲めに利を求むるすら猶、稱して善と爲し、以て堅心と爲す。況んや菩薩の行ずる所は世間に出過せり。若し他を利すといはゞ卽ち是れ自利なり。說くが如し。

菩薩は他事に於いて　心意劣弱ならず。
菩提心を發す者は　他利卽ち自利なり。

此の義初品の中に已に廣く說けり。是の故に汝が語は然らず。「深く恩を知つて倍々報ず」とは、若し人菩薩所作の好事に於いて應當に厚く報じ、又深く其の恩を知るべし。此は是れ善人の相なり。復た次に

※利他卽自利行なり。

【二九】七不退法＝とは威德乃至國威の增盛不退、長幼和順にして佛法興隆の基となるべき七法を云ふ。長阿含第二によれば、一、數々集會して正義を講論すること。二、上下和同して敎誡に違はぬこと。三、法を奉じ、忌を曉り、制度に違はぬこと。四、衆多の諸知識を護り、宜しく之に敬事すること。五、個々に正念を護り、孝敬を首とすること。六、淨梵行を修し、欲情に隨はざること。七、人を先にし、己を後にして名利を貪らざること。

【三〇】八大人覺＝菩薩、緣覺、聲聞の大力量人の覺りを云ふ。一に世間無常覺、二に多欲爲苦覺、三に心無厭足覺、四に懈怠墮落覺、五に愚痴生死覺、六に貧苦多怨覺、七に五欲過患覺、六に生死熾然苦惱無量覺なり。

貪欲を斷じ、能く瞋恚を斷じ、能く愚癡を斷じ、能く慢心を除き、能く諸見を除き、能く疑悔を除き、能く憍貴を除き、能く諸渇を除き、所歸の趣を破し、相續の道を斷じ、愛を盡し、欲を離れて寂滅涅槃なる、是の如き相を名づけて念法と爲す。空・無相・無願を以つて、不生・不滅・畢竟寂滅にして無比無示なり。念佛の義の中に說くが如し。又、念法に三種有り。佛法は是れ善說より、具足清淨に至るを、名づけて道と爲す。能く貪欲を斷じて寂滅涅槃に至るを、名づけて涅槃と爲す。空等、無比無示に至るを名づけて法體と爲す。又、「念僧」とは先に僧の功德を說くが如し。是の三寶を念じて決定心を得べし。是の如きの念を以つて佛道を求めて、而も布施を行ずる是を佛に歸依すと名づく。法を守護せんが爲めに而も布施を行ずる是を法に歸依すと名づく。是の布施を以て廻向心を起し、佛道を成ずる時、菩薩、聲聞僧を攝する、是を僧に歸依すと名づく。

五戒品　第十五

◎是の如く在家の菩薩は能く善人の業を修し、惡人の業を遠離すること說の如し。

善人の業を修起して　　　法の如く財を集め用ゆ。
堪ふれば則ち重任と爲し、　　　堪へざれば則ち受けず。

「善人の業」とは、略して善人の業を說く、自ら善利に住し、亦能く人を利するなり。「惡人の業」とは、自ら衰惱に陷り、人をして衰惱せしむるなり。「法の如く財を集めて用ゆ」とは、不殺・不盜にして人を誑欺せず、力を以て財を集め、法の如く之を用ひて三寶を供養し、老病等を濟恤するなり。「堪受して能く行ずる者は則ち重任と爲し、行ずるに堪へざる者は則ち不受なり」とは、若し菩薩今世の事及び後世の事に於いて若し自ら利し、若しは他を利せば、先に說く所の如く、必ず能く成立し、若し行ずるに堪へざることを知らば、此れ則ち不受なり。復た次に

【一七】　五蓋＝蓋とは蓋覆の義。心性を覆蓋して善法を生ぜざらしむる五法を云ふ。一、貪欲蓋、二、瞋恚蓋、三、睡眠蓋、四、掉悔蓋、五、疑蓋。

※念僧。

※この品は五戒を中心として大乘菩薩行を明かす。

◎善人惡人の業を分別す。

【一八】・六和敬法＝一に身和敬、禮拜等の身業を同じくす。二に口和敬、讃詠等の口業を同じくす。三に意和敬、信心等の意業を同じくす。四に戒和敬、戒法を同じくす。五に見和敬、空等の見解を同じくす。六に利和敬、衣食等を同じくす。これ或は行和敬、學和敬、施和敬と名づけらるることあり。要するに三業と戒、見及び之に行・利・學・施の何れかが加はるなり。

の義を說くが如し。「眞佛を念ず」とは色を以てせず、相を以てせず、生を以てせず、性を以てせず、家を以てせず、過去・未來・現在を以てせず、五陰・十二入・十八界を以てせず、見聞、覺知を以てせず、心意識を以てせず、戲論の行を以てせず、生滅住を以てせず、取捨を以てせず、憶念分別を以てせず、法相を以てせず、自相を以てせず、一相を以てせず、異相を以てせず、心の緣數を以てせず、內外を以てせず、取相、覺觀を以てせず、入出を以てせず、形色、相貌を以てせず、所行の威儀を以てせず、持戒・禪定・智慧・解脫・解脫知見を以てせず、[一六]十力、[一七]四無所畏の諸の佛法を以てせず。「實の如く佛を念ず」とは無量不可思議なり。行無く、知無く、我我所無く、憶無く、念無く、五陰・十二入・十八界を分別せず、形無く、礙無く、發無く、住無く、非住無く、色に住せず、受想行識に住せず、眼識に住せず、耳聲に住せず、耳識に住せず、鼻香に住せず、鼻識に住せず、舌味に住せず、舌識に住せず、身觸に住せず、身識に住せず、意法に住せず、意識に住せず、一切の諸緣に住せず、一切の諸相を起さず、一切の動念・憶想・分別等を生ぜず、見聞、覺知を生ぜず。隨つて一切の正解脫相を行じ、心相續せず、諸の分別を滅し、諸の愛恚を破り、諸の因相を壞し、先際・後際・中際を除斷す。究暢明了にして彼此有ること無し。動無きが故に喜無し。味を受けざるが故に樂無し。本相寂滅の故に熱無し。心に所營無きが故に解脫す。相、無色の故に無身なり。不受の故に受無く、無想の所に結無し。無行の故に無爲なり。無知の故に無識なり。無取の故に無行なり。不捨の故に不行に非ず。無處の故に無住なり。空の故に無來なり。不生の故に無去なり。一切の憶念、心、心數法及び餘の諸法は不貪・不著・不取・不受・不然・不識なり。先より來た不生にして生の相有ること無く、法性に攝在して眼色虛空の道に過ぎたり。是の如き相を名づけて眞の念佛と爲す。又、「*念法」とは佛法は是れ善說。今世の報を得るに定時有ること無し。善を觀察することを得べし。將に道智に至らんとするものは、內に初中後の善言・善義・善淳・善無雜を知つて淸淨を具足し、能く

【一三】　三明六通＝明とは智の法を知ること顯了なるに名づけ、通とは作用自在にして無礙なるに名づく。これ阿羅漢所具の德なり。三明とは一に宿命明、自身他身の宿世の生死の相を知るなり。二に天眼明、自身他身の未來世の生死の相を知ること、三に漏盡明、現在の苦相を知りて一切の煩惱を斷ずること。六通とは一に宿命通、二に他心通、三に漏盡通（以上略ぼ三明に同じ）、四に神足通、不思議に境界を變現する通力なり。五に天耳通、色界の耳根を得て聽聞無礙なるもの、六に他心通、他人の心念を知るに無礙なる通力をいふ。

【一四】　六捨＝善の心所の一、行捨なり。六識と相應するを六捨と云ふ。

【一五】　八解脫＝釋願品第五に出づ。

【一六】　二種の煩惱＝見惑、修惑の二なり。煩惱は梵語Kleśa の譯語。見惑とは迷理の煩惱、修惑は迷事の煩惱なり。

※念法。

ば終に無上心を發さしむべからず、設ひ或は發心すとも亦成就せざればなり。般若波羅蜜の中に尊者、須菩提の說く所の如し。已に正法の位に入れば無上心を起すこと能はず。何を以ての故に。是の人は生死に於いて已に障隔を作り、復た生死に往來せざればなりと。「無上心を發さしむるには先づ財施を以つて攝す」とは、衣服・飲食・臥具・醫藥・所須の物を以て攝するなり。出家の者は衣服・飲食・臥具・醫藥・雜香・塗香を以て攝す。在家の者には因緣を以て攝して親愛の心を生ぜしむれば言ふ所、信受す。然る後に法施をもて無上道の心を發さしむ。「果の僧」とは[一二]四向四果なり。「衆」とは佛法の中に於いて出家の相を受け、具さに諸戒を持して未だ果向有らざるなり。「不分別」とは是の如き僧は恩愛の奴を離るるを以ての故に名づけて「貴僧」と爲す。空・無相・無願を信樂して分別戲論せず、是の僧に依止するを名づけて僧に歸依すと爲す。「聲聞の功德を求めて解脫を證せず」とは、知りぬ、是の僧戒を持し、禪定を具足し、智慧を具足し、解脫を具足し解脫智見を具足し、[一三]三明六通を具足し、心に自在を得て大威德有り、世間の樂を捨てて魔の境界を出で、利譽、稱樂以て喜と爲さず、衰毀、譏苦以て憂と爲さず、常に[一四]六捨を行じ、[一五]八解脫を得、佛の敎ふる所に隨つて道を行ずること有る者、解脫有る者、一道を行ずる者、[一六]二種の煩惱を破して善く三界を知り、善く四諦に通じ、善く[一七]五蓋を除き、[一八]六和敬法に安住し、[一九]七不退法、[二〇]八大人覺を具足し、[二一]九結を捨離して[二二]聲聞十種の力を得。是の如き諸の功德を成就する[二三]僧を名づけて佛弟子衆と爲す。是の如く功德を求め、其の解脫を求めず。何を以ての故に。佛の[二四]無礙解脫を深心に、信樂するが故なり。是れを僧に歸依すと名づく。復た次に若し章句、文字の法を聞けば卽ち實相の法を念ずることを得るを名づけて法に歸命すと爲す。若し聲聞僧を見れば卽ち菩提心を發して諸の菩薩衆を念ずる、是を僧に歸依すと名づく。佛の形像を見て卽ち眞佛を念ず、是を佛に歸依すと[二五]名づく。

*問うて曰く、云何か名づけて眞佛を念ずと爲すやと。答へて曰く、無盡意菩薩經の中に念佛三昧

【一二】四向＝一に須陀洹向、又、預流向と云ひ、見道十五心の見惑を斷ずる位なり。向とは須陀洹果に向ふ因位なればなり。二に斯陀含向、又一來向と云ふ。欲界九品の修惑中前六品を斷ずる位なり。三に阿那含向。又、不還向と云ふ。欲界九品の修惑中後三品を斷ずる位なり。四に阿羅漢向、欲界・色界一切の修惑を斷ずる位なり。向の義は何れも前と同樣じ。

※眞念佛。

の故に受持し、修行して毀缺せしめざるなり。「大悲心」とは、苦惱の衆生を度せんと欲して、佛道を求めんが爲めに乃至夢中にも亦大悲を離れざるなり。「餘乘を貪らず」とは、深く佛道を信樂するが故に、聲聞、辟支佛乘を貪らざるなり。是の法有るが故に、當に知るべし、實の如く佛に歸依すといふことを。

*問うて曰く、云何か名づけて法に歸依すと爲すやと。答へて曰く、

説法の者に親近して　　一心に法を聽受し
念持して而も演説するを　　名づけて法に歸依すと爲す。

「説法」とは、佛の深法に於いて解説し、敷演し、善惡を開示し、諸の疑惑を斷じ、常に數數親近して其の所に往至し、供養し、恭敬して一心に聽受し、憶念力を以つて執持して忘れず、思惟し、籌量して義趣に隨順し、然る後、人の爲めに知るが如くに演説す。是の法施の功德を以つて佛道に廻向する、是を法に歸依すと名づくと。

●問うて曰く、云何が名づけて僧に歸依すと爲すやと。答へて曰く、

若し諸の聲聞の人　　未だ法位に入らざる者に
無上心を發さしめ　　佛の十力を得せしむ。
先づ財施を以て攝し、　後には乃ち法施を以てす。
深く(二)四果の僧、　不分別の貴衆を信じ、
聲聞の功德を求めて　　解脱を證せざれ。
是を僧に歸依すと名づく。　又應に三事を念ずべし。

「聲聞の人」とは、聲聞乘を成ずるものなり。「未だ法位に入らざる者」とは聲聞道に於いて未だ必定を得ざるものなり。「能く此の人をして佛道の心を發し、十力を得せしむ」とは若し法位に入ら

※歸依法。

△歸依僧。

【二】四果の僧＝は調伏品第七註參照。

す。出家の人、若し財施を樂へば悉く修行を妨ぐ。是の如き等の事あり。若し財施を行ずるには必ず聚落に至りて白衣と與に、事に從つて多く言說有り、若し事に從はざれば財を得るに由無し。若し聚落に出入して聲色を見聞せば諸根攝し難く、三毒を發起す。又持戒・忍辱・精進・禪定・智慧に於いて心薄く、又白衣と與に事に從へば、利養垢染にして、愛・恚・慳・嫉の煩惱を發起す。惟だ心に思惟力をもて而も自ら心志を抑制するも、弱者は或は自制せず、或は乃ち死を致し、或は死等の諸の惱苦患を得ん。五欲に貪著し、戒を捨てて還俗するが故に、名づけて死と爲す。或は能く戒に反き多く重罪を起す、是を死等の諸の惱苦患と名づく。是の因緣を以ての故に出家に於いては法施を稱歎し、在家に於いては財施を稱歎す。是の如く廣く說く。在家の菩薩の行ずる所の財施、餘の諸の善行は今當に之を說くべし。

※發心の菩薩は先づ應に佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依すべし。三歸に從つて得る所の功德は皆應に阿耨多羅三藐三菩提に廻向すべし。復た次に

佛法僧に歸依することは　　菩薩の知るべき所なり。

菩薩は應當に實の如く善く解して佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依すべし。

△問うて曰く、云何か名づけて佛に歸依すと爲すやと。答へて曰く、

菩提心を捨てず。　　所受の法を壞せず。
大悲心を捨せず。　　餘乘を貪樂せざれ。
是の如くんば則ち名づけて　　實の如く佛に歸依すと爲す。

「菩提心」とは、心を發して佛を求め不休・不息にして、是の心を捨てざるなり。「所受の法を壞せず」とは謂く、菩薩は各所樂の善法、戒行を受け、是の行は應に行ずべし、是は應に作すべからず、若しは諸波羅蜜に應じ、若しは四功德處に應ず、是の如き等の種種の善法は衆生を利益せんが爲め

※三歸。

△歸依佛。

果報は後に當に廣く說くべし。

*上に已に財施、法施を解說す。今更に分別せん。

*歸命相品　第十四

〇白衣の家に在る者は　　應に多く財施を行ずべし。
餘の諸の善の行法は　　今當に復た解說すべし。

是の二施の中、在家の人は當に財施を行ずべし。出家の人は當に法施を行ずべし、何を以つての故に。在家の法施は出家に及ばず。法を聽受する者、在家の人に於いては信心淺薄なるを以ての故に。又在家の人は多く財物有り。出家の人は諸の經法に於いて讀誦し、通達して人の爲めに解說し、衆に在りて畏れ無きこと、在家の人の能く及ぶ所に非ず。又聽者をして恭敬心を起さしむるは出家に及ばず。又若し說法し人心を降伏せんと欲せば出家に及ばず。說くが如し。

先づ自ら法を修行し　　然して後、餘の人に敎へ
乃ち是の言を作すべし。　　汝、我が所行に隨へと。

是の事は出家者の宜しき所にして在家者の行ずる所に非ず。又說く、

身自ら不善を行ぜば　　安(いづくん)ぞ能く彼をして善ならしめん。
自ら寂滅を得ずんば　　何ぞ能く人をして寂せしめん。
是の故に身自ら善なれば　　能く彼をして善を行ぜしむ。
自ら身に寂滅を得ば　　能く人をして寂を得せしむ。

善法と寂滅とは、是れ出家の者の行ずべき所なり。又出家の人には、聽法者に於て恭敬の心勝れたり。又出家の人、若し財施を行ぜば則ち餘の善を妨ぐ。又行を妨げ、阿練若處・空閑・林澤を遠離

※更に法施、財施を分別し、併せて三歸を說く。
※重ねて財施法施を分別す。
【〇】白衣＝俗人の別稱なり。印度古代の波羅門及び俗人は多く鮮白の衣を服すればなり。之に對して沙門を緇衣又は染衣と云ふ。

諸根を守護し、美味を貪らず。善く手足を攝め、念ずる所忘れず。樂つて頭陀を行じ、世間、出世間の法を分別し、心に疑悔無く、言辭章句窮盡すべからず。諸の聽者の爲めに安隱の利を求め、他の過を求めず。是の如き法有つて應に師子座に處すべし。復た四法有り。一には自ら身を輕んぜず。二には聽者を輕んぜず。三には所説を輕んぜず。四には利養の爲にもせず。

佛、阿難に告げたまはく、説法は應に何の法を説くべきや。阿難、説くべき所の法は示すべからず、説くからず。無相無爲なればなり。世尊よ、法若し爾らば云何か説くべきやと。阿難よ、是の法は甚深なり。*如來は四相の方便を以つて爲めに演説したまふ。一には音聲を以てす。二には名字を以つてす。三には語言を以てす。四には義理を以てす。又四の因緣を以て爲めに説法す。一には應に度すべき衆生を度せんが爲めにす。二には但だ色受想行識の名字のみを説く。三には種種の文辭、章句を以つて衆生を利益す。四には名字を説くと雖も而も亦得ず。譬へば鉢の油、清淨にして垢無ければ、中に於いて觀る者、自の面相を見るが如し。阿難よ、汝若しは見、若しは聞くや。智慧の男子、若しは持戒の女人、若しは聖弟子能く是の説を作す。我れ鉢の油に於いて實の人を見るや不やと。世尊よ、我れ聞かず、見ず。智慧の男子、持戒の女人、若しは聖弟子能く是の言を作す。我れ鉢の油に於いて眞實の人を見る。何を以ての故に。智者は先づ鉢の油の非有なることを知る。何に況んや人有らんや。但だ假名を以つて鉢の油に而も人相を見ると言ふ。阿難よ、如來も亦、復た是の如し。但だ名字を以て假に所説有り。阿難よ、如來は四の因緣を以つて而も爲めに説法す。衆生聞く者は心に安樂を得、涅槃の因を種う。如來の説法の音聲は十方世界に遍滿す。衆生聞く者は心に歡喜を得、諸の惡趣を離れて[九]兜術天に生ず。如來の聲の中には男無く、女無し。男は女相を取らず、女は男相を取らず。如來の音は衆生を惱さまず、諸法を壞らず、但だ音聲の性を示現せんがためのみ。説法は應に是の事を習行すべし。應に所行に隨つて而も法施を爲すべし。施者、受者の所得の

※如來説法方便の八相。

【九】兜術天＝兜率天Tuşita-deva)欲界六天の第四、梵名は具さに都史多と稱し、妙足・知足・喜足等と譯す。自ら受くる所に於て喜足の心を生ずるが故なり。この天は內、外二院に別れ、內院は一生補處位の菩薩の住處にして當來佛たる彌勒菩薩の淨土なり。又外院は天衆の欲樂處とせらる。

＊問うて曰く、云何が知る、諸施の中に法施は第一なりと。答へて曰く、經の説に二の施有り。法施と財施となり。二の施の中に法施を上と爲すと。復た次に、

決定王經の中に、　　　法の功德、
及び説法の儀式を讃説す。　　應に常に修習して行ずべし。

▲若し菩薩、法を以つて衆生に施さんと欲せば、應に決定王大乘經の中に、法師の功德、及び説法の儀式を稱讃するが如く、隨順し、修學すべし。謂く、説法とは應に四法を行ずべし。何等をか四と爲すや。一には廣博多學にして能く一切の言辭、章句を持す。二には決定して善く世間、出世間の諸法生滅の相を知る。三には禪定、[六]智慧を得て諸の經法に於いて隨順して諍ふこと無し。四には增せず、損せず、所説の如くにす。

◎説法を行ずる者、師子座に處するに復た四法有り。何等をか四と爲すや。一には高座に昇らんと欲せば先づ應に大衆を恭敬し、禮拜して然して後、座に昇るべし。二には衆に女人有らば應に不淨を觀ずべし。三には威儀、視瞻、大人相有つて、法音を敷演し、顏色和悅せば人皆信受せん。外道の經書を説かず、心に怯畏無かれ。四には惡言、問難に於いて當に忍辱を行ずべし。師子座に處するに復た四法有り。何等をか四と爲すや。一には諸の衆生に於いて饒益の想を生ず。二には諸の衆生に於いて我相を生ぜず。三には諸の文字に於いて法想を生ぜず。四には諸の衆生我に從つて法を聞く者は、阿耨多羅三藐三菩提に於いて不退轉ならんことを願ふべし。師子座に處するに復た四法有り。何等をか四と爲すや。一には善く、能く[七]陀羅尼門に安住して深く法を信樂す。二には善く[八]般舟三昧を得て勤行精進し、持戒淸淨なり。三には一切生處を樂はず、利養を貪らず、果報を求めず、四には三解脱に於いて心に疑(うたがひ)有ること無し。又能く、善く諸の深三昧を起し、威儀を具足し、憶念堅固にして念有り、慧に安んじ、調戲せず、輕躁せず、無羞ならず、擾亂せず。言に錯謬無く、

※法施は最上なり。

△法施の四要件。

【六】智慧＝正藏には慧とあるも明藏による。

◎法施の時師子座に處する十六法。

【七】陀羅尼＝Dhāraṇi 譯して總持と云ふ。一字一句にも無邊の義趣を含藏せる義なり。陀羅尼門に安住すとは文・義・忍・思に於て自在無礙なることなり。

【八】般舟三昧＝Pratyutpanna samādhi 四種三昧の一。般舟は佛立と譯す。此の三昧を修すれば諸佛現前して行者の前に立てばなり。大集賢護經には思惟諸佛現前三昧と云へり。

相の義に違逆せば、應に是の比丘に報いて言ふべし。長者よ、彼の比丘僧は法相、善相なりや、或は非法、非善說を作すや。或は長老謬つて受くるか。何を以つての故に。是の法は修多羅に入らず、毘尼に入らず。又復た諸の法相の義に違逆す。是は則ち法に非ず、善に非ず、佛の敎へたまふ所に非ずと。是の如く知り已つて卽ち應に除却すべし。

復た比丘有り、來つて是の言を作す。彼の住處の中に諸の比丘多く、修多羅を持し、毘尼を持し、摩多羅迦[四]を持す。我れ現に彼に從つて聞き、現に彼に從つて受けたり。是れ法、是れ善、是れ佛の敎へたまふ所なり。是の比丘の語を受くること莫れ、捨つること莫れ、審諦に聽き已つて應に經律を以つて其の所說を檢すべし。若し修多羅に入らず、毘尼に入らず、又、復を諸の法相の義に違逆せば應に是の比丘に報じて言ふべし。長老よ、彼の比丘僧は法相、[五]義相或は非法、非善の說を作せりや。或は長老謬つて受くるや。何を以つての故に。此の法は修多羅に入らず、毘尼に入らず、又、復た諸の法相の義に違逆す。是は則ち法に非ず、善に非ず、佛の敎へたまふ所に非ずと。是の如く知り已つて應に除却すべし。復た比丘有り、來つて是の言を作す。彼の住處の中に長老、比丘有つて多知、多識にして人のために尊重せらる。我れ現に彼に從つて聞き、現に彼に從つて受けたり。是れ法、是れ善、是れ佛の敎へたまふ所なりと。是の比丘の語を受くること莫れ、捨つること莫れ。審諦に聽き已つて應に經律を以つて其の所說を檢すべし。若し修多羅に入らず、毘尼に入らず、又、復た諸の法相の義に違逆せば應に是の比丘に報じて言ふべし。長老。彼の諸の比丘は法相、善相或は非法、非善說を作すや。或は長老謬つて受くるや。何を以つての故に。是の法は修多羅に入らず、毘尼に入らず、又、復た諸の法相の義に違逆す。是は則ち法に非ず、善に非ず、佛の敎へたまふ所に非ずと。是の如く知り已つて卽ち應に除却すべし。是の四を異論と名づく。是の故に智者は異論に依らずして而も淸白の法施を行ずと言ふ。

【四】摩多羅迦＝Mātṛkā 論藏の別名、三藏の一、譯して本母、行母となす。論藏は理を生ずる母なれば本母と云ひ、行法を生ずる母なれば行母と云ふ。

【五】義＝正藏には善とあるも三本に據る。

卷の第七

(一)分別法施品　第十三

▲菩薩は財施に於いて應に是の如く修學すべし。又應に法施を修學すること說の如くすべし。

衆施には法施最なり。　智者は應に修行すべし。

一切の施の中に第一、最上、最妙なるは所謂る法施なり。是の施は智者の行ずべき所なり。

問うて曰く、何が故ぞ但だ智者のみ應に法施を行ずべしと言ふやと。答へて曰く、不智の者若し法施を行ずれば卽ち異論を說く。異論を說くが故に自ら利を失し、亦他の利を失すと。

問うて曰く、何をか異論と謂ふやと。答へて曰く、佛滅度せんと欲したまふ時、阿難に告げたまはく、今日より後、(二)修多羅に依つて人に依ること莫れと。阿難、云何か修多羅に依り、人に依らずと名づくやと。比丘有り、來つて是の言を作す。我れ現に佛に從つて聞けり。現に佛に從つて受けたり。是れ法、是れ善、是れ佛の教へたまふ所なりと。是の比丘の語を受くること莫れ、捨することと莫れ。審諦に聽き已つて應に經律を以つて其の所說を檢すべし。若し修多羅に入らず。(三)毘尼に入らず、又、復た諸の法相の義に違逆せば應に是の比丘に報で言ふべし。是の法は或は佛の所說に非ず、或は長老謬つて受くと。何を以つての故に。是の法は修多羅に入らず、毘尼に入らず、又、復た諸の法相の義に違逆せり。是れは則ち法に非ず、善に非ず、佛の教へたまふ所に非ずと。是の如く知り已つて應に除却すべし。復た比丘有り、來つて是の言を作す。彼の住處に大衆有り、經に明かなる上座有り。善く戒律を說く。我れ現に彼に從つて聞き、彼に從つて受けたり。是れ法、是れ善、是れ佛の教へたまふ所なりと。是の比丘の語を受くること莫れ、捨つること莫れ。審諦に聽き已つて應に經律を以つて其の所說を檢すべし。若し修多羅に入らず、毘尼に入らず、又復た諸の法

【一】この品は布施を分別して、法施を最上とし出家の特に行ずべきものなることを明し、具法施の要件を擧ぐ。△**法施は智者に特有なることを明かす。**

【二】修多羅＝Sūtra　經律論三藏の中の經を云ふ。又修單羅、素怛纜に作る。もと綖を以て正翻とす。綖の花を貫穿し、以て散ぜざらしむる如く經は法義を貫穿して散失せしめざればなり。

【三】毘尼＝新に毘奈耶に作る梵語Vinaya。三藏の中、律藏を云ふ。戒律は世間の法律の如く罪の輕重を斷決するもの。

是の若く[四六]毘舍、播殖は意の如し。是の若く商估は能く其の利を得、是の若く[四七]首陀羅は所作の事業多く得て意の如しと。

問うて曰く、汝先に說く、菩薩は果報を求むる心を以つて施さず。又、復た豪貴の爲めの故に施さずと。而も今說く、大富を求むるが故に布施すと。是の語自ら相違背無きことことを得んやと。答へて曰く、相違せざるなり。若し自ら身の爲めに富を求め、樂を受くれば、是の故に富を求むべからずと說けり。今富を求むるを說くは但だ衆生を利益せんが爲なり。是の故に說く、大施を欲せんが爲めの故に富を求め、身己の爲めに富受樂を求めずと。是れは則ち果中に因を說くなり。若し菩薩大富を得ずんば布施を信樂すと雖も財の與ふべき無し。是の故に汝、難を作すべからず。復た次に二法を斷ずるが故に應に布施を行ずべし。何等をか二と爲すや。一には慳、二には貪。此の二法は最も施の垢と爲す。又二法を得るが故に布施を行ず。所謂る[四八]盡智・無生智なり。又三種の慧を増益す。一には自利慧、二には本慧、三には多聞慧なり。有る人の言く、二法を増長するが故に應に施を行ずべし。一には善、二には慧なり。略說せば菩薩は應に四種の施を行じて一切の善法を攝すべし。一には等心施、二には無對施、三には廻向菩提施、四には具足善寂滅心滅なり。菩薩は是の如く檀波羅蜜を具足せんが故に財施を勤行す。

【四六】毘舍＝Vaisya.印度四姓の第三階級、農工商人を云ふ。
【四七】首陀羅＝Sūdra,第四階級、奴隷、賤族を云ふ。

【四八】盡智＝三界に通じて四諦を知了しすべての煩惱を斷盡し了りし時に生ずる智をいふ。無生智とはその上に無生の理を悟りて更に知斷證修を繰り返す必要なき智をいふ。

喜す。是れ人身に於いて善き果報を得、人に欽慕せられ、常に[四一]吉善と稱す。其の醜惡を忘れ、下賤に生ずと雖も大人の相有り。巧言無しと雖も巧言を成ずる者たり。多聞ならずと雖も多聞を成ずる者たり。少智慧なりと雖も智慧を成ずる者たり。若し先に端正なれば倍々復た殊勝なり。若し先に大家なれば倍々復た尊貴なり。若し先に巧言なれば倍々復た巧言なり。若し先に多聞なれば倍々復た多聞なり。若し先に智慧あらば倍々復た有智なり。坐臥す可き所、貴價・寶床・寢寐安隱にして侍衞具足し、衆寶を舍と爲し、意を極めて遊戲す。其の身、貴重にして諸の經書を須ゐるに意に應じて卽ち得べし。勢位意に隨ひ、王に親近すること易く、諸の貴人に念ぜらる。諸醫自ら往き常に親信有り、消息宜き所、疾有るも輕微にして、若しは病むも差え易し。今世後世の怖畏を遠離し、畢竟じて永く不活怖畏を離れて常に救護有り。多く人衆有つて諸の親近の者、自ら多福と謂ひ、意を同じくするものの爲めに深く自ら欣慶す。少施恩有るも大酬報を得、若し小惡を加ふれば大殃禍を得。族姓・女人・少年は端正にして莊嚴を具足し、自ら給侍を求むるに諸の諸利有つて悉く來つて已に歸す。若し異事を作すも事輒ち輕微にして、少しく施作有るも卽ち大利を獲ること多く、善知識の怨憎轉た少し。蛇虺・毒藥・放逸・惡人、是の如き等の事、妄に近づくことを得ず。諸の愛敬の事皆悉く歸趣す。若し利を獲る時は衆人代つて喜び、若し衰惱有れば人皆憂戚す。衆共に示導し、競つて[四二]善吉を以つて非法を遠ざけ、善法に安住せしむ。所施の業大なれば見るもの歡ばざる莫し。若し與に同心ならば則ち以つて足ると爲す。世間の富貴榮利を期せず、假使位に居るも人思つて匡助し、其の衰惱を除き、他の富貴を見るとも怖倘する所無し。人其の德を詠じて其の過を揚げず。小人の名を[四三]離れ大人の號を得て不足の色無く、他の顏貌を視て矯異を作さず。若しは[四四]婆羅門と作つて天寺の中に於いて大いに果報を獲、諸の經書を讀み、其の實利を得、得て而も能く施す。是の若く[四五]刹利の所習成就し、射、音聲を善くし、善く能く貫練し、世の典籍を治め、能く果報を得。

【四一】吉善＝吉祥に同じ。

【四二】善吉＝正藏には善吉とあるも三本善告に作る。

【四三】離＝正藏には雖なれども三本に據る。

【四四】婆羅門＝Brahmaṇa。印度四姓の最上位にある僧族を云ふ。

【四五】刹利＝Kṣattriya 印度四姓の第二位、王族武人を云ふ。

是の如き布施は　　　　是れ則ち損減と爲す。

若し布施、阿耨多羅三藐三菩提に廻向せず、世間の樂に隨逐するが故に求めて下處に生じ、方便有ること無く、能く布施、禪定の果報、自在の所生を出で、大乘を障閡する知識に親近せば、是の四法を以て則ち布施は損減す。

四施を離るれば增することを得。　又應に三心もて施すべし。

菩薩は佛語に順じて、　　亦果報を求めざれ。

此の四法を離れて布施せば則ち增益を得。一には阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。二には方便有りて廻向す。三には法王處を求む。四には善知識に親近す。又應に三法心を以つて布施を行ずべし。一には一切の衆生を憐愍するが故に、菩提心を以つて施を行ず。二には佛法を遠ざけずして施を行ず。三には果報を求めずして布施を行ず。復た次に

*三法を得んが爲めの故に、　　而も布施を行ず。

二法を求めんと欲するが爲めに、　　應當に布施を行ずべし。

「菩薩は三法を得んが爲めの故に布施を行ず」とは一には佛法、二には說法、三には諸の衆生をして無上樂に住せしむ。又「二法を求めんと欲して布施を行ず」とは一には大富、二には檀波羅蜜を具足す。何以ての故に。若し菩薩大富なれば則ち貧苦を離れ、他の財を取らず、息利を求めず、債主有ること無く、償債を憂へず。多財にして富足れば能く自ら衣食し、能く惠みて施有り、親族及び善知識を利益し、眷屬安樂に其の家豐饒にして常に節會の如く、心常に歡悅し、能く大いに施與す。眷屬輕んぜず、人に敬仰せられ、言皆信受す。衆に依附せられ、人來つて師仰し、衆に入りて畏るること無し。常に洗浴を好み、名香を身に塗り、好新の衣を著し、莊嚴を具足す。諸の好色を見、好音聲を聽き、諸の妙香を聞き、常に最上の美味を食す。細觸にして怨賊壞し難く、善知識歡

※布施と得果。

に說くが如し。復た次に「總相」の廻向とは、一切の衆生を安樂にし、利益せんが爲なり。「別相」の廻向とは無信の衆生に信を得せしむるが故に、破戒の者は持戒を得るが故に、少聞の者は多聞を得るが故に、懈怠の者は精進を得るが故に、散亂の心の者は禪定を得るが故に、愚癡の衆生は智慧を得るが故に、慳者は捨心を得るが故に、是の如き等は種種の別相なり。復た次に「總相」の廻向とは六波羅蜜を以つて阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。「別相」の廻向とは外物を施す時、諸の衆生をして大最樂を得せしめんことを願ひ、支節布施の時、諸の衆生、佛身を具足せんことを願ふ。

△問うて曰く、布施には幾種の廻向、幾種の不廻向有りやと。答へて曰く、一には淨の四廻向、三種の不廻向と爲す。[三九]菩薩の布施は清淨四事の爲めの故に廻向す。※三種の不廻向とは王を得んが爲めの故に廻向せず、欲樂を得んが爲めの故に廻向せず、聲聞、辟支佛地を得んが爲めの故に廻向せざるなり。「王を得んが爲めの故に廻向せず」とは、王を遮するは則ち并びに一切の貴人の力勢、自在なる者を遮するなり。「欲樂を得んが爲めに廻向せず」とは、上の貴人を除きて餘の富樂、五欲を受けて自ら娛む者なり。「聲聞、辟支佛を得んが爲めに廻向せず」とは、小乘に因つて無餘涅槃に入るを遮し、大乘に安住することを得て、久くして後乃ち無餘涅槃に入るなり。「※四の淨廻向の爲めに」とは、菩薩の施す所は清淨佛土の爲めの故に廻向し、清淨[四〇]菩提の爲めの故に廻向し、清淨にして衆生を敎化せんが爲めの故に廻向し、淨薩婆若の爲めの故に廻向す。菩薩は應に是の如く方便廻向して布施を損減せしむること無く、勢力を得せしむべしと。

◎問うて曰く、何の法を以てか布施をして損減せしめ、何の法を以てか布施をして增益せしむるか。

答へて曰く、

若し施して廻向せず、　亦方便有ること無く、
求めて下處に生じ、　惡知識に親近す。

△布施の廻向不廻向を解す。

※三種の不廻向。

【三九】菩薩＝正藏に菩薩とあり、今他本に依る。

◎四種の淨廻向。

【四〇】菩提＝正藏には菩薩なれども明藏による。

◎布施を增益し、損減するもの。

浄、受者に於いて浄ならず。二には共に浄。此の二浄施の中に於いて應に常に精進すべし。何を以つての故に、是の菩薩は果報を期せざるが故に。若し果報を期せば則ち受者の清浄を求む。浄とは施者、受者の功德莊嚴にして其の心清浄なるに名づく。不浄とは施者に慳惜心有るに名づく。佛說きたまふが如し。慳は施垢と爲す。餘の煩惱も不浄と爲すと雖も、慳を最も重しと爲すと。

問うて曰く、若し菩薩施者の浄及び共に浄なるに於いて、應に此の二施を勤行すべく、慳を施者の垢と爲さば、亦是れ施の大垢なり。若し菩薩未だ欲を離れず、未だ能く慳を斷ぜずして如何にしてか能く此の二浄施を行ぜんやと。答へて曰く、

　若し物に能く慳を起さば、　則ち此の物を畜へざれ。

菩薩は若し有命、無命の物に於いて慳心を生ずることを知らば則ち此の物を畜へざれ。是の故に所施皆悋惜無きこと有りと。

問うて曰く、外物を身に畜へざる可きに當に云何かすべきやと。答へて曰く、

　常に衆生を利せんが爲めに、　身を藥樹の如しと解す。

衆生を利せんが爲めの故に、身を藥樹の如しと信解す。「藥樹の如し」とは、衆生用有れば根莖・枝葉・華實等各〻病を差すことを得、意に隨つて而も取り、遮護有ること無し。菩薩も亦是の如し。衆生を利せんが爲めの故に能く自ら身を捨て、是の念を作す。若し衆生我が頭目・手足・肢節・脊腹・髀膊・耳鼻・齒舌・血肉・骨髓等、其の須ゐる所に隨つて皆能く之を與へ、或は身を擧げて盡く施さんと。是の如く其の心を降伏して善根を修集し、方便所護の爲めに檀波羅蜜を行ず。

　*總相、別相の施、　皆悉く能く廻向す。

是の菩薩は能く二種の浄施を以つて能く二種の廻向を知る。一には總相と爲し、二には別相と爲す。「總相」の廻向とは施す所有れば皆阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。「別相」の施とは布施果報の中

※布施の總別二相。

に於いて是れ淨なるも受者に於いて淨ならず。施有つて受者に於いて是れ淨なるも施者に於いて淨ならず。施有つて施者に於いても淨、亦受者に於いても淨なり。施有つて施者に於いても淨ならず、亦受者に於いても淨ならず。若し施者身口意の業を成就し、受者惡行身口意の業を成就せば是を施者に於いて淨なるも受者に於いて淨ならずと名づく。若し施者惡の身口意の業を成就し、受者善の身口意の業を成就せば、是を受者に於いて淨なるも施者に於いて淨ならずと名づく。若し施者善の身口意の業を成就し、受者も亦善の身口意の業を成就せば、是を施者に於いても淨、受者に於いても亦淨なりと名づく。若し施者不善の身口意の業を成就し、受者も亦不善の身口意の業を成就せば、是を施者に於いても淨ならず、亦受者に於いても淨ならずと名づく。貪欲・瞋恚・愚癡、若しは斷、若しは不斷も亦應に是の如く分利すべし。復た次に四種の布施の中に淨、不淨有り。一には施者に從つて淨、二には受者に從つて淨、三には共に淨、是を淨と名づく。一には施者に從つて淨ならず、二には受者に從つて淨ならず、三には共に淨ならず、是を不淨と名づく。是の中、施者に功德有るが故に、施者に從つて施せば淨を得。受者に功德有るを以つての故に、受者に從つて施せば淨を得。施者、受者に功德有るを以つての故に、施者、受者に從つて施せば淨を得。施者、罪有るが故に施者に從つて施せば不淨なり。受者、罪有るが故に受者に從つて施せば不淨なり。施者、受者、罪有るが故に施者、受者に從つて施せば不淨なり。施者の功德、受者の功德、施者の罪、受者の罪は先に已に說けり。

*問うて曰く、汝が說ける此の四種の施の中、菩薩は應に何んの施をか行ずべきと。答へて曰く、

四種の布施の中に　　二種の淨施を行ぜよ。
名利を求めて　　及以(および)果報を求めざれ。

是の布施に四種の三淨、三不淨有り。不淨は盡く行ぜず、淨の中、二淨を行ぜよ。一には施者は

※菩薩所業の施。

に施すこと無し。彼の過咎を說いて施すこと無し。愛する所に隨つて施すこと無し。瞋にして施すこと無し。癡はして施すこと無し。戲論して施すこと無し。菩提の爲めにせずして施すこと無しと。

*問うて曰く、非法に財を求めて施し、乃至菩提の爲めにせずして施すこと、菩薩には有りとやせん、無しとやせん。若し盡く無くんば則ち過咎有り。福田を求めざれば衆生に於いて差別の心無く、亦、恩を知り恩に報ずることも無く、亦、家法、國法の施も無し。若し有らば何を以て皆無しと言ふやと。答へて曰く、是の非法に財を得て施し、乃至菩提の爲めならずして施すこと菩薩は必ず盡く無きにはあらず。或る時は有り。是の布施は檀波羅蜜の攝せざる所にして、檀波羅蜜を具足すること能はざるが故に無と言ふ。空等の功德和合の施は無盡意菩薩經檀波羅蜜品の中に說くが如し。菩薩の布施は空心と合するが故に盡きず。是の施は無相にして修するが故に盡きず。是の施は守護を願ふこと無きが故に盡きず。是の施は善根の攝する所なるが故に盡きず。是の施は解脫相に隨ふが故に盡きず。是の施は一切の魔を破するが故に盡きず。是の施は煩惱を雜へざるが故に盡きず。是の施は轉た勝利を得るが故に盡きず。是の施は決定心の故に盡きず。是の施は菩提の法を集助するが故に盡きず。是の施は正廻向の故に盡きず。是の施は道場解脫の果を得るが故に盡きず。是の施は無邊の故に盡きず。是の施は不可盡の故に盡きず。是の施は不斷の故に盡きず。是の施は廣大の故に盡きず。是の施は不可壞の故に盡きず。是の施は不可勝の故に盡きず。是の施は一切智慧に至るが故に盡きず。是の施は非法にして財を求むる施等の垢を斷じて、空等の諸の功德を成就するが故に盡きず。非法にして財を求めて施す等の是の施は垢施なり。垢と合せば是れ不淨施なり。空等の功德と合せば是れ淨なり。

*復た次に是の施の淨と不淨とは今當に更に說くべし。經に說かく、施に四種あり。施有つて施者

※檀波羅蜜不攝の施。

※四種施を解す。

求めて施すこと無し。國王、王子を求めて施すこと無し。一世に限つて施すこと無し。足ることを厭うて施すこと無し。薩婆若に廻向せずして施すこと無し。不淨にして施すこと無し。非時にして施すこと無し。刀毒を施すこと無し。衆生を惱弄して施すこと無し。智者の訶する所を施すこと無し。是の如く施門を開示す。餘の不淨の施も亦應當に知るべし。所謂る諸の菩薩は應に棄つべき物を施すこと無し。涅槃を憎惡して施すこと無し。豐饒にして得易き物を施すこと無し。恩を量つて施すこと無し。恩を報じて施すこと無し。反報を求めて施すこと無し。守護を求めて施すこと無し。吉を求めて施すこと無し。慢心にして施すこと無し。家法にして施すこと無し。得るに因つて卽ち施すこと無し。身を終らずして施すこと無し。垢心にして施すこと無し。遊戲して施すこと無し。善知識を以ての故に施すこと無し。輕んじて施すこと無し。遊逸して施すこと無し。失するに因つて施すこと無し。己を讃するを以つての故に施すこと無し。呵罵するを以つての故に施すこと無し。視顧を以ての故に施すこと無し。希有の事と稱せらるるを以つての故に施すこと無し。己信を明かならしむるを以ての故に施すこと無し。畏を以つての故に施すこと無し。誑かして施すこと無し。眷屬を求めて施すこと無し。唱導せずして施すこと無し。衆を引きて施すこと無し。不信にして施すこと無し。無因緣にして施すこと無し。意に隨つて施すこと無し。奇特を現じて施すこと無し。自ら稱讃して施すこと無し。所求に隨はずして施すこと無し。彼を伏せんが爲めに施すこと無し。愛せずして施すこと無し。任用せざる物を施すこと無し。恭敬ならずして施すこと無し。下げて施すこと無し。恠相を以ての故に施すこと無し。抑挫して施すこと無し。挾勢にして物を得て施すこと無し。不清淨心にして施すこと無し。疑心にして施すこと無し。求むる者の心を破して施すこと無し。禁忌の物を施すこと無し。分別して施すこと無し。酒を以て施すこと無し。兵杖を以て施すこと無し。彼が物を奪つて施すこと無し。人をして疑心を生ぜしめて施すこと無し。親近を以ての故

合す。

※問うて曰く、所説の非法得財の施等、及び空、智慧等和合の施、此の二施應に廣く分別すべしと。

答へて曰く、此の二施は無盡意菩薩會品中の檀波羅蜜の中に説く。△初めに布施の功徳を分別す。所謂る諸の菩薩は非法にして財を求めて施すこと無し。衆生を熱惱して施すこと無し。恐畏して施すこと無し。著するが故に施すこと無し。請うて而も施さざること無し。所許の如くならずして施すこと無く。好を悋みて不好を以つて施すこと無し。深心ならずして施すこと無し。諂曲にして施すこと無し、假僞にして施すこと無し。果を損じて施すこと無し。邪心にして施すこと無し。癡心にして施すこと無し。雜心にして施すこと無し。解脱を信ぜずして施すこと無し。疲厭して施すこと無し。親附して施すこと無し。已に承望するを以つて施すこと無し。福田者を求めて施すこと無し。一切の衆生を輕んずる非福田の者に施すこと無し。持戒、毀戒の高下心にして施すこと無し。名聞を求めて施すこと無し。自ら心を高くして施すこと無し。他を卑んで施すこと無し。悋惜して施すこと無し。悔心にして施すこと無し。急喚の故に施すこと無し。惡賤して施すこと無し。自然の法を施すこと無し。果報を求めて施すこと無し。瞋恚にして施すこと無し。人を渇乏せしあて施すこと無し。惱求の者に施すこと無し。彼を輕弄して施すこと無し。欺誑して施すこと無し。[三七]卑面(めん)して施すこと無し。一心ならずして施すこと無し。自らの手ならずして施すこと無し。不常にして施すこと無し。休息して施すこと無し。斷絶して施すこと無し。競勝して施すこと無し。少物を輕んじて施すこと無し。自の恣まゝなるに請隨して而も輕物を以つて施すこと無し。力に稱はずして施すこと無し。非福田にして施すこと無し。少物に於いて劣弱心にして施すこと無し。多物を恃みて憍心にして施すこと無し。邪行にして施すこと無し。受生を樂ふて施すこと無し。色族、富貴を恃みて施すこと無し。[三八]四王・釋梵・天上に生ぜんことを求めて施すこと無し。聲聞、辟支佛乘を

※施の淨、不淨を分別す。

△不淨施。

【三七】 俾＝面尻目に見ることながしめにみること。

【三八】 四王＝四王天のこと。六欲天の一、須彌山の中腹にあり。由健陀羅山の四峯に居する持國天(東)、增長天(南)、廣目天(西)、多聞天(北)の四天王なり。

の法王を得。諸の戲樂の具を施さば則ち法樂を得。足を以つて施さば則ち法足を得て能く道場に到る。手を以つて施さば則ち寶手を得。能く一切を施し、耳鼻を以つて施さば則ち身體を具足することを得。眼を以つて施さば則ち無閡[三三]法眼を具足することを得。頭を以つて施せば三界特尊一切の智慧を得。血肉を以つて施さば諸の衆生をして堅固の行を得せしむ。髓を以つて施さば金剛身を得て能く壞する者無し。是の如く施門の果報を開く。餘の施の果報を亦應に知るべし。臥具を以つて施さば三乘の安隱解脫を得。[三四]床坐處を以つて施さば則ち菩薩樹下道場不可壞處を得。妻を以つて施す者は法喜、娛樂を得んが爲めの故に。道を以つて施す者は生死失道の衆生、正道に入ることを得んが爲めの故に。筏を以つて施す者は[三五]欲流・有流・見流・無明流を度すことを得るが爲めの故に。骨を以つて施す者は戒堅・定堅・慧堅・解脫堅・解脫知見堅・衆生堅を得るが爲めの故に。眷屬を以つて施す者は無量無邊阿僧祇の福德を成就して、天人の眷屬同心淸淨にして沮壞すべからざることを得んが爲めの故に。善哉を以つて施す者は說法の時、天・龍・夜叉・乾闥婆・沙門・婆羅門の歡喜、稱讚を得んが爲めの故に。經卷を以つて施す者は、九部經久しく無量時に住することを得んが爲めの故に。法を以つて施す者は一切の法に通達することを得んが爲めの故に。一切の功德を集むるが故に。是の菩薩は是の如く樂つて布施を行じ、布施の淸淨なることを知り、布施の果報の所得の多少を知る。是の故に、

　非法の財施等、　乃至[三六]智呵施、
　是の如き施有ること無し。　但だ空等の施に合す。

「非法」とは惡行の所得の財なり。「財」を資生の物と名づく。要を取つて之を言はば惡業を以つて財物を得て施すなり。菩薩は是の布施の淸淨ならざるを知るが故に、是の如き等の諸の餘の非法の施乃至智の呵する所の施、此の事を爲さず。菩薩は布施を行ずるに唯だ空、智慧等種種の功德と和

【三三】法眼＝Dharmacakṣu 五眼の一、菩薩衆生を度するために一切の法門を照見する智慧を云ふ。

【三四】床坐處＝正藏には床以坐とあるも三本による。

【三五】欲流有流見流無明流＝この四を四流と稱す、流とは有情がこの四法によつて漂流せらるればなり。一に見流とは三界の見惑なり。二に欲流とは見、無明を除く一切の諸惑なり。三に有流とは見及び無明をのぞく上二界の一切の諸惑、四に無明流とは三界の無明なり。

【三六】智呵施＝智慧にて分別する下善なる施を云ふ。

是の如く布施する者は　　則ち是の如き報を得。
内に支節等、　　幷びに及び諸の外物を以てす。

「内物」は頭目、手足等に名づけ、「外物」は妻子、金銀、寶物等に名づく。是の菩薩は實の如く施すことを知れば、是れ是の報、各各分別することを得。又、諸經の所說を信じ、或は[二九]天眼を以つて知ることを得と。

問うて曰く、汝先に說かく、身の支節の布施及び外物の布施を以つて得る所の果報を知ると。今得る所の果報を說くべしと。答へて曰く。寶頂經の中の無盡意菩薩第三十品檀波羅蜜義の中に說かく、菩薩願を立てて食を須ゐる者、食を施さば、我れをして五事の報を得しむ。一には壽命を得、二には膽を得、三には樂を得、四には力を得、五には色を得。漿を須ゐるに漿を與ふれば先づ人中に於いて香美の飲を得、後、諸の煩惱の渇愛を除くことを得。乘を須ゐるに乘を與ふれば則ち意に隨つて樂報を得て[三〇]四如意足を成就し、後、三乘道を得。衣を須ゐるに衣を與ふれば則ち慚愧の衣報を得。燈明を須ゐるに燈明を與ふれば則ち佛眼の光明を得。伎樂を須ゐるに伎樂を與ふれば則ち天耳を具足することを得。末香、塗香を須ゐるに末香、塗香を與ふれば則ち身に臭穢無きことを得。汁を須ゐるに汁を與ふれば則ち味味の相報を得。房舍を須ゐるに房舍を須ふれば則ち一切の衆生と與に歸依を作し、救護することを得。資生の具を施さば則ち菩提の功德を助くることを得。醫藥を施さば則ち老病死無く、常樂安隱なることを得。奴婢を施さば自在隨意を得て智慧を具足す。金銀・珊瑚・車渠・馬腦を施さば則ち[三一]三十二相を具足することを得。種種の雜物、莊嚴の具を施さば則ち[三二]八十隨形好を得。象・馬車を施さば則ち大乘を具足することを得。園林を施さば則ち禪定の樂を具足することを得。男女を施さば所愛の阿耨多羅三藐三菩提を得。倉穀・寶藏を施さば則ち法藏を具足することを得。施すに一國土、一閻浮提、四天下の王位を以つてせば、則ち道場に、自在

【二九】天眼＝五眼の一、肉眼につゞいで上位の眼なり。色界の天人所有の眼、人中禪定を修して得らる。

【三〇】四如意＝足初入地品第二に出づ。

【三一】三十二相＝念佛品第二十に詳し。

【三二】八十隨形好＝念佛品第二十に詳し。

せず。此の三惡を離るる是の如きは則ち檀波羅蜜の門を開く。是の故に常に應に一心に勤行して放逸ならしむること無かるべし。何を以っての故に。菩薩は是の念を作す。我れ今能く作す所に隨つて衆生を利益し、堅固の施心を發すと。

所有る一切の物　有命若しは無命
轉輪天王の位も、　求めて與へずといふこと無し。
乃至男女に於いて、　嫉妬、好妻妾をも。
年少く甚だ端嚴、　巧便にして能く人に事へ
恭順にして心柔和なり。　愛念の情甚だ至つて
之を惜むこと壽命に過ぐとも　求むる者には皆能く與ふ。
乃至身・血・肉、　骨髓及び手足
頭・目・耳・鼻等、　及び身皆能く與ふ。

是の菩薩は定心もて布施す。凡そ所有る外物若しは有命、若しは無命も乞ふこと有れば而も與へずといふこと無し。無命の物は金銀、珍寶乃至轉輪聖王の位、天王の位なり。有命の物は男女・貴族・好家・年少の妻妾・端嚴・柔和・恭敬・善順、之を愛惜すること至つて身命に過ぐるも、而も能く人に施す。一切の施の如く菩薩は所有る外物及び妻子等皆能く施與す。是の菩薩は乃至自身の肉血・頭目・耳鼻も、肉を割き骨を出し、骨を破り髓を出すこと[二六]薩陀波崙の如し。或は身を擧げて施與す。一切の愛する所、身に過ぐる者無きも亦能く施與すること[二七]薩和檀の如し。菩薩は兎の爲めに身を以つて仙人に施與するが如く、[二八]尸毘王の如く身を以つて鴿に代ふ。

※問うて曰く、是の菩薩は分別して布施及び布施の果報を知るが故に能く難事を以つて施すことを爲すや、但だ慈悲心を以つて發す所の故に施すことを爲すやと。答へて曰く、

【二六】薩陀波崙＝波倫とも云ふ。常啼と譯す、般若を求むるがために七日七夜啼哭す。
【二七】薩和檀＝Sarvadāna。一切施王。六度集經第二に出づ。
【二八】尸毘王＝Śibi或はŚibika。尸毘迦ともいふ。大論第三十五に出づ。
※布施の果報を明かす。

福德の力轉た增し、　　心も亦益ゝ柔軟なり。
卽ち佛の功德、　　及び菩薩の大行を信ず。

是の菩薩は懺悔・勸請・隨喜・廻向を以っての故に福力轉た增し、心調柔軟なり。諸佛の無量の功德清淨第一に於いて凡夫の信ぜざる所を而も能く信受し、及び諸の大菩薩の清淨の大行、希有の難事も亦能く信受す。復た次に、

苦惱の諸の衆生には　　是の深淨の法無し。
此に於いて愍傷を生じ、　　而して深悲心を發す。

菩薩は諸佛菩薩の無量甚深清淨第一の功德を信じ已つて、諸の衆生に此の功德無く、但だ諸の邪見を以つて、種種の苦惱を受くることを愍傷するが故に、深く悲心を生ず。

是の諸の衆生を念ずるに、　　苦惱の泥に沒在す。
我れ當に之を救拔し、　　安隱の處に在らしむべし。

是の菩薩は悲心を得已つて是の念を作す。是の諸の衆生は常に貪・恚・癡の爲めに病され、身心を以つて諸の苦惱を受く。我れ當に拔濟して身心の苦惱の深遲(じんない)を離れしめ、畢竟して生老病死の患無き安隱涅槃の樂處に住することを得せしめんと。是の故に此の苦惱の衆生に於いて深悲心を生ず。悲心を以つての故に、求の爲めに意に隨つて安樂を得せしむれば則ち慈心と名づく。

若し菩薩是の如く、　　深く慈悲心に隨つて、
所有る貪惜を斷じ、　　施の爲めに勤めて精進す。

菩薩は是れ佛道を求め、苦惱の衆生を度す。念とは、名に隨つて慈悲に隨順し、餘心に隨はず。深慈なるを遍と名づく。諸の衆生の念は骨髓に徹し、所有る名、一切內外、所有る金銀・珍寶・國城・妻子等、名を貪り、得んと欲し、厭くこと無く、名を惜み、愛著して他に與へて名を斷ぜんことを欲

施行を述ぶ。

【三五】阿輸迦＝Aśoka。「阿育王のこと。無憂と譯す。西紀紀前三百二十一年頃印度に於て孔雀王朝を創立せし旃陀掘多大王（Candragupta）の孫。紀元前二百七十年頃、全印度を統一し、大いに佛敎を保護し、之を各地に宣布せり。その傳記に關しては南北兩傳の間に相違あれども、その帝位繼承に際して兄修私摩（Susīma）始め多くの無辜の兄弟、人民を殺戮せるが如し。然れども後翻然として、佛敎に歸し、大いに慈悲の精神を發揮し、正法の興隆に努力せり。

大福德有る者は　罪惡の事有りと雖も、
地獄に墮せしめず。　現身に而も輕く受く。
譬へば　鴦掘魔[二二]の如し。　多く人衆を殺し、
又、母と佛とを害さんと欲して　阿羅漢道を得たり。

今世に輕く受くとは、又、阿闍世[二三]が得道の父王を害せるが如き、佛及び文殊師利の因緣を以つての故に重罪をも輕く受く。又、人毒蛇の如し。生るる時血を雨し、後漸く長大にして意、人を殺さんと欲す。眼看れば卽ち死し、若しは氣嘘を以つてするも亦死す。是の故に時の人號して氣嘘と爲す。是の人命終の時、舍利弗往いて其の所に至り、心中に瞋恚し眼看て死せず、嘘も亦死せず。舍利弗身色方さに更まり光り顯れて心卽ち淸淨、上下七觀す。是の因緣を以つて命終の後七變天上に生じ、七變人中に生じ、後、人壽四萬歲の時に於いて當に辟支佛道を得て、身黃金の色なり。時の人是を金聚來と謂ふ。斫り取らんと欲すれば卽ち命終し涅槃す。又、阿輸伽王[二五]の如し。兵を以つて閻浮提を伏し、萬八千宮人を殺す。先世に佛に土を施すが故に八萬塔を起て常に大阿羅漢の所に於いて經法を聽受す。後に須陀洹道を得。卽ち人身の輕償なり。是の如き等の罪は多く福德を行じ、志意曠大にして諸の功德を集むるが故に惡道に墮せず。是の故に、汝が先に若し罪業を懺悔せば則ち滅し盡して果報有ること無きことを難ぜるは是の語然らず。復た次に若し罪滅すべからずと言はば、毘尼の中に佛懺悔除罪を說きたまふこと則ち信ずべからず。是の事然らず。是の故に業障の罪は應に懺悔すべし。

分別布施品　第十二[二四]

△菩薩は能く是の如く懺悔・勸請・隨喜・廻向を行ず。

【二二】鴦掘魔＝Aṅgulimālya 指鬘と譯す。舍衞國の人。人を殺すは涅槃を得る因なりとの邪說を信じ、市に出で九百九十九人を殺害し、各〻指を切りて鬘とせり、遂に千人目に我が母を殺さんとせしも佛のために說法せられて佛門に入り、後に阿羅漢果を得と云ふ。

【二三】阿闍世＝Ajātaśatru 阿闍貰に作る。新稱阿闍多設咄路、未生怨と譯す。佛在世の頃摩竭陀國、王舍城の治者、父は頻婆娑羅、母は韋提婆、母懷胎の時、相師占つて此兒生れて父を害すべしと云ふはたして太子は惡友提婆達多に近づき初生の時のことを聞き父王を殺せしが、後ち佛所に至り懺悔す。

【二四】この品は布施の功德、性質を明し、後に大乘菩薩の布施行を詳述す。
△菩薩の慈悲を解し併せて布

至惡夢、惡道の報を償ふ」と。又、佛說きたまはく、「人、小罪有らば今世に報を受くべし。是の罪轉た多く便ち地獄に墮す」と。云何か是の人、今世に小罪轉た多くして地獄に墮するや。人有つて身を修めず、戒を修めず、心を修めず、慧を修めざれば大意有ること無し。是の人は小罪なれども便ち地獄に墮す。云何か是の人、罪有つて今世に應に報を受け、罪增長せずして地獄に入らざるや。人有つて身を修め、戒を受め、心を修め、慧を修む。大志意有つて心に拘閡無し。是の如き人は罪有るも復た增長せず、今世に現に受く。[二]譬へば人の小器を以つて水を盛り、一升の鹽を著くるが如し。則ち飲むべからず。若し復た人有つて一升の鹽を以つて大汝に投ずれば尙鹽味を覺えず、何に況や飲み叵からんや。何を以つての故に。水多く鹽少きが故に。罪も亦是の如し。偈に說かく、

升鹽を大海に投ずるもれば、　其の味に異有ること無し。
若し小器の水に投ずれば、　鹹苦にして飲むべからず。
人の大いに福を積み、　而も少の罪惡有るが如し。
惡道に隨せずして、　餘緣にして而も輕く受く。
又人福德薄くして、　而も少の罪惡有れば、
心志狹小なるが故に、　罪、惡道に墮せしむ。
若し人火勢弱く、　食少ければ食を消し難し。
此の人死せずと雖も、　其の身に大苦を受く。
若し人、身勢强く、　食少ければ食を消し難し。
此の人終に死せず。　但だ輕微の苦を受く。
善、福、慧の火弱くして、　而も少の惡罪有れば、
罪の是救ふ者無く、　能く地獄に墮せしむ。

【二】懺悔の功德を鹽と器の水とに喩ふ。

今我れ已に道を得て、　　而も惡業報を受く。

又、佛自ら說かく、

「大海、諸名山、　　丘陵、樹林木、
地水火風等、　　日月諸星宿、
若し劫燒の時、至らば　　皆盡く餘有ること無し。
業は無量劫に於いて、　　常に在りて而も失せず。
汝、具相の者、　　一切智人の師に遇へば、
先に造る所の罪業は、　　已に其の果報を償ふ。
今佛に値ふことを得て、　　垢盡きて聖男を證すと雖も
餘の因緣を以つての故に、　　木刺は猶身に在り。

是の故に懺悔は業罪を除くと言ふべからずと。答へて曰く、我は懺悔すれば則ち罪業滅して報果有ること無しとは言はず。我は懺悔すれば罪則ち輕薄にして少時に於いて受くと言へり。是の故に懺悔す。偈の中に說かく、「若し應に三惡道に墮せば、人身の中に受けんと願ふべし」と。[一〇] 又、如來智印經の中に說かく、「佛、彌勒に告げたまはく、諸の菩薩は深く心に阿耨多羅三藐三菩提を愛樂する者、罪有らば應に惡道に在つて報を受くべし。是の罪は輕微なり。後世に惡形を受くれば或は疾病多く、威德有ること無く、下賤の家、貧窮の家、邪見の家、邪業自活の家に生じ、意に違ふ處、憂愁多き處に生ず。國土破壞し、聚落破壞し、居家破壞し、愛する所破壞し、善知識に遇はず、常に法を聞かず、利養を得ず。若し匱弊を得ては常に自ら供せず。能く下賤に信敬せられ、諸の大人に於いて信敬を得ざらしむ。諸の福を修集する時、多く障礙有りて成就することを得ず。諸根闇鈍にして禪を習ふも意、亂れ、無漏覺意の功德を得ず。經法の宜しきに隨ふことを知らず、所趣乃

【一〇】業果を受けること。

じ、勸請・隨喜・廻向を行じ、空・無相・無願と和合して異ること無きことを得ん。復た次に懺悔は如意珠の如く、願に隨つて皆得。佛說きたまへるが如し。若し人婆羅門大姓の中に於いて生じ、刹利大姓の中に生じ、居士大家の中に生ぜんと欲せば、應に是の如く罪業を懺悔して覆藏する所無く、後に更に作らざるべし。若し人有つて四天王天上・忉利天上・夜摩天上・兜率天上・化樂天上・他化自在天上に生ぜんと欲せば、亦應に是の如く罪業を懺悔して覆藏する所無く、後に更に作らざるべし。若し人、梵世乃至、非想非非想處に生ぜんと欲せば、是の人も亦應に是の如く罪業を懺悔して覆藏する所無く、後に更に作らざるべし。若し人、須陀洹果・斯阿含果・阿那含果・阿羅漢果を得んと欲せば亦應に是の如く罪業を懺悔すべし。若し人三明・六神通・聲聞道中、自在力、盡く聲聞の功德、[一八]彼岸を得んと欲せば亦應に是の如く罪業を懺悔すべし、若し、人辟支佛道を得んと欲せば亦應に是の如く罪業を懺悔すべし。若し人一切の智慧、不可思議の智慧、無礙の智慧、無上の智慧を得んと欲せば亦應に是の如く罪業を懺悔して覆藏する所無く、後に更に作らざるべし。是の故に應に知るべし、懺悔には大果報有りと。

※問うて曰く、汝、懺悔は業障の罪を除くと言ふ。餘の經の中に說かく、「佛、阿難に告げたまはく、故に業を作さば必ず當に報を受くべし」と。又、阿毘曇の中に說かく、「諸業の因緣は空ならず、果報は失せず、滅せず」と。又經に說かく、「衆生は皆業に屬す。皆業に從つて有り、業に依止す。衆生は業に隨つて各々自ら報を受く、若しは現報、若しは生報、若しは後報なり」[一九]と。又、業報經の中に、「閻羅王、衆生の爲めに說きて言く、咄、衆生、汝が此の罪は父母の作れるにも、天の作れるにも、沙門・婆羅門の作れるにも非ず。汝自ら作れるなり、自ら應に報を受くべし」と。又、賢聖偈の中に說かく、

「實法は金剛の如し。　業力は將に勝つこと無し。

【一六】業障＝五障又は三障の一。五逆十惡等の重罪なり。

【一七】居士＝梵語迦羅越 Kulapati の譯。財に居るもの、家に居るものの意にして、在家にて佛道を志すもの。

【一八】彼岸＝到彼岸 Pāramitā の譯。業煩惱を河に見て生死の境界を此岸として、涅槃の境地を彼岸に譬へしもの。

※懺悔と業障との關係。

【一九】三報のこと。前出。

羅三藐三菩提の心を發さしめ、餘の恒河沙等の三千大千世界の中の衆生にも、皆亦阿耨多羅三藐三菩提心を發さしむるに其の一りの菩薩是の諸の菩薩に衣服・飲食・臥具・醫藥・資生の物を恒河沙等の劫に供養せば、是の布施は取相分別なり。是の如く諸の菩薩は各々恒河沙等の劫に於いて是の諸の菩薩に衣服・飲食・臥具・醫藥・資生の物を供養し、意に隨つて供養し、恭敬し、尊重し讃歎せんに、皆是れ取相の布施なり。若し菩薩般若波羅蜜所護の爲めに過去・未來・現在の諸佛の戒品・定品・慧品・解脱品・解脱知見品及び聲聞の[一五]五品及び諸の凡夫人の中に於いて善根を種ゑ、已に種ゑ、今種ゑ、當に種ゆべきに盡く和合し、稱量して遺餘あること無く、最上・最妙・最勝・無等・無等等、不可思議なる隨喜、福徳をして阿耨多羅三藐三菩提に廻向せしめ、是の念を作す。「我が是の福徳は能く佛道に至る」と。是の福徳に(比するに)、先の取相の福徳に於いては百分が一にも及ばず、千分・萬分・億分乃至算數、譬喩も及ぶ能はざる所なり。何を以つての故に。是の諸の菩薩は取相分別の布施なるが故に。復た恒河沙等の三千大千世界の衆生有つて皆阿耨多羅三藐三菩提心を發し、身に善業を行じ、口に善業を行じ、意に善業を行ず。復た恒河沙等の三千大千世界の衆生有りて皆阿耨多羅三藐三菩提心を發す。若し人、恒河沙等の劫に於いて惡口し、罵詈するも皆能く忍受し、恒河沙等の劫に於いて身心精進にして諸の懈怠を除き、攝心禪定して諸の亂想無きも、而も皆相を取れば、菩薩の法性に廻向する其の福の勝れたるには如かず。是の故に汝が先に説くが如き「是の如き事を作して何等の利をか得ん」とは、是の如き大福徳聚を得。是の故に、若し人、是の如き無量無邊不可思議の福徳聚を得んと欲せば、應に是の懺悔・勸請・隨喜・廻向を行ずべし。身命・利養・名聞を惜まず、晝夜の中に於いて常に應に勤行すべし。

*問うて曰く、汝但だ勸請・隨喜・廻向中の福徳を説く。何が故に懺悔中の福徳を説かざるやと。答へて曰く、諸の福徳の中に於いて懺悔の福徳は最も大なり。[一六]業障の罪を除くが故に善く菩薩道を行

【一五】諸佛の五品に對し、聲聞の戒、定、慧、解脱、解脱知見をいふ。

※懺悔の福徳。

が如し。何の因緣の故にか有らん。我れも亦是の如く佛の所知、所見に隨つて廻向せん」と。是の人、福を得ること多し。譬へば恒河沙等の三千大千世界の中の衆生皆十善道を成就せるが如し。菩薩の廻向の福德は最上・最妙・最勝・無比・無等・無等等なり。須菩提よ、是の恒河沙等の三千大千世界の衆生を置いて十善道を成就せしむると、若し恒河沙等の三千大千世界の衆生皆[一〇]四禪を得ると、其の福を此に比ぶるに、復た最上・最妙・最勝なり。[一一]四無量心・[一二]四無色定・[一三]五神通・[一四]須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果・辟支佛道を得るも亦是の如し、法の如く廻向せば福德は最上・最妙・最勝なり。須菩提よ、此の恒河沙等の三千大千世界の衆生を置いて皆辟支佛と作らしめ、若し恒河沙等の三千大千世界の衆生有つて皆阿耨多羅三藐三菩提心を發し、復た恒河沙等の三千大千世界の衆生有つて、其の一りの菩薩、取相の心を以つて是の諸の衆生に衣服・飲食・臥具・醫藥を供養し、恒河沙等の劫に於いて一切の樂具を以つて供養し、恭敬し、尊重し、讃歎す。一一の菩薩皆亦是の如くするに、須菩提よ、意に於いて云何ん。是の諸の菩薩は此の因緣を以つて福を得ること多きや不やと。甚だ多し、世尊よ、是の如き福德は算數、譬喩の及ぶ能はざる所なり。若し是の福德、形有らば恒河沙等の世界も受くること能はざる所なりと。佛、須菩提に告げたまはく、善哉、善哉、須菩提、是の菩薩は般若波羅蜜のために守護せられ善根を以つて法性に隨ひ廻向して得る所の福德に（比して）、先の諸の菩薩取相の布施の福德は百分が一にも及ばず、千分・萬分・百千萬億分乃至算數、譬喩も及ぶ能はざる所なり。何を以つての故に。先の諸の菩薩の取相分別の布施は皆是れ有量有數なり」と。又、般若波羅蜜廻向品の中に說かく、「佛、淨居天子に告げたまはく、此の恒河沙等の三千大千世界の衆生に置いて皆阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめ、餘の恒河沙等の三千大千世界の衆生に、一一の菩薩、取相の心を以つて是の諸の衆生に衣服・飲食・臥具・醫藥・資生の物を供養し、意に隨つて供養し、恒河沙等の劫に於てす。諸天子、若し是の恒河沙等の三千大千世界の衆生に阿耨多

【六】三支經＝宮本三友經に作る。現藏中にこの經名なし。
【七】舍利弗＝Sāriputra 舍利女の子。智慧第一と稱せらる。
【八】須菩提＝Subhūti 須扶提、須浮帝に作り善現、善吉と譯す。十大弟子の一人、解空第一と傳へらる。
【九】廻向＝前出。
【一〇】四禪＝釋願品第五に出づ。
【一一】四無量心＝釋願品第五に出づ。
【一二】四無色定＝釋願品第五に出づ。
【一三】五神通＝地相品第三に出づ。
【一四】須陀洹果等＝四果なり。調伏品第七に出づ。

卷の第六

(一)分別功德品第十

△問うて曰く、(二)懺悔・勸請・隨喜・廻向は應に云何か作し、晝夜の中に於いて幾時か行ずべしと。答へて曰く、

　右の膝を以つて地に著け、　偏に右の肩を袒ぎ、
　合掌して恭敬の心もて、　晝夜各々三時なり。

恭敬の相を以つての故に右膝を地に著け、偏に右肩を袒ぎて、合掌す。是の事は應に初夜の一時に一切の佛を禮し、懺悔・(三)勸請・隨喜・(四)廻向すべし。中夜、後夜皆亦是の如し。日の初分、日の中分、日の後分に於ても亦是の如し。一日一夜を合して(五)六時と爲す。一心に諸佛を念ずれば現に前に在すが如し」と。

問うて曰く、是の行を作し已つて何の果報をか得るやと。答へて曰く、

　若し一時に於いて行ずるに、　福德形有らば
　恒河沙の世界も　乃ち自ら受くべからず

若し一時の中に於いて此の事を行ずる者、(その)得る所の福德(にして)若し。形有らば、恒河沙等の無量無邊不可思議三千大千世界も受くべからさる所なり。(六)三支經除罪品の中に說くが如し。「佛、舍利弗に告げたまはく、若しは善男子、善女人、滿恒河沙等の三千大千世界の七寶を以つて諸佛に布施せんに、若し復た人有つて諸佛の轉法輪を勸請せば、此の福を勝と爲す」と。又佛、般若波羅蜜隨喜廻向品の中に於いて說きたまはく、「善哉、善哉、(八)須菩提よ、汝能く佛事を作す。諸の菩薩と與に(九)廻向の法を說く。若しは菩薩是の念を作さん。諸佛は是の善根、福德の本末、體相を知見する

【一】 この品は懺悔、勸請、隨喜、廻向の四功德を述べ、特に懺悔の功德を力說す。
△懺悔をなすべき時を解す。
【二】 懺悔＝悔悟の告白又は滅罪の儀式を云ふ。懺は梵語懺摩(Kṣama)の略で、悔は其とい譯語で梵漢並擧して懺悔の意ふ。
【三】 佛傳中の梵天勸請の如く說法を勸請すること。
※勸請、隨喜、廻向所得の果を解し、併せて有相、無相の布施を比較す。」
【四】 廻向＝廻らし向けること。即ち自己所修の善根功德を回轉して期する所に向けること。而して、己が善事を他ノ衆生に廻向することと、自他の佛果菩提に廻向することと二義あるが、その何れも大乘佛敎の標語である。
【五】 六時＝日の初分・中分・後分及び初夜・中夜・後夜なり。

法性廻向と名づく。若し菩薩、此の廻向に於いて取相し貪著せば、是を邪廻向と名づく。是の故に諸の菩薩摩訶薩は、應に諸佛所知の法相の如かるべし。是の法相を以つて廻向せば、能く阿耨多羅三藐三菩提に至る。是れを正廻向と名づく」と。

是の如く懺悔し、諸佛を勸請し隨喜し廻向すること、亦、復た是の如し。若し是の如く懺悔し勸請し隨喜し廻向せば是れを正廻向と名づく。

*問うて曰く、云何が名づけて諸佛の所知・所見・所許の懺悔・勸請・隨喜・廻向と爲すやと。答へて曰く、懺悔・勸請は先に說くが如し。隨喜・廻向は大品經の中の如し。須菩提、佛に白して言く、「世尊所說の菩薩は、過去・未來・現在の一切の諸佛及び諸の弟子、一切の衆生の所有る福德、善根に於いて、盡く和合稱量して最上を以つて隨喜す。世尊、云何か名づけて最上の隨喜と爲すや」と。佛、須菩提に告げたまはく、「若しは菩薩・過去・未來・現在の諸法に於いて取せず、念せず、見ず、得ず、分別せずして而も能く是の如く思惟す。是の諸法は皆憶想・分別・衆緣の和合に從つて一切の法有り。一切の法有るも實には生ぜず、從つて來の所無し。是の中乃至一法として已生・今生・當生も無く、亦已滅・今滅・當滅も無し、諸法の相は是の如し。我れ諸法の相に順つて隨喜す。隨喜し已つて、亦諸法の實相に隨つて阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是れを最上の隨喜廻向と名づく。復た次に須菩提・佛道を求むる善男子、善女人は、佛を謗るを欲せずんば、應に善根を以つて是の如く廻向すべし。應に是の念を作すべし。諸の佛心・佛智・佛眼の如き、是の善根・福德の本末・體相は、何によりて有るか知見したまふ。我れも亦是の如く諸佛の知見に隨つて隨喜し、諸佛の所許の如く、我れも亦是の如く善根を以つて廻向す。若し菩薩、是の如く廻向せば則ち諸佛を謗らず、亦過咎無く、深心に信解し、實の如く廻向す。是れを大廻向、具足廻向と名づく。復た次に須菩提よ、善男子、善女子諸の善根、福德を以つて應に是の如く廻向すべし。諸の賢聖の如くすべし。戒品・定品・慧品・解脫品・解脫知見品は、欲界に繫せず、色界に繫せず、無色界に繫せず、過去に在らず、未來に在らず。現在に在らず。三界に繫せざるを以つてこの故に。是の廻向も亦是の如く繫せず、廻向せらるる處にも亦繫せず。若し菩薩能く是の如く心に信解して、如實を得ば、是れを不失廻向・無毒廻向・

里ありとせらる。

※正廻向。

【七〇】緊那羅＝Kinnara 非人、歌人と譯す。人に似るも頭上に角あれば人非人と譯し、又帝釋の樂人なれば歌人と云ふ。

【七二】摩睺羅迦＝Mahoraga 大腹行と譯し、地龍なり。以上を八部衆と云ひ、肉眼を以て見ることを得ざれば冥衆八部とも、天龍八部、龍神八部とも云ふ。

道を斷じ、諸の戯論を滅し、煩惱の淤泥を乾し、諸の刺棘を滅し、諸の重擔を除き、已が利を逮得し、正智、解脱して心に自在を得、諸の有結を盡くす。無量無邊不可思議阿僧祇十方世界の一一の世界の中にも、亦無量無邊不可思議阿僧祇の諸佛出で、已に滅度したまふ。初發心より乃至佛を得て無餘涅槃に入り、遺法未盡に至るまで其の中間に於いて、是の諸佛の所有る善根、福德、六波羅蜜及び所受の辟支佛記の所有る善根に應じ、又、聲聞人の善根、若しは布施・持戒・修禪及び學・無學・無漏の善根及び諸佛の戒品・定品・慧品・解脱品・解脱知見品・大慈大悲等の無量の功德及び諸佛の所說の法有り。此の法の中に於いて人有り、信解し、受學して此の法利を得。是の諸の人等の所有る善根は此の法中及び凡夫の所種の善根及び諸の天[六四]・龍[六五]・夜叉[六六]・乾闥婆[六七]・阿修羅[六八]・迦樓羅[六九]・緊那羅[七〇]・摩睺羅伽[七一]に於いて、法を聞くことを得已つて諸の善心を生じ、乃至畜生も法を聞けば諸の善心を生ぜしめ、及び諸佛涅槃に入らんと欲したまふの時、衆生所種の善根、是の諸の善根、福德一切和合して稱量に遺餘無からしめ、最上・最妙・最勝・無上・無等・無等等の隨喜を以つて隨喜し已り、是の隨喜の生ずる所の福德を以つて阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。未來、現在の諸佛も亦是の如し。是の三世の諸佛の福德及び諸佛所生の福德に因つて心に皆隨喜し、阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。是の故に偈に說かく、

罪は應に是の如く懺すべし。　勸請と隨喜との福を
無上道に廻向すること、　皆亦應に是の如くすべし。
諸佛所說の如かるべし。　我れ罪を悔ひて、勸請し、
隨喜し及び廻向す。　皆、亦復是の如し。

無始の世界より來た、無量の佛道を遮する罪有り。應に十方諸佛の前に於いて懺悔し、諸佛を勸請し、隨喜し、廻向すること亦應に是の如かるべし。佛の所知・所見・所許の懺悔の如く、我れも亦

【六四】天＝deva 欲界の六天、色界の四禪天・無色界の四空處天なり。これ等は自然の果報殊勝にして身に光明を具すれば天と云ふ。六道の一。
【六五】龍＝Nāga Yakṣa 畜類にして水屬の王なり。
【六六】夜叉＝Yakṣa 新に夜叉と譯す。空中を飛行する鬼神なり。
【六七】乾闥婆＝Gandharva 又香陰と譯す。唯香臭を嗅ぎて長養すればなり。
【六八】阿修羅＝Asura 無酒、非天等と譯す。常に酒なければ無酒と云ひ、又果報天に類するも天に非ざれば非天と云ふ。常に帝釋と戰闘する神なり。
【六九】迦樓羅＝Garuḍa 金翅鳥と譯す。常に龍を食す。その兩翼相去ること三百三十六

身口意より生ず。　去來今の所有る、
三乘を習行するの人、　三乘を具足する者、
一切凡夫の福、　皆隨つて而も歡喜す。

「布施の福」とは、慳法を捨するより生ず。「持戒の福」とは、能く身口業を伏して生ず。「禪行」とは諸の禪定是れなり。「身口より生ず」とは、身口に因つて布施し、持戒し、迎來し、送去する等なり。「意に因つて生ず」とは、禪定・慈悲等なり。「去來今の所有」とは、一切の衆生三世の福德なり。「三乘を行ず」とは、聲聞乘・辟支佛乘・大乘を求むるなり。「三乘を具足す」とは、阿羅漢乘・辟支佛乘・佛乘を成就するなり。「一切」とは、皆盡くして餘無きなり。凡夫とは、未だ四諦を得ざる者是れなり。「福德」とは二種の業有り。善及び[六三]不隱沒無記の業是れなり。「隨喜」とは他人、福を作さば心に歡喜を生じ、稱へて以つて善と爲すなり。

※問うて曰く、汝以つて懺悔・勸請・隨喜を說きぬ。云何か廻向と爲すやと。答へて曰く、

我が所有る福德は、　一切皆和合して、
諸の衆生の爲めの故に、　正しく佛道に廻向す。

「我」れとは己が身なり。「所有る福德」とは若しは身より生じ、若しは口より生じ、若しは意より生じ、若しは布施に因つて生じ、若しは持戒に因つて生じ、若しは修禪に因つて生じ、若しは隨喜生に因つて生じ、若しは勸請に因つて生ず。是の如き等、及び餘の所有る善を皆所有る福德と名づく。「一切皆和合す」とは、心に諸の福德を念じ、稱量を合集して其の廣大を知るなり。「諸の衆生」とは、三界の衆生なり。「正」とは諸佛の如く廻向し、眞實の如く廻向し、菩提に廻向するなり。「菩提に廻向す」とは、諸の福德を廻して阿耨多羅三藐三菩提に向くるなり。又、隨喜廻向あり。此の二事、佛も亦自ら說きたまふ。菩薩摩訶薩有つて隨喜廻向せんと欲せば應に諸佛を念ずべし。三界相續の

※廻向。
【六三】不隱沒無記＝無覆無記の舊譯なり。覆とは煩惱のこと。異熟無記等なり。註【五六】參照。

なり。是れを一轉四相と名づく。是の苦諦、應に知るべし。是の苦集、應に斷ずべし。是の苦滅、應に證すべし。是の至苦滅道、應に修すべし。是れを第二轉四相と名づく、是の苦諦知り已り、是の苦集斷じ已り、是の苦滅證し已り。是の至苦滅道修し已る。是れを第三轉四相と名づく。「四相」とは四諦の中に眼・智・明・覺を生ず。聲聞乘・辟支佛乘・大乘に[六二]入ること有り。是れを法輪[六三]解脱と名づく。是の三乘の義を名づけて轉法輪と爲す。「諸の衆生を安樂にす」とは、五欲樂を名づけて安樂と爲さず、今世、後世に清淨安樂を得んが爲めに三乘に入る、是れを安樂と名づく。是の人、諸佛の轉法輪を勸請して諸の衆生をして涅槃の樂を受けしむ。若し未だ涅槃を得ずんば世間の樂を受けしむ。是の故に安樂と說く。「壽」とは業報を受くる因緣の故に、命根相續して住することを得。變化の如き所作は心業に隨つて而も住し、心業止めば則ち滅す。「勸請」とは至誠求願に名づく。諸佛の諸の衆生を觀ること巨細異り無し。是の故に請望を求めて願に從ふことを得、壽命を捨つること莫く、無量阿僧祇に住して衆生を度脫す。

　復た次に佛自ら勸請の法を說く。菩薩は應に是の言を作すべし。我れ現在十方の諸佛を禮して始めて阿耨多羅三藐三菩提を得たり。未だ法輪を轉ぜず。我れ今求請す。願はくは法輪を轉じ、法鼓を撃ち、法蠡を吹き、法幢を建て、大法祠を設け、大法炬を然さんと。是の法施を以つて衆生を滿足し、利益する所多く、安樂ならしむる所多く、世間を憐愍し、天人を饒益す。是の故に我れ今勸請す。是れを勸請と名づく。「諸佛の轉法輪久しく住す」とは、亦應に現在十方の諸佛に言ふべし。是の諸佛壽命を捨てんと欲す。我れ久住を請ふは、利益する所多く、安樂ならしむる所多く、世間を憐愍し、天人を饒益すればなり。

　*問うて曰く、汝已に懺悔、勸請を說きぬ。云何か名づけて隨喜と爲すやと。答へて曰く、

　　所有る布施の福、　　持戒、修禪行は、

【六二】人＝正藏には人言とあるも三本に依る。
【六三】脫＝正藏には說とあるも三本に據る。

※隨喜。

は復た隨喜す。若しは衆生に於いて愛語せざること有り、若しは斗秤を以つて欺誑して人を侵し、諸の邪行を以つて衆生を惱亂す。或は父母に孝せず、或は塔物及び四方の僧物を盜む。佛の所說の經戒に或は毁破する有り、和尙、阿闍梨に違逆す。若し人、聲聞乘、辟支佛乘を發して、大乘を發さば惡言もて毁辱し、輕賤し、嫌恨し、慳嫉して心を覆ふが故に諸の佛所に於いて或は惡口を起し、或は是法を非法なりと說き、非法を是法なりと說く。今是の罪を以つて現在の諸佛、知者、見者、證者の所に於いて盡く皆發露して敢へて覆藏せず、今より已後敢へて復た作さず。若し我れ罪有らば應に地獄・畜生・餓鬼・阿修羅の中に墮すべし。三尊に値はず、生れて諸難に在らん。願はくは此の罪を以つて今世に現に受けん。過去の諸の菩薩の佛道を求むる者も惡業の罪を懺悔せしが如し。我れも亦是の如く發露懺悔して敢へて覆藏せず、後に復た作さず。若し今諸の菩薩の佛道を求むる者惡業の罪を懺悔せば、我れも亦是の如く發露懺悔して敢へて覆藏せず、後に復た作さず。

未來の諸の菩薩佛道を求ねる者惡業の罪を懺悔するが如く、我も亦是の如く發露懺悔して敢へて覆藏せず、後に復た作さず。

過去、未來、現在の諸の菩薩、佛道を求むる者は惡業の罪を懺悔し、已に懺悔し、今懺悔し、當に懺悔するが如し。我れも亦是の如く惡業の罪を懺悔して敢へて覆藏せず、後に復た作さず。

問うて曰く、汝已に懺悔の法を說きね。云何か勸請を爲すや、と。答へて曰く、

十方一切の佛、　現在成道の者、
我れ轉法輪を請じて、　諸の衆生を安樂にす。
十方一切の佛、　若し壽命を捨てんと欲せば、
我れ今頭面に禮し、　勸請して久しく住せしめん。

「※轉法輪」とは四聖諦の義、三轉、十二相を說く。是れ苦諦、是れ苦集、是れ苦滅、是れ至苦滅道

※勸請。

「十方の諸佛」とは、現在一切の諸佛の命根成就して未だ涅槃に入らず。「十方」とは四方、四維、上下を名づく。「佛」とは應に知るべき所の事、悉く知つて餘り無きに名づく。「發露」とは諸佛の所に於いて一切の罪を發露して覆藏する所無く、後に復た作らざること、堤の水を防ぐが如し。「黑惡」とは智慧の明、無きが故に多くの衆惡、若しは不善の法、若しは隱沒[五六]無記を犯す。[五七]「三三種」とは身口意に惡を生じ、[五八]現報・生報・後報自ら作り、他をして作らしめ、隨喜して作す。「三種の煩惱より三種の煩惱を起す」とは、謂く、欲界に[五九]繫し。色界に繫し、無色界に繫し、若しは貪欲の煩惱を助け、若しは瞋恚の煩惱を助け、若しは愚癡の煩惱、若しは上煩惱、若しは中煩惱、若しは下煩惱を助く。「今身、先身盡く懺悔す」とは、今世先世に作す所の衆惡を盡く悔して餘無きなり。「地獄」とは八種の熱地獄、十種の寒氷地獄なり。「畜生」とは若しは地に生じ、若しは水に生じ。若しは無見、若しは二足、若しは[六〇]多足あり。「餓鬼」とは唾を食し、吐を食し、蕩滌汁を食し、膿血、屎尿等を食す。若し我が行業にして、應に此の三惡道を受くべき者は、願はくは是の罪をして此の身に現に受け、若しは後身に受けて、地獄・餓鬼・畜生の中に受くること莫からしめん。

*復た次に佛自ら懺悔の法を説きたまふ。若し菩薩罪を懺悔せんと欲せば應に是の言を作すべし。我れ今現在十方世界の中に於いて、諸佛、阿耨多羅三藐三菩提を得て法輪を轉じ、法雨を雨し、法鼓を擊ち、法蠡を吹き、法幢を建て、法を以つて布施し、衆生を滿足して利益する所多く、安隱ならしむる所多く、世間を憐愍し、天人を饒益せん。我れ今身口意を以つて頭面に現在の諸の佛足を禮す。諸佛は知者、見者にして世間の眼、世間の燈なり。我れ無始の生死より已來より起す所の罪業は貪欲・瞋恚・愚癡の爲めに逼まらるゝが故に或は佛を識らず、法を識らず、僧を識らず、或は衆罪を識らず、或は身口意に多く衆惡を作り、或は惡心を以つて佛身より血を出し、或は正法を毀滅し、衆僧を破壞し、眞人、阿羅漢を殺し、或は自ら十不善道を行じ、或は他を敎へて行ぜしめ、或

【五六】 隱沒無記＝有覆無記のこと。隱沒とは舊譯。無覆無記に對する語。無記とは善惡の何れとも定まらず（記すべきなく）、又善惡何れの結果を惹き起す力なき中間性をいふ。然るに無記の中、善惡の結果を招くべき力なきも、修行の妨げとなるものを有覆無記といふ。

【五七】 三三種＝身・口・意の各々に現報・生報・後報の三報あれば、總じて九種となればなり。

※懺悔。

【五八】 現報・生報・後報＝順現受業・順生受業・順後受業のこと。業の果が現世か次世か第三生か或はその後に受くる三種をいふ。

【五九】 繫＝繫縛の義、煩惱は身心に纒綿して自由ならざらしむるを以て煩惱に名づく。

【六〇】 二足は佛と人天をいひ、無足とは蛇等を云ひ、多足とは百足等を云ふ。

德菩薩・離諸陰蓋菩薩・心無閡菩薩・一切行淨菩薩・等見菩薩・不等見菩薩・三昧遊戲菩薩・法自在菩薩・法相菩薩・明莊嚴菩薩・大莊嚴菩薩・寶頂菩薩・寶印手菩薩・常擧手菩薩・常下手菩薩・常慘菩薩・常喜菩薩・喜王菩薩・得辯才音聲菩薩・虛空雷音菩薩・持寶炬菩薩・勇施菩薩・帝網菩薩・馬光菩薩・空無閡菩薩・寶勝菩薩・天王菩薩・破魔菩薩・電德菩薩・自在菩薩・頂相菩薩・出過菩薩・師子吼菩薩・雲蔭菩薩・能勝菩薩・山相幢王菩薩・香象菩薩・大香象菩薩・白香象菩薩・常精進菩薩・不休息菩薩・妙生菩薩・華莊嚴菩薩・觀世音菩薩・得大勢菩薩・水王菩薩・山王菩薩・帝網菩薩・寶施菩薩・破魔菩薩・莊嚴國土菩薩・金髻菩薩・珠髻菩薩有り。是の如き等の諸の大菩薩皆應に憶念し、恭敬し、禮拜して阿惟越致地を求むべし。

除業品　第十[五五]

△問うて曰く、但だ阿彌陀等の諸佛を憶念し及び餘の菩薩を念じて阿惟越致を得るか。更に餘の方便有りや、と。答へて曰く、阿惟越致地を求むる者は但だ憶念し、稱名し、禮敬するのみに非ず。復た應に諸の佛所に於いて懺悔し、勸請し、隨喜し、廻向すべし、と。

◎問うて曰く、是の事は何の謂ぞや、と。答へて曰く、

十方無量の佛は　知るところ盡さゞる無し。
我れ今悉く前に於いて、　諸の黒惡を發露す。
三三九種を合す。　三に從つて煩惱起る。
今身若しは先身の　是の罪、盡く懺悔すべし。
三惡道の中に於いて　若し應に業報を受くべくんば、
願はくは今身に於いて償ひ、　惡道に入りて受けさらん。

[五五] この品は除業の方便として懺悔、勸請、隨喜、廻向を述ぶ。
△已に犯せる罪業を除滅すべき方便を釋す。
◎罪障は今身に受くべし。

恭敬して稱揚す。　是の故に頭面に禮す。
現在十方界の、　不可計の諸佛は、
其の數恒沙に過ぎ、　無量にして邊有ること無し。
諸の衆生を慈愍して、　常に妙法輪を轉じたまふ。
是の故に我れ恭敬し、　歸命し、稽首して禮す。
未來世の諸佛は、　身色、金山の如く
光明、量有ること無し。　衆相自ら莊嚴し、
出世して衆生を度し、　當に涅槃に入るべし。
是の如き諸の世尊　我れ今頭面に禮す。

※復た應に[五三]諸の大菩薩を憶念すべし。善意菩薩・善眼菩薩・聞月菩薩・尸毘王菩薩・一切勝菩薩・知大地菩薩・大藥菩薩・鳩舍菩薩・阿離念彌菩薩・頂生王菩薩・喜見菩薩・欝多羅菩薩・薩和檀菩薩・長壽王菩薩・羼提菩薩・韋藍菩薩・睒菩薩・月蓋菩薩・明首菩薩・法首菩薩・成利菩薩・彌勒菩薩・[五四]復た金剛藏菩薩・金剛首菩薩・無垢藏菩薩・無垢稱菩薩・除疑菩薩・無垢德菩薩・網明菩薩・無量明菩薩・大明菩薩・無盡意菩薩・意王菩薩・無邊意菩薩・日音菩薩・月音菩薩・美音菩薩・美音聲菩薩・大音聲菩薩・堅精進菩薩・常堅菩薩・堅發菩薩・莊嚴菩薩・常悲菩薩・常不輕菩薩・法上菩薩・法意菩薩・法喜菩薩・法首菩薩・法積菩薩・發精進菩薩・智慧菩薩・淨威德菩薩・那羅延菩薩・善思惟菩薩・法思惟菩薩・跋陀婆羅菩薩・法益菩薩・高德菩薩・師子遊行菩薩・喜根菩薩・上寶月菩薩・不虛德菩薩・龍德菩薩・文殊師利菩薩・妙音菩薩・雲音菩薩・勝意菩薩・照明菩薩・勇衆菩薩・勝衆菩薩・威儀菩薩・師子意菩薩・上意菩薩・益意菩薩・增意菩薩、寶明菩薩・慧頂菩薩・樂說頂菩薩・有德菩薩・觀世自在王菩薩・陀羅尼自在王菩薩・大自在王菩薩・無憂德菩薩・不虛見菩薩・離惡道菩薩・一切勇健菩薩・破闇菩薩・功德寶菩薩・花威德菩薩・金瓔珞明

※諸大菩薩。
【五三】一百四十三菩薩名あり、此中、初二十二菩薩は過去に於ける釋迦佛本生の菩薩身なり。
【五四】復た金剛藏菩薩以下百二十一尊は現在十方の菩薩なり。

普賢世界の中に、　佛有り、勝敵と號す。
我れ今(佛)と及び法寶、僧寶とに　歸命して禮す。
善淨集世界の　佛を王幢相と號す。
我れ今[五一](佛)と及び法寶、僧寶とを　稽首して禮す。
離垢集世界の　無量功德明は、
十方に自在なり。　是の故に稽首して禮す。
不誑世界の中に、　無礙藥王佛あり。
我れ今(佛)と及び法寶、僧寶とを　頭面に禮す。
[五二]金集世界の中の、　佛を寶遊行と號す。
我れ今(佛)と及び法寶、僧寶とを　頭面に禮す。
美音界の寶花、　安立山王佛、
我れ今(佛)と及び法寶、僧寶とを、　頭面に禮す。
今是の諸の如來、　東方界に住在す。
我れ恭敬の心を以つて、　稱揚し、歸命して禮す。
唯だ願はくは諸の如來、　深く加するに慈愍を以つてし、
身を現じて我が前に在りて、　皆自ら見ることを得せしめたまへ。

*復た次に過去、未來、現在の諸佛盡く應に總じて念じ、恭敬し、禮拜すべし。偈を以つて稱讚す。

過去世の諸佛は、　衆の魔怨を降伏し、
大智慧の力を以つて、　廣く衆生を利す。
彼の時の諸の衆生は、　心を盡して皆供養し、

【五一】佛寶を略せること上例に準ずべし。

【五二】金、正藏には今なるも三本による。

※總三世佛。

一切法に通達す。　無量にして邊有ること無し。
是の故に我れ　第一無上尊に歸命す。
迦葉佛世尊は　眼、優蓮華の如し。
弱拘樓陀樹の　下に於いて佛道を成ず。
三界に畏るゝ所無く、　行歩すること象王の如し。
我れ今自ら歸命して、　無極尊を稽首す。
釋迦牟尼佛は、　阿輸陀樹の下に、
魔、怨敵を降伏し、　無上道を成就したまふ。
面貌滿月の如く、　清淨にして瑕塵無し。
我れ今稽首して、　勇猛第一尊を禮す。
*當來彌勒佛は、　那伽樹の下に坐して、
廣大心を成就し、　自然に佛道を得たまふ。
功德甚だ堅牢にして　能く勝るゝこと有る者無し。
是の故に我れ自ら　無比の妙法王に歸す。

△復た[五〇]德勝佛・普明佛・勝敵佛・王相佛・相王佛・無量功德明自在王佛・藥王無閡佛・寶遊行佛・寶華佛・安住佛・山王佛有り。亦應に憶念し、恭敬し、禮拜すべし。偈を以つて稱讃す。

無勝世界の中に、　佛有り、德勝と號す。
我れ今(佛)と及び法寶、僧寶とを　稽首して禮す。
隨意喜の世界に、　佛有り、普明と號す。
我れ今自ら(佛)と及び法寶、僧寶とに　歸命す。

※當來彌勒佛。

△東方八佛。
【五〇】この一段は他方現在の十方中、東方八佛を擧げて餘方を略す。但し長行と偈頌とにて合せて十一佛名あるも異名同體（王相と相王との如く）あるを以て東方十一佛とも東方八佛ともいふ。

*又、△亦、應に[四九]毘婆尸佛・尸棄佛・毘首婆伏佛・拘樓珊提佛・迦那迦牟尼佛・迦葉佛・釋迦牟尼佛及び未來世の彌勒佛を念ずべし。皆應に憶念し、禮拜すべし。偈を以つて稱讚す。

毘婆尸世尊は　無憂道樹の下に
一切智を成就す。　微妙の諸の功德あり。
正しく世間を觀ず。　其の心解脱を得たり。
我れ今五體を以つて　無上尊に歸命す。
尸棄佛世尊は　邠他利
道場の樹下に在して坐し、　菩提を成就す。
身色比有ること無く、　紫金山を然すが如し。
我れ今自ら三界の　無上尊に歸命す。
毘首婆世尊は、　娑羅樹の下に坐して
自然に一切の　妙智慧に通達することを得。
諸の人天の中に於いて、　第一にして上有ること無し。
是の故に我れ　一切最勝尊に歸命す。
迦求村大佛は、　阿耨多羅
三藐三菩提を得、　尸利沙樹の下にて、
大智慧を成就して、　永く生死を脱す。
我れ今歸命して　第一無比の尊を禮す。
迦那含牟尼　大聖無上尊は、
優曇鉢樹の下に　成就して佛道を得、

※過未八佛。
△過去七佛。
【四九】過去七佛中、初三佛は過去莊嚴劫、後四佛は現在賢劫の出世とせらる。過去七佛の解釋は諸經論に出づるが故にそれに讓る。

本、佛道を求むる時、
諸經の所說の如し。
彼の佛の言說する所、
美言にして益する所多し。
此の美言の說を以つて
已に度し、今、猶、度す。
人天中の最尊にして、
七寶冠に[四五]摩尼あり。
一切の賢聖衆、
咸皆共に歸命す。
彼の[四六]八道の船に乘りて、
自ら度し、亦彼を度す。
諸佛は無量劫をもて、
猶尙盡すこと能はず。
我れ今亦是の如く、
是の福因緣を以つて、
我れ今先世に於いて、
願はくは我れ佛所に於いて、
此の福因緣を以つて
願はくは諸の衆生の類、

諸の奇妙の事を行ずること、
頭面に稽首して禮す。
諸の罪根を破除し、
我れ今稽首して禮す。
諸の[四四]著樂の病を救ひ、
是の故に稽首して禮す。
諸天頭面に禮す。
是の故に我れ歸命す。
及び諸の人天衆
是の故に我れも亦禮す。
能く難度の海を度し、
我れ(この)自在の者を禮す。
其の功德を讚揚するも、
清淨の人に歸命す。
無量の[四七]德を稱讚す。
願はくは佛、常に我れを念じたまへ。
福德若しは大小、
心常に[四八]清淨を得、
獲る所の上妙の德、
皆亦悉く當に得べし。

【四四】常樂我淨の四倒の一を舉ぐ。

【四五】摩尼＝mani. 寶のこと。正藏には摩足とあるも三本による。

【四六】八道の船＝八正道のこと。入初地品第二に出づ。

【四七】阿彌陀佛因願果成の內外功德をいふ。以下自利利他の自の志願を述ぶ。

【四八】先世以來修するところの大小の福德によりて、淨土(佛所)に於いて心清淨を願ふ。

善より[三九]淨明を生ずること、
[四〇]二足中の第一なり。
若し人、作佛を願つて
時に應じて爲めに身を現じたまふ。
彼の佛の本願力に、
來つて供養し、法を聽く。
彼の土の諸の菩薩は
以つて自ら身を莊嚴す。
彼の諸の大菩薩は
十方の佛を供養す。
若し人善根を種うるも
信心清淨なる者は
十方現在の佛は、
彼の佛の功德を歎ず。
其の土は嚴飾を具し、[四二]
功德甚だ深厚なり。
佛足の[四三]千輻輪は、
見る者皆歡喜す。
眉間の白毫の光は
面光の色を增益す。

無量無邊數にして、
是の故に我れ歸命す。
心に阿彌陀を念ぜば、
是の故に我れ歸命す、
[四一]十方の諸の菩薩、
是の故に我れ稽首す。
諸の相好を具足し、
我れ今歸命して禮す。
日日三時に於いて、
是の故に稽首して禮す。
疑へば則ち華開かず。
華開いて則ち佛を見る。
種種の因緣を以つて、
我れ今歸命して禮す、
彼の諸の天宮に殊り、
是の故に佛足を禮す。
柔軟にして蓮華の色あり。
頭面に佛足を禮す。
猶し清淨の月の如く、
頭面に佛足を禮す。

【三九】淨明とは般若の智慧のこと。
【四〇】人天及び佛をいふ。
【四一】以下彼土の菩薩を嘆ずる中、德法と莊嚴と供養（遊戲十方）とに分かる。
【四二】以下の九偈中、この一偈は淨土(依報)を、次の七偈は佛身(正報)を、終り一偈に二利の德福を擧ぐ。
【四三】三十二相の一なり。正報七偈中、佛足と白毫と因行と說法と人天の最尊等の諸佛德を擧ぐ。

若し人命終の時
即ち無量の徳を具す。
人能く是の佛の
即時に必定に入る。
彼の國の人は命終して、
惡地獄に墮せず。
若し人、彼の國に生ぜば、
[三三]阿修羅に墮せず。
人天の身相同じきこと
諸の勝所の歸する[三五]所なり。
其れ彼の國に生ずること有れば
十方普く無礙なり。
其の國の諸の衆生は
亦、宿命智を具す。
彼の國土に生ずる者は、
彼此の心を生ぜず。
三界の獄を超出して
[三七]聲聞衆無量なり。
彼の國の諸の衆生は
自然に[三八]十善を行じ、

彼の國に生ずることを得ば、
是の故に我れ歸命す。
無量力の功德を念ぜば
是の故に我れ常に念ず。
設ひ應に諸苦を受くべきも、
是の故に歸命して禮す。
終に三趣及與
我れ今歸命して禮す、
猶し金山の頂の如し。[三四]
是の故に頭面に禮す。
[三六]天眼、耳通を具し、
聖中尊を稽首す。
神變及び心通、
是の故に歸命して禮す。
我無く、我所無く、
是の故に稽首して禮す。
目は蓮華葉の如く、
是の故に稽首して禮す。
其の性皆柔和にして
衆聖の王を稽首す。

【三三】魏譯第二不更惡趣の願（梵本第二願）に當る。
【三四】魏譯並に梵本の第三悉皆金色願、第四無有好醜願に當る。
【三五】淨土の勝相をいふ。
【三六】天眼天耳より我我所なし迄は魏譯の第五、六、七、八、九、十の六通の願に當る。梵本の順序異るも、同じく第五以下の六通の願に當る。
【三七】魏譯第十四聲聞無數の願（梵本第十二願）に當る。
【三八】本書第十三品より第十五品參照。

阿彌陀等の佛　　及び諸の大菩薩あり。
名を稱して一心に念ずれば、　　亦不退轉を得。

更に阿彌陀等の諸佛有り、亦、應に恭敬し、禮拜して其の名號を稱すべし。*今當に具に說くべし。無量壽佛・世自在王佛・師子意佛・法意佛・梵相佛・世相佛・世妙佛・慈悲佛・世王佛・人王佛・月德佛・寶德佛・相德佛・大相佛・珠蓋佛・師子鬘佛・破無明佛・智華佛・多摩羅跋栴檀香佛・持大功德佛・雨七寶佛・超勇佛・離瞋恨佛・大莊嚴佛・無相佛・寶藏佛・德頂佛・多伽羅香佛・栴檀香佛・蓮華香佛・莊嚴道路佛・龍蓋佛・雨華佛・散華佛・華光明佛・日音聲佛・蔽日月佛・琉璃藏佛・梵音佛・淨明佛・金藏佛・須彌頂佛・山王佛・音聲自在佛・淨眼佛・月明佛・如須彌山佛・日月佛・得衆佛・華生佛・梵音說佛・世主佛・師子行佛・妙法意師子吼佛・珠寶蓋珊瑚色佛・破癡愛闇佛・水月佛・衆華佛・開智慧佛・持雜寶佛・菩提佛・華超出佛・眞琉璃明佛・蔽日明佛・持大功德佛・得正慧佛・勇健佛・離諂曲佛・除惡根栽佛・大香佛・道映佛・水光佛・海雲慧遊佛・德頂華佛・華莊嚴佛・日音聲佛・月勝佛・琉璃佛・梵聲佛・光明佛・金藏佛・山頂佛・山王佛・音王佛・龍勝佛・無染佛・淨面佛・月面佛・如須彌佛・栴檀香佛・威勢佛・燃燈佛・難勝佛・寶德佛・喜音佛・光明佛・龍勝佛・離垢明佛・師子佛・王王佛　力勝佛・華齒佛・無畏明佛・香頂佛・普賢佛・普華佛・寶相佛・是の諸の佛世尊、現に十方の淸淨世界に在す。皆名を稱して憶念すべし。△阿彌陀佛の[三三]本願は是の如し。若し人我れを念じて名を稱し、自ら歸せば卽ち必定に入り、阿耨多羅三藐三菩提を得んと。是の故に常に應に憶念すべし。偈を以つて稱讃す。

無量光明の慧あり、　　身、眞金山の如し。
我れ今、身口意をもて　　合掌し、稽首して禮す。
金色の妙光明は　　普く諸の世界に流れ、
物に隨つて其の色を示す。　　是の故に稽首して禮す。

※百七佛。【三二】　以上は善德等の十佛等の聞名稱信の易行を說き、以下阿彌陀佛を中心として餘佛・餘菩薩の易行を述ぶ。此の中五段或は六段あり、論文の表面よりは第一段百七佛章に當る。但し前後を通じて阿彌陀佛の信仰を主とせり。これに就いては解題を看よ。

△阿彌陀佛の本願。【三三】　此易行品が無量壽經と密接なる關係あるは解題中に述べしが如し。從つてこの本願は同經魏譯第十八願（梵本第十九第十七）と表裏關係に在るが如し。念我、稱名、自歸、必定を念佛往生の願文に對照すべし。これ以下の諸文にもそれぞれ同經の願文と對應するもの少からず。左にその三四例を標註す。

佛を三乘行と號す。　無量の相もて身を嚴り、
智慧の光、無量にして、　能く無明の闇を破し、
衆生をして憂惱無からしむ。　是の故に稽首して禮す。
上方の衆月界は　衆寶の莊嚴する所なり。
大德の聲聞衆と、　菩薩と量有ること無し。
諸聖中の師子たり。　號して廣衆德と曰ふ。
諸魔の怖畏する所なり。　是の故に稽首して禮す。
下方廣世界の　佛を號して明德と爲す。
身相は妙にして、　[二九]閻浮檀金山に超絕す。
常に智慧の日を以つて、　諸の善根の華を開かしむ。
寶土甚だ廣大なり。　我れ遙に稽首して禮す。
過去無數劫に、　佛有り、海德と號す。
是の諸の現在佛は、　皆彼に從つて願を發せり。
[三〇]壽命、量有ること無く、　光明、照すこと極り無し。
國土甚だ淸淨にして、　名を聞いて定んで作佛せんと。
今現に十方に在して、　具足して十力を成ず。
是の故に稽首して。　人天中の最尊を禮す。

[三一*]問うて曰く、「但だ是の十佛の名號を聞いて、執持して心に在けば、便ち阿耨多羅三藐三菩提を退せざることを得るか。更に餘の佛、餘の菩薩の名有つて、阿惟越致に至ることを得と爲すや」、と。
答へて曰く、

【二九】閻浮檀金山＝閻浮檀金とは Jambunada-suvarṇa の譯にして金の名なり、其の色赤黄にして紫焰氣を帶ぶ。閻浮は樹の名、檀は河、閻浮樹の下に河あり、この河より金を出せば閻浮檀金と云ふ。佛の身相の美しさを喩へしもの。

【三〇】眞宗の宗乘にては此の海德佛に就き阿彌陀佛との同異を論ぜり。但し文の顯相よりは別佛とすべし。

※十方諸佛讚。

身光智慧明にして、　照す所邊際無し。
其の名を聞くこと有る者は、　即ち不退轉を得。
我れ今稽首して禮す。　願くは生死の際を盡くさせたまへ。
北方無動界の　佛を號して相德と爲す。
身に衆の相好を具へ、　以つて自ら莊嚴す。
魔怨の衆を摧破して、　善く諸の人天を化す。
名を聞くもの不退を得。　是の故に稽首して禮す。
東南月明界に、　佛有り無憂と號す。
光明日月に踰えて、　遇ふ者は煩惱を滅す。
常に衆の爲めに說法し、　諸の內外の苦を除く。
十方の佛、稱讃す。　是の故に稽首して禮す。
西南衆相界の　佛を號して寶施と爲す。
常に諸の法寶を以つて、　廣く一切に施す。
諸天頭面に禮して、　寶冠足下に在り。
我れ今五體を以つて、　寶施尊に歸命す。
西北衆音界の　佛を號して華德と爲す。
世界に衆の寶樹ありて、　妙法音を演出し、
常に七覺の華を以つて、　衆生を莊嚴す。
白毫相は月の如し。　我れ今頭面に禮す。
東北の安隱界は、　諸寶の合成する所なり。

の導師にして能く應作、不應作を敎示するが故なり。
(九)佛＝Buddha佛とは知者、覺者の意。
(一〇)世尊＝Bhagavat 又は Nātha 世に尊重せらるるが故なり。
【二〇】初中後云云＝此經を說くに始終を通じて、語も義も善備せること。
【二一】地水等＝四大、色法の所依たる四種の法を云ふ。即ち四大種の略稱にして地・水・火・風此れなり。
【二二】欲界等＝三界、入初地品第二に出づ。
【二三】色受等＝五陰(蘊)阿惟越致相品第八に出づ。
【二四】無生法忍＝入初地品第二に出づ。
【二五】餘の九佛＝第二の南方旃檀佛より第十上方廣衆德までをいふ。
【二六】解＝正藏には解字なし今三本に據る。新佛敎九の九に荻原雲來博士の善解に就いて原語の推定がある。
【二七】根・力・覺・道等＝五根、五力、七覺支、八聖道等の三十七道品を云ふ。
【二八】以下二十五偈中、初二偈は總讃、次の二十二偈は別讃、後の三偈は結讃なり。別偈は十佛に對して各々二偈。

上中下の精進を說くが故に號して三乘行と爲すと。「明德佛」とは、下方、此の無量無邊恒河沙等の佛土を去つて世界有り、廣大と名づけ、佛を明德と號す。今現に在して法を說きたまふ。明は身明、智慧明、寶樹光明に名づく。是の三種の明もて常に世間を照す。「廣衆德」とは、上方、此の無量無邊恒河沙等の佛土を去つて世界有り、衆月と名づけ、佛を廣衆德と號し、今現に在して法を說きたまふ。其の佛の弟子福德廣大なるが故に廣衆德と號す。今是の十方の佛、善德を初と爲し、廣衆德を後と爲す。若し人一心に其の名號を稱すれば卽ち阿耨多羅三藐三菩提を退せざることを得。此の
〔二〇〕偈に說くが如し。

若し人有りて、是の諸佛の、　名を說くを聞くことを得ば、
卽ち無量の德を得ん。　寶月の爲めに說くが如し。
我れ是の諸佛を禮す。　今現に十方に在す。
其の名を稱すること有る者は、　卽ち不退轉を得。
東方に無憂界あり、　其の佛を善德と號す。
色相金山の如く、　名聞、邊際無し。
若し人、名を聞かん者、　卽ち不退轉を得。
我れ今合掌して禮す。　願くは悉く憂惱を除きたまへ。
南方に歡喜界あり、　佛を栴檀德と號す。
面の淨きこと滿月の如く、　光明、量有ること無し。
能く諸の衆生の　三毒の熱惱を滅す。
名を聞くもの不退を得。　是の故に稽首して禮す。
西方に善世界あり、　佛を無量明と號す。

△下方明德佛。

◎上方廣衆德佛。

【一九】如來の十號。佛の尊稱なり。如來の功德を形容せしもの、
(一)應供＝Arhat 人天の供に應ずべきが故なり。
(二)正遍知＝Samyaksambuddha 正しく遍く一切の法を知るが故なり。
(三)明行足＝Vidyācaraṇasampanna 三明の行を具足するが故なり。
(四)善逝＝Sugata 一切智を以て八正道を行じて涅槃に入るが故なり。
(五)世間解＝Lokavit 世間の有情非情をよく解するが故なり。
(六)無上士＝Anuttara 諸法の中に於て涅槃無上なる如く、一切衆生の中に於て佛も亦無上なるが故なり。
(七)調御丈夫＝Puruṣadamyasārathi 佛は或る時は柔軟語もて、或る時は苦切語もて能く丈夫を調御して善道に入らしむるが故なり。
(八)天人師＝Śāstā 佛は人天

寶月よ、其の佛の本願力の故に、若し他方の衆生有りて、先佛の所に於いて諸の善根を種うれば、是の佛、但だ光明を以つて、身に觸れて卽ち無生法忍を得。寶月よ、若し善男子、善女人、是の佛名を聞いて能く信受する者は、卽ち阿耨多羅三藐三菩提を退せず。餘の[二五]九佛の事も皆亦是の如し今當に諸佛の名號及び國土の名號を解說すべし。「善德」とは、其の德、淳善にして但だ安樂のみ有り。諸天、龍神の、福德の衆生を惑惱するが如きには非ず。

「栴檀德」とは、南方此の無量無邊恒沙等の佛土を去つて世界有り、歡喜と名づく。佛を栴檀德と號し、今現に在して法を說きたまふ。譬へば栴檀の香しくして而も清涼なるが如く、彼の佛の名稱の遠く聞ゆること香の流布するが如し。衆生の三毒の火熱を滅除して清涼を得せしむ。「無量明佛」とは、西方此の無量無邊恒河沙等の佛土を去つて世界有り、[二六]善解と名づく。佛を無量明と號し、今現に在して法を說きたまふ。其の佛の身光及び智慧明炤にして無量無邊なり。「相德佛」とは、北方、此の無量無邊恒河沙等の佛土を去りて世界有り、不可動と名づく。佛を相德と名づけ、今現に在して法を說きたまふ。其の佛の福德高顯なること猶し幢相の如し。「無憂德」とは、東南方、此の無量無邊恒河沙等の佛土を去つて世界有り、月明と名づけ、佛を無憂德と號し、今現に在して法を說きたまふ。其の佛の神德は諸の天人をして憂愁有ること無からしむ。「寶施佛」とは、西南方此の無量無邊恒河沙等の佛土を去つて世界有り、衆相と名づけ、佛を寶施を號し、今現に在して法を說きたまふ。其の佛、諸の無漏の[二七]根、力、覺、道等の寶を以つて常に衆生に施す。「華德佛」とは、西北方、此の無量無邊恒河沙等の佛土を去つて世界有り、衆音と名づけ、佛を華德と號す。今現に在して法を說きたまふ。其の佛の色身は猶し妙華の如し。其の德無量なり。「三乘行佛」とは、東北方、此の無量無邊恒河沙等の佛土を去つて世界有り、安隱と名づけ、佛を三乘行と號す。今現に在して法を說きたまふ。其の佛、常に聲聞行、辟支佛行、諸の菩薩行を說きたまふ、有る人の言く、

當る。

【二八】垢＝堆の本字。宋元は埠に作り、明は埴に作る。

●南方栴檀德佛。

◎西光無量明佛。

△北方相德佛。

◎東南方無憂德佛。

※西南方寶施佛。

●西北方華德佛。

※東北方三乘行佛。

西北の華德佛、　　東北の[14]三乘行、
下方の明德佛、　　上方の廣衆德、
是の如き諸の世尊、　今現に十方に在す。
若し人、疾く　　不退轉地に至らんと欲せば
應に恭敬心を以つて、　執持して[15]名號を稱すべし。

若し菩薩、此の身に於いて阿惟越致地に至ることを得て、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲せば、應當に是の十方の諸佛を念じて其の名號を稱すべし。[16]寶月童子所問經阿惟越致品の中に說くが如し。

△佛、寶月に告げたまはく、東方、此を去ること無量無邊不可思議恒河沙等の佛土を過ぎて世界有り、無憂と名づく。其の地平坦にして七寶合成せり、紫磨、金縷をもて其の界を交絡し、寶樹羅列して以て莊嚴と爲す。[17]地獄・畜生・餓鬼・阿修羅道及び諸の難處有ること無く、清淨無穢にして沙礫、瓦石、山陵、[18]垍阜、深坑、幽壑有ること無し。天より常に華を雨らし、以つて其の地に布く。時に世に佛有り、號して善德如來・[19]應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と曰ふ。大菩薩衆、恭敬し圍遶す。身相光色にして大金山を燃すが如く、大珍寶聚の如し。諸の大衆の爲めに廣く正法を說きたまふ。[20]初、中、後に善く、辭有り義有り。所說雜せず、清淨を具足して如實不失なり。何らをか不失と謂ふや。[21]地・水・火・風を失せず、[22]欲界・色界・無色界を失せず、[23]色・受・想・行・識を失せず。寶月よ、是の佛、成道より已來、六十億劫を過ぐ。又、其の佛國は晝夜異なること無し。但だ此の間の閻浮提の日月歲數を以つて彼の劫壽を說く。其の佛の光明は常に世界を照す。一說法に於いて無量無邊千萬億阿僧祇の衆生をして、[24]無生法忍に住せしめ、此の人數に倍して初忍、第二、第三忍に住することを得せしむ。

を擁護す云云」と云へり。

【一一】信方便＝易行道は「久しうして」の難行と異り、「疾く」信の方便に因つて不退に到るを指す。信方便に關しては眞宗獨特の解釋あるも略す。

【一二】以下易行道を明す中、初に十方十佛、次に餘佛餘菩薩の易行を說く。この第二段餘佛菩薩中・一に百七佛章・二に過未八佛章・三に東方八佛章・四に總三世佛章・五に諸大菩薩章の五小段に分る。解題參照。

△**東方善德佛。**

【一三】西方の無量明佛＝此の佛と西方の阿彌陀佛と同か異かに就きて古來兩說あり。その孰れとするも可。小阿彌陀經西方段の無量壽佛と阿彌陀佛との關係に類す。

【一四】三乘行＝正藏には三行佛とあれども明本による。

【一五】名號＝稱名を易行とすること。羅什譯、阿彌陀經に「執持名號」の語あり。

【一六】寶月童子所問經＝漢譯されずと傳ふ。宋施護譯に大乘寶月童子問法經一卷あり、或はこの類經か。

【一七】地獄・餓鬼・畜生＝これを六道中の三惡道と云ひ、阿修羅は人界・天上と共に三善道と稱せらるるもその最下に

越致を得ずんば、其の中間に於いて、應に身命を惜まず、晝夜精進して、頭燃を救ふが如くすべし。
[九]助道の中に說くが如し。

菩薩未だ阿惟越致地に、　至ることを得ずんば、
應に常に勤めて精進して、　猶し頭燃を救ひ、
重擔を荷負するが如くすべし。　菩提を求むるが爲めの故に、
常に應に勤めて精進して、　懈怠の心を生ぜざれ。
聲聞乘、　辟支佛乘を求むる者の若き、
但だ己が利を成す爲めにすとも、　常に應に勤めて精進すべし。
何に況んや菩薩は、　自ら度し、亦彼を度せんとするに於てをや。
此の二乘の人に於て、　億倍して應に精進すべし。

大乘を行ずる者には、佛、是の如く說きたまへり。發願して佛道を求むることは、三千大千世界を擧ぐるよりも重し。汝、阿惟越致は是の法甚だ難し、久しうして乃ち得べし、若し易行道有りて、疾く阿惟越致地に至ることを得るやと言ふは、是れ乃ち怯弱下劣の言なり。是れ大人志幹の說に非ず。汝、若し必ず此の[一〇]方便を聞かんと欲せば、今當に之を說くべし。

◎佛法に無量の門有り。世間の道に難有り、易有り。陸道の步行は則ち苦しく、水道の乘船は則ち樂しきが如し。菩薩の道も亦、是の如し。或は勤行精進する有り、或は[一一]信方便を以つて、易行にして疾く阿惟越致に至る者有り。※偈に說くが如し。

東方の善德佛、　南の栴檀德佛、
[一二]西の無量明佛、　北方の相德佛、
東南の無憂德、　西南の寶施佛、

のみとなれば、遂に佛たるを得ざるが故に、畢竟、菩薩の死を意味すとの意なり。序品の首に自利、利他に關する四說を擧げて細說するが如し。

【七】經＝淸淨毘尼方廣經（羅什譯）一卷。

【八】易行道＝後世淨土門に於て難行道・易行道の二道によりて全佛敎を判別する中、易行道の術語はこれ以下判然たるも、難行道はその儘の語なく、全くこの易行道により て併稱せらる。

【九】助道＝前出七五頁脚註（五）參照。

◎易行道。

※十方十佛。

【一〇】此の方便＝起信論の修行信心分に、四信五行の修行に堪へざるもののために、淨土往生の一門あることを述べて「如來に勝方便ありて信心

巻の第五

[一]易行品　第九

△※問うて曰く、是の[二]阿惟越致の菩薩の初事は先に[三]說くが如し。阿惟越致地に至る者は、諸の難行を行じ、久しうして乃ち得べきも、或は聲聞、辟支佛地に墮せん。若し爾らば是れ[四]大衰患なり。[五]助道の法の中に說くが如し。

若し聲聞地及び　辟支佛地に墮するは、
是れを[六]菩薩の死と名づく。　則ち一切の利を失す。
若し地獄に墮するも　是の如きの畏れを生ぜざるに、
若し二乘地に墮すれば、　則ち大怖畏と爲す。
地獄の中に墮するも、　畢竟して佛に至ることを得るも、
若し二乘地に墮せば、　畢竟して佛道を遮す。
佛自ら[七]經の中に於いて、　是の如きの事を解說したまふ。
人の壽を貪る者の　首を斬れば則ち大いに畏るるが如く、
菩薩も亦是の如し。　若し聲聞地、
及び辟支佛地に於て　應に大怖畏を生ずべし。

是の故に、若し諸佛の所說に、[八]易行道にして、疾く阿惟越致地に至ることを得るの方便有らば、願はくは爲めに之を說きたまへ。

答へて曰く、汝が所說の如きは、是れ儜弱怯劣にして大心有ること無く、是れ丈夫志幹の言に非ざるなり。何を以つての故に。若し人、發願して、阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲して、未だ阿惟

【一】　この品は阿惟越致を得るに難易兩道あることを述べ、易行道を詳說す。初の問答は前品の所說を承け、菩薩の修行に於ける難行道は甚だ修し難き所以を述べて、易行道に依るべきことを說く。
△難行道と易行道。
※難行道。
【二】　阿惟越致＝阿鞞跋致に同じくAvaivartika又はAvinivartaniya の音譯にして不退の義なり。本論にては一大阿僧祇劫を經て漸く初地不退に達すとなす。
【三】　先に說く＝前品までの菩薩の不退位に入るの行法のこと。
【四】　大衰患＝初地不退に達するだに尙一萬劫を要し、長久の修行中、聲聞・辟支佛に墮して菩薩たる資格を失ふは大患なりとの意。
【五】　助道＝一說に菩提資糧論六卷（龍樹の別著）を指すと云ひ、又は助道論なる書ありしかと云ふ。
【六】　菩薩の死＝聲聞と辟支佛（緣覺）とを普通に二乘と云ひ、自利のみありて利他を缺くものとせらる。菩薩は自利、利他の二利を具備すべきに、この二乘に墮して自利

於いて阿羅漢を成ぜん、と。亦、信受せず、護法の爲めの故に身命を惜まず、常に精進を行ず。若し法を説くの時、疑難有ること無く、闕失有ること無し。是の如き等の事を阿惟越致の相と名づく。能く此の相を成就する者は當に知るべし是れ阿惟越致なり。或は未だ具足せざる者有り。何者か是れ久しからずして阿惟越致に入る有なりや、後の諸地に隨つて善根を修集し、隨つて善根轉た深きが故に是の阿惟越致の相を得。

語りて言く、汝若し菩提心を捨てずんば、當に此の中に生ずべしと。是の怖畏を見て而も心に捨てず。惡魔復た言く、[三二]摩訶衍經は佛の所説に非ずと。是の語を聞く時、心に異有ること無く、常に法性に依りて他に隨はず。生死の苦惱に於いて而も驚畏無し。菩薩、阿僧祇劫に於いて善根を修集して而も退轉する者を聞くとも、其の心、沒せず。又、菩薩、退して阿羅漢と爲り、諸の禪定を得て法を説き、人を度すと聞くとも、心、亦、退せず。常に能く一切の魔事を覺知す。若し薩波若は空、大乘の十地も亦空、衆生を度す可きも亦空、諸法は所有無きこと亦虚空の如しと聞くも、若し是の如く其の心を惑亂して退轉し、疲厭し、懈廢せしめんと欲すと聞くとも、而も是の菩薩倍精進を加へて深く慈悲を行ず。意、若し初禪、第二、第三、第四禪に入らんと欲して而も禪に隨つて生ぜず、還つて欲界の法を起し、憍慢を除破して稱讃を貴ばず、心に瞋礙無し。若し居家に在つても五欲に染著せず、厭離の心を以つて受くること病に藥を服するが如し。邪命を以つて自活せず、自活の因緣を以つて他を惱亂せず、但だ衆生に安樂を得せしめんが爲めの故に居家に處在す。[三三]密迹金剛常に隨つて侍衞し、人及び非人も壞亂すること能はず、諸根具足して缺少する所無し。呪術、惡藥の人を伏して物を害することを爲さず。鬪諍を好まず。自ら身を高うせず、他人を卑まず、吉凶を占相せず、樂つて衆事を説かず。所謂る帝王・臣民・國土・疆界、戰鬪の器仗、衣物・酒食・女人の事、古昔の事、大海中の事、是の如き等の事悉く樂つて説かず。往いて歌舞伎樂を觀聽せず、但だ樂つて説いて諸波羅蜜の義に應じ、樂つて説いて諸波羅蜜の法に應じ、增益を得せしめて諸の鬪訟を離れ、常に佛を見んことを願ふ。他方、現在に佛有ることを聞きては願つて往生せんと欲し、常に中國に生じて終に自ら我は是れ阿惟越致なりや、阿惟越致に非ざるやを疑はず、決定して自ら是れ阿惟越致なりと知る。種種の魔事を覺りて而も隨はず、乃至身を轉じて聲聞・辟支佛の心を生ぜず。乃至惡魔現じて佛身と作り、語つて言く、汝應に阿羅漢を證すべし、我今汝が爲めに説法せん、即ち此の中に

【三二】摩訶衍＝Mahāyāna。譯して大乘と云ふ。

【三三】密迹金剛＝第三卷釋願品に出づ。

想・行・識の相を以つて佛を見ず。問うて曰く、云何か色相を以つて佛を見ず、受・想・行・識の相を以つて佛を見ざるやと。答へて曰く、色は是れ佛に非ず。受・想・行・識は是れ佛に非ず。色を離れて佛有るに非ず、受・想・行・識を離れて佛有るに非ず、佛に色有るに非ず、佛に受・想・行・識有るに非ず、色中に佛有るに非ず、受・想・行・識の中に佛有るに非ず、佛の中に色有るに非ず、佛の中に受・想・行・識有るに非ず。菩薩は此の五種の中に於いて相を取らざれば阿惟越致地に至ることを得と。

問うて曰く、已に知りぬ、此の法を得る、是れ阿惟越致なりと。阿惟越致何の相貌か有るや。[三] 答へて曰く、

般若に已に廣く、　阿惟越致の相を說く。

若くは菩薩、凡夫地・聲聞地・辟支佛地・佛地を觀ずるに、不二・不分別にして疑悔有ること無し。當に知るべし、是れ阿惟越致なり。阿惟越致は、言說する所有れば皆利益有り。他人の長短、好醜を觀ず。外道沙門の所有る言說を悕望せず。知るべきことは卽ち知り、見るべきことは卽ち見て、餘天を禮事せず。華香幡蓋を以つて供養せず。餘師に宗事せず。惡道に墮せず。女身を受けず。常に自ら十善道を修し、亦、他をして行ぜしむ。常に善法を以つて示敎し、利喜して乃至夢中にも十善道を捨てず。十不善道を行ぜず。身口意業に種うる所の善根は皆衆生を安樂にし、度脫せんが爲めにす。所得の果報は衆生と共にす。若しは深法を聞いて疑悔を生ぜず。語言を少くして利安語・和悅語・柔軟語なり。眠睡を少くして行來、進止に心散亂せず。威儀庠雅に、憶念堅固にして、身に諸蟲無く、衣服臥具淨潔にして垢無く、身心淸淨、閑靜にして少事なり。心諂曲せず、慳嫉を懷かず、利養・衣服・飲食・臥具・醫藥・資生の物を貴ばず、深法の中に於いて諍競する所無し。一心に法を聽き、常に前に在らんと欲し、此の福德を以つて諸波羅蜜を具足す。世の技術に於いて衆と殊絕し、一切の法は皆法性に順ずと觀じて乃至惡魔が八大地獄を變現すとも、菩薩を化作して而も之に

△ **阿惟越致の相貌を解く。**

若し無相を修すと言はば、　即ち無相を修するには非ず。
若し諸の貪著を捨する、　之を名づけて無相と爲す。
是の捨貪の相を取らば、　則ち解脱無しと爲す。
凡そ取有るを以つての故に、　取に因つて而も捨有り。
誰か取り、何事をか取る。　之を名づけて以つて捨と爲す。
取とは用ゐて取らるる(所取)と、　及以取る可き(可取)法と
共に離れて倶に有ならず、　是れ皆寂滅と名づく。
若しは法相、因成、　是れを即ち無性と爲す。
若し性有ること無くんば、　此れ即ち相有ること無し。
若しは法に性有ること無き、　此れ即ち無相ならば、
云何ぞ性無しと言はん。　即ち是れを無相と爲す。
若し有と無とを用つて、　亦は遮し、亦は聽すべき、
心に著せずと言ふと雖も、　是れ則ち過有ること無し。
何處にか先づ法有つて、　而も後に滅せざる者あらん。
何處にか先づ然ること有つて、　而も後に滅する者有らん。
是の有相寂滅は、　無相寂滅に同じ。
是の故に寂滅の語あり。　及び寂滅の語とは、
先づ亦、寂滅に非ず、　亦、不寂滅に非ず、
亦、寂、不寂にも非ず、　寂、不寂に非ざるにも非ず。

是の菩薩、是の如く無相の慧に通達するが故に、疑悔有ること無し。色相を以つて佛を見ず、受・

灰と衣と不淨無し。　灰も亦還た衣を汚す。
言に非されば實を宣べず　言說は則ち過有り。

菩薩は是の如く觀じて說法の中に信解し、通達して分別する所無し。「(四)菩提を得ず」とは、是れ菩薩は空法を信解するが故に、凡夫所得の菩提の如く是の如く得ず。是の念を作さく、

佛は菩提を得ず、　佛は亦得ざるにも非ず。
諸果及び餘法、　皆亦、復た是の如し。
佛有れば菩提有り。　佛は得て卽ち常と爲す。
佛、無くんば菩提無し。　得ざるときんば斷滅せん。
佛を離れて菩提無し。　菩提を離れて佛無し。
若し一異ならば成ぜず。　云何が和合有らん。
凡そ諸の一切の法は　異を以つての故に合有り。
菩提は佛に異ならず。　是の故に二にして合無し。
佛と及び菩提と、　異なれば共俱に成ぜず。
二を離れて更に三無し。　云何ぞ而も成ずることを得ん。
是の故に佛は寂滅なり。　菩提も亦寂滅なり。
是の二、寂滅の故に　一切皆寂滅なり。

「(五)相を以つて佛を見ず」とは、是れ菩薩無相の法を信解し、通達して是の念を作す。

一切若し無相なりといはば　一切卽ち相有らん。
寂滅は是れ無相なりといはば　卽ち是れを有相と爲す。
若し無相の法を觀ぜば　無相を卽ち相と爲す。

一相の故に是の念を作す。一切の法は皆邪に從つて憶想分別して虛妄戲論を生ず。是れ菩薩は諸の分別を滅して諸の衰惱無し。卽ち無上第一義因緣の法に入りて他の慧に隨はず。

實の性は則ち有に非ず。　亦、復た是れ無に非ず。
亦有亦無なるに非ず。　非有非無に非ず。
亦、文字有るに非ず。　亦、文字を離れたるにあらず。
是の如く實義は　終に說くことを得べからず。
言ふ者は言のみを言ふべし。　是れ皆寂滅の相なり。
若し性寂滅とは　有に非ず、亦無に非ず。
爲めに何事をか說んと欲し、　爲めに何を以つてか言說せん。
云何が有智の人、　而も與に言ふ者は言ふ。
若し諸法の性、空なれば、　諸法は卽ち無生、
隨つて何を以つてか法空とする。　是の法は說くべからず。
言有らざることを得ざれば。　言を假つて以つて空と說く。
實の義は亦、空にも非ず。　亦、復た不空にも非ず。
亦、空、不空にも非ず、　空、不空に非ざるにも非ず。
虛にも非ず、亦、實にも非ず、　說に非ず、不說にも非ず。
而も實に所有無く、　亦、所有無きにも非ず。
是を悉く諸の所有分別、　因及び從因の生を、
捨離すと爲す。　是の如く一切の法は、
皆是れ寂滅の相なり。　取も無く亦捨も無く、

tuvaḥ。六根・六境・六識を併せて十八界と云ふ。此等十八は各自類の法を出生するを以て界（Dhātu）と云ふなり。

【三〇】 然は燃に同じ。

世間に常に言ふが如し、　牛は牛主に異なると。
異物共に合するが故に、　此の事を名づけて有と爲す。
是の故に我に陰有らば　我即ち陰に異ならん。
若し陰中に我有らば、　房中に人有るが如し。
床上の聽者の如し。　我應に陰に異なるべし。
若し我中に陰有らば、　器中に果有るが如し。
乳中に蝿有るが如し。　陰則ち我に異ならん。
可然と非然との如し。　可[三〇]然を離れて然えず。
然に可然有ること無し。　然、可然中に無し。
我、陰に非ずして陰を離る。　我も亦陰有ること無し。
五陰の中に我無し。　我の中に五陰無し。
是の如く染と染者と、　煩惱と煩惱者と、
一切瓶衣等、　皆當に是の如く知るべし。
若し我に定有り、　及び諸法の異相を說かば、
當に知るべし、是の如き人は　佛法の味を得ず。

菩薩、是の如く思惟して卽ち我見を離る。我見を遠離するが故に則ち我を得ず。[三一]「衆生を得ず」とは、衆生の名は菩薩に異なるとは、貪、我見を離るるが故に是の念を作す。若し他人實に我有らば、彼れ他の因の爲めに我有る可きが故に、彼を以つて他と爲す。而も實に我を求むるに不可得なり。彼も亦不可得なるが故に、彼も無く亦我も無し。是の故に菩薩も亦彼を得ず。[三二]「分別して說法せず」とは、是れ菩薩、一切の法は不二なりと信解するが故に、差別無きが故に、

の謂。蘊(Skandha)とは積集せるもの、和合聚の意。宇宙全體を變化するもの（有爲法）と變化せざるもの（無爲法）とに分くるうち、有爲法をその性質により五分せしものなり。一、色蘊（Rūpa-skandha色）とは變化し、且つ多物同時同處にあり得ざるものなり。二、受蘊(Vedanā-)受とは領納の義、卽ち感受のことで苦・樂・不苦不樂を感受する心作用なり。三、想蘊(Saṃjñā-)想とは取像の意、外界の事物を取り入れ、その上に想像を加ふる心作用を云ふ。四は行蘊(Saṃskāra-)行とは因緣によりて造作せられ、時間的に移り變るものを云ふ。五、識蘊（Vijñāna-）識とは了別の意、意識し、分別するを云ふ。一切の有爲法はこの五要素より成る。

【二八】　十二入＝Dvādaśāyatanāni。又十二處とも云ふ。六根、六境の十二これなり。此の十二は意識の體及び其の作用たる心王、心所の依處となり又對象となるものなれば處と名づく。卽ち眼・耳・鼻・舌・身の五官及び意根はそれぞれ六識の所依となり、色・聲・香・味・觸・法の六境は識の對象となればなり。

【二九】　十八界＝Aṣṭādaśa dhā

(七)「但だ言說を貴ぶ」とは、但だ言辭を樂つて說の如く修行すること能はず、但だ口に說くこと有つて諸法を信解し、其の趣味を得ること能はず。是を敗壞の相と名づく。若し人、菩提心を發して是の如き相有らば當に知るべし、是れ敗壞の菩薩なりと。「敗壞」とは、不調順に名づく。譬へば最弊の惡馬を名づけて敗壞と爲すが如し。但だ馬の名のみ有つて馬の用有ること無し。敗壞の菩薩も亦是の如し。但だ空名のみ有りて實行有ること無し。若し人敗壞の菩薩作らんと欲せずんば當に惡法を除き、法に隨つて名を受くべし。

＊問うて曰く、汝、說かく、惟越致地の中に在りて二種の菩薩有り。一は敗壞の菩薩、二は漸漸に精進して後に阿惟越致を得と。敗壞の菩薩は已に解說す。漸漸に精進して後に阿惟越致を得る者、今、解說す可し。答へて曰く、

菩薩我を得ず。　亦、衆生を得ず。
說法を分別せず。　亦、菩提を得ず。
相を以つて佛を見ず。　此の五功德を以つて
大菩薩と名づくるを得て　阿惟越致を成ず。

菩薩、此の五功德を行じて直に阿惟越致に至る。(二)「我を得ず」とは、我の著を離るるが故に。是の菩薩、內外[27]五陰・[28]十二入・[29]十八界の中に於いて我を求むるに不可得なり。是の念を作す。

若し陰是れ我なれば、　我即ち生滅の相なり。
云何が當に受を以つて、　而も受者と作すべき。
若し陰を離れて我有れば、　陰の外に得べし。
云何か當に受を以つて、　而も受者に異らしむべき。
若し我に五陰有らば、　我即ち五陰を離る。

正邪に通ずれどもこの場合は邪見なり。諸論により諸釋不同なれども今大品般若によれば、色蘊を常等の句を以て計するに、一、色は常なり、二、色は無常なり、三、色は常無常なり、四、色は非常非無常なりの四句を得。同樣にして受蘊等の四蘊を計せば併せて四五二十句を得。斯くの如く五蘊を計するに「有邊、無邊」、「如去、不如去」の二句を以てせば更に四十句を得。合せて六十句なり。これに身、神、一異の二見を加へて六十二見とす。これ何れも斷常有無の邪見なり。

※漸漸に精進して後に阿惟越致を得る菩薩の五相。

【二六】　三解脫門＝三空、三治とも云ふ。空・無相・無願の三三昧なり。空三昧とは諸法は因緣生にして我なく、我所有なし(空)と觀ずるなり。無相三昧とは色・聲・香・味・觸の五法、男女の二相、三有爲法の十相を離るる(無相)を云ふ。無願三昧とは苦諦の苦、無常の二、及び集諦は厭惡すべきが故に、又道諦の道・如・行・出の四相行は船筏の如く、必ず捨つべきが故に總じて之を願樂せざること(無願)を云ふ。

【二七】　五陰＝又五蘊・五衆・五聚等に作る。Pañca skandha

て是れ阿惟越致の相とするに非ず。而も此の說を作す。是れ何の謂ぞや、と。答へて曰く、斯の言、謂れ有り。疑を致すべからず。我れ内に功德有るが故に身に威德有りと說く。但だ身色、顏貌端正なるのみを說くにはあらず。「志幹」とは、所謂る威德勢力なり。若し人有つて能く善法を修集して惡法を除滅せば、此の事の中に於いて力有るを名づけて志幹と爲す。復た身は天王の如く、光は日月の如しと雖も、若し善法を修集して惡法を除滅すること能はずんば、名づけて志幹無しと爲すなり。復た身色醜陋にして形、餓鬼の如しと雖も、能く善を修し、惡を除けば乃ち名づけて志幹と爲すのみ。是の故に汝が難は非なり。

(三)「好んで下劣の法を樂ふ」とは、佛乘を除き已れる餘乘は佛乘に比するに。小劣にして如かさるが故に名づけて下と爲す。惡を以つてするには非ざるなり。其の餘の惡事をも亦名づけて下と爲す。二乘の所得を佛に於いて下と爲すのみ。但だ世間を出でて無餘涅槃に入るが故に名づけて惡と爲さず。是の故に若し人、佛乘を遠離して二乘を信樂せば、是を下法を樂ふと爲す。是の人、上事を樂ふと雖も、二乘を信樂して大乘を遠離するを以つての故に、亦下法を樂ふと名づく。復た次に下を惡事に名づく。所謂る[二四]五欲なり。又、斷常等[二五]六十二見、一切の外道の論議、一切の生死を增長するもの、是を下法と爲し、此の法を行ずるが故に名づけて下法を樂ふと爲す。(三)「名利に深著す」とは、布施・財利・供養・稱讚の事の中に於いて、深心に繫念して善く方便を爲し、清淨の法味を得ざるが故に、此の事を貪樂す。(四)「心端直ならず」とは、其の性、諂曲にして喜んで欺誑を行ずるなり。(五)「他家を悋護す」とは、是の人、家に入る所に隨つて餘人の利養・恭敬・讚歎を得ること有るを見て卽ち嫉妬を生じ、憂愁して悅ばず、心、淸淨ならず、我を計ること深きが故に、利養に貪著して嫉妬の心を生じ、檀越を嫌恨するなり。(六)「空法を信樂せず」とは、諸佛三種に空法を說きたまふ。所謂、[二六]三解脫門なり。此の空法に於いて信ぜず、樂はず、以つて貴しと爲さず。心、通達せざるが故に。

【二四】　五欲＝Pañca kāmaguṇā。五塵とも云ふ。色・聲・香・味・觸の五境なり。これ人の慾を起すものなれば五欲と名づけ、又眞理を汚すものなれば五塵とも云ふ。欲求そのものは貪ならざるも、この五、諸欲を引きおこすを以てなり。又別に財欲、色欲（性欲）食欲、名欲（名譽欲）睡眠欲の五を五欲と云ふことあり。

【二五】　六十二見＝見とは梵語 darśana の譯、審に思慮し推求して事理を決擇するを云ふ。

是の故に汝難を致すべからず。

「(二)他の利養を嫉まず」とは、若しは他のもの衣服・飲食・臥具・醫藥・房舍・產業・金銀・珍寶・村邑・聚落・國城・男女等を得るに、此の施の中に於いて嫉妬を生ぜず、又、恨を懷かずして心に欣悅するなり。

「(三)法師の過を說かず」とは、若し人有つて說いて大乘・空・無相・無作の法、若しは六波羅蜜、若しは四功德處、若しは菩薩十地等の諸の大乘の法に應ぜんに、乃至失命の因緣ありとも尙ほ其の過惡を出さざれ、何に況んや諸の惡事を加へんをや。

「(四)深妙の法を信樂す」とは、深法とは空・無相・無願及び諸の深經に名づく。[二]般若波羅蜜[三]菩薩藏等の如し。此の法に於いて一心に信樂して疑惑する所無くんば、餘事の中に於いて是の如き樂無し。深經の中に於いて滋味を得るが故に。

「(五)恭敬を貪らず」とは、諸法の實相に通達するが故に、名譽・毀辱・利・不利・等に於いて異有ること無し。

「此の五法を具す」とは、上の所說の如し。阿耨多羅三藐三菩提に於いて退轉せず、懈廢せざる、是を阿惟越致と名づけ、此と相違するを惟越致と名づく。是の▲惟越致の菩薩に二種有り。或は敗壞する者あり。或は漸漸に轉進して阿惟越致を得るものあり。

※問うて曰く、說く所の敗壞とは其の相云何んと。答へて曰く、

若しは志幹有ること無く、　好んで下劣の法を樂ひ、
深く名と利養とに著し、　其の心端直ならず。
他家に悋護して、　空法を信樂せず。
但だ諸の言說を貴ぶ。　是を敗壞の相と名づく。

「(一)志幹有ること無し」とは、顏貌に色無く、威德淺薄なるをいふ。問うて曰く、身相威德なるを以

【三】般若波羅蜜＝Prajñā Pāramitā 邪知邪見を去つて眞智を得ること、序品第一註六波羅蜜參照。

【二】菩薩藏＝二藏の一、大乘經の別名なり。法華、華嚴等の諸大乘經は大乘菩薩の修因證果の法を說けばなり。

▲惟越致の二相。

※敗壞する惟越致の菩薩の七相。

菩薩は是の法を以つて世世に菩提の願を増長し、又、復た能く清淨の大願を生ず。若しは實語を以つての故に死して轉輪王の位を失し、及び天王の位を失すとも猶ほ應に實に說くべし、應に妄語すべからず。況んや小因緣のために而も實語せざらんをや。又、眷屬及び諸の外人に於いて諂曲を離れ、又、初發心より已來、一切の菩薩に恭敬心を生じ、尊重稱讃すること佛の如くして異無く、又、當に力に隨つて大乘に住せしむべしと。

阿惟越致[三〇]相品　第八

*問うて曰く、是の諸菩薩に二種有り。一には惟越致、二には阿惟越致なり。應に其の相を說くべし、是れ惟越致、是れ阿惟越致なりと。答へて曰く、

◎等心にして衆生に於いて、　他の利養を嫉まず。
乃至身命を失ふとも、　法師の過を說かず。
深妙法を信樂して、　恭敬を貪らず。
此の五法を具足するは、　是れ阿惟越致なり。

(二)「等心衆生」とは、衆生は[三一]六道の所攝、上・中・下に於いて心に差別無き、是を阿惟越致と名づく、と。

問うて曰く、說くが如く諸佛、菩薩に於いて應に第一敬心を生ずべし。餘は則ち爾らず。又言く、諸佛、菩薩に親近して恭敬し、供養すと。餘は亦爾らず。云何か一切衆生等心無二と言ふや、と。答へて曰く、說くこと各〻義有り。應に疑難すべからず。「衆生に於いて等心なり」とは、若し衆生有つて菩薩を見ること怨賊の如くなるあり、視ること父母の如くなる有り、視ること中人の如くなる有り。此の三種の衆生の中に於いて、等心に利益して度脫せんと欲するが故に差別有ること無し。

【三〇】　この品は阿惟越致を得る菩薩の相貌を解す。阿惟越致とは又は阿鞞跋致に同じ、梵語 Avaivartika の音譯なり。阿は不、惟越致は退轉、譯して不退と云ふ。不退の位又は勤行修習することを云ふ。故に惟越致とは退轉の位、未だ初地不退を得ざる人なり。
※二種の菩薩の相を解く。
◎阿惟越致の五相。

【三一】　六道＝六趣に同じ。地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・人間・天上なり。此の六所は衆生輪廻の道程なれば六道と云ひ、衆生の因業に應じて趣く所なれば六趣と云ふ。

道の法なり。佛法の中に師に従つて經法を得て、若し財物有らば法を供養するが故に則ち以つて師に與ふ。若し無きものは咎無し。「(二)疑悔有ること無きに疑悔を生ぜしむ」とは、此の人實に戒を破らざるに小罪の相有るを而も大罪なりと言ひ、若しは正命威儀を破り、若しは正見を破るとて、皆疑悔を生ぜしむ。「(三)大乘の人を瞋る」とは、人・大乘・無上乘・如來乘・大人乘・一切智人乘に乘じ、乃至初發心の者有らんに、此の人の中に於いて深く瞋恚を生じ、呵罵譏謗して其の惡名を說き、廣く流布せしむ。「(四)共事諂曲心」とは、[一七]和尚・[一八]阿闍梨、諸の善知識の所に於いて直心を以つて親近せず、習ふて曲心を行ずるが故に、乃至未だ曾つて識る所にあらざるも諂曲を行ず。四黒法とは、黒は垢穢不淨に名づけ、能く菩提心を失す。說くが如し。

此の[一九]五の四法を轉じて　　世世に善行を修す。
是の如くなるときんば　　無上菩提心を失せず。

五四合して二十法と爲す。是れ菩提心を失す。此の法を轉じて修習し、行じて世世に阿耨多羅三藐三菩提心を忘れざれ。「轉」とは、上の五四の法を轉ずるなり。所謂る法を恭敬し、慢心を破して妄語を遠離し、深く善知識を尊重す。餘は應に是の如く知るべしと。問うて曰く、何等の法を以つてか世世に菩提の願を增長し、又、後復た能く更に大願を發すや、と。答へて曰く、

乃至身命を失ふとも、　　轉輪聖王の位にも、
此に於いて倘應に、　　妄語して諂曲を行ずべからず。
能く諸の世間の、　　一切の衆生の類をして、
諸の菩薩衆に於いて、　　而も恭敬心を生ぜしむ。
若し人有つて能く、　　是の如きの善法を行ぜば、
世世に無上菩提の、　　願を增長することを得ん。

【一七】和尚＝Upādhyāya。師のこと。羅什は又、力生と翻ず。これ弟子は師により道力を生ずることを得ればなり。

【一八】阿闍梨＝Ācārya。新譯には阿遮梨耶に作り、敎授(舊)軌範、正行(新)と譯す。弟子の行爲を矯正し、其の軌範たり得べき人を言ふ。

【一九】調伏品には菩提心を失する法として、四四十六法を說くのみなるも、前の發菩提心品中に不成の場合の四法を說けば、倂せて四五二十法とす。

べし。是れ汝が大利なりと。或は法を說く者は眷屬を樂ひ、法を聽く者は隨從することを欲せず。法を說く者は飢亂不安隱の國土に至らんと欲して、聽者に語つて言く、汝、今、何の用あつてか我に隨つて此の諸の國に至り、即ち厭懈を生じて而も隨逐せざるかと。法を說く者は[14]檀越を貴敬して、數行つて問訊し、法を聽く者をして聽受することを得ざらしめ、深法の中に於いて疑惑を生ぜしむ。此れ諸佛の所說の經法に非ず。我が說く所の者は是れ佛の經法なり。若し菩薩、能く是の法を行ずれば實際を[15]證することを得んと。是の如き等の種種の因緣は兩ながら和合せず。當に知るべし、是等は悉く是れ魔事なり。要を取つて之を言へば、一切の善法に於いて障閡する者有れば皆是れ魔事なり。

(二)「菩提心劣弱」とは、諸の煩惱、力有るが故に道心劣弱にして勢力有ること無く、阿耨多羅三藐三菩提に於いて志願永く絕ゆ。(三)「業障」とは、種種の業障有りと[16]雖も、此の中に說くは能く大乘を求むるの人をして退轉せしむる者是れなり。(四)「業障」とは、樂つて不善法を行じ、空・無相・無願及び諸波羅蜜等の諸の深妙の法を惡む。是の如き四法は能く菩提心を失す。復た次に、

施を師に許して而も誑かせば、　其の罪甚だ深重なり。
人疑悔有ること無きに、　強いて疑悔を生ぜしめ、
大乘を信樂する者に、　深く重瞋恚を加ふ。
訶罵して惡名を說き、　處處に廣く流布す。
諸の共事の中に於て、　心に多く諂曲を行ず。
此の如きの四黑法は、　則ち菩提心を失す。

(一)「師に施して與へず」とは、應に師に施すべき物、若しは許し、若しは未だ許さずして而も後に與へず、若しは與ふれども時に非ずして與へ、處に非ずして與へて法の如く與へず。此は是れ世間外

くして再び欲界に還來せざる位なれば不來とも云ふ。四に阿羅漢果とは欲界のみならず三界の見思惑を斷じ盡せる聲聞乘の極果なり。既に極果を得て人天の供養を受くべき身なれば應供ともいふ。

【一四】檀越＝dānapati 又陀那鉢底に作る。前出

【一五】證す＝悟りに達すること。

【一六】雖＝正藏には難とあるも明藏による。

※更に菩提心を失する法を解す。

進・禪定・智慧波羅蜜に應ずべしと說く時、及び大乘所攝の深義を說く時、疾く樂說せず、若しは樂說すとも其の中間に於いて餘緣にて散亂す。若しは書讀・解說・論議・聽受等に慠慢自大にして其の心散亂し、餘事を緣想して妄念戲笑し、互に相ひ譏論して兩ながら和合せず。實義を通達すること能はずして座より去りて是の念を作す。我れ此の中に於いて受記の心有ること無く、淸淨ならず。亦、我が城邑・聚落・居家・生處を說かずと。是の故に聞法を欲せず、滋味を得ずして座より去つて大乘所說の諸波羅蜜を捨て、及び聲聞、辟支佛は自調度の經中に於いて薩婆若を求む。若しは書讀・解脫・聽受等の時、餘の種種の事を樂說せんと欲して般若波羅蜜を破散す。所謂る方國・聚落・城邑・園林(をんりん)・[一二]帥事・賊事・兵甲・器仗・憎愛・苦樂・父好・兄弟・男女・妻子・衣服・飮食・臥具・醫藥・資生の物を說くに、心則ち散亂して般若波羅蜜を先す。又、貪・恚・癡・怨家(をんけ)・親屬・好時・惡時・歌舞・妓樂(ぎらく)・憂愁・戲笑・經書の文頌、往世の古事・國主・帝王・地・氷・火・風・五欲・富貴及び利養等の世間の諸事を說いて心をして喜悅せしむ。若しは魔が化して比丘、比丘尼の形と作り、聲聞、辟支佛經の因緣を以つて得せしめて而も是の言を作さく、汝應に是の經を習學して本(もと)習ふ所を捨つべしと。聽法の人は樂聽して受けず、說法の者は其の心懈怠し各々餘緣有り。聽者は法を須ひ而も說者は餘方に至らんと欲す。說者は樂つて說き而も聽者は餘方に至らんと欲す。說者は多欲にして諸の利養を貪り、聽者は與心有ること無し。聽者は信心にして樂つて法を聞かんと欲するに、而も說者は樂つて爲めに說かず、說者は樂つて說き、聽者は樂はず。或は時に地獄の諸苦を說くこと有れば、此の身の苦を盡して早く涅槃を取るには如かず、是れ最も利爲りと。畜生の無量の苦惱、餓鬼、阿修羅の種種の過惡を說けば諸の生死多く憂患有り。汝此の身に於いて早く涅槃を取るべし。是れ最も利爲りと說く。又、世間の尊貴、富樂を稱讚し、色、無色界の功德、快善を稱讚して、此の中に生るる者は是れ大利と爲すと。[一三]須陀洹(すだをん)乃至阿羅漢果の功德の利を稱讚して、汝此の身に於いて此の諸の果を證す

は陰曆の一月を白黑の二に分つ、故に白、黑月の終とは每月十五日と三十日なり。）大衆を集めて戒經を讀み聞かせ、又その間の所犯の罪は懺悔せしめ長善除惡せしむ。卽ち梵に布薩(Posadha)と云ひ、淨住、長淨と譯するは是れその功能について名けしものなり。

【一〇】佞媚＝こびへつらふこと。

【一一】六波羅蜜なり。

【一二】帥事＝軍事なり。

【一三】詳しくは須陀洹果 Srotāpanna-phala 斯陀含果 Sakrdāgāmi p. 阿那含果 Anāgāmi-p. 阿羅漢果 Arahat-p. と云ひ新譯には夫れ預流・一來・不還・羅漢果と云ふ。これを四果と云ひ聲聞乘聖果の差別なり。一に須陀洹果とは凡夫を去つて初めて聖道の淸流に入るを云ひ、三界の見惑を斷じ盡せる位なり。二に斯陀含果とは、人、欲界九品の思惑中前の六品を斷じて尙後の三品を殘すなり。その後、三品の思惑の爲に欲界の人間と天界とに一度受生すれば一來とも云ふ。三に阿那含果とは、欲界思惑中、後の三品の殘餘を斷じ盡

諸の菩薩を謗毀し、　坐禪の者を輕賤す。

「要法を悋惜す」とは、師の所にして甚深難得の義、利する所多き者を知るとも、利養を貪著して已と等しからんことを恐るるが故に、祕惜して說かさるなり。「小乘を貪樂す」とは、大乘の滋味を得ざるが故に二乘を貪樂するなり。「諸菩薩を謗る」とは、罪無きに而も罪有りと言ふを名づけて謗と爲す。菩薩の義は已に先に說きぬ。此の人、過無きに而も妄りに其の罪を加ふ。若し實に罪有つて而も論說せば、此れ罪有りと雖も、前に比して輕しと爲す。何を以っての故に。經に說かく、諸の菩薩は若しは實に罪有り、若しは罪有ること無し。皆應に說くべからずと。「坐禪を輕賤す」とは、若しは在家、出家、諸の煩惱を斷ぜんが爲めの故に勤行精進し、一切の煩惱を遮せんが爲めに佛の道法を修助す。此の人或は論議に善からず、或は才辯無く、或は重威德無くとも無智の人、而も之を輕賤するに則ち重罪を得。復た次に、

若し善知識に於いて、　其の心に結恨を懷き、
亦諂曲心有らば、　諸の利養を貪るに等し。

「善知識の義」は先に已に說きぬ。此の敎化說法の者に於いて嫌恨心を生ぜば、父母を嫌ふが如く重罪を得。「諂」とは、心に佞媚あるなり。「曲」とは、身口業に現に所作有るなり。「利養を貪るに等し」とは、利樂稱譽を貪著し、此の法を以つて質直の心を壞するが故に、深く善根を起すこと能はず。惡色、染衣の如し。更に好色を受けず。▲復た次に、

諸の魔事を覺らざると、　菩提心劣弱と、
業障と及び法障とは、　亦、菩提心を失す。

「魔事を覺らず」とは、若し諸の魔事を知らざれば則ち制伏すること能はず。若し制伏せざれば則ち菩提心を失す。問うて曰く、何等か是れ諸の魔事なりや、と。答へて曰く、布施・持戒・忍辱・精

【六】波羅夷＝Pārājika 六棄罪の第一、戒律中の最重罪にして、斷頭と譯す。頭を切らるれば、再び生くべからざるごとく、比丘たることを得ざるなり。又犯者を內法に收めず外に棄つる意味から棄と云ふ。之を犯せば敎團外に放逐せらるるなり。

【七】第六＝上の五種以外の妄語を云ふ。

【八】四事＝衣服・飲食・臥具・湯藥なり、或は衣服を房舍となすことあり。

▲更に菩提を失ふ四法を解す。

【九】說戒＝律の作〃なり。毎半月の終の日に（印度にて

しは六波羅蜜、若しは菩薩十地、是の如き等の及び諸の餘の修より生ずる者、此の法の中に於いて未だ得ざるを得たりと謂ふ。「妄語」[三]とは、[二]突吉羅に屬すること有り、[三]波夜提に屬すること有り、[四]偷蘭遮に屬すること有り、[五]僧伽婆尸沙に屬すること有り。[六]波羅夷に屬すること有り。或は人有つて言く、[七]第六の妄語有りと。是の妄語は心に懺悔を生ず。上の五の妄語は初は輕く後は重く、第六は最も輕しと。「波羅夷に屬す」とは、自ら人法に過無し。若しは口に言ひ、若しは形に示して趣かに方便を以つて此の德を現ず。「僧伽婆尸沙に屬す」とは、若しは口に言ひ、若しは形に示して、彼の比丘の[八]四事の中に於いて一一の有根、無根の事を以つて謗る。「偷蘭遮に屬す」とは、有根、無根の事を以つて謗らんと欲して而も說いて成ぜず。「波夜提に屬す」とは、無根の僧伽婆尸沙の事を以つて謗る。「突吉羅に屬す」とは、四種の罪に入る餘の妄語を除く是れなり。「自心に除滅す」とは、若しは[九]說戒の時、自ら小罪有りと知つて他に向つて說くことを得ずして卽ち自心に悔ゆと。

問うて曰く、是の妄語は但だ比丘に在つて白衣に在らず、而も此の論は在家、出家に通ずるやと。答へて曰く、凡そ事を知る實に爾り、而も異に知說せば此の論の中の說は是れ總相の妄語なり。有衆生分別の故に、事分別の故、時分別の故に、五衆罪分別の故に、住處分別の故を以つて則ち輕重有り。輕き妄語と雖も習すること久しければ則ち重く、能く菩提心を失ふ。「衆生分別」とは、善根を斷ずる邪見の者及び餘の深煩惱の者は是れ則ち重と爲す。「事分別」とは、若しは過つて人法を說いて僧を破する是れなり。「時分別」とは、出家の人の妄語は則ち重し。「五衆罪分別」とは、波羅夷、僧伽婆尸沙罪の如きは則ち重し。「住處分別」とは、僧中の妄語、若し證する時は則ち重し。「善知識を恭敬せず」とは、恭敬、畏難の想を生ぜざるなり。此の四法を行ぜば則ち菩提心を失ふと。

● 問うて曰く、但だ是の四法のみ能く菩提心を失ふや、更に餘法有りやと。答へて曰く、

最要の法を慳惜し、　　小乘に貪樂して、

【二】突吉羅＝Duṣkṛta 六聚罪の第六四分律には之を身口二業に分けて惡作、惡說と譯せり。所作、言說の惡きを云ふ。

【三】波夜提＝Pāyattika 六聚罪の第四、墮と譯す、

【四】偷蘭遮＝Sthūlātyaya 六聚罪の第三、波羅夷と僧殘罪を犯さんとして成就せざりし罪なり。

【五】僧伽婆尸沙＝Saṅghāvaśeṣa 僧殘罪と譯す。殘とは比丘この罪を犯せば殆ど死に瀕して僅に殘餘の生命あるのみの意なり。此の罪は波羅夷に次げる重罪にして之を犯せば必ず僧衆に依て懺悔法を行はざるべからず。若し之を行はざれば波羅夷罪を犯せると同じく比丘の資格に於て死地に入るものとせらる。

●更に菩提心を失ふ四法を解す。

卷の第四

(一)調伏心品　第七

*問うて曰く、上の品に說くが如き三發心は必ず成じ、餘の四は必ずしも成ぜずと。云何が成と爲り、云何が不成となるやと。答へて曰く、若し菩薩、菩提心の行を發して菩提心の法を失へば、是れ則ち不成なり。若し行じて菩提心の法を失はずんば是れ則ち必ず成ず。是の故に偈に說かく、

菩薩は應に菩提心の法を　失ふことを遠離すべし。
應に一心に修行して、　菩提の法を失はざるべし。

「遠離」とは、除滅に名づく。惡法をして心に入らしめず、若し入らば疾く滅せしむ。「失」とは、若しは今世、若しは後世、菩提心を忘れ、復た修行に隨順せざるに名づく。應に是の如きの法を遠離すべし。若し菩提の法を失はずんば菩提心を忘れず、應に常に一心に勤行すべしと。

◎問うて曰く、何等の法か菩提心を失するやと。答へて曰く、

一には法を敬重せず。　二には憍慢心有り。
三には妄語して實無し。　四には知識を敬せず。

是の四法有る者、若しは今世に於いて死する時、若しは次後世に則ち菩提心を忘失して、自ら我は是れ菩薩なりと知ること能はず、復た發願せず、菩薩の行法復た前に在らず。(二)「法を恭敬せず」とは、法は諸佛所說の上・中・下乘に名づく。要を取つて之を言はば、是れ諸佛如來、所用の教法なり。此の法の中に於いて恭敬し、供養し、尊重し、讃歎せず、希有の想、難得の想、寶物の想、滿願の想を生ぜずんば、是の法能く菩提心を失ふ。(三)「慢心」とは、自ら其の心を高じて未だ得ざるを得たりと謂ひ、未だ證せざるを證せりと謂ひ、空・無相・無願、若しは無生忍法、若

【一】この品は菩提心を失ふ二十法を擧ぐ。

※發菩提心の七因緣を結す。

※菩提心を失ふ四法を解す。

故なり。若しは佛法を尊重するが爲めに、守護せんと欲するが爲めに、若しは衆生に於いて大悲心有らば是の如き三心は必ず成就することを得ん。根本深きが故なり。餘の菩薩敎へて發心せしめ、菩薩の所行を見て發心し、大布施に因つて發心し、若しは佛相を見、若しは聞いて發心す。是の四心多くは成ぜず。或は成ずる者有り。根本微弱なるが故なりと。

行、(十四)一切口業隨智行、(十五)一切意業隨智行、(十六)智慧知過去世無礙、(十七)智慧知未來世無礙、(十八)智慧知現在世無礙なり。本論、卷十、十一兩卷に四十不共法を說けり。參照せよ。

【六八】　十九住の果人＝不明。

【六九】　二十根＝根 Indriya とは能生、增上の義、草木の根の增上力により、よく幹枝を生ずるが如く、人の性は善惡の作業を生ずる力あれば根と云ふ。三根、五根、六根、二十二根等の分類あるも未だ二十根の例を見ず。或は二十二根の類か。二十二根とは、(一)眼(二)耳、(三)鼻、(四)舌、(五)身、(六)意、〔眼等の六根〕、(七)女、(八)男、(九)命、(十)苦、(十一)樂、(十二)憂、(十三)喜、(十四)捨、〔(十)より(十四)までを五受と云ふ〕、(十五)信、(十六)精進、(十七)念、(十八)定、(十九)慧〔(十五)より(十九)までを信等の五根と云ふ〕、(二十)未知當知、(二十一)已知、(二十二)具知根(終りの三を三無漏根と云ふ)なり。

【七〇】　無生法忍＝入初地品第二に出づ。

【七一】　佛の三十二相を解く。念佛品第二十參照。

【七二】　虛言ならざるを以ての故にの意。

にして深く善法を樂ふを見る。是の如き人を見て而も是の念を作す、是の人の行ずる所は我れも亦應に行ずべし。所修、願行我も亦、應に修すべし。我れ是の法を得んが爲めの故に、當に是の願を發すべしと。是の念を作し已つて無上道心を發す。

[六]復た人有つて大布施を行じ、佛及び僧に施し、或は但だ佛に施すに、飲食、衣服等を以つてす。是の人、是の布施に因つて過去の諸の菩薩の能く施を行ずる者を念ず。韋藍摩、韋首多羅、薩婆檀、尸毘王等、卽ち菩提心を發して此の施福を以つて阿耨多羅三藐三菩提に廻向す。

[七]復た人有つて佛の[七一]三十二相・足下平・手足輪・指網縵・手足柔軟・七處滿縫・長指・足跟・廣身臑・直足趺高平・毛上旋・伊泥蹲・臂長過膝・陰馬藏・身金色・皮軟薄、一一孔一毛生。眉間白毫、上身如獅子肩圓・大腋下滿・得知妙味、身方に尼拘樓陀樹の如し、頂有肉髻、廣長舌・梵音聲・師子頰・四十齒・齊白密緻・眼睛紺青色、睫如牛王等の相を若しは見、若しは聞いて、心則ち歡喜して是の念を作す。我れも亦當に是の如きの相を得べし、是の如き相の人の得る所の諸法を我れも亦當に得べしと。卽ち阿耨多羅三藐三菩提心を發す。是の七因緣を以つて菩提心を發すなりと。

問うて曰く、汝、七因緣の發菩提心は爲めに皆成ずべしと說く。成有り、不成有りやと。答へて曰く、是れ必ず盡く成ずるにはあらず。或は成有り、或は不成有りと。

問うて曰く、若し爾らば應に解說すべしと。答へて曰く、

七發心の中に於いて、　佛、敎へて發心せしめ、
護法の故に發心し、　憐愍の故に發心す。
是の如き三心は、　必定して成就することを得。
其の餘の四心は、　必ず皆成就するにはあらず。

是の七心の中、佛其の根本を觀じて敎へて發心せしめば必ず成ずることを得。[七二]不空言を以つての

と。

【五九】　八解脫＝釋願品第五に出づ。

【六〇】　十大力＝入地品第二に出づ。

【六一】　十二因緣＝地相品第三。

【六二—六三】　十三助道法、十四覺意は更に考ふべし。

【六四】　十六心＝八忍、八智を合せて十六心と云ふ。八忍とは四法忍〔欲界の四諦を忍可する智にして（一）苦法忍、（二）集法忍（三）滅法忍、（四）道法忍の四法忍〕と、色、無色界の四諦を忍可する四類忍〔（一）苦類忍、（二）集類忍、（三）滅類忍、（四）道類忍〕となり。この八忍を以て正しく三界の見惑を斷じ終つて得たる觀照明了なる知を八智〔四法智、四類智〕と云ふ。卽ち八忍は無間道、八智は解脫道なり。

【六五】　十六地獄＝序品第一に出づ。

【六六】　身十七は不明。再考。

【六七】　十八不共法＝不共法とは如來獨特の他と同ぜざる功德を云ふ。智度論第二十六によれば、（一）身無失、（二）口無失、（三）念無失、（四）無異相、（五）無不定心、（六）無不知已捨、（七）欲無減、（八）精進無減、（九）念無減、（十）慧無減、（十一）解脫無減、（十二）解脫智見無減、（十三）一切身業隨智慧

て法をして久しく無數阿僧祇劫に住せしめん。又、菩薩道を行ずる時、無量諸佛の法を護持するが故に、勤めて精進を行ず。

(三)或は復た人有つて衆生の苦惱を見るに、愍むべく、救無く、歸無く、所依止無く、生死の險難惡道に流轉し、大怨賊、諸の惡蟲獸、生死の恐怖、諸の惡鬼等有つて常に憂悲、苦惱、刺蕀有り。恩愛別離し、怨會深坑にして、喜樂の水甚だ得難しとなし、大寒、大熱にして獨り其の中に行き、曠絶無蔭にして度脫を得ること難し。衆生中に於いて諸の怖畏多く、救護將道の者有ること無し。是の如き衆生を見て、此の生死險惡道の中に入り、諸の苦惱を受け、大悲を以つての故に阿耨多羅三藐三菩提心を發して是の言を作す。我れ當に救無きに救と作り、歸無きに歸と作り、依無きに依と作るべし。我れ度を得已つて、當に衆生を度すべし。我れ脫を得已つて當に衆生を脫せしむべし。我れ安を得已つて當に衆生を安んずべしと。

(四)復た人有つて但だ人より聞いて信樂の心を以つて等しく無上道心を發して是の念を作す、我れ當に善法を修して斷絕せざるべきが故に或は必定に墮すとも、[五七]無生法忍を得ん。諸の福德を集むれば善根淳熟するが故に或は諸佛に値ひ、或は大菩薩に値うて、能く衆生の諸根・利鈍・深心・本末・性欲の差別を知り、善く方便を知り、般若波羅蜜の爲めに護られ、能く佛事を作す者は、我が發願を知らん。善根成熟するが故に必定に住せしめ、若しは無生法忍の是の諸の菩薩は第七、第八、第九、第十地に在り。佛の如く善く衆生の心力を知つて敎へて發心せしめ、但だ信樂力有るを以つて等しく敎へて發心せしむるのみにはあらず。

(五)復た人有つて餘の菩薩の道を行じ、諸の善根を修し、大悲に護られ、方便を具足して衆生を敎化し、身命を惜まず、利益する所多く、廣博多聞、世間奇特にして、人中に標勝し、疲苦の衆生に蔭覆を作さんが爲めに、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧・慚愧・質直・柔軟・調和に安住し、其の心淸淨

【四九】三毒の煩惱＝貪・瞋・癡の三煩惱を云ふ。貪(Rāga)とは、貪る心、瞋(Derega)とは、恚忿の心、癡(Moha)とは、迷闇の心なり。この三種の煩惱は一切煩惱の中最も勝れ、一切煩惱の根本なれば邪三毒と云ふ。

【五〇】無餘涅槃＝前出。序品第一註。

【五一】佛＝正藏には缺く。今三本に據る。

【五二】六波羅蜜＝序品第一註。

【五三】十地＝前出。序品第一註。

【五四】この品は菩提心を發す因緣について解く。

【五五】咄哉＝あきれ驚く語。

【五六】四聖諦＝四諦のこと。前出。

【五七】五種法藏＝本論第十卷。四十不共法中難一切智人品、第九卷念佛品中に、過去、現在、未來、無爲(出三世法)、不可說の五藏を擧ぐ。これ犢子部の過去、現在、未來、無爲、不可說の五法藏に似たり。後世大乘にも三藏を具ふるに至り、別種の五藏說を說く。今この五藏は大小乘共通の分藏說なるを注意すべし。佛性論二によれば眞性に五藏の義あり、如來藏、正法藏、法身藏、出世藏、自性淸淨藏の五藏を擧ぐ。

【五八】七種正法＝七覺支のこ

一には諸の如來　　菩提心を發さしむ。
二には法壞せんと欲するを見て、　守護するが故に心を發す。
三には衆生の中に於いて、　大悲にして心を發す。
四には或は菩薩有りて、　敎へて菩提心を發さしむ。
五には菩薩の行を見て、　亦隨つて心を發す。
或は布施し已るに因て、　而も菩提心を發す。
或は佛の身相を見て、　歡喜して心を發す。
此の七因緣を以つて、　而も菩提心を發す。

(一)「佛心を發さしむ」とは、佛、佛眼を以つて衆生を觀、其の善根淳熟して、能く阿耨多羅三藐三菩提を得るに堪任すと知つて、是の如き人には、佛、敎へて發心せしめ、是の言を作す。善男子よ、來れ。今發心して當に苦惱の衆生を度すべしと。

(二)或は復た人有つて惡世に生在して、法の壞せんと欲するを見て、守護するが爲めの故に發心して是の念を作す。[五五]咄哉。無量無邊百千萬億阿僧祇劫より來、唯だ一人二處行有つて三界を出で、[五六]四聖諦の大導師となり、[五七]五種の法藏を知つて六道を脫す。[五八]七種正法の大寶有つて、深く[五九]八解脫を行じ、九部經を以つて敎化し、[六〇]十大力有つて十一種の功德を說き、善く[六一]十二因緣の相續を轉じて[六二]十三助聖道の法を說く。[六三]十四覺意の大寶有つて十五種の貪欲を除き、幷びに[六四]十六心に無礙解脫を得て、[六五]十六地獄の衆生を出し、及び[六六]身十七に[六七]十八不共法を具足し、善く[六八]十九住の果人を分別す。善く知つて學人・阿羅漢・辟支佛・諸佛を分別す。[六九]二十根是れなり。「大悲心」とは、是れ大將主・大衆主・大醫王・大導師・大船師。久しうして乃ち是の法を得たり。難行苦行を行じて、乃ち是の法を得たるに、而も今壞せんと欲す。我れ當に阿耨多羅三藐三菩提心を發して厚く善根を種へ、佛道を成じ

【三五】四諦＝Catvāri (ārya) satyāni 又は四聖諦、四眞諦と云ふ。諦 (Satya) とは不變如實の義を云ふ。(一)苦(Duḥkha)、(二)集(Samudaya)、(三)滅(Nirodha)(四)道(Mārga)。
【三六—四三】ここに十七種の樹名あり。此の中、經論に著名なるものの數種の原音を擧ぐ。沙羅樹(Sāla)、多摩樹(Tamāla)、瞻蔔樹(Campaka)、阿輸迦樹(Aśoka)、尸利沙樹(Śirīṣa)、涅跏陀樹(Nyagrodha)、阿輸陀樹(Aśvattha)、憂曇鉢羅樹(Udumbara)。
【四四】くびれてゐること。
【四五】師子王＝獅子中の王なり。佛、菩薩は一切畏るるもののなきに譬へて師子王と云ふなり。
【四六】七寶なり
琉璃(Vaidūrya):
車𤦲(Musāragalva)
馬碯(Aśmagarbha)
大青寶(Mahānīla)
帝青寶(Indranīla)
金剛(Hīra)
頗梨(Sphaṭika)
【四七】當＝正藏にはこの一字なし。三本に據る。
【四八】四十不共法＝卷拾に詳說す。

方世界の諸佛も亦無量無邊なり。是の故に佛生性は無邊なり。諸佛の智、無量にして不可稱・不可量・無等・無等等・無對・無比なるが故に、諸佛の智性も亦無量無邊なり。佛、阿難に告げたまふが如し。是れ聲聞人よ、諸佛の智は無量なり。是の故に諸佛の智性は無量無邊なり。過去世に於いて一一の衆生は無量無邊の心なり。是の諸心皆緣有つて生ず。未來世も亦是の如し。現在世の一切衆生の心も亦無量無邊にして皆緣有つて生ず。是の故に心の所緣も亦無量無邊なり。諸の佛力を略說するに四十不共法有り。是の四十不共法の一一の法の行處は無量無邊なり。行處、無量無邊の故に智も亦無量無邊なり。是の故に佛の行處智は無量無邊なりと說く。「世間轉・法轉・智轉」とは、轉とは、此の法を以つて所轉有るに名づく。「世間」とは、世間に二種有り。國土世間、衆生世間なり。此の中には衆生世間を說く。諸佛及び諸の菩薩は無量無邊の方便力を以つて衆生を引導す。「法轉」とは、無量無邊の善根、福德を以つて諸の佛法を攝取するなり。「智轉」とは、無量の諸の善法、[五二]六波羅蜜、[五三]十地等の佛智を攝取す。是の故に智轉は無量無邊なり。此の三は同じく轉ずるが故に合して一願となす。是の菩薩、一一の願牢堅なるが故に、是の十無盡の願を成ずれば、方は虛空の如く、時は未來際の如く、是の如く略說、廣說を以つて是の十願の究竟を解す。

[五四]發菩提心品　第六

問うて曰く、初發心は是れ諸願の根本なり。云何が初發心と爲すやと。答へて曰く、

初めて菩提心を發すに、
或は三四の因緣あり。

衆生初めて菩提心を發すに、或は三の因緣を以つてし、或は四の因緣を以つてす。是の如く和合して七因緣有りて阿耨多羅三藐三菩提心を發すと。*問うて曰く、何等をか七となすやと。答へて曰く、

の八勝處は八解脫の觀心をして自在勝妙に所緣に對して執惑を起さざらしめんが爲に進修するなり。

【三三】十一切入＝又十遍處と云ふ。靑、黃、赤、白、地、水、火、風、空、識の十法を觀じ、その一一に於て一切處に周遍せしむる觀法を云ふ。前の八は第四禪定に依て欲界の色を緣じて、色の淸淨を觀ずるなり。後の二は空無邊處定、識無邊處を所依として自他の受想行識の四蘊を緣ずるなり。

【三四】盡知＝阿羅漢が一切の煩惱を斷盡したりと知る知を云ひ、無生知とは最早三界の生を受くることなしと自覺する知を云ふ。故に盡知は一切の阿羅漢にあれども無生知はその優れたるもののみに在り。

※發菩提心の七因緣。

涅槃と佛生性と、　　諸佛智性の竟と、
一切心の所緣と、　　諸佛行處の智と、
世間法智轉となり。　　是を十究竟と名づく。

初めには衆生性竟、二には世間性竟、三には虛空性竟、四には法性竟、五には涅槃性竟、六には佛生性竟、七には諸佛智性竟、八には一切心所所緣竟、九には諸佛行處智竟、十には世間法智轉竟なり。是れを十究竟と名づくと。

問うて曰く、汝、竟と言ふ。何等をか竟となす。此の義應に分別すべしと。答へて曰く、

衆生性若し竟すれば、　　我が願も亦、復た竟す。
衆生と等しく竟するが如く、　　是の如く諸願も竟す。
竟の義は無竟に名づく。　　我が善根は竟無し。

「衆生性竟」とは、若し衆生都て盡く滅せば、我が願も便ち應に息むべし、隨つて世間性盡き、虛空性盡き、諸の法性盡き、涅槃性盡き、諸の佛生性盡き、諸[五一]佛智性盡き、一切衆生の心所緣性盡き、入佛法智性盡き、世間轉、法轉、智轉盡くれば、我が此の十願も爾も乃ち盡く息まん。但し是の衆生性等の十事は實に盡きず。我が是の福德善根も亦不盡、不息なり。「不息の義」とは、無量無邊不可思議にして諸の算數に過ぎたるを名づけて不息と爲す。此の如く三千大千世界は十方無量無邊にして諸の算數に過ぐるが故に名づけて世間無邊と爲す。是の諸の世界の中、三界、六趣の衆生は無邊なるが故に名づけて衆生性無邊と爲す。是の一切世界の中に內外二種の虛空性無邊あるが故に名づけて虛空性無邊と爲す。是の諸の世界の中に欲・色・無色の無漏性所攝の有爲法は無邊なるが故に名づけて法性無邊と爲す。若しは一切衆生の滅度涅槃の性は增せず、減せず、是の故に涅槃性は無邊なり。過去十方の諸佛無量無邊なるが若く、今現在の十方の諸佛も亦無量無邊なり。未來十

【三〇】八解脫＝又八背捨と云ふ。通途の法相によつて解すれば次の八勝處、十一切處と共に三界の貪愛を遠離する一具の出世間禪なり。內有色想觀外色解脫、內無色相觀外色解脫、淨解脫身作證具足住、空無邊處解脫、識無邊處解脫、無處有處解脫、非想非非想處解脫、滅受想定身作證具住の八なり。第一は禪定に依て起り、欲界の色を緣じ、第二は二禪に依て起り初禪の色を緣ず。以上二は不淨觀なり。第三は第四禪に依て起り欲界の色を緣ず。唯だ異なるは初二は可憎の不淨色にして、此は可愛の淨色なり。故に是は淨觀なり。四、五、六、七の四は四無色定に依て起り、各所得の定に依て苦・空・無常・無我を觀じ、厭心を生じて之を棄捨するが故に解脫と云ふ。

【三一】八背捨＝八解脫のこと。舊譯なり。

【三二】八勝處＝勝知、勝見を發して貪愛を捨つる八種の禪定なり。是れ勝知、勝見を起す依處なれば勝處と名づく。一に內有色想觀外色少勝處、二に內有色想觀外色多勝處、三に內無色想觀外色少勝處、四に內無色想觀外色多勝處、五に靑勝處、六に黃勝處、七に赤勝處、八に白勝處なり。こ

諸の世界に隨つて應に佛事の有るべき處、盡く其の中に於いて阿耨多羅三藐三菩提を得ることを示さん。一切の衆生を安樂ならしむるが故に、一切の衆生を滅度せしむるが故に、阿耨多羅三藐三菩提の大を以つての故に獨り說くのみ。其の餘の入胎・出胎・生長・在家・出家・受戒・苦行・魔衆を降伏し、梵王を勸請し、及び法輪を轉じ、大衆集會して廣く衆生を度し、大神力を現じて大滅度を示す。此の如き諸事悉く皆是の如く應に作すべし。是に知りぬ。是の如き無量の力有つて能く無量無邊の衆生を利し、應に但だ一國に於いて佛道を成ずることを示すべからず。有る人の言く、一佛國に於いては所有る四天下、諸の閻浮提是れ一佛土なり。此に過ぐる已外は唯だ佛のみ能く知りたまふ。而も實には爾らずと。是れ第十願なり。復た次に、

是の如き諸の菩薩、　十大願を首となす。
廣大なること虛空の如く、　未來際を盡す。
及び餘の無量の願も、　亦各〻分別して說かん。

「願」とは、心の貪樂求欲する所に名づく。「必ず十を成ず」とは、十種の門有ればなり。「廣大なること虛空の如し」とは、願の所緣は方に所有る虛空處の如く願も亦是の如し。「盡未來際」とは、願時の所住は一切衆生の未來生死の際を盡す。有る人の言く、阿耨多羅三藐三菩提は是れ未來世生死の際なり。若しは諸佛[五〇]無餘涅槃に入る、是れ生死の後際なり。菩薩の志願は盡くること無し。而も實に成佛すれば則ち止みぬ。一切十方世界の諸の大菩薩は皆是の願有り。餘の無量の願とは、諸の菩薩、無量希有の功德を成就するが故に諸の所有る願は盡く說くべからず。復た次に、

*菩薩は是の如き　十大願を發し究竟す。

是の十大願に十究竟の事有り。何等をか十とする。答へて曰く、

衆生性と世性と、　虛空性と法性と、

【三九】 四無色定＝Catvārāpya-samāpattayaḥ又四空定と云ふ。無色界の四處の禪定なり。即ち(一)空無邊處定とは、心に色想を捨てて無限の虛空を緣ずる禪定を修すること。(二)識無邊處定とは更に空想を捨てゝ心識が無邊に擴大されし觀想に住して禪定を修すること。(三)無所有處定とは、識想を捨てて心無所有と觀ずる禪定を修すること。(四)非想非々想處定とは、識無邊處定は有想にて、無所有處定は無想なり、今この二想を捨離する禪定を云ふなり。

※十究竟事を解く。

「可度具足」とは、一坐に法を説くに恒河沙の衆生同時に度を得。自ら餘の佛有つて法を演説する時一人、二人を度さんや。是の諸の衆生善根を宿種し、結使微薄なれば説を聞いて卽ち悟す。「大衆集會す」とは、佛の大會有らば一由旬に滿ち、或は十由旬、有るは百千萬億由旬、有るは三千大千世界に滿つ。此の中、大集會とは、十方恒河沙世界を以つて大會と爲す。又、其の會の中には但だ是れ福德の人及び諸天、八部、初地の菩薩乃至十住悉く共に來會す。唯だ諸佛を除く。「佛力具足す」とは、諸佛の所行、[四八]四十不共法なり。是の一一の法、所行處は一切無量無邊なり。是れ第七願なり。復た次に、

倶に一事を行じ、　　願つて怨競有ること無し。

若しは菩薩所作の福德、若しは布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧、若しは諦・捨・滅・慧の四功德處、若しは諸の大願に由つて佛道を求むる時、應に是の願を作すべし。若し餘人有つて我と同じく此の六波羅蜜、四功德處を行じて佛道を求むる者あるも、願くは我れ此の福德の因緣を以つて餘人に於いて怨競を生ぜず。何を以つての故に。同じく一事を行ずるに諸の有智の者も怨相有りと説く。世間も亦復た現に此の事有り。此の過を除かんが故に是の大願を發す。此れ第八願なり。復た次に、

願はくは菩薩道を行じ、　　不退轉輪を轉じ、
諸の煩惱を除きて　　信淸淨に入ることを得せしめん。

「輪」とは、法輪なり。「不退轉」とは、人の能く壞すること無きなり。菩薩は應に是の如く發願すべし。我れ當に説の如く道を行じ、必ず不退の法輪を轉じ、此の法輪を轉じて諸の衆生の[四九]三毒の煩惱を除き、生死を轉捨して佛法の衆に入り、苦集滅道の中に淸淨を得せしめん。是れ第九願なり。復た次に、

＊願はくは一切の世界に　　皆菩提を成ずることを示さん。

し、滋潤にして茂盛す。華色鮮明にして傷缺有ること無し。其の樹の擧高五十由旬なり。端直平澤にして盤節有ること無し。皮膚細軟、色白鮮淨にして刺閡有ること無く、内に朽腐せず。又、空にして中、虫蝎のために傷齧せられず。其の根深固にして連綿相次ぎ、其の華嚴飾にして鬘、瓔珞の如し。枝葉蔚茂して猶圓蓋の如く、次第に分布して功なること人造に殊なれり。其の葉青鮮にして猶寶色の如し。枝に[四四]絞戾・萎黃・枯葉無く、虫蟻・蚊蚋・虻蟻有ること無し。其の下、清淨にして諸の金沙を布き、種種の光明周匝して炤燿す。栴檀、香水を以つて其の地に灑ぎ、平坦柔軟にして清涼快樂なり。牛頭栴檀の細末上に布き、諸天常に曼荼羅華を雨し、黑沈香を燒き芬馨、流溢す。五色の天繒、參羅垂列し、清風微動すれば猗靡隨順す。鳥獸、側に遊んで寂然として聲無し。其の樹の左右に天常に華を雨し、衆妙の雜色自然に間錯せり。垂れては以つて瓔と爲り、猶し龍身の身上に往往に懸くるに金色の華貫を以つてするが如し。四面の大枝に寶羅網を垂れ、衆寶の莊嚴猶し紫金山のごとく、巍巍殊妙にして帝釋幢の如し。斯れ菩薩の百千萬億阿僧祇劫に善行功德を修集するに由つて致す所なり。種種の妙寶、化して[四五]師子王となり、四師子の頂上に廣大の寶床有りて諸の天繒を敷く。四天王天・忉利の諸天・夜摩天・兜率陀天・化樂天・他化自在天・梵天乃至阿迦膩吒天・[四六]琉璃・車渠・馬瑙・大青寶・帝青寶・金剛・頗梨・衆寶の宮殿に乘ず、其の色無比にして光明遠く炤し、倶に寶樹を集めて圍遶し、供養す。又十方無量の世界の諸の菩薩衆、本の所願に隨つて諸の供具を備へ、衆の寶物・花香・幡蓋・種種の伎樂等を雨す。是を菩提樹を具足すと名づく。

*「世間莊嚴」とは、菩薩は十方清淨國土の最上妙の者を觀察して而も大願を發す。我れ[四七]當に功德を修集して得る所の國土復た此に勝れて第一無比なるべしと。

「衆生善利」とは、衆生端正にして諸の疾患無く、老病有ること無く、壽無量阿僧祇劫にして悉く皆化生す。身に衆穢無く、三十二相を具足して光明無量なり。煩惱微薄にして化度すべきこと易し。

體とし、瞋を對治す。二に悲無量心、能く苦を拔かんとする心にして、無害を體とし、害を對治す。三に喜無量心、人の離苦得樂を見て慶悅せんとするの心で、喜愛を體とし、不慰藉を對治す。四に捨無量心とは衆生を平等に見て、怨親の別を立てざるをいひ、無貪を體とし貪瞋を對治す。此の四心は普く無量の衆生を緣じ、無量の福を引くを以て無量心と名づく。

「聲聞具足」とは、一切の諸佛悉く皆聲聞僧を具足す。但だ諸佛本願の因緣の故に少多の差別有り。何らをか具足と謂ふや。所謂る如來の聲聞衆は持戒・禪定・智慧・解脫・知見を具足し、同等清淨にして悉く是れ利根、諸の菩薩を益して形色嚴淨なり。「持戒を具足す」とは、殺生・偸盜・邪淫・妄語・兩舌・惡口・綺語・飲酒・邪命等の諸の惡法を遠離し、又、毘尼に制する所、皆悉く遠離す。又、能く[二六]無漏戒を成就するが故に。「禪定を具足す」とは、[二七]四禪・[二八]四無量心・[二九]四無色定・[三〇]八解脫・[三一]八背捨・[三二]八勝處・[三三]十一切入等及び無漏の諸の禪定を得るが故に。「智慧を具足す」とは、四種の智慧を成就す(るをいふ)。多聞より生じ、思惟より生じ、修業より生じ、先世の業の因緣果報より生ず。「解脫を具足す」とは、一切の煩惱に於いて解脫を得、又、一切の障閡に於いて解脫を得る(をいふ)。「解脫知見を具足す」とは、知は其の事を識るに名づけ、見は其の事を明了にするに名づく。解脫の中に於いて了了に知見して疑ひ無し。又、知は[三四]盡知に名づけ、見は[三五]四諦を見るに名づく。「同等」とは、諸の須陀洹果に入るもの悉く皆同等なり。乃至阿羅漢も亦是の如し。「清淨」とは、三種の清淨を成就す。身清淨・口清淨・意清淨なり。「利智」とは、但だ少語を聞いて能く廣く解了し、義趣に通達し、略を能く廣と作し、廣を能く略と作す。義理微隱にして能く解し易からしむ。「菩薩を利益す」とは、諸の菩薩を念じ、乃至初發心の者をも亦輕慢せず、深く愛敬するが故に、常に善惡を開示し、爲めに佛道の方便因緣を說く。「形色嚴淨」とは、身體姝美にして姿容具足し、兼ねて相好有り、見る者歡喜して辟支佛の如し。行來・進止・坐臥・寐寤・飲食・澡浴・著衣・持鉢・威儀・庠序闕少する所無し。若し人見れば心則ち清淨なり。

「菩提樹を具足す」とは、所有る[二九]大樹・娑羅樹・多羅樹・提羅迦樹・多摩羅樹・婆求羅樹・瞻蔔樹・阿輸迦樹・娑呵迦羅樹・分那摩樹・那摩樹・那迦樹・尸利沙樹・涅劬陀樹・阿輸陀樹・波勒叉樹・憂曇鉢羅樹等なり。此の諸の大樹の中に於いて隨つて一樹を取るに平地に在る者は高廣にして、根莖枝葉を具足

※聲聞具足。

【二六】無漏戒＝無漏は有漏に對する語。漏とは煩惱の異名、一切の煩惱の汚れを脫せる戒を云ふ。

【二七】四禪＝Catvāri-dhyānāni。禪は又馱衍那、禪那とも云ひ、靜慮と譯す。卽ち色界の初、二、三、四の四靜慮なり。

◎菩提樹を具足す。

【二八】四無量心＝又四梵行と云ひ、一に慈無量心、能く樂を與へんとする意志で、無瞋を

に遇へば諸蓋を除くことを得」とは、是の諸佛の本願力の致す所、貪欲・瞋恚・睡眠・調悔・疑の此の障蓋を除き、衆生、光に遇へば卽ち能く佛を念ず、佛を念ずる因緣の故に法を念ず、法を念ずるが故に諸蓋を除くことを得。「光明、身に觸るれば苦惱皆滅す」とは、若し衆生、地獄・畜生・餓鬼・非人[二三]趣の中に墮せば諸の苦惱多し。佛の本願、神通の力を以て光(ひかり)其の身に觸るれば卽ち苦を離ることを得。

※「法具足」とは、一切の諸佛の法は悉く皆具足して、具足、不具足の者有ること無し。諸佛の說法は同じきが故に法倶に具足す。但だ本願の因緣を以つての故に差別不同にして、或は久住、不久住有るのみ。何らをか法具足と謂ふや。法に略說有り、廣說有り、略廣說有り、具足聲聞乘有り、具足辟支佛乘有り、具足大乘有り。諸の神通力を以つて守護して外道の爲めに壞せられず、諸魔の爲めに破せられず、久しく世に住せしむ。「略說」とは、少言辭を以て多義を包含す。利根の人は聞いて則ち開悟す。「廣說」とは、一事、一義に於いて種種の因緣あり。諸の鈍根の分別を樂ふ者の爲めに敷演し、解說す。若し「略廣說」とは、亦、一言を以つて廣義を包擧し、又、亦、種種に一義を演散す。具足聲聞乘・具足辟支佛乘・具足大乘有りとは、此の義後に當に說くべし。「神力護法」とは、佛の神力を以つて是の法を護念し、諸の佛印を以つて之を印す。諸佛の印とは、所謂る四大因[二四]なり。四黑因を離る。「外道の爲めに壞せられず」とは、一切の沙門・婆羅門・外道の論師の所有る邪見は生滅の味を說いて出を患へ、又、一切の善を覺つて破壞の因緣を說く。「一切の魔の爲めに壞せられず」とは、諸佛に無量無邊の功德・智慧・方便・神通力有るが故に魔力有りと雖も而も壞すること能はず、又、諸の菩薩力の故に魔壞すること能はず。「法久住」とは、若しは一劫、若しは減一劫、若しは[二五]是を過ぐるの數なる百劫・千劫・萬劫・十萬劫・百萬劫・千萬劫・萬萬劫・無量千萬億那由他阿僧祇劫乃至無量無邊劫なり。

【二三】趣＝正藏にはこの字なし。三本に據る。

※法具足。

【二四】四功德處か。大智度論二十二に「佛の法印に三種あり」として普通の三法印（無常・無我・涅槃）を列擧せり。法華經譬喩品に「我此法印」の語あり。四大因とは四大印の義で三法印に諸法實相印を加ふるの義か。或は本書卷四に四黑法あり、阿惟越致相品調伏品に五種の四法あり、更に考ふべし。

【二五】是＝正藏にはこの字を缺く。三本に依る。

「無量の壽命」とは、壽命無量劫にして諸の算數に過ぎたるをいふ。一劫・百劫・千劫・萬劫・億劫・百千萬億那由他阿僧祇劫に、是の如く久しく住して利益の爲めに衆生を憐愍するが故に。一切の諸佛は力能く無量なりと雖も、壽は本願を以つての故に、久しく世に住する者有り、久しく住せざる者有り。「見る時必定に入ることを得」とは、衆生、佛を見たてまつること有らば、即ち阿耨多羅三藐三菩提の〔二〇〕阿惟越致地に住す。何を以つての故に。是の諸の衆生佛身を見る者は、心大いに歡喜して清淨悅樂なり。其の心即ち是の如き菩薩三昧を攝得し、是の三昧の力を以つて諸法の實相に通達して、能く阿耨多羅三藐三菩提の必定地に直入す。是の諸の衆生は長夜深心に見佛入必定の善根を種ゑ、大悲の心を以つて首と爲す。善妙清淨にして一切の佛法に通達するが爲めの故に、一切の衆生を度するが爲めの故に、是の善根成就する時至るなり。是の故に此の佛に値ふことを得、又、諸佛の本願、因緣の二事和合するを以つての故に此の事成ずることを得。「佛名を聞いて必定に入る」とは、佛に本願有り。若し我が名を聞かん者は、即ち必定に入つて佛を見るが如く、聞くことも亦是の如し。「女人も〔二一〕佛を見て女形を轉ずることを得」とは、若し一心に女形を轉ぜんと求むること有つて、深く自ら厭患して、信解力有つて男身を誓願す。是の如き女人佛を見ることを得ば即ち女形を轉ず。若し女人是の如き業の因緣有ること無く、又、女身の業未だ盡きずんば是の如き佛に値ふことを得ず。「女人佛名を聞いて女形を轉ず」とは、此の事の因緣、見佛〔二二〕經の中に說くが如し。「佛名を聞いて往生を得」とは、若し人信解の力多くして諸の善根成就し、業の障礙已に盡く、是の如きの人は佛名を聞くことを得て、又、是の諸佛の本願因緣にて便ち往生することを得。「無量の光明」とは、一切の佛の光明は炤す所(二四一三)意に隨つて遠近あり。此に無量と說くは是れ其の常光なり。常光明は由旬里數を以て限量を爲す可からず。遍く東方若干百千萬億由旬に滿ちて量ることを得べからず。南西北方、四維、上下も亦、復た是の如し。但だ其の無量なるを知つて邊際を知ること莫し。「光明

〔二〇〕阿惟越致地＝阿惟越致品第八に詳說す。

〔二一〕佛＝正藏にはこの字なし。三本に據る。

〔二二〕經＝この字正藏になし。三本に依る。見佛經とは般舟三昧經、無量壽經の類を指すか。

(六)「魔怨無し」とは、若し菩薩、成佛に垂んとする時、魔軍有つて能く來つて破する者無き(をいふ)。

(七)「諸の留難無し」とは、菩薩、成佛に垂んとする時、乃至[一八]毫釐の煩惱有るも來つて其の心に入ること無き(をいふ)。

(八)「諸の大衆集會す」とは、若し菩薩、成佛に垂んとするの時、四天王の諸天、忉利の諸天・夜摩天・兜率陀天・化樂天・他化自在天・梵天・乃至阿迦膩吒天、諸の龍神・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽等の一切の諸神、十方無量の世界各〻第一上妙供養の具を持して、來つて菩薩を供養するを名づけて大衆集會すと爲す。又、聲聞の人の言く、十世界の諸天、盡く來るを名づけて諸天大會すと爲すと。

(九)「希有行具足す」とは、若し菩薩佛を得んとするの時、地、六種に震動して十方無量の三千大千世界の諸の魔王の宮殿皆變壞して、色無く、光復た現ぜず、無量の須彌山皆悉く動搖し、無量の大海皆悉く振蕩し、一切の世界は非時華を出し、栴檀末香及び諸天の名華を雨らす[一九]等諸の希有の事(あるをいふ)。

(十)「時具足」とは、時に疾疫・飢饉・刀兵・流離・逃迸無く、雨澤時に隨ひ、諸の災橫無く、諸の國王等、法の如く治化し、人民安樂にして壽命延長し、怨賊、諸の惡鳴獸・毒虫・鬼神有つて衆生を惱害すること無き(をいふ)。

*「佛の功德力」とは、一切の去來今の佛の威力・功德・智慧・無量の深法等らして差別あること無し。但だ諸佛の本願因緣に隨つて或は壽命の無量なる有り、或は見ること有る者は卽ち必定を得、名を聞く者も亦、必定を得。女人も(之を)見る者は卽ち男子の身を成じ、若し名を聞く者も亦、女身を轉ず。或は名を聞くこと有る者は卽ち往生を得、或は無量の光明有り。衆生遇ふ者は諸の障蓋を離れ、或は光明を以つて卽ち必定に入り、或は光明を以つて一切の苦惱を滅す。

經れば直に佛となるもの、卽ち菩薩の修行が次第に進み最後に達せらるる菩薩としての極位をいふ。故に聽て佛たるべき彌勒等は補處の菩薩といはる。

【一八】毫釐り僅めて僅少なる數量。

【一九】等＝正藏には缺けども三本に依る。

※佛の功德力。

所願無量にして說き盡す可からず。是の故に今、但だ略說して事の端を開示するのみ。其の餘の諸事は應に是の如く知るべし。

略して*淨土の相を說かば所謂る菩薩、善く阿耨多羅三藐三菩提を得、佛の功德力と法とを足具し、聲聞を具足し、菩提樹を具足し、世界を莊嚴し、衆生を善く利す。度すべき者多くして大衆集會し、佛力具足す。

◎「善く菩提を得」とは、十事の莊嚴を以つてす。一には諸の苦行を離る。二には厭劣の心無し。三には速疾に得。四には外道の師を求むること無し。五には菩薩を具足す。六には魔怨有ること無し、七には諸の留難無し。八には諸天大會す。九には希有の事を具足す。十には時を具足す。

(一)「諸の苦行を離る」とは、若し菩薩、阿耨多羅三藐三菩提の爲めに出家して諸の苦行を行ぜず。所謂、若しは四日、若しは六日、若しは八日、若しは半月、若しは一月、乃至一麻、一米、一果を食し、或は但だ水を飲み、或は但だ氣を服す、是の如き苦行を以つてせず、道を求むるに道場に安坐して而も佛道を成ず。

(二)「厭劣の心無し」とは、若し菩薩少しく厭離の心を得ば即時に出家する(をいふ)。

(三)「速疾に得」とは、若し菩薩出家し已つて卽ち阿耨多羅三藐三菩提を得る(をいふ)。

(四)「外道の師を求めず」とは、若し菩薩出家し已つて、時に外道の大師有り。名稱の者有るも往いて諸求せず。汝等何が法を說き、何事を論じ、何を以つて利と爲すやと。亦、四方に求索せさ(るをいふ)。

(五)「菩薩を具足す」とは、菩薩、佛道を成ぜんと欲する時、三千大千世界の中の諸の菩薩及び他方の諸の菩薩、各〻供養の具を持して來つて圍遶し已り、佛、成道して、大光明を放つを待つて各〻共に供養し、佛に從つて法を聞く。皆是れ不退轉の一生補處[一七]なる(をいふ)。

【一二】毘沙門王＝Vaiśravaṇa-rāja 多聞天と譯す。四天十天中の毘沙門天の王なり。又如來の道場を護り、法を聞く故に多聞天と云はる。

【一三】密迹神＝密迹力士、密迹金剛、新譯には秘密主とも云ふ。手に金剛の武器を持し、佛を警護する夜叉神の總名なり。密迹とは彼れ常に佛に親近して佛の秘密の事迹を聞かんとの本誓あるを以てなり。

【一四】沙門＝Śramaṇa 室摩那拏、桑門と云ひ、譯して勤息と云ふ。勤修して煩惱を息むる義、外道、佛教を論ぜず、總じて出家者を云ふ。

【一五】末伽梨＝具には末伽梨拘賒梨子(Maskarī Gośālīputra)と云ふ、六師外道の一なり。楞嚴經二によれば「彼れ末伽梨等、却て此身は死後全滅すと言ふ」とあり。

【一六】迦旃延尼子＝Kātyāyanīputra。摩訶迦旃延子等に作る。佛の十大弟子の一人とは異る。

※淨土の十相を擧ぐ。

◎得菩提(十事莊嚴)。

【一七】一生補處＝Ekajāti-pratibaddha。略して補處とも云ふ。佛の位を補ふの義にて、佛たるべき候補を云ふ。その原義は一生(Ekajāti)、所繫(Pratibaddha)の意で一生を

事ふる者、[11]閻羅王に事ふる者、[12]毘沙門王に事ふる者、[13]密迹神に事ふる者、浮陀神に事ふる者、龍に事ふる者、裸形の沙門、[14]白衣の沙門、染衣の沙門、[15]末迦梨の沙門、毘羅哆子の者、[16]迦旃延尼子の者、薩耆遮子の者、持牛戒の者、鹿戒の者、狗戒の者、馬戒の者、象戒の者、乞戒の者、究摩羅戒の者、諸天戒の者、上戒の者、婬欲戒の者、淨潔戒の者、火戒の者、色滅涅槃を說く者、聲滅涅槃を說く者、香滅涅槃を說く者、味滅涅槃を說く者、觸滅涅槃を說く者、覺觀滅涅槃を說く者、喜滅涅槃を說く者、苦樂滅涅槃を說く者、水衣を臺と爲す者、水淨者・食淨者・生淨者、杵臼を執る者、打石者・喜洗者・浮沒者・空地住者、刺蕀に臥する者・世性者・大者・我者・色等者・聲等者・香等者・味等者・觸等者・地知者・水知者・火知者・風知者・虛空知者・和合知者・變知者・眼知者・耳知者・鼻知者・舌知者・身知者・意知者・神知者、是の如き等の在家、出家の種種の邪見、邪行を名づけて不淨と爲す。

復た次に、其の地高下・坑坎・埠阜・榛叢・刺蕀の妨閡する所多く、塵土・坌穢・泥潦臼陷あり、惡山巉巖として屈曲隈障し、重嶺隔塞して峻峭として上ること難く、鹹鹵乾燥、沙礫瓦石あり、衆果に味少なく色香具せず。藥草良からず、勢力薄少にして妙なる色・聲・香・味・觸有ること少なし。園林・樓閣・流水・浴池・小山・土嶺・登緣して遠く望むる娛樂の處皆悉く尠少なり。郡縣、聚落相接近せず、地に丘荒多くして人民希少なり。多くは無福・貧窮・下劣の諸城を見るのみ。宰牧・大官・貴人・諸賈・客主・巧匠工師・學讀の人も亦、復た少し。衣服・臥具・醫藥、便身の具、甚だ得難しと爲す。得ると雖も妙に非ざるを名づけて不淨と爲す。

不淨を略說するに二種有り。一には衆生の因緣を以つてし、二には行業の因緣を以つてす。「衆生の因緣」とは、衆生過惡の故に、「行業の因緣」とは、諸行過惡の故なり。此の二事は上に已に說きぬ。此の二事を轉ずれば則ち衆生の功德、行業の功德有り。此の二功德を名づけて淨土と爲す。是の淨國土は當に知るべし。諸の菩薩の本願、因緣に隨つて、諸の菩薩能く種種の大精進を行ずるが故に

を大劫となす。故に小劫盡とは一小劫の盡くる時を云ふなり。

【一六】以下外道の邪見邪行を列擧す。左にこれ等の中、普通に知られたるものを註す。

【一七】究摩羅＝Kumāra又、拘摩羅・鳩摩羅に作る。譯して童子と云ふ。初禪天の梵王にして其の顏童子の如ければかく名づく。

【一八】毘舍闍＝Piśāca　又毘舍遮に作る。持國天所領の鬼の名なり。

【一九】金翅鳥＝新譯には妙翅鳥と云ひ、迦樓羅・迦留羅と云ふ。梵語 Garuḍa の譯なり。四天下の大樹に居り、龍を取つて食となすと云ふ。八部衆の一なり。

【二〇】乾闥婆＝Gandharva 香神・尋香と譯す。八部衆の一、樂神の名、酒肉を食はず、唯香を求めて陰身を養け、その陰身より香を出せば、香神と云ひ、緊那羅と共に帝釋に奉侍して伎樂を奏することを司る。

【二一】閻羅王＝Yama-rāja 炎摩・閻魔・琰摩邏闍に作る。又雙世、平等王と云ふ。兄妹二人並び王たるの義或は平等に罪を治する義なり。地獄の總司。

卷の第三

釋願品[一]第五の餘

[二]復た次に、

*佛土を淨めんと願ふが故に、　諸の雜惡を滅除す。

〇殺生・偸盜・邪婬・妄語・兩舌・惡口・綺語・貪恚・邪命・飲酒[三]等是の如き惡有るを名づけて不淨と爲す。復た次に、國土の中に地獄・畜生・餓鬼等の諸の惡道有るを名づけて不淨と爲す。

復た次に、衆生無信・懈怠・亂心・愚癡・諂曲・慳嫉・忿恨・重・邪見・慢・憍慢・大慢・我慢・邪慢・嬌異・自親・激動・抑揚、利に因つて利を求め、世樂を貴び、放逸にして自ら恣に、多欲・惡欲・邪貪・邪婬にして、父母・沙門・婆羅門を識らず。忍辱ならず。威儀を破し、與語を雜じ、邪覺觀・貪欲・瞋恚・睡眠・調戲・疑に覆蔽せらるるを名づけて不淨と爲す。

復た次に、惡鳥獸、多怨賊にして、水漿無く、飢饉の災、疫人の畏れ、非人の畏れあり、内には返逆、外には賊冦あり、若しは多雨、若しは[四]亢旱・諸衰惱・小劫盡[五]・諸苦惱等あるを名づけて不淨と爲す。

復た次に、衆生短命にして、惡色無力、諸の憂苦多く、少しく膽幹にして疾病多く、威力少く、眷屬少く、惡眷屬ありて、眷屬を壞し易く、小居家儜劣にして、邪出家あるを名づけて不淨と爲す。

[六]復た次に、儈佉楡伽憂樓迦王・那波羅他毘佉那𨚞莎王・那吉略仙人・象仙人・斷婬人・上弟子行者・放羊者・大心者・忍辱者・喬曇摩鳩蘭陀磨活人者・度人者・緣水者・婆羅沙伽那頗羅墮闍、著衣の者、無衣の者、韋索衣の者、皮衣の者、草衣の者、下衣を著ける者、角鵄毛衣の者、木皮衣の者、三洗者・隨順者・梵王に事ふる者、[七]究摩羅に事ふる者、[八]毘舍闍に事ふる者、[九]金翅鳥に事ふる者、[一〇]乾闥婆に

【一】第五＝正藏にはこの二字を缺く。三本に據る。

【二】復次＝正藏には第二卷の末にあり。今三本に據る。

〇種々不淨の相を列す。

【三】十種の惡目を擧ぐる中、身三口四は普通なるも、意三の貪瞋を一として邪命と飲酒とを列ねたるを注意すべし。

【四】亢旱＝ひでり。

【五】小劫盡＝劫とは Kalpa の譯。之に大・中・小劫あり。今通說によれば、人壽十歲より百年に一を增して人壽八萬四千歲に至るものを一增と云ひ、逆に人壽八萬四千歲より百年に一を減じて人壽十歲に至るを一減として、その各々を一小劫となし、一增一減を合せて中劫とし、之を成・住・壞・空の四期に各々二十中劫を經るなり。而して八十中劫

法・非智首行法・信首行法・非信首行法・思惟首行法・非思惟首行法・願首行法・非願首行法・色法・非色法・教法・非教法・變化法・非變化法・如意遊行法・非如意遊行法・欲本法・非欲本法・因善法・非因善法・因善根法・非因善根法・定法・非定法・身法・非身法・口法・非口法・意法・非意法・有對觸生法・非有對觸生法・意觸生法・非意觸生法・惡法・非惡法・善法・非善法・能生法・非能生法・念念滅法・非念念滅法・攝聚法・非攝聚法・明分法・非明分法・因法・非因法・緣法・非緣法・因緣法・非因緣法・因生法・非因生法・有因法 非有因法・一法・異法・滅法・非滅法・攝根法・非攝根法・共心法・非共心法・心法・非心法・心數法・非心數法・共觸五法・非共觸五法・共得十六法・非共得十六法・細法・麁法・迴向法・非迴向法・善法・不善法・無記法・見諦所斷法・思惟所斷法・不斷法・學法・無學法・非學非無學法等、無量千萬種の諸法、皆空無相無作門の平等無二に入らしむ。信解力を以つての故に。是れ第六願なり。

【七三】此の品は菩薩の願を釋す。

【七四】國譯華嚴經五四七—五四九頁參照。

◎十大願を釋す。

二法を以つて無量阿僧祇の衆生をして聲聞、辟支佛道に住せしむべし。是れ第四の願なり。復た次に、

(七)願つて一切の衆生に、　佛、菩提を成就せしめん。

人有つて聲聞、　辟支佛道に向ふ者あり。

是の人は聲聞、辟支佛の法を修集して未だ法位に入らず。我れ當に教化して佛の道に趣かしむべし。人有つて聲聞、辟支佛道に向はずんば我れ當に教化して無上佛道に向はしめん。人有つて無上佛道に向ふ者には我れ當に示教し、利喜して其の功德をして轉た更に增益せしむべし。是の如く一切の衆生を教化する、是れ第五の願なり。復た次に、

願はくは一切の法をして、　信解し、平等に入らしめん。

「一切の法」とは、凡そ所有る法は、度法・非度法・攝覺意法・非攝覺意法・助道法・非助道法・聖道所攝法・非聖道所攝法・應修法・不應修法・應近法・不應近法・應生法・不應生法・生法・不生法・現在法・非現在法・因緣生法・非因緣生法・因緣法・非因緣法・從思惟生法・不從思惟生法・麁法・細法・受法・不受法・內法・外法・內入所攝法・非內入所攝法・外入所攝法・非外入所攝法・五陰所攝法・非五陰所攝法・五受陰所攝法・非五受陰所攝法・四諦所攝法・非四諦所攝法・助世法・非助世法・依貪法・依出法・顚倒法・非顚倒法・變法・非變法・悔法・非悔法・大法・小法・受處法・非受處法・可斷法・不可斷法・知見法・不知見法・有漏法・無漏法・有繫法・無繫法・有淨法・無淨法・有上法・無上法・有覺法・無覺法・有觀法・無觀法・可喜法・不可喜法・相應法・不相應法・有分別法・無分別法・行法・無行法・有緣法・無緣法・有次第法・無次第法・可見法・不可見法・有對法・無對法・可見有對法・不可見無對法・有相法・無相法　可行法・不可行法・有爲法・無爲法・險法・非險法・有本法・無本法・有出法・無出法・衆生法・非衆生法・苦者法・非苦者法・惱法・非惱法・有法・非有法・逆法・非逆法・樂報法・非樂報法・苦報法・非苦報法・憶生法・非憶生法・智首行

がために精進す。一心に精進して此四法を行ずるために四正勤と名く。能く懈怠を斷ずるために四正斷と名く。

【七〇】　四如意足＝Catvāraḥ ṛddhipādāḥ。三十七道品中の一科、四正勤に次いで修する行品なり。四神足とも云ふ。主として定力を得、慧定均等ならしめんがための修行なり。一、欲(Chanda)。神通を得、無漏の眞智を得んとの欲求。二、精進(Virya)。欲求を實現せんと精進努力すること。三、心(Citta)。心をこの一點に集めて散亂せしめぬこと。四、思惟(Vimāṃsā)。心念の專注によりて神通實現の域に進むこと。

【七一】　菩提＝Bodhi 舊譯に道と譯し新譯に覺と譯す。道とは通の義、覺とは覺悟の義、而るに道通所覺の境に事理の二法あり。理とは涅槃なり、煩惱障を斷じて涅槃を證する一切智は三乘に通ずる菩提智なり。事とは一切有爲の諸法なり、所知障を斷じて諸法を知る一切種智は唯だ佛の菩提なり。佛の菩提此の二に通ずるが故に大菩提と云ふ。

【七二】　薩埵＝Sattva 情又は衆生、有情と譯す。生命あるものの稱なり。薩多婆、薩坦嚩、索埵等に作る。

の佛法我れ應に守護すべしと。問うて曰く、過去の諸佛は已に滅す。法も亦隨つて滅す。未來の諸佛は未だ出でたまはず。法も亦未だ有らず。尙し初轉法轉も無し。何に況んや餘法をや。云何ぞ當に守護することを得んや。正に現在の諸の佛法を守護すべし。諸佛現在するを以つての故にと。答へて曰く、過去・未來・現在の諸佛の法は些是れ一體、一相なり。是の故に若し一佛の法を守護せば則ち三世の諸佛の法をも守護すと爲す。經に說くが如し。佛、諸の比丘に告げたまはく、毘婆尸佛の法、出家・受戒・著衣・持鉢・禪定・智慧・說法・敎化も亦我が如きなりと。是の故に汝が難は然らず。是れ第二の願なり。復た次に、

諸佛[七三]兜術より、　　退き來つて世間に在し、
乃至敎化し訖つて、　　永く無餘界に入る。
處胎及び生時、　　出家して道場に趣き、
魔を降して佛道を成じ、　　初めて妙法輪を轉じたまふ。
諸の如來を奉迎し、　　及び餘時の中に於いて
願つて我れ悉く當に　　盡心に供養することを得べけん。

諸佛始め兜術天上より退いて世間に下り、終に無餘涅槃に至る其の中間に於いて、入胎の時に大いに供養を設け、及び生時、出家して道場に趣き、魔王を下して佛道を成じ、法輪を轉ずるに、如來を奉迎す。「餘時」とは、大神通を現じて人天の大會に廣く衆生を度す(るをいふ)。爾の時に當に華香・幡蓋・伎樂・歌頌を以つて稱讃すべし。出家、受法、說の如く修行して第一供養の具を以つて諸佛を供養す。是れ第三の願なり。復た次に、

願つて衆生を敎化し、　　悉く諸道に入らしめん。

「敎」は他に敎ふるに善法を以つてするに名づけ、「化」は惡法を遠離するに名づく。我れ當に此の

(三)喜覺分、(四)除覺分、(五)捨覺分、(六)定覺分、(七)念覺分。

※初地安住の法

【六七】 八道＝八正道のこと。前出。

【六八】 四念處＝Catvāri-smṛtyupasthānāni。又四意止、四念住とも云ふ。三十七道品中の一科にして身を不淨、受を苦、心を無常、法を無我と觀じて常・樂・我・淨の四顚倒を治する觀法なり。念處とは念は觀慧と俱起する念の心所、處は其境、即ち身、受、心、法の四なり。此の四境に於て不淨、苦、無常、無我の觀慧を起す時、能く念をして其境に止住せしむるが故に念處又は念住と云ふ。その品目は(一)身念處(Kāya-smṛtyupasthāna)。(二)受念處(Vedanā-s.)。(三)心念處(Citta-s.)。(四)法念處(Dharma-s.)。

【六九】 四正勤＝Catvāri-prodhānāni。三十七科の道品中四念處について修する所の行品なり。一に斷々とは已生の惡に對して除斷の爲に精進す。二に律儀斷とは未生の惡に對して更に生ぜざらんために精進す。三に隨護斷とは未生の善に對して生ぜんがために勤めて精進す。四に修習斷とは已生の善に對して增上せしめん

道路を治して淸淨ならしむるが如し。是の諸法は但だ初地を修治するのみならず、一切の諸地も皆此の法を以つてす。

＊問うて曰く、汝已に初地の方便及び淨治の法を得と說く。菩薩は云何か安住して而も退失せさるやと。答へて曰く、常行成就して是の如く信力轉た增上し、法に等しきを名づけて「初地に安住す」と爲す。菩提は上道に名づけ、薩埵は深心に名づく。深く菩提を樂ふが故に名づけて菩提薩埵と爲す。復た次に衆生を薩埵と名づけ、衆生の爲めに菩提を修集するが故に菩提薩埵と名づく。「上法」とは、信、法に等しくして、能く人をして佛道を成ぜしむるが故に名づけて上法と爲す。

釋願品　第五

已に入初地の方便及び淨治の法を說きぬ。菩薩は願に因るが故に諸地に入ることを得、又、信力增上等の功德を成就するが故に其の地に安住す。今當に此の願を分別すべし。

願はくは供養し、奉給して　　一切の佛を恭敬し、
願つて皆一切の　　諸の佛法を守護し、持すべし。

此れは是れ諸の菩薩の初願なり。初發心より乃至阿耨多羅三藐三菩提を得る其の中間に於いて、所有る諸佛を盡くして當に供養し、奉給し、恭敬すべし。「供養」とは、花香・瓔珞・幡蓋・燈明・起塔廟等に名づく。「奉給」とは、衣服・臥具・所須の物に名づく。「恭敬」とは、尊重・禮拜・迎來・送去・合掌・親侍に名づく。復た次に小乘の法を以つて衆生を敎化するを名づけて供養と爲す。辟支佛法を以つて衆生を敎化するを名づけて奉給と爲し、大乘法を以つて衆生を敎化するを名づけて恭敬と爲す。是れ第一の願なり。

「一切の諸の佛法を護持す」とは、菩薩は是の念を作す。一切の過去、未來、現在の十方三世の諸

（六）觸(Sparśa)。
（七）受(Vedanā)。
（八）愛(Tṛṣṇā)。
（九）取(Upādāna)。
（十）有(Bhāva)。
（十一）生(Jāti)。
（十二）老死(Jarāmaraṇa)。

【六三】　有漏＝Sāsrava漏(Āsrava)とは煩惱の異名。煩惱は有情の六根門より窮りなく漏泄し、有情を生死に留住し、流轉せしむる等常に過を漏らすを以てなり。有は小乘では隨增の義、煩惱に隨順し、增上する法を有漏と云ひ、大乘では倶の義、煩惱と倶生、倶滅、互に相增益する法を云ふ。

【六四】　五根＝Pañcendriyāṇi眼根 Cakṣus-indriya)、耳根(Śrotra-i.)、鼻根(Ghrāṇa-i.)、舌根(Jihvā-i.)、身根(Kāya-i.)。

【六五】　五力＝Pañca-balāni。
一、信力(Śraddhā-bala)。
二、精進力(Vīrya-b.)。
三、念力(Smṛti-b.)。
四、定力(Samādhi-b.)。
五、慧力(Prajñā-b.)。

【六六】　七覺＝Sapta-sambodhyaṅgāni とは、三十七道品を七科とせる中の第六。七等覺分・七遍覺分・七菩提分とも云ふ。佛道修業に於て知慧を以て諸法を覺了簡擇する支分に七種を分けしをいふ。
（一）擇法覺分、（二）精進覺分

佛と爲す。

(一五)「堅く薩婆若に住して動ぜざること大山の如し」とは、是の菩薩、一切の願を發して薩婆若を求むるに種種の因緣乃至大地獄の苦にも心、移動せざること須彌山王の吹けども動すべからざるが如きをいふ。

(一六)「常に修して上法を轉ず」とは、初發心より常に勝法を求索し、初地の中に入つて更に上法を修す。是の如く展轉して心に厭足無きなり。

(一七)「出世間の法を樂つて世間の法を樂はず」とは、「世間の法」とは、世間の事に隨順して生死を増長するに名づく。六趣[五七]・三有[五八]・五陰[五九]・十二入[六〇]・十八界[六一]・十二因緣[六二]、諸の煩惱[六三]、有漏業等なり。「出世間の法」とは、所用の法に隨つて能く三界を出づるに名づく。所謂る五根[六四]・五力[六五]・七覺[六六]・八道[六七]・四念處[六八]・四正勤[六九]・四如意足・空無相無作の解脫門、戒律儀、多聞、無貪恚癡の善根、厭離心、不放逸等なり。是の菩薩は利根の故に世間虛妄の法を樂はず。但だ出世間眞實の法を樂ふなり。

(一八)「卽ち歡喜地を治め、難治なるも而も能く治す」とは、治は通達無礙に名づく。人の竹を破るに初節は難しと爲れども餘は皆易きが如し。初地の難治も治し已れば餘は皆自ら易し。何を以つての故に。菩薩、初地に在りて勢力未だ足らず、善根未だ厚からず、善法を修習すること未だ久しからざるが故に眼等の諸根猶ほ諸塵に隨ひ、心未だ調伏せず。是の故に諸の煩惱猶ほ能く患ひと爲ること、人の勢力未だ足らずして水に逆へば則ち難きが如し。又、此の地の中に魔及び魔民多くして障礙と爲るが故に方便力を以つて勤めて精進を行ず。是の故に此の地を名づけて難治と爲す。是の如き信力轉た増長するを首と爲し、世間の法を樂はざるを後と爲す。此の二十七の法を修さば菩薩初めて歡喜地を治す。是の故に說く。菩薩は應に常に此の法を修行すべしと。「修行」とは心を一にして放逸ならず、常に行じ、常に觀じて諸の過惡を除くに名づく。故に名づけて「治」と爲す。人の行く所

【五七】 六趣。前出。

【五八】 三有＝有とは存在の意味、三界の異名なり。三界とは涅槃の理想境に對して迷界生死流轉の世界を云ふ。卽ち一に欲有(欲界)、二に色有(色界)、三に無色有(無色界)なり。有はBhava.界はDhātuの譯。

【五九】 五陰。前出。

【六〇】 十二入＝前出。

【六一】 十八界＝前出。

【六二】 十二因緣＝Dvādaśapratītyasamutpādaḥ。又十二緣起・十二支・十二有支とも云ふ。過去・未來・現在の三世に亙る生の連續(迷の因果)を十二分して說明せしもの。
(一)無明(Avidyā)。
(二)行(Saṁskāra)。
(三)識(Vijñāna)。
(四)名色(Nāmarūpa)。
(五)六入(Ṣaḍāyatanāni)。

家を汚すと名づくと。是の義然らず。何を以つての故に。是の人は能く生死を度し、又、諸の無漏根力、覺道を得たり。亦是れ佛子なり。云何ぞ諸の佛家を汚すと言んや。經に說くが如し。佛、比丘に告げたまはく、「汝は是れ我が子なり。我が心より生じ、口より生じて法の分を得たる者なり」と。又、聲聞の人の言く、「諦・捨・滅・慧の處を諸佛の家と名づく」と。何を以つての故に、是の四事より諸佛を出生するが故に。若し此の四法を爲せば諸佛の家を汚すと名づく。是の故に若し人、虛妄・慳貪・狂亂・愚癡なれば是れ佛家を汚す。若し正しく此の四を行ずれば則ち諸の佛家を汚さずと。有る人の言く、六波羅蜜は是れ諸の佛家なり。此れより諸佛生ずるが故に。若し此の六事に違すれば是れ佛家を汚すなりと。有る人の言く、般若波羅蜜は是れ諸佛の母なり。方便をば父と爲す。是れを諸佛の家と名づく。此の二法を以つて諸佛を出生す。若し此の法に違はゞ是れ佛家を汚すなりと。

（二四）復た次に偈の中に自ら汚、不汚の相を說く。所謂る「戒を毀たず、佛を欺かず」と。若し佛戒を受けて護持すること能はずんば則ち諸佛を欺く。是れ佛家を汚すなり。何を以つての故に。受戒の時は佛家の中より生じ、破戒すれば則ち諸佛を欺けば佛家を汚すと名づく。問うて曰く、必定の菩薩に破戒有りやと。答へて曰く、煩惱を斷ぜずんば是の事を畏る可し。未だ久しからざる入必定の菩薩は或は破戒有るべし。大勝佛法の中に說けるが如し。難陀は故らに破戒す。我れ此の事を說くこと猶ほ以つて畏と爲す。但し經に此の說有るを以つて佛語を信ずるが故に心則ち信受す。若しは戒を受けて破らず、諸佛を欺かざるを名づけて佛家を汚さずと爲す。復た次に戒をば三學に名づく。戒學・[五六]心學・慧學なり。此の學を破るを佛家を汚すと名づく。法の如く受戒して而も後に毀破するを名づけて欺佛と爲す。是の如く二句各ゝ義趣有り。「欺佛」とは、自の發願を空うし、說の如く行ぜずして衆生を欺誑す。是れを欺佛と名づく。復た次に一切の法の中に說の如く行ぜざるを名づけて欺

ずして清淨に佛道を修行すること。古來行者の守るべき十二種の條項をあげ之を十二頭陀と云ふ。即ち一、納衣、二、三衣、三、乞食、四、不作餘食、五、一坐食、六、一揣食、七、阿蘭若處、八、塚間坐、九、樹下坐、十、露地坐、十一、隨坐、十二、常坐不臥、これなり。

【五一】檀越＝梵 Dānpati。施主をいふ。南海寄歸傳第一に梵に陀那鉢底と云ひ、譯して施主となす。陀那は是れ施、鉢底は是れ主なり。（中略）、檀捨を行ずるに由り、自ら貧窮を越渡すべしといへり。

【五二】尼師壇＝Nisīdana。坐臥の時地に敷きて身を守り、又臥具の上に布きて臥具を護るもの、坐具とも譯す。

【五三】鉢＝Pātra 行乞に用ゐる鉢のこと。

【五四】僧伽梨＝Saṃghāṭi。比丘三衣の一、複衣、大衣とも云ひ、王宮聚落に入りて乞食說法するとき必ず服するものなるにより入王宮聚落時衣とも稱す。

【五五】尼師檀＝前出。

【五六】普通に戒定慧といふ。

妹、親戚の如くにして異ること無し。若し所須有らば我れ能く相ひ與へ、所作有らんと欲せば我れ能く爲作せん。我れ遠近を計らずして能く來つて問訊し、我れ此に住せば正しく相ひ爲さんのみ（と云ひて）、供養を求むるが爲めに檀越に貪著し、能く口辭を以つて人の心を牽引す。是の如き等を名づけて自親と爲す。「激動」とは、人有つて貪罪を計らず、財物を得んと欲して物の相を得て是の如きの言を作す。是れ鉢を好み、若しは衣を好み、若しは戸鈎を好み、若しは[五二]尼師檀を好みて、若し我れ得ば則ち能く受用せんと。又、言く、意に隨つて此の人の得難きを施さんと。又、檀越の家に至つて是の言を作す、汝が家は羹飯、餅肉、香美なり。衣服復た好し。常に我れを供養するに、我れに親舊を以つてす。必ず當に見(現)與すべしと。是の如く貪相を示現す。是れを激動と名づく。「抑揚」とは、人有つて利養を貪るが故に檀越に語つて言く、汝は極めて慳惜なり。尚、父母・兄弟・姉妹・妻子・親戚にだにも與ふること能はず。誰か能く汝が物を得ん者ぞと。檀越をして愧恥し、俛仰して施與せしむ。又、餘の家に至つて是の言を作す。求に福德有り。人身を受くること空しからずして、阿羅漢常に汝が家に出入し、汝と與に坐起し語言し、是の念を作して、檀越を想ひ、或は是の心を生じて更に餘人をして我が家に入出すること無からしめて必ず我を謂へと。是れを名づけて抑揚と爲す。「利に因つて利を求む」とは、人有つて衣、若しは[五三]鉢、若しは[五四]僧伽梨、若しは[五五]尼師檀等の資生の物を以て、持して人に示して言く、若し王、王等及び餘の貴人、我に是の物を與ふ。是の念を作す。檀越、或は能く心を生じ、彼の諸王、貴人尙能く供養す。況んや我れ是の人に與へざらんやと。因つて此の利を以つて更に餘の利を求むるが故に利に因つて利を求むと名づく。是の故に應當に此の如きの諂僞を遠離すべし。

(三)「諸の佛家を汚さず」とは、何等をか諸の佛家を汚すと爲す。有る人の言く、若し人無上道を求むる心を發し已つて後に聲聞、辟支佛道に廻向し、能く世に住して三寶の種を繼がざる、是を諸の佛

六根六境なり。

【四四】十八界＝界とは梵語駄都(Dhātu)の譯、種族、種類の義、十八界とは眼界・耳界・鼻界・舌界・身界・意界・色界・聲界・香界・味界・觸界・法界・眼識界・耳識界・鼻識界・舌識界・身識界・意識界の稱、即ち六根・六境・六識なり。

【四五】空・無相・無作＝三三昧地 Samādhi。三等持・三空等とも云ひ、空三昧・無相三昧、無願三昧(無作は舊譯)のこと。空・無相・無願と觀ずるが爲めに住する定なり。空とは萬有の上に於て、人又は法の空なるを觀じ、無相とは空なるが故に差別の相狀なきを觀じ、無願とは無相なるが故に願求すべきことなしと觀ずるを云ふなり。

【四六】五欲＝色・聲・香・味・觸の五境、これ有情の欲心をそそり妄分別を起さしむれば五欲と名づけ、又眞理を汚すものなれば五塵とも云ふ。

【四七】多聞＝正藏には多名聞とあるも三本に依る。

【四八】阿練若。前出。

【四九】納衣＝糞掃衣(Pāṃsukūla)と云ふ。人の委棄せる糞掃に均しきものを縫納して衣となすを以てなり。

【五〇】頭陀＝Dhūta。煩惱の塵垢を去り、衣食住に貪著せ

(五)「妙法を喜樂す」とは、常に深く法味を得んと思惟し、修習して久しくんば則ち樂を生ず。人の花林に在つて與に色相を愛して誤樂するが如し。

(六)「常に善知識に近づく」とは、菩薩に四種の善知識有り。後に當に廣く說くべし。此の中の善知識とは諸の佛、菩薩是れなり。常に正心を以つて親近すれば能く歡悅せしむ。(七)「慚愧」とは、喜を爲して恥を羞ずるに名づく。「恭敬」とは、其の功德を念じて其の人を尊重するに名づく。(八)「柔軟」とは、其の心和悅し、同止し、安樂なるに名づく。(九)「觀法を樂ふ」とは、法は[四二]五陰、[四三]十二入・[四四]十八界・[四五]空・無相・無作等に名づく。正憶念を以つて常に此の法を觀ずべし。「著すること無し」とは、心、三有に歸趣するに名づく。是れ衆生の所歸なり。有る人の言く、[四六]五欲の諸の邪見、是れ歸趣する所なり。何を以つての故に。衆生は心に常に繫著するが故に。菩薩の利智は心に貪著無し。一心は佛法を貴重し、心に餘想無きに名づく。

(一〇)[四七]「多聞を求む」とは、佛說に九部經あり、能く盡く推尋し、修學し、明了にし、若し少くば盡きず。

(一一)「利養を貪らず」とは、利は飮食、財物等を得るに名づけ、養は恭敬・禮拜・施設・床座・迎來・送去に名づく。菩薩は應に是の事を以つて衆生に施與して貪著せざるべし。

(一二)「姦欺」は斗秤の邪僞、衣物の不眞に名づく。「諂」は心、端直ならざるに名づく。「誑」は五邪命の法に名づく。一には矯異に名づく。二には自親に名づく。三には激動に名づく。四には抑揚に名づく。五には利に因つて利を求むるに名づく。「矯異」とは、人有つて利養を貪求するが故に、若しは[四八]阿練若と作りて[四九]納衣を著け、若しは常乞食、若しは一坐食、若しは常坐、若しは中後に漿を飮まず。是の如き等の[五〇]頭陀の行をもつて是の念を作す。他のために是の行を作さば供養、恭敬を得ん。我れ是の行を作さんと、或は亦之を得て利養の爲めの故に威儀を改易するを名づけて矯異と爲す。「自親」とは、人有つて利養を貪るが故に[五一]檀越の家に詣つて語つて言く、我が父母、兄弟・姉

【四二】五陰＝色・受・想・行・識の五蘊を云ふ。陰（Skandha）とは積集の義、蘊と同義、唯だ新、舊譯の相異のみ。一に色陰とは五根五境等の有形の物質を總該す。二に受陰とは境に對して事物を受け込む心の作用なり。三に想陰とは境に對して事物を想像する心の作用なり。四に行陰とは其他、境に對して瞋り貪る等の一切の心の作用及び物心の法則なり。五に識陰とは境に對して事物を了別知識する心の體なり。

【四三】十二入＝十二處のこと。處とは梵語阿耶怛那（Āyatana）の譯にして生長門の義、心心所のために六根は所依となり、六境は所緣となりて其の作用を生長する故なり。處は新譯、入は舊譯の相異のみ。十二處とは眼處・耳處・鼻處・舌處・身處・意處・色處・聲處・香處・味處・觸處・法處是れなり。即ち

利養を貪らず、　姦欺、諂誑を離れて、
諸の佛家を汚さず、　戒を毀ち、佛を欺かず、
深く[三六]薩般若を樂つて、　動ぜざること大山の如し。
常に修習の行を樂つて、　上の妙法を轉じ、
出世間法を樂つて、　世間の法を樂はずんば、
即ち歡喜地を治め、　難治なるも而も能く治む。
是の故に常に心を一にして、　此の諸法を勤行せば、
菩薩は能く是の如く、　上妙の法を成就せん。
是れを則ち菩薩、　初地の中に安住すと爲す。

菩薩は是の[三七]二十七法を以つて初地を淨治す。「信力轉た增上す」とは、信は聞見する所有るに名づく。必ず受けて疑ひ無し。增上は殊勝に名づく。問うて曰く、二種の增上有り。一には多、二には勝、今の說は何れか。答へて曰く、此の中には二事倶に說く。菩薩、初地に入つて諸の功德味を得るが故に信力轉た增す。是の信力を以つて諸佛の功德無量にして深妙なるを籌量し、能く信受す。是の故に此の心も亦多なり。亦た勝なり。

「深く大悲を行ず」とは、衆生を愍念すること骨髓に徹入するが故に名づけて深と爲す。一切の衆生の爲めに佛道を求むるが故に名づけて大と爲す。「慈心」とは、常に利事を求めて衆生を安隱ならしむ。「慈」に三種有り。後に當に廣く說くべし。

「善心を修して倦むこと無し」とは、善法に親近し、修習して能く與に果を愛す可きに名づく。是の如き法を修する時、心、懈惰ならざるなり。善法の因緣は[三八]四攝法、[三九]十善道、[四〇]六波羅蜜、菩薩の[四一]十地等及び諸の功德に名づく。

【三六】薩般若＝Sarvajña。一切智と譯す。一切智（總相を知る）、道種智（別相）、一切種智（總別二相）の別あり。

【三七】菩薩初地修治の二十七法を明かす。但し二十七法完からず。

【三八】四攝法＝攝は他を取り入れること。衆生を取り持ち、道を受けしむるの法なり。之に四種あり、一に布施攝、布施を受くることを好む衆生には布施して親愛の心を生ぜしめ、二に愛語攝、衆生の根性に隨つて善言慰喩し、之に依つて親愛の心を生ぜしめ、三に利行攝、身口意の善業により衆生を利益し親愛の心を生ぜしめ、四に同事攝、法眼を以て衆生の根性を見、其の所樂に隨つて利益を共にし親愛の心を生ぜしめ、是に依つて道を受けしむるを云ふ。

【三九】十善道＝入初地品第二註に出づ。

【四〇】六波羅蜜＝序品第二註に出づ。

【四一】十地＝入初地品第二註に出づ。

受くるに因つて受者を生ず。　受くること無くんば受者無し。
受者を離るれば受無し。　云何か受に因つて成ぜんや。
若し受者、受を成ぜば、　受は則ち不成と爲る。
受を以つて成ぜざるが故に、　受者を成ずること能はず。
受者、空なるを以つての故に、　是れ我と言ふことを得ず。
受、是れ空なるを以つての故に、　我所と言ふことを得ず。
是の故に我、非我、　亦我亦非我
非我、非無我　是れ皆邪論と爲す。
我所、非我所、　亦我非我所、
非我、非我所　是れも亦邪論と爲す。

菩薩、是の如く常に空無我を修することを樂ふが故に諸の怖畏を離る。所以は何ん。空無我の法は能く諸の怖畏を離るるが故に。菩薩は歡喜地に在つて是の如き等の相貌有り。

[三五]淨地品　第四

*問うて曰く、菩薩已に初地を得ば、應に云何か修治すべきやと。答へて曰く、

信力轉た增上し、　深く大慈心を行じ、
衆生の類を慈愍し、　善心を修して倦むこと無し。
諸の妙法を喜樂し、　常に善知識に近づき、
慚愧し及び恭敬して　柔和に其の心を和らぐ。
觀法を樂つて著すること無く、　一心に多聞を求め、

【三五】此の品は初地に於ける菩薩の修治を明かす。
※初地修治の二十七法を明かす。

が故に、是の菩薩語端を建立し、所說に失無く、能く因緣、譬喩を以つて句を結び、多からず、少からず、疑惑有ること無し。言に非義無く、謟誑有ること無し、質直、柔和にして種種莊嚴あり。解し易く、持し易く、義趣に次序あつて能く已の事を顯はし、能く他論を破す。四邪因を離れて四大因を具せり。是の如き等の莊嚴の言辭あつて大衆の中に說いて所畏有ること無し。

*「惡名の畏れ、訶罵の畏れ無し」とは、利養を貪らざるが故に、身口意の行淸淨なるが故なり。△「繫閉、桎梏、拷掠の畏れ無し」とは、罪有ること無きが故に、一切の衆生を慈愍するが故に、一切衆の苦惱を忍受するが故に、業の果報に依止するが故に。我れ先に自ら作す。今還つて報を受く。是の菩薩是の如き等の因緣を以つての故に不活等の畏れ有ること無し。

◎復た次に樂つて一切の[三四]法無我を觀ず。是の故に一切の怖畏無し。一切の怖畏は皆我見より生ず。我見は皆是れ諸の衰と憂と苦との根本相なり。是の菩薩は利智慧の故に、實の如く深く諸法の實相に入るが故に則ち我有ること無し。我無きが故に何に從つてか怖畏有らん。

●問うて曰く、是の菩薩云何(いか)んか我心有ること無きやと。答へて曰く、空法を樂ふが故に、菩薩は身に我我所を離るることを觀ずるが故に。說くが如し。

我を心は我所に因り、　我所は我に因つて生ず。
是の故に我、我所の　二性俱に是れ空なり。
我は則ち是れ主の義、　我所は是れ主の物なり。
若し主有ること無くんば、　主所の物も亦無し。
若し主所の物無くんば、　則ち亦主も有ること無し。
我は卽ち是れ我見、　我物は我の所見、
實觀の故に無我なり。　我無くんば非我も無し。

※惡名訶罵の畏れなし。

△繫閉、桎梏、拷掠の畏れなし。

◎一切の畏れなし。

【三四】　法無我＝諸法に實體あり、實用ありと固執するを法我とす。今諸法因緣生の義を了して實の自性なしと達するを法無我とす。これ人無我に對する語なり。小乘の人は唯だ人無我のみを悟り、大乘の菩薩は觀道して所知障を斷じ人法二無我共に斷ずるものとせらる。

●菩薩の無我無我所を解く。

衆生を利安せんが爲めの故に、大慈悲に護らるるが故に、四功德處に住して、無量の功德を得て一切の惡道を度す。何を以つての故に。是の心一切の聲聞、辟支佛に勝るればなり。淨毘尼經の中の如し。迦葉、佛に白して言く、「希有なり。世尊、善く菩薩に說きたまへり。是の[三一]薩婆若心を以つて能く一切の聲聞、辟支佛に勝る」と。我れ是の如き大功德を成就し、是の如き大法に住す。云何ぞ當に惡道に墮するを畏れんやと。復た是の念を作す。我れ無始より已來生死に往來して諸の惡道に墮し、無量の苦を受けて自らを利せず、亦、他を利せず。我れ今無上の大願を發して自らを利せんとし、亦、他を利せんとす。先來は惡道に墮して利益する所無し。今衆生を利益せんが爲めの故に、設ひ惡道に墮すとも畏るること有るべからずと。復た次に實行の菩薩は是の如き心を發す。假令我れ[三二]阿鼻地獄に於いて一劫に苦を受け、然して後出づることを得とも能く一人をして一善心を生ぜしめ、是の如く無量の善心を積集して、化を受けんことを堪任し、三乘を發さしめん。是の如く恒河沙等の衆生の聲聞乘、恒河沙等の衆生の辟支佛乘、恒河沙等の衆生をして大乘を發さしめ、然して後に我れ當に阿耨多羅三藐三菩提心を得べく、尙應に退沒すべからず。何に況んや我れ今無量無邊の功德を修集して惡道を遠離せんやと。菩薩は是の如く思惟す。「何ぞ惡道の畏れ有ることを得んと」。復た次に叫喚地獄經の中に說くが如し。菩薩、魔に答へて曰く、

我れ布施を以つての故に、　[三二]叫喚獄に墮在す。
我が施を受くる所の者、　皆天上に生ず。
若し爾らば猶尙應に　常に布施を行ずべし。
衆生は天上に在り。　我は叫喚の苦を受く。

菩薩は是の如き等の種種の因緣により能く惡道の畏れを遮す。

「※大衆の畏れ有ること無し」とは、[三三]聞慧、思慧、修慧を成就するが故に、又、諸論の過咎を離るる

通とは世間の一切の遠近、苦樂、麁細悉く徹見するを云ふ。二に天耳通とは一切世間五道の聲悉く聞かざることなきを云ふ。三に宿命通とは自他宿世の所行の事を悉く知るを云ふ。四に他心通とは他人の心中に思惟する種種善惡の事を悉く了知するを云ふ。五に神足通とは無礙にして意の如くなるが故に如意通と云ひ、不測の能あるが故に神通と云ひ、往來進止、足の作用の如きが故に之に喩へて神足と云ふなり。

【三一】薩婆若心＝正藏薩婆若多心とあり、今三本に依る。

【三二】阿鼻地獄＝Avici-naraka。八熱地獄の第八、閻浮提の地下萬由旬に在りて、此の地獄に墮する有情は苦をうくること間斷なきが故に無間地獄と云ふ。次の叫喚も八熱地獄の一。

※大衆の畏れなし。

【三三】聞・思・修慧＝これを三慧といふ。

て〔三〇〕五神通を得、經書を造作するもの皆死を免れず。又、諸の佛、辟支佛、阿羅漢の心に自在を得、離垢得道のものも皆死法の磨滅する所と爲る。一切の衆生能く過ぐる者無し。我れ無上道心を發して死を畏るべからず。又、死の畏を破らんが爲めの故に發心し、精進して自ら死の畏れを除き、亦、他にをいても除かしむ。是の故に心を發して道を行ずべし。云何が死に於いて而も驚畏を生ぜんや。菩薩は是の如く無常を思惟して卽ち死の畏れを除くべし。

復た次に菩薩は常に空法を修習するが故に死を畏るべからず。說くが如し。

死者を離れて死無し。　死を離れて死者無し。
死に因つて死者有り。　死者に因つて死有り。
死成じて死者を成ず。　死先んじて未だ成ぜざる時、
決定の相有ること無し。　死無くして成ずる者無し。
死を離れて死者有らば、　死者應に自ら成ずべし。
而も實には死を離れて、　死者の成ずること有ること無し。
而も世間に分別す。　是れは死、是れは死者と。
死の去來を知らず。　是の故に終に免れず。
是等の因緣を以つて、　諸法の相を觀ずれば、
其の心異ること有ること無く、　終に死を畏れず。

※「惡道の畏無し」とは、菩薩は常に福德を修むるが故に惡道に墮することを畏れず。是の念を作す。罪人惡道に墮するは是れ福德の者に非ざればなり。我れ乃至一念の中にも諸惡をして入るを得ざらしめ、而も身口意に於いて常に清淨の業を起す。是の故に我れ無量無邊の功德を成就することを得。是の如く大功德を聚む。云何ぞ惡道に墮することを畏れんと。復た次に菩薩一たび發心して一切の

身にて嘗て、日月淨明德佛並びに法華經を供養せんが爲に自ら身を燒くと云へり。
【二四】三十二大人相佛或は輪王に具はる、いはゆる大人の相。第八卷共行品第十八に出づ。
【二五】七寶＝諸經論によつて所說の相異あり。法華經授記品には金、銀、瑠璃、硨磲、碼碯、眞珠、玫瑰を擧げ、無量壽經上には、金、銀、瑠璃、玻瓈、珊瑚、碼碯、硨磲を擧ぐ。
【二六】十善道＝不殺生・不偸盜・不邪婬・不妄語・不兩舌・不惡口・不倚語・不慳貪・不瞋恚・不邪見の十不惡業を云ふ。但し本書には別途の十善を說く。分別二地業道品第二十八參照。
【二七】蛇提羅＝原音更に考ふべし。
【二八】閻浮提＝Jamb-dvipa。又は贍部洲、琰浮洲、閻浮那提等に作り南閻浮洲とも云ふ。須彌四洲の一、須彌山の南方、七金山と大鐵圍山との中の大鹹海中に在りとせらる。
【二九】覇王＝諸侯の盟主、特に武力を主として治政する王侯。
※**惡道の畏れなし。**
【三〇】五神通＝神とは不測の義、通とは無礙の義、測り知るべからざる無礙の力用を神通又は通力と云ふ。一に天眼

を集む、死せば便ち勝處に生ぜん。是の故に死を畏るべからずと。說くが如し。

　死を待つこと客を愛するが如く、　去つて大會に至るが如し。
　多く福德を集むるが故に、　命を捨つるの時、畏れ無し。

復た是の念を作す、死の名は所受の身に隨つて末後の心、滅するを死と爲す。若し心、滅するを死と爲さば、心念念に滅するが故に皆應に是れ死なるべし。若し死を畏るる者は心念念に滅すれば、皆應に畏れ有るべし。但だ末後の心滅するをのみ畏るべきに非ず。亦、應當に前心盡く滅するをも畏るべし。何を以つての故に。前後の心の滅するに差別有ること無きが故に。若し惡道に墮することを畏るるが故に末後の心の滅するを畏ると謂はば、福德の人は惡道に墮することを畏るべからざること先に說くが如し。我れ當に念念の滅を受くべきが故に、末後の心の滅するに於いて死の畏れ有るべからずと。復た是の念を作す。我れ無始の世界に於いて生死に往來して無量無邊[20]阿僧祇の死法を受く。處として能く死を免るる所の者有ること無し。佛は生死無始なりと說きたまふ。若し人一劫の中に於いて死し已つて骨を積まば雪山よりも高し。是の如く諸の死は自利の爲ならず、利他の爲ならず、我れ今無上道の願を發して自利を欲せんが爲、亦利他の爲の故に勤心に道を行ずれば大利有るが故に、云何が驚畏せんと。是の如く菩薩は卽ち死の畏れを捨す。復た次に是の念を作す。今此の死法は必ず當に受くべきもの、免るること有ること無き者なり。何を以つての故に。[21]劫初の諸の大王、[22]頂生・[23]喜見・[24]照明王等の三十二の大人相有つて其の身を莊嚴し、[25]七寶導從し、天人敬愛し、四天下に王として常に[26]十善道を行ずるも是の諸の大王皆死に死す。復た[27]蛇提羅の諸の小轉輪王有つて、自ら威力を以つて[28]閻浮提に王たり。身色端正にして猶し天人の如く、色・聲・香・味・觸に於いて自ら恣にして乏しきこと無し。向ふ所皆伏して退却有ること無く、善く射術に通ず。是の諸の王等、[29]霸王・天下・人民・眷屬皆死を免れず。又、諸の仙聖、迦葉、憍瞿摩等諸の苦行を行じ

【二〇】阿僧祇＝梵語 Asaṃkhyeya の音譯、譯して無數又は無央數と云ふ。印度數目の名なり。

【二一】劫＝劫波 Kalpa。通常の年月で計算し得ざる遠大の時をいふ。劫初とは世の始めを云ふ。

【二二】頂生＝佛の本生譚に出づる王の名。往昔布殺陀王と稱する王あり、王の頂上に皰を生じ、その皰より生ると云ふ。後長大して金輪王となり、頂生王と稱せり。頂生金輪王既に四天下を征服し、遂に忉利天に上り、帝釋を殺し、己れ之に代らんと欲して成らず、還つて地に下り困病して死す。

【二三】喜見＝一切衆生喜見菩薩の略、法華經藥王品によれば、この菩薩は藥王菩薩の前

り。我れ能く難成の事を堪受し、現世にも亦、方便の力有り。故に不活の畏れ有るべからず。有智の人は少しく方便を設けて能く自活を得、能く佛道、佛智慧の分を求む。今已に之有り。是の智慧、利にして能く自活を得るなり。不活の畏れ有るべからず。復た次に菩薩は是の念を作す。我れ世間に住す。世間に利・衰・毀・譽・稱・譏・苦・樂有り。是の如き八事何んぞ無きことを得るやと。得ざるを以ての故に不活の畏れ有る應からず。復た次に是の菩薩は知足を以つての故に好醜、美惡得るに隨つて而も安んず。不活の畏れ有るべからず。若し足ることを知らざる者は、設ひ世間に滿つる財物を得るとも意猶ほ足らず。說くが如し。

若し貧窮の者有つて、　但だ衣食のみを求む。
既に衣食を得已つて、　復た美好の者を求む。
既に美好の者を得れば、　復た尊貴を求む。
既に尊貴を得已つて、　一切地に王爲らんことを求む。
設ひ王地を盡すことを得とも、　復た天王爲らんことを求む。
世間の貪欲の者は、　財を以つて滿たす可からず。

若し知足の人は少財物を得て、今世、後世に能く其の利を成ず。是の菩薩は布施を樂しむが故に、智慧を具足するが故に、多く不貪の善根を發す。若し施を樂はざる者は多く衆惡を作し、慳貪、愚癡の因緣を以つての故に慳貪、不善根を增益す。無厭足の法は慳貪に屬す。是の故に菩薩多く不貪の善根を發すが故に足ることを知る。足ることを知るが故に不活の畏れ無し。

*復た次に「死の畏れ無し」とは、多く福德を作すが故に、念念の死の故に、免るることを得ざるが故に、無始の世界に死法を習受するが故に、多く空を修習するが故に菩薩は是の念を作す。若し人福德を修せざれば則ち死を畏る。自ら後世惡道に墮することを恐るるが故に。我れ多く諸の福德

※死の畏れなし。

もつて嚴身し、[17]諸佛の不共法を成就することを得て、諸の衆生の種うる所の善根、心力の大小に隨つて而も爲めに說法すべし。又、我れ已に善法の滋味を得て、久しからずして當に必定の菩薩の如く諸の[18]神通に遊ぶべし。又、必定の菩薩の所行の道を念じ、一切世間の能く信ぜざる所、我れも亦、當に行ずべし。是の如く念じ已つて心に歡喜すること多し。餘は爾らず。何を以つての故に。是の菩薩は初地に入るが故に其の心決定して、願つて移動せず、所應の求めを求む。譬へば香象の作す所、唯だ香象のみ有つて能く作し、餘獸は能はざるが如し。是の故に汝の所說は是の事然らず。復た次に菩薩は初地を得れば諸の怖畏無きが故に心に歡喜多し。若し怖畏せば心則ち喜ばず。

*問うて曰く、菩薩は何等の怖畏も無きかと。答へて曰く、

[19]不活の畏れ、死の畏れ　惡道の畏れ、
大衆、威德の畏れ、　惡名、毀呰の畏れ、
繫閉、桎梏の畏れ、　拷掠、刑戮の畏れ有ること無し。
我我所無きが故に。　何ぞ是の諸の畏れ有らん。

△問うて曰く、菩薩何が故に初地に住して「不活の畏れ」無きやと。答へて曰く、大威德有るが故に、能く堪受するが故に、大智慧の故に、止足を知るが故に、是の念を作す。我れ多く福德を修む。有福の人は衣服・飲食・所須の物自然に卽ち至る。昔、劫初の大人、群臣、士民請うて以つて王と爲すが如し。若し福德薄き者は王家に生ると雖も身力を以つて自ら營むに衣食尙充足せず。何に況んや國土をや。菩薩は是の念を作す。我れ多く福德を修む。劫初の王の自然に位に登るが如し。我れも亦是の如し。亦、當に復た是の如き事を得べきが故に不活の畏れ有るべからず。復た次に人薄福なりと雖も堪受の力有つて、勤めて方便を修めば能く衣食を生ず。經に說くが如し。三の因緣を以つて財物有ることを得。一には現世に自ら方便を作す。二には他力作與す。三には福德の因緣な

【一七】諸佛＝正藏には佛とあるも三本に依れり。
【一八】神通＝Abhijñā 或は單に通とも云ひ、智力に具はる不思議なるはたらきを云ふ。
※七種の怖畏なきことを明かす。
【一九】華嚴經十地品には五種の畏れを解す。國譯華嚴經五四六頁參照せよ。
△不活の畏れなし。

大悲心を得て大人の法を成じ、身命を惜まず、菩提を得んが爲めに勤めて精進を行ず。[一五]是を必定の菩薩を念ずと名づく。「希有の行を念ず」とは、必定の菩薩の第一希有の行を念じて心をして歡喜せしむ。一切の凡夫の及ぶこと能はざる所、一切の聲聞、辟支佛の行ずること能はざる所なり。佛法の[一六]無礙解脫及び薩婆若智を開示し、又、十地の諸の所行の法を念ずるを名づけて心に歡喜多しと爲す。是の故に菩薩初地に入ることを得るを名づけて歡喜と爲すと。

*問うて曰く、凡夫の人、未だ無上道心を發さざる有り。或は發心する者、未だ歡喜地を得ざる有り。是の人も諸佛及び諸佛の大法を念じ、必定の菩薩及び希有の行を念ぜば亦歡喜を得るや。初地を得る菩薩の歡喜と此の人と何の差別か有ると。答へて曰く、

菩薩初地を得れば、　其の心歡喜多し。
諸佛無量の德、　我れも亦定んで當に得べし。

初地を得る必定の菩薩諸佛を念ずるに無量の功德有り。我れ當に必ず是の如きの事を得べし。何を以つての故に。我れ此の初地を得るを以つて必定の中に入る。餘は是の心有ること無しと。是の故に初地の菩薩は多く歡喜を生ず。餘は爾らず。何を以つての故に。餘は諸佛を念ずと雖も是の念を作すこと能はず。我れ必ず當に作佛すべしと。譬へば轉輪聖子の轉輪王家に生じて轉輪王の相を成就し、過去の轉輪王の功德の尊貴なることを念じて、是の念を作すが如し。我れ今、亦、是の相有り。亦、當に是の豪富、尊貴を得べしとて、心大いに歡喜す。若し轉輪王の相無くんば是の如き喜び無し。必定の菩薩、若し諸佛及び諸佛の大功德、威儀、尊貴を念ぜんに、我れ是の相有り。必ず當に作佛すべしとて、即ち大いに歡喜す。餘は是の事有ること無し。定心の者は深く佛法に入りて心動ずべからず。復た次に菩薩は初地に在つて諸佛を念ずる時是の思惟を作す。我れも亦、久しからずして當に諸の世間の者を利益し、及び佛法を念ずることを作すべし。我れも亦、當に相好を

【一五】是名＝正藏には「名」字を缺けども三本による。

【一六】無礙＝一切外物に障礙せらるることなきを云ふ。

※必定の菩薩と餘人との歡喜の相違。

は、心、沒することを畏れざるが故に名づけて能く堪忍有りと爲す。寂滅を樂ふが故に名づけて「諍訟を好まず」と爲す。阿耨多羅三藐三菩提の大悲に順ふことを得るが故に名づけて「心に喜多し」と爲す。諸の煩惱垢濁を離るるが故に佛法僧寶、諸の菩薩の所に於いて心常に「清淨」なり。心安隱にして患ひ無きが故に名づけて「心悅」と爲す。深く衆生を愍れむが故に名づけて「悲」と爲す。心常に慈行を樂ふが故に名づけて「不瞋」と爲す。是れを菩薩初地に在る相貌と名づくと。

問うて曰く、何が故にか菩薩初地の中に於いて、此の七事有りと說かずして而も多と言ふやと。答へて曰く、是の菩薩[一]漏未だ盡きざるが故に、或る時は懈怠して[二]此の七事の中に於いて暫く癈退すること有り。其の多行を以つての故に說いて多と爲す。初地の中に於いて已に是の法を得て後、諸地の中に轉轉增益すと。

*問うて曰く、初め歡喜地の菩薩此の地の中に在るを歡喜多と名づく。諸の功德を得るが爲めの故に歡喜を地と爲す。法應に歡喜すべし。何を以つてか而も歡喜すると。答へて曰く、

常に諸佛及び　　諸佛の大法、
必定希有の行を念ず。　是の故に歡喜すること多し。

是の如き等の歡喜の因緣の故に菩薩、初地の中に在つて心に歡喜多し。「諸佛を念ず」とは、[三]然燈等の過去の諸佛、阿彌陀等の現在の諸佛、彌勒等の將來の諸佛を念ず。常に是の如き諸佛世尊を念ずること現在前の如し。三界第一にして能く勝る者無し。是の故に歡喜多し。「諸佛の大法を念ず」とは、略して諸佛の[四]四十不共法を說く。一には自在にして飛行隨意なり。二には自在にして變化無邊なり。三には自在にして聞く所無礙なり。四には自在にして無量種の門を以つて一切衆生の心を知る。是の如き等の法は後に當に廣く說くべし。「必定の諸菩薩を念ず」とは、若しは菩薩阿耨多羅三藐三菩提の記を得て法位に入り、無生法忍を得ば千萬億數の魔の軍衆も壞亂すること能はず。

[一] 漏＝Āsrava。漏とは漏泄の意味で煩惱のこと。煩惱が過を漏らすを以て漏と云ふ。
[二] 此の七事＝正藏には此事とあるも三本に依る。
※餘の歡喜相。
[三] 然燈は過去佛の代表を、阿彌陀は現在佛の代表を、彌勒は未來佛の代表を擧ぐ。
[四] 四十不共法は本書卷十、十一に廣說す。

巻の第二

[一]地相品　第三

問うて曰く、初地を得る菩薩何の相貌か有ると。答へて曰く、

*菩薩初地に在りては、　能く堪受する所多し。
諍訟を好まず、　其の心喜悦多し。
常に清淨を樂しみ、　悲心ありて衆生を愍れむ。
瞋恚の心有ること無く、　多く是の七事を行ず。

菩薩若し初地を得れば卽ち是の[二]七相有り。「能く堪受す」とは、能く難事を爲して無量の福德善根を修集し、無量恒河沙劫に於いて生死に往來し、堅心難化の惡衆生をして心、退沒せざらしむ。能く是の如き等を堪受するが故に名づけて堪忍と爲す。「諍訟無し」とは、能く大事を成すと雖も、而も人と諍競せず、共に相違返せざる(を云ふ)。「喜」とは、能く身に柔軟を得、心に安隱を得せしむ(を云ふ)。「悅」とは、上法を轉ずる中に於いて心に踊悅を得る(を云ふ)。「清淨」とは、諸の煩惱の垢濁を離る(るを云ふ)。有る人の言く、信解を名づけて清淨と爲すと。有る人の言く、堅固の信を名づけて清淨と爲すと。是の清淨心は[三]佛法僧寶に於いて、[四]苦集滅道諦に於いて、[五]六波羅蜜に於いて、菩薩の[六]十地に於いて、[七]空・無相・無作の法に於いて、略して之を言はば一切の深經、諸の菩薩及び其の所行の一切の佛法悉く皆心信清淨なり。「悲」とは、衆生に於いて憐愍救護す(るを云ふ)。是の悲漸漸に增長して大悲と成る。有る人の言く、菩薩の心に在るを名づけて悲と爲す。悲、衆生に及ぶを名づけて大悲と爲す。大悲は十因緣を以つて生ず。[八]第三地の中に廣く說くが如し。不愼とは、是の菩薩、[九]結未だ斷ぜざるが故に[一〇]多く善心を行じ、瞋恨少なし。是の如く菩薩初地に在りて

【一】此の品は初地を得たる菩薩の相を說く。
※歡喜の七相。
【二】華嚴經十地品には十種の歡喜の相をあぐ。國譯華嚴經五四六頁を參照せよ。
【三】三寶。
【四】四諦。
【五】六波羅蜜＝前出序品第一。
【六】十地＝前出入初地品第二。
【七】三解脫門＝前出入初地品第二。
【八】大悲の十因緣は第三地に廣說すといふも本書は第二地に盡く。
【九】結＝煩惱の異名。
【一〇】多＝正藏には名爲とあるも三本に依る。

「初果を得るが如し」とは、人の須陀洹道[七五]を得たるが如く、善く三惡道[七六]の門を閉ぢ、法を見、法に入り、法を得、賢牢の法に住して傾動すべからず。究竟して涅槃に至り、見諦所斷[七七]の法を斷ずるが故に心大いに歡喜す。設使(たとひ)、睡眠嬾惰なれども二十九有[七八]に至らず。一毛を以つて百分と爲して、一分の毛を以つて大海の水若しは二三渧を分け取るが如く、苦の已に滅せる者は大海の水の如く、餘の未だ滅せざる者は二三渧の如く、心大いに歡喜す。菩薩は是の如く初地を得已れば「如來の家に生ず」と名づく。一切の天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・天王・梵王・沙門・婆羅門・一切の聲聞・辟支佛等の共に供養し、恭敬する所なり。何を以つての故に、是の家に過咎有ること無きが故に、世間の道を轉じて出世間の道に入り、但だ樂つて佛を敬し、四功德處を得、六波羅蜜の果報の滋味を得て諸佛の種を斷ぜざるが故に、心大いに歡喜す。是の菩薩の所有る餘の苦は二三の水渧の如し。百千億劫に阿耨多羅三藐三菩提を得と雖も、無始の生死の苦に於いては二三の水渧の如く、滅すべき所の苦は大海の水の如し。是の故に此の地を名づけて歡喜と爲す。

【七五】須陀洹＝調伏品第七註の四果を見よ。
【七六】三惡道＝地獄、餓鬼、畜生。
【七七】見諦所斷＝見道のこと。
【七八】二十九有＝三界のこと。

菩薩は善法を父とし、　智慧を以つて母と爲す。
一切の諸の如來　皆此の二より生ず、と。

有る人の言く、[七三]般舟三昧及び大悲を諸佛の家と名づく。此の二法より諸の如來を生ず。此の中に般舟三昧を父と爲し、大悲を母と爲すと。復た次に般舟三昧は是れ父、[七四]無生法忍は是れ母なり。助菩薩の中に說くが如し。

般舟三昧を父とし、　大悲無生を母とす。
一切の諸の如來は、　是の二法より生ず。

「家に過咎無し」とは、家清淨なるが故なり。「清淨」とは、六波羅蜜と四功德處と方便と般若波羅蜜と善慧と般舟三昧と大悲と諸忍となり。是の諸法は清淨にして過有ること無きが故に家清淨なりと名づく。是の菩薩此の諸法を以つて家と爲すが故に過咎有ること無く、過咎を轉ず。

◎「世間道を轉んじて出世上道に入る」とは、世間の道は是の凡夫所行の道に名づく。「轉」とは、休息に名づく。「凡夫道」とは、究竟して涅槃に至ること能はず、常に生死に往來する、是れを「凡夫道」と名づく。「出世間」とは、是の道に因つて三界を出づることを得るが故に出世間道と名づく。「上」とは、妙なるが故に名づけて「上」と爲す。「入」とは、正しく道を行ずるが故に名づけて「入」と爲す。是の心を以つて初地に入るを歡喜地と名づくと。

※問うて曰く初地を何が故にか名づけて歡喜とするかと。答へて曰く、

初果を得れば、　究竟して涅槃に至るが如く、
菩薩、是の地を得て、　心常に歡喜多くして、
自然に諸佛、如來の　種を增長することを得。
是の故に此の如き人を、　賢善者と名づくことを得。

【七三】般舟三昧＝Pratyutpanna samādhi 般舟は佛立と譯す。此の三昧を行ずれば諸佛現前すればなり。大集賢護經には思惟諸佛現前三昧と云ふ。

【七四】無生法忍＝無生とは涅槃の體、眞如の理はもと無生無滅なるを云ふ。忍とは無生の理に安住して動かざるを云ふ。眞知を無生忍といふ。忍の種類階段に就きては諸經に異說あるも、普通に引用せらるるは仁王經に出づる五忍說(一、伏忍、二、信忍、三、順忍、四、無生忍、五、寂滅忍)なり。此說に依れば無生法忍は第四忍に當る。菩薩十地の中、忍の配當に就きては或は初地の悟りの名とし、或は七、八、九地の悟りの名とせらる。龍樹の本論では初住即ち初地とすべし(大乘義章十二卷參照)。

◎轉世間道入出世間道。
※歡喜地の意義。

慧の四功德を名づけて如と爲す。是の四法を以つて佛地に來至するが故に名づけて如來と爲す。復た次に一切の佛法を名づけて如と爲す。是の如く諸佛に來至するが故に名づけて如來と爲す。復た次に一切菩薩地の喜と淨と明と炎と難勝と現前と深遠と不動と善慧と法雲とを名づけて如と爲す。諸の菩薩是の十地を以つて[六九]阿耨多羅三藐三菩提に來至するが故に名づけて如來と爲す。又、如實の[七〇]八聖道分を以つて來るが故に名づけて如來と爲す。復た次に權智二足をもて佛に來至するが故に名づけて如來と爲す。去つて還らざるが故に名づけて如來と爲す。如來とは、所謂、十方三世の諸佛是れなり。是の諸佛の家を名づけて如來の家と爲す。

*今是の菩薩如來道を行じて、相續して斷ぜざるが故に名づけて「如來の家に生ず」と爲す。又、是の菩薩は必ず如來と成るが故に名づけて「如來の家に生ず」と爲す。譬へば[七一]轉輪聖王の家に生じて轉輪聖王の相有れば、是の人必ず轉輪聖王と作るが如く、是の菩薩も亦た是の如く如來の家に生じて是の心を發すが故に必ず如來と成る。是を「如來の家に生ず」と名づく。「如來の家」とは、有る人の言く、是れ四功德處なり。所謂、諦と捨と滅と惠となり。諸の如來此の中より生ずるが故に名づけて如來の家と爲すと。有る人の言く、[七二]般若波羅蜜及び方便是れ「如來の家」なり。助道經の中に說くが如し。

　智度無極は母、　善權方便は父なり。
　生ずるが故に名づけて父と爲し、　養育するが故に母と名づく。

一切世間は父母を以つて家と爲す。是の二、父母に似たり。故に之を名づけて家と爲すと。有る人の言く、善と慧とを諸佛の家と名づく。是の二法より諸佛を出生す。是の二は則ち是れ一切善法の根本なり。經中に說くが如し、「是の二法俱行して能く正法を成ず。善は是れ父、惠は是れ母なり」と。是の二、和合するを名づけて諸佛の家と爲す。說くが如し。

【六九】阿耨多羅三藐三菩提＝Anuttara-samyak-sambodhi. 無上正遍知。眞正に遍く一切の眞理を知る無上の知慧。

【七〇】八聖道分 Āryāṣṭāṅgika mārga＝三十七道品の一部、八正道とも云ふ。
一、正　見＝Samyag-dṛṣṭi
二、正　思＝S.-saṃkalpa
三、正　語＝S.-vāc
四、正　業＝S.-karmānta
五、正　命＝S.-ājīva
六、正精進＝S. vyāyāma
七、正　念＝S.-smṛti
八、正　定＝S.-samādhi

※如來の家に生じて過咎なることを述ぶ。

【七一】轉輪聖王＝Cakravarti-rāja 轉輪聖帝、輪王とも云ふ。この王身に三十二相を具し、位に卽く時天より輪寶を感得し、其の輪寶を轉じて四方を降伏すれば轉輪王と云ふ。

【七二】前出六波羅蜜參照。

是の心、苦樂に動ぜず、捨心厚きが故に。是の心、護念なり、諸佛神力の故に。是の心、相續なり、三寶斷ぜざるが故に。是の如き等の無量の功德、初の必定心を莊嚴すること無盡意品の中に廣く說くが如し。「是の心に一切の煩惱を雜へず」とは、見諦・思惟・所斷の二百九十四の(六六)煩惱、心と和合せざるが故に名づけて不雜と爲す。「是の心相續して異乘を貪らず」とは、初心相續してより來、聲聞、辟支佛乘を貪らず、但だ阿耨多羅三藐三菩提の爲めの故に名づけて相續して異乘を貪らずと爲す。是の如き等の四十句の論、應に是の如く知るべし。

*問うて曰く、汝、是の心常なりと說く。一切の有爲法は皆無常なり。法印經の中に說くが如し。行者は、世間は空なり、常にして變壞せざること有ること無しと觀ずといへり。是の事何ぞ相違せざることを得るやと。答へて曰く、汝、是の義に於いて正理を得ざるが故に此の難を作す。是の中には心を說いて常とは爲さず。此の中、口に常と說くと雖も、常の義は必定の初心生ずれば必ず能く常に諸の善根を集めて休まず、息まざるに名づくるが故に、名づけて常と爲す。

△「如來の家に生ず」とは、如來の家とは則ち是れ佛家なり。(六七)◎「如來」とは如を名づけて實と爲し、來を名づけて至と爲し、眞實の中に至るが故に名づけて如來と爲す。何等をか眞實とする。所謂、涅槃なり。虛誑ならざるが故に是を如實と名づく。經の中に說くが如し。佛、比丘に告げたまはく、「第一聖諦には虛誑有ること無し、涅槃是れなり」と。復た次に如をば不壞の相に名づく。所謂、諸法實相是れなり。來をば智慧に名づく。實相の中に到つて其の義に通達するが故に名づけて如來と爲す。復た次に空・無相・無作を名づけて如と爲す。諸佛(六八)三解脫門に來至して、亦た衆生をして此の門に到らしむるが故に名づけて如來と爲す。復た次に如とは四諦に名づく。一切の種を以て四諦を見るが故に名づけて如來と爲す。復た次に如を六波羅蜜に名づく。所謂、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧なり。是の六法を以つて佛地に來至するが故に名づけて如來と爲す。復た次に諦・捨・滅・

【六六】煩惱＝梵語 Kleśa の譯。貪瞋痴等の諸惑が心を煩はし、身を惱ますを云ふ。

※初發心は常なりや否や。

△如來の家について。

【六七】如來＝Tathāgata。佛十號の一なり。如より來生せるもの、又如に向つて去るものの二解あり、故に如去とも云はる。佛教の眞理觀も佛陀觀もこの語中に盡く。本文に詳說せり。

◎如來の異解。

【六八】三解脫門＝空、無想、無願の三三昧のこと。空、無相、無願と觀ずるが爲めに住するの定なり。空とは萬有の上に於て人又は法の空なるを觀じ、無相とは空なるが故に差別の相狀なきを觀じ、無願とは無相なるが故に願求すべきことなしと觀ずるを云ふ。涅槃解脫に入るの門戶なり。

菩薩は初發心にして卽ち必定に入り、是の心を以つて能く初地を得る有り。是の人に因るが故に初發心に必定の中に入ると說くと。

問うて曰く、是の菩薩の初心と、釋迦牟尼佛の初發心と是の心云何と。*答へて曰く、是の心一切の煩惱を雜へず。是の心相續して果乘を貪らず。是の心堅牢にして一切の外道能く勝る者無し。是の心、一切の衆魔破壞すること能はず。是の心、常に能く善根を集めんとす。是の心、能く[六二]有爲、無爲を知る。是の心、動ずること無くして能く佛法を攝む。是の心、[六三]無覆にして諸の邪行を離る。是の心、安住して動ずべからざるが故に。是の心、無比なり、相違無きが故に。是の心、金剛の如し、諸法に通達するが故に。是の心、不盡なり、無量の福德を集むるが故に。是の心、平等なり。一切の衆生を等しくするが故に。是の心、高下無し、差別無きが故に。是の心、清淨なり。性無垢なるが故に。是の心、垢を離る、慧焰明なるが故に。是の心、無垢なり、深心を捨てざるが故に。是の心、廣しとなす。慈なること虛空の如きが故に。是の心、大となす、一切の衆生を受くるが故に。是の心、無礙なり、[六四]無障智に至るが故に。是の心、遍く到れり、大悲を斷ぜざるが故に。是の心、不斷なり。能く正しく廻向するが故に。是の心、衆の趣向する所なり、智者の讚ずる所なるが故に。是の心、觀ずべし、小乘瞻仰するが故に。是の心、見難し、一切の衆生覩ること能はざるが故に。是の心、破し難し、能く善く佛法に入るが故に。是の心、住となす。一切の樂具の所住處なるが故に。是の心、莊嚴たり、福德の資用なるが故に。是の心、選擇なり、智慧の資用なるが故に。是の心、淳厚なり、布施を以つて資用と爲すが故に。是の心、大願なり、持戒の資用なるが故に。是の心、沮し難し、忍辱の資用なるが故に。是の心、勝ち難し、精進の資用なるが故に。是の心、寂滅なり、禪定の資用なるが故に。是の心、惱害無し、[六五]智慧の資用なるが故に。是の心、瞋閡(しんがい)無し、慈心深きが故に。是の心、根深し、悲心厚きが故に。是の心、悅樂なり、喜心厚きが故に。

※四十種の初發心の心相。

【六二】有爲＝無爲に對する語、生滅變化(無常)の性を有する諸法を有爲法と名づけ之と異る法を無爲法と名づく。俱舍論卷五に「相は謂く諸の有爲の生、住、異、滅の性なり。此の四種はこれ有爲の相なるに由る。法、若し此を有するは是れ有爲。此と相違するは是れ無爲法なり」とあり。

【六三】無覆＝覆は覆蔽の義。一切の覆蔽なきこと。

【六四】無障智＝一切の煩惱に障へられざる智にして佛智なり。

【六五】智慧＝正藏には慧とあるも三本による。

若しは自ら已が利を成じて、乃し能く彼を利す。
自ら捨てて他を利せんと欲せば、利を失して後に憂悔せん。
是の故に自ら度し已つて當に衆生を度すべしと說く。問うて曰く、何の利を得るが故に能く此の事を成じて必定地に入るや。又、何の心を以つて能く是の願を發すやと。答へて曰く、佛の十力を得て能く此の事を成じ、必定地に入りて能く是の願を發すと。

*問うて曰く、何等か是れ佛の〔六〇〕十力なりやと。答へて曰く、佛は悉く一切の法の因果を了達したまふを名づけて初力と爲す。實の如く去來今の所起の業、果報の處を知るを二力と爲す。實の如く諸の禪定、三昧を知つて垢淨入出の相を分別するを名づけて三力と爲す。實の如く衆生の諸根の利鈍を知るを名づけて四力と爲す。實の如く衆生所樂の不同を知るを名づけて五力と爲す。實の如く世間種種の異性を知るを名づけて六力と爲す。實の如く至一切處道を知るを名づけて七力と爲す。實の如く宿命の事を知るを名づけて八力と爲す。實の如く生死の事を知るを名づけて九力と爲す。實の如く漏盡〔六一〕の事を知るを名づけて十力と爲す。是の如き佛の十力を得んが爲めの故に、大心に願を發し、即ち必定聚に入ると。

△問うて曰く、凡そ初發心に皆是の如き相有りやと。答へて曰く、或は人有つて說かく、初發心に便ち是の如き相有りと。而も實には爾らず。何を以つて故に。是の事應に分別すべし。定めては答ふべからず。所以は何ん。一切の菩薩は初發心の時悉く必定に入るべからず。或は初發心の時即ち必定に入る有り、或は漸く功德を修する有り。釋迦牟尼佛の如きは初發心の時に必定に入らず、後に功德を修集して然燈佛に値ひ必定に入ることを得たり。是の故に汝一切の菩薩は初發心に便ち必定に入ると說く、是れを邪論と爲すと。

問うて曰く、若し是れ邪論ならば何が故ぞ汝是の心を以つて必定に入ると說くと。答へて曰く、

※十力。
〔六〇〕 十力＝Daśa-balāni・如來の十力なり。その名稱は經により種種あるもその一一は本文に詳說するが如し。又卷第十一參照せよ。
〔六一〕 漏盡＝漏とは煩惱なり。三乘の極果に至り、聖智を以て煩惱を斷盡するを云ふ。即ち盡智を得るなり。
△菩薩の初發心を述ぶ。

薩諸地の中に隨つて皆深心を得。深心の義卽ち其の地に有り。今、初地の中に二つの深心を說けり。一には大願を發す。二には必定地に在り。是の故に當に知るべし、隨つて十地に在つて善く深心を說く。汝何ぞ少ならざることを得んやと說くは、是の事然らず。

※「心に衆生を悲む」とは、悲を成就するが故に名づけて悲者と爲す。何らをか謂ひて「悲」と爲す。衆生を悼愍して苦難を救濟するなり。

(七)「諸の上法を信解す」とは、諸佛の法に於いて信力をもつて通達す。

●(八)「發願して、我れ自ら度することを得已つて當に衆生を度すべし」とは、一切の[五九]諸佛の法は願を其の本と爲す。願を離るるときは則ち成ぜず。是の故に願を發す。問うて曰く、何が故にか我れ當に衆生を度すべしと言はずして、而も自ら度することを得已つて當に衆生を度すべしと言ふやと。答へて曰く、自ら未だ度を得ずして彼を度すること能はず。人自ら游泥に沒するが如きは何ぞ能く餘人を拯拔せんや。又、水の爲めに漂さるれば溺るるを濟ふこと能はざるが如し。是の故に我れ度し已つて當に彼を度すべしと說く。說くが如し。

若し人自ら畏を度せば、　能く歸依する者を度す。
自ら未だ疑悔を度せずんば、　何んぞ能く所歸を度せん。
若し人自ら善ならずんば、　人をして善ならしむること能はず。
若し自ら寂滅ならずんば、　何ぞ能く人をして寂ならしめん。

是の故に先づ自ら善く寂にして而して後に人を化す。又、法句の偈に說くが如し。

若し能く自ら身を安んじて、　善處に在る者、
然して後に餘人を安んず。　自ら所利に同じ。

凡そ物皆先づ自ら利して後に能く人を利す。何を以つての故に、說くが如し。

●初めに自ら度し、次で衆生を度すること。

【五九】諸佛の法＝正藏には諸法とあるも三本に據る。

調和心と名づく。諸惡無きが故に名づけて善心と爲す。惡人を遠離するが故に不雜心と名づく。頭を以つて施すが故に難捨心と名づく。破戒の人を救ふが故に持難戒心と名づく。能く下劣の惡を加ふるを受くるが故に難忍心と名づく。涅槃を得て能く捨するが故に難精進心と名づく。禪を貪らざるが故に難禪定心と名づく。助道の善根厭足無きが故に難慧心と名づく。能く一切の事を成ずるが故に度諸行心と名づく。智慧をもつて善く思惟するが故に離慢大慢我慢心と名づく。報を望まざるが故に是れ一切衆生の福田心なり。諸佛の深法を觀ずるが故に無畏心と名づく。障[五七]礙せざるが故に增功德心と名づく。常に精進を發すが故に無盡心と名づく。能く重擔を荷受するが故に不悶心と名づく」と。又、深心の義とは等しく衆生を念じ、普く一切を慈しみ、賢善を供養し、惡人を悲念し、師長を尊敬し、救ひ無き者を救ひ、歸無きには歸と作り、洲無きには洲と作り、究竟無き者には爲めに究竟と作り、侶有ること無き者には能く爲めに侶と作り、曲人の中には直心を行じ、敗壞の人の中には眞正心を行じ、諛諂の人の中には無諂心を行じ、恩を知らざる中には恩を知ることを行じ、作を知らざる中には作を知ることを行じ、利益無き中には能く利益を行じ、邪衆生の中には正行を行じ、憍慢の人の中には無慢の行を行じ、敎に隨はざる中にも惱恚せず、罪の衆生の中には常に守護と作り、衆生の所有る過あるも其の失を見ず、福田を供養し、敎誨に隨順し、化を受くること難からず、[五八]阿練若の處に一心に精進して利養を求めず、身命を惜まず。復た次に內心淸淨なるが故に誑惑有ること無く、善口業の故に自ら稱歎せず、止足を知るが故に威迫を行せず、心に垢無きが故に柔和を行じ、善根を集むるが故に能く生死に入つて衆生の爲めの故に一切の苦を忍ぶ。菩薩は是の如き等の深心の相有るが故に窮め盡す可からず。汝今但だ深心の相を說く。何ぞ少なからざることを得んやと。答へて曰く、少なからざるなり。無盡意は一切の深心の相を總べて一處に在つて說けり。而も此の中には諸地に分布す。此の十住經は地地に別に深心の相を說く。是の故に菩

【五七】礙＝正藏には閡とあるも三本による。

【五八】阿練若＝Araṇya又、阿蘭若に作る。閑寂處と譯す。人里を離れし修道の場所。

行の善法に必ず修行すべきを「資用」と名づく。所謂、布施・忍辱・質直・不諂心・柔和・同止、樂つて惱恨の性無く、殫く盡して過を隱さず、偏執せず、狠戾せず、諍訟せず、自恃せず、放逸ならず、憍慢を捨て、矯異を離れ、身を讃せず、事に堪忍し、決定心ありて能く果敢に受け、教授を捨易せず、少欲知足にして獨處を樂ふ。是の如き等の諸法隨つて行じ、已つて漸く能く殊勝の功德を具足す。是の法[五五]未だ堅牢ならざるが故に名づけて「本行」と爲す。若し是の法を離るれば進んで勝妙の功德を得ること能はず。是の故に此の本行の法と八法と和合するが故に初地の資用と爲す。

(四)「善く諸佛に供養す」とは、若しは菩薩、世世に如法に常に多く諸佛を供養するをいふ。供養に二種あり。一には善く大乘の正法若しは廣、若しは略を聽く。二には[五六]四事をもつて供養し、恭敬し禮侍する等なり。此の二法を具して諸佛を供養するを名づけて「善く諸佛を供養す」と爲すなり。

(五)「善知識」とは、菩薩に四種の善知識有りと雖も、此の中に說く所は能く教へて大乘に入れて、諸波羅蜜を具せしめ、能く十地に住せしむる者なり。所謂、諸の佛、菩薩、及び諸の聲聞は能く大乘の法を示教し、利喜して退轉せざらしむ。「守護」とは、常に能く慈愍し、敎誨して善根を增長することを得しむる、是を守護と名づく。

(六)「深心を具足す」とは、深く佛乘・無上大乘・一切智乘を樂ふを名づけて深心を具足すと爲す。問うて曰く、無盡意菩薩、和合品の中に於いて、舍利弗に告げたまはく、「諸の菩薩の所有る發心を皆深心と名づく」と。一地より一地に至るが故に名づけて趣心と爲す。上法を得るが故に名づけて過心と爲す。無上事を得るが故に名づけて頂心と爲す。上法を攝取するが故に名づけて上心と爲す。現前に諸佛の法を得るが故に名づけて現前心と爲す。功德を增益するが故に名づけて上心と爲す。利益の法を集むるが故に名づけて緣心と爲す。一切の法に通達するが故に名づけて度心と爲す。所願倦まざるが故に名づけて決定心と爲す。所願を滿すが故に名づけて喜心と爲す。身自ら成辦するが故に無侶心と名づく。敗壞の相を離るるが故に

【五五】未、正藏には味とあるも三本に據る。

【五六】四事＝四種の供養なり。即ち、飲食、衣服、臥具、湯藥の四種なり、

此の地を歡喜と名づく。

是を以つて初地を得。

*(一)「厚く善根を種う」とは、如法に諸の功德を修集するを名づけて厚く善根を種うと爲す。「善根」とは不貪・不恚・不癡なり。一切の善法は此の三より生ずるが故に名づけて善根と爲す。一切の惡法の如きは、皆、貪・恚・癡の三より生ず。是の故に此の三を不善根と名づく。[五〇]阿毘曇の中に種々に分別す。欲界繫・色界繫・無色界繫・不繫を合せて十二[五一]と爲す。心相應、心不相應、合せて二十四なり。此の中、無漏の善根は阿耨多羅三藐三菩提を得るの時に修集す。餘の九は菩薩地の中に修集す。又未だ發心せざるの時にも[五二]亦修集す。或は一心の中に三有り、或は一心の中に六有り、或は一心の中に九有り、或は一心の中に十二有り。或は但だ心相應を集めて心不相應を集めず、或は不相應を集めて心相應を集めず、或は心相應も亦心不相應をも集め、或は心相應、心不相應を集めず。是の諸の善根を分別すること阿毘曇の中に廣く說くが如し。此の中、善根は、衆生の爲めに無上道を求むるが故に、行ずる所の諸の善法を皆善根と名づけ、能く[五三]薩婆若智を生ずるが故に、名づけて善根と爲す。(二)「諸行を行ず」とは、善行を淸淨に名づけ、諸行を持戒に名づく。淸淨に戒を持して次第に行ず。是の持戒と七法と和合するが故に名づけて善行と爲す。何等をか七と爲す。一には慚、二には愧、三には多聞、四には精進、五には念、六には慧、七には淨命淨身口業なり。此の七法を行じて具に諸戒を持する、是を「善く諸行を行ず」と名づく。又經に諸禪を說いて行處と爲す。是の故に禪を得る者を名づけて「善く諸行を行ず」と爲す。此の論の中には必ずしも禪を以つて、乃ち發心を得とはせず。所以は何ん。佛在世の時、無量の衆生皆亦發心す。必ずしも禪あらず。又白衣の在家も亦名づけて[五四]善行と爲す。

(三)「善く資用を集む」とは、上の偈の中に說く所の「厚く善根を種へ、善く諸行を行じ、多く佛を供養し、善知識に護られ、深心を具足し、衆生を悲念し、上法を信解する」、是を「資用」と名づく。又本

※八法。

[五〇] 阿毘曇＝Abhidharma 新譯には阿毘達磨に作る。論部の總稱、譯して對法、無比法と云ひ、達磨卽ち經に加ふる論のこと。

[五一] 十二＝三毒を三界と不繫とに配するが故に十二となる。

[五二] 亦＝正藏には久とあるも他本による。

[五三] 薩婆若智＝Sarvajñāna 薩婆は一切。智更に智を加へて一切智智(三智の一)は二乘所得の一切智に異り、佛のみに具はるものと解せらる。諸佛の究竟圓滿果位の知なり。

[五四] 善＝正藏には缺けども三本に據る。

喜多きが故に「歡喜地」と名づく。第二地の中に十善道を行じて諸垢を離るるが故に「離垢地」と名づく。第三地の中に廣博多學にして、衆の爲めに法を說いて、能く照明を作すが故に名づけて「明地」と爲す。第四地の中に布施・持戒・多聞轉た增して威德熾盛なるが故に名づけて「炎地」と爲す。第五地の中に功德力盛んにして一切の諸魔も壞すること能はざるが故に「難勝地」と名づく。第六地の中に障魔の事已んで、諸の菩薩の道法皆現在前するが故に「現前地」と名づく。第七地の中に[四七]三界を去ること遠くして法王の位に近づくが故に「深遠地」と名づく。第八地の中に若しは天魔・梵・沙門・婆羅門も能く其の願を動ずること無きが故に「不動地」と名づく。第九地の中に、其の惠、轉た明にして調柔增上するが故に「善慧地」と名づく。第十地の中に菩薩十方無量の世界において、能く一時に法雨を雨らすこと、劫燒已んで普く大雨を澍ぐが如くなれば、「法雲地」と名づくと。

問うて曰く、已に十地の名を聞きぬ。今云何が*初地に入り、地を得るの相貌、及び（如何が）地を修習するやと。答へて曰く、

若し厚く善根を種ゑ、　善く諸行を行じ、
善く諸の資用を集め、　善く諸佛を供養し、
善知識に護られ、　深心を具足し、
悲心あつて衆生を念じ、　無上の法を信解す。
此の八法を具し已つて、　當に自ら發願して言ふべし。
我れ自ら度することを得已つて、　當に復た衆生を度すべし。
[四八]十力を得るが爲めの故に、　[四九]必定聚に入り、
則ち如來の家に生じて、　諸の過咎有ること無し。
即ち世間の道を轉じて、　出世の上道に入らん。

【四七】　三界＝三有とも云ふ。
一、欲　界＝Kāmabhava
二、色　界＝Rūpabhava
三、無色界＝Arūpabhava

※初地を得る因緣。

【四八】　十力＝本書一七頁以下に詳說す。

【四九】　必定聚＝定と邪と不定との三聚の一。三聚は大小乘に通ず。俱舍、智度、起信の諸論に出づ。菩薩が因行を修してその果を得ることの定まれるをいふ。不退位なり。

十地の義を造る。清淨の心、至る應き所の處に至つて大果報を得ん。佛、[四二]迦留陀夷に語りたまふが如し。「阿難を恨むこと勿れ。若し我れ阿難を記せずんば、我が滅後に於いて阿羅漢と作る者、是の清淨心業の因縁を以つての故に、當に[四三]他化自在天に於いて七反王たるべし」と。經中に廣く說くが如し。

[四四]入初地品　第二

*問うて曰く、汝此の語を說きて我が心を開悟す。甚だ以つて欣悅す。今十地を解かば必ず利益する所多からん。何等をか十と爲すやと。答へて曰く、

[四五]此の中の[四六]十地の法は、　去來今の諸佛、
諸の佛子の爲めの故に、　已に說き、今、當に說くべし。
初地を歡喜と名づけ、　第二を離垢地とす。
三を名づけて明地と爲す。　第四を焔地と名づく。
五を難勝地と名づけ、　六を現前地と名づく。
第七を深遠地とし、　第八を不動地とす。
九を善惠地と名づけ、　十を法雲地と名づく。
十地の相を分別することは、　次後に當に廣く說くべし。

「此の中」とは大乘の義の中なり。「十」とは數法なり。「地」とは菩薩の善根の階級の住處なり。「諸佛」とは十方三世の諸如來なり。「說」とは開示解釋なり。「諸佛子」とは諸佛の眞實の子、諸の菩薩是なり。是の故に菩薩を名づけて佛子と爲す。過去・未來・現在の諸佛、皆此の十地を說きたまふ。是の故に「已に說き、今說き、當に說くべし」と言ふ。菩薩初地に在つて始めて善法の味を得て心に歡

【四二】迦留陀夷＝Kālodāyin 佛在世の比丘の名。
【四三】他化自在天＝Paranirmitavaśavartin 略して他化天とも云ふ。欲界六天の第六。此天は自から樂具を變現せず、下天の化作せし他の樂事を假つて自在に遊戲すれば他化自在と云ふ。
【四四】此品には菩薩が十地の初地(歡喜)に入る德相を明かす。
※十地の名目。
【四五】本書解題總叙の下、參照。
【四六】十地＝地 Bhūmika、とは菩薩の修行過程なり。說明は本文に詳かなり。
歡善地＝Pramuditā-b.
離垢地＝Vimalā-b.
明　地＝Prabhākarī-b.
焔　地＝Arciṣmatī-b.
難勝地＝Sudurjayā-b.
現前地＝Abhimukhī-b.
深遠地＝Dūraṃgamā-b.
不動地＝Acalā-b.ā-b.
善慧地＝Sādhumatī-b.
法雲地＝Dharmameghā-b.
尙一般的には第三明地は發光地、第四焔地は燄慧地、第七深遠地は遠行地と稱せらる。

慧を念ずるが故に深く善心を發す。則ち是れ自利なり。又此の正法を演說し、照明するが故に名づけて「無比に諸佛を供養す」と爲す。則ち是れ利他なり。說くが如し。

法を說いて法燈を然し、　法幢を建立す。
此の幢は是れ賢聖、　妙法の印相なり。
我れ今此の論を造る。　諦と捨と及び滅と慧と、
是の四功德處を　自然に修集す。

*今此の論を造るに是の四種の功德自然に修集す。是の故に心に倦むこと有ること無し。「諦」[三八]とは、一切の眞實之を名づけて諦と爲す。一切の實の中、佛語を眞實と爲す。變壞せざるが故に。我れ此の佛法を解說するに、卽ち諦處を集む。「捨」をば[三九]布施に名づく。施に二種あり。法施と財施となり。二種の施の中、法施を勝れたりと爲す。佛、諸比丘に告げたまへるが如し。「一には當に法施すべし。二には當に財施すべし。二施の中に法施を勝れたりと爲す」と。是の故に我れ法施の時に卽ち捨處を集む。我れ若し十地の義を[四〇]說く時、身口意の惡業有ること無く、又、亦、欲・恚・癡の念及び諸の餘の結を起さず。此の罪を障ふが故に卽ち滅處を集むと名づく。他の爲めに法を解說して大智の報を得、是の說法を以つての故に卽ち慧處を集む。是の如く此の論を造つて此の四功德處を集むるなり。復た次に、

我れ十地の論を說き、　其の心、清淨なることを得たり。
深く是の心を貪るが故に、　精勤して倦まず。
若し人聞いて受持して、　心[四一]又清淨なれば、
我れも亦深く此を樂ひ、　一心に此の論を造らん。

此の二偈、其の義已に顯はにして復た說くことを須ひず。但だ自心他心清淨を以つての故に、此の

※造論の四功德處。
【三八】諦＝Satya眞理のこと。
【三九】檀那＝Dāna。
【四〇】・說十地義＝正藏には說義十地とあるも三本に據る。
【四一】又＝正藏には有とあれども三本に據る。

好む所に隨つて之を捨てず。

問うて曰く、衆生自ら樂ふ所同じからず。汝に於いて何事ぞやと。答へて曰く、我、無上道心を起すが故に一切を捨てず、力に隨つて饒益す。或は財を以つてし、或は法を以つてす。說くが如し。

若し大智の人有つて、　是の如きの經を聞くことを得て、
復、解釋を須ひずとも　則ち十地の義を解せん。

若し福德利根の者有つて、但だ直ちに是の十地經を聞き、卽ち其の義を解して解釋を須ひずんば是の人の爲めに此の論を造らずと。

問うて曰く、云何んが善人と爲すやと。答へて曰く、若し佛語を聞いて卽ち能く自ら解すること丈夫の能く苦藥を服するが如し。小兒は則ち蜜を以つて和す。「善人」とは、略して說くに十法有り。何等をか十と爲す。一には信、二には精進、三には念、四には定、五には善身業、六には善口業、七には善意業、八には無貪、九には無恚、十には無癡なり。說くが如し。

若し人經文の、　讀誦することを得べきこと難きを以つて、
若し[三六]毘婆沙を作らば、　此の人に於いて大に益あらん。

*若し人、鈍根懈慢にして經文難きを以つての故に讀誦すること能はず。「難き」とは、文多くして誦し難く、說き難く、諳じ難きなり。若し莊嚴の語言・雜飾・譬喩、諸の偈頌等を好樂するもの有らば、此等を利益せんが爲めの故に此の論を造る。是の故に汝先に說ける、「但だ佛經のみにて便ち衆生を利益するに足る。何ぞ解釋を須ひん」とは、是の語然らず。說くが如し。

思惟して此の論を造る。　深く善心を發す。
此の法を然すを以つての故に、　無比に佛を供養す。

我此の論を造る時思惟分別して多く三寶及び菩薩衆を念じ、又[三七]布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智

【三五】因緣＝Nidāna. 十二部經の一。

●善人の十法。

【三六】毘婆沙＝Vibhāṣa 又は鼻婆沙、毘頗沙に作る、譯して、廣說、勝說と云ふ。

※毘婆沙。

【三七】六波羅蜜なり。波羅蜜(Pāramitā)とは到彼岸又は度と譯す。彼岸に度る菩薩の行法。
布施 (Dāna)
持戒 (Śīla)
忍辱 (Kṣānti)
精進 (Vīrya)
禪定 (Dhyāna)
智慧 (Prajñā)

此の論を造るにはあらす。

餘の因緣を以つて、

衆生、六道にかいて苦を受けて救護有ること無きを見て、此等を度せんと欲するが爲の故に、智慧の力を以つて此の論を造る。自ら智力を現じて名利を求めんが爲にあらず。亦、嫉妬自高の心をもつて供養を求むること無しと。

＊問うて曰く、衆生を慈愍し、饒益する事、經の中に已に說けり。何ぞ復た解して徒に自ら疲苦することを須ふるやと。答へて曰く、

第一義に通達するもの有り。

但だ佛の經を見るのみにて、

實義を解する者有り。

善き解釋を得て、

利根深智の人有らば、佛の所說の諸の深經を聞いて卽ち能く第一義に通達す。所謂る「深經」とは卽ち是れ菩薩の十地なり。第一義とは卽ち是れ十地如實の義なり。諸の論師有り。慈悲の心有つて、佛の所說に隨つて論議を造作し、辭句を莊嚴す。人是れに因つて十地の義に通達することを得る者有り。說くが如し。

章句を莊嚴するを好む者有り。

人の文飾をもつて、

雜句を好む者有り。

偈頌を好むもの有り。

而も解を得るもの有り。

譬喩、因緣を好んで、

我隨つて捨てず。

好む所各〻同じからず。

「章句」とは句義を莊嚴するに名づけ、偈頌と爲さず。「偈」とは義趣に名づく。言辭諸句の中に在り。或は四言、五言、七言等なり。偈に二種有り。一には四句偈、名づけて、波蔗と爲す。二には六句偈、祇夜と名づく。「雜句」とは直に語言を說くに名づく。「譬喩」とは人の深義を解せざるを以つての故に喩を假つて解せしむるもの。喩に或は實、或は假有り。「因緣」とは所由を推尋す。其の

※經の種類を述ぶ。

【三一】偈＝Gāthā 伽陀、舊くは偈といふ。句形を取りて經意を結讃するをいふ。十二部經の一。

【三二】波蔗＝偈卽ち伽陀に通別二種或は四種伽陀（阿莬陀闡提・初偈・摩羅・周利偈）等の區別あるも、未だ波蔗、祇夜の二種となすものを見ず。

【三三】祇夜＝（Geya）重頌（舊）又は應頌（新）と譯す。長行の後に經意を重說せる偈頌及び所說の不了義經を略釋して、義意の不足を補ふ頌をいふ。十二部經の一。

【三四】譬喩＝Apadāna. 十二部經の一。

や。又人中に於いて[二九]恩愛別苦・怨憎會苦・老病死苦・貧窮求苦、是の如き等の無量の衆苦有り。及び諸天、阿修羅退沒の時の苦あり。其の軟心の者、此の諸の苦を見て何ぞ怖れて聲聞、辟支佛乘を求めざることを得んや。若し堅心の者は地獄・畜生・餓鬼・天・人・阿修羅の中にて、諸の苦惱を受くるを見るも、大悲の心を生じ、怖畏有ること無く、是の願を作して言く、「是の諸の衆生深く衰惱に入る。救護有ること無く、歸依する所無し。我、滅度を得ば當に此等を度すべし。大悲の心を以つて勤行精進せば、久しからずして所願を成ずることを得ん」と。是の故に我は說く、菩薩の諸の功德の中、堅心は第一なりと。

*復次に菩薩に八法有り。能く一切の功德を集む。一には大悲、二には堅心、三には智慧、四には方便、五には不放逸、六には勤精進、七には常攝念、八には善知識なり。是の故に初發心の者疾く八法を行ずること頭然を救ふが如くにして、然して後に當に諸の餘の功德を修すべし。又此の八法に依るが故に一切の聲聞衆・四雙・八輩有り。所謂る須陀洹向・須陀洹等なり。「辟支佛我[三〇]我所無し」とは、世間に佛無く、佛法無き時、得道の者有るを辟支佛と名づく。諸の賢聖、我我所の貪著を離るるが故に名づけて無我我所者と爲す。「今、十地の義を解するに佛の所說に隨順せん」とは、十地經の中に次第に說けり。今當に次に隨つて具に解すべし。

△問うて曰く、汝が所說、經に異らずんば經の義已に成ず、何んぞ更に說くことを須ひん。自ら所能を現じて名利を求めんと欲するが爲なりやと。答へて曰く、

我、自ら文辭を莊嚴することを　現さんが爲にはあらず。
亦利養を貪つて、　而も此の論を作るにもあらず。

問うて曰く、若し爾らずんば何を以つてか此の論を造るやと。答へて曰く、

我、慈悲あつて衆生を　饒益せんと欲するが爲なり。

【二九】恩愛別苦、（愛別離苦のこと）怨憎會苦、老病死苦、貧窮求苦＝これを四苦と稱し、老病死苦を分けて生、老、病、死、の四苦とし、之に五陰盛苦を加へて八苦と稱す。

※菩薩の八法。

【三〇】我・我所＝我とは己が身を主宰する常住なるものを云ひ、我所とは我所有の意にて自身を我とし、自身以外を我所有とす。

△以下造論の主旨を述ぶ。

是の如き等の事を、若しは見、若しは聞いて何ぞ怖れて聲聞、辟支佛乘を求めざることを得んや。又寒氷地獄・頞浮陀地獄・尼羅浮陀地獄・阿波波地獄・阿羅羅地獄・阿睺睺地獄・青蓮華地獄・白蓮華地獄・雜色蓮華地獄・紅蓮華地獄・赤蓮華地獄に於いて常に幽闇大怖畏の處に在り。賢聖を誹毀するもの生れて其の中に在り。形、屋舍・山陵・塠阜の如く、麁惡の冷風聲猛くして畏る可く、悲激身を吹いて枯草を轉ずるが如し。肌肉墮落すること猶し冬の葉の如く、凍剝・創夷・膿血流出し、身體不淨にして臭處忍び難し。寒風切裂、苦毒辛酸にして唯だ憂悲啼哭のみ有つて更に餘心無し。[二三]號咷[二四]煢獨にして依恃する所無し。斯の罪皆賢聖を誹謗するに由る。其の軟心の者此の事を見聞して、何ぞ怖れて聲聞、辟支佛乘を求めざることを得んや。

又、※畜生、猪狗・野干・猫狸・狖鼠・獼猴・玃玃・虎狼・師子・兕豹・熊羆・象馬・牛羊・[二五]蜈蚣・[二六]蚰蜒・蚖蛇・蝮蝎・[二七]黿鼉・魚鼈・蛟虬・[二八]螺蜂・烏鵲・鵄梟・鷹鴿の類に於いて是の如き等の鳥獸共に相ひ殘害す。又、機網伺捕し、屠割一ならず、生きては則ち羇絆鼻を穿ち、首を絡め、乘を負うて捶杖せられ、其の身を鉤刺して皮肉破裂し、痛忍ぶ可からず、煙をもつて熏じ、火をもつて燒き、苦毒萬端なり。死しては則ち皮を剝ぎ、其の肉を食噉す。是の如き等の無量の苦痛有り。其の軟心の者、此の事を聞見して何ぞ怖れて聲聞辟支佛乘を求めざることを得んや。

又◎鹹頸餓鬼・火口餓鬼・火𤌇餓鬼・食吐餓鬼・食盪滌餓鬼・食膿餓鬼・食屎餓鬼・浮陀鬼・鳩槃茶鬼・夜叉鬼・羅刹鬼・毘舍闍鬼・富單那鬼・迦羅富單那鬼等の諸鬼にかいて鬚髮蓬亂し、長爪大鼻にして身中に虫多く臭穢畏る可し。衆惱に切られて常に慳嫉、飢渴の苦患有り。未だ曾つて食を得ず、得るも咽むこと能はず。常に膿血・屎尿・涕唾・盪滌・不淨を求む。有力なる者奪つて食を得ず。裸形にして衣無く寒熱倍甚し。惡風身を吹き宛轉苦痛し、蚊虻毒蟲、其の體に唼食し、腹中の飢熱常に火の然ゆるが如し。其の軟心の者此の事を見聞して何ぞ怖れて聲聞、辟支佛乘を求めざることを得ん

【二三】號咷＝泣きさけんでやまぬこと。
【二四】煢獨＝煢は困悴、獨は孤獨。
※畜生道。
【二五】蜈蚣＝むかで。
【二六】蚰蜒＝げじげじ。
【二七】黿鼉＝すつぽんとかめ。
【二八】螺蜂＝はまぐり。
◎餓鬼道。

を釋する中に當に廣く如實の菩薩の相を說くべし。「衆」とは、初發心より金剛無礙[18]解脫道に至るまで、其の中間に於ける過去・未來・現在の菩薩、之を名づけて衆と爲す。「堅心」とは、心、須彌山王の沮壞す可からざるが如く、亦大地の傾動す可からざるが如きなり。「十地に住す」とは、歡喜等の十地なり。後に當に廣く說くべしと。

問うて曰く、若し菩薩、更に殊勝の功德有らば何が故に但だ堅心を稱ふるやと。答へて曰く、菩薩は堅心の功德有つて能く大業を成じて二乘に墮せず。軟心の者は生死を怖畏して自ら念へらく、何が爲に久しく生死に在つて諸の苦惱を受くるや。如かず、疾く聲聞、辟支佛乘を以つて速かに諸苦を滅せんにはと。

※又、軟心の者は、[19]活地獄・黑繩地獄・衆合地獄・叫喚地獄・大叫喚地獄・燒炙地獄・大燒炙地獄・無間大地獄及び眷屬の炭火地獄・沸屎[20]地獄・燒林地獄・劍樹地獄・刀道地獄・銅柱地獄・刺棘地獄・鹹河地獄に於いてその中の斧鉞・刀矟・鋘戟・弓箭・鐵剗・椎棒・鐵槍・[21]蒺䔧・刀劍・鐵網・鐵杵・鐵輪 是の如き等の治罪の器物を以つて斬斫し、割刺し、打棒し、剝裂し、繫縛し、離鎖し、燒煮し、搒掠し、其の身を磨碎し、擣て爛熟せしめ、狐狗・虎狼・師子・惡獸競ひ來つて齚掣し、其の身を食噉し、烏鵄・鵰鷲・鐵嘴に啄まれ、惡鬼驅逼して劍樹に緣らしめ、火山に上下せしめ、鐵火車を以つて其の頸領に加へ、熱鐵の杖を以つて之を隨捶し、千釘をもて身に釘ち、剗刀もて刮削して黑闇の中の[22]熢㶿たる臭處に入れ熱鐵身を鏁し、其の肉を臠割し、其の身皮を剝ぎて還つて手足に繫げ、鑊湯涌沸して其の身を炮煮し、鐵棒頭を棒ち腦は壞れ眼出づ。鐵串を貫著して擧體に火然え、血流れて地に澆り、或は屎河に沒し、刀劍、鏘刺の惡道を行くに、自然の刀劍空より下ること猶し駛雨の如し。支體を割截し、辛酸苦臭の穢惡の河に其の身を浸漬し、肌肉爛壞し、擧身墮落して唯だ骨のみ在る有り。獄卒牽挫し、蹴蹋し、搥撲す。是の如き等の無量の苦毒有り。壽命極めて長くして死を求むとも得ず。

【一八】解脫道＝始めて眞智(無漏智)を發して、眞理(諦理)を照見する位。道は道路の義、求道の道程をいふ。解脫道に關しては聲聞と菩薩とに相異あるも、菩薩は普通に初地入心(見道)をいふ。

◎菩薩の堅心と三惡道。

※地獄道。

【一九】十六地獄なり。前の八は八大(又は八熱)地獄と云ひ、炭火地獄以下の八地獄はその副地獄なり。その名目については諸論一致せず。今智度論十六に依れば、八熱地獄は、一に活大地獄、二に黑繩大地獄、三に合會大地獄、四に叫喚大地獄、六に大熱地獄、七に大熱大地獄、八に阿鼻大地獄を云ふ。八寒氷地獄は頞浮陀、尼羅浮陀、阿羅羅、阿婆婆、睺睺、漚波羅、波特摩、摩訶波頭摩、をいふ。

【二〇】屎＝正藏には戻とあれども三本による。

【二一】槍蒺䔧刀劍鐵網＝この七字正藏には鏘鋏鏁鐵矟刀鐵臼の八字なるも今三本による。

【二二】熢㶿＝熢は火の氣、㶿は煙の起る貌にしてそれより蒸し熱い義なり。

若し善子を生めば、　能く人を利する者なり。
是れ則ち滿月の如く、　其の家を照明す。
諸の福德有るの人、　種種の因緣を以つて、
饒益すること大海の如し。　又、亦、大地の如し。
世間に求むること無く、　慈愍を以つての故に住す。
是の人は生れながら貴しと爲す。　壽命第一最なり。

是の如く聲聞と辟支佛と佛とは煩惱の解脫に差別無しと雖も、無量の衆生を度して、久しく生死に住して利益する所多く、菩薩の十地を具足するを以つての故に大差別有りと。

*問うて曰く、佛は大悲有り。汝弟子となりて種種に稱讚す。衆生を慈愍したまふこと誠に所說の如し。汝種種の因緣を以つて明了に分別し、開悟し、引導す。慈悲を行ずる者、聞かば則ち心淨く、我甚だ欣悅す。汝が先の偈に說く十地の義、願はくは爲めに解釋せよと。答へて曰く、「敬」は恭敬の心に名づく。「禮」は身を曲げて足を接するに名づく。「一切諸佛」とは、三世十方の佛なり。「無上の大道」とは、一切の諸法を實の如く知見し、通達して餘すこと無く、更に勝る者無きが故に無上と曰ふ。大人の所行の故に「大道」と曰ふ。「菩薩衆」とは、[一四]無上道の爲めに發心するを名づけて菩薩と曰ふと。

問うて曰く、但だ發心すれば便ち是れ菩薩なりやと。答へて曰く、何ぞ但だ發心するを菩薩と爲すこと有らん。若し人、發心して必ず能く無上道を成ずるを乃ち菩薩と名づく。或は但だ發心するをも亦菩薩と名づくること有り。何を以つての故に、若し初發心を離れては則ち無上道を成ぜざること、[一五]大經に說くが如し。[一六]新發意の者を名づけて菩薩と爲すこと猶し比丘の未だ得道せずと雖も亦道人と名づくるが如し。是れ*名字の菩薩なり。漸漸に修習して、轉じて實法を成ず。後に[一七]歡喜地

※歸敬偈を釋し兼ねて菩薩の意義を說く。

【一四】無上道＝如來所得の道を無上正等覺といふ。無上菩提の意味。
【一五】大經＝後世一般には大乘涅槃經を指すも、本論譯了の時、未だその譯出なし。茲は華嚴經を指すか。
【一六】新發意＝新に菩提を求むる意を發すを云ふ。後世には新に出家する者に限れども、もとは在家出家に通ずる稱なり。
＊名字如薩菩と實菩薩。
【一七】歡喜地＝十地の第一階段。以下詳說す。

由つてか度することを得ん。亦、復、三乘の差別有ること無し。所以は何ん。一切の聲聞、辟支佛は皆佛に由つて出づ。若し諸佛無くんば何に由つてか出でん。若し十地を修せずんば何ぞ諸佛有らん。若し諸佛無くんば亦、法も僧も無からん。是の故に汝が所說は則ち三寶の種を斷ず。是れ大人有智の言に非ず。聽察すべからず。所以は何ん。世間に四種の人有り。一には自利、二には利他、三には共利、四は不共利なり。是の中、共利の者の能く慈悲を行うて、他を饒益せば名づけて上人[一]と爲す。說くが如し。

世間は愍傷すべし。　常に[二]皆自利に於いて、
一心に富樂を求め　邪見の網に墮し、
常に死の畏を懷きて、　六道の中に流轉す。
大悲の諸の菩薩も、　能く[三]拯ふこと希有なり。
衆生、死の至る時、　能く救護する者無く、
深黑闇に沒在して、　煩惱の網に縛はる。
若し能く大悲の心を、　發行する者有らば、
衆生を荷負するが故に、　之が爲めに重任と作る。
若し人決定の心をもて、　獨り諸の勤苦を受け、
獲る所の安隱の果を、　而も一切と共にせんに、
諸佛の稱歎する所にして、　第一最上の人なり。
亦、是れ希有の者なり。　功德の大藏なり。
世間に常に言ふこと有り。　家、惡子を生まざれば、
但だ能く已の利を成すも、　人を利すること能はず。

[一] 上人＝上は勝上の意味。後世德行秀でたるものに名く。本邦にては特に官僧ならざる隱遁高僧を呼ぶ稱呼として用ゐらる。上人の語の典據の一。
[二] 皆＝正藏には背とあれども三本に據る。
[三] 拯＝正藏には極とあれども他本に依る。

衆生を濟渡す。是の因緣を以つて菩薩十地の義を說くなりと。

問うて曰く、若し人、菩薩十地を修行すること能はずんば生死の大海を度することを得ざるやと。答へて曰く、若し人有つて聲聞(七)・辟支佛(八)乘を行ぜん者、是の人、生死の大海を度することを得るも、若し人、無上の大乘を以つて生死の大海を度せんと欲する者は、是の人は必ず當に具足して十地を修行すべしと。

問うて曰く、聲聞・辟支佛乘を行ぜる者、幾の時にか生死の大海を度することを得るやと。答へて曰く、聲聞乘を行ぜん者、或は一世を以つて度することを得、或は二世を以つてし、或は是の數を過ぐ。根の利鈍に隨ひ、又先世の宿行、因緣を以つてす。辟支佛乘を行ぜん者、或は七世を以つて度することを得、或は八世を以つてす。若し大乘を行ぜん者、或は一恒河沙大劫、或は二・三・四・十・百・千・萬・億に至つて、或は是の數を過ぎて然る後、乃ち具足して菩薩の十地を修行して佛道を成ずることを得、亦根の利鈍に隨ひ、又先世の宿行、因緣を以つてすと。

※問うて曰く、聲聞・辟支佛・佛、倶に彼岸に到らば解脫の中に於いて差別有りや不やと。答へて曰く、是の事應當分別すべし。諸の煩惱に於いて解脫を得るに是の中に差別なし。是の解脫に因つて無餘涅槃(九)に入る に是の中にも亦差別無し、相有ること無きが故に。但だ諸佛の甚深禪定障の解脫と、一切の法障の解脫とは諸の聲聞、辟支佛に於いて(一〇)差別有り。說き盡す所に非ず、亦譬喩を以つて比と爲す可からずと。

問うて曰く、三乘の所學は皆無餘涅槃の爲なり。若し無餘涅槃中に差別無くんば、我等何を用つてか恒河沙等の大劫に於いて生死に往來して十地を具足せん。如かず、聲聞、辟支佛乘を以つて速に諸苦を滅せんにはと。答へて曰く、是の語、弱劣なり。是れ大悲有益の言に非ず。若し諸の菩薩、汝が小心に効うて慈悲の意無く、精勤して十地を修すること能はずんば、諸の聲聞、辟支佛を何に

【七】聲聞＝Śrāvaka。二乘又は三乘の一。佛の聲(說法)を聞きて修行證果する小行小果の人を云ふ。卽ち如來の聲敎を聽聞する人の義なり。

【八】辟支佛＝Pratyeka-buddha。獨覺、緣覺とも云ふ。二乘又は三乘の一。獨覺は佛無くして單獨に覺る義。緣覺は因緣を觀じて覺る義。聲聞と共に阿羅漢果を最極の得果とす。本書七頁參看。

※三乘の區別。

【九】無餘涅槃＝Nirupadhiśeṣa-nirvāṇa。有餘涅槃に對する語。新譯には有餘依、無餘依と云ふ。依とは有漏の依身なり。餘とは惑業に對して云ふ。有餘涅槃とは生死の因たる惑業を滅盡するも猶有漏の依身の苦果を餘すを云ひ、無餘涅槃とは更に依身の苦果を滅し、餘す處なく再び生をうけざるを云ふ。此の二種の涅槃は同一體にして、三乘の行人初成道の時に之を證するも、無餘涅槃の現はるるは命終の時なり。

【一〇】差。正藏には無きも他本に據りて加へたり。

十住毘婆娑論

聖者龍樹造
後秦龜茲國三藏鳩摩羅什譯

卷の第一

序品第一[一]

*一切の佛と、　無上の大道と、
及び諸の菩薩衆の　堅心に十地に住せると、
聲聞と辟支佛との　我と我所と無き者とに敬禮したてまつる。
今、十地の義を解するに、　佛の所說に隨順せん。

◎問うて曰く、汝菩薩の十地の義を解かんと欲す、何の因緣を以つての故に說くやと。△答へて曰く、地獄・畜生・餓鬼・人・天・阿修羅の[二]六趣は險難・恐怖・大畏あり。是の衆生は生死の大海に旋流洄澓して、[三]業に隨つて往來す。是れ其の濤波なり。涕涙・乳汁・流汗・膿血は是れ惡水の聚なり。瘡癩・乾枯・嘔血・淋瀝・上氣・熱病・瘭疽・癰漏・吐逆・脹滿、是の如き等の種種の惡病を惡羅刹と爲す。憂悲・苦惱を水と爲し、嬈動・啼哭・悲號を波浪の聲と爲す。苦惱・諸[四]受を以つて沃焦と爲し、死を崖岸と爲して能く越ゆる者無し。諸[五]結・煩惱・有漏の業風、鼓扇して定らず。諸の[六]四顚倒は以つて欺誑を爲し、愚癡・無明は大黑闇と爲り、愛に隨ふ凡夫は無始より已來常に其の中に行じて是の如く生死の大海に往來し、未だ曾つて彼岸に到ることを得ること有らず。或は到る者有らば兼ねて能く無量の

【一】序品は初めに十地の意義を解し、併せて聲聞、緣覺、菩薩の三乘の區別をあげ、菩薩の意義を詳說し、次に造論の主旨を述ぶ。
※歸敬偈。
【二】六趣＝六道に同じ。前三は三惡道、後三は三善道。
【三】業＝Karma 身口意三業のこと。
【四】受＝Vedanā 所觸の境を領納する心所法なり。
◎十地の意義並びに三乘の區別。
△十地を說く因緣。
【五】結＝使とも亦結使とも云ふ。共に煩惱の異名なり。心を纏縛する故に結と云ひ、身心を驅使する故に使と云ふ。
【六】四顚倒＝單に四倒とも云ふ。法に對する四種の顚倒想にして之に二種あり、生死に關する場合には常、樂、我、常を云ひ、涅槃に關する場合には苦、空、無常、無我を云ふ。

深謝の意を表する。

易行品以外は註釋類が一部も現存してゐない。句點本、訓點本はあるが、殆んど各本各節毎に意味不明の箇所があり、その儘では通讀し難かつた。從つて本書は試譯と云ふのが適當で、誤謬も多からうが、それ等は識者の示教を仰ぐと共に、更に他日の完成を期する積りである。

昭和十年九月

譯者　矢吹慶輝識

陀別讃が餘佛に比して極めて鄭重であるといふ點からは、一品の全部を彌陀章と餘佛章とに分けて、一品の歸する所は要するに彌陀教の宣說だとも見られる。それ等の詳細は淨土宗書では決疑鈔卷一、眞宗宗籍では數多の章疏があるから總べてそれ等に讓ることにする。要するにこの易行一品は淨土教との關係で特に重要視されてゐた。

特に眞宗乘では、宗祖が此品を正依經論に加へられた關係上、眞宗別途の易行品觀がある。それに依ると、先づ十方諸佛章を彌陀別讃と見て、その前の十方十佛章をその前導とし、後の過未八佛章以下をその後從とし、前後は畢竟中央の彌陀別讃に統一されるものとして、易行一品の總意は彌陀易行を說くに在りとするものである。近くは故島地大等氏の易行品開題を見よ（國譯大藏經論部五）。

六、易行品の註釋類

前述のやうな事情の下に、易行品には眞宗學匠の筆に成つた數多の章疏がある。古くは安永七年(西紀一七七八)に成つた玄智の眞宗教典志に

冠註二卷　單問
科一卷　圓環分科　寂順校訂
懸譚並分科一卷　僧樸
餝饍四卷　衆鎧
要津錄三卷　寂淵
讀易行品三卷　通元

が列擧されてゐる。此の內、僧樸には更に講錄一卷があつた。近くは眞宗全書の十住毘婆沙論易行品講纂四卷中に、

鼓椎記　隨意
筆　記　法海
開演日記　德龍
聞　記　澄玄
聽　記　秀存
講　錄　龍溫
筆　記　神興
講　錄　行忠
講　錄　雲集

の九部を合集してゐる。これ等は悉く眞宗宗乘からの解釋だが、數多の註釋中で最も精細を盡せるものと謂はれてゐる。この他に、故島地大等氏の易行品解題中に、上述を合せて章疏三十七部を擧げてゐるし、大東出版社の佛書解說大辭典卷一(九三―九六)、同書卷五(一七四―一七五)に數多の註釋書と、その詳密なる解說とが揭げられてゐる。

本書は加藤章一氏等が一往逐字譯をされたのを、或は大正大學の宗教學研究室で或は拙宅で、自分が本文を持ちながら同氏の譯と對照をなし、更に兩者別々に讀み通したもので、特に脚註は大部分同氏を煩はした。茲に同氏の努力に對して

名がない。この難易二道の對立を判然さしたのは曇鸞からである。後に聖道淨土の二門が道綽の安樂集から出て、淨土教の教判にはこの二道二門が缺ぐべからざるものとせられるに至つた。斯うした關係で、本論中の易行品は古から珍重された。抑も出三藏記集卷四、失譯雜經中にある初發意易行法一卷（後の經錄では西晉聶道眞譯としてゐる）、隋衆經目錄卷五に出てゐる前秦僧伽提婆譯、易行品諸佛名經一卷（開元錄には易行品と同じとしてゐる）があつたから、この一品は羅什が本論を譯する前から、旣に別行別譯があつたことが判る。

本論全體としては前述の通り、これといふ影響も無かつたが、易行品だけは別扱ひを受け、從つて數多の章疏類がある。

易行品はその名の示すが如く、難行に對する易行を說いたもので、菩薩の修行には退（惟越致）と不退（阿惟越致）との二種があり、自力でその不退に到るは頗る難行であるが、易行品では安易にその不退に到る方法が示され、謂ゆる「佛法に無量の門あり、世間の道に難あり易あり、陸道の步行は則ち苦しく、水道の乘船は則ち樂しきが如し。菩薩の道も亦是の如し。或は勤行精進のもの有り、或は信方便易行を以て疾く阿惟越致地に至るもの有り」として、具さに十方諸佛を擧げ、稱名憶念によりて必定不退に入ることを說いてゐる。然るに諸佛の中で、阿彌陀佛に對しては全く他の諸佛と異り、五言三十二行の偈文を以て、身相、光明、本願、功德、利益、攝取等の諸功德を詳說してゐる。且つその中に、龍樹自ら「敬首禮」、「我歸命」等と云つてゐるので、八宗の祖師たる龍樹自身も亦この易行道に依つて不退を得んとしたものと解せられ、淨土教ではこの一品に特殊の意義を認めることとなつた。

淨土宗祖法然上人は選擇集中、傍明往生の論本として之を正依の經論中には加へられなかつたが、眞宗祖親鸞上人は之を正依經論に加へられるに至つて、眞宗の宗乘では頗る重要なる聖典とされ、從つて同宗の學匠は本書中特にこの易行品に限りて、數多の註釋を續出せしめた。斯うした關係で、易行品の讃講は殆んど眞宗の學者に限られてゐると謂つて可い。

易行品は大正藏經本では四頁十九行の一短篇で、その內容は前に本論の梗概の下に述べた通り、七章段から成つて居り、論文の表面からすると、本品各章總計して善德等の百三十三佛名及び善意菩薩等の百四十餘菩薩名が列擧され、その稱名憶念の易行道を說いたものだから、特に彌陀一佛の稱名易行とすべきでないとも見られ、又この易行は此身に不退を得るための易行で、淨土往生の易行を說いたものでないとも見られる。しかし又彌

抄一卷、失譯と傳へられ、出三藏記集卷四、法經錄卷五、歷代三寶紀卷四以下、開元錄卷十六迄、歷代の經錄に載せられてゐる外、これといふ註釋類すら現はれなかつた。それは十住毘婆娑論が他の十地經論の部分譯であつたことや、十地に關する教理が詳かでなかつたために、十地の釋論としては顯著な影響を遺さなかつたためである。併し十住毘婆抄論三十五品中、第六の發菩提心品、第七の調伏心品、第八の阿惟越致相品に難行道が說かれてゐるに對して、第九の易行品に易行道が說かれてゐるので、この一品が非常に重要視された。

五、易行品と龍樹の淨土教

經典に現はれた淨土教は且らく措き、印度に於ける論師の淨土教としては、先づ馬鳴の大乘起信論に願生淨土の教義があるので、古來淨土祖師の第一祖として數へられてゐるが、比較上、的確な史實と資料の豐富と後代への影響といふ點からすると、先づ龍樹の諸著に現はれた淨土思想を採るべきである。

龍樹は八宗の祖といはれ、その著述が頗る多かつたが、現存せるものだけでも二十三部八十四卷と傳へられてゐる。その內、淨土教に關係ある著作としては、十住毘婆沙論と大智度論と禮淨土十二偈とである。

大智度論は元來、般若經の釋論で、般若經は代表的な諸大乘經典中、阿彌陀佛幷にその淨土に關說することの最も疎なる經典であるのに（阿彌陀佛の研究、一八六參照）、龍樹の釋論には卷第四、七、八、九、十、二十一、三十二、三十四、三十八、五十、六十七、九十二、九十三等の多卷に亙りて、阿彌陀佛或はその淨土を援引してゐる（織成の阿彌陀佛說林卷一參照）。禮淨土十二偈（十二禮文）は經錄に記載が缺けてゐるので、作者に就いては議論もあるが、始終を通じて彌陀讚嘆の禮文で、迦才の淨土論に十二經七論を擧げて往生淨土の證文としてゐる中、七論中に此の十二偈が引かれてゐるし、善導の往生禮讚中、その中夜禮讚にこの十二偈が用ゐられてゐて、爾後、一般に龍樹の作と傳へられてゐる。十卷楞伽經の第九に出てゐる龍樹が歡喜地を證得して、淨土に往生すとの懸記と併せて、龍樹と淨土教とは頗る緊密な關係がある。

だから北魏の曇鸞は龍樹の中觀教系たる四論の研究から來た關係もあるが、その撰にかかる讚阿彌佛偈に淨土教の先覺として龍樹を禮讚し、北魏時代の選述としては稀に見る名著であつた往生論註の開卷第一にも、この十住毘婆沙論の難行道易行道によりて謂ゆる難易二道の教判を立てて淨土教の立脚地を闡明した。蓋し易行品には易行道の名あるも難行道の

ある關係史料である。

そこでこの十住毘婆沙論は大體、耶舍と羅什との共譯たる十住經四卷を本經としての論本たる關係に在る。唯だ初二地の解釋のみで論本が完譯されなかつたことは惜しいことである。

四、十住毘婆沙論と十地經論

古來の所傳では華嚴經は頗る龍樹と關係が深い。眞諦三藏の當時、西域地方の傳說では、龍樹が龍宮に往つて此の華嚴經即ち大不思議解脫經に三本あるのを見た。そして上本、中本は到底凡人の所持に堪へないので、暫らく下本の十萬偈四十八品だけを印度に傳へたものだとしてゐた。然るに龍樹は單に華嚴經現出の關係者であつたばかりでなく、更にこの華嚴經に釋論を作つたと傳へられてゐる。

華嚴經傳記卷一に婆羅頗密多三藏の語を引いて、「西國相傳。龍樹從二龍宮一、將レ經出已。遂造二大不思議論一。亦十萬頌、釋二此經一。既冥機未レ啓、不レ測二其指歸一也」と云ひ、龍樹に華嚴大經の論釋たる大不思議論なるものがあつたとしてゐる。そこでこの十住毘婆沙論は龍樹所造となつて居り、華嚴經十地品の內、初めの二地を解釋したものだから、古來この論が正しく龍樹の華嚴經の釋論たる大不思議論中の一分だとされてゐる（華嚴經傳記一論釋第五）。

今その大不思議論は存在してゐないが、華嚴經には中觀系（空門或は實相論の教系）の龍樹の釋論があつたことを傳へてゐる。然るに印度に於ける大乘論師の代表として龍樹と相列んでゐる瑜伽系（有門或は緣起論の教系）の天親（世親）にも、華嚴經の一部たる十地品の釋論があり、元魏菩提流支譯の十地經論十二卷がそれである（本國譯一切經では釋經論部の第六、石井教道氏譯、國譯大藏經では論部の第十三、衞藤即應氏譯がある）。

偖て印度の大乘佛教に於ける兩系の代表に、等しく華嚴經十地品に對する釋論が遺つてゐるのは、佛教教學の兩系が相互に融通交涉のあることを語つてゐて面白い。元來、天親が小乘から大乘に轉向するやうになつたのが、偶々無著の弟子が十地經を誦するのを聽いたためだとされ、天親と十地經とは親しい關係があり、その十地經論は支那六朝の一學派たる地論宗を新興せしめ、唐朝に入りて賢首が華嚴宗を大成する迄、北道（道寵）南道（慧光）の兩派を形作りて攝論宗に對抗し、兎に角、佛教教學の一異彩であつた。從つて天親の十地經論には現存せるものだけでも、慧遠や法上の地論宗からの註釋及び智儼や法藏（賢首）や澄觀などの華嚴宗からの選述中にも取り入れられてゐるが、十住毘婆沙論には古來、十住毘婆

去八十一佛に同じく、後段諸佛は大體梵本無量壽經の十四佛國の佛名と符合することを明かにされた(明治四十四年刊、芹葉集五一―六一)。さうすると先づこの易行品の彌陀別讃段は、無量壽經と離すべからざる關係にあることが知られる。抑も無量壽經漢譯五本中、過去佛段は漢譯三十七佛、吳譯三十四佛、魏譯五十四佛、唐譯四十三佛、宋譯三十八佛中、梵本最も多佛を列ねてゐる。そして順位と過現とは彼此同じからざるも、梵本無量壽經と本論、易行品十方諸佛章とは離すべからざる關係にある。孰れにしてもこの易行品は無量壽經、又從つて阿彌陀佛の信仰と密接な關係があり、それが龍樹の論釋たる所に重要な意義がある。

三、十地經の傳譯

十住毘婆沙論は華嚴經の十地品即ち六十華嚴では第二十二品、八十華嚴では第二十六品に相當する菩薩十地の修行を詳說したもので、龍樹の華嚴經論たる大不思議論中の一部分と見られてゐるが、十地品は現に華嚴經中でも最も重要なる位地を占めてゐるので、この菩薩の十地に關する經典は夙に獨立に別行されてゐた形迹の歷然たるものがある。從つて支那譯經史から見ても、先づ覺賢が華嚴經の全譯を出す前に既に屢々十地或は十住の名でその別譯が現はれてゐる。そこで夙に成立せる華嚴經中の一章十地品が本經から離れて別行してゐたか、將た又逆にこの十地經などが基礎となつて大部の華嚴經が成立したかに就いては異論がある。兎に角、賢首の華嚴經傳記卷一に左の別譯四本を擧げてゐる。

一、十地斷結經　後秦竺佛念譯(缺)
二、十住經十二卷　西晉聶道眞譯(缺)
三、十住經四卷姚秦羅什耶舍共譯(存)
四、漸備一切智德經五卷(一名十住又名大慧光三昧)西晉竺法護譯(存)

先づ卷數から見て同じ十地を明した經典にも廣略の相異があつたことを示唆してゐる。これに六十華嚴や八十華嚴の十地品、十地經論の十地經及び上記別譯の十地を加へると、十地經は數多あつた。

五、十地品五卷(六十華嚴第二十二品)
東晉覺賢譯
六、十地經(十地經論中の經文)後魏
菩提流支勒那摩提共譯
七、十地品六卷(八十華嚴第二十六品)
唐實叉難陀譯
八、十地經九卷　唐尸羅達摩譯

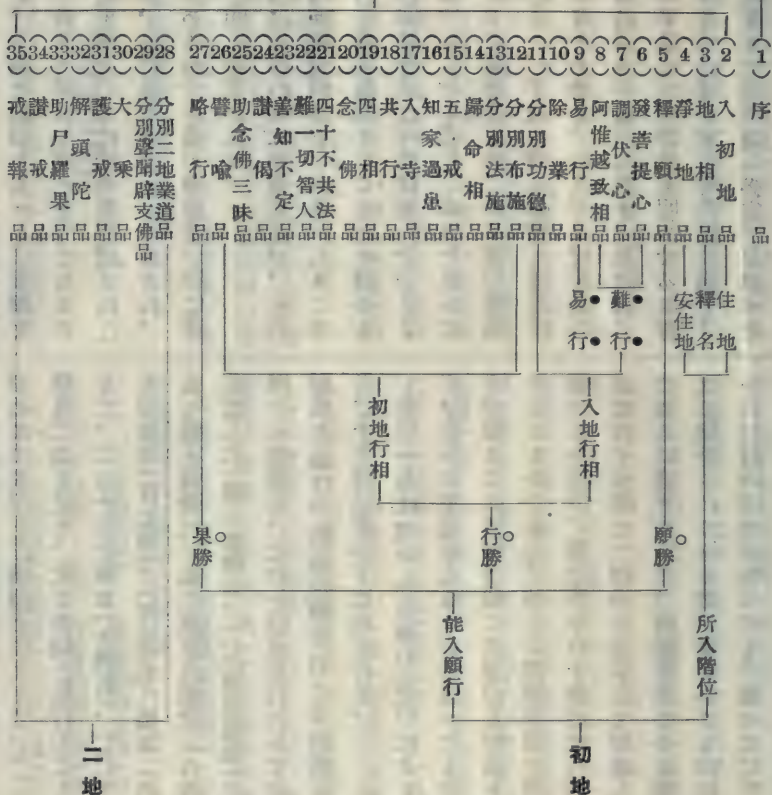
その內容は等しく菩薩の十地を說いたものだから餘り大差はないが、かうした異譯の多い所から見て、印度西域地方に於いて、如何にこの十地經が珍重されたが窺知される。因みに燉煌僧中、法護が漸備一切智經の譯者であり、隋朝に慧遠が地論宗の學匠であつたことなども興味

も大論は破相を表として顯相を裏としたのに對し、本論は顯相を表として破相を裏とし、般若空觀が主潮となつてゐるので、十地思想としては餘り重要視されなかつたが、易行品だけは永く珍重され、この品があるので本書が學佛者、特に淨土敎家の間に珍重された。

易行品は本論の第五卷第九品で、その前章の阿惟越致相品で、初地に入りて菩薩の願行を退失退轉することなき謂ゆる不退（阿惟越致或は阿毘跋致　Avivartaniya 又は Avaivartika）の相を細かに述べたので、易行品も亦この不退の問題を發端として、不退に到る修道に難易の二道あることを說き、前品では般若經の阿毘跋致品即ち不退品に基き、難行道に依りての不退に入る方法を明かせるに對し、易行品では寶月童子所問經に基き、易行道によりての不退（必定）を叙べたものである。

易行品は長行九文、偈頌八章から成り、初めに三長行と二偈頌とによりて、（一）難易二道を說き、次に偈頌と長行とによりて、（二）十方十佛章（十佛名）、（三）十方諸佛章（百七佛）、（四）過未八佛章（過去七佛と彌勒）、（五）東方八佛章（八佛名）、（六）總三世佛章、（七）諸菩薩章（百四十三菩薩名、この一段は長行のみ）の讃嘆を擧げ、阿彌陀佛に對する讃嘆は（三）十方諸佛章の下に出てゐる。

易行一品は謂ゆる信佛の易行によりて、疾かに不退に入ることを說いたもので、顯はには諸佛菩薩に共通の易行道を示したものである。然るに諸佛菩薩を列擧せる各段中、彌陀以外の十佛或は八佛或は百七佛等は、諸佛を合束して總讃してゐるに過ぎないが、阿彌陀佛のみは獨立に別讃されてゐる點。諸佛中にも特に一佛別讃の偈頌があつても、總べて二三偈を配せるに過ぎないのに、長行偈頌を通算して、最多の文字を以て廣讃されてゐるのは阿彌陀佛だけである點。阿彌陀佛には特に「阿彌陀佛の本願是の如し」として、稱名によりて不退を得との本願が記されてゐる點。諸佛は多く此土不退であるのに阿彌陀佛には往生不退を說いてゐる點などからして、易行品中、彌陀淨土敎が如何に重要な位置を占めてるかを語つてゐる。これ等の點に關して、眞宗の學匠は諸佛彌陀對比上の六異、九異、十二異、十八異等を擧げてる程である。

この一品に列擧された諸佛菩薩名の出據に關する研究は、佛敎信仰史上頗る重要にして且つ興味あるものである。本論は元と華嚴經の論釋の一部とされてゐるが、その內容は當時行はれた諸種の信仰を綜合したものである。嘗て大島泰信氏は「無量壽經梵本成立の年代に就きて」なる一篇中に、この易行品の百七佛を論じて、初段の諸佛は略ぼ梵本無量壽經の過

（１）序品は總論で、他の三十四品は各論である。

その內、(２)入初地品から(27)の略行品までは初歡喜地を詳說し、(28)分別二地業道品から(35)戒報品までは第二離垢地の細釋である。初地二十六品の內、(２)(３)(４)の三品は先づ初めに歡喜地なる修行階位の內容を說明したもので、(５)以下は菩薩の願即ち理想と、行即ち實踐と、及びその報いたる果とを細叙せるものである。(28)以下は第二地の別說である。目次で細かに內容を掲出したから、各品一々の說明を略する。本論內容中、易行道や施や戒は勿論、如來、一切智人、四十不共法、三十二相、廻向、出家在家、十善、十二頭陀等の詳說中には參考資料たるべきものが鮮くない。

この十住毘婆沙論は初二地のみの細釋で文が盡きてゐるので、十地經或は品の論釋としては、未完結のものであり、恰か

論の譯出に關してはこの佛陀耶舍が重要な地位にあつたことが想像される。羅什は多く龍樹敎系の翻譯に缺つてゐたから、先づ龍樹造の本論を譯するにその人を得たと謂つて可いが、十地思想に關しては疑難猶豫の事實があつたといふのは寓目に値ひすることである。

十住毘婆沙論の題名を漢梵對照にすると、Daśa（十）Bhūmika（地或は住）Vibhāṣā（毘婆沙）Śāstra（論）で、本論序品第一に既に十住經を十地經と云ひ代へてゐるし、住は地の別義として本論では住と地との兩者を雜へて使つてゐる。毘婆沙は廣解、廣說、勝說等の意味だから、本論の題號はつまり菩薩の十地を廣說布衍する論の義である。

佛敎學行の階位としての十地には、大乘同性經卷下のやうに、聲聞、緣覺、菩薩、佛の四乘の各々に十地の階位を說いたものもあり、智度論卷七十八のやうに、乾慧地、性地、八人地、見地等の聲聞、緣覺、菩薩の三乘に共通（三乘共十地）の十地もあり、又密敎にもその特有の眞言十地などもあるが、こゝでの十地は普通に大乘菩薩の十地たる歡喜地、二離苦地、三發光地、四焰慧地、五極難勝地、六現前地、七遠行地、八不動地、九善慧地、十法雲地を云ふ。これに依つて菩薩の願行を統一し組織し、佛となる迄のあらゆる理想と實踐とを纒めたもので、一住は十波羅蜜（施、戒、忍、進、定、慧、方便、願、力、智）のそれぞれを十地の各々に配當して、その行目を分けるが、實は十地互に十波羅蜜を具足すべきものとされてゐる。前述せる耶舍羅什共譯の十住經及び本論では、三を明地、四を焰地、五を難勝地、九を妙善地（但し本論には善慧地といふ）と異稱してゐる。この十住毘婆沙論はその內、歡喜地と離苦地との初二地を論釋せるものである。

抑も大乘諸經論に出てゐる菩薩修行の位階には、四十一（二）位、五十一（二）位等があり、五十二位は十信十住十行十廻向十地の五十位に等覺妙覺を加へたもので、その開合の仕方によりて種々に異說されてるが、普通に十回向までを賢位とし、十地以上を聖位とする。然るに本論のやうに聖位の十地を十住と呼んでは賢位の十住と混亂する恐れがある。現に華嚴經の十住品を別行させて十住經と名けてゐる。そこで後代では之を區別せんがために、便宜上、賢位の十住品の別行を小十住經と呼び、十地品の別行は大十住經と呼んでゐる（華嚴探玄記卷一、十一等）。この稱呼からすると、本論は言ふまでもなく、大十住中の初二住の釋論である。

二、本論の梗概

十住毘婆沙論は前述の通り、菩薩の十地を廣說したものだが、第三地以後の解釋は之を缺き、第二地の解釋で終つてゐる。便宜上、三十五品の內容を圖表にすると左の通りである。

十住毘婆沙論解題

一、總　叙

十住毘婆沙論十七卷（出三藏記集二に十卷、隋衆經目錄五に十四卷、大唐內典錄三に十二卷、同擧要轉讀錄に十四卷二百七十紙とあり、この他、或は十五卷或は十六卷）三十五品は、菩薩修道の位階たる十住を解釋せるもので、本論の譯者羅什が、菩薩の十地を說いた經品を譯して十住經と云つてるやうに、本書の題號中の十住は普通に謂ふ菩薩の十地を指してゐることは、本書の本文に現に屢々十住の代りに十地と云つてゐるのでも判る。然るに本書はその十地の總べてを解釋したものでは無く、僅かに初地と第二地との二地を詳說したものに過ぎない。卽ち初の二十七品は初地、後の八品は第二地を解釋したものである。

本論の作者たる龍樹 Nāgārjuna （龍勝、龍猛）の傳は、羅什譯の龍樹菩薩傳一卷及び吉迦夜譯の付法藏因緣傳第五などを中心として、近代の研究や考證もあるが、餘りに知られた大論師だからその傳記はこゝには略する。後に述べるやうに古來の傳說では龍樹は華嚴經と親緣があり、この十住毘婆沙論は龍樹の華嚴經釋論たる大不思議論の一部だとも傳へられてゐる。

それから譯者は流布本は勿論諸經錄にも多く鳩摩羅什 Kumārajīva （建元二年龜茲に生れ、義熙九年姚秦にて寂。西紀三四四―四一三。一說弘始十一年或は義熙中寂）の譯としてゐる。羅什は支那佛敎初期の有名な翻譯者だから、これも傳記は略するが、本論の翻譯に關して、賢首の華嚴經傳記に

十地毘婆沙論十六卷。後秦耶舍三藏口誦二其文一、共二羅什法師一譯出。龍樹所レ造。釋二十地品一。內至二第二地一。餘文以二耶舍不一レ誦、遂闕二解釋一。相傳、其論是大不思議論中一分也。

と云つてゐる。之に據ると耶舍三藏卽ち羅什の師たる佛陀耶舍 Buddhayaśas が口づから之を誦出し、羅什が之を秦語に譯したが、第三地以下は耶舍が誦出しなかつたので、十地品の完釋が遺らなかつたのだとしてゐる。だからこの論本は耶舍と羅什との共譯である。耶舍の傳は梁高僧傳卷二に出てゐるが、その中に十住經の譯出に關して、

羅什出二十住經一、一月餘日。疑難猶豫、尚未レ操レ筆。耶舍既至、共相徵決、辭理方定。道俗三千餘人、皆歎二其當一レ要。

としてゐるから、十住經并に十住毘婆沙

第二地

目次

釋經論部 七

矢吹慶輝譯

國譯一切經

大東出版社藏版